岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 15

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

9

1977. 3.

岡山県教育委員会

文化課

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査

9

文　化　課

序

大阪府下吹田インターチェンジを起点とする中国縦貫自動車道は，昭和51年度岡山県北房インターチェンジまで開通のはこびとなりました。この道路建設事業にかかる埋蔵文化財発掘調査は，文化庁と日本道路公団との間で締結された埋蔵文化財の取り扱いに関する「覚書」に基づき，岡山県教育委員会が実施することになり，昭和43年度に開始して以来，実に８年６か月という長期間を費し，昭和51年10月に全遺跡の調査を終了しました。

本書はこの発掘調査に係る報告の第９分冊目にあたり，落合町以西の第二次整備区間に所在する横見古墳群・横見墳墓群・迫遺跡・新市谷遺跡・二野遺跡・光坊寺古墳群の６遺跡について収録したものであります。本報告書は限られた整理期間のなかで執筆，収録したもので，不分な点が多々あるかと思いますが，これが県北の歴史の素材としてまた，文化財に対する認識を高めるために，ご活用いただけるならば望外の喜びとするところであります。

末筆ながら本発掘調査の実施にあたって日本道路公団ならびに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員をはじめとして，関係地元教育委員会，その他関係各位のひとかたならぬご協力とご指導をいただいたことに対し厚くお礼申し上げます。

昭和52年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　　言

1．本調査報告は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2．岡山県内の発掘調査は，第１次整備区間（落合インター以東，25遺跡）では，昭和44年３月久米郡久米町久米廃寺に着手し，昭和48年６月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで４年３か月を要して実施した。この調査に係る報告書は５分冊に分けて刊行された。第二次整備区間（落合インター以西，50遺跡）の調査は，一次整備区間の調査に引き続いて実施され，昭和51年10月阿哲郡哲西町横田遺跡の終了をもって完了した。二次整備区間に係る報告書は本分冊を含めて４分冊が既に刊行されており，さらに，昭和52年度に４分冊の刊行が予定されている。

3．中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和42年５月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて，昭和53年３月現在対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭　浅野克己（昭和47年11月～　）
岡山大学教授　近藤義郎（昭和47年11月～　）
津山みのり学園　植月壮介（昭和44年４月～　）
院庄小学校教諭　土居　徹（昭和44年４月～　）
津山高等学校教諭　宗森英之（昭和47年11月～　）
津山市文化財保護委員　渡辺健治（昭和44年４月～　）

4．新見市上市所在の横見墳墓群の調査中に，埋蔵文化財保護対策委員からこの遺跡を保存するように強い要望が出された。これを受けて県教委と道跡公団との間で保存を前提として設計（工法）変更の交渉を行なったが，設計変更（オープンカットをやめてトンネルを掘る等）は困難であるという結論に達した。このため，保存の要望に反して調査後消滅してしまった。

なお，横見墳墓群の保存問題の詳細については，昭和52年６月刊行予定の10分冊所載の「調査の経過と問題点」を参照されたい。

5．調査は，岡山県教育委員会文化課が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，昭和50，51年度の構成員と調査遺跡をあげる。昭和44年度～昭和49年度については既刊第１～８分冊を参照されたい。

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘は，文化課，津山・高梁両教育事務所が協議した結果，前年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で，その他の遺跡は高梁教育事務所でそれぞれ担当することになった。このため，調査員に文化課に配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。前年度から継続調査中の遺跡の担当調査員は，調査終了まで津山教育事務所勤務となり，その後文化課へ配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。

文化課

課　長　小林孝男

参　事　富岡敬之
西口秀俊（課長補佐＝係長事務取扱）
文化主幹　水田　稔（文化係長事務取扱）
主　任　光吉勝彦
文化財保護主事　葛原克人　山磨康平　正岡睦夫　下澤公明
岡田　博　高畑知功
主　事　田仲満雄　二宮治夫　浅倉秀昭　竹田　勝
福田正継　友成誠司

津山教育事務所
所　長　菱川　豪
次　長　吉田賢吾
主　幹　田中篤周（庶務係長事務取扱）
主　任　大山行正
主　事　山本政昭

高梁教育事務所
所　長　田井治太郎
次　長　小林克己
主　幹　守屋　明
庶務係長　小野茂正
主　事　丸尾洋幸　藤井守雄

調査遺跡名

谷尻遺跡・桃山遺跡・空古墳・岩倉遺跡（共に前年度より継続），宮の鼻古墳，宗金遺跡，新見庄関連遺跡（二日市場・祐清塚），横見古墳群，横見墳墓群，迫遺跡，新市谷遺跡，古坊遺跡，岩屋城址，安信古墳群，塚谷古墳群，山根屋遺跡，中林調査区，野田畝遺跡，西江遺跡，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，土井城址，鳴山古墳群，清水谷遺跡，塚の峯遺跡

昭和51年度

担当調査員は，調査終了（昭和51年10月）までは文化課勤務（高梁教育事務所兼務）として調査にあたり，その後は兼務を解かれて，岡山市西古松の収蔵庫（文化課分室）において報告書作成に従事した。なお，横田東古墳群と工事中発見の二本松・岸本下両遺跡の計３遺跡の調査は，高梁教育事務所兼務の調査員だけでは対応できず，文化課勤務者が出向いて調査にあたった。

文化課
課　長　小林孝男
参　事　西口秀俊
文化主幹　水田　稔
文化係長　小川佳彦

文化財二係長　光吉勝彦
文化財保護主査　葛原克人
文化財保護主事　伊藤晃　山磨康平　正岡睦夫　下澤公明
岡田博　井上弘　松本和男
主事　田仲満雄　浅倉秀昭　福田正継　竹田勝
中野雅美　友成誠司　岡本寛久　秀島貞康
内藤善史

高梁教育事務所
所長　田井治太郎
次長　小林克己
主幹　守屋明（庶務係長事務取扱）
主事　丸尾洋幸　藤井守雄

調査遺跡名

宗金遺跡，岩屋城址，山根屋遺跡，西江遺跡，清水谷遺跡，塚の峯遺跡（以上前年度より継続），桑原遺跡，門前中屋古墳，佐藤遺跡，道の上古墳，横田東古墳群，横田遺跡，藤木城址，大倉遺跡，忠田山遺跡，御供川遺跡，四日市古墳，二本松遺跡，岸本下遺跡，岸本城址

6．各遺跡調査地周辺の地元の人々，北房町・新見市・神郷町・哲西町の各教育委員会には，有形・無形の協力を得た。

7．横見墳墓群の赤色顔料分析は，武庫川女子大学薬学部安田博幸教授，岩石同定は岡山理科大学理学部三宅　寛教授の手をわずらわした。

8．本書に用いたレベル高は，海抜高である。

9．本書に用いた地形図は，国土地理院発行の地形図（承認済），哲西町教育委員会提供の地形図及び日本道路公団作成図である。

10．本報告書に用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用した。

11．発掘調査遺跡概要一覧表及び中国縦貫自動車道に関する遺跡位置図については，『岡山県埋蔵文化財調査報告14』を参照されたい。

縦貫道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

分冊	番号	遺跡名	所在地	備考
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1	22	赤野遺跡	真庭郡落合町 赤野	既刊 49年3月
	25	下市瀬遺跡	真庭郡落合町 下市瀬	
	13	志戸部調査区	津山市志戸部	
	12	野介代遺跡	津山市野介代	
	11	押入西遺跡	津山市 押入	
	8	梶原遺跡	津山市 梶原	
	4	上相遺跡	英田郡美作町 上相	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(5) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2	3	北山古墳群	英田郡美作町 北山	既刊 49年3月
	10	押入飯綱神社古墳群	津山市 押入	
	17	日南遺跡	久米郡久米町 日南	
	18	宮尾遺跡	久米郡久米町 宮尾	
	19	久米廃寺	久米郡久米町 領家	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3	15	美作国府	津山市 総社	既刊 46年3月
	16	二宮大成遺跡	津山市 二宮	
	24	西原遺跡	真庭郡落合町 南原	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(7) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4	2	狼谷遺跡	英田郡美作町 楢原上	既刊 50年3月
	5	小中古墳群	勝田郡勝央町 岡	
	6	小中遺跡	勝田郡勝央町 岡	
	9	天神原遺跡	津山市 河辺	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5	1	高本遺跡	英田郡作東町 川北	既刊 50年3月
	7	平遺跡	勝田郡勝央町 平	
	14	沼古墳群	津山市沼	
	20	領家遺跡	久米郡久米町 領家	
	21	下河内調査区	真庭郡落合町 下河内	
	23	穴塚古墳	真庭郡落合町 西原	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6	27	須内遺跡	真庭郡落合町	既刊 51年3月
	30	谷尻遺跡	上房郡北房町	
	32	植木遺跡	上房郡北房町 告部	
	33	空古墳	上房郡北房町 告部	
	34	戸谷遺跡	阿哲郡大佐町 戸谷	
	35	塔の畝遺跡	新見市 上熊谷	
	36	青地遺跡	新見市 下熊谷	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7	28	宮の前遺跡	真庭郡落合町 一色	既刊 51年3月
	29	備中平遺跡	上房郡北房町 平	
	31	桃山遺跡	上房郡北房町 告部	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(14) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査8	26	旦原遺跡	真庭郡落合町 西河内	既刊 52年3月
	39	岩倉遺跡	新見市 高尾	
	44	谷内遺跡	新見市 上市	
	51	安信古墳群	阿哲郡神郷町 下神代	
	52	塚谷古墳群	阿哲郡神郷町 下神代	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(15) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9	42	横見古墳群	新見市 上市	(本分冊) 52年3月 発刊
	43	横見墳墓群	新見市 上市	
	46	迫遺跡	阿哲郡神郷町 下神代	
	47	新市谷遺跡	阿哲郡神郷町 下神代	
	59	二野遺跡	阿哲郡哲西町 矢田	
	60	光坊寺古墳群	阿哲郡哲西町 矢田	

10分冊～13分冊（4冊）の刊行を昭和52年度に予定している。

総　目　次

序

例　言

1. 横見古墳群(42)および横見墳墓群(43)の調査…… 9

2. 下神代の遺跡……345

迫　遺　跡(46)……356

新市谷遺跡(47)……371

古坊遺跡(48)……417

3. 阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境……473

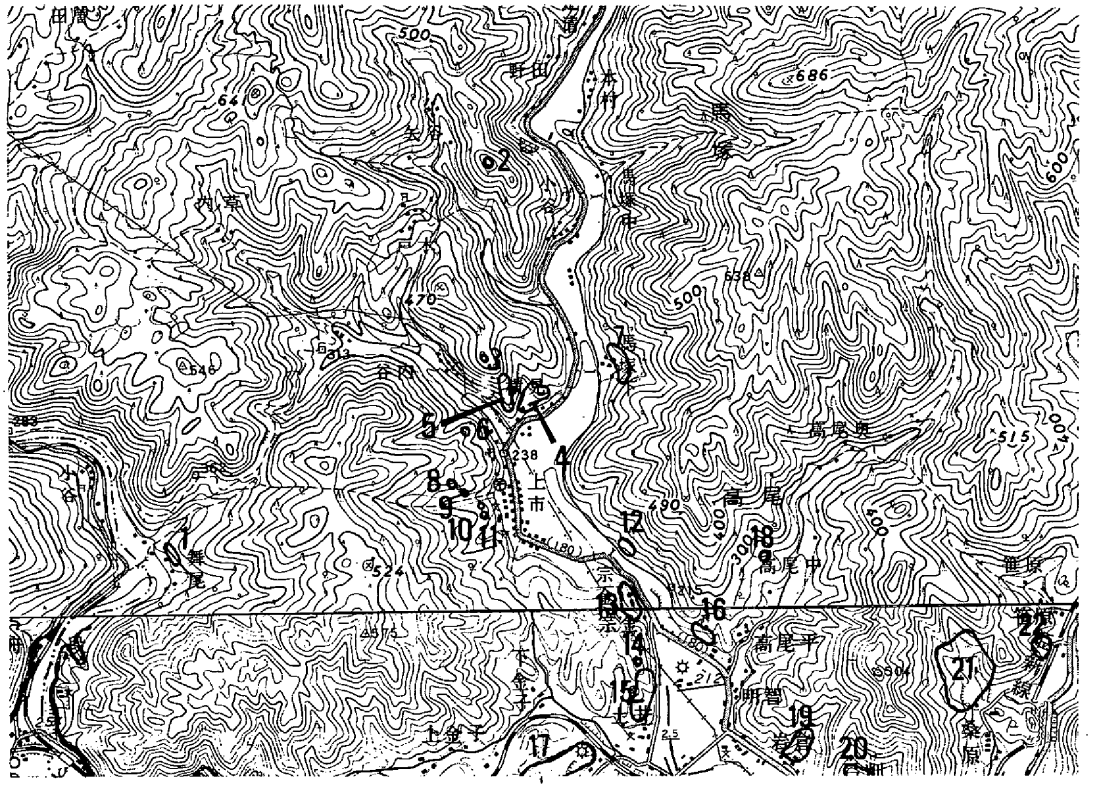
4. 二野遺跡(59)
光坊寺古墳群(60)
……481

横見墳墓群と横見古墳群の調査

第Ⅰ部　横見墳墓群 ……1～214

第Ⅱ部　横見古墳群 ……215～342

横見墳墓群と横見古墳群の調査



第１図　周辺遺跡分布

1．塚ケ市古墳群　2．楪城跡　3．朝倉城跡　4．横見古墳群　5．横見墳墓群
6．粒根城跡　7．石垣遺跡・石垣古墳群　8．高下谷２号　9．高下谷１号　10．井村古墳
11．堂の前古墳　12．向田古墳群　13．宗金遺跡・宗金古墳群　14．土井古墳群　15．土井遺跡
16．高尾平遺跡　17．辻田古墳群　18．丸山城跡　19．岩倉古墳群・岩倉遺跡　20．大仁子古墳群
21．青地古墳群　22．青地遺跡

本報告は，中国縦貫自動車道建設にともない発掘調査された埋蔵文化財・横見墳墓群と横見古墳群の報告である。

横見墳墓群及び横見古墳群は，当初は横見古墳のみが調査対象であった。しかしながら新たに横見墳墓群が発見されたため，これを含めて調査を開始した。調査工程の問題から横見古墳を独立させ，調査にあたることとなった。

遺跡の所在　　岡山県新見市上市

遺跡の名称　　横見墳墓群

　　横見古墳群

横見墳墓群

調査期間	横見墳墓群	昭和50年4月16日～12月20日
	横見古墳群	昭和50年8月6日～12月5日
調査担当者	横見墳墓群	下澤公明・友成誠司
	横見古墳群	岡田博・浅倉秀昭・田仲満雄

第I部 横 見 墳 墓 群

目 次

第1章 横見墳墓群の位置 ……20
第2章 調査に至る経過 ……22
第1節 調査経緯 ……22
第2節 調査概要 ……22
第3節 調査日誌抄 ……23
第3章 墳墓の調査 ……28
第1節 1号墳墓 ……28
第2節 2号墳墓 ……29
1. 石室墓 ……33
2. 木棺墓 ……33
3. 墳丘下埋葬 ……34
4. 出土遺物 ……34
第3節 3号墳墓 ……38
1. 木棺墓と土壙墓 ……38
2. 小児墓 ……40
3. 出土遺物 ……41
第4節 4号墳墓 ……43
1. 石室墓と石棺墓 ……43
2. 木棺墓 ……50
3. 墳丘下埋葬 ……50
4. 出土遺物 ……52
第5節 5号墳墓 ……53
1. 木棺墓 ……55
9. 石棺墓 ……56
3. 石蓋土壙 ……56
4. 墳丘下埋葬 ……57
5. 出土遺物 ……57
第6節 6号墳墓 ……60
1. 木棺墓 ……62
2. 小児墓 ……63
3. 墳丘下埋葬 ……66

4. 出土遺物 ……71
第7節 7号墳墓 ……72
1. 石棺墓 ……72
2. 小児墓 ……78
3. 墳丘下埋葬 ……79
4. 出土遺物 ……81
第8節 8号墳墓 ……81
1. 木棺墓 ……83
2. 小児墓 ……86
3. 出土遺物 ……87
第9節 9号墳墓 ……88
1. 木棺墓 ……88
2. 石室墓 ……88
3. 小児墓 ……97
4. 墳丘下埋葬 …… 100
第10節 10号墳墓 …… 100
1. 竪穴式石室 …… 101
2. 木棺墓 …… 104
3. 小児墓 …… 104
4. 墳丘下埋葬 …… 107
5. 出土遺物 …… 108
第11節 11号墳墓 …… 108
1. 木棺墓 …… 108
2. 礫槨墓 …… 108
3. 出土遺物 …… 110
第12節 12号墳墓 …… 112
1. 石室墓 …… 112
2. 墳丘下埋葬 …… 117
3. 出土遺物…… 117
第4章 墳丘外埋葬 …… 118
第1節 W1～W33の木棺墓 …… 118
第2節 出土遺物…… 126
1. 東斜面器台周辺出土土器…… 126
2. 東斜面木棺群出土土器…… 128
第3節 S1～S13の甕棺と木棺墓 …… 130

1. 出土遺物 …… 131
第4節 W34の石棺墓 …… 134
1. 出土遺物 …… 139
第5章 中世墳墓と近世墓 …… 140
第1節 中世墳墓 …… 140
1. 出土遺物 …… 140
第2節 近世墓 …… 140
第6章 出土遺物と石室についての考察 …… 152
第1節 出土遺物について …… 152
第2節 石材使用の主体について …… 156
第7章 総　括 …… 167
附 章 1. …… 176
附 章 2. …… 181

図 目 次

第1図 周辺遺跡分布 …… 9
第2図 横見墳墓群の位置 …… 20
第3図 横見墳墓群全体図 …… 25
第4図 1号墳墓 …… 28
第5図 1号墳墓東西墳丘断面 …… 29
第6図 2号墳墓 …… 30
第7図 2号墳墓東西，南北墳丘断面，3号墳墓南北墳丘断面 …… 31
第8図 2号墳墓第1主体 …… 35
第9図 2号墳墓墳丘下埋葬主体 …… 37
第10図 3号墳墓 …… 39
第11図 3号墳墓第5主体 …… 40
第12図 3号墳墓第6主体 …… 40
第13図 3号墳墓第7主体 …… 40
第14図 3号墳墓第8主体 …… 41
第15図 3号墳墓墳丘上埋葬主体 …… 42
第16図 4号墳墓 …… 44
第17図 4号墳墓東西墳丘断面 …… 45
第18図 4号墳墓南北墳丘断面 …… 45
第19図 4号墳墓西斜面遺物出土状態 …… 46
第20図 4号墳墓第1主体 …… 47

第21図　4号墳墓第6主体……48
第22図　4号墳墓第9・第10主体……49
第23図　4号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体……51
第24図　5号墳墓……54
第25図　5号墳墓東西断面……55
第26図　5号墳墓第5主体……56
第27図　5号墳墓墳丘上，墳丘下埋葬主体……58
第28図　5号墳墓墳丘下埋葬主体……59
第29図　6号墳墓……61
第30図　6号墳墓南北，東西墳丘断面……62
第31図　6号墳墓第5主体……63
第32図　6号墳墓第6主体……63
第33図　6号墳墓第7主体……64
第34図　6号墳墓第8主体……65
第35図　6号墳墓墳丘下埋葬主体配置……67
第36図　6号墳墓墳丘上，墳丘下埋葬主体……69
第37図　6号墳墓墳丘下埋葬主体……70
第38図　6号墳墓墳丘下埋葬主体……71
第39図　7号墳墓……73
第40図　7号墳墓南北，東西墳丘断面……74
第41図　7号墳墓第1主体……75
第42図　7号墳墓第2主体……76
第43図　7号墳墓第3主体……77
第44図　7号墳墓第4主体……77
第45図　7号墳墓第8主体……78
第46図　7号墳墓墳丘下埋葬主体……80
第47図　8号墳墓……82
第48図　8号墳墓南北墳丘断面……83
第49図　8号墳墓第1・2・3・4主体……84
第50図　8号墳墓第5主体……85
第51図　8号墳墓第6主体……86
第52図　8号墳墓第7主体……87
第53図　9号墳墓……89
第54図　9号墳墓南北，東西墳丘断面……90
第55図　9号墳墓第3主体……91

第56図　9号墳墓第4主体……93
第57図　9号墳墓第5・第6主体……94
第58図　9号墳墓第7主体……95
第59図　9号墳墓第8主体……96
第60図　9号墳墓第9主体……97
第61図　9号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体……99
第62図　10号墳墓……101
第63図　10号墳墓南北，東西墳丘断面……102
第64図　10号墳墓第1主体……103
第65図　10号墳墓第4主体……104
第66図　10号墳墓第5主体……104
第67図　10号墳墓第6主体……105
第68図　10号墳墓墳丘下埋葬主体……106
第69図　10号墳墓墳丘下埋葬主体……107
第70図　11号墳墓……109
第71図　11号墳墓東西墳丘断面……110
第72図　11号墳墓主体……111
第73図　11号墳墓出土鏡……112
第74図　12号墳墓……113
第75図　12号墳墓墳丘下埋葬主体……114
第76図　12号墳墓第1主体……115
第77図　東斜面木棺墓群……119
第78図　東斜面木棺墓……120
第79図　東斜面木棺墓……121
第80図　東斜面木棺墓……123
第81図　東斜面木棺墓……124
第82図　東斜面器台，壺出土状態……126
第83図　東斜面木棺墓・西斜面木棺墓……127
第84図　西斜面木棺墓……135
第85図　西斜面木棺墓……136
第86図　西斜面木棺墓……137
第87図　W—34……138
第88図　近世墓出土銭拓影……141
第89図　中世墓出土銭拓影……141
第90図　中世墓出土甕形土器……141

第91図　出土遺物 …… 143
第92図　出土遺物 …… 144
第93図　出土遺物 …… 145
第94図　出土遺物 …… 146
第95図　出土遺物 …… 147
第96図　出土遺物 …… 148
第97図　出土遺物 …… 149
第98図　出土遺物 …… 150
第99図　出土遺物 …… 151
第100図　(上)—Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期の第1・第2主体
　　(下)—Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の木棺墓 …… 168
第101図　特殊器台・特殊壷出土地点 …… 170

表　目　次

表1　土壙一覧（墳丘上埋葬） …… 160
表2　土壙一覧（墳丘下埋葬） …… 161
表3　石材使用主体一覧 …… 164
表4　石材使用主体形態分類 …… 165
表5　編年表 …… 166

図　版　目　次

図版1—1　横見墳墓群（東より） …… 183
　　2　〃　〃　（西より） …… 183
図版2—1　2号墳墓より北を望む …… 184
　　2　1号墳墓 …… 184
図版3—1　2号墳墓第1・第2主体（南より） …… 185
　　2　3号墳墓主体（南より） …… 185
図版4—1　4号墳墓（南より） …… 186
　　2　5号墳墓（北より） …… 186
図版5—1　6号墳墓（南より） …… 187
　　2　7号墳墓（北より） …… 187
図版6—1　8号墳墓（北より） …… 188
　　2　9号墳墓（南より） …… 188
図版7—1　10号墳墓（北より） …… 189

2　11号墳墓（東より）…… 189
図版8－1　東斜面木棺群（南より）…… 190
2　〃　〃　（北より）…… 190
図版9－1　2－1検出状態（南より）…… 191
2　〃　石室と槨（北より）…… 191
3　2－1蓋石除去状態（南より）…… 191
4　〃　鼓形器台出土状態…… 191
図版10－1　宝篋印塔…… 192
2　3－6（西より）…… 192
3　3－7（北より）…… 192
4　3－8（西より）…… 192
図版11－1　4－1第1蓋石検出状態（南より）…… 193
2　4－1第2蓋石検出状態（南より）…… 193
3　4－1蓋石除去状態（南より）…… 193
4　4－1遺物出土状態（南より）…… 193
図版12－1　4－6，4－5（西より）…… 194
2　4－9，4－10検出状態（南より）…… 194
3　4－9蓋石除去状態（南より）…… 194
4　4－10蓋石除去状態（南より）…… 194
図版13－1　5－3（南より）…… 195
2　5－4（西より）…… 195
3　5－5（北より）…… 195
4　5号墳墓墳丘下埋葬（北より）…… 195
図版14－1　6号墳墓と7号墳墓の溝（東より）…… 196
2　6－4（南より）…… 196
3　6－5（南より）…… 196
4　6－7（南より）…… 196
図版15－1　6－8蓋石検出状態（西より）…… 197
2　6－8蓋石除去状態（西より）…… 197
3　6号墳墓墳丘下埋葬…… 197
4　7号墳墓葺石（南より）…… 197
図版16－1　7－1，7－2蓋石検出状態（南より）…… 198
2　7－1，7－2蓋石除去状態（南より）…… 198
3　7－8棺上礫検出状態（南東より）…… 198
4　7－8棺上礫除去状態（南西より）…… 198

横見墳墓群

図版17—1　7—4蓋石検出状態（南より）…… 199
2　7—4蓋石除去状態（南より）…… 199
3　7—3（北より）…… 199
4　7号墳墓墳丘下埋葬（南より）…… 199
図版18—1　8—5蓋石検出状態（東より）…… 200
図版18—2　8—5蓋石除去状態（東より）…… 200
3　8—7（南東より）…… 200
4　9号墳墓葺石（南より）…… 200
図版19—1　9—2，9—1（北より）…… 201
2　9—10（南より）…… 201
3　9—3蓋石検出状態（北より）…… 201
4　9—3蓋石除去状態（北より）…… 201
図版20—1　9—4蓋石検出状態（北より）…… 202
2　9—4蓋石除去状態（北より）…… 202
3　9—5，9—6蓋石検出状態（北より）…… 202
4　9—5，9—6蓋石除去状態（北より）…… 202
図版21—1　9—7，9—6蓋石検出状態（東より）…… 203
2　9—7，9—6蓋石除去状態（東より）…… 203
3　9—8蓋石検出状態（西より）…… 203
4　9—8蓋石除去状態（西より）…… 203
図版22—1　9—9蓋石検出状態（北より）…… 204
2　9—9蓋石除去状態（西より）…… 204
3　10—1（南より）…… 204
4　10—4（南西より）…… 204
図版23—1　10—5蓋石検出状態（南より）…… 205
2　10—5蓋石除去状態（南より）…… 205
3　10—6蓋石検出状態（北東より）…… 205
4　11号墳墓上の中世墓（北より）…… 205
図版24—1　12—1検出状態（西より）…… 206
2　12—1石室検出状態（西より）…… 206
3　W—34検出状態（東より）…… 206
4　W—34石棺検出状態（東より）…… 206
図版25—1　東斜面器台出土状態（東より）…… 207
2　W—18（東より）…… 207
3　W—7遺物検出状態（東より）…… 207

4　W－7（東より）…… 207
図版26－1　S－1遺物出土状態（西より）…… 208
2　S－1（東より）…… 208
3　S－10遺物出土状態（北西より）…… 208
4　S－10（北西より）…… 208
図版27－1　11－3土壙及び鏡検出状態（東より）…… 209
2　鏡検出状態…… 209
3　S－5検出状態（西より）…… 209
4　S－7遺物検出状態（南西より）…… 209
図版28　出土遺物…… 210
図版29　〃　…… 211
図版30　〃　…… 212
図版31　〃　…… 213
図版32　〃　…… 214

第１章　横見墳墓群の位置

第２図　横見墳墓群の位置

横見墳墓群

横見墳墓郡は，新見市西方のほぼ南北に延びる標高 295mほどの舌状丘陵上に占地する。丘陵東には高梁川が，北流から西方向に大きく蛇行によって形成された氾濫原が広がる。

氾濫原と丘陵との比高は約60cmほどであり現在ではこの部分は水田が営なまれている。この水田は，古代末から中世にかけての新見荘関係の遺構が存在した所である。この地点は，二日市遺跡（註）として調査された。調査の結果，古代末から中世にかけての遺物が出土し，その中心は16世紀ということであり，古墳時代以前にのぼる遺物は検出されなかった。推積土の関係からも，より古い時期まで可耕地として存在した可能性は考えられない。

氾濫原は，約1kmほどで宗金遺跡（註）のある丘陵までで，高梁川よりにせり出す河岸段丘で，その幅はせばまり，対岸との幅は100mほどである。従って，生産的背景は，再生産を生み出すほどの肥沃なものでない。

昭和47年に苦ノ坂を貫ける国道182号線バイパスが通るまでの神代に貫ける主なルートは，直線で約2.5kmほど下流の高梁川南岸一川面峠一西川北岸を通って神代に貫ける道である。しかし，バイパス開通以前においても，谷内川と上市から西へ行く林道が存在している。バイパスにより等高線では245mで切られているが，実際には谷内川を隔てての幅だけであったことからもうかがわれる。この地が交通の主要なルートであったことは，墳墓群の続きの丘陵上には朝倉城，谷内川を隔てて粒根城が戦国期に存在したことからも知られる。

このような周辺地域の諸条件からすれば，国道180号線が高梁川沿に北上するルートがもっとも有力であろう。従って，横見墳墓群は高梁川によって伯耆国へ貫けるルート上に位置する墳墓群である。

註　岡山県教育委員会より51年度に調査

第2章　調査に至る経過

第1節　調　査　経　緯

当初，この墳墓群は中国縦貫道関係の分布調査において確認できず，3月18日岡山県五ケ年分布調査の新見市担当調査員によって確認された。これを受け，4月12日に中国縦貫道発掘担当調査員によって，その形状等について再確認された。

この時点まで発見されなかったのは，当初より墳墓群の存在する丘陵裾にある横穴式石室を有する古墳を横見古墳として調査対象とし，さらにこの部分の工法が切り土ではなくトンネルによるものであるということがあったために，丘陵丘の遺跡の有無については全く確認をしなかったのである。

遺跡が発見された後も，当初計画はトンネル工法ではないかとの問題について公団と接渉したが，トンネル工法については公団側は全くそのような計画はなかったということで最終的に調査に入らざるをえなかった。調査が進むにつれて，はじめ考えていた古墳時代中頃から後期の段階の古墳群ではなく，より古い段階のものであることが明らかになった。このような状況から，対策委員会より保存についての要望が強く出されたが，その要望に答えることはできなかった。また調査工程では，横見古墳群は丘陵上のものと，丘陵東裾に存在する横穴式石室を12号墳とし，合せて10月末までの工程であった。

調査が進むにつれて，横穴式石室を含めての調査の完了は不可能という状況下に直面した。このため，横穴式石室を横見古墳群の調査対象から除いて，他の調査パーティーが担当することとなった。

最終的に，丘陵上の古墳群を横見墳墓群とし，丘陵東裾に位置する古墳を横見古墳群として独立して報告する。

第2節　調　査　概　要

中国縦貫自動車道路のＳＴＡ203＋10～204＋10の延長130mの間が調査対象であった。墳墓は1号から10号まで確認され，延長約150mを測るが，用地に対し傾めに斜めに丘陵が延びてゆくため，総べて路線内に入り調査対象となった。

調査の初期の段階において，2号墳を前方後方墳とし，10基の墳丘を推定した。最終的に2号墳は前方後方墳とはならず，方形墳として2号墳と3号墳と，新らたに南先端に検出された石室を入れ，12基の墳墓より形成されたことが明らかになった。

方形墳は，石材を用いる埋葬主体を有する特徴がみられる。石材使用の埋葬主体は，2号墳・4号墳・7号墳の如く墳丘に対して，メインの主体部として位置付けられるのに対し，9号墳のように木

棺の後に石室が用いられるなど，その推移は一定していない。

方形墳以前に埋葬が行なわれていたことは2号墳～3号墳の東西斜面の木棺墓から出土する土器によって認められた。方形墳と重複する状態で木棺が検出され，丘陵全体に渡って埋葬が行なわれたこがと明らかになった。

この墳丘下埋葬の継続年代は，弥生時代後期前半から後期末にいたる期間が示される。方形墳については，墳丘下埋葬の終了から5世紀の時期があてられると考える。

- 報告書作成は，下澤，友成が当り，第6章第1節・第7章を下澤，第6章第2節は友成がそれぞれ文責である。
- 図の縮尺は，個々にスケールを付したものを除き，墳丘遺構図，墳丘断面図は100分の1，土器は3分の1，木棺は4分の1である。
- 第1図は，国土地理院発行の「新見」「上岩見」の5万分の1による。
  （承認番号）昭52中複，第70号
- 岡山大学学生西崎昭夫には，調査中全てに亘ってわずらわしたことを記して，感謝の意を表したい。
- 調査中には，下記の人達の協力を得た。関西大学学生山本彰・岡山大学学生三村富士夫・岡山理科大学学生前田友是・明治大学学生近藤勝則
  新見商業高校生吉国澄・同吉国暢泰
  岡本清治・竹田岩次郎・江田克己・清水恒市・梅林由二・多田暢祥・浅原公章・渡辺益恵・田辺しま子・吉田とみ子・吉国朝代・吉田里美・福田美保子。

第3節　調　査　日　誌　抄

昭和50年4月16～19日　本日より調査開始，地元の作業員の人々と調査の打ち合せ。1号墳墓頂上部より立木の伐採，続いて地形測量開始。

4月21日～26日　立木の伐採，地形測量続行。

4月28日～5月2日　立木の伐採および地形測量続行。

5月6日～10日　1・2号墳墓表土除去，1号墳墓頂上部に集石遺構検出する。

5月12日～17日　1・2号墳墓表土除去続行。1号墳墓集石遺構精査および写真撮影。

5月19日～24日　2・3号墳墓表土除去。

5月26日～31日　2号墳墓東側および3号墳墓表土除去作業。多数の土壙墓を検出する。

6月2日～7日　2号墳墓埋葬施設検出，写真，実測。2号墳墓西側および3号墳墓表土作業。2号墳墓の西側にも多数の土壙墓を検出す。

6月9日～14日　2号墳墓埋葬施設検出，写真，実測。2号墳墓西側および3号墳墓表土作業。2号墳墓の西側にも多数の土壙墓を検出する。

6月9日～14日　2号墳墓埋葬施設検出，写真，実測。2号墳墓西側および3号墳墓表土除去。

6月16日～21日　1号墳墓集石遺構実測，3号墳墓埋葬施設検出作業。箱式石棺・木棺墓など検出する。

6月23日～27日　1・2号墳墓周溝検出，2号墳墓西側および東側土壙墓群検出，3号墳墓埋葬施設検出作業。

6月28日　第1回保護対策委員会。新見市岩倉遺跡～神郷町安信古墳群。

6月30日～7月5日　2号墳墓埋葬施設写真撮影。2号墳墓東側土壙墓群検出，3号墳墓埋葬施設検出作業。

7月7日～12日　2号墳墓東側土壙墓群検出。

7月14日～19日　4・5号墳墓表土除去，7号～12号墳墓地形測量作業。

7月21日～26日　3・4号墳墓埋葬施設検出，5号墳墓表土除去作業。7～12号墳墓地形測量続行。

7月28日～8月2日　2・3号墳墓周溝検出，5号墳墓表土除去作業。

8月4日～10日　3号墳墓埋葬施設写真撮影。4・5号墳墓周溝検出，5・6号墳墓表土除去作業。

8月11日～16日　5号墳墓埋葬施設写真撮影，6号墳墓表土除去。

8月18日～24日　2号墳墓東側土壙墓群写真撮影，3号墳墓埋葬施設写真撮影，7・8号墳墓表土除去。7号墳墓より箱式石棺2基，8号墳墓より木棺3基，箱式石棺3基を検出する。

8月25日～31日　2号墳墓東側土壙墓群写真撮影および実測。8号墳墓表土除去。新たに土壙墓1基を検出する。28日，第2回保護対策委員会。

9月1日～7日　2号墳墓東側土壙墓群実測，4・6・7号墳墓葺石実測，7・8号墳墓埋葬施設検出作業。7号墳墓より新たに2基の小型箱式石棺を検出する。

9月8日～13日　4・7号墳墓埋葬施設写真および実測，8号墳墓埋葬施設写真撮影作業。
墳墓の墳丘下にさらに古い時代の木棺墓群を検出する。

9月15日～21日　4・7・8号墳墓埋葬施設写真および実測，8・9号墳墓埋葬施設検出，11号墳墓表土除去。9号墳墓より木棺墓，箱式石棺など9基の埋葬施設を検出する。

9月22日～28日　5号墳墓埋葬施設検出および写真・実測，7・8号墳墓断面図作成，8号墳墓葺石実測，10・11・12号墳墓表土除去。10・11・12号墳墓より多数の埋葬施設を検出する。

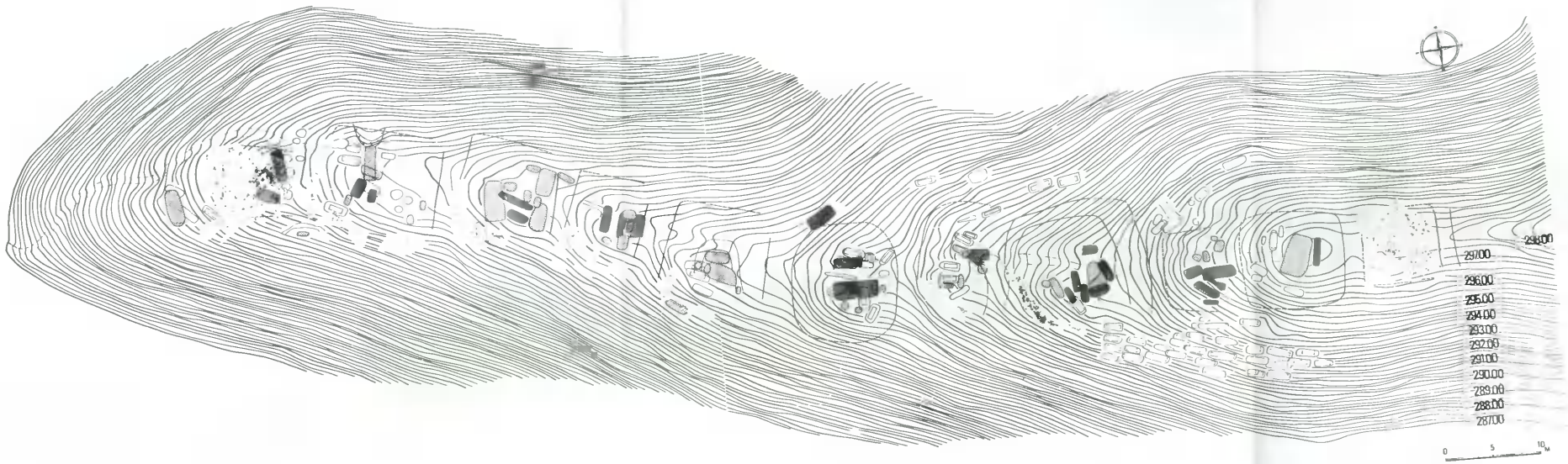
9月29日～10月4日　4・5・6・8号墳墓埋葬施設実測，4・6・8号墳墓墳丘下の土壙墓群実測，5号墳墓葺石実測，10・11・12号墳墓全体写真撮影作業。

10月6日～11日　4号墳墓埋葬施設実測，5号墳墓丘下の土壙墓群検出，9号墳墓全体写真撮影作業。

10月13日～19日　5号墳墓墳丘下土壙墓群写真撮影および実測，9号墳墓埋葬施設実測作業。

10月20日～26日　8・9号墳墓葺石実測，9・10号墳墓埋葬施設写真撮影および実測，11号墳墓集石遺構実測，12号墳墓埋葬施設実測作業。

10月27日～11月2日　10号墳墓葺石写真撮影，11号墳墓埋葬施設検出作業。11号墳墓東側の木棺墓



第３図　横見墳墓群全体図

より鏡1面検出する。

11月4日～9日　9号墳墓埋葬施設および葺石実測，10号墳墓近世墓埋葬施設実測，10号墳墓全体写真撮影。8日，第3回保護対策委員会。

11月10日～15日　9・10・11号墳墓埋葬施設写真撮影および実測。

11月17日～22日　8号墳墓東側土壙墓検出および写真撮影・実測・12号墳墓埋葬施設検出および写真撮影・実測作業。

11月24日～30日　10号墳墓葺石実測，12号墳墓埋葬施設検出および写真撮影・実測作業。

11月24日～30日　10号墳墓葺石実測，12号墳墓埋葬施設実測および墳丘下の土壙墓群検出，写真撮影・実測作業。

12月1日～7日　12号墳墓埋葬施設実測および墳丘下の土壙墓群実測。13号墳墓埋葬施設検出。

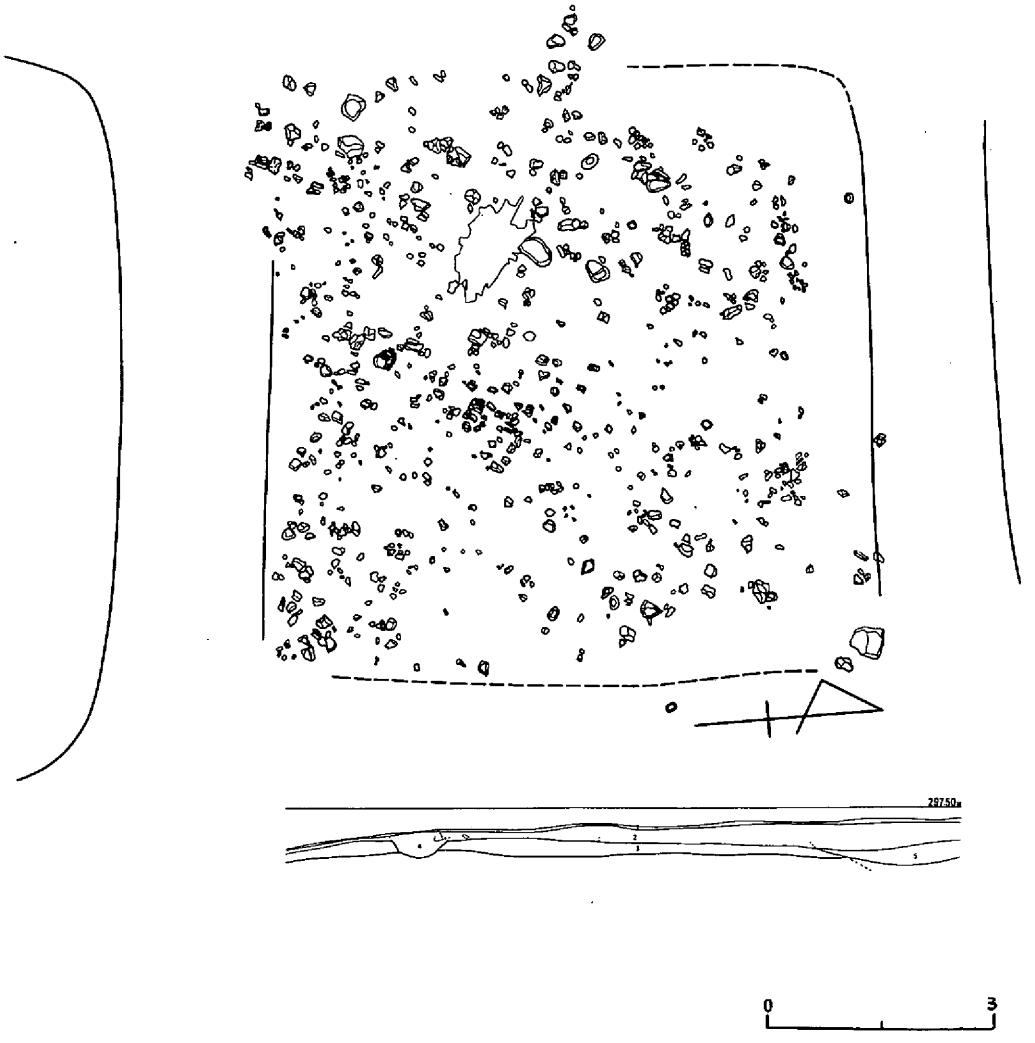
12月8日～14日　10・11・12号墳墓断面図作成，13号墳墓埋葬施設および周溝検出作業。

12月15日～19日　13号墳墓埋葬施設写真撮影および実測作業。

12月20日　発掘器材撤収。本日をもって横見墳墓群発掘調査を終了する。

第3章　墳墓の調査

第1節　1号墳墓

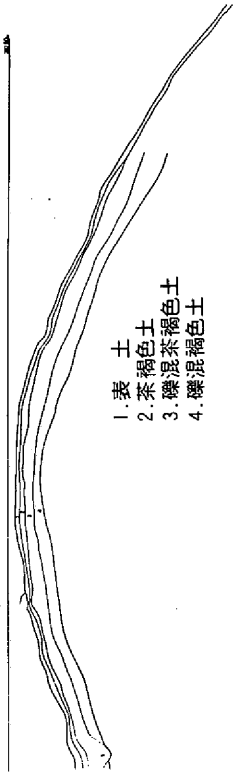


第4図　1号墳墓

表土を剝ぐ以前に，平坦部全面に渡って人頭大から握り拳大の礫が認められ，さらに大量の礫が当墳墓の西側斜面に流失しているのも認められた。

墳墓の規模は，南一北については表土剝ぎの過程で確認された南側周溝と，全体の調査の終了間際に検出された北側周溝，東一西は明確な地山の削り出しは行なっていないのが集石の状態から推定される。従って，南一北7 m50cm，東一西8 m高さ60cmを測る。平面形態は，集石の状態から方形を呈するものと考える。

前述した如く，表土剝ぎ以前に礫の集石がみられたが，集石の存在する土層は地山礫を含む茶褐色土で，この堆積土上に集石されている。なお，地山礫と集石に用いられた礫とは石質が異なり，区別されえた。人頭大の礫の幾つかは，長く地表に露出していたものとみえて，風化の度合が著るしい。他は現状あるいは表土直下より露出したもので，南側部分については，一辺を造っている。



第5図　1号墳墓東西墳丘断面

西側斜面に流失している礫群を考慮するならば，平坦部に礫を積み上げた積石塚状の形態をとったものと考えられる。

埋葬に関わる土壌などは検出されなかった。地山に直接土壌を掘り込んだものではなく，前述したことからすれば，集石中に埋葬を行なったものと考えられる。

遺物は，集石中より特殊系統の胎土と同一の内容を有する土器が出土しているのみである。

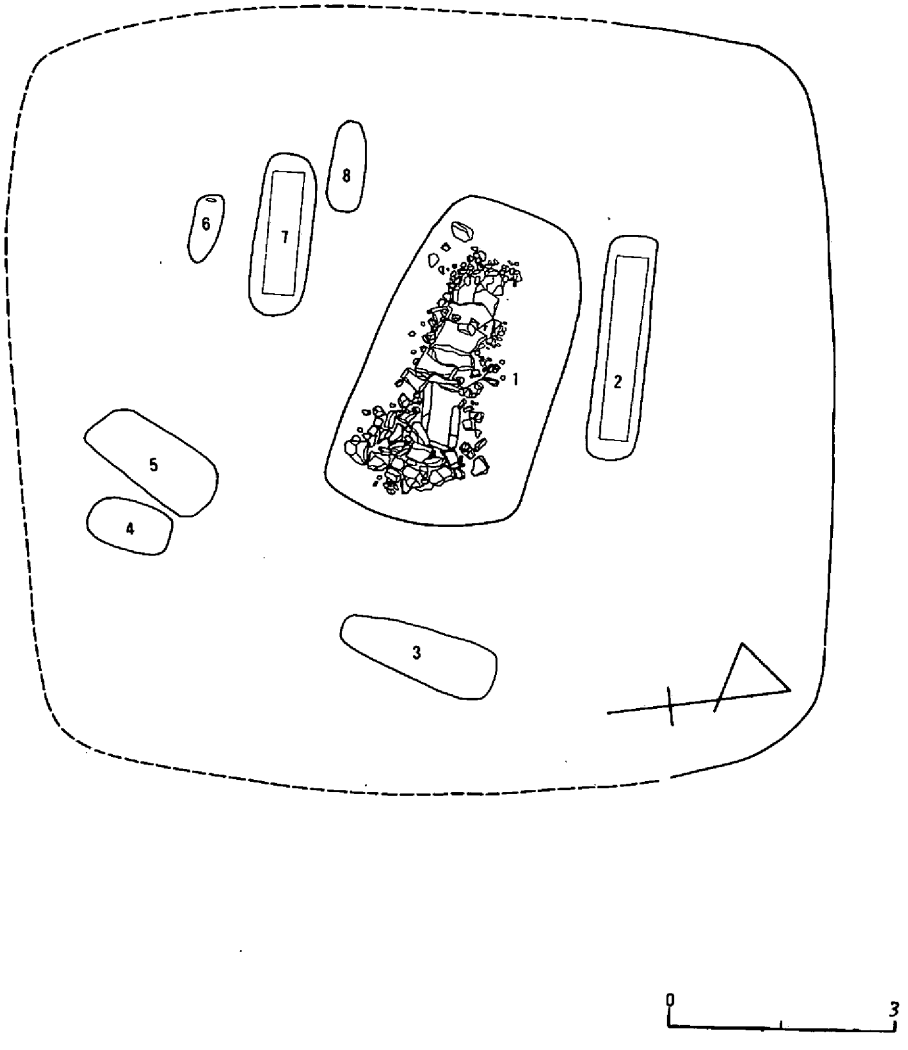
第2節　2　号　墳　墓

2号墳は，当初3号墳と伴に前方後方墳としていたものである。東一西の部分がクビレをもって，コンターが移行する状態を示し，2号墳北辺と3号墳南辺にそれぞれ溝を有していることなどから判断された。

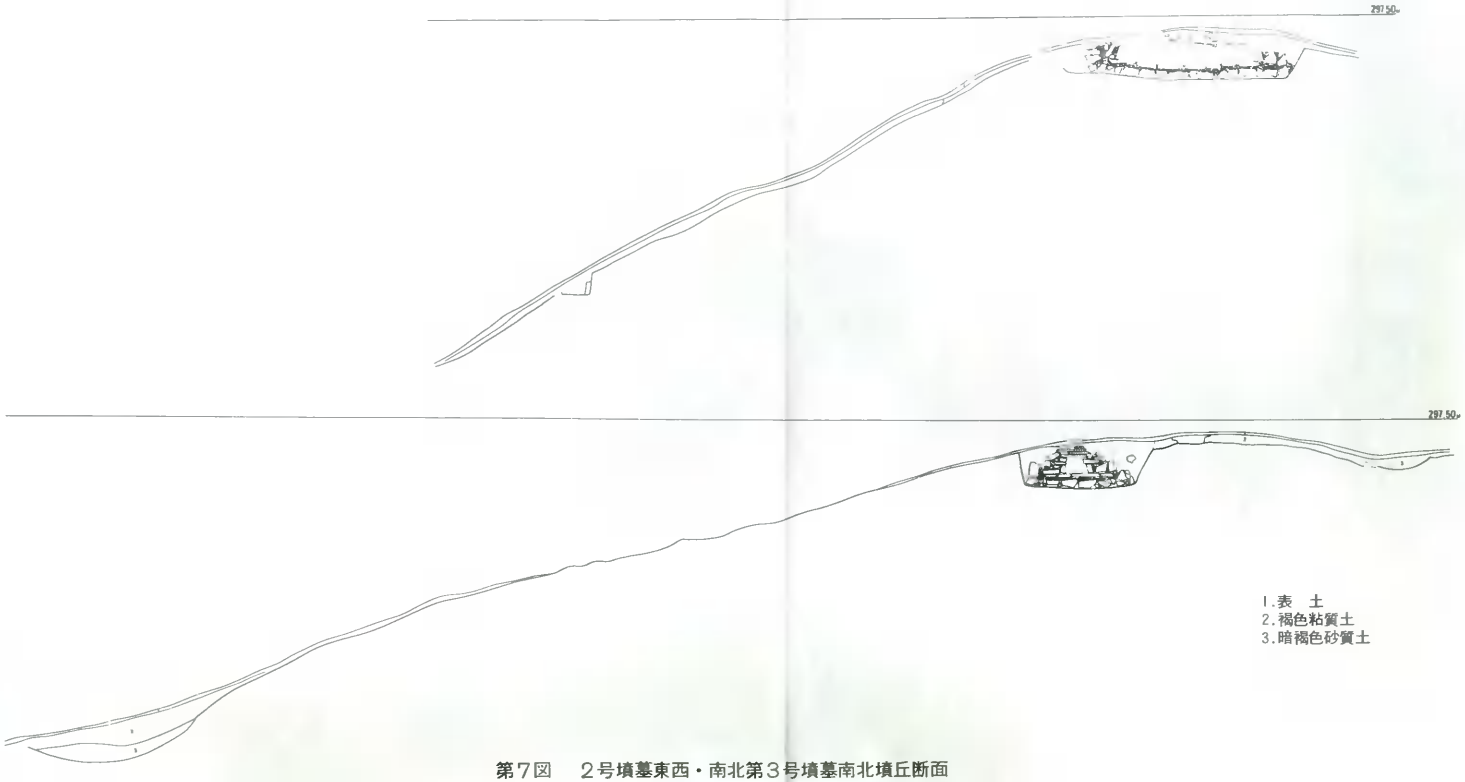
しかし，2号墳から3号墳への移行は，断面図の如く下がって行き，明確な段を有さない。クビレ部と推定した部分についても前者と同様に，削り出しなどは認められない。2号墳と3号墳とも盛土と考えられるものは流失してしまい，表土下はすぐ地山が露出する。盛土を想定しても，やはり3号墳を前方部と想定するのは困難であろう。特に3号墳の埋葬の状況からしても，別のものとして考え

られるのである。従って，２号墳と３号墳は別々の墳墓としてとりあつかった。

規模については，北は溝によって，南については平坦部が認められた為，東一西の各辺は推定である。従って，規模は南一北10m70cm，東一西10mと考えられる。



第６図　２号墳墓



第7図　2号墳墓東西・南北第3号墳墓南北墳丘断面

1. 石　室　墓

2－1（図版9）

2号墳第1主体は，墳丘のほぼ中央に主軸を東西方向に置いて構築された竪穴式石室である。

土壙は隅丸長方形を呈し，西端より東側にやや広がりぎみに掘られており，その長さは東西4.40m，南北（中央部）2.43m，深さ（現表土より）0.90mを測る。

石室は，土壙の中央部に造られている。石室を構成する側石は，厚さ10cmくらいの板石の中でも特に角張ったものを使用している。南北の長側石は4～5枚の板石をヨコ長にたて並べ，低い部分には1～2段小口積みにして高さを揃えている。東西の短側石は各1枚をたてており，小口積みは認められない。各側石の外側には幅平均60cmで，石室を巡るように控え積を行なっている。石材は側石と同様の厚味のある不整形なものを用いており，石材各々の隙間には径3～5cmのバラスを詰めている。

石室の内法は，長さ2.42m，東端幅0.37m，西端幅0.40m，深さ0.30mを測る。

石室底部は三重構造になっている。まず，控え積に使用されているものと同じ石材で土壙底全域に厚さ10cmの石を敷き詰め，その後，この上に径3～5cmのバラスを5～8cmの厚さに敷く。これらの施設は排水を目的として築かれているようである。そして，平坦に敷かれたバラス上面に厚さ5～8cmの板石を東西に7枚，南北に2～4枚並べ底石を完成させている。底石は東端より西側へ下降するように造られている。

天井石は，厚さ4～12cmの板石で3重に蓋されている。検出時には東側の数枚が取り去られており，石室内には流土が天井石直下まで埋まっていた。遺存部の構造を観察すると，最下部の天井石は6枚で構成されていたと考えられる。これらの板石は各々の隙間を塞ぐようにして積み重ねられており，しかも重目の天井石の周囲には径5～10cmくらいの丸石で2重目と3重目の隙間を塞いでおり，天井石の構造としては非常に丁寧な構築を行なっている。

遺物は，棺内東端より0.80mの位置に南側石と底石に接して鼓形器台1個が転がった状態で検出された。石室内東側にも同破片が認められるので本来は枕に転用されていたようである。また，石室内中央部の天井石直下において刀子の刃部のみが検出されている。その他，土師器細片が認められた。

2. 木　棺　墓

2－2

第1主体の北側に並行して存在する。土壙掘り方は，土壙2m85cm×66cm，深さ22cm，木棺は2m57cm×48cmを測る。第1主体がすでに地上に露出していることから，盛土は流失していたため，遺存状態はよくなかった。

3. 墳丘下埋葬

埋葬主体は，第3紀層礫層上面に堆積する暗黄褐色土中に穿っている。

2－3（図9）

土壙掘り方は，2m18cm×68cm，深さ47cmを測り，方位はN－W25.5°をとる。木棺痕跡は認められなかった。北小口より掘り方上面に礫が存在する。

2－4（図9）

土壙掘り方は，1m×61cm，深さ47cmを測り，方位N－W43°をとる。平面形態は不整方形をとる。

2－5（図9）

土壙掘り方は，2m23cm×80cm（＋a）を測り，方位はN－W43°をとる。

2－6（図9）

土壙掘り方は，1m3cm×43cm，深さ20cmを測り，方位はN－W79.5°をとる。西小口に小口溝を穿っている。

2－7（図9）

土壙掘り方は，2m10cm×70cm，深さ40cm，木棺1m58cm×38cmを測る。方位はN－W77.5°をとる。中央よりの長側に礫が存在する。

2－8（図9）

土壙掘り方は，1m19cm×48cm，深さ45cmを測り，方位はN－W73.5°をとる。

4. 出土遺物

2－1－1（図91）（図版31）は，第1主体掘り方より出土したものである。

口径22cmを測る壷か器台の口縁部である。口縁端部をほぼ垂直に立ち上がらし，端面に8本の凹線を施している。

胎土は，金雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗をほどこしている。特殊系の土器と同じである。

2－1－2（図91）（図版31）は石室内中央東よりの長側石によりかかるように出土したものである。台部を打ち欠いているが，枕として用いた可能性が強い。

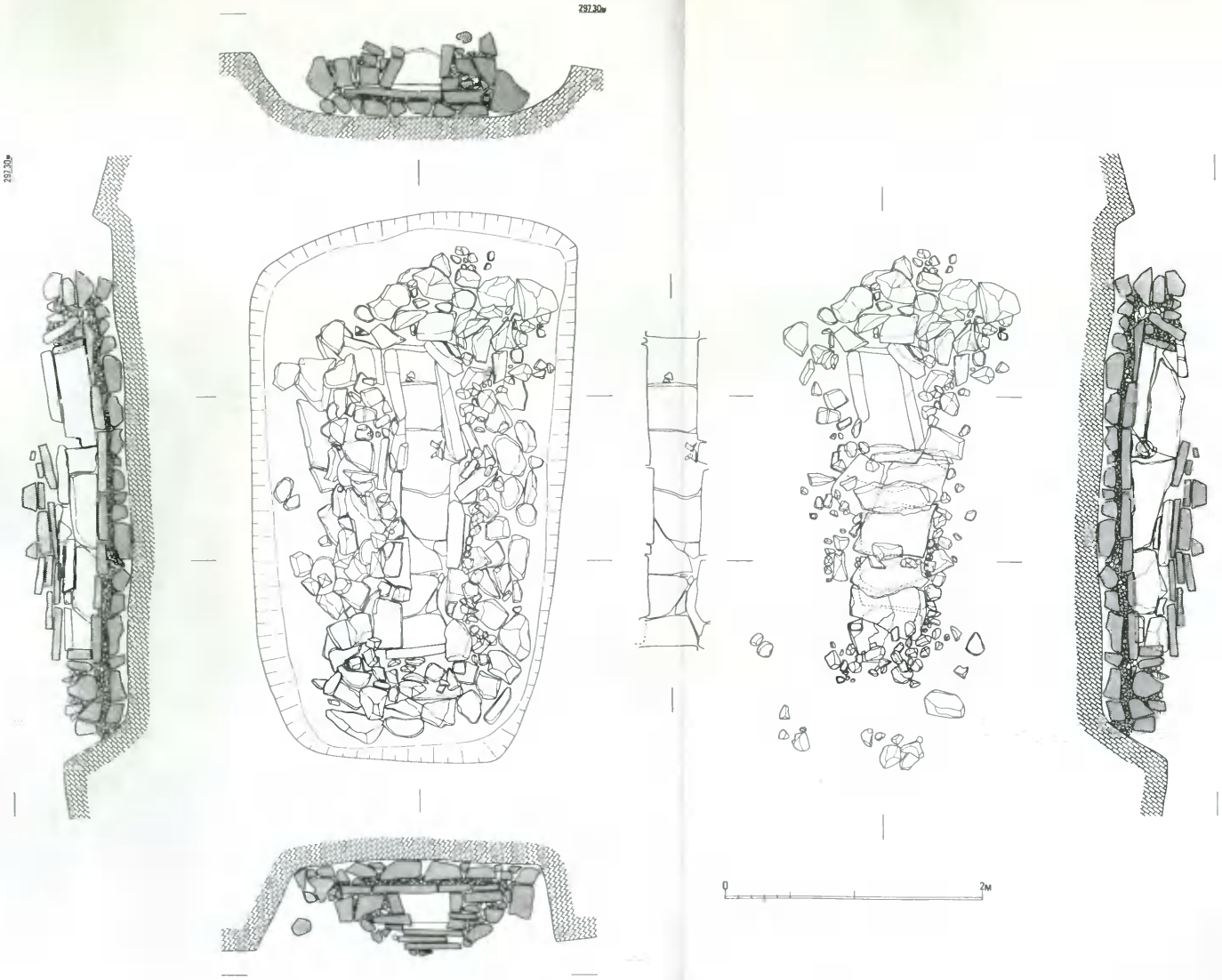
口径16.2cm，器高8.4cm，台部径14.7cm，脚部幅7.1cm，杯部と台部との幅1.2cmをそれぞれ測る。杯部口縁は端部をやや被厚させるだけで，顕著な反りはみられない。台端部についても被厚させないが，同様な手法でなされている。内面の脚部は，くの字状の形態をとる。

外面は顕著な横ナデがみられ，内面杯部は横位の篦状工具による削りがなされている。

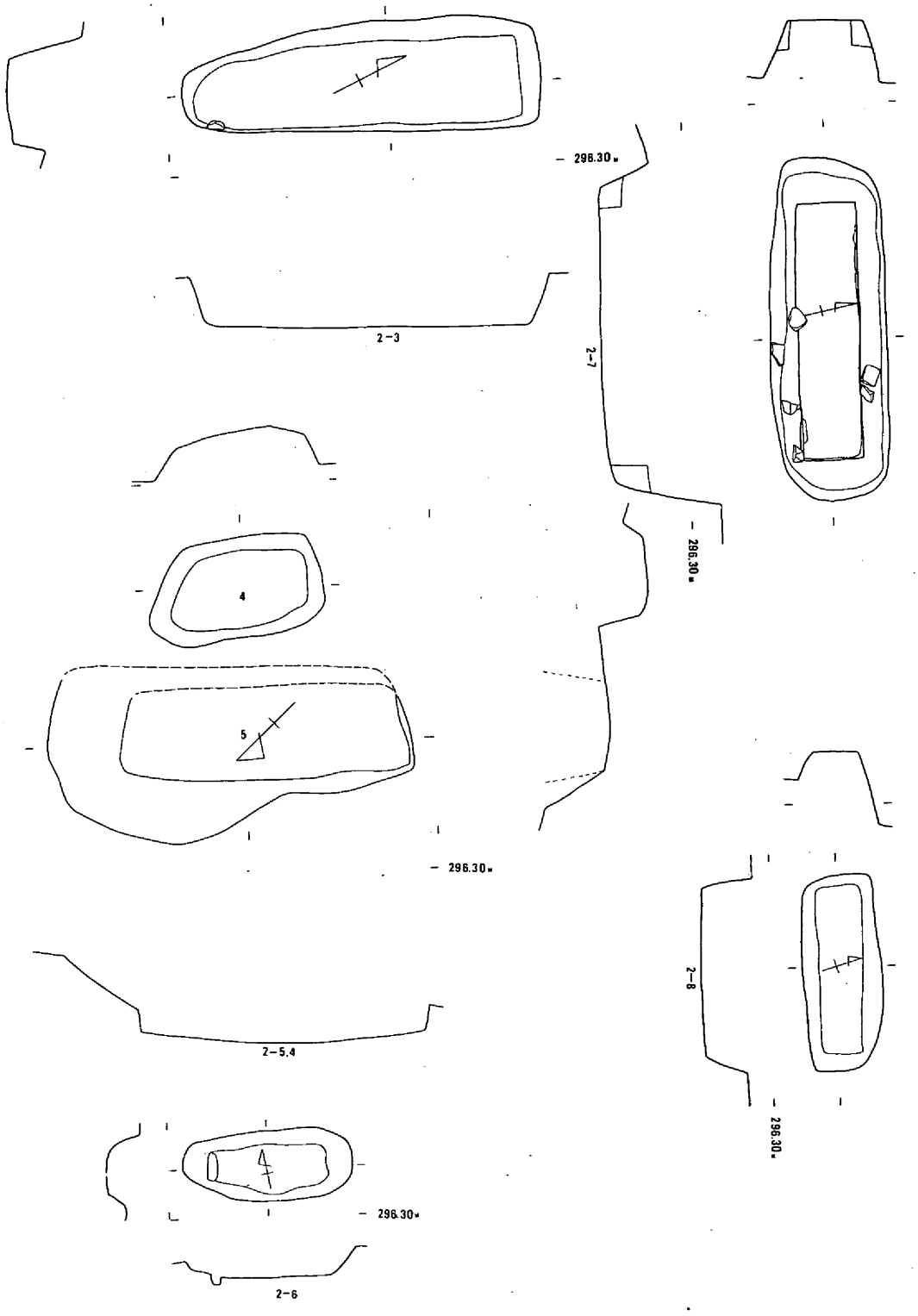
図示した1点線の部分を欠いている。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

2－3（図91）は，4区表土下より出土したものである。位置的には東土壙群に伴なうと考えられる。



第８図　２号墳墓第１主体



第9図　2号墳墓墳丘下埋葬主体

口縁部口径8.1cmを測る長頸壷形土器の頸部である。頸部中位下は直立し，上半にかけては穏やかに外反する。端部はわずかに摘み出している。

頸部下半に，櫛状工具による平行線を，残存部だけで14本施している。

胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。特殊系のものと同一である。

2－4（図91）は，4区表土下より出土した特殊壷形土器の肩部凸帯部の破片である。凸帯は貼り付けて，凸線上面に2本の凹線を施こす。

胎土は金雲母と黒雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りがなされる。

2－5（図91）は，4区表土下より出土した壷形土器の底部と考えられる破片である。底部は焼成後に外からの打撃による穿孔がなされる。

胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示す。特殊系のものと同一である。

鉄製品（図99－5）（図版32－5）は，第1主体石室内上面より出土した刀子のみであった。

刀子は，刃部の2分の1程のものである。残存長3.6cm，刃部幅1.3cm刀背幅0.3cmを測る。

第3節　3　号　墳　墓

第1主体は中央木棺と考えられる。中央木棺を中心主体と考えた場合，2号墳の項で述べた如く墳丘に対して，北よりの位置に中心主体があることになる。このことからすれば南墳端は北よりになることも考えられる。東一西の西辺は，若干削り出しているが，東辺は手をつけておらない。

このようなことから，墳丘の規模は南一北6m，東一西8m50cmを測る。墳丘形態は方形を呈する。

埋葬主体は表土直下より検出され，2号墳と同様に第3紀層上面に堆積する暗黄褐色土層中より検出された。

なお，盛土と考えられる土層の堆積は認められなかったが，ある程度の盛土はなされていたものと考えている。

1.　木棺墓と土壙墓

3－1（図15）

3号墳の中心主体と考えられるものである。土壙掘り方は，3m37cm×1m25cm，深さ18cm，木棺は2m(＋a)×53cmをそれぞれ測る。方位はN－E52.5°をとる。

木棺北よりに25cm～30cmの平石が積ねられていた。南東隅が第2主体によって切られている。

3－2（図15）

土壙掘り方は，第1主体，第11主体を切って造られ，その規模は2m70m×36.5cm，深さ28cmを測る。木棺痕跡は確認されなかったが，土壙掘り方の様子から木棺の埋置が考えられる。方位はN－E

52.5°をとり，西小口と棺中央に礫が存在する。

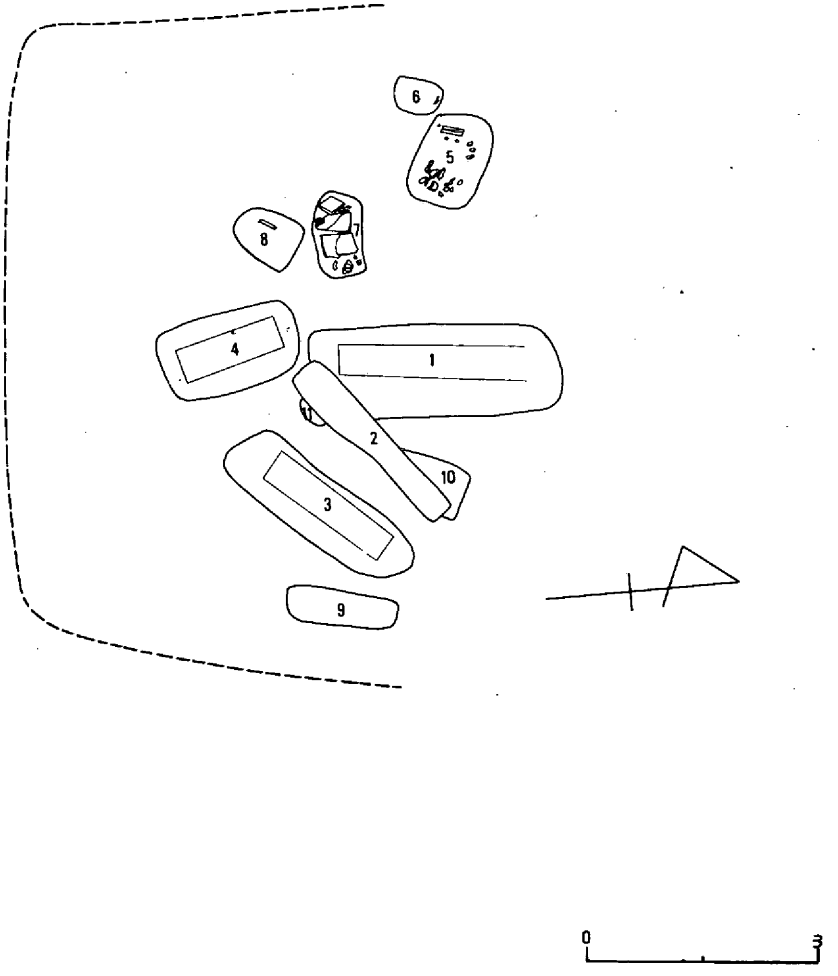
出土遺物は，土壙南よりの掘り方上面に壺形土器の口縁部が検出されている。なお，この口縁部は，第4主体から出土の口縁部破片と接合された。

3－3（図15）

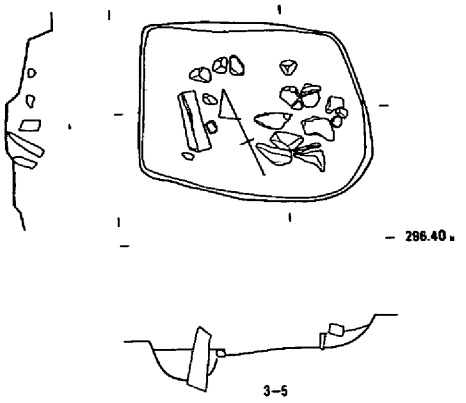
土壙掘り方は，2m68cm×83cm，深さ40cm，木棺は1m87cm×37cmをそれぞれ測る。方位はN－E43°をとり棺中央より南西よりの棺内外に礫が存在する。南西短側に置かれている礫は，枕石として用いられた可能性が考えられる。

3－4（図15）

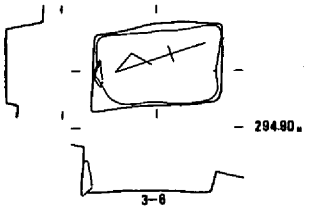
土壙掘り方は，1m90cm×1m1.2cm，深さ19cm，木棺は1m14cm×44cmをそれぞれ測る。方位はN－W21.5°をとり，棺内外礫が散在する。



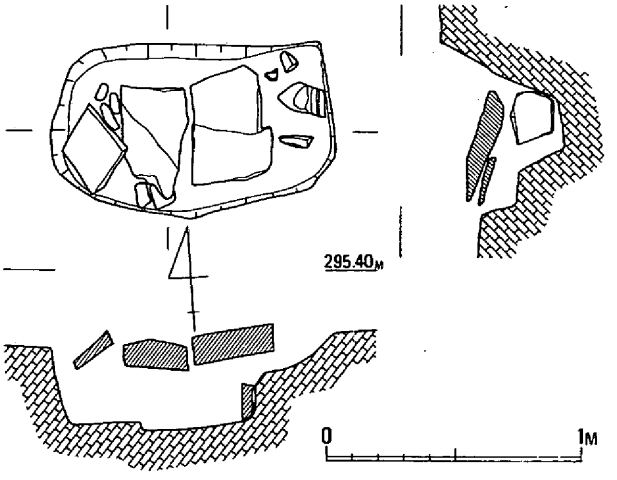
第10図　3号墳墓



第11図　3号墳墓第5主体



第12図　3号墳墓第6主体



第13図　3号墳墓第7主体

3－9（図15）

土壙掘り方は，1 m52cm×43cm，深さ12cmを測る。木棺痕跡は確認されなかったが，土壙の掘り方からすれば，木棺の埋置が考えられる。方位はN－E13°をとり，棺内中央より北よりに礫が存在する。

3－10

第2主体により大半を切られている為，詳細は不明である。

3－11（図15）

第2主体に西側2分の1を切られている。規模は長辺59cmで短辺は不明である。

2. 小　児　墓

主に石材を用いた埋葬をいう。

3－5（図11）

第5主体は3号墳頂上平坦部の北西隅に位置している。

土壙は，N67°Wに主軸を置いて不整形ではあるが隅丸長方形を呈し，南北2段，東西1段に掘り込まれている。土壙西端より25cmのところには厚さ9cm，32×30cmの板石1枚が土壙底よりさらに深く掘ってたてられており，小口板的な意味をもつものと考えられる。土壙の規模は，東西1.18m，南北0.93m，深さ0.15mを測る。土壙内の上面には径5～10cmの割石が散乱していた。

3－6（図12）（図版10－2）

3号墳頂上平坦部の北西隅に位置しており，第5主体とは土壙を接して造られている。

埋葬主体は土壙墓であり，主軸をN18°Eに置いている。土壙は長方形を呈し，壁は約80度の急角度で掘りこま

れている。土壙の規模は南北0.78m，東西0.44m，深さ北端0.25m，南端0.10mを測り，土壙北壁には厚さ5cmの三角形状の板石がたてられている。土壙内には遺物は認められなかった。

3－7（図13）（図版10－3）

3号墳頂上平坦部の西寄りに主軸をほぼ東西に置いて造られている石蓋土壙墓である。

土壙は東西1.10m，南北0.68m，深さ0.45mの規模で2段に掘り込まれている。2段目の土壙は東西0.45m，南北0.35mを測り，東壁には第5・6主体部と同様な厚さ4cmの板石1枚がたてられている。天井石は厚さ4～10cmの板石3枚を並べて蓋している。

3－8（図14）（図版10－4）

第7主体の南側に造られている土壙墓である。

土壙は，N16°Eに主軸を置いて掘られており，その規模は東西0.66m，南北0.80mを測る。土壙内には土壙北端から18cmのところに厚さ5cm，31×20cmの板石1枚をたてて置いており，この板石を1辺として土壙中央部にほぼ正方形状に木枠を組んだような木棺状の痕跡が認められた。土壙内には遺物は認められないが，土壙内東端において板石と接して径約10cmの丸石1個が置かれていた。

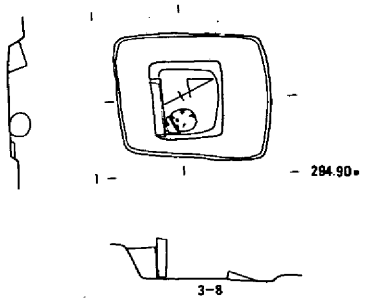
3. 出土遺物

3－2，4－1（図93）は，土壙北東よりの上面より検出したもので，同一破片は第4主体より出土し接合された。

口径15.8cmを測る甕形土器の口縁部破片と考えられる。頸部はくの字状をもち，口縁は外に開いて行く単純口縁をとる。口縁端部は平坦に仕上げている。

器面整形は箆状工具による磨きがみられる。胎土は石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示し，丹塗りされている。

3－4－2（図93）は，第4主体棺内中央より出土したものである。推定口径は12cmを測る。器形は口縁端部に横ナデがなされていること，内傾することなどから鼓形器台になると考えられる。



第14図　3号墳墓第8主体

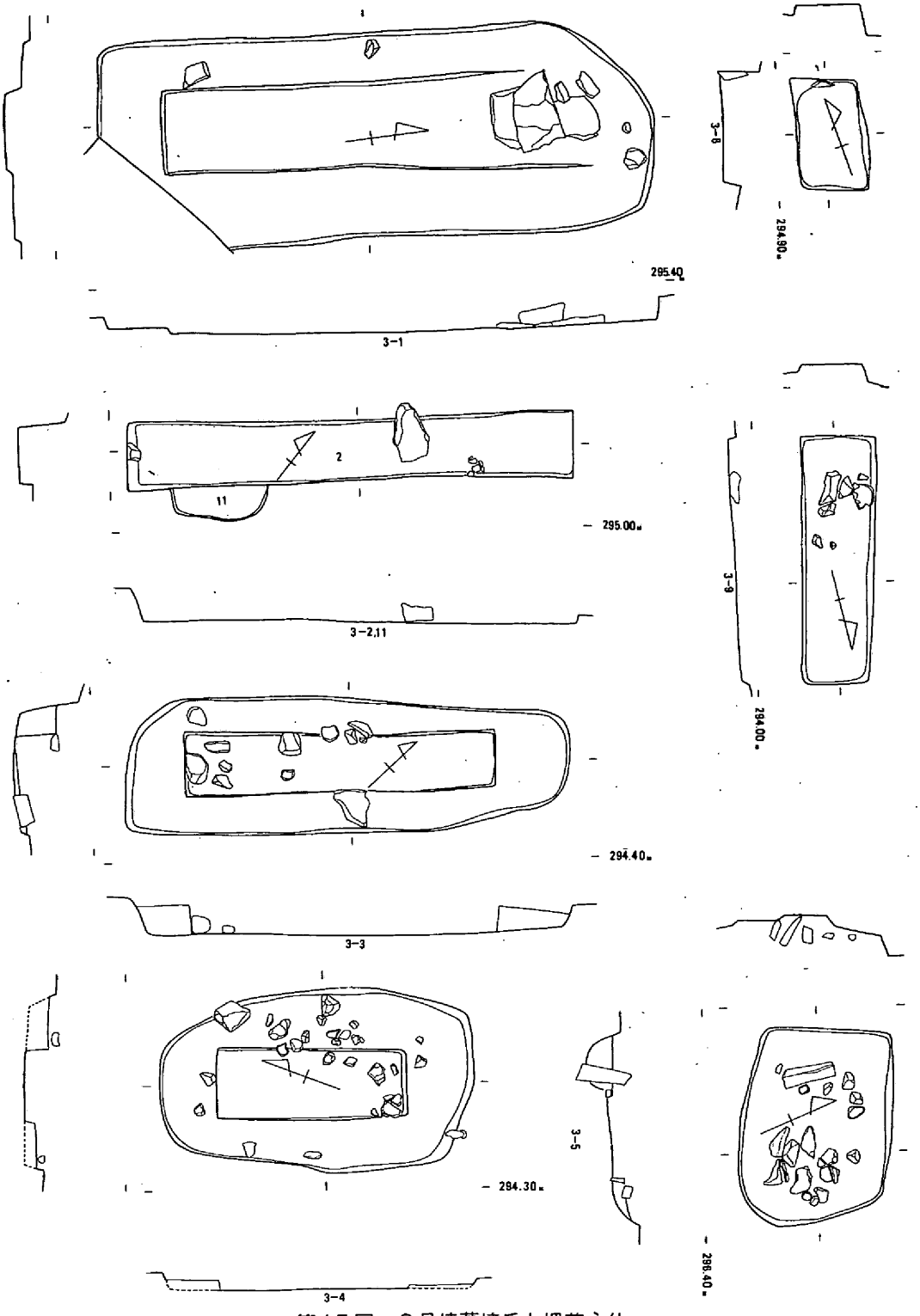
胎土は石英粒を含み，焼成はやや脆い。色調は褐色を示す。

3－3（図93）は，出土地点からすれば，東土壙群に伴なうものと考えられる。

口径12cmを測る壺形土器の口縁部破片である。頸部は短かく立ち上がり，口縁部端部をやや内傾気味に立ち上がらせている。端面は凹状になり，その上下端に沈線を施文している。

胎土は金雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。

特殊系の胎土と同一である。



第15図　3号墳墓墳丘上埋葬主体

3－5（図93）は，台部径18cmを測る高杯形土器の台部破片である。台端部はやや被厚気味におわらせている。胎土は金雲母，石粒を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りを施こしている。

3－4（図93）は，特殊壷形土器の肩部破片である。凸帯は粘土貼り付けにより，凸帯上面には2本の凹線が施こされている。内面整形は横位の篦削りがみられる。胎土は金雲母，黒雲母，細砂を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。

3－6（図93）は，出土状態からは，西側土壙群中に伴なうものと考えられる。

特殊壷形土器の肩部破片である。凸帯は貼り付けを用い，凸帯上面には，5本の凹線が施こされている。

胎土は非常に細い黒雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系の胎土と同一であるが，他のものとは若干相違する面を有する。器表面の被土状の被土はみられず，器壁も比較的薄くなっている。

第4節　4　号　墳　墓

平面形態は，北・西・南の各辺にかけてしっかりした溝を有しているが，南辺中央より東辺中央にかけて列石が存在する。列石中央にあたる南東部分にコーナーを有し，北東（4 m）と南西（6 m）方向に延び，高さ1 m50cmを測る多角形の墳形と考えられるのである。

墳丘には，第2・3・4・5・7主体の順で埋葬されていたものと考えられるのである。このことは，最も早くこの墳丘内に埋葬された第6・9・10主体からは，Ⅳ期以前に属する土器が出土し，さらに第9・10主体が墳丘を意識して埋葬されたとは考えられない。従ってこの墳丘に直接かかわりを持って埋葬を行なった主体というものは，第8・9・10主体以外ということになる。

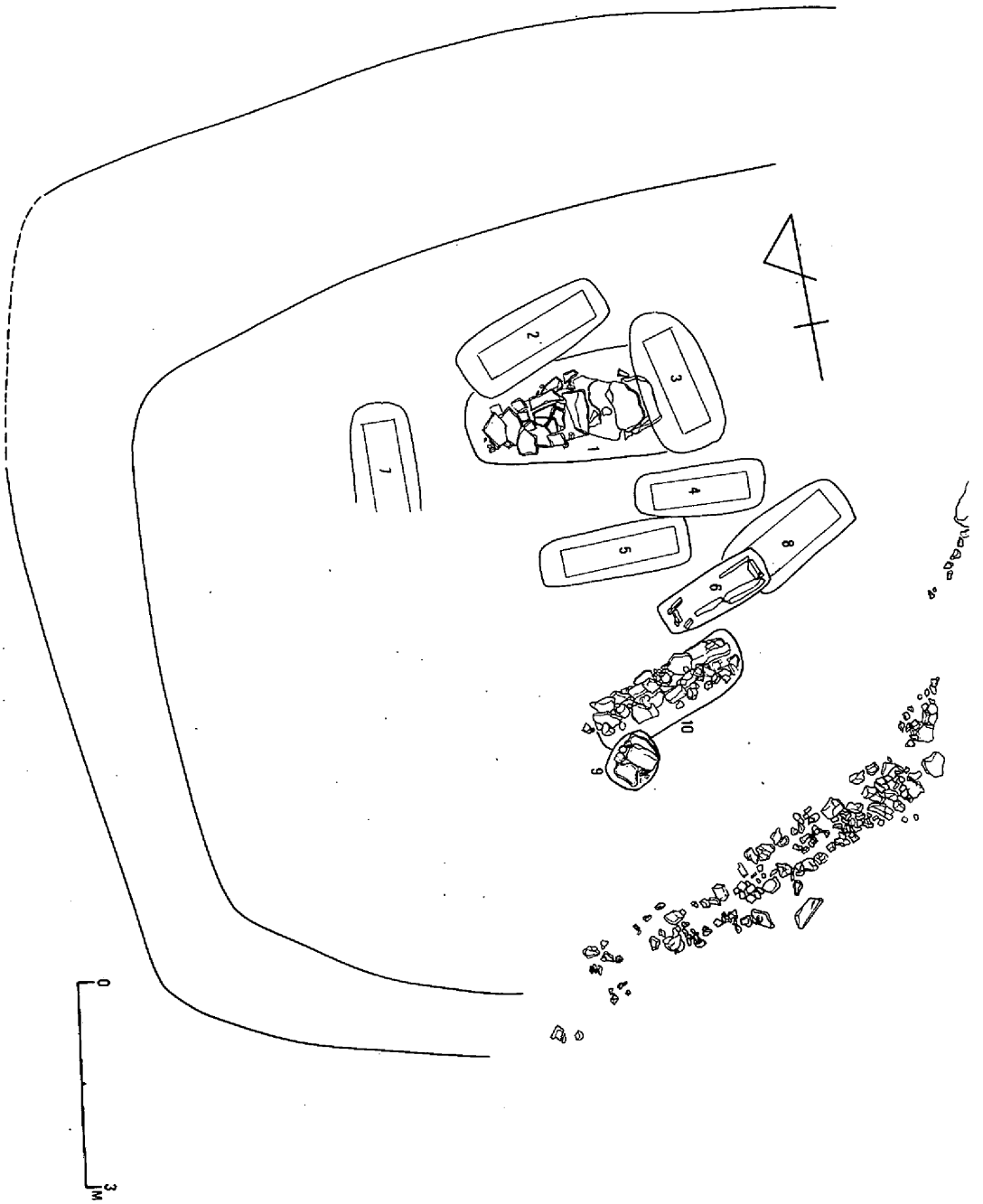
周溝と列石との関係については，土層断面に示した如く，周溝上に暗黒色有機土層が堆積していること，第1主体の上の茶褐色土中に第2・第3主体が存在する。このような土層状況からすれば，墳頂を第3紀層の地山面で平坦にし，第1主体・第6主体を埋置して，周囲を溝と列石を使って墓域を画している。

盛土は，第1主体の構造からすれば，棺自体が掘り方中に埋置されてしまうことになり，盛土そのものを必要としないことになる。このことは，墳丘堆積土中には盛土と判断される堆積土を認められなかったように，当初から盛土を必要としない墳丘形態をとっていたものと考えられる。なお，木棺墓が存在する茶褐色土層は明らかにこれら埋葬のために盛られたものと思われる。

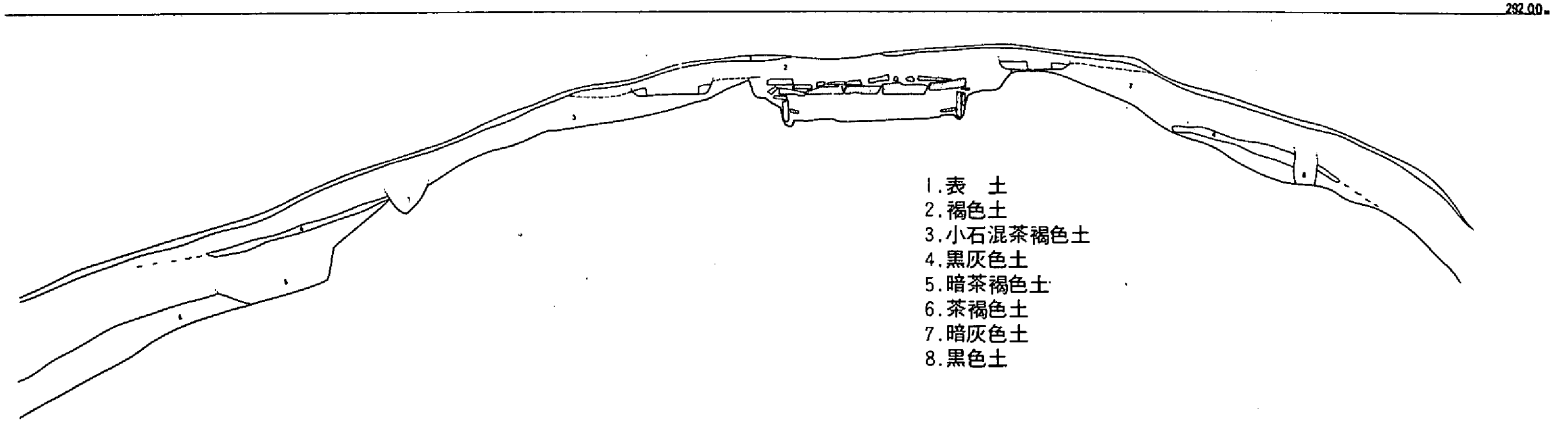
1.　石室墓と石棺墓

4－1（図20）（図版11）

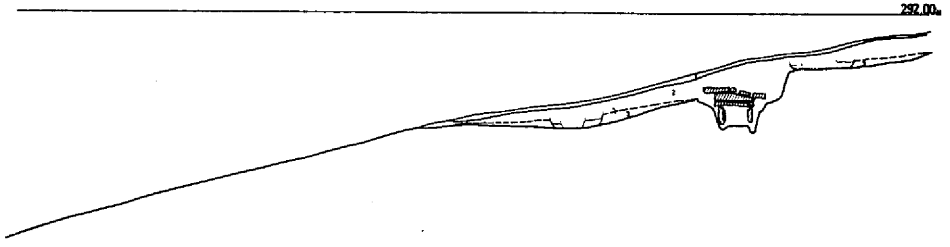
第1主体は，4号墳頂上部の中心よりやや北側に主軸を東西に向けて構築されている箱式石棺である。



第16図　4号墳墓



第17図　４号墳墓東西墳丘断面



第18図　４号墳南北墳丘断面

土壙は2段に堀り込まれており，東西に長い不整形な隅丸長方形を呈している。その規模は，長さ3.46m，幅（中央部）1.55mを測る。壁面はゆるやかな傾斜で堀られており，土壙上面より深さ0.28mで平坦になる。その中央部にさらに長さ2.40m，幅0.70m，深さ0.40mの隅丸長方形の壙を掘っている。石棺は，2段目の土壙内に構築されている。

石棺を構成する南・北の長側石は，南側5枚，北側7枚，厚さ5～8cmの板状の石材をたて並べている。東・西の短側石は各1枚で長側石の内側に「H」状に組まれている。石棺を組んでいる各側石は，2段目の土壙底よりさらに深く掘り込んで側石の安定を計っており，各側石を組んだ石材の上部は，さらに厚さ2cmと非常に薄い板石をヨコに積んで高さを揃えている。石棺の内法は，長さ2.16m，東端幅0.40m，西端幅0.32m，棺床までの深さ0.26mを測る。

天井石は2重に蓋されている。最初に5枚の板石を一列に並べて，その板石と板石の隙間を1重目よりも薄い同質の石材で覆っている。天井石東側の1重目と2重目の間には，この部分だけに径3～5cmの小礫が多数置かれていた。棺底には敷石は認められないが，土壙底部より約10cmの厚さに地山削り土を敷いて棺床をつくっており，この棺床の直上には東・西短側石に沿って厚さ4cmの板石がそれぞれ1枚ずつ置かれており枕石に使用されていたようである。

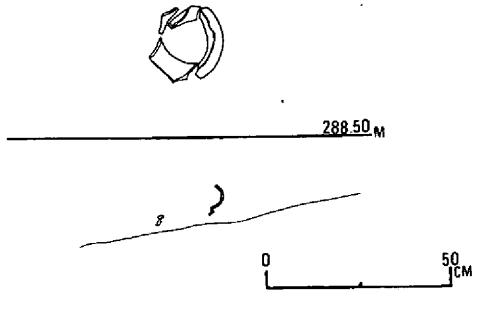
遺物は，すべて鉄製品で棺内東部に集中して検出された。その状態は，北側石に沿ってきっ先を東に向けて鉄剣1，その内側に刀子1，南側石に沿って1列にきっ先を内側に向け合った状態で刀子2が，いずれも棺床上面に置かれていた。

4－6（図21）（図版12－1）

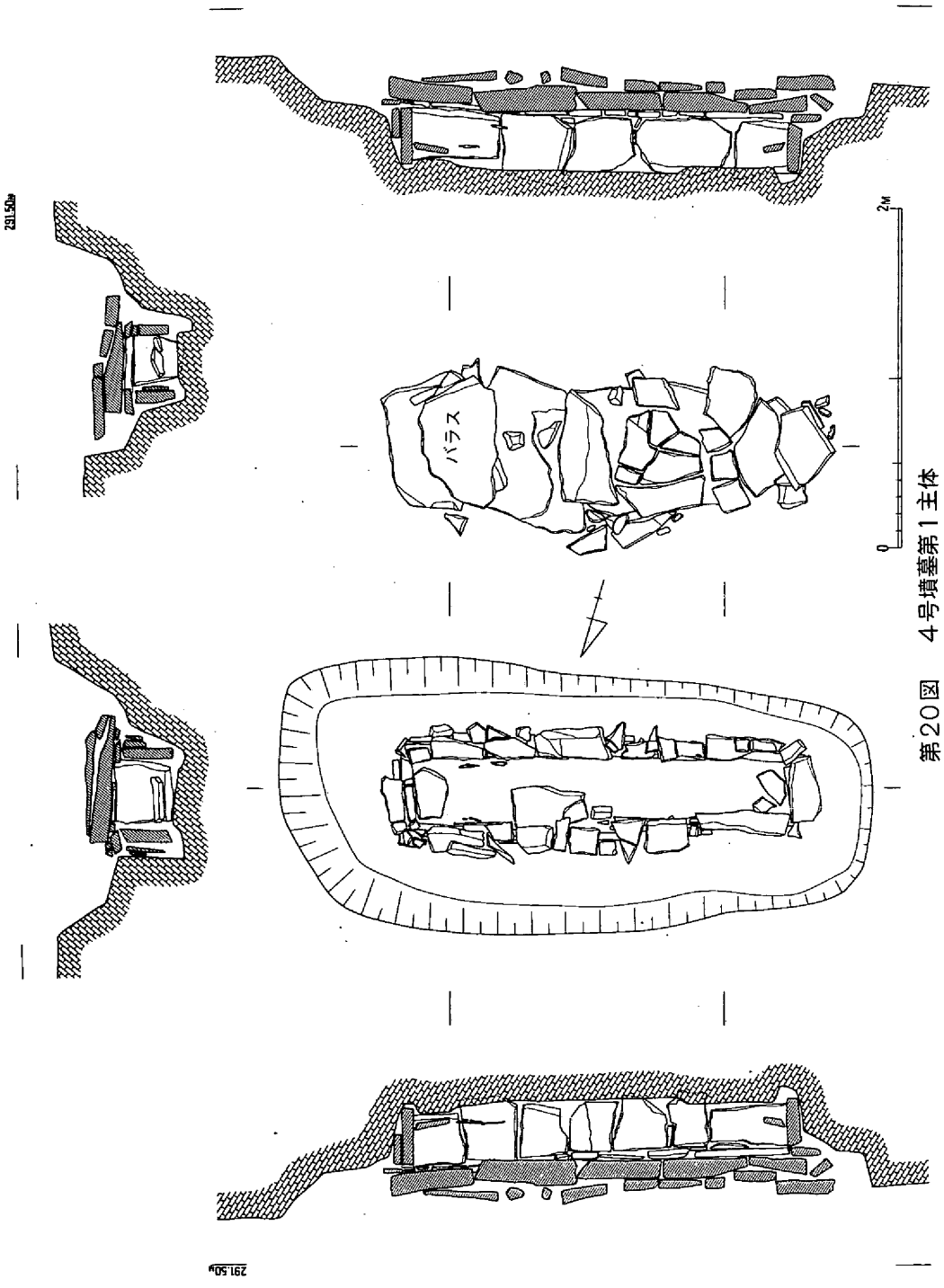
第6主体の箱式石棺は墳丘の中心より東側に位置し，東西1.70m，南北0.62m，深さ0.25mの隅丸長方形の土壙内に構築されている。

石棺は，北側石の一部と天井石が取り去られた状態で検出された。南側石は3枚の板石をたて並べており，北側石も3枚の板石をたて並べていたようである。東・西の短側石は各1枚ずつであったようで，ともに長側石の内側に組まれている。

石棺の内法は，長さ約1.22m，東端幅0.28m，西端幅0.26m，深さ0.28mを測り，棺底には敷石，置土などは認められない。天井石は，発掘時にはすでに取り去られているのでその構造は判らないが，おそらく1～2重に蓋されていたと考えられる。遺物は1片の土器も認められなかった。



第19図　4号墳墓西斜面遺物出土状態



第20図　4号墳墓第1主体

4－9（図22）（図版12－2，3）

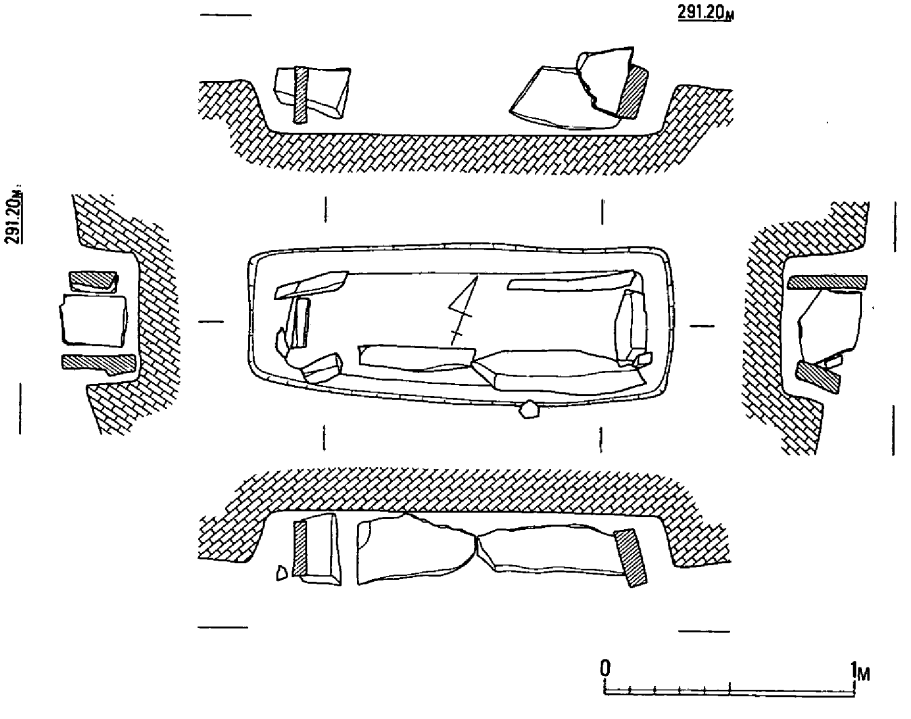
4号墳墳丘下，4－10主体の土壙を切って造られている小型箱式石棺である。

土壙は楕円形に近い形を呈しており，土壙壁はほぼ直角に地山を掘り込んでいる。

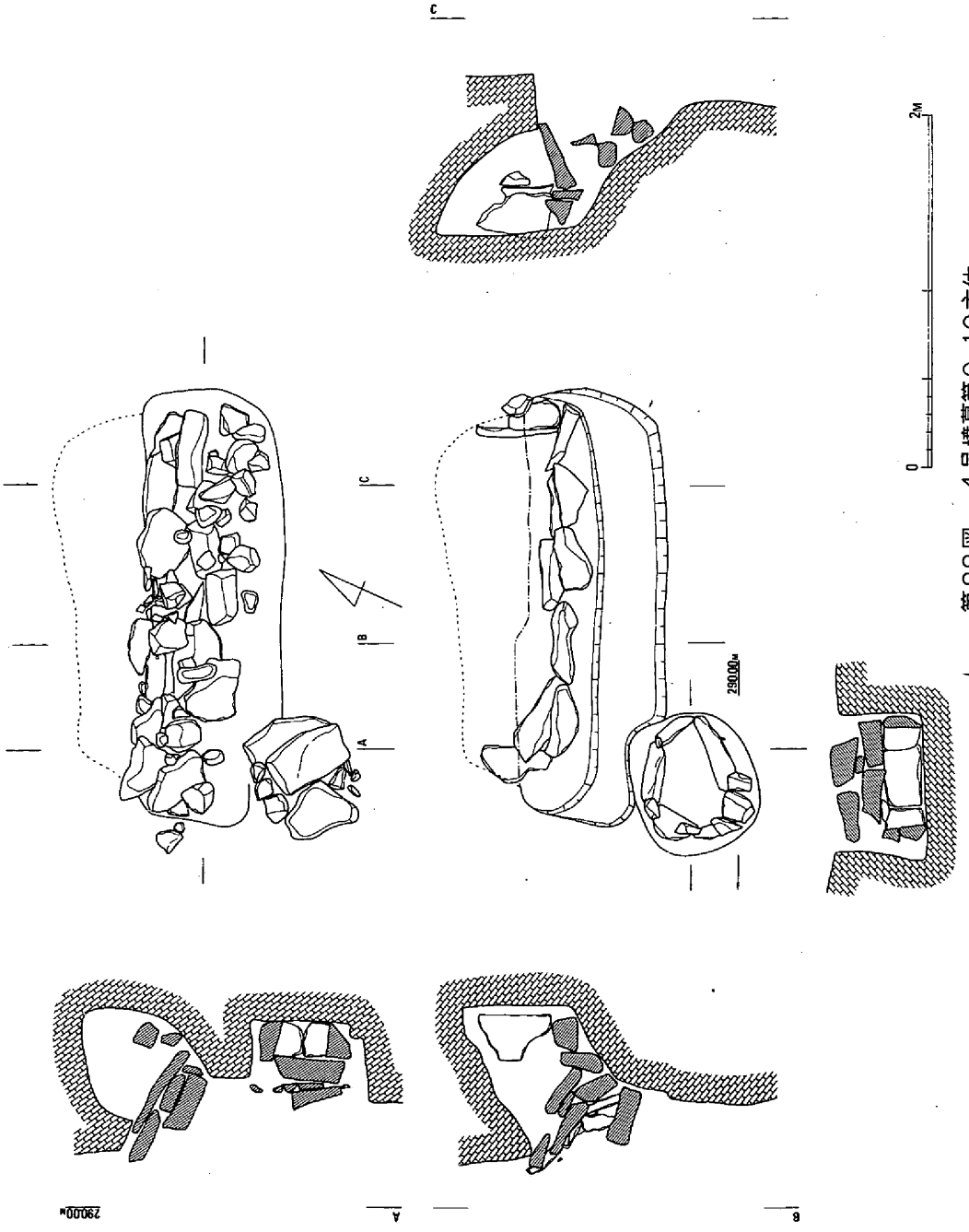
石棺は主軸をN66°Eに向けて構築されている。石棺を構成している側石は7枚の平石を不整六角形に組んでおり，その規模は，長さ0.54m，幅0.28m，深さ0.24mを測る。石棺内には敷石などの施設は認められず，土壙底がそのまま棺底となっているようである。天井石は厚さ10cmの平石を2枚ずつ2重に蓋されており，さらに各石の隙間に拳大の割石を置いている。石棺内からは何ら遺物は検出されなかった。

4－10（図22）（図版12－2，4）

4号墳の地山検出作業時において，墳丘南半部の地山直上に厚さ約5cmの土器を含んだ黒色土が認められた。この黒色土を取り除くと墳丘南東隅において，東西2.30m，南北0.70mの範囲に扁平な石



第21図　4号墳墓第6主体



第22図　4号墳墓第9・10主体

材が斜めに倒れ込んだ状態で検出された。当初，石蓋土壙墓の蓋石が転落しているのではないかと考えていたが，石材除去後に土壙が地山直下に掘られておらず，尾根中心線に向ってトンネル状に掘り込まれた特異な構造を示す埋葬主体部が検出された。

土壙は，旧地表下の地山面より掘り込まれている。断面をみると，土壙は斜面の低い南側より掘られており，東西2.47m，南北0.36m，深さ0.10mの前底部とでも言うべき平坦部を造り，さらに地山を斜め下方に掘り込んでおり，一種の横穴状を呈している。土壙底は，東西2.05m，南北0.85mを測る不整楕円形で，ほぼ水平に掘られている。

土壙内には石で組まれた石棺状の施設が造られている。この石組は，土壙底より壁に沿って東西および南側を「凵」型に組んで棺を造っているが，北側には石組は認められず土壙壁をそのまま代用しているようである。石組は40×15cmくらいの細長い山石でヨコ長に1～2段に積み並べている。

前底部と棺を組んでいる石組との間には閉塞施設が認められる。閉塞は，土壙上端と土壙内棺側石上端の間に厚さ7～8cmの細長い平石で2～3重に蓋されており，さらに拳大の割石を隙間に置いて閉塞を完成させている。

遺物は，閉塞石の隙間および土壙内よりいずれも破片であるが高杯脚部が検出された。

2. 木　棺　墓

4－2（図23）

土壙掘り方は，2m38cm×84，深さ26cm，木棺は1m77cm×38cmをそれぞれ測る。方位はN－E72°をとる。

4－3（図23）

土壙掘り方は，2m8cm×83cm，深さ4cm木棺1m60cm×31cmを測る。方位はN－W15.5°をとり，南棺外に礫が存在する。

4－4（図23）

土壙掘り方は2m6cm×77，深さ20cm，木棺は1m47cm×43cmをそれぞれ測る。方位は1m47cm×43cmをそれぞれ測る。方位はN－E81.5°をとる。

4－5（図23）

土壙掘り方は，2m15cm×87cm，深さ18cm木棺は1m79cmをそれぞれ測る。方位はN－E86°をとる。

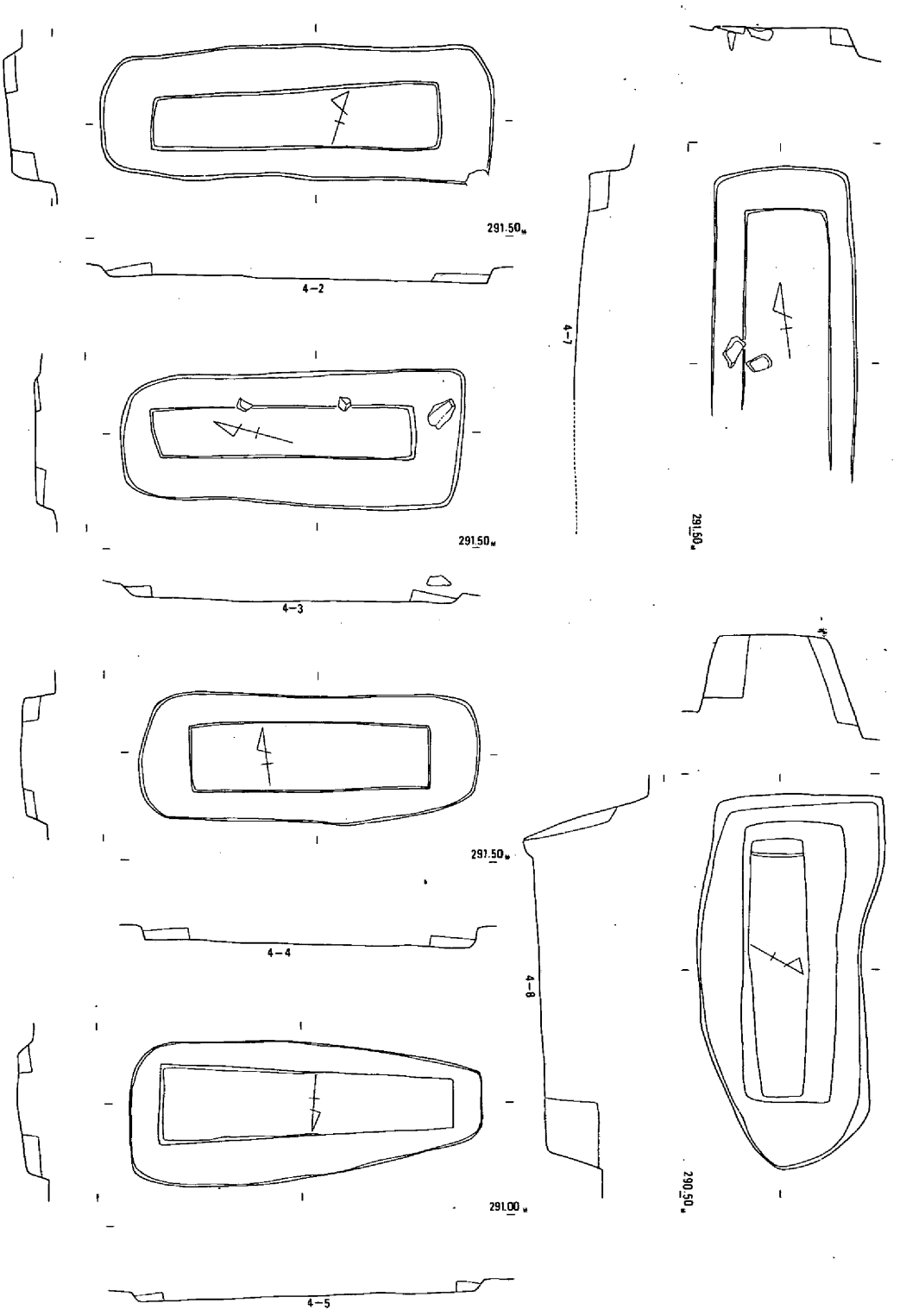
4－7（図23）

南短側部分を消失している。土壙掘り方は？×87cm，深さ17cm，木棺は？×52cmをそれぞれ測る。方位はN－W5.5°をとり，棺中央内外に礫が存在する。

3. 墳丘下埋葬

4－8（図23）

土壙掘り方は，2m29cm×98cm，深さ70cm木棺は1m71cm×50cmをそれぞれ測る。方位はN－W



第23図　4号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体

120°をとり，西短側に小口溝を有する。

4. 出土遺物

遺構に伴なうものはなく，ほとんどが墳丘中より出土している。

4－1（図93）は器形は甕形土器の底部となると考えられるものである。内外面は，縦位の箆削りがなされる。

胎土は細砂を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

4－2（図93）は，推定口径15.5cmを測る壷か器台の口縁部の破片である。口縁端部を立ち上がらせ，端面に横ナデによる凹凸がみられる。

胎土は金雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示す。

4－3（図93）は，台径7.3cmを測る台部の破片である。 被厚し，屈曲した端部に沈線を施こす。

胎土は微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

4－4（図93）は，高杯形土器の杯部破片である。杯部中央で屈曲を有し，外方へ広がり，端部を外方へ拡張しながら幅広の端部をつくる。

焼成は堅緻で，色調は赤褐色を示す。胎土は特殊系のものと同一である。

4－5（図94）は，口径15.7cmを測る器台形土器の口縁部破片である。口縁端部をやや内傾気味に立ち上がらせ，端面に5本の凹線を施こす。

胎土は黒雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗がされている。

4－6（図94）は，口径10cmを測る長頸壷の口縁部破片である。穏やかに外反してゆき，口縁端部を摘み出すようにして，稜をつける。

胎土，焼成とも特殊系のそれと同じである。

4－7（図94）は，旧地表下より出土したもので，算盤玉形の胴部を有する。底部内面は顕著な箆削りをとどめる。又，穿孔がなされている。

胎土は微細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は褐色を示し，丹塗がされる。

4－8（図94）は，口径16.5cmを測る甕形土器である。くの字状に外反する頸部から，やや内傾気味に拡張する。頸部内面は4cmほどの稜線をつくる。 肩部は強く内側に屈曲し， 屈曲部に稜をつくる。整形は，器面の荒れが著じるしく詳細な観察はできなかった。

胎土は金雲母，石粒を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系のそれと同じである。

4－9－1（図94）は，墳丘下第9主体より出土したものである。

特殊壷形土器の肩部の破片である。凸帯は粘土の貼り付けで，断面形は楕円状を呈する。凸部上面に4本の凹線が施こされている。内面は押圧が残り，横位の箆削りがみられる。

胎土は金雲母，黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系のそれと同じである。

4－9－2（図94）は，墳丘下第9主体より出土したものである。

特殊壷形土器の底部よりの破片である。凸帯は粘土を貼り付けており，断面形は円状を呈する。凸帯が底部に移行するプランと同じになるため，凸帯上端が摘み上げ状になる。

胎土は金雲母，黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。

4－9－3（図94）は，墳丘下第9主体より出土したものである。

脚部から台部にかけての高杯形土器の破片である。高い脚部を有し，高く開く台部をつくると思われる。台部には4ケ所に円形透しが存在する。

整形は，脚部上と下が横ナデで，中間を縦位の篦磨きをおこなっている。

胎土は非常に細い金雲母と細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は淡褐色を示す。

4－9－4（図94）は，墳丘下9主体から出土したものである。

台部径17.8cmを測る高杯形土器の脚部から下の破片である。脚部から台部へは弓状になだらかに移行してゆき，台端部を屈曲する。台部には，縦列で3個1対の円形透しが4ケ所みられる。

表面は篦磨きにより整形されているが，丹塗りの関係で，磨きによる凸凹は全く観察出来なかった。内面は縦位と横位の篦削りがみられる。特に台部は，顕著な削りがなされている。

胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。

4－9図94）は，4－9－4の高杯形土器と同一の器種を示す台部の小片である。

4－10（図94）は，壷か器台の口縁部の小片である。胎土・焼成・色調などは特殊系のそれと同じである。

鉄製品は，第1主体室内と第3主体木棺内よりの2ケ所より出土している。

1（図99－1）（図版32）は，石室内北長側石に沿った東短側よりに，鋒を西に向けて置かれていたものである。

全長29.8cm，刃部22.9cm，茎部6.9cm，鎬0.4cm，刃部幅1.8cm，茎幅1.2cm，茎厚さ0.4cmをそれぞれ測る。

2（図99－2）（図版32）は，剣と反対の南長側壁に沿う床面に，鋒を西に向けて検出された。全長11.8cm，刃部長8.8cm，茎部長3cm，刃部幅1.1cm，莖部幅1.35cmを測る。

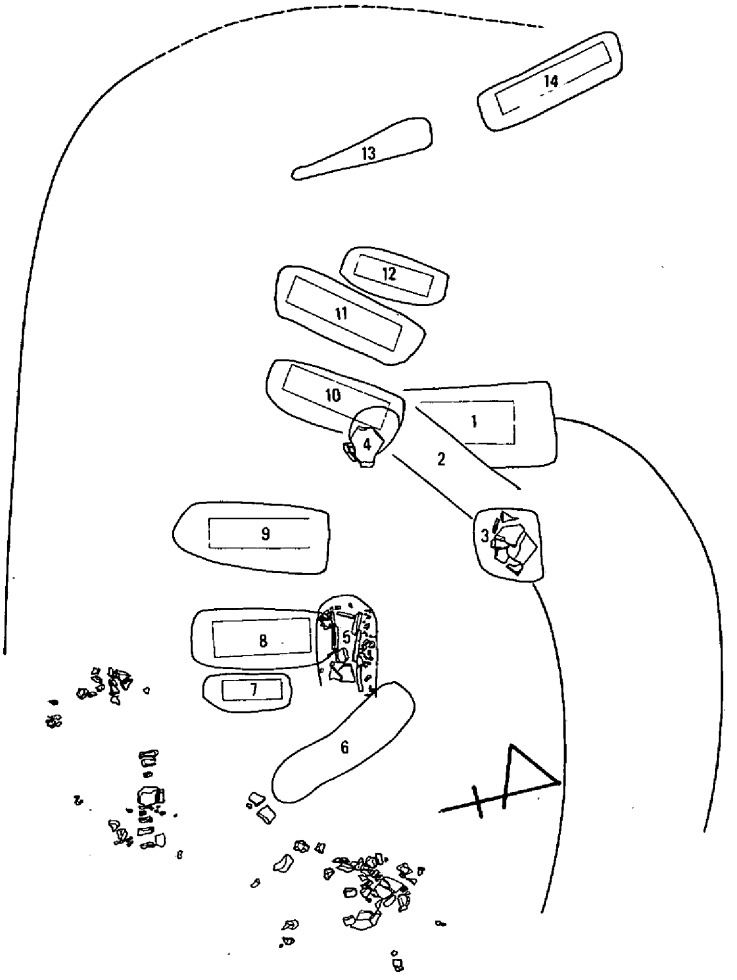
3（図99－3）（図版32）は，石室の蓋を開けた時に，埋土上面より検出されたものである。2つの刀子よりやや西よりで，鋒は西に向けて置かれていた。なお2の刀子とこのものとの高低差は12cmほどである。全長8.9cm，刃部長7.05cm，莖部長1.85cm，刃部幅1.7cm，莖部幅1.3cmを測る。

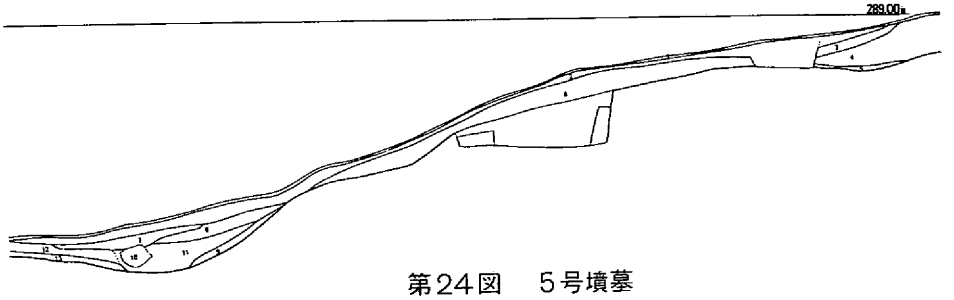
4（図99－4）（図版32）は，剣の南側に並置されて検出されたものである。検出した時より，3ケ所に渡って折れていた。鋒は西に向けられていた。全長9.9cm，刃部長7.05cm，茎部長2.85cm，刃部幅1.2cm，茎部幅1cmを測る。

第3主体木棺内より，鉄片が出土している。

第5節　5　号　墳　墓

北辺は，土層断面図に示した第3層暗茶褐色土が周溝内堆積土と考えられる。第3紀層地山面まで



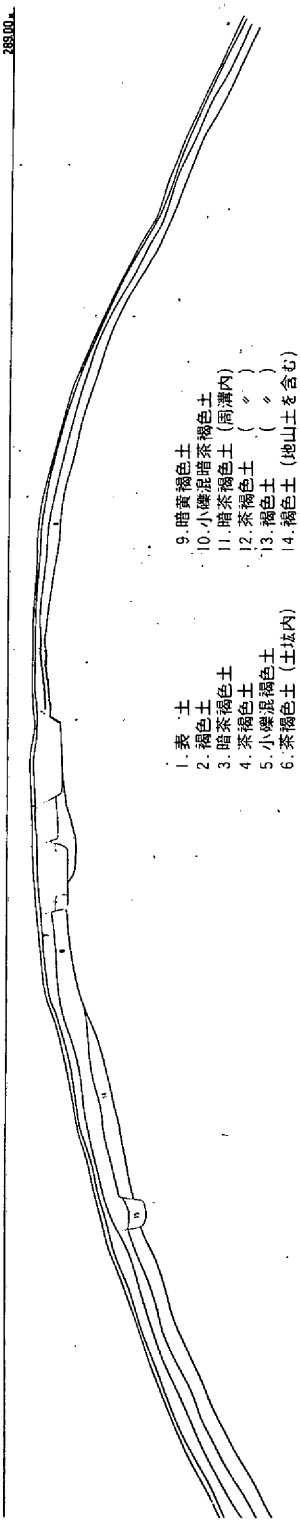


第24図　5号墳墓

達せず，その上に堆積する茶褐色土層中に掘り窪めるといった感じで掘られている。南辺は，6号墳と共有する溝によって画される。西辺は明確な地山削り出し，溝などは認められなかった。東辺は，幅1mほどの列石が南東コーナーを中心として東と南にかけて弓状に存在する。また，北辺よりに東――西に存在する溝は，幅2cmほどで深さは10cm内外の浅いものである。これは墳丘下に存在する埋葬に伴なうものと考えられる。このようなことから，この墳墓の規模は，南北8m，東西12m，高さは，50cmを測り，形態は方形をとる。

墳丘上の埋葬主体は，第2層茶褐色土上層より掘り込み，地山面まで土壙は達しない。墳丘下埋葬は茶褐色土中より掘り込み，地山中に土壙を穿っている。

5号墳墓は，墳丘下埋葬とほぼ完全に重複しており，第1～第5主体の墓域は前述した溝と礫によって示されるが，墳丘下のそれについては，明らかに南側部分の地山を削ることによってそれを画している。土層観察で第6層が墳丘下に伴なう可能性が強いことなどからすれば，前述したように，ただ溝と列石によって墓域を画したものと考えられる。



第25図　5号墳墓東西墳丘断面

1. 木　棺　墓

5－1（図27）

南側部分を失い，第2・第4主体と重複している。土壙掘り方は，？×1m18cm，深さ30cm，木棺は？×58cmをそれぞれ測る。方位はN－E1°をとる。

5－2（図27）

北東部が第3主体と重複し，3分の1ほどを失なっている。掘り方及び木棺痕跡の遺存は非常に悪い。

2. 石　棺　墓

5－5（図26）（図版13－3）

第5主体は，墳丘の中心より東側に寄せて構築された箱式石棺である。検出時には東端部の土壙および側石の一部が植林によって破壊されていた。

土壙は東西に長く掘り込まれており，残存部より推定して長さ約1.60m，幅0.71m，深さ0.20mを測る。側石は南・北ともに3枚を並べていたようである。東・西短側石は各1枚で，長側石と短側石の組み方は，ともに短側石が長側石の内側にはめ込むように組まれている。石棺底部には敷石等の施設は認められず土壙底が棺底となっている。石棺の内法は，長さ0.90m，幅0.20m，深さ0.23mを測る。

天井石は検出時にはすでに取り去されており，構築時に蓋されていたかどうかは判らないがこの種の石棺の構造から考えて1～2重に蓋されていたと思われる。なお，土壙と棺側石の間には径3～8cmの円礫を棺側石上面とほぼ同じ高さに置いている。

3. 石　蓋　土　壙

5－3（図27）（図版13－1）

第2主体北側の土壙端部を切って造られた石蓋土壙墓である。

土壙は，東西0.95m，南北0.86m，深さ0.22mの菱形状を呈している。

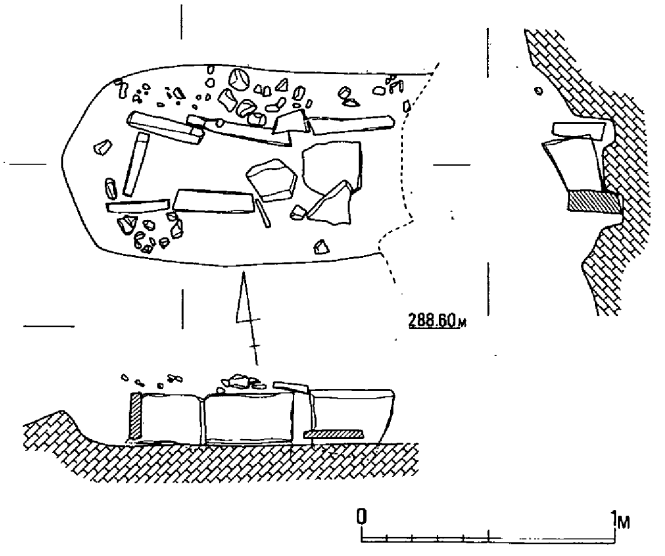
蓋石は，厚さ5cm，60×48cmの板石で，土壙底より14cm上部にほぼ水平に置かれている。土壙底と蓋石の間には何ら施設は認められない。

5－4（図27）（図版13－2）

第2主体南側に造られた石蓋土壙墓で，第4主体の石蓋土壙墓とは約2.5m南側に位置している。

土壙は，東西0.73m，南北0.66mの規模で楕円形に掘られており，深さは0.15mを測る。

蓋石は，厚さ6cm，56×48cmの不整な板石1枚を土壙底より12cm上部に，土壙中央より東側に寄せて置かれている。



第26図　5号墳墓第5主体

4. 墳丘下埋葬

5－6（図27）

土壙掘り方は，2m32.5cm×52cm，深さ25cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。方位はN－E21°をとる。土壙底は平坦につくられている。

5－7（図27）

土壙掘り方は，1m2cm×？cm，深さ47cm，木棺は81cm×26cmをそれぞれ測る。方位はN－E12°をとる。

西長側部分を第8号主体と重複している。

5－8（図27）

土壙掘り方は，1m78cm×97cm，深さ43cm，木棺は1m29cm×58cmをそれぞれ測る。方位はN－E12°をとる。東長側部分を第7主体と重複する。

5－9（図28）

土壙掘り方は，2m26cm×78cm，深さ29cm，木棺は1m33cm×51cmをそれぞれ測る。方位はN－E18.5°をとる。

5－10（図28）

土壙掘り方は，1m88cm×76cm，深さ38cm，木棺は1m36cm×40cmをそれぞれ測る。方位はN－E35°をとる。

5－11（図28）

土壙掘り方は，1m99cm×68cm，深さ30cm，木棺は1m59cm×45cmをそれぞれ測る。方位はN－E39.5°をとる。

5－12（図28）

土壙掘り方は，1m40cm×51cm，深さ25cm，木棺は1m10cm×35cmをそれぞれ測る。方位はN－E32.5°をとる。棺南より東端の土壙上面に礫が存在する。南西短側に小口溝を有する。

5－13（図28）

土壙掘り方は，2m4cm×71cm，深さ21cmを測り，方位はN－E0.5°をとる。木棺痕跡は確認されず，土壙掘り方は第6主体に以る。底面は南にかけて細くなってゆく。

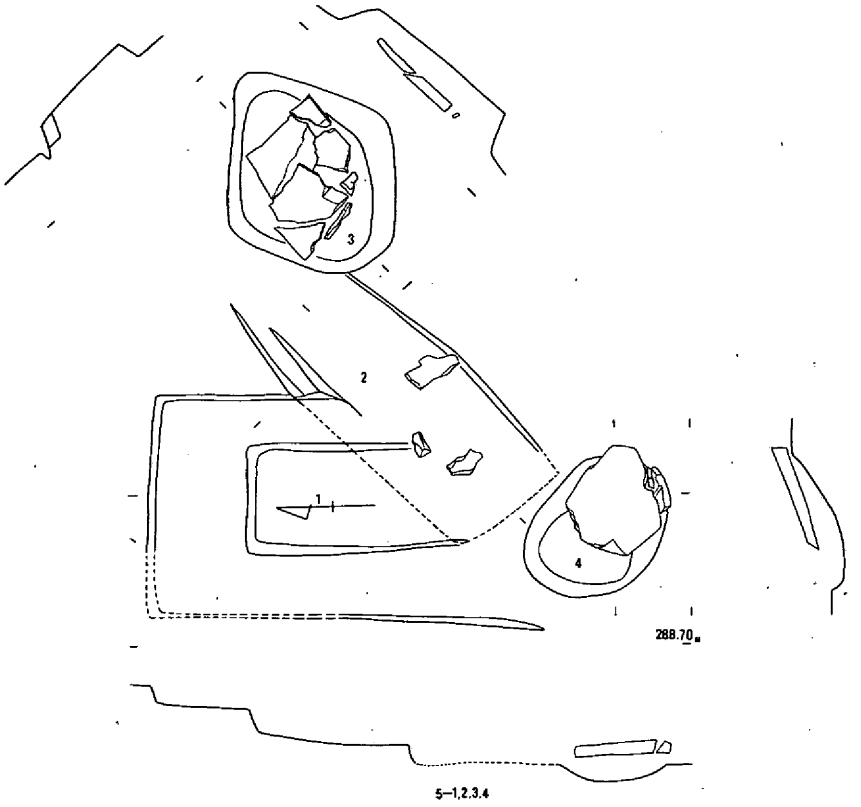
5－14（図28）

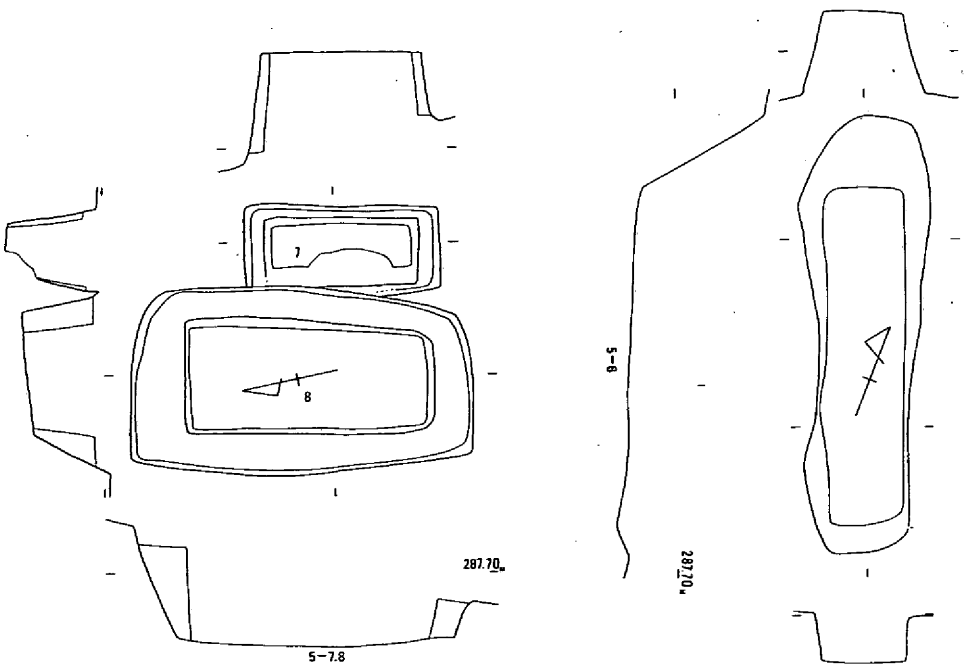
土壙掘り方は，2m71cm，深さ63cm，木棺は1m59cm×39cmをそれぞれ測る。方位はN－E2.5°をとる。中央南より棺上に礫が存在する。

5. 出土遺物

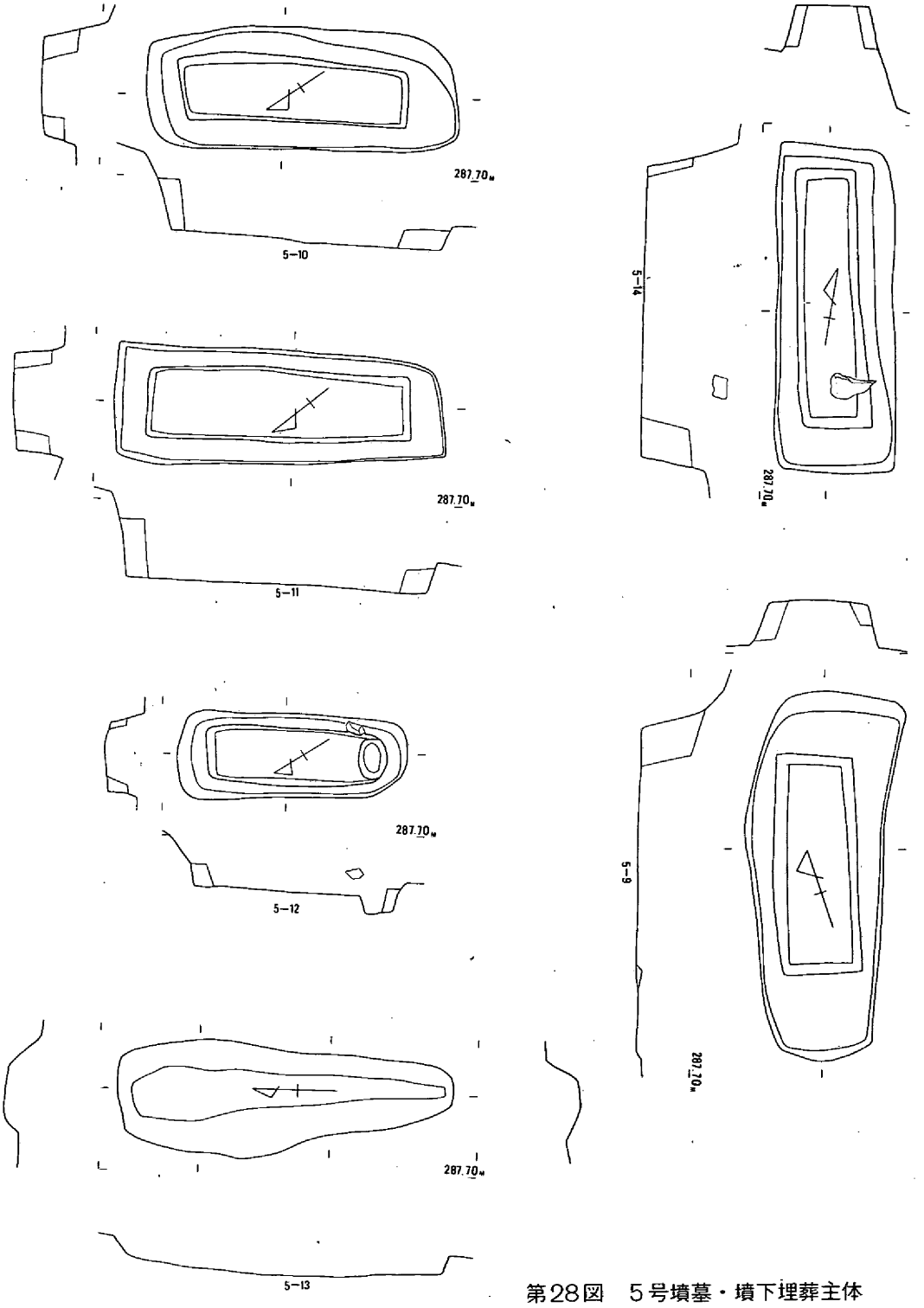
5－1（図94）（図版30）は，葺石の下より検出された高杯形土器の脚部破片である。外面には縦位の細い磨きがなされている。円形透しは4ケ所穿たれている。

胎土は金雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は褐色を示し，丹塗りがされている。





第27図　5号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体



第28図　5号墳墓・墳下埋葬主体

5－2（図94）（図版31）は，葺石の下より検出されたものである。口縁17.4cmを測る壷あるいは器台の口縁部片である。口縁端部を垂直に立ち上がらせ，端面に凹線を施こす。外面は篦磨きがみられる。

胎土は金雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系のそれと同じである。

5－3（図95）は，5号墳墓の北側の溝上より，5－3と伴に出土したものである。長頸壷形土器の頸部下半の破片であり，凹線が施こされている。

胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示す。特殊系のそれと同じである。

5－4（図95）は，5－3と同じ地点より出土したもので，同一個体と考えられる。脚部下半の破片で，貼り付けによる凸帯をもち，断面形は楕円状を示す。

胎土焼成，色調とも5－3と同一である。

5－5（図95）（図版31）は，西側の墳丘外より出土したものである。台径16.6cmを測る高杯形土器の台部である。台端部は内側に屈曲させる。円形透しは破片のため個数不明である。

胎土は金雲母を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系のそれと同じである。

5－3－6（図95）は，石蓋土壙の上面より出土したもので，この主体に直接伴なうものではない。

剝離が著じるしく，器形を知られるのみである。台部径約15cmを測る高杯形土器の台部片である。胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示し，丹塗りされている。

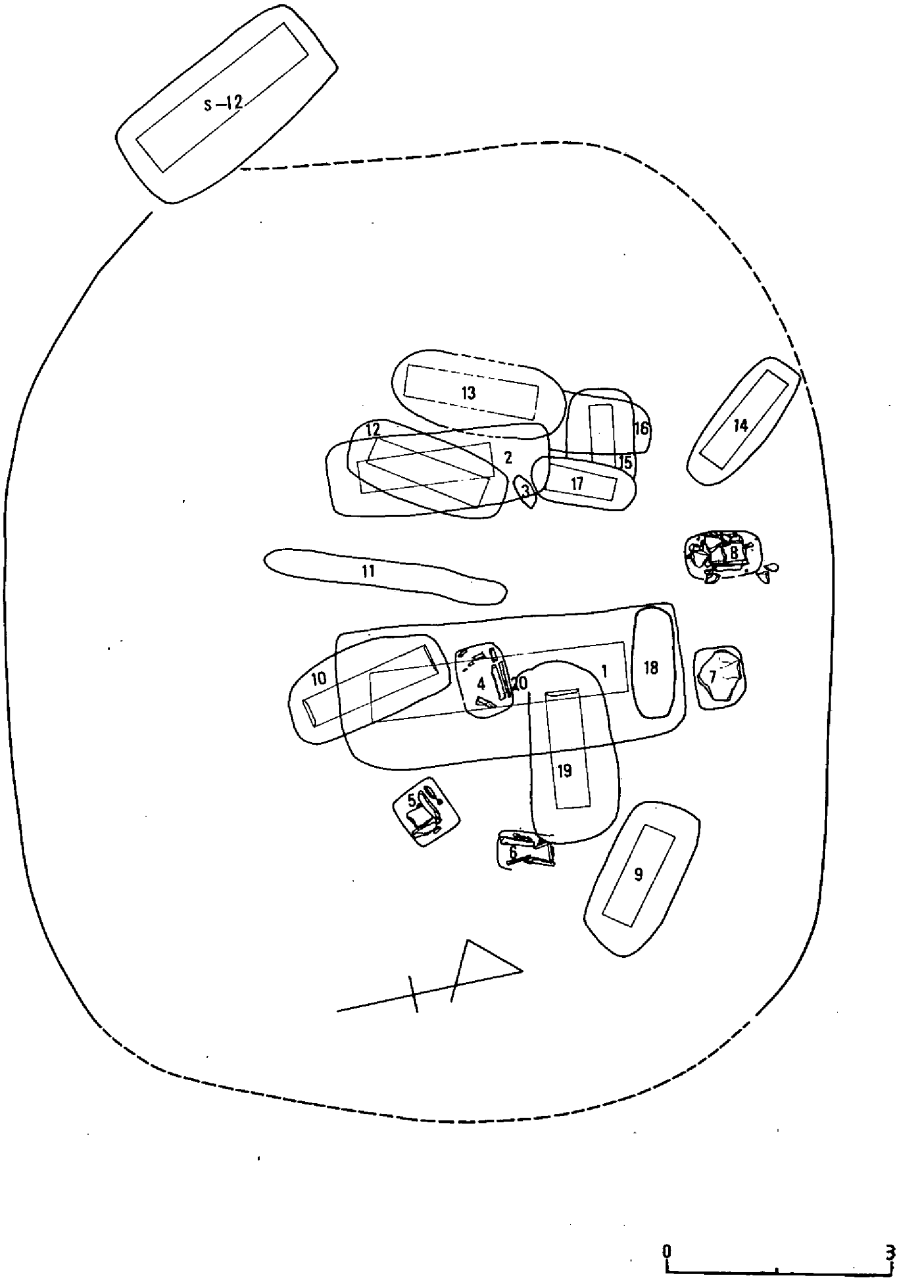
5－7（図95）は，南の溝より出土した甕形土器の口縁部の小片である。やや内傾する口縁をもち，被厚気味にさせている。胎土は微砂を含み，焼成は堅緻である。色調は淡褐色を示す。

5－8（図95）は，北の溝より出土した高杯形土器の杯部である。胎土は微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

第6節　6号墳墓

墳丘は，6号墳の墳丘下には弥生時代後期の方形台状墓的な墳墓があり，その上に盛土を行なって構築されているので方形墳・円墳いずれになるのか判断しがたい。北側の溝は半円状に周溝が掘られており，この周溝は墳丘西側にまで続いている。墳丘東側には葺石が存在したようであり，その石材が墳丘外斜面下方に多数認められた。また，南側においても南溝内の東側に石材が多数認められ，この部分にも葺石が葺かれていたようである。しかし，南溝西側においては石材は全く認められなかったので全域には葺かれていない。

このようなことから墳形は東西に長い隅丸方形墳あるいは楕円形墳と考えられる。墳丘の規模は，東西13m，南北11m，高さ1.5m程度であったと推定される。



第29図　6号墳墓

一方，6号墳墳丘下には，方形台状墓的な墳墓がある。6号墳墳丘表土下0.30mには5cmの厚さで土器を含んだ黒色土層が認められ，この下部は地山であり，地山上面には多数の土壙墓が検出された。

墳丘は地山を削り出すことによって方形状に区画されているようであり，南側には一部ではあるが浅い落ち込みが認められる。北側は6号墳の周溝が掘られているので，この方形台状に伴う溝が造られていたかどうかは判らない。墳丘の規模は，東西12m，南北8m程度であったと考えられる。

6号墳の埋葬主体は，墳丘下の埋葬主体を破壊することなくすべて盛土内に築かれている。

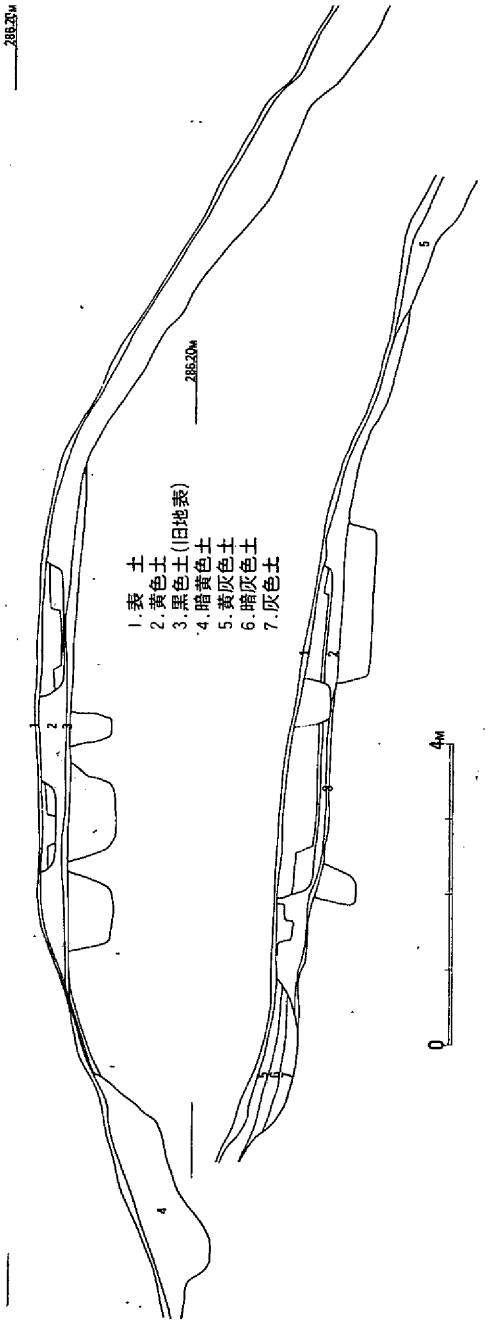
1. 木　棺　墓

6－1（図36）

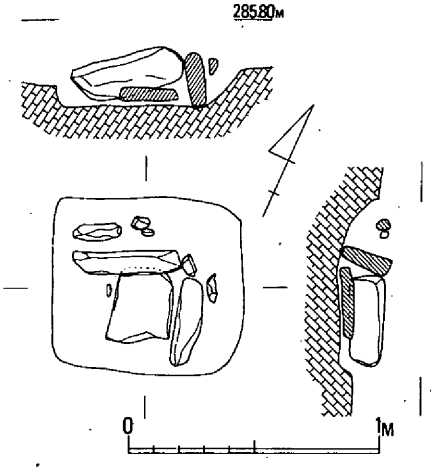
第1主体は，6号墳頂上平坦部の中心よりやや東に寄った位置に尾根と平行に造られている木棺墓である。表土下約10cmに盛土が認められ，土壙はこの盛土より掘り込まれており，土壙北端部では地山に達している。

土壙の規模は，上端で南北4.44m，東西1.80m，底部で南北4.08m，東西1.60m，深さは中央部で現表土より0.35mを測り，土壙底は北端より南側へ約2度下降している。土壙はほぼ隅丸長方形を呈しており，土壙壁はゆるやかに掘られている。

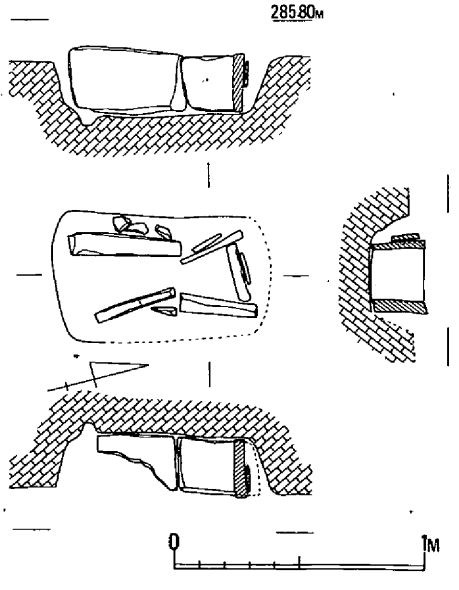
棺は，土壙中心線よりやや西側に寄せて置かれている。長さ3.45m，北端幅0.64m，南端幅0.55mを測り，棺中央部は第4主体の小型箱式石棺によって破壊されてい



第30図　6号墳墓南北・東西墳丘断面



第31図　6号墳墓第5主体



第32図　6号墳墓第6主体

る。棺は断面「⊔」字型を示すところから組合式箱式木棺と考えられる。棺の小口部には小口板などの施設は認められないようであり，棺底はほぼ土壙底を示している。土壙および棺内には遺物などは認められなかった。

6－2（図36）

第2主体は，第1主体の土壙端より西側1.9mに主軸を南北に向けて造られている木棺墓で，第1主体の木棺墓とは平行して造られている。

土壙は，表土下25㎝と非常に浅い位置で検出された。その規模は南北2.80m，東西0.98m，深さは検出上面より土壙底まで0.27mを測る。

棺は土壙のほぼ中央部で検出されており，その断面は一部に「U」字型を示すところもあるが断面観察では「⊔」字型を示しており，第1主体同様組合式箱式木棺が置かれていたと考えられる。棺の内法は，長さ1.70m，北端幅0.47m，南端幅0.35mを測り，棺底は南側に比べて北側が3㎝高くなっている。

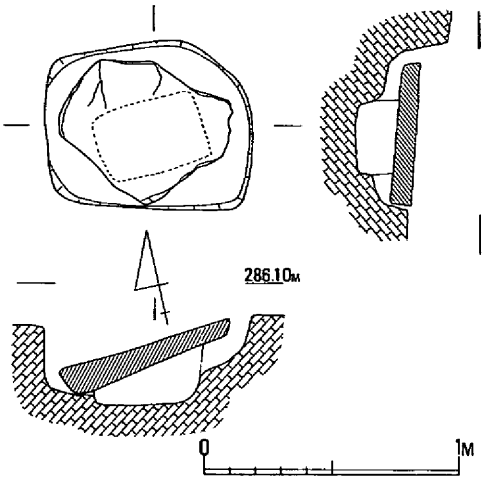
2. 小　児　墓

6－3

6号墳第2主体の土壙を検出中，土壙内北部において南北にほぼ一列に径10～20㎝の割石5個が認められた。当初，第2主体に伴う施設もしくは小型箱式石棺と考えていたが，不幸にも調査休日にこの石列が破壊されてしまった。従ってこの石列がどのような遺構であったのか不確かではあるが，石列の下にも幾つかの石材が存在したようであり，また石列の外側には土壙らしき掘り方も認められるので当初検出していた石列は，箱式石棺もしくは石蓋土壙墓の天井石であった可能性が考えられる。

6－4（図36）（図版14－2）

第1主体木棺の中央部を切って構築されている



第33図　6号墳墓第7主体

小型箱式石棺である。第1主体の木棺検出中，棺の中央部に90×60cmの土状のものが認められた。当初は盗掘壙かと考えていたが，土壙を掘り下げると北側に側石と考えられる板石が検出され箱式石棺と判明した。

土壙は，主軸をほぼ東西に向けて長さ0.95m，幅0.65mに掘り込んでおり，第1主体部の主軸とは直交している。

石棺は，北側石以外はすべて抜き取られているのでその規模は正確には判らないが，抜き取り痕跡より推定して長さ0.65m，幅0.35m程度であったと考えられる。土壙底は第1主体木棺底より深く掘り込んでいる。

6－5（図31）（図版14－3）

墳丘頂上部より南東隅約3.50mの位置に主軸を東西に置いて造られている小型箱式石棺である。より具体的には第1主体の東側，第6主体の南側に位置している。

土壙は，東西0.74m，南北0.68m，深さ0.15mを測り，隅丸正方形状を呈している。

石棺は，北および東側石の他はすべて抜き取られており，そのため棺の内法は明らかではないが抜き取り跡から推定して東西0.40m，南北0.40m，深さ0.20m程度であったと考えられる。側石は四壁とも1枚ずつたてて箱形に組んでいたようである。棺内には厚さ5cmの板石が1枚床面に存在したが，本来，天井石であるのか側石かは用途が判らない。また遺物などは何ら認められなかった。

6－6（図32）

第6主体の埋葬主体は小型箱式石棺である。石棺は，第1主体の東側約1.30mの位置に主軸を尾根と平行して造られている。

土壙は，南北約0.85m，東西0.52mでU字状に掘り込まれている。石棺は天井石および南短側石が抜き取られた状態で検出された。側石は厚さ3～7cmの板石で組まれており，その内法は長さ約0.60m，幅0.20m程度であったと考えられる。長側石は，東西とも2枚の板石をたてに並べている。短側石は，南側は抜き取られているが南北とも各1枚であったようで，長側石に短側石をはめ込んで組まれている。棺底には何ら施設はなく，土壙底が棺底となっているようである。

棺内には何ら遺物は検出されなかった。

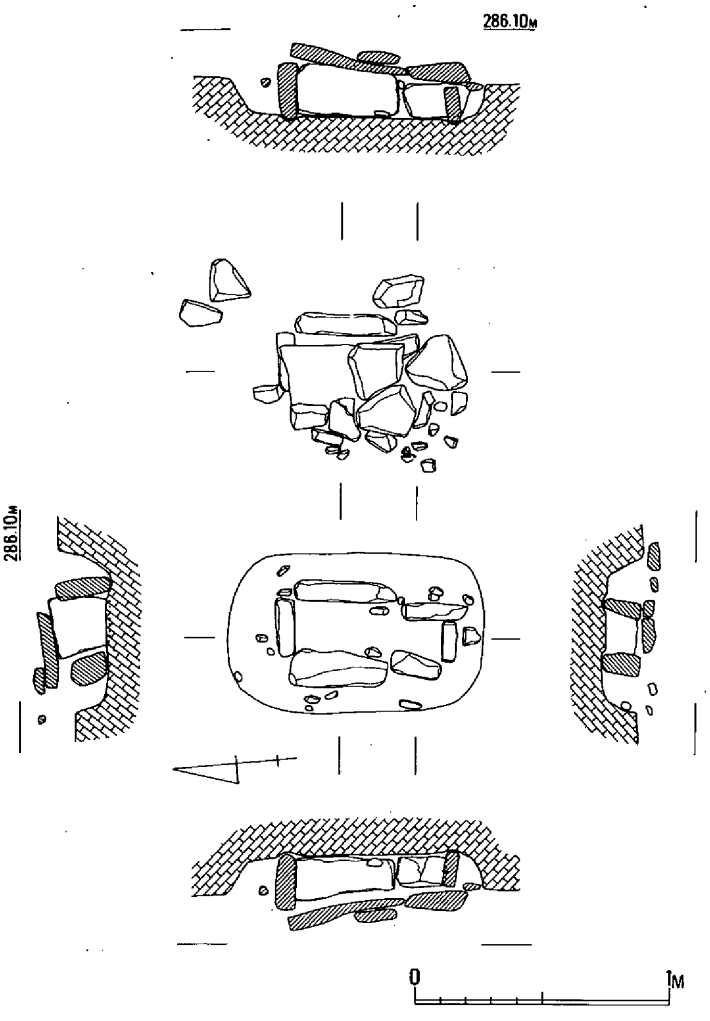
6－7（図33）（図版14－4）

第1主体北側の土壙肩部に接して造られた石蓋土壙墓で，その主軸は第1主体の木棺中心線上にほぼ位置している。

土壙は2段に掘り込まれており，東西0.80m，南北0.63m，深さ0.35mのところで平坦となり，そ

の中央部さらに東西0.42m，南北0.25m，深さ0.10mの土壙を掘っている。東西の長さがやや長く掘られており，2段目の土壙は1段目の主軸よりもややずれる。

2段目の土壙を覆う蓋石は，厚さ8cm，65×48cmの不整形な板石1板で蓋している。この天井石は1段目と2段目の平坦部よりは約6cm上部に置かれており，天井石を取り除くと東西0.40m，南北0.30mの箱形にやや黒色がかった土が広がっていた。この土を掘り下げていくと四方の壁は2段目の土壙壁につながるので2段目土壙壁にそって木棺状の木枠が組まれていたと推定される。土壙内からは遺物は検出されなかった。



第34図　6号墳墓第8主体

6－8（図34）（図版15－1，2）

第1主体の南西端，第7主体部の西側約1.20mの位置に主軸を南北に向けて造られた小型箱式石棺である。

石棺を埋置している土壙は南北1.00m，東西0.63m，深さは南端0.13m，北端0.13mとほぼ水平に掘られている。石棺の内法は，長さ0.58m，南端幅0,25m，北端幅0.12mで，天井石より棺底まで0.18mを測る。側石は東西とも各2枚をいずれも長さ20～40cmくらいの山石をヨコ長に組んでいる。石棺の天井石は厚さ5～7cmの丸みをもった2枚の石材を並べて置き，その隙間をやや小型の同石材で覆う2枚重ねになっている。また天井石の周囲には，天井石と同レベルに径3～8cmの小石を置いている。石棺内には遺物は何ら検出されなかったが，棺内中央部の東・西両壁に沿って3×7cmの細長い小石が主軸と平行して置かれていた。

3. 墳丘下埋葬

6－9（図36）

土壙掘り方は，1m91cm×87cm，深さ40cm，木棺は1m31cm×37cmをそれぞれ測る。方位はN－W52.5°をとる。

6－10（図37）

土壙掘り方は，2m10cm×81.5cm，深さ32cm，木棺は1m78cm×40cmを測る。方位はN－W14°をとり，両短側とも小口溝を有する。

6－11（図37）

土壙墓と考えられるもので，重複しているものと推定される。土壙掘り方は，2m50cm×49cm，深さ51cmのものと，7cm×38cm，深さ53cmのものである。方位は，いずれもN－E19°である。

6－12（図37）

土壙掘り方は，2m33cm×82cm，深さ80cm，木棺は1m68cm×40cmをそれぞれ測る。北西短側が二段掘りとなる。方位はN－E31.5°をとる。

6－13（図37）

土壙掘り方は，2m16cm×90cm，深さ50cm木棺は1m73cm×38cmをそれぞれ測る。土壙掘り込み状態は断面し字状を呈し，割竹形の木棺の埋置が考えられる。方位はN－E19°をとる。

6－14（図37）

土壙掘り方は，1m80cm×70cm，深さ33cm木棺は1m26cm×34cmをそれぞれ測る。方位はN－W40°をとる。

6－15（図38）

土壙掘り方は，？cm×69cm，深さ23cm，木棺は？cm×30cmを測る。方位はN－W80°をとる。

6－16と6－17とは重複し，6－16の後からつくり，6－17に切られている。

6－16（図38）

土壙掘り方は，？cm×73cm，深さ74cm，木棺は？cm×43cmをそれぞれ測る。方位はN－E6°をとる。

6－15と6－17とは重複し，6－16より先に埋葬されるが，6－17との関係は不明である。

6－17（図38）

土壙掘り方は，1m39cm×？cm，深さ60cm，木棺は認められなかった。

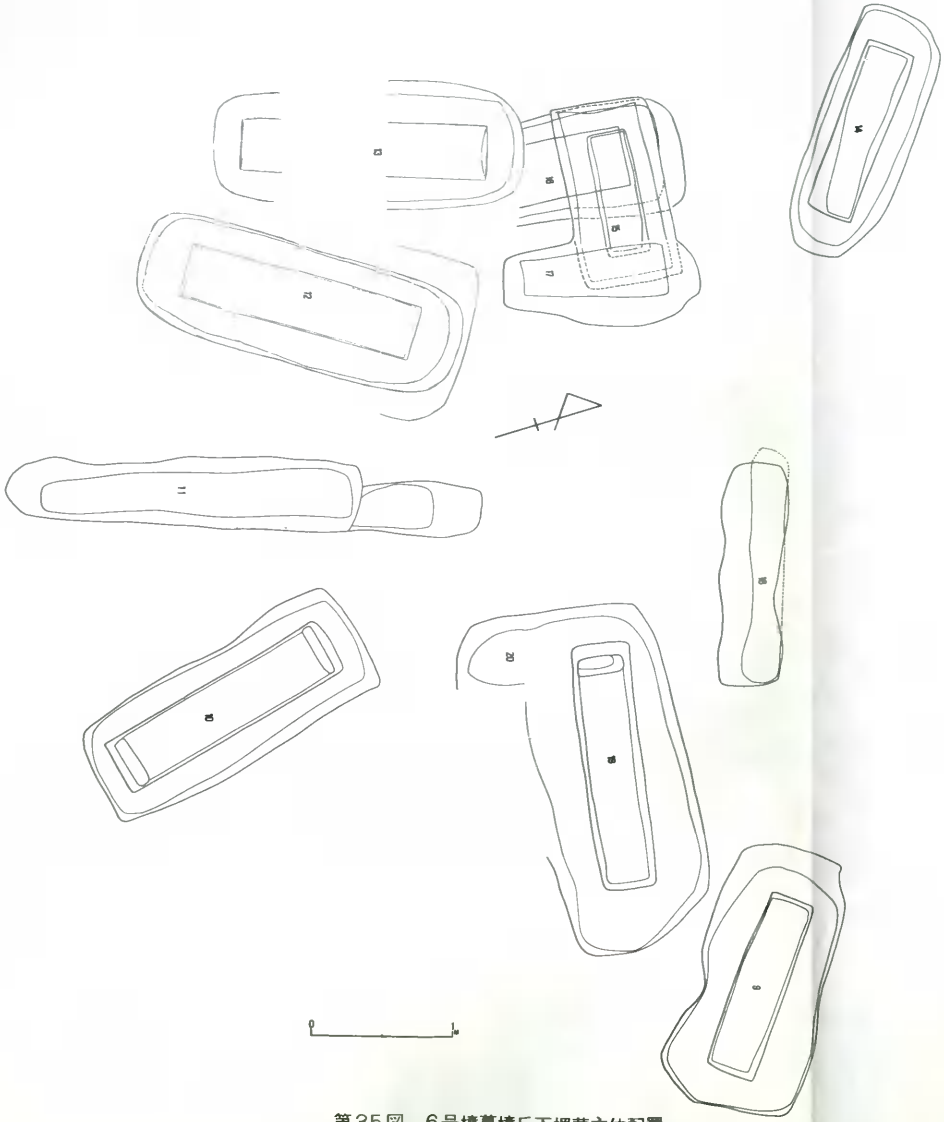
6－15と6－16とは重複し，6－15より先に埋葬され，6－16との関係は不明である。

6－18（図37）

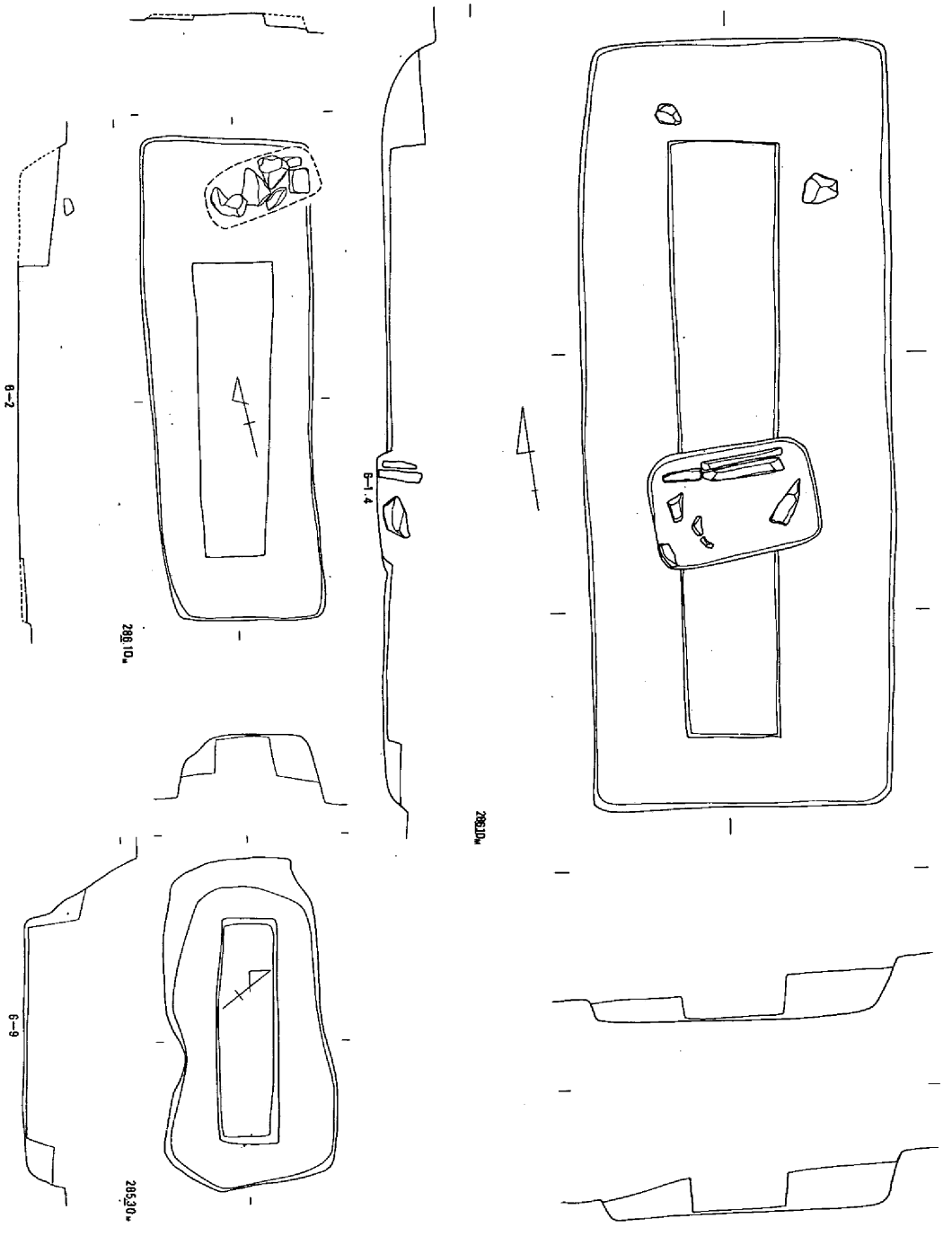
土壙掘り方は，1m56cm×1.65cm，深さ59cmを測る土壙墓である。

6－19（図38）

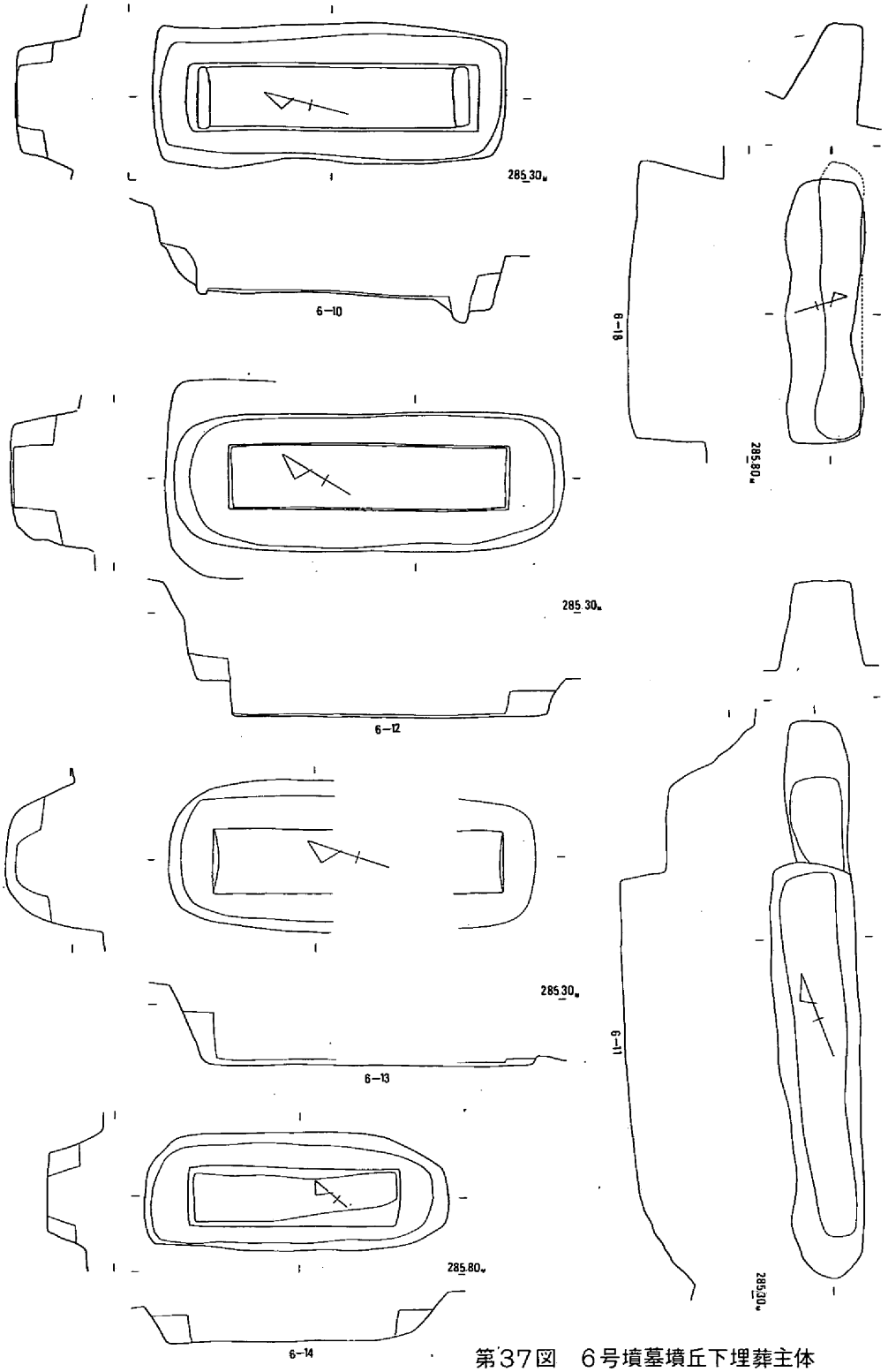
土壙掘り方は，2m45cm×？cm，深さ61cm，木棺は1m74cm×42cmを測る。両短側には小口溝を有する。



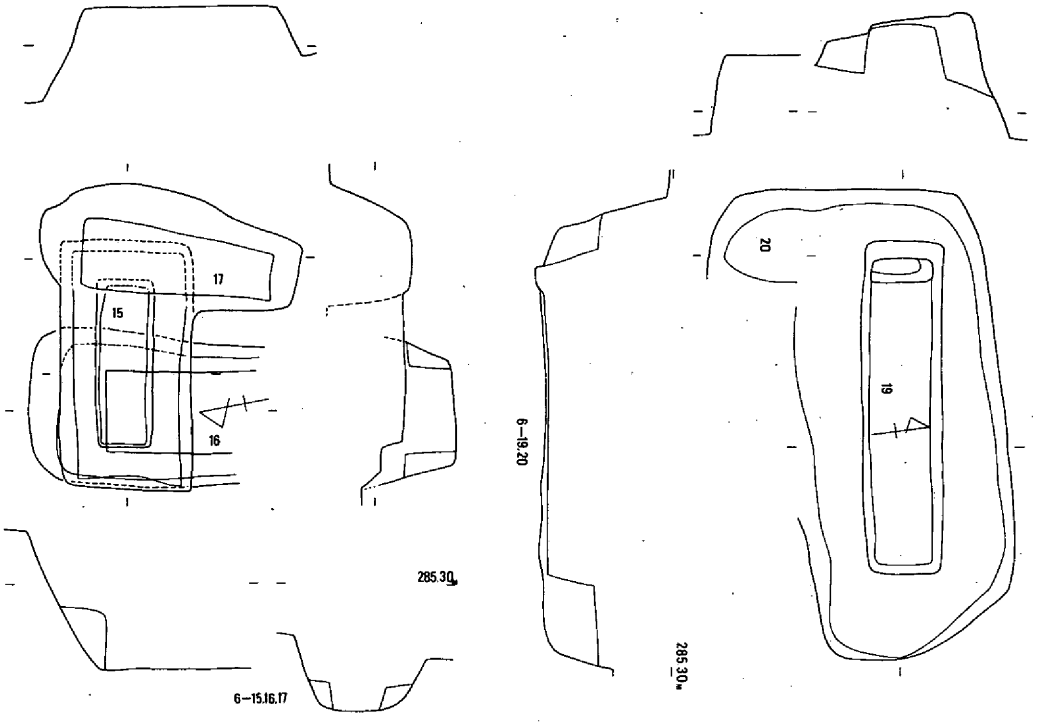
第35図　6号墳墓墳丘下埋葬主体配置



第36図　6号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体



第37図　6号墳墓墳丘下埋葬主体



第38図　6号墳墓墳丘下埋葬主体

6—20（図38）

小型の土壙墓であるが，6—19と重複しているため，詳細は不明である。

4. 出土遺物

6—1（図95）（図版31）は，墳丘下より出土したもので，直口壷の口縁部と考えられる。金雲母は含まないが，胎土・焼成とも特殊系のそれと同一のものである。

6—2（図95）は，墳丘下より出土したもので，甕形土器の底部と考えられる。外面は縦の箆削りがみられ，焼成後の穿孔がなされている。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

6—3（図96）は，墳丘下よりバラバラに出土したもので，推復元である。

口径は9.7cmを，推定器高は23cmを測る。上にいくに従って穏やかに外反してゆく長頸の頸部を有し，胴部は算盤玉状を呈する。胴部には2本の貼り付けがあり，断面形は楕円形を示す。凸帯がつけられている。底部は，焼成前による穿孔がなされている。整形痕は，器面の風化が著じるしく詳細は観察できなかった。

胎土は細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系のそれと同じである。

第7節　7号墳墓

6・8号墳と溝を共有してその間に造られている方形墳である。

墳丘は，地山を方形に整形して築かれており，盛土はほとんど認められなかった。

頂上平坦部は東西7m，南北8.5mで，墳丘の東・南斜面には葺石が施されている。墳丘の規模は，葺石底部を墳丘裾と考えると東西12m，南北11m，高さは平坦部まで2.6mを測る。

南・北側には，それぞれ墳丘を区画する尾根と直交して掘られている溝がある。溝は，南側が8号墳と，北側が6号墳とそれぞれ共有する形に掘られている。これらの溝は，7号墳築造時のものであるのか，6・8号墳築造時のものであるのかは断面観察からは判然としない。しかし，北側溝には6号墳の葺石が，南側溝には7号墳の葺石がそれぞれ落ち込んでおり，このことから考えると北側溝は6号墳に，南側溝は7号墳築造時に掘られた可能性が強い。

葺石は，墳丘斜面東側と南側に「」型に葺かれている。東側の葺石は北より南へ下降ぎみに葺かれているが，その長さは東南隅より約5.50mで北東隅には達していない。南側の葺石は南東隅に近い部分は摩り落されているが南東隅より約3.20mで終っており，東側の接合部と西端部のレベルは西端部の方が40cm高く葺かれている。

葺石の積み方は，比較的安定した径30cmくらいの山石を斜面に沿ってヨコ長に根石を置き，さらにその上部に幅40～50cmに平坦部へ向けて積み上げられている。

1. 石　棺　墓

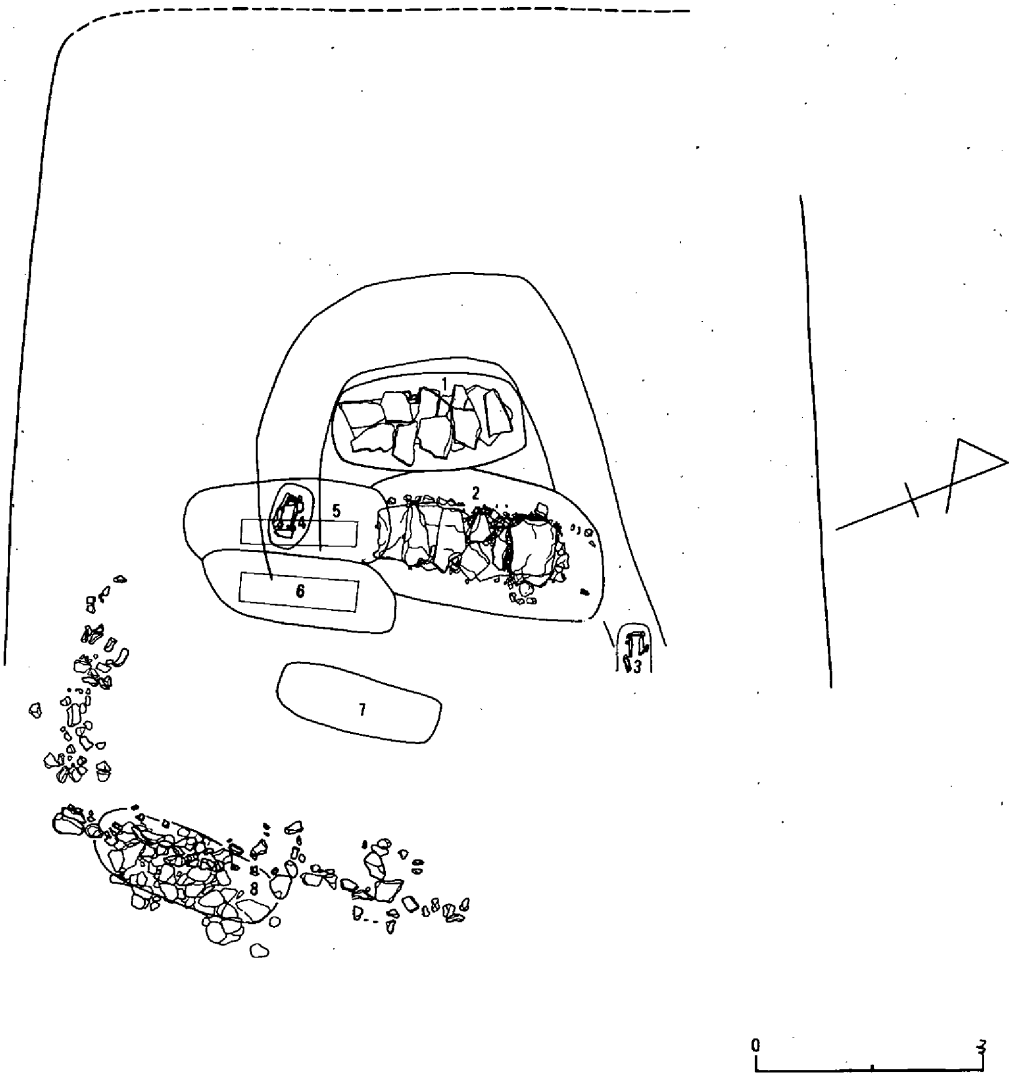
7－1（図41）（図版16－1，2）

7号墳第1主体の箱式石棺は，墳丘の中央部に位置し，尾根に平行して構築されている。

土壙は，表土より深さ約0.95mに素掘りしたもので，地山（赤褐色粘質土）を2段に掘り込んでおり，南北に長い隅丸長方形を呈している。南北の長さ2.50m，東西の長さ1.25mで，やや傾斜をもたせて地山を掘り込み，土壙上面から深さ0.30mで平坦となっている。平坦部は幅25～30cmで，中央に行くに従ってゆるやかに傾斜している。この平坦面の中央部にさらに長さ1.90m，幅0.67m，深さ0.32mの長方形の壙を掘って石棺を埋置するところとしている。平坦部には，径約3cmのバラスを少量ではあるが全域に敷いている。

石棺は，長・短側石・天井石・底石とからなっており，すべて板石を使用している。長側石は東・西ともに3枚で，短側石は各々1枚，厚さ約7cmのいずれも形を整えた板石をヨコに長くたて並べている。棺の内法は，長さ1.63m，北端幅0.41m，南端幅0.42mを測る。棺の各側石は，土壙底よりさらに石材を安定さすために深さ約10cmの溝を掘り込んでおり，特に南北の短側石は深く掘り込んでいる。長側石と短側石の組み方は，南・北ともに長側石の内側に短側石を置くいわゆる「H」状に組まれている。棺底は南・北側ともほぼ等しい高さとなるように3枚の板石を敷いている。これらの底石は，側石より厚さの薄いものを使用している。底石は側石を組んだ後にはめ込んだように敷いており，3枚の側石の隙間にも同様の石材を詰めている。

棺を蓋する天井石は，12枚の板石で２重に蓋されており，最初に４枚を置いてその隙間を８枚の板石で覆っている。棺側石と天井石との間は，北側が南側より約５㎝高くなっているため，これを等しくするために南側には底石に使用されているものと同厚の石材を置いている。天井石を取り除くと棺内には土砂が流入しており，その状態は非常に木目の細いさらさらとした埋土で天井石直下まで埋まっていた。この埋土を取り除くと，棺底石北端に接して枕石が置かれていた。枕石は中央に不整五角



第39図　７号墳墓

形状の板石を置き，その東側には同質の四角い石材，西側には一見石斧状の河原石を置いている。棺内からはこの枕石以外に遺物は何ら認められなかった。

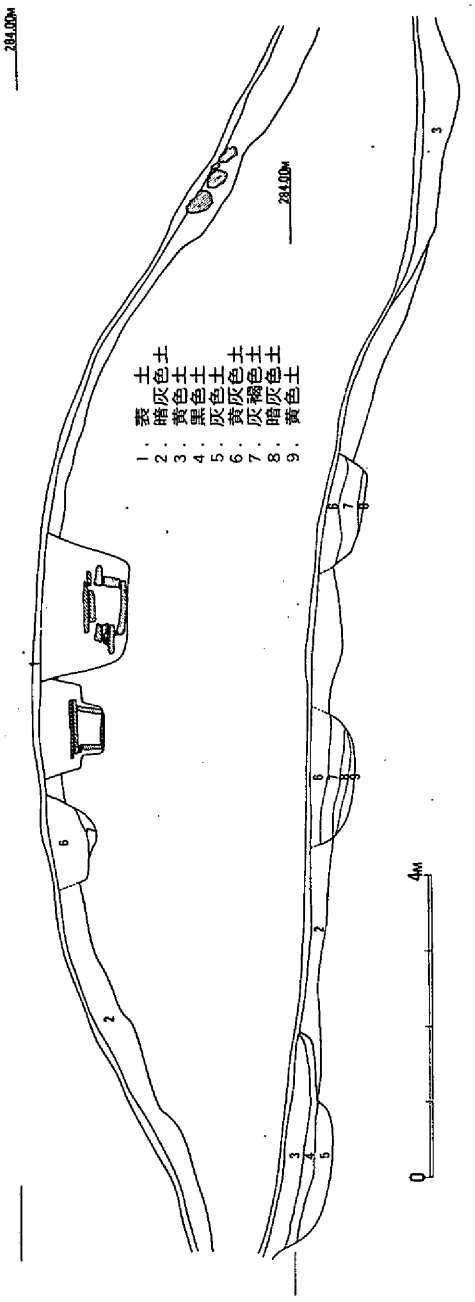
7－2（図42）（図版16－1，2）

第1主体の東側に相接するように構築されている箱式石棺である。土壙は西側において第1主体の土壙一部を切って掘られており，南北3.45m，東西1.76mの不整形な隅丸長方形を呈し，深さは中央部で1.00mを測る。

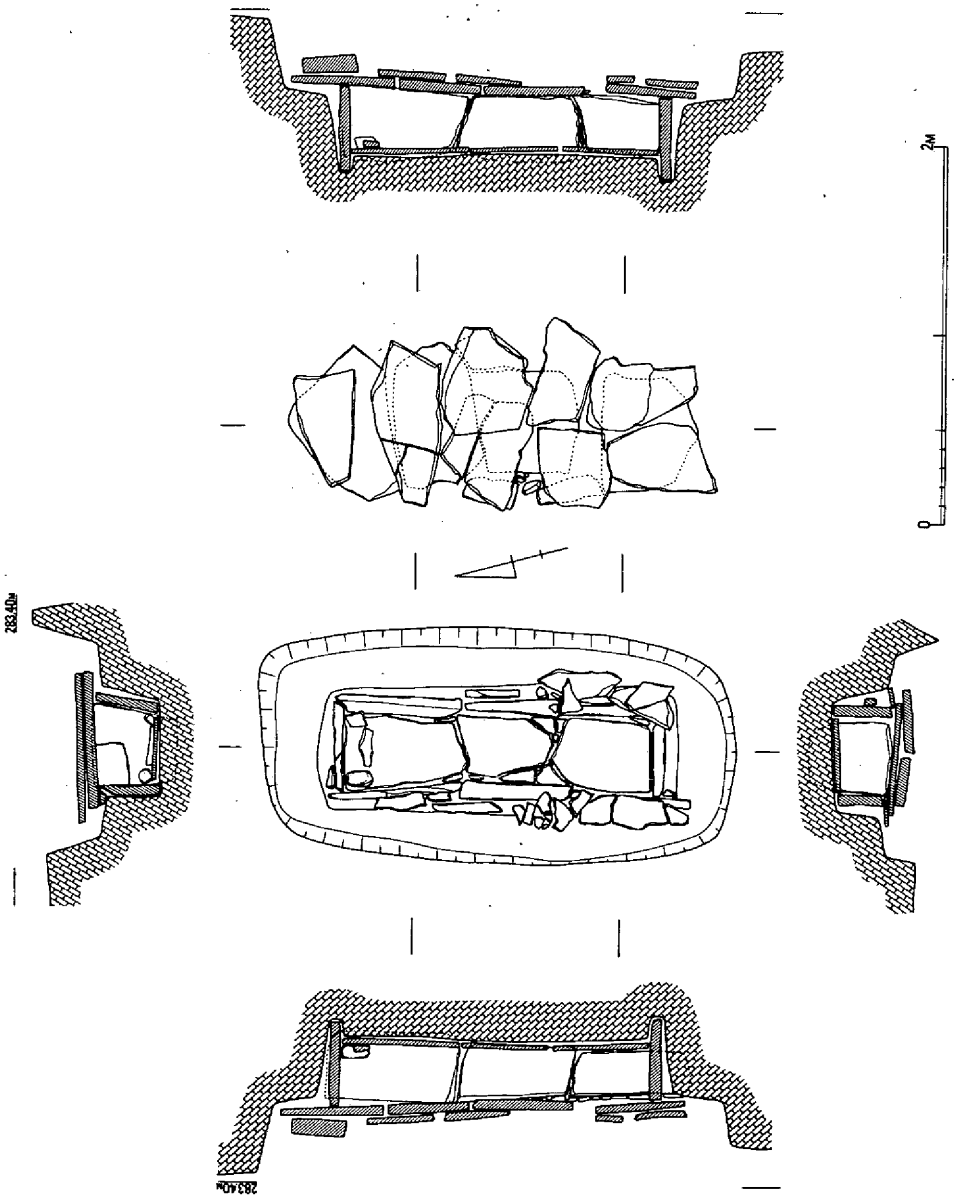
石棺は，第1主体同様長・短側石・天井石・底石とからなっているが，使用されている石材は第1主体とは全く異なる石材を使って組まれている。棺身の長側石は，西側石の一部に小口積が認められる以外は1枚石をたてているが，東側石はその大部分が3段から4段に比較的面を揃えて小口積にしている。南北の短側石は各1枚で，安定をはかるために土壙底よりさらに深く掘り込み内傾にたてている。

石棺の内法は，長さ2.08m，北端幅0.49m，中央部幅0.65m，南端幅0.46mで，天井石と底石までの深さは北端0.24m，南端0.34mを測る。石棺底部には厚さ8cm程度の石材5枚を敷き並べている。底石は側石を組んだ後にはめ込まれたのではなく長側石は底石上面より，短側石は底石の外側より組まれている。天井石は2重に蓋されている。

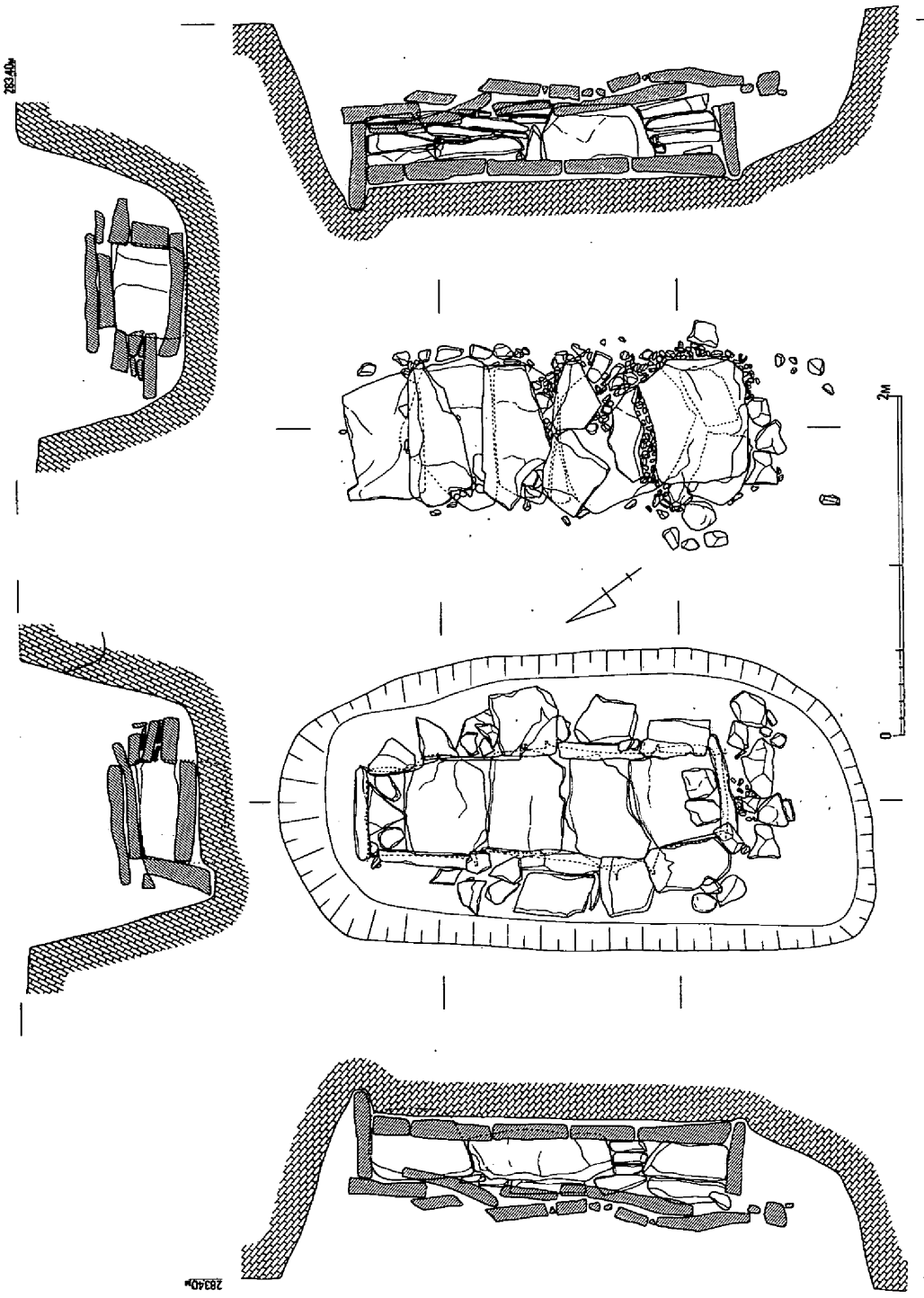
天井石の構築手法は第1主体の覆い方とよく似ているが，第2体主では2重に蓋した井石と棺身の隙間にさらに5～10cmの割石を置いている。天井石を取り除くと棺内には土砂が流入しており，天井石の内側に



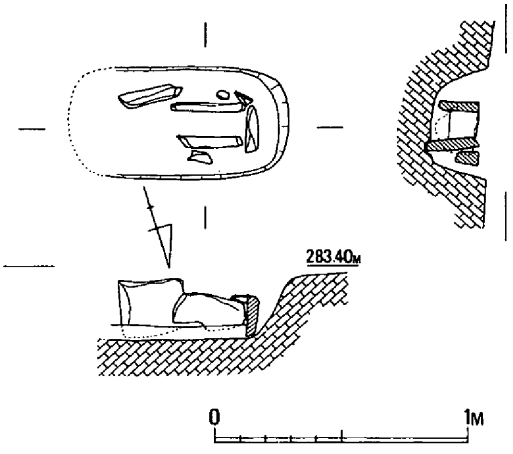
第40図　7号墳墓南北・東西墳丘断面



第41図　7号墳墓第1主体



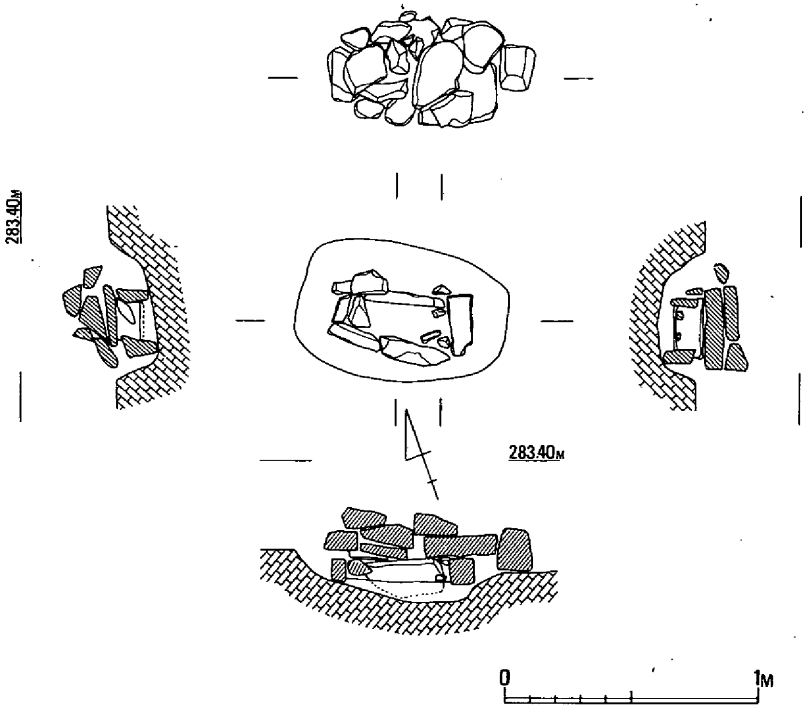
第42図　7号墳墓第2主体



第43図　7号墳墓第3主体

はベンガラが塗られていたが，その他の部分には認められなかった。

棺内には何ら遺物は認められなかったが，南，北両側石端には枕石が置かれていた。南側の枕石は第1主体と同じように中央に逆三角形の平石を置き，その両側には拳大の河原石を置いている。北側の枕石は石棺使用と同質の石材を2個，頭部を固定さすような状態で1対が置かれていた。石棺の平面プランは，中央が胴張状に造られているので最初から2対交互に同一埋葬を目的として構築されたようである。なお，土壙内埋土より弥生時代後期の土器片が出土している。

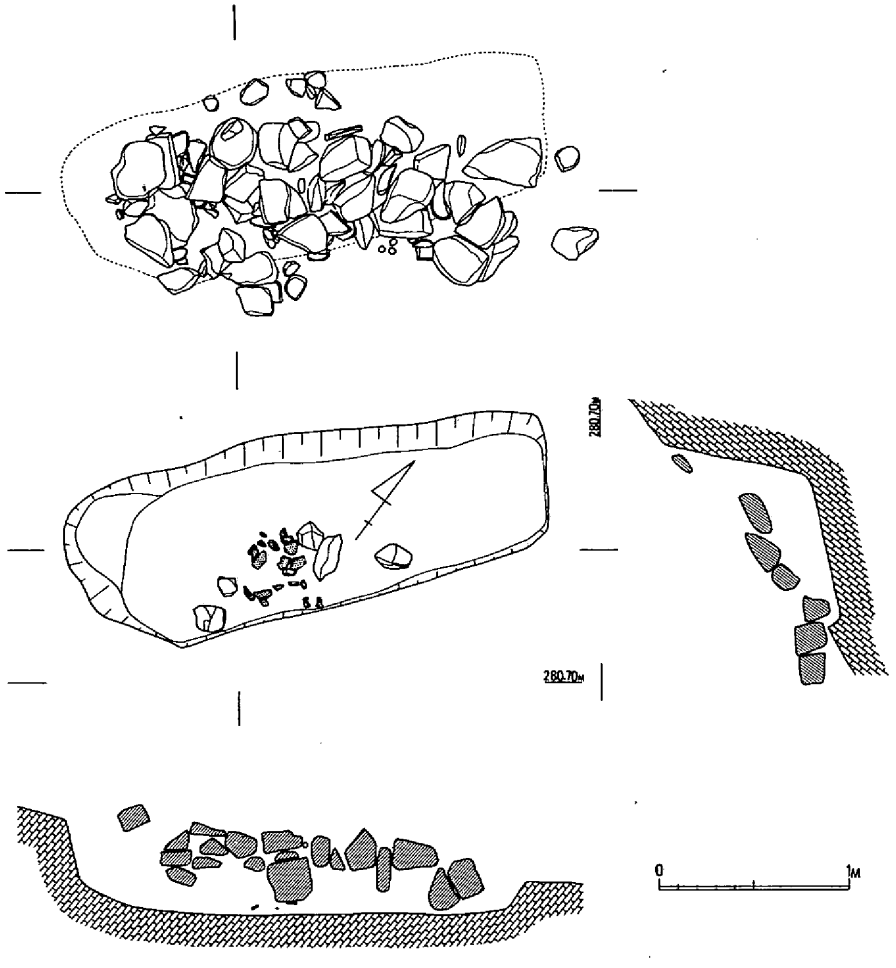


第44図　7号墳墓第4主体

2. 小　児　墓

7－3（図43）（図版17－3）

第3主体の小型箱式石棺は，第2主体の北側に接して東西に主軸を置いて構築されている。表土下10cmと非常に浅い位置で検出された。土壙は東端部が破壊されているので，全長は判らないが幅は0.45mを測る。土壙および石棺は，東側の側石が抜き取られているため正確な石棺の構造は判らないが，石棺の残存部から推定して長側石は南北とも2枚，短側石は各1枚で棺身を構成していたようである。石棺の内法は，長さ約0.50m，幅0.10mを測る。天井石はすでに取り去られているが，他のこの規模の石棺から考えて1～2重に蓋されていたと考えられる。棺底は土壙底石などは認められない。



第45図　7号墳墓第8主体

7－4（図44）（図版17－1，2）

この小型箱式石棺は，第2体主の南側に主軸をほぼ東西に置いて構築されており，第2主体の箱式石棺の主軸とは直交している。

土壙は石棺の大きさよりやや余裕をもたせて掘られており，東西0.83m，南北0.54m，深さは検出面より0.17mを測る。石棺は，南・北長側石とも2枚の丸みを帯びた不整形な石材を使用している。短側石は東西とも1枚で，西短側石は南・北側石の内部に，東短側石は南・北長側石の外側に組まれている。天井石は2重にその隙間を覆うように積まれており，さらにその隙間に拳大の割石を塞めている。

石棺の内法は，東西0.42m，南北0.15m，天井石直下から棺底まで，0.11mを測る。石棺底部には底石は認められない。

石棺内には遺物は何ら認められなかったが，東短側石に近いところで南・北長側石に沿って各々約5cmの石材が認められたので枕石に使用していたものであろう。

3. 墳丘下埋葬

7－5（図46）

土壙掘り方は，2m82cm×？cm，深さ56cm木棺は1m69cm×33cmを測る。方位はN－E28°をとる。南短側部分を二段掘りとし，土壙北よりの掘り方に礫が存在する。なお7－6と重複している。

7－6（図46）

土壙掘り方は，2m65cm×？cm，深さ92cm棺は1m61cm×43cmを測る。方位はN－E23.5°をとる。棺中央南よりの長側に沿う棺上より台付長頸壺が出土している。7－5と重複している。

7－7（図46）

土壙掘り方は，2m24cm×60cm，深さ36cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。しかし，土壙掘り方の状態からすれば，木棺を埋置していたものと考えられる。方位はN－E33.5°をとる。

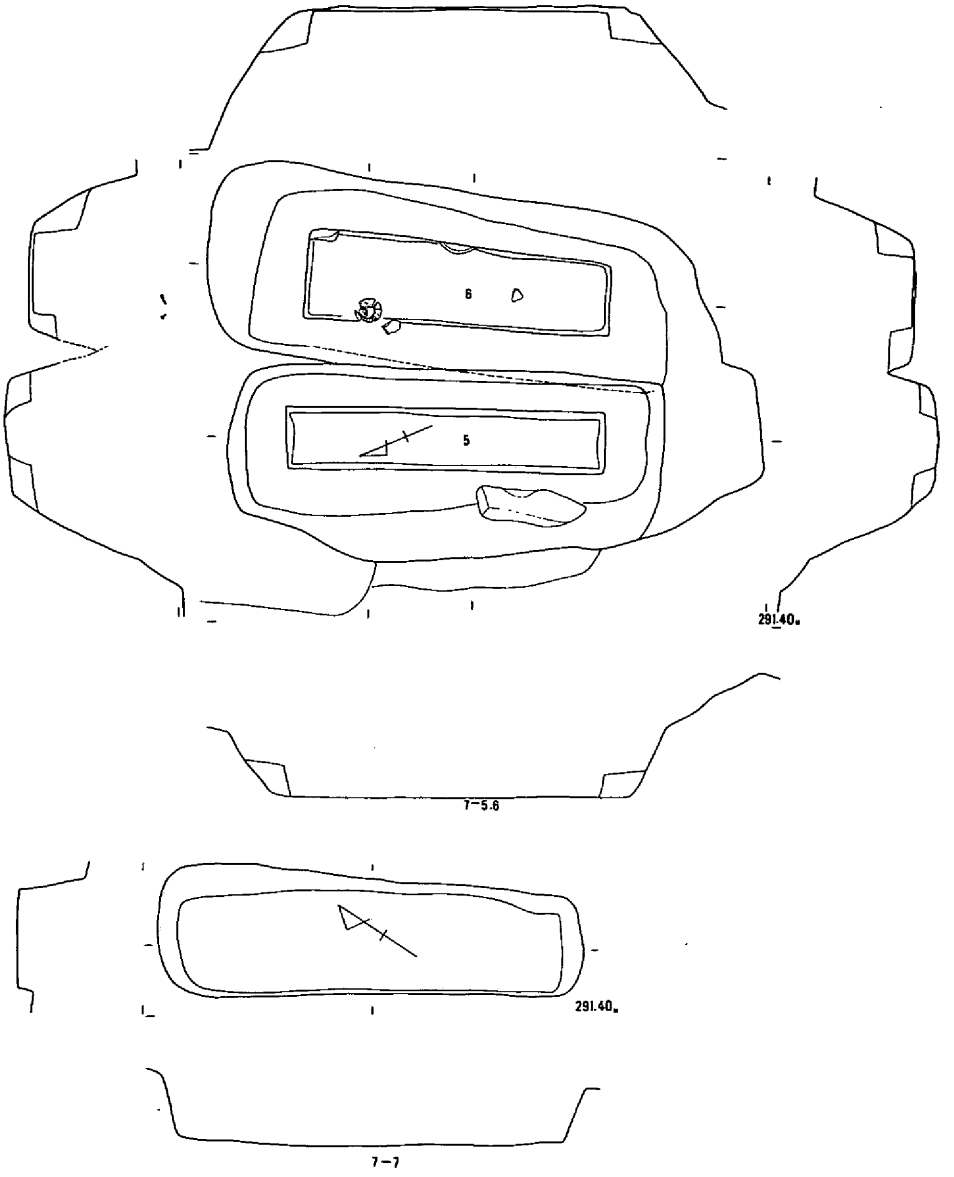
7－8（図45）（図版16－3，4）

7号墳の東斜面において，地山検出時に葺石基底部よりさらに下方で長さ2.20m，幅0.70mの範囲に多数の石材が認められた。発掘当初は葺石が滑り落ちたものと考えていたが，石材の外側には土壙らしき落ち込みが認められ，さらに精査を行なったところ土壙墓の存在が確認された。

土壙は，尾根の斜面に平行して掘り込まれており，長さ2.55m，幅0.94m，深さは西側0.78m，東側0.10mを測る。土壙壁は，傾斜をもたせて掘り込まれており，土壙底は西端より東側へ約10度傾斜している。

土壙上面には，10～30cmの山石を土壙内全域に置いている。これらの集石は，土壙主軸より6度斜面下方に滑り落ちた状態で検出された。その置き方は斜面の傾斜に応じて置かれていたようである。土壙内には木棺痕跡等は認められなかった。

遺物は，土壙内中央部南寄りにおいて，土壙底部より平均5cm上部で弥生時代後期の甕1個が土圧で押しつぶされた状態で検出された。



第46図　7号墳墓墳丘下埋葬主体

4. 出土遺物

7－1（図95）は7号墳の北の溝底面より出土したものであるが，出土位置からすれば，6号墳墓に伴なうものと考えられる。

口径11.5cm，器高17cmを測る丸底の甕形土器である。頸部はくの字に屈曲し，単純口縁をつくり，胴部は球形を呈する。外面は，斜めの細い櫛のあとから横位の条線間隔が広い櫛状工具による整形される。内面の胴部上半は，横位の篦削りが，下半は斜めの篦削りがなされ，底部は押圧のあと篦削りを行なっている。

胎土は石粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示し，胴部にはススの付着が認められた。

7－2－1（図95）

第2主体墓壙内より出土した口縁部である。口縁端部を上下に拡張し，端面には凹線を施こしている。胎土は石粒を含み，焼成はやや脆い。色調は褐色を示す。

7－2－2（図95）

第2主体の墓壙内より出土した底部である。胎土・焼成・色調とも特殊系のそれと同じである。

7－6－4（図96）

棺上より出土したもので，推定復元である。口径8cm，器高約35cm，台部径10cmを測る台付長頸壷である。頸部は鶴首状を呈し，上方で外方へ開いてゆき，凹線を施こす。胴部は算盤玉状をなす。台端部は被厚させた屈曲部をつくり，1の端面上下に沈線を2本施こす。台脚部には2段に渡って竹管による刺突をめぐらし，その下に6本の平行沈線を施こしている。台部には6本の櫛状工具による斜線が施こされている。

外面の胴部下半は，綾杉状になる篦磨きがなされている。内面頸部は篦削り，胴部屈曲部は押圧痕，台部は横位の櫛削りのあと横位の篦削りがみられる。

なお，竹管の刺突は貫通していない。胎土は細砂及び乳白色の粒子を含み，焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

7－8－5（図96）

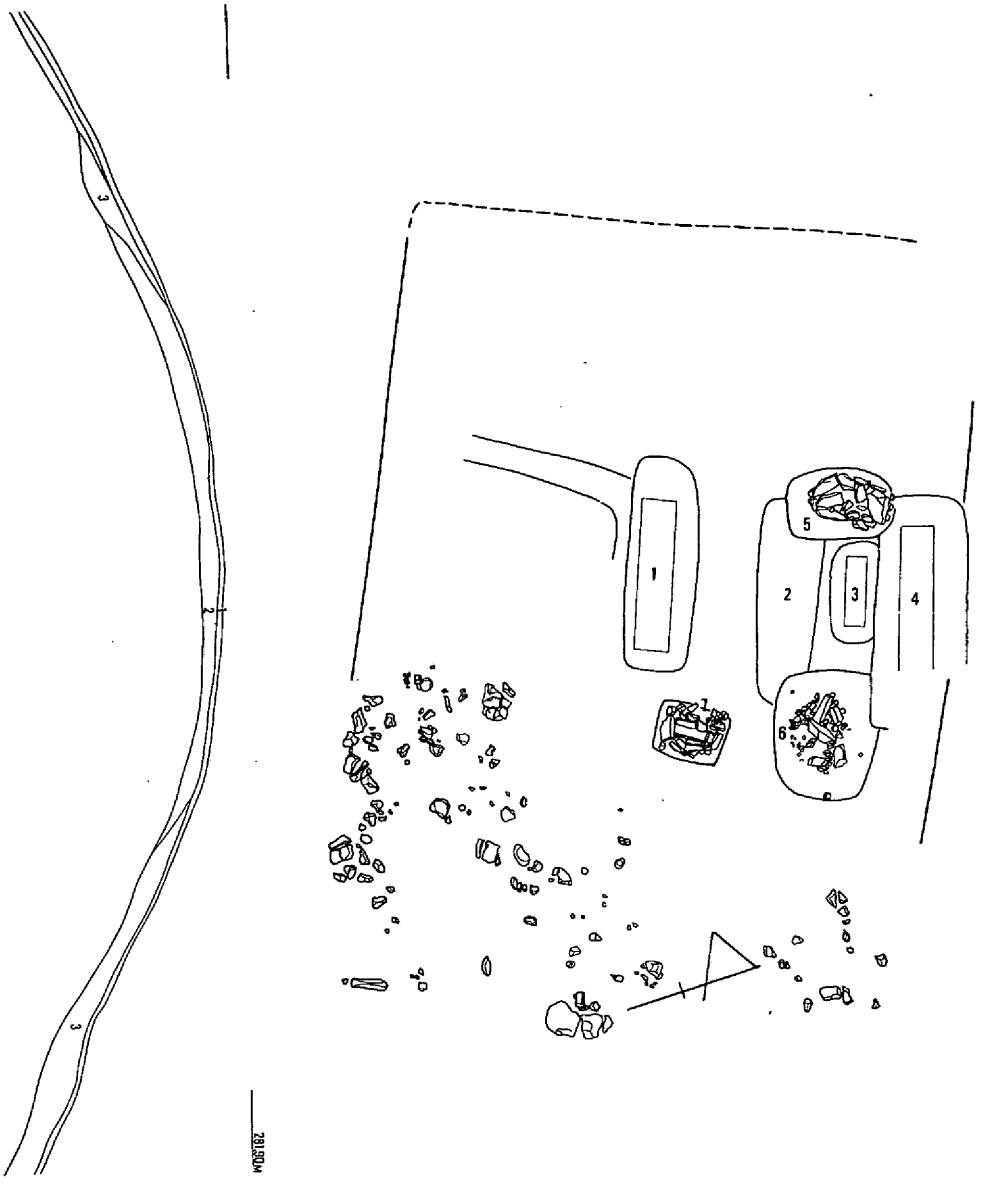
第8主体土壙内より出土したものである。口径17.8cm，器高約25cm，底部径6.8cmを測る甕形土器である。口縁端面には凹線を施こし底部は外からの打撃による穿孔がみられる。整形痕等については，内外面の剝離が著しいため観察できなかった。

胎土は石粒（2mm～5mm）を多く含み，色調は暗茶褐色を示す。

第8節 8号墳墓

8号墳は7・9号墳の間に造られており，7・9号墳とは尾根に直交して掘り込まれた溝によって画されている。

墳丘は，尾根頂上部を整形して方形状の平坦部を造っているようで，東西6.2m，南北6mを測る。

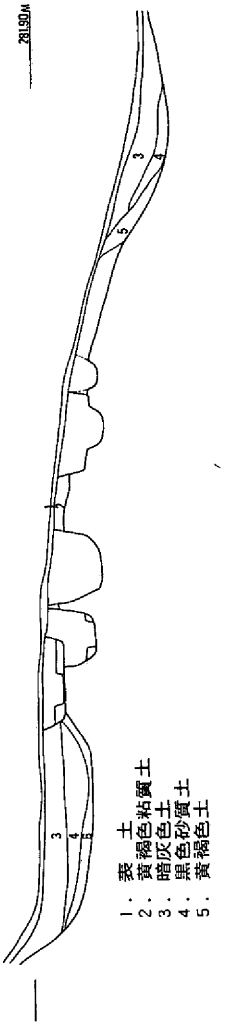


第47図　8号墳墓

墳丘の規模は，墳頂部より下がった東・南斜面には葺石があり，葺石基底部のレベルで規模を測ると東西10m，南北9.5m，高さ1.7mの方形墳となる。

墳丘を区画している南・北溝は，北側が幅2.9m，深さ0.60m，南側が幅3.2m，深さ0.55mで，溝底は北側が南側より約1m高い。南・北両溝は，墳墓を巡るような周溝ではなく尾根主軸と直交して一直線に掘り墓域を画すると言うものである。これらの溝は7・9号墳と共有しており，どの墳墓に伴うものであるかは断定しがたい。しかし，北側溝については7号墳においても記述したごとく，溝底部に7号墳の葺石が滑り落ちていること，また8号墳第4主体は溝が埋まった時期に築かれていること等から考えて，北側溝は7号墳構築時に掘られたとみて大過なかろう。

墳丘の東・南斜面には葺石が存在する。葺石は，急斜面に設けられているので滑り落ちたものも多くその全貌はつかめないが，残存部の状況からみて「」型に葺かれていたと考えられる。東側はほぼ全域に約0.7mの幅で葺かれていたようである。南側の葺石は斜面全域には認められず，南東隅より約3mで終っており，葺石が終っている場所よりは溝が掘られているので東側斜面は葺石，墳墓と墳墓が接する南側斜面は溝と言うようにその使用を分担して墳域を区画していたようである。



第48図　8号墳墓南北墳丘断面

1．木　棺　墓

8－1（図49）

8号墳墓のほぼ中央に位置し，第1主体と考えられるものである。土壙掘り方は2m81cm×1m12cm，木棺は底がU字状になることから割竹形木棺の埋置が考えられる。規模は2m4cm×50cmを測る。方位はN－W67.5°をとる。割竹形木棺は，二段掘りによってなされ，棺西短側よりに礫が置かれている。

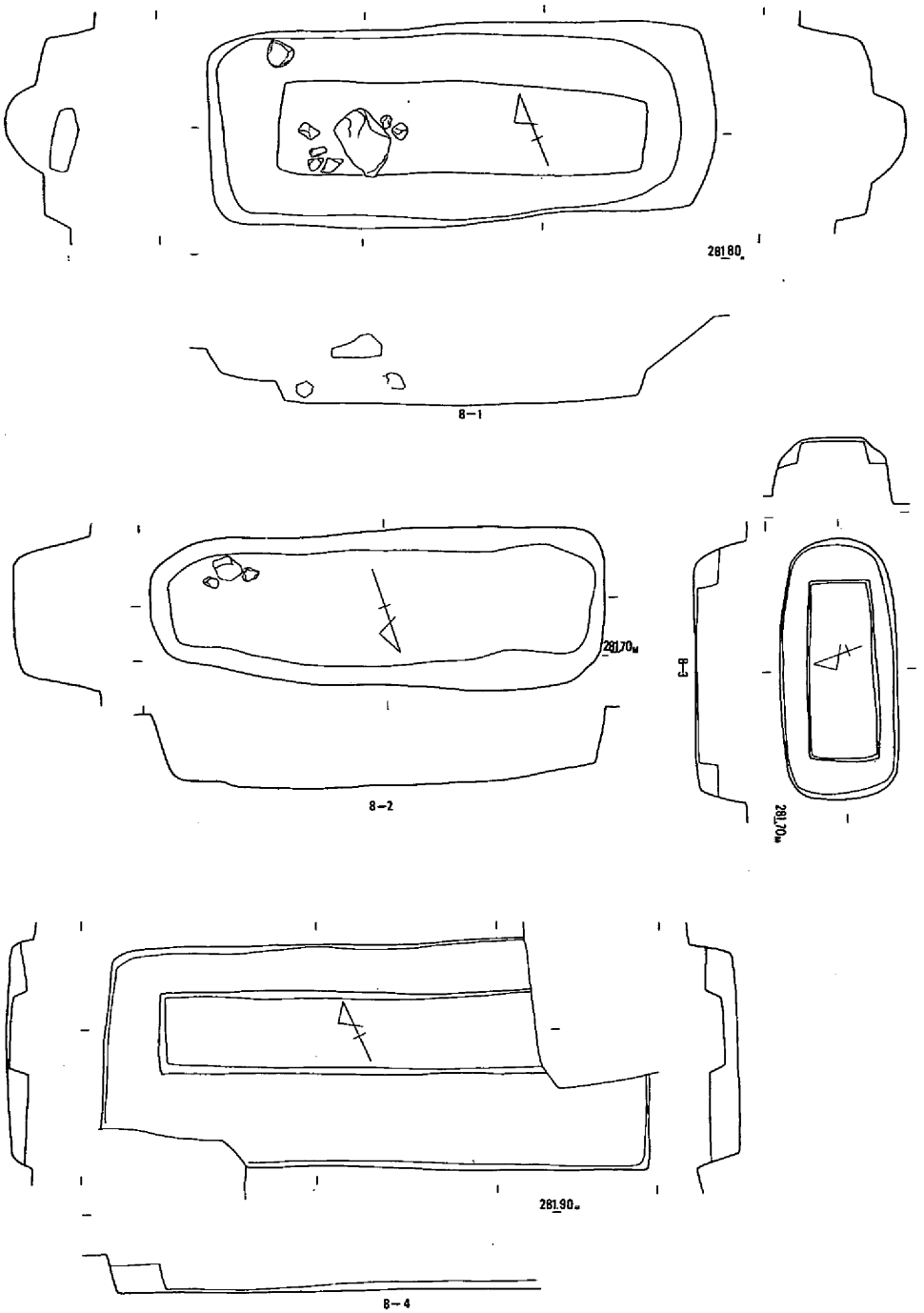
8－2（図49）

土壙掘り方は，2m51cm×85cm，深さ44cmを測る。木棺痕跡が確認されなかった。方位はN－W72°をとる。東短側際に礫が存在する。第5主体に切られ，第6主体を切る。

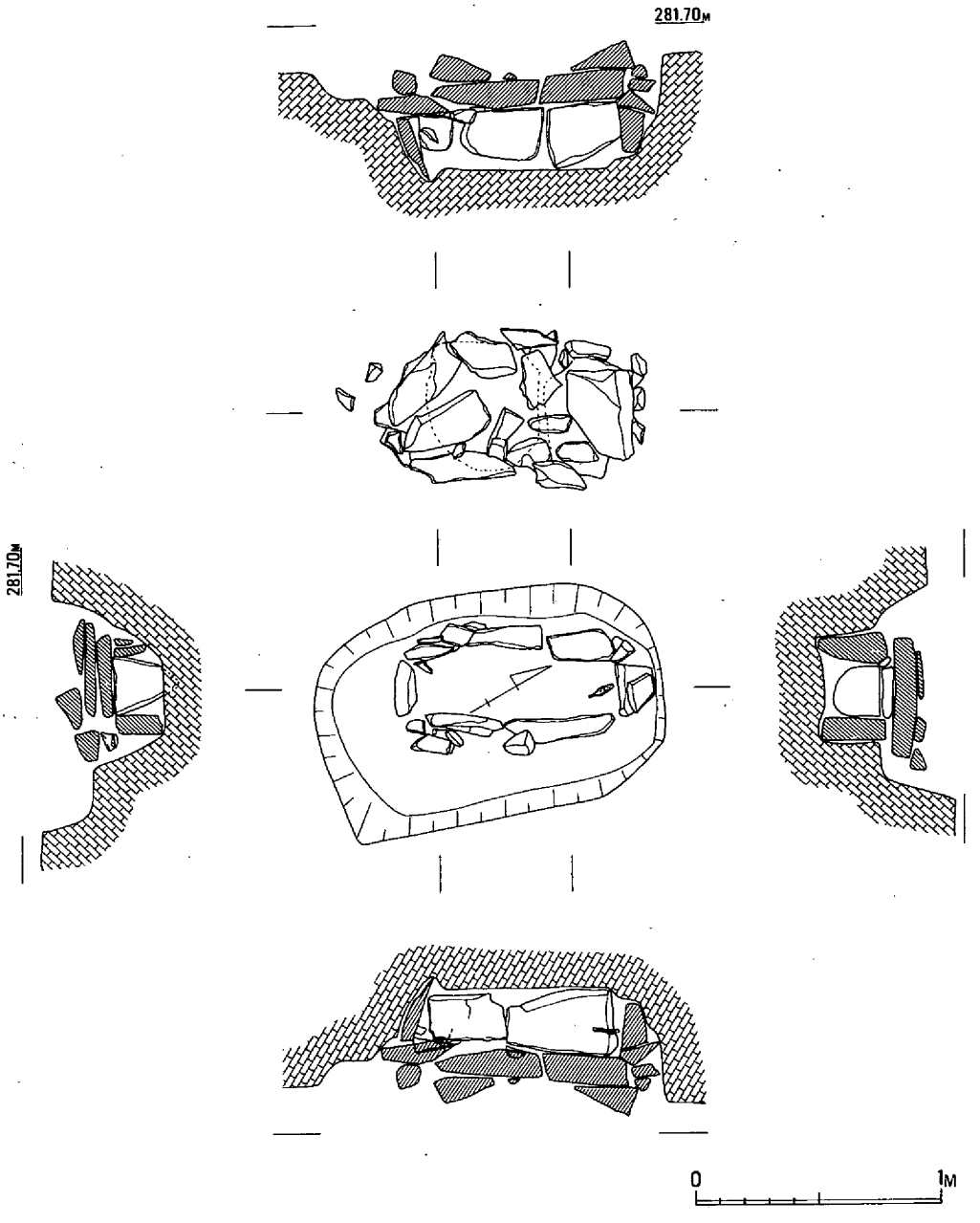
8－3（図49）

土壙掘り方は，1m47cm×65cm，深さ38cm，木棺は1m1cm×40cmを測る。方位は，N－W71°をとり，第4主体に切られる。

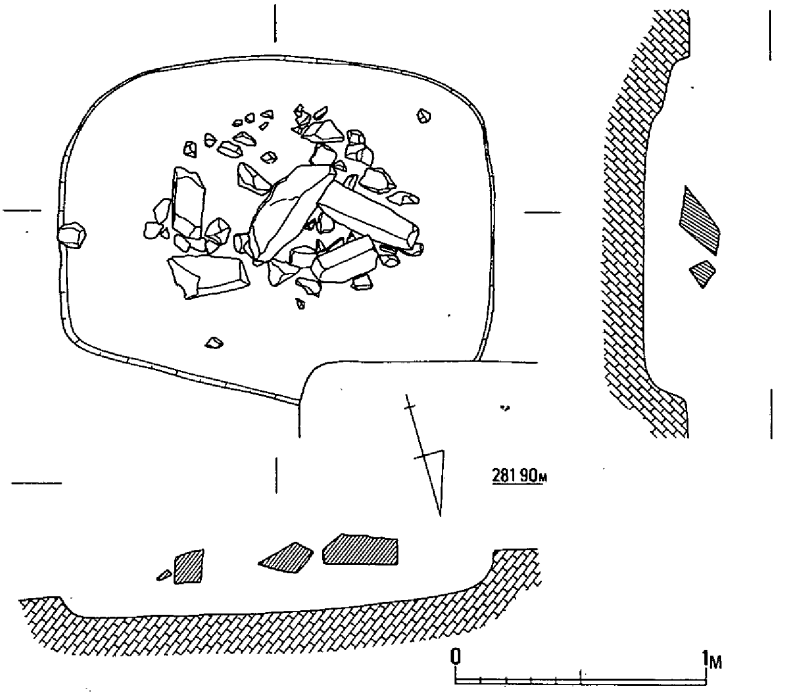
8－4（図49）



第49図　8号墳墓第1・2・3・4主体



第50図　8号墳墓第5主体



第51図　8号墳墓第6主体

土壙掘り方は，3m 1cm×1m22cm，深さ15cm，木棺は，？×44cmを測る。方位はN－W65°をとる。

第3主を切って造られており，土層観察から，6号墳墓と7号墳墓の間にある溝が埋った段階で埋葬されている。

2. 小児墓

8－5（図50）

（図版18－1，2）

第5主体は，頂上平坦部の西端に主軸を南北方向に置いて構築された箱式石棺である。

土壙は2段に掘り込まれており，その長さは南北1.42m，東西0.93mの不整形な隅丸長方形を呈し，土壙底の一部には側石の安定を計るために浅い溝を掘っている。

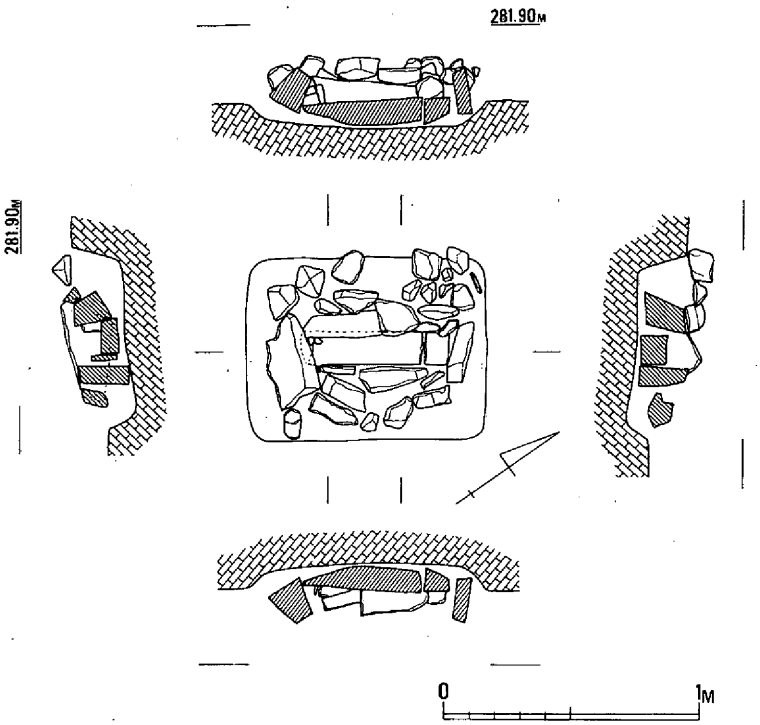
石棺は，割石状の山石で2段目の土壙いっぱいに築かれており，石棺内法は，長さ0.82m，幅0.29m，深さ0.25mを測る。東西の長側石は東側2枚，西側3枚，南短側石は1枚をたてているが北短側石は2段に積んで組まれている。天井石は厚さ11cmの扁平石を3枚並べて，さらにその上に隙間をやや小型の石で蓋している。棺床には底石などの施設は認められず，土壙底が棺床になっており，ほぼ水平に造られている。

天井石を取り除くと，棺内には赤褐色土が天井石直下まで埋まっていた。この土は非常にたたき締めたように固く，流入土にみられるさらさらとしたものではない。また，土壙埋土に使用されている土質に使用されている土質とも異なるのでおそらく石棺構築時には土を入れ天井石を蓋していたと考えられる。

遺物は，棺内北短側石に近い位置に刃部を南北に置いて鉄鏃1個が置かれていた。鉄鏃は刃先端より3.5cmのところでU字型に折り曲げられており，検出レベルも棺底より約16cm，天井石直下より10cmの位置で，棺内埋土中に置かれていた。

8－6（図51）

第2主体の東側に平行して造られた小型箱式石棺と考えられる。



第52図　8号墳墓第7主体

石棺は，表土下5㎝と非常に浅い位置で検出された。検出時の石棺は，東短側石以外は構築時の状態を保っておらず，従って石棺の構造は不確な部分が多い。

土壙は，東西1.70m，南北1.31m，深さ0.15mを測り，石棺よりもはるかに大きく掘られている。南北の長側石は，石材の散乱状態から推定して2枚ずつ並べてたてていたようである。東西の短側石は，東側が1枚なので西側も同様に1枚であったと考えられる。石棺の外側には径5～15㎝の角礫が多数遺存しているので，棺側石の押えとして裏込め石に使用されていたようである。底石および天井石については盗掘されているのでその構造は判らない。

8－7（図52）（図版18－3）

第1主体の東側に主軸を南北に向けて構築されている小型箱式石棺で，表土下5㎝と非常に浅い位置で検出されており，天井石は取り去られていた。

土壙は，南北0.92m，東西0.72m，検出面からの深さは0.10mを測る。石棺を構成する側石は，東・西は2～3枚，南・北は各1枚をヨコ長にたてて組まれている。石棺の内法は，長さ0.58m，幅0.12mを測り，棺側石の外側には東西の側石外に径10㎝くらいの割石が認められ石棺を補強している。底石は厚さ10㎝の板石2枚を敷いており，側石の内側に組まれている。遺物は何ら認められなかった。

3. 出土遺物

第6主体より出土した，壺形土器の口縁部の小片である。口縁端部を大きく外に広がる器形を示している。胎土は，石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

鉄鏃（図99－6）（図版32－6）

8号墳第5主体小型箱式石棺内より検出さされている。

いわゆる平根式であるが，刃線は内にカーブする柳葉状にはならない。剣先のような形をしており，あるいは鉄剣を目的として造られたのかも知れない。鏃部から茎部への移行は段を持たずに狭められている。全長約13.2㎝，刃部長10.5㎝，刃部中央部幅２㎝，厚さ0.25㎝，茎部厚さ0.5㎝を測る。

第9節　9　号　墳　墓

８号墳と10号墳の中間に造られている方形墳である。

墳丘の頂上平坦部は東西7.2m，南北８m，南・北側には８・10号墳と墳域を区画する溝が掘り込まれている。東側と南側一部の斜面には葺石が施されているが，西側斜面には何ら墳域を表わす施設は認められずそのまま谷部へ下降している。

墳丘の規模は，東西10.5m，南北11m，高さは葺石基底部より約1.7mを測る。

葺石は，横見墳墓群中において一番良く遺存していた。東・南側斜面に葺かれているがいずれも全域ではなく，南東隅を中心に「」型に葺かれている。東側葺石と南側葺石が接する南東隅は，直角ではなく隅丸に葺かれている。葺石の幅は平均70㎝で，石の大きさは10～20㎝のものが大半をしめており，東端より南側へ移行するに従って大型の石を葺いている。

1．木　棺　墓

９－１（図61）

９号墳墓の中央に位置し，メインと考えられる。土壙掘り方は，３m78㎝×66㎝，深さ53㎝を測り，木棺痕跡は確認されなかった。方位は，N－W38°をとる。北短側に接し礫が存在する。

９－２（図61）

９－１の東に位置する。土壙掘り方は，２m22㎝×76㎝，深さ62㎝を測り，方位は，N－E61.5°をとる。木棺痕跡は確認されなかった。礫は，土壙上中央に存在する。

2．石　室　墓

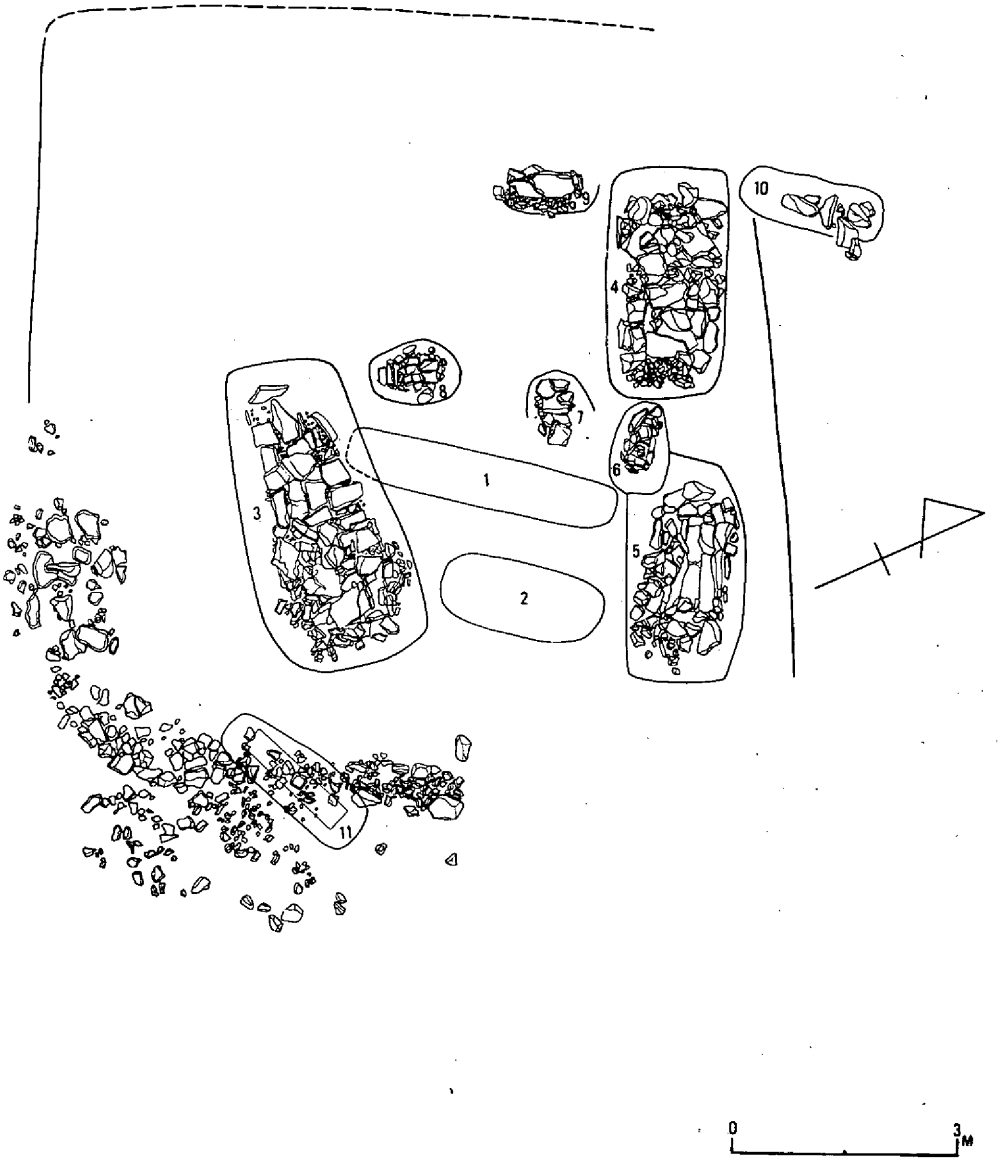
９－３（図55）（図版19－３，４）

第３主体は第１・２主体部の南側に尾根と直交し，第１主体部（土壙墓）土壙南端の一部を切って造られている。

埋葬主体は竪穴式石室で，発掘時には天井石などが露出していた。

土壙は，墳丘表土下10㎝より主軸をほぼ東西に置いて２段に掘り込まれている。その形は隅丸長方形であるが，土壙西端から東へ移行するに従って広がっている。土壙は長さ4.16m，幅1.95mで土壙検出面より0.12mで平坦となっている。この平坦部は約0.30mの幅帯で，土壙中央に向ってわずかに下降している。そして，その中央部にさらに長さ3.22m，幅1.43m，深さ0.40mの隅丸長方形土壙を掘りこの中に石室を構築している。各段の壁面はゆるやかに掘り込まれている。

石室の側石は，南北の長側石はともに３～４の板石を１～３段タテに並べ積んでいる。短側石は，



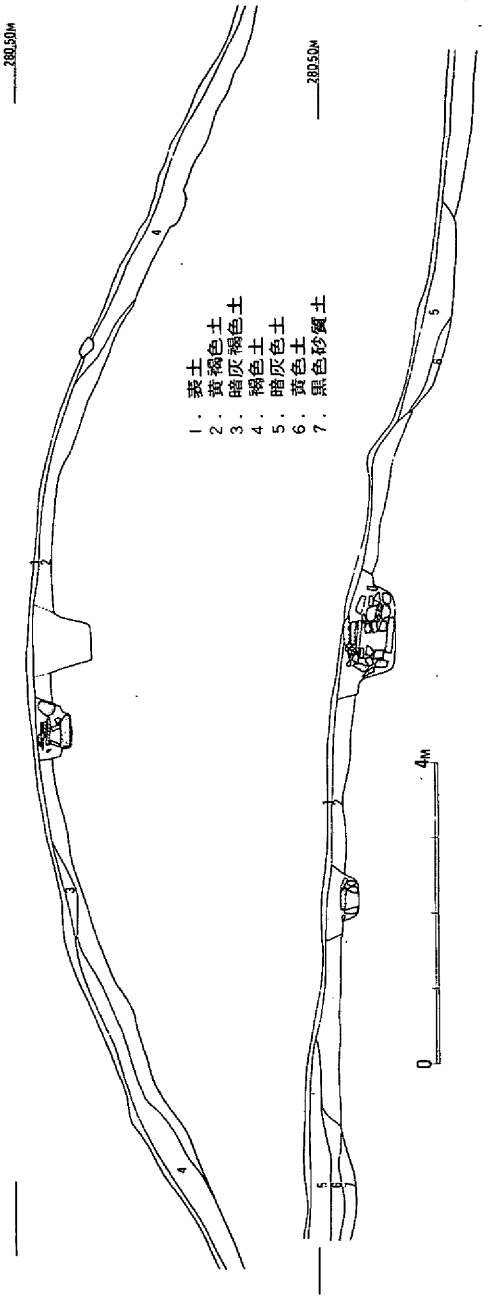
第53図　9号墳墓

東側5，西側4枚の板石を横に積む小口積手法を用いている。東西の両短側石の裏側にも板石を小口積して側石を補強している。石室底には8枚の厚さ8～15cmの大型板石を敷いており，この底石上面より石室側石が組まれている。長側石と短側石の組み方は，西側石が外および内にはめ込むといった組み方ではなく，壁と壁を合わせて枠を作ると言うような組み方を呈している。

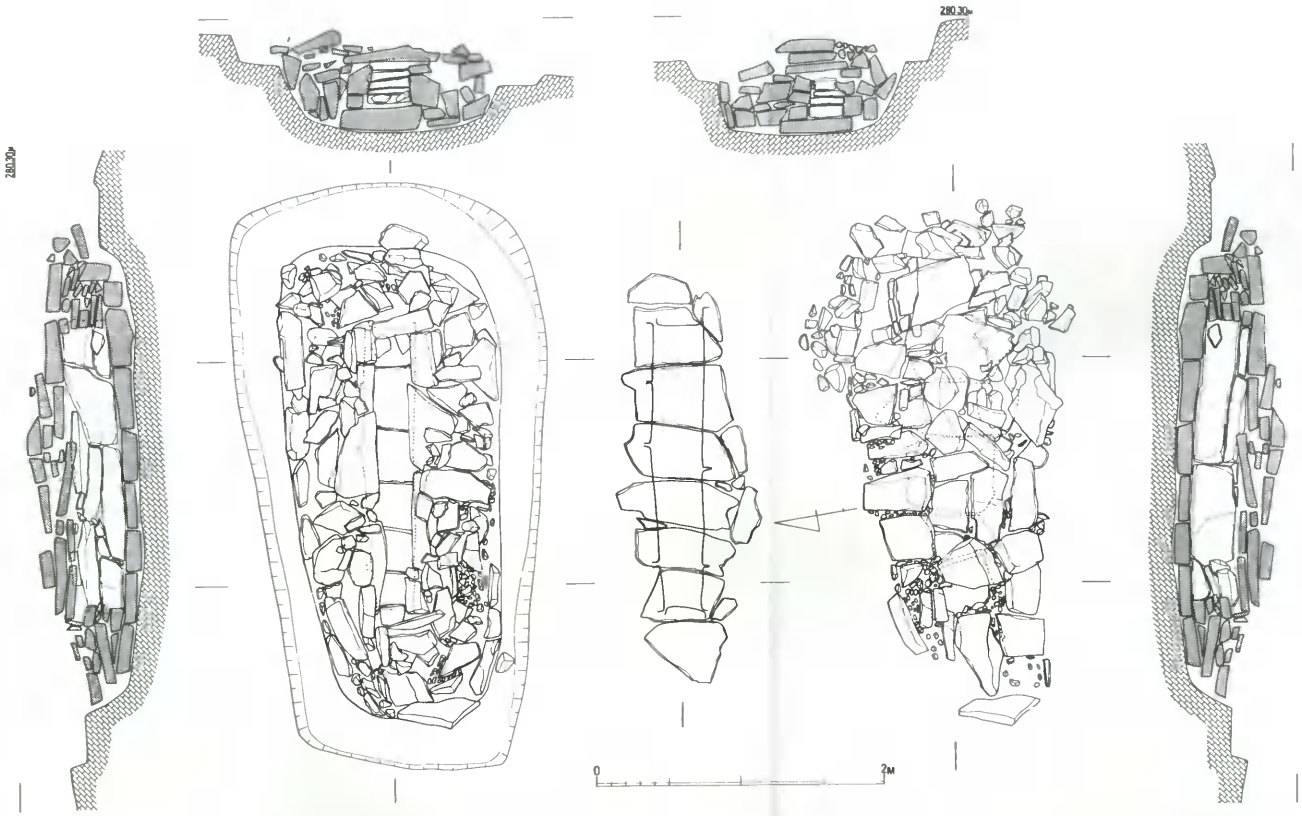
石室を蓋する天井石は，丁寧に3重に蓋されていた。まず，石室側石土をすっぽり覆いかぶせるように厚さ8～13cmの良く型の整った6枚の板石を置いており，東端に置かれている1枚は石室内よりはずれている。次に，板石と板石の隙間を同様の板石で覆い，さらにその上に板石を置いていた。3種目の板石は1・2種目の天井石の置き方とは違っており，石室主軸に対して板石の長辺に平行させて2枚ずつ置き重ねるといった大変気の配った構築をしており，さらに3種目の天井石に対応して，天井石を固定するかのように同様の板石を斜めにたて掛けている。そして，最終段階で板石の隙間に径5cmくらいの小石を埋めている。

石室側石の外側と2段目の土壙壁の間には，石室同様の石材で裏込めしている。その状態は，底石を敷いた後に無造作に掘り込んでいるのではなく，土壙壁に沿って石材をたて掛けており，石室を取り囲むように並べている。その後，不揃いではあるが板石を小口積に側石上面まで積んで裏込めを完成させている。

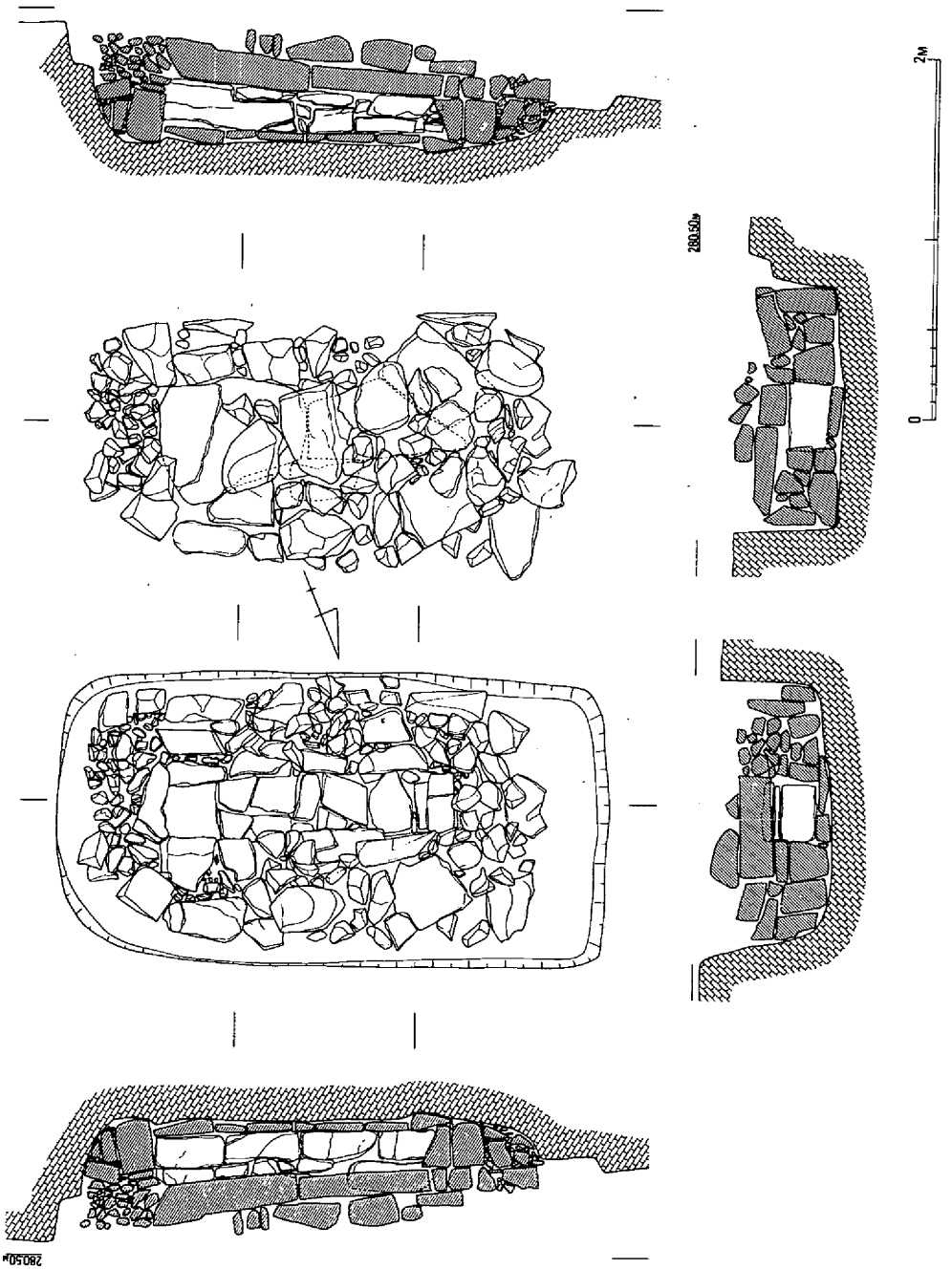
石室の内法は，長さ1.97m，東端幅



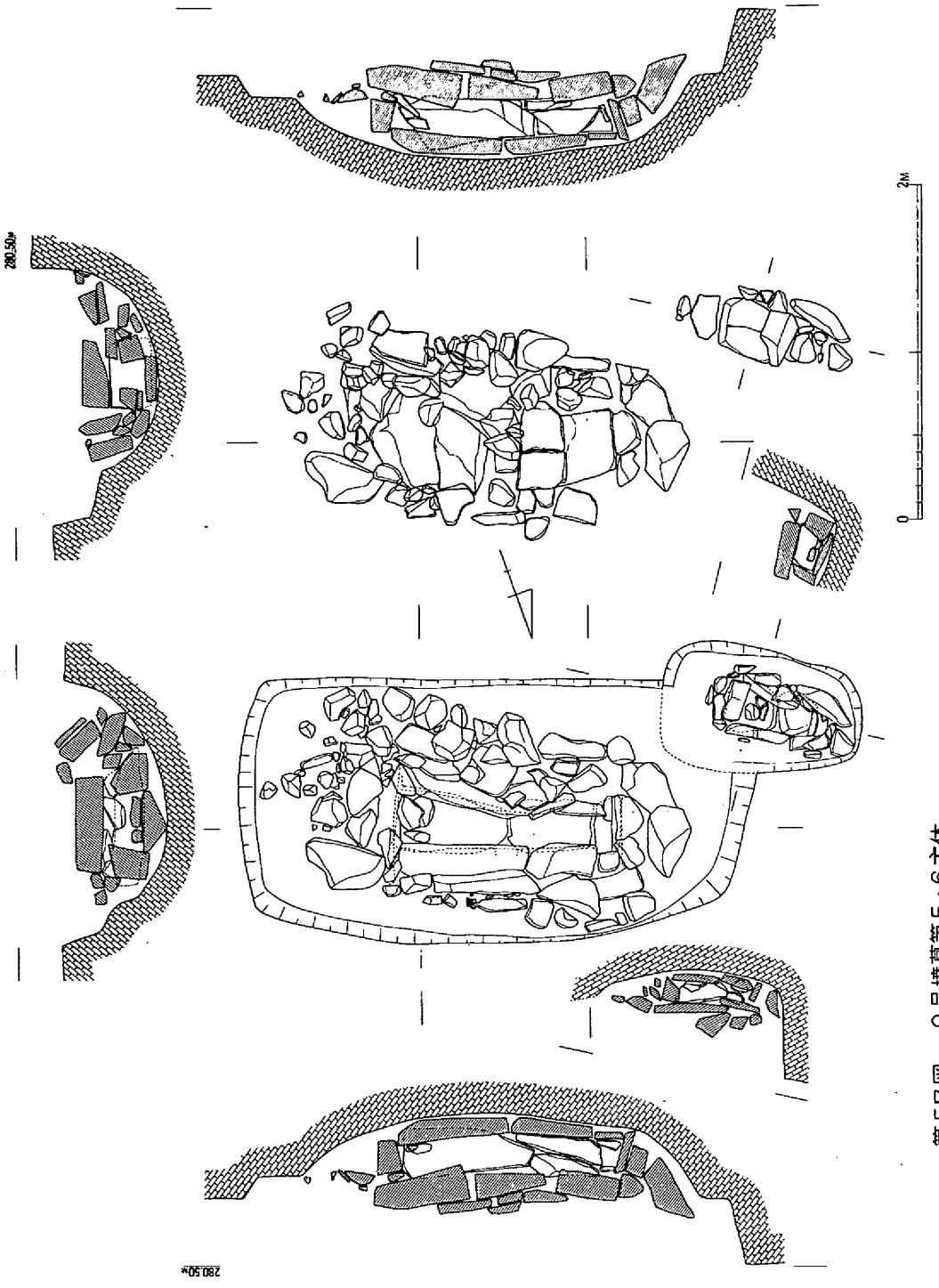
第54図　9号墳墓南北・東西墳丘断面



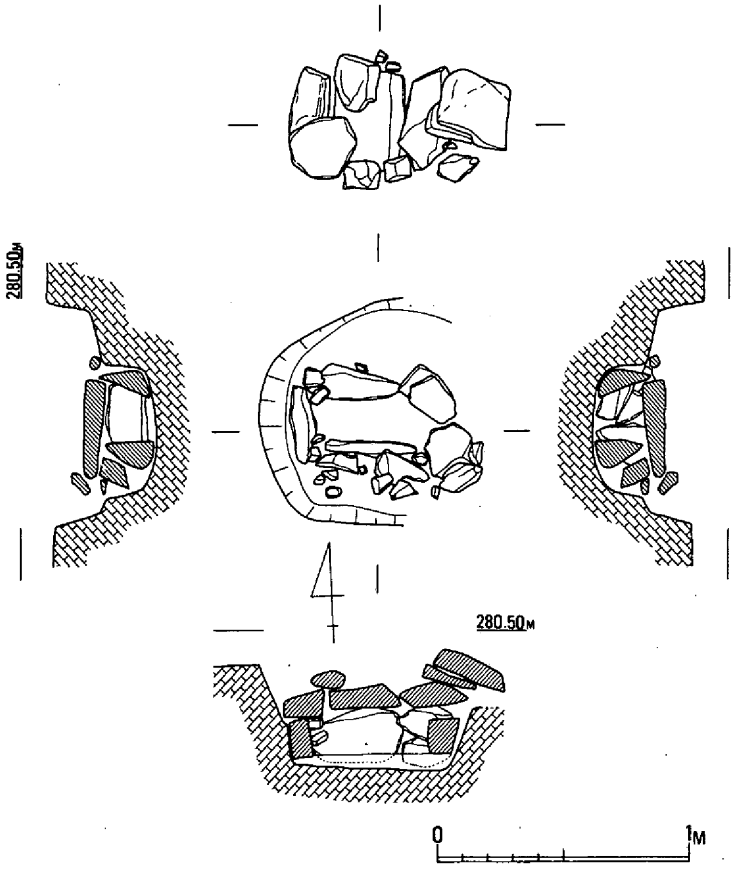
第55図　9号墳墓第3主体



第56図　9号墳墓第4主体



第57図　9号墳墓第5・6主体



第58図　9号墳墓第7主体

0.33m，西端幅0.24mを測る。石室内には，東短側石に近い位置で頭部を固定させるような状態で拳大の枕石2個が置かれていた。遺物は何ら検出されなかった。

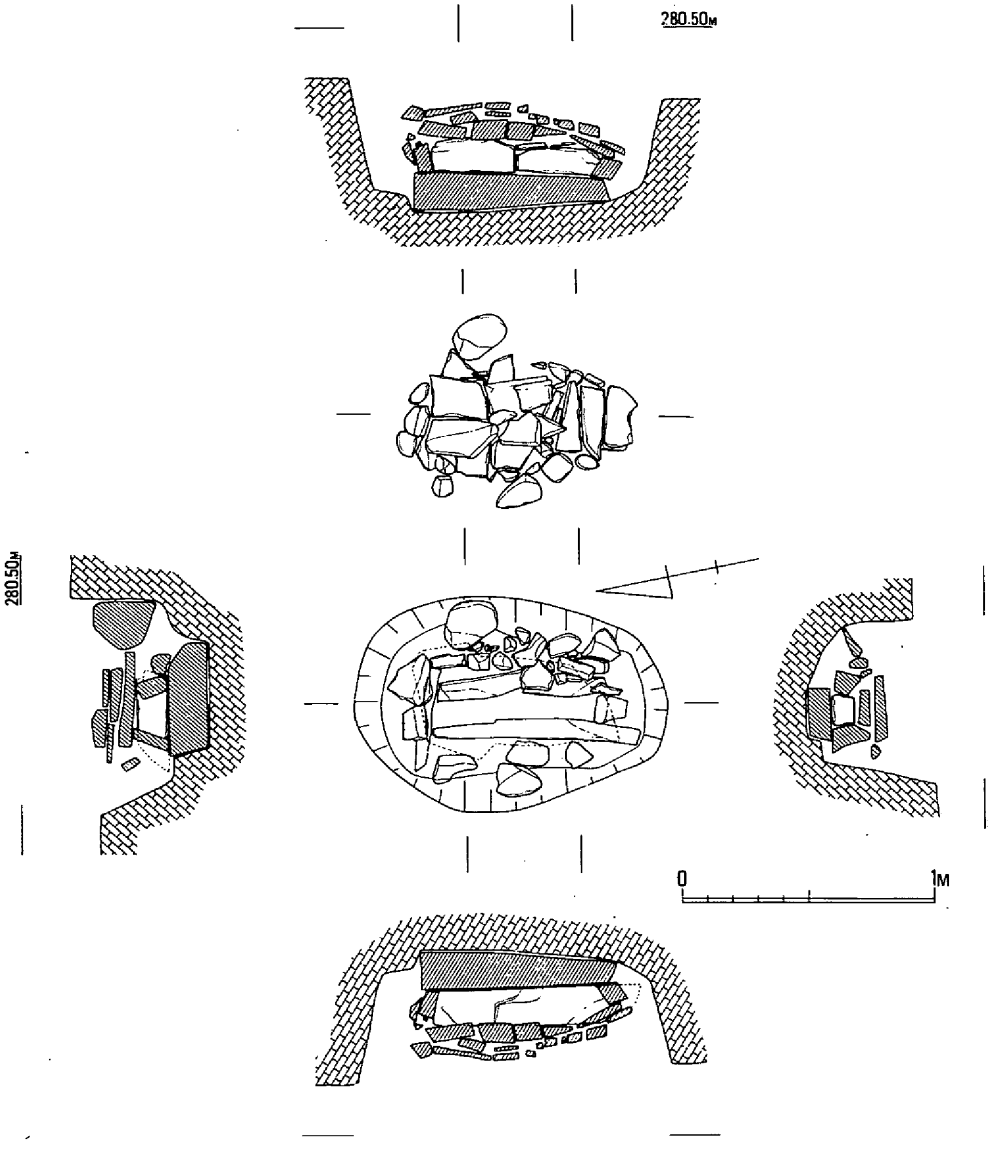
9－4（図56）
（図版20－1，2）

9号墳の頂上平坦部北西端に位置し，主軸を東西に向けて構築されている竪穴式石室である。第5主体の竪穴式石室とは東西1列に並んでいる。

土壙は2段に掘り込まれており，その規模は，東西3.04m，南北1.50m，深さ0.60mを測る。土壙底の各隅は，東西は2段目から丸みをもっているが，南北は丸みをもたず直角に掘られており，東端から西側へ約2度傾斜している。また，東西の両小口部は3～5cm深く掘り込まれている。

石室は，この土壙の主軸より5度北へ向けて構築されている。石室の内法は，長さ1.55m，東端部幅0.24m，西端部幅0.33m，天井石直下より底石上面までの深さは平均0.24mを測る。側石は，南北とも3～4枚の厚みのある板石をヨコ長にして並べ1～2段に積んでいる。石と石の隙間には，ところどころ小型の石材を塞め込んでいる。東西の短側石は，西側が1枚をたてているが，東側は板石をたて，さらに側石上面の高さを揃えるために厚さ4cmの板石を2枚小口積んでいる。底石は厚さ5cmの扁平な小型の石材を敷き並べており，天井石より底石まで0.23cmを測り，石室内には流土が天井石直下まで埋まっていた。2段目の土壙と石室の間には，第3主体の竪穴式石室同様に同石材で土壙内全域に裏込めしている。その積み方は，整然とした小口積ではないが側石上面まで積まれており，東西の短側石外側には第3主体部と同様石材と石材の隙間に小礫を埋める手法が認められるが，南・北長側石の外側には認められない。側石上面より天井石上面までの間には，東側のみ拳大の割石を厚さ

25cmにわたって置いている。石室外側の石材の隙間に入れられた小石と天井石の外側に置かれていた小石には，明らかにその大きさが違うのでその使い方を区別していたようである。遺物は何ら認められなかった。



第59図　9号墳墓第8主体

9－5（図57）（図版20－3，4）

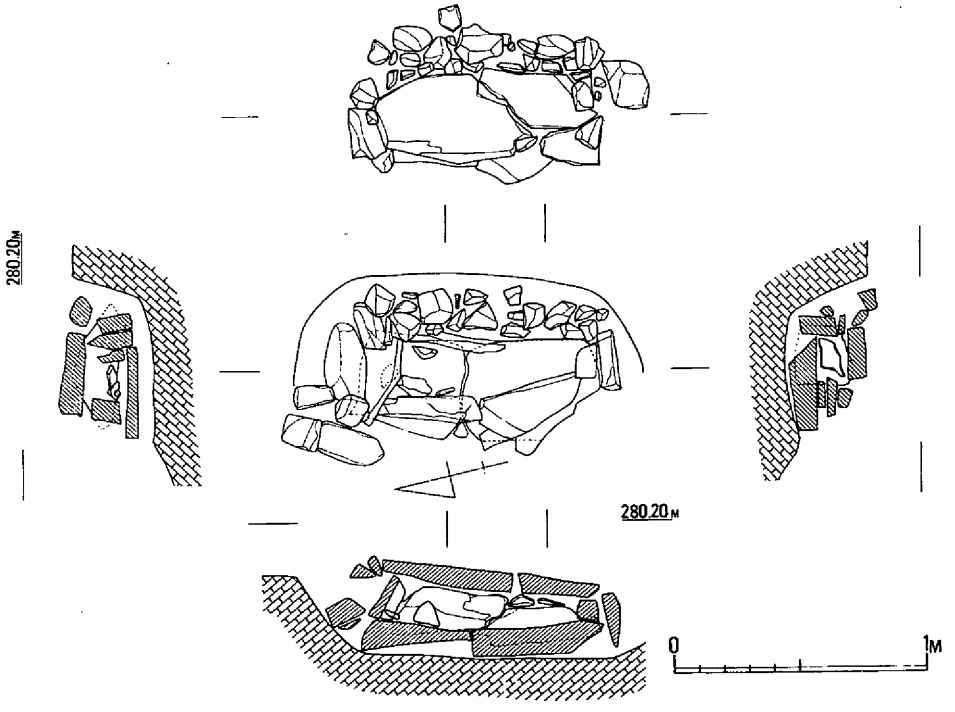
第1・2主体の北側に尾根と直交して構築されている竪穴式石室である。土壙は東西に主軸を置いて造られており，長さ2.97m，幅1.55m，深さ0.90mを測り，一部を除き2段に掘り込まれている。

石室の内法は，長さ1.33m，東端幅0.36m，西端幅0.18m，深さ0.23mを測る。石室を構成する側石は，東西とも2枚ずつを1段から2段にたて積しており，南北の短側石はともに1枚ずつをたてに置いている。棺側石の外側には第3・4主体部などで認められたのと同様の石材で控え積を行っている。

石室を蓋している天井石は2重に覆われており，最初に厚さ15～20cmの板石を3枚を置き，さらにその上部の隙間を約5cmの薄い板石で塞いでいる。天井石を取り除くと棺内には土砂が側石上面にまで流入していた。棺床には，天井石および側石と同様の板石3枚を敷いている。側石と底石の組み方は，底石の外側に四方の側石をはめ込むように組まれている。

棺内には何ら遺物は認められなかったが，棺内東端において2個の枕石が置かれていた。

3. 小　児　墓



第60図　9号墳墓第9主体

9－6（図57）（図版21－1，2）

第5主体の土壙を検出中，南西端において数個の石材が認められた。これらの石材は，第5主体部とは直接関係がなさそうなので，さらに精査していくと西側に小型箱式石棺の天井石と考えられる石材が検出された。

土壙は，第5主体土壙の南西端を切って東西に主軸を置いて造られている。長さ1.21m，幅0.74m，深さ0.53mの隅丸長方形を呈し，土壙壁面はかなりの傾斜をもたせて掘り込まれている。

石棺を構成する側石は，南・北各々2枚の不整形な丸みのある石材を使用している。東西の短側石は各1枚で組まれており，両短側石の外側にも1～2枚の石材を置いて補強している。石棺の内法は，長さ0.40m，幅0.18m，深さ0.13mを測る。天井石は厚さ6cmぐらいの板石2枚をもって覆っており，さらにその隙間を厚みのある割石状の石材を置いている。土壙と石棺の間には控え積石などは認められない。石棺底部には厚さ5cmの板石2枚を敷いている。

棺内からは遺物は検出されなかったが，東側において底石に接して枕石が1対置かれていた。

9－7（図58）（図版21－1，2）

第6主体の南側約1mに主軸を東西に向けて，第1主体の土壙に相接するように造られている小型箱式石棺である。

土壙は不整形な楕円状を呈しており，その規模は，東西0.72m，南北0.51m，深さ0.20mを測る。

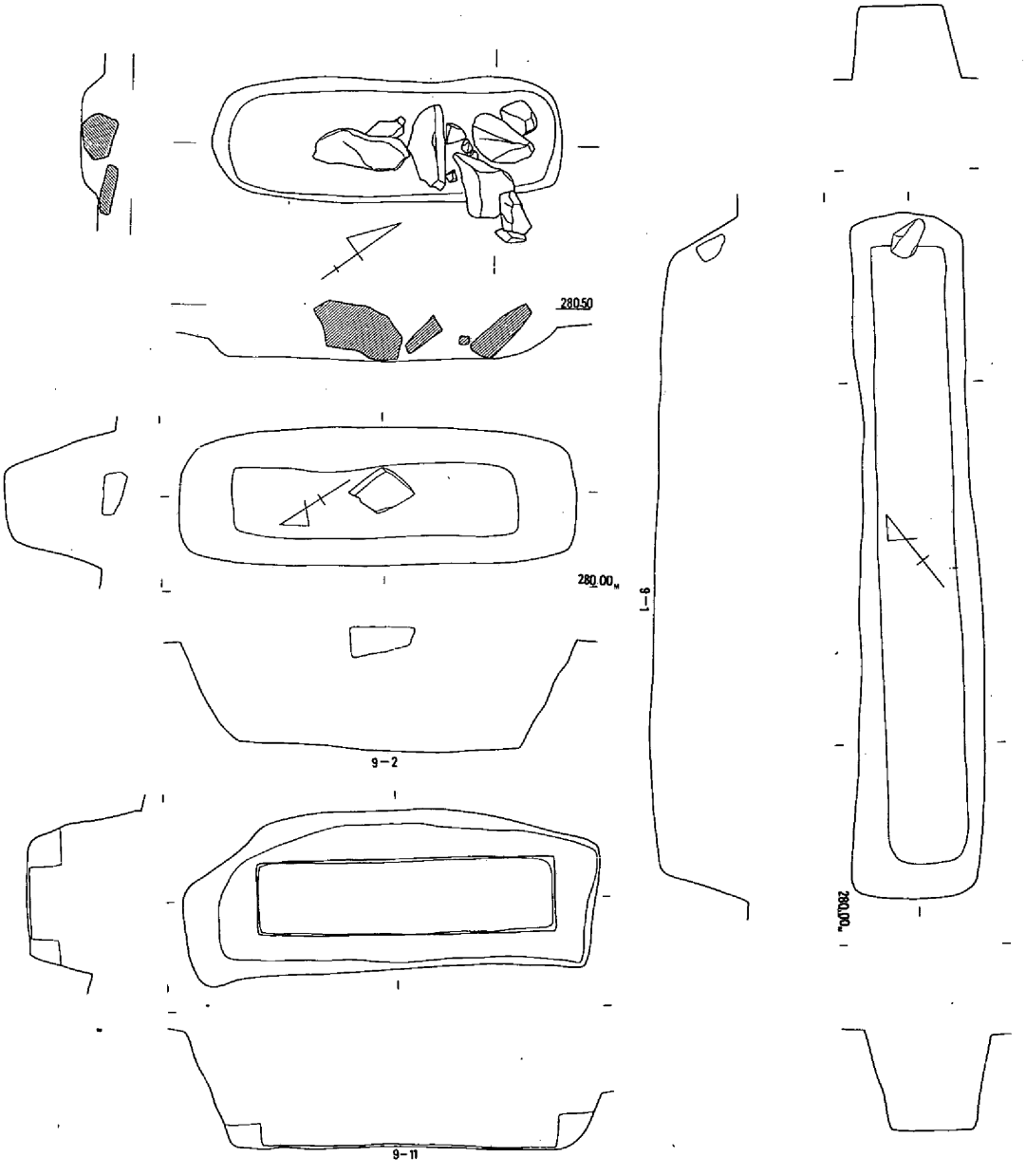
石棺はほぼ土壙中央部に構築されている。石棺側石は南北が1～2枚，東西の短側石は西側は1枚であるが，東側は南北の長側石をすぼめて短側石としており，棺の内法は，長さ0.46m，幅0.17m，深さ0.18mを測る。天井石は3枚を並べてその隙間を塞ぐという2枚重ねになっている。底石および棺外の控え積などは全体として認められず，遺物も何ら検出されなかった。

9－8（図59）（図版21－3，4）

第8主体は第3主体の北側，主軸を南北に置いて平行に造られている。箱式石棺は小型で扁平な板石と丸みを帯びた山石をもって構築されている。

土壙は楕円形に掘られており，土壙底は底石を置くために土壙上面より0.36mのところより段をもたせてさらに深く掘り込んでいる。土壙の規模は，上端で東西0.85m，南北1.24m，底部で東西0.52m，南北0.92m，深さ0.54mを測る。

石棺はほぼ土壙の中央に造られている。東西の長側石は，西側1枚，東側2枚，短側石は南北とも各1枚で組まれており，東西の長側石は内側に約20度，南北の短側石は外側に約15度傾斜している。石棺の内法は，長さ0.61m，幅（中央部）0.15m，天井石直下から底石まで0.14mを測る。天井石は側石同様の石材で厚さ4cmと非常に薄く細長いものを使用しており，平均2枚重ねになっているが，一部には3重にその隙間を覆っているところが認められる。3重目に置かれている天井石は，1重，2重目の置き方とは直交するように置かれている。棺側石の外側にはグリ石が土壙内全域に塞められているがその量はあまり多くない。底石は厚さ14cmの1枚石を使用しており，棺側石の各々はすべて底石の上面より構築されている。棺内には枕石および遺物は何ら認められなかった。



第61図　9号墳墓墳丘上・墳丘下埋葬主体

9－9（図60）（図版22－1，2）

第9主体は，第4主体の北側に主軸を南北に向けて造られている小型箱式石棺である。第4主体の主軸とは直交する形で，墳頂中央部から約3m，平坦部の西端に位置している。

石棺に使用されている石材および構築手法は，第8主体部と非常に良く似ている。

土壙は西側が木根の抜き取りによって破壊されているが，残存部分の状態からみて楕円形に掘られていたようである。南北1.40m，東西推定約0.80m，深さ0.35mを測り，土壙壁はゆるやかに掘られている。側石は，東西の長側石とも2枚の板石をたて並べており，南北の短側石は各1枚ずつで北側が長側石の外側に，南側が長側石の内側にはめ込むように組まれている。石棺の内法は，南北0.74m，東西0.20m，深さは北端部0.18m，南端部0.11mを測る。石棺の外側には土壙壁の間に径5～15cmくらいのグリ石でもって側石を補強している。西側石の外側についてはその状態が破壊されているが，西側石周辺には東側と同様の石材が多数認められるので構築時には西側にも同様の施設があったと考えられる。

棺身を蓋する天井石は，厚さ6～8cmの板石2枚を並べて覆っている。この上部には，調査時には認められなかったが，構築時には側石外同様に天井石の上面にもさらにグリ石で覆っていたと考えられる。底石は厚さ10cmの天井石と同様のものを2枚敷いており，棺側石は底石の上面より組まれている。

遺物は棺内・外ともに何ら検出されなかったが，底石北側において東・西の側壁に沿ってグリ石と同様の石材2個が枕石として置かれていた。さらにこの両石の南側にも川原石が2個置かれていた。

4. 墳丘下埋葬

9－11（図61）

「」の形に存在する葺石の東辺の下より検出された木棺墓である。葺石が乱れていないこと，葺石除去後に土壙プランが検出されたことなどから，9号墳墓より古い時期の埋葬主体と考えられる。

土壙規模は，2m32cm×88cm，深さ35cm，木棺は1m67cm×41cmを測り，方位は，N－W66°をとる。

第10節　10号墳墓

10号墳は9号墳の下方，幅2.5m，深さ0.40mの尾根に直交する溝に区画されている。

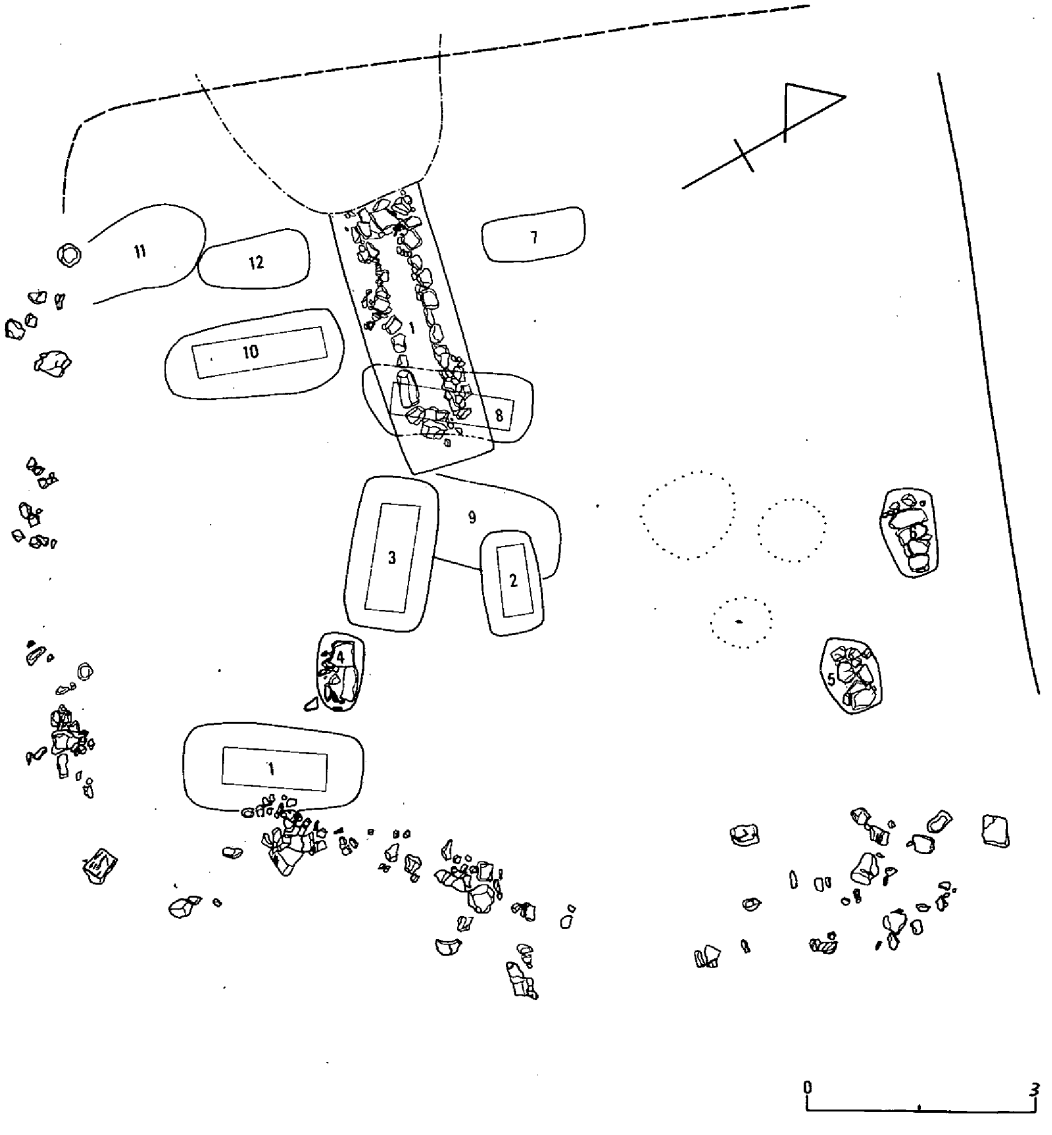
墳丘は地山を長方形に整形して築かれており，頂上平坦部は東西7.3m，南北9.7mを測る。墳丘の東・南側には葺石が認められ，葺石基底部を墳丘裾と考えると東西11m，南北13.5mと南北に長い長方形墳となる。

葺石は，東・南側斜面の墳端部に「」型に葺かれている。東側斜面はかなりの急斜面に葺かれている関係で滑り落ちているものも多い。南側もほぼ一直線に葺かれているようであるが，葺石の量も少なく残存状況は良いとは言えない。葺石に使用されている石の大きさは，東・南側とも10～30cmくらいの山石がほぼ大半を占めている。

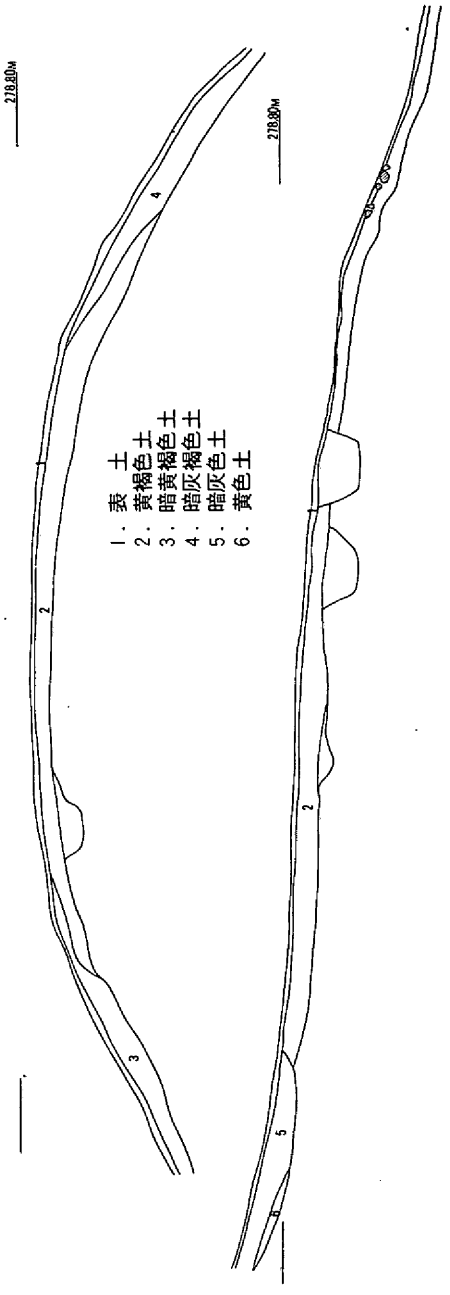
1. 竪穴式石室

10—1（図64）（図版22—3）

10号墳第1主体は，墳丘平坦部の中心より南寄りに位置し，尾根の中心線よりやや西側に寄せて造られている竪穴式石室である。主軸はほぼ東西に向けており，尾根とは直交している。



第62図　10号墳墓

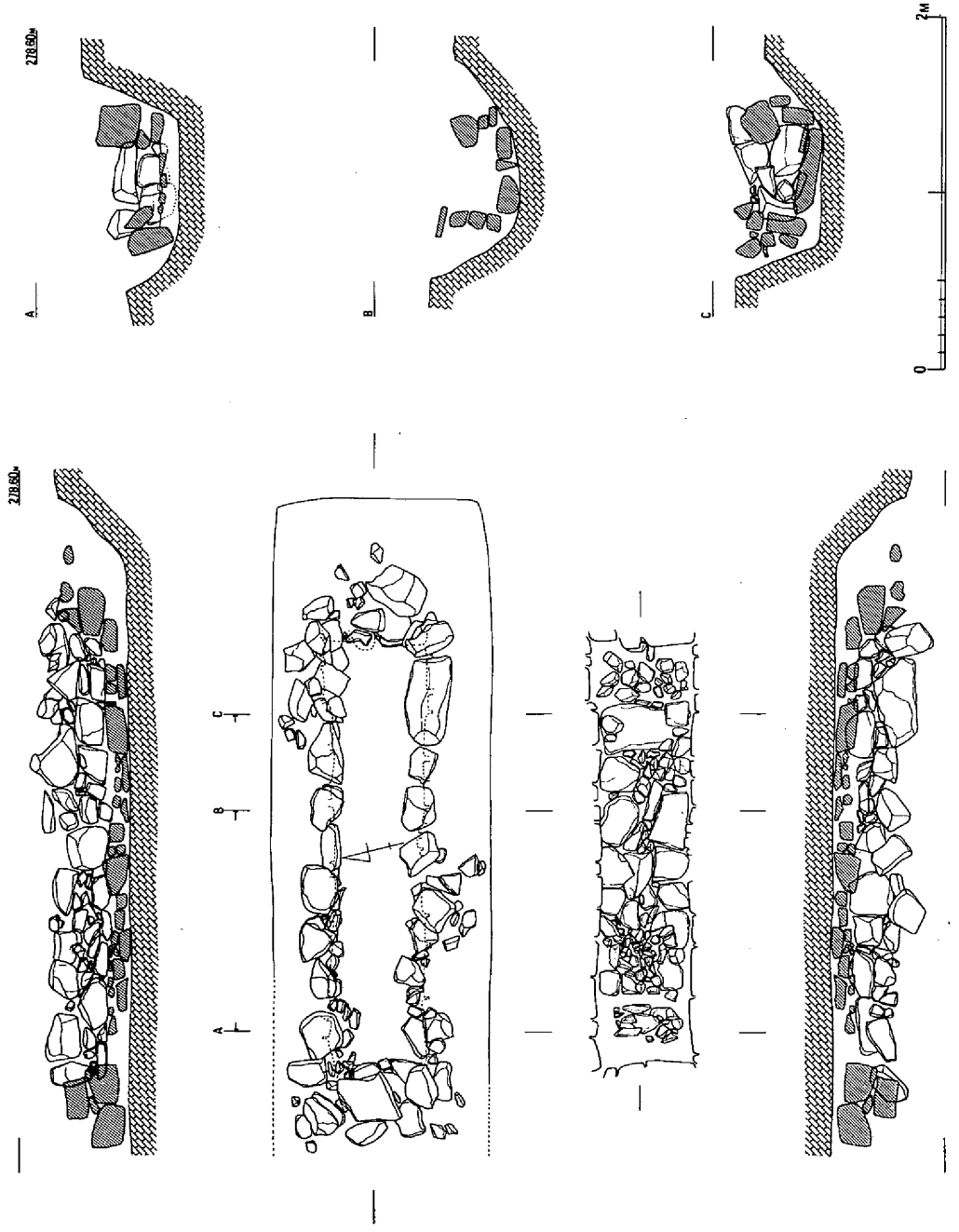


第63図　10号墳墓南北・東西墳丘断面

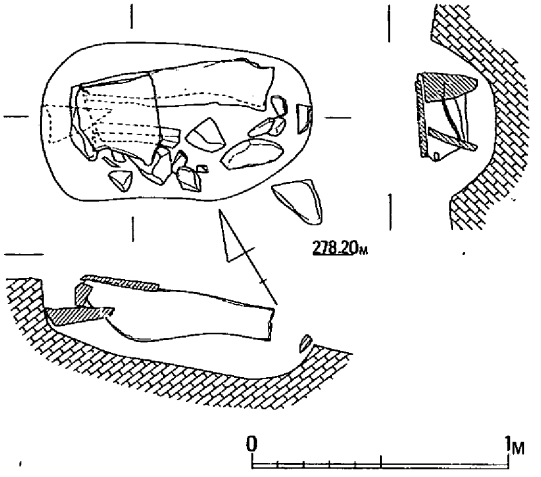
土壙は，頂上部より深さ0.85mに素掘りされており，東西に長い長方形を呈しているようである。土壙西側は大木の伐採時に根こそぎ大きく地盤が刳られているため東西の長さは不明である。東側の石室と土壙の長さより約4.00mと推定され，南北の幅は中央部で1.23mを測る。石室に使用されている石材は，丸みをもった15〜50cmの山石を使用しており，側石はすべて小口積の手法と同様の積み方を用いている。しかし，その大きさが比較的不揃いの為いわゆる煉瓦積みにはなっていない。各側石は3段から4段に積まれている。各側壁の接合面は，ほぼ直角に組まれており，下段から上段への小口積も土壙底に対してほぼ直角に積み上げられている。土壙と石室の間には，一部に控え積みが認められるが全域には至っていないようである。石室の内法は，東西2.42m，南北東端幅0.52m，西端幅0.48m，深さは石室上端より底石まで0.38mを測り，石室内の土壙底部には丸みをもった平石および拳大の山石を混えて敷いている。この敷石の東西壁からいずれも約35cmのところには幅5cmの石室とは直交する石の切目が認められ，この位置に木棺の小口板がはめ込まれていたようである。小口溝から小口溝の間の長さは1.70mを測る。

天井石は認められない。石室はほぼ構築時のまま遺存しているので天井石は最初から存在しなかったと考えられ，木蓋の存在が推定される。なお底石と側石の組み方は，一部ではあるが底石の上に側石が積まれている状態が認められるので，側石は底石を敷いた後に積み上げられているようである。

遺物は，石室内東側において鉄鎌1が底石より約10cm上部で検出された。その他には，石室内で土師器片が若干検出されている。



第64図　10号墳墓第1主体



第65図　10号墳墓第4主体

2. 木　棺　墓

10—2（図68）

土壙掘り方は，1m45cm×69cm，深さ52cm，木棺は1m6cm×34cmを測る。方位はN—W70°をとる。

10—3（図68）

土壙掘り方は，2m11cm×98cm，深さ48cm，木棺は1m50cm×41cmを測る。方位はN—W55°をとる。南西短側よりの棺上に礫が存在する。

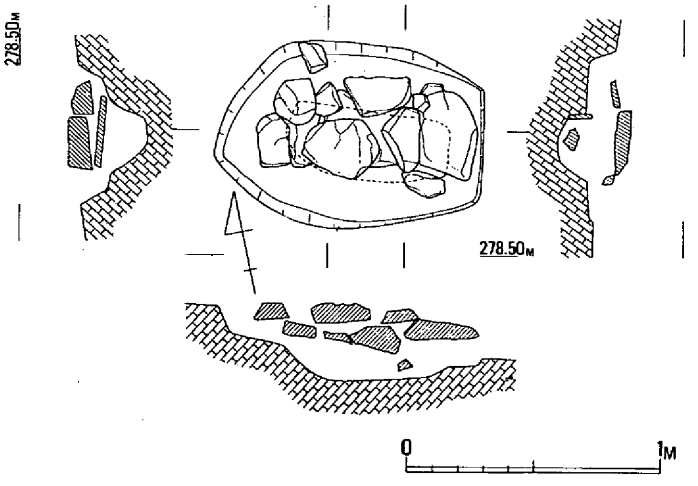
3. 小　児　墓

10—4（図65）（図版22—4）

第4主体は，墳頂平坦部の南端に位置する小型箱式石棺である。

土壙は東西に主軸を置いて掘られており，長さ1.05m，幅0.62m，深さ0.20mの小判形を呈し，土壙底は西側よりも東側が深い。

石棺は，南・東側石および天井石の一部が抜き取られた状態で検出された。石棺の構築状態をみると，北側の長側石は1枚をヨコ長に，南側は残存部からみて2枚を並べたてていたようである。北側の側石に比べて南側の側石は非常に薄い板石を使用している。短側石は西側1枚が遺存しているが，東側は，抜き取られているのでその構造はよく判らない。天井石は，厚さ3cmと非常に薄い板石で蓋されていたと考えられる。石棺の外側には一部に土壙との間に小石を塞めており，石棺を補強していたようである。棺床は，発掘時から石棺内が荒されていたのでその構造は不明である。



第66図　10号墳墓第5主体

10—5（図66）（図版23—1，2）

墳丘平坦部の北端に，東西に主軸を置いて造られた石蓋土壙墓である。第1～4主体とは約5mの距離がある。

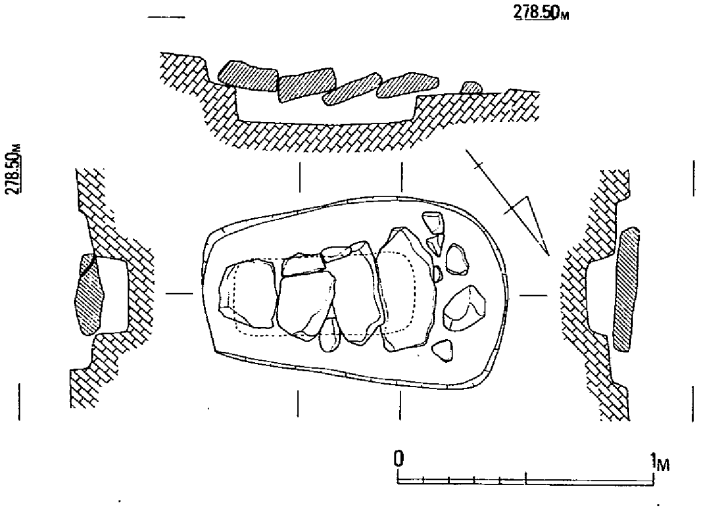
土壙は2段に掘り込んでおり，1段目は長さ1.03m，幅0.73m，深さ0.15mの舟形を呈しており，この土壙中央部にはさらに長さ0.53m，幅0.37mの壙を掘り蓋石を置いている。蓋石は無造作ではあるが2枚重ねになっている。蓋石に使用されている石材の各々はあまり大きなものではなく，2段目に掘られた土壙幅よりも小さい。また，蓋石は2段目の土壙肩部より約8cm上に蓋されており，本来は2段目の土壙内に遺骸を収めた後埋土をして，その上に蓋石を置いたと考えられ，土壙内東側には土壙底より3cm上に径8cmの枕石と考えられる割石1個が置かれていた。また，土壙内南側に径10×8cm，厚さ2cmの板石が1枚南壁にたてられており，何を意味するものか不明である。

10—6（図67）（図版23—3）

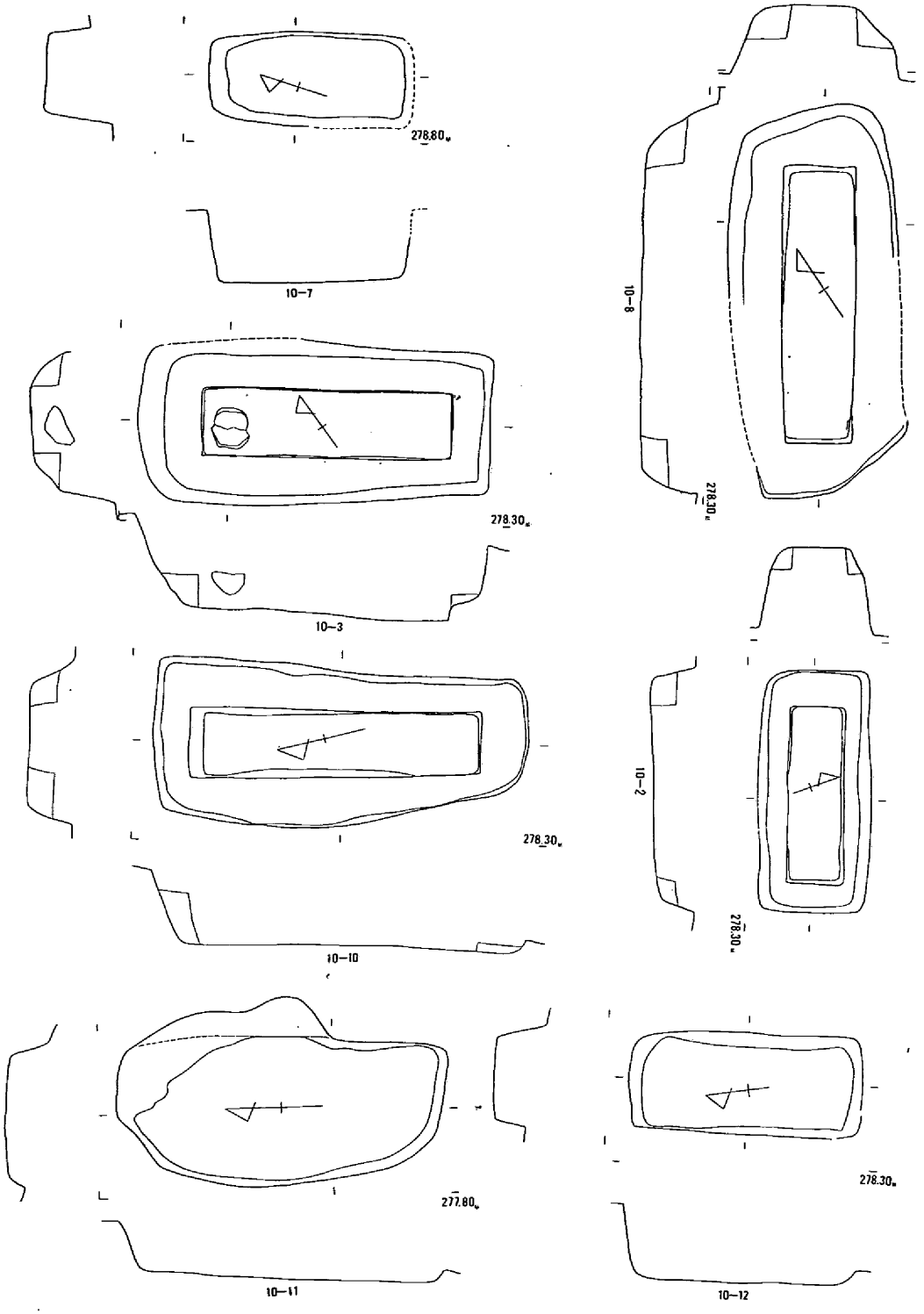
第5主体の北北西約1.5mのところに造られている石蓋土壙墓で，第5主体とは平行している。

土壙は，尾根に直交して2段に掘り込んでいる。一段目は長さ1.20m，幅0.71m，深さ0.11mを測り，さらにこの中央部に長さ0.72m，幅0.30m，深さ0.13mの壙を掘って蓋石を置いている。蓋石には4枚の丸みをもった山石が使用されている。蓋石の重ね方は，西端から東側へ架構しており，各々の隙間には小石で塞いでいる。

土壙内には遺物や枕石などは認められない。



第67図　10号墳墓第6主体



第68図　10号墳墓墳丘下埋葬主体

4. 墳丘下埋葬

10—7（図68）

土壙掘り方は，？cm×56cm，深さ41cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。

10—8（図68）

土壙掘り方は，2m32cm×1m2cm，深さ41cm，木棺は1m65cm×44cmを測る。方位はN—W38.5°をとる。中央を第1主体と重複している。

10—9（図68）

第1・第2・第3主体と重複し詳細は不明である。

10—10（図68）

土壙掘り方は，2m25cm×86cm，深さ27cm，木棺は1m75cm×39cmを測る。方位はN—W14°をとる。

10—11（図68）

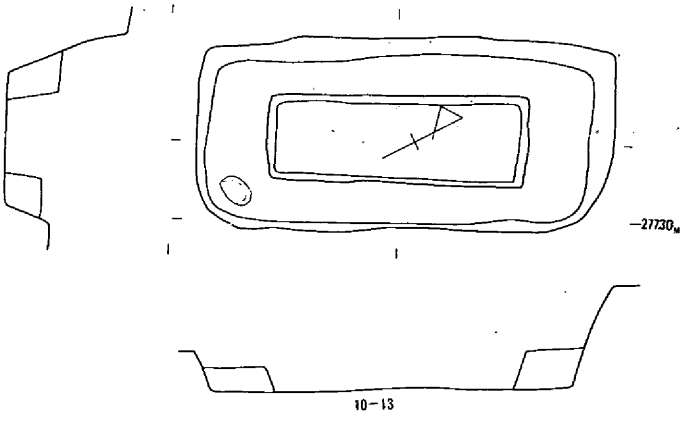
土壙掘り方は，1m94cm×84cm，深さ27cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。方位はN—E0.5°をとる。

10—12（図68）

土壙掘り方は，1m42cm×60cm，深さ32cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。方位Nは—E9°をとる。

10—13（図69）

土壙掘り方は，2m20cm×99cm，深さ64cm，木棺は1m37cm×45mを測る。方位はN—E28°をとる。



第69図　10号墳墓墳丘下埋葬主体

5. 出土遺物

10—1—1（図96）は，第1主体石室内より出土した口縁部の小片である。口縁部中ほどに凸部をつくる。胎土は石英粒・石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

10—2—2（図96）は，木棺墓の墓壙内より出土した小片である。くの字状に外反する頸部に単純口縁がつく甕形土器である。

胎土は石粒を含み，焼成は脆い。色調は褐色を示す。

10—2—3（図97）は，第2主体より出土したもので，細片となって検出された。口径18.5cm，器高9.3cm，台部径16.1cmを測るが，いずれも推定値である。口縁端部及び台部端部のいずれも受け口状をなす。整形痕は器壁の剝離が著しく，観察できなかった。

胎土は石粒を含み，焼成は脆い。色調は褐色を示す。

鉄鎌（図99—7）（図版32—7）

10号墳第1主体の竪穴式石室内東端より検出されている。刃部の中央部が欠失しているが基部および刃先端部が遺存しており，これらの破片から全長約9.3cm，幅（中央部）2.7cm，厚さ0.2cmを測る。茎部より刃先端部へ移行するに従って細くなり，先端は上向きに刃が外彎している。

第11節 11号墳墓

第10号墳墓と第11号墳墓を画する北側の溝は認められない。南側において，一段ないし二段の列石が存在する。一段目の列石は約6cmほどの長さをもち，北東・北西のコーナーをつくっている。二段目の列石は遺存状態が非常に悪く，直接に当墳墓に伴なう列石を形づくるのかどうかは不明であった。一段目の列石より2mほど南に離れ，長さ4mほどで終っている。東・西辺は明瞭な列石及び地山削り出しなどは見られず，列石のコーナー部分よりからしか推定できない。従って，墳墓の規模は南北8m，東西8mを測る墳形は方形を呈する。

墳丘は中世墓及び近世墓により，墳丘は二次的に手が加えられている。埋葬は暗茶褐色土中より掘り込んでいることからすれば，地山を若干整形したあと盛土をし，列石による区画をもうけたのちに埋葬が行なわれている。

なお，中世墓・近世墓については，第5章で述べる。

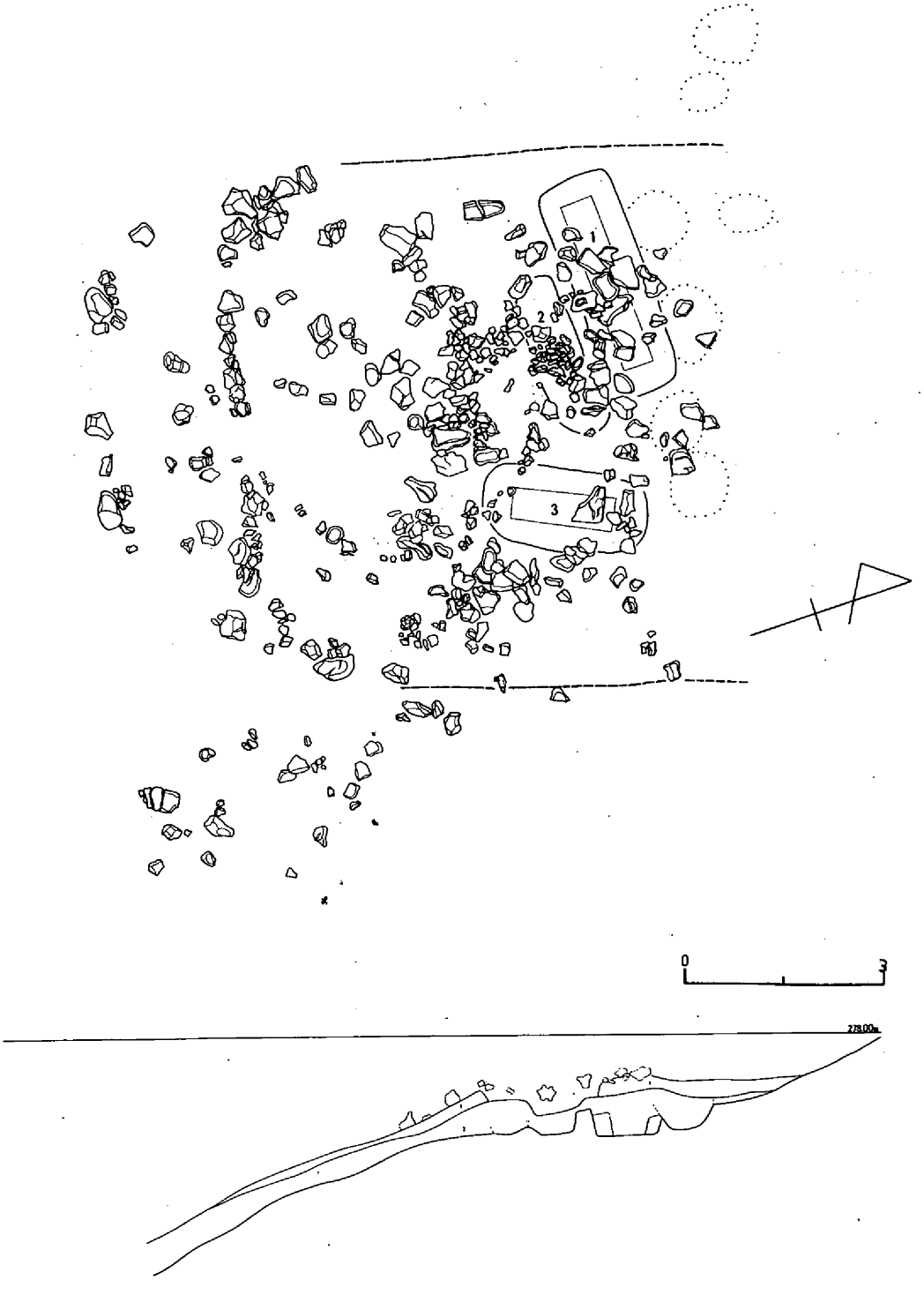
1. 木棺墓

11—1（図72）

土壙掘り方は，3m32cm×1m9cm，深さ32cm，木棺は2m89.5cm×60cmを測る。方位はN—W93°を示す。

2. 礫槨墓

11—2（図72）



第70図　11号墳墓

第２主体は，墳丘のほぼ中央部に位置し主軸を東西に向けて，第１主体とは20㎝の距離に平行して造られている。

埋葬主体は，土壙内に礫を配した一種の礫槨状を呈している。

土壙は，長さ2.41ｍ，幅0.87ｍの隅丸長方形に掘られており，深さは表土より約0.8ｍを測る。土壙底はゆるやかなＵ字状を呈している。土壙内には，土壙壁に沿って10～20㎝の角礫を配石しており，部分的には２段に積まれているが，南側中央部の配石は中世墳墓の土壙によって破壊されている。

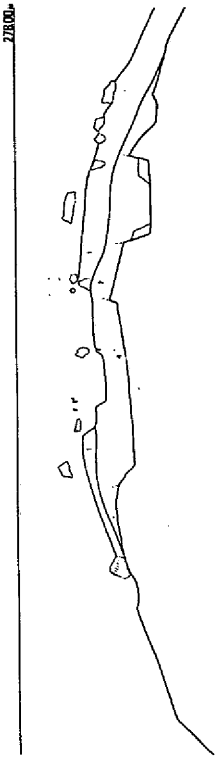
配石は，東側より土壙底に沿って西側に下降している。南北の配石は土壙壁に沿って１列に，東西の配石は土壙端より東側50㎝，南側45㎝の位置に南北の配石と「壙」状に組まれている。配石内には何ら施設が認められないので木棺が置かれていたかは判らないが，配石の状態は，木棺のおさえ石と言うよりは木棺状に角礫を並べているようである。その内法は，長さ1.30ｍ，東端幅0.35ｍ，西端幅0.22ｍで，深さは中央部で土壙内面より0.35ｍを測る。

遺物は，配石内中央部の土壙底に接して土師器片（高杯）が検出されている。

11－３（図72）

土壙掘り方は，２ｍ45.5㎝×１ｍ14㎝，深さ42㎝，木棺は１ｍ70㎝×51.5㎝を測る。方位はＮ－Ｅ21°をとる。

南棺外に礫と鏡を検出する。鏡は礫より上面より出土したもので，土壙を検出する過程で出土したものである。



第71図　11号墳墓東西墳丘断面

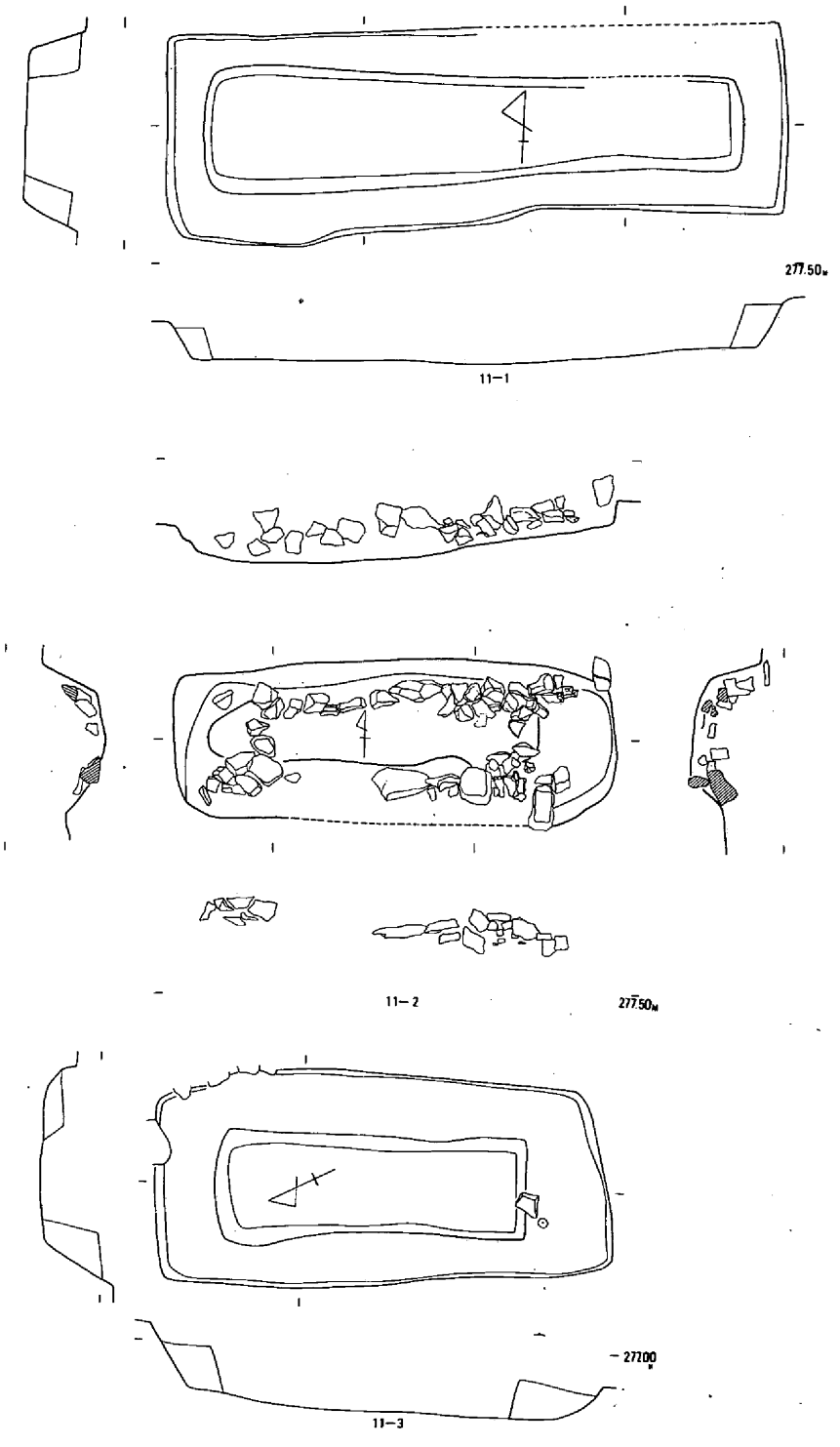
3．出土遺物

11－１（図97）（図版31）は，南東コーナー側の墳丘外の表土より出土したもので，12号墳墓の墳丘下埋葬に伴なうものと考えられる。

胴部破片であるが，長頸の壷形土器となると考えられるものである。胴部は算盤玉状をなし，底部は，胴部をつくった後から貼り付けた平底である。外面整形は，胴部上半は斜めの細い櫛状工具　胴部中位は横位の篦磨きを，胴部下半は櫛状工具の上から縦位の篦磨きがなされている。内面は胴部中位まで横位の篦削りを行ない。底部は非常に荒い櫛状工具による削りを行なっている。

胎土は金雲母，黒雲母，石粒を多く含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。

11－２－２（図97）は，第２主体礫槨埋土より出土したものである。器種は蓋と考えられ，整形等については器壁の剝離が著しく観察できなかった。



第72図　11号墳墓主体

胎土は石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示し，丹塗りされている。

11－1－3（図97）は，第1主体棺上面より出土したもので，杯部の破片である。器壁の剝離が著しく，整形等などの観察はできなかった。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

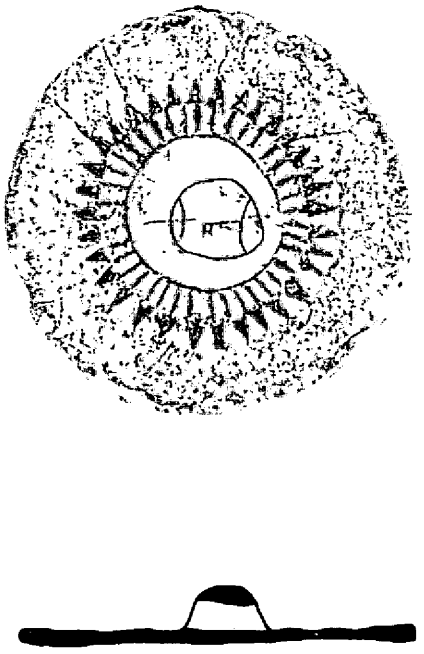
鏡（図73）（図版32）

第3主体掘り方上面より出土したものである。南短側よりに位置し，近くに礫が置かれており，これと伴に棺上供献とされたものと考えられる。

径は5.3cmを測り，厚さは2mmなどである。平縁を示し，鋸歯文，櫛歯文の順で文様帯を構成する。鈕は，径の中央をずれている。鏡は検出時より，折れ曲った状態を示しているが，土圧による結果と考えられる。

鏡面には，赤色顔料が付着していた。

尚，背文構成から鋸歯文鏡と呼んでさしつかえないと考えられる。



第73図　11号墳墓出土鏡

第12節　12号墳墓

12号墳は，横見墳墓群が築造されている尾根の最先端部に位置している。発掘当初は表面に20～30cmの石材が多数認められたので，11号墳頂上部の中世墳墓と同遺構かと考えていたが発掘の結果，竪穴式石室が検出され，墳墓であることが確認された。

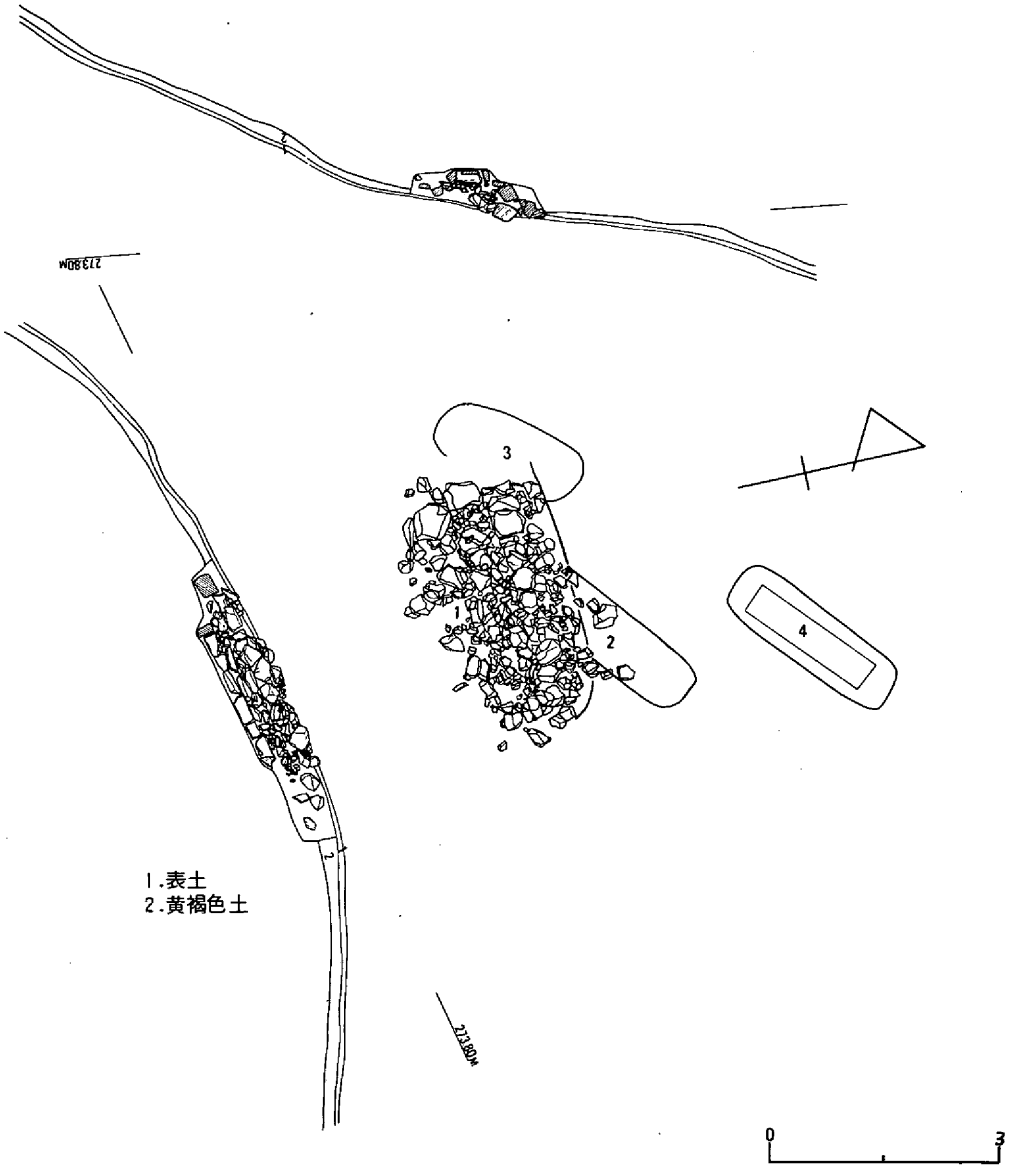
墳丘は，尾根北側の高い部分を削平して平坦部を造っているが，断面観察では顕著な盛土は認められなかった。

墳形は，全面発掘を行なったにもかかわらず円墳であるのか方形墳であるのか判然としない。また規模も墳丘を区画する葺石，溝等の施設がなされておらず，どこまでが墳丘であるのかもよく判らないが一応東西9m，南北6m，高さ2m程度であったと推定される。

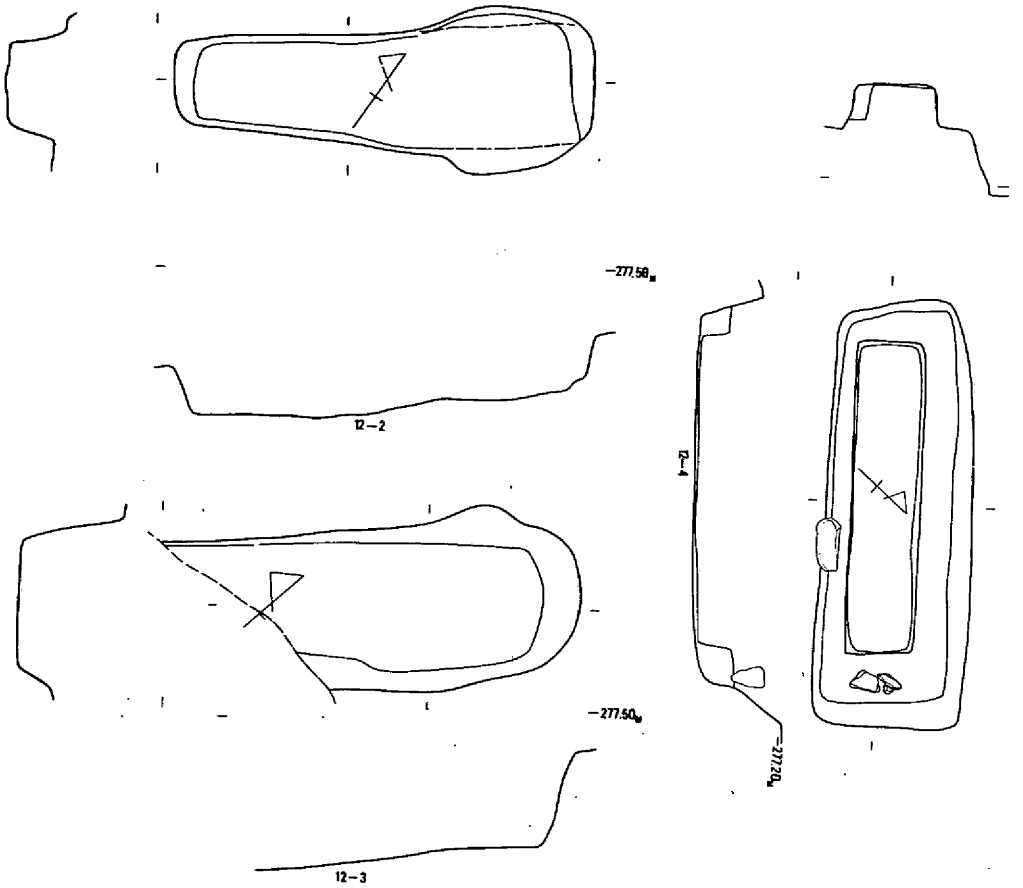
1．石　室　墓

12－1（図75）（図版24－1，2）

埋葬主体は，東西に主軸を置いて造られている竪穴式石室である。



第74図　12号墳墓

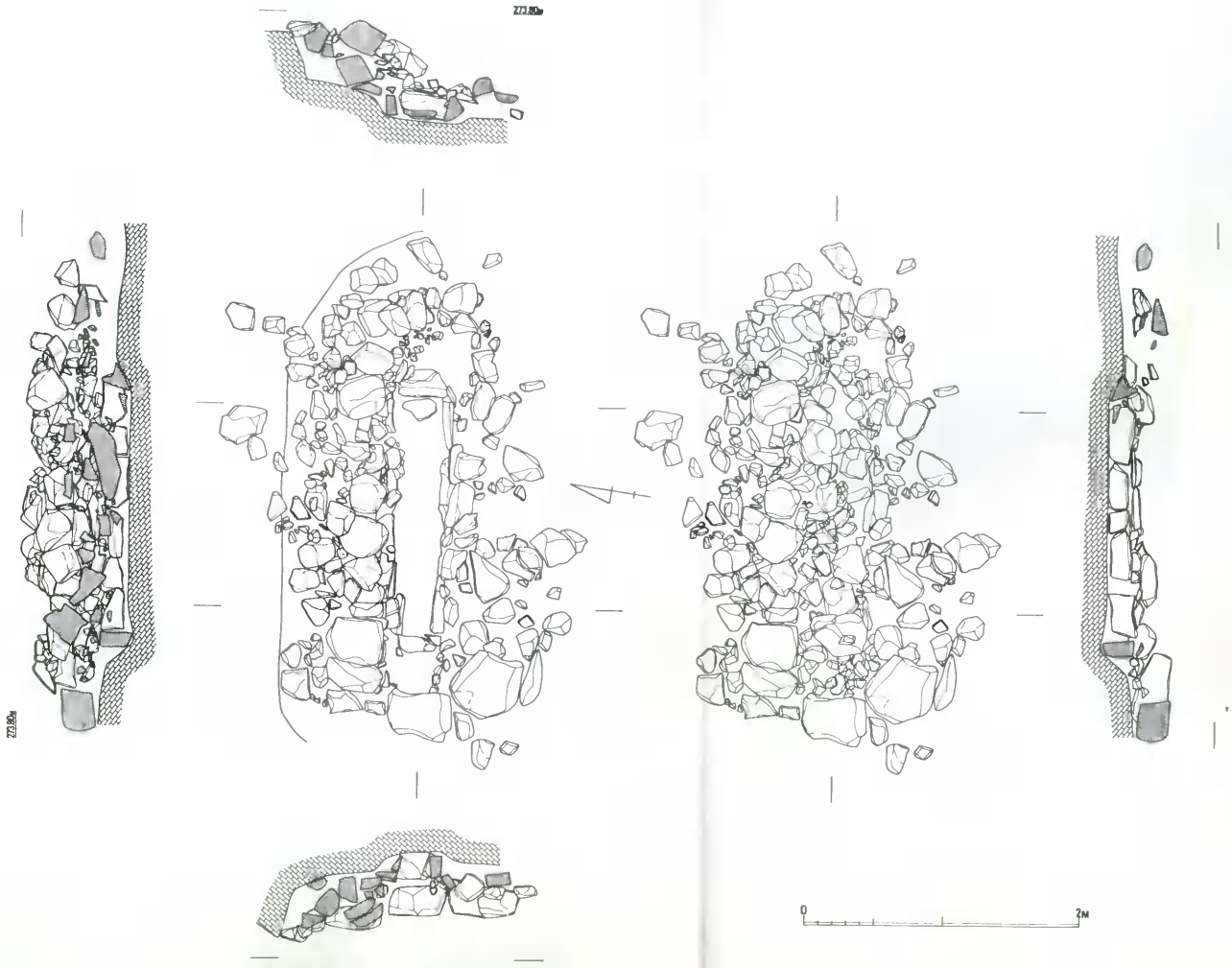


第75図　12号墳墓墳丘下埋葬主体

土壙は，南斜面の地山を切って2段に掘り込まれている。発掘時より石室上面が露出していたため，その規模は明らかではないが，石室の長さから東西約4.00m，南北約2.00mと推定される。土壙は比較的良く遺存している北側の壁をみると，土壙の壁はやや傾斜をもたせて掘り込んでおり，土壙上面から深さ0.40mで平坦となっている。さらにその中央部には東西2.20m，南北0.60m，平坦部からの深さ0.20mに長方形の土壙を掘って石棺を埋置するところとしている。

石室は，長さ2.70m，東端幅0.60m，西端幅0.55m，側石底部から上面までの深さは平均0.50mを測る。

側石は，径10～40cmの大小様々な丸みをもった山石を小口積に積んでいる。その積み方は粗雑であり，壁面も凹凸が認められるが一応長方形に積まれており，側石最上段には大型の石材を積んでいる。石室と土壙の間には比較的小型の山石を埋めて控え積んでおり，この控え積み石室外全域に施されていたようである。



第76図　12号墳墓第1主体

石室の基底部より掘られている2段目の土壙には，土壙壁いっぱいに箱式石棺が組まれている。石棺の内法は，長さ1.78m，東端幅0.33m，西端幅0.20m，深さ平均0.18mを測る。石棺を構成する南北の長側石は，北側が6枚，南側が5枚，東西の短側石は各1枚をいずれもたて並べて組んでいる。

石室と石棺の組み方をみると，石室と石棺の東西の両短側石間には東・西とも0.30mの空間部分が存在し，石室と石棺は区別されている。しかし，南北の両長側石には短側石に認められる石室と石棺の空間部分は存在せず，石棺の長側石の上端より石室の長側石が若干開き気味ではあるが連続して積み上げられている。

天井部の構造は，当初より石室最上部の石材が露出していたので不確かではあるが大型の平石で蓋するような天井石は施されていなかったようである。石室内には多数の石材が認められたが，石材は石室側石の上部より約20cm下方にほぼ水平に並べられたような状態であった。これらの石材は，側石の一部が石室内に倒れ込んだ状態ではないので，おそらく構築当初より天井部に置かれていたと考えられる。しかし，石室内に認められる石材の大きさでは，石室を蓋するのは不可能であり，これらのことから石室上面には，木蓋の存在が考えられ，石室内に落ち込んでいる石材は木蓋上面に置かれていたようである。

石棺と石室に組まれている石材は，石棺のものには板状の割石を使用していて，一見丸みをもった石材使用の石室のものとはその材質が異なるようにみえるが，石材は石棺・石室とも同一のようである。

遺物は，石室・石棺内とも何ら検出されなかったが，石棺内東端において厚さ5cmの三角形状の枕石1枚が置かれていた。

2. 墳丘下埋葬

12—2（図96）

土壙規模は，2m18cm×57cm，深さ32cmを測り，木棺痕跡は認められなかった。方位は，N—W 55.5°をとる。

12—3（図96）

南側3分1などを第1主体により切られている。土壙規模は，？×90cm，深さ55cmを測る。木棺痕跡は認められなかった。方位は，N—E42°をとる。

12—4（図96）

土壙掘り方は，2m23cm×78cm，深さ57cm，木棺1m64cm×37cmを測る。方位は，N—E50°をとり，北東短側の棺外に礫が置かれている。

第4章　墳丘外埋葬

第1節　W—1～W—33の木棺墓群

2号墳から4号墳の東傾面に存在する木棺墓群である。等高線に従えば，294m～289mの間にあり，上端に位置するのは7号木棺墓であり，下端は33号木棺墓である。この高低差は約5mほどで，東西の幅は約24m50cmを測る。

遺物は，7号木棺墓においての棺上供献，18号木棺墓における掘り方内の埋置といった他には，ほとんどが破片であり，確実に個々の木棺墓に伴うものは少量である。

しかしながら，これら木棺群を検出する過程で，器台形土器と壺形土器が流れた状態で検出されており，後にこの下に17号木棺墓が確認された。この土器群は，（詳しくは第7章で述べる）この17号木棺墓に供献されたものではなく，これらの木棺群に供献されたものと考えるのである。

以下，個々の木棺墓及び出土遺物について述べてゆく。

W—1（図78）

土壙掘り方は，1m90cm×67cm，深さ43cm木棺1m36cm×35.5cmをそれぞれ測る。方位はN—W7°をとり，中央北よりに礫が存在する。

W—2（図78）

土壙掘り方は，2m40cm×(62cm)，深さ23cm，木棺1m32cm×34cmをそれぞれ測る。方位はN—W7°をとり，棺内南端に礫，及び同棺外に4個の礫が存在する。

W—3（図78）

土壙掘り方は，2m9cm×57cm，深さ34cm木棺1m45cm×32cmをそれぞれ測る。方位はN—W14°をとり，棺内中央北よりに4個の礫と，南棺外に約20cm大の礫1個が存在する。

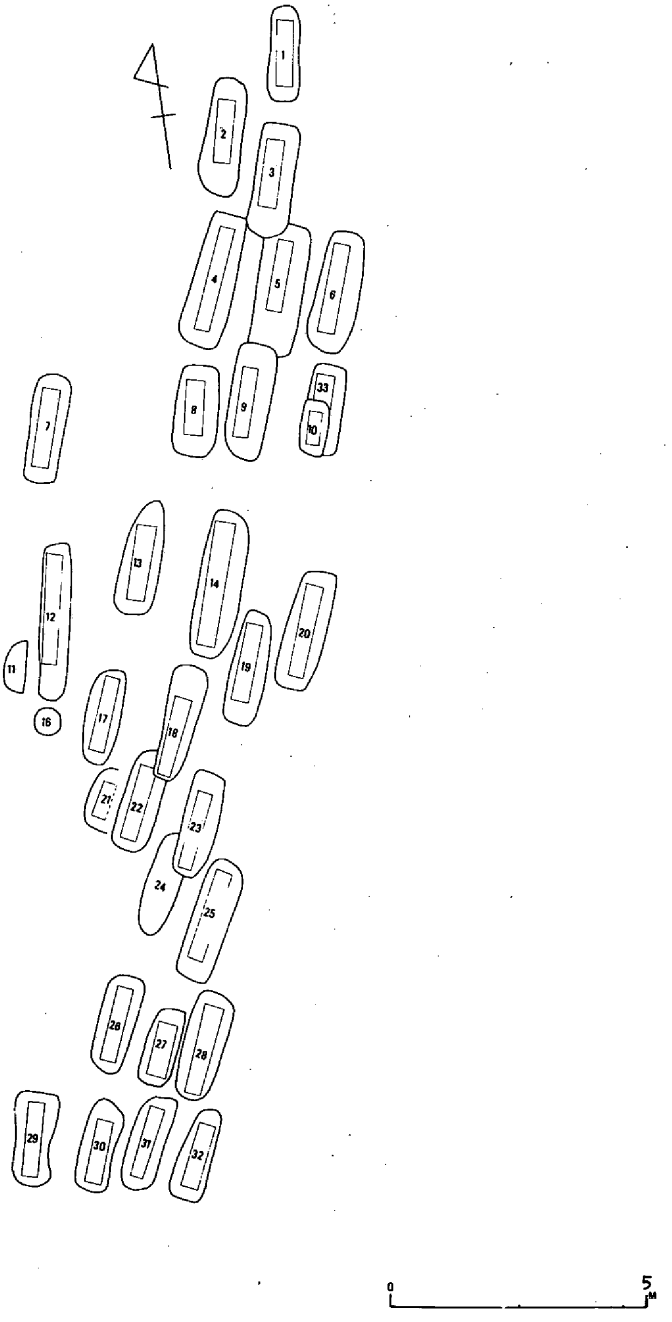
W—4（図78）

土壙掘り方2m70cm×82cm，深さ47cm，木棺2m20cm×35cmをそれぞれ測る。
方位はN—W19°をとり，中央から北にかけて，棺内外に礫が存在する。木棺跡はU字状になり，割り竹形木棺の埋置を考えられるが，第3紀層中の地山に掘り込まれておらず，又それと判断できる朱の面も確認されないなどのことから，それと判断は避けたい。しかし，木棺の位置が傾面であることなどからして，箱形木棺の裂れによってつくられたものと考える。3号土壙に切られる。

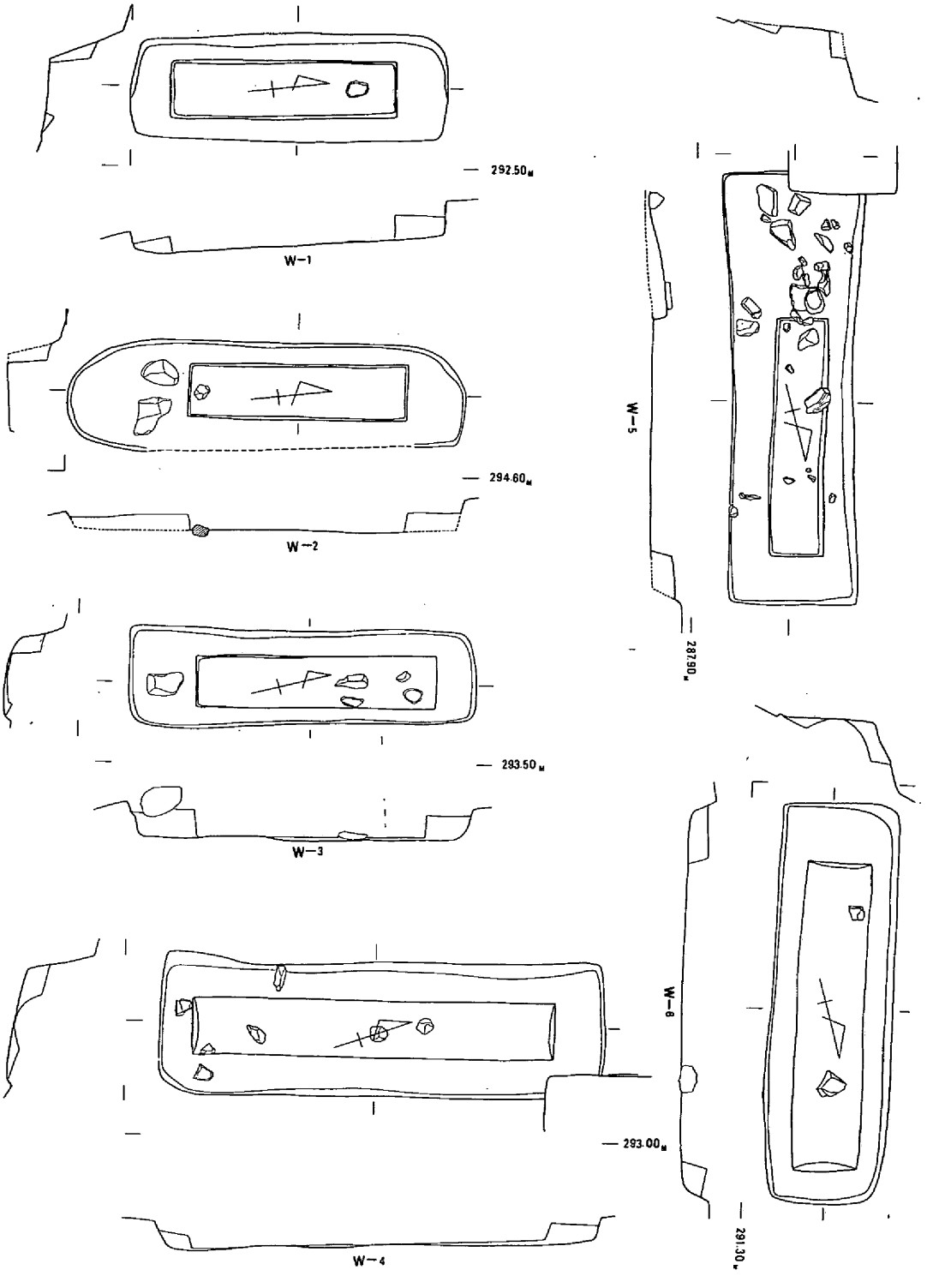
W—5（図78）

土壙掘り方2m18cm×47.5cm，深さ47cm，木棺1m47cm×21cmをそれぞれ測る。
方位はN—W15°をとり，北側，特に棺外に礫が多く存在する。3号土壙に切られる。

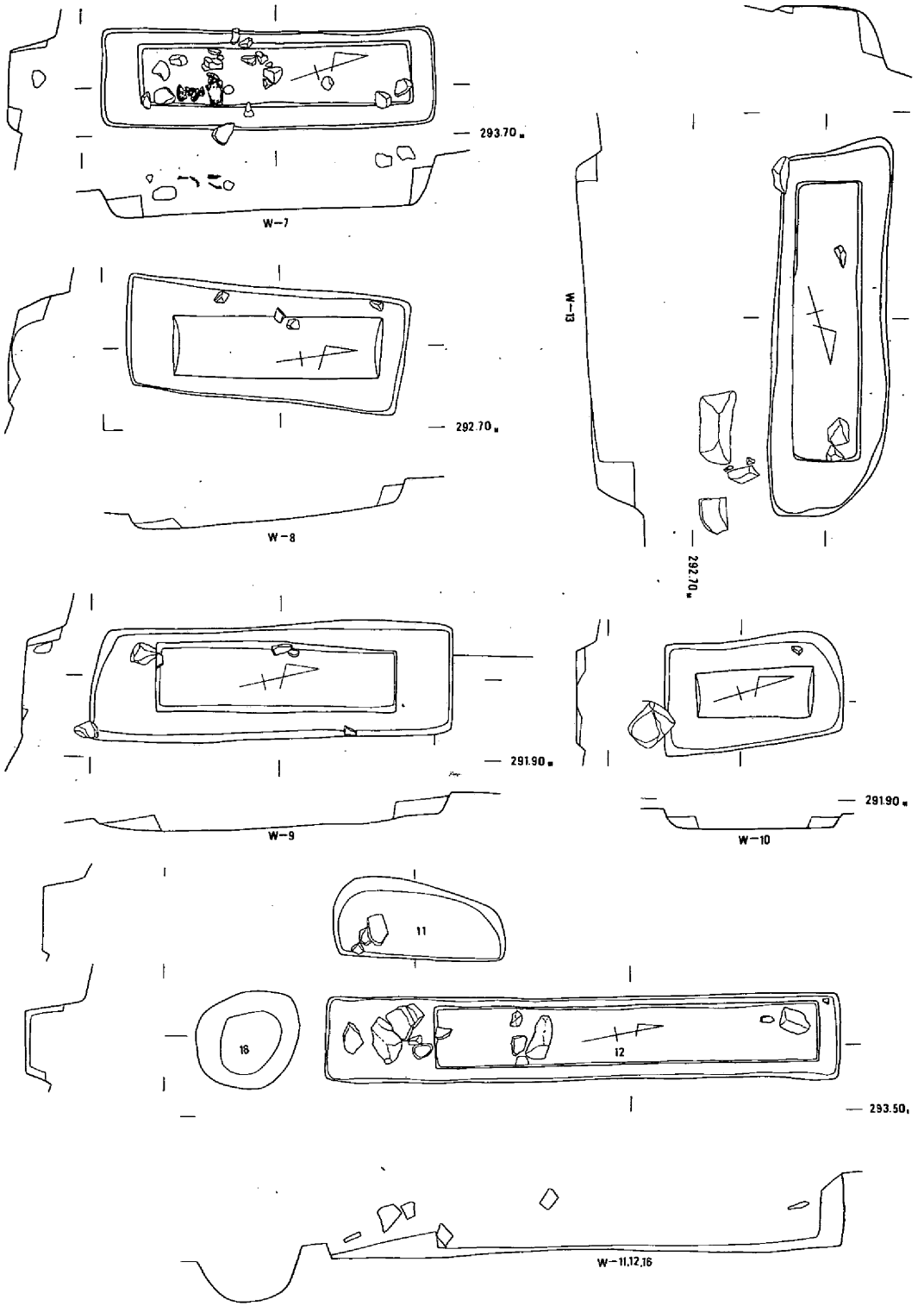
W—6（図78）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
33
11
12
13
14
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
5
M

第77図　東斜面木棺群



第78図　東斜面木棺墓


293.70m
W−7
292.70m
W−8
W−13
292.70m
291.90m
W−9
291.90m
W−10
11
16
12
293.50m
W−11,12,16

第79図　東斜面木棺墓

土壙掘り方2m47.5cm×74.5cm，深さ45cm木棺1m90cm×42cmをそれぞれ測る。
方位はN—W15°をとり，中央南北よりにそれぞれ1個づつ礫が存在する。棺の掘り方はU字状を示すが，W—4の木棺と同様な状態であったと考えられる。

W—7（79図）

土壙掘り方は，2m3cm×64cm，深さ29cm木棺1m68.5cm×39.5cmをそれぞれ測る。
方位はN—W17°をとり，ほぼ棺上に礫が存在するが，特に北よりに多い。検出された高杯形土器は，その北よりの礫のほぼ中央よりに棺上の供献とされた状態であった。

W—8（図79）

土壙掘り方は，1m70cm×68.5cm，深さ37cm，木棺1m26.5cm×38cmをそれぞれ測る。
方位はN—W7°をとる。棺の底面はU字状を示すが，前述した如く，この棺も箱形木棺を埋置したものと考えられる。

W—9（図79）

土壙掘り方は2m19cm×70cm，深さ26cm，木棺1m47cm×42cmをそれぞれ測る。
方位はN—W13°をとり，南側棺外に礫が存在する。5号土壙を切る。

W—10（図79）

土壙掘り方は1m8cm×66cm，深さ12cm，木棺70cm×29cmをそれぞれ測る。
方位はN—W17°をとり，南側掘り方にかかって礫が存在する。棺底はU字状を示すが，他のそれと同様に，箱形木棺と考える。

W—11（図79）

平面形態は楕円形を呈する。規模は1m4cm×47cm，深さ26cmを測る。土壙内南よりに礫が存在する。遺物は，墓壙より出土している。

W—12（図79）

土壙掘り方は，3m13cm×5m5cm，深さ34cm，木棺2m33cm×31cmをそれぞれ測る。
方位はN—W11°をとり，南より棺内，及び棺外に礫が存在する。

W—13（図79）

土壙掘り方は，2m23.5cm×68cm，深さ39cm，木棺1m72cm×41cmをそれぞれ測る。
方位はN—W16°をとり，北端の棺内に礫が存在する。

W—14（図80）

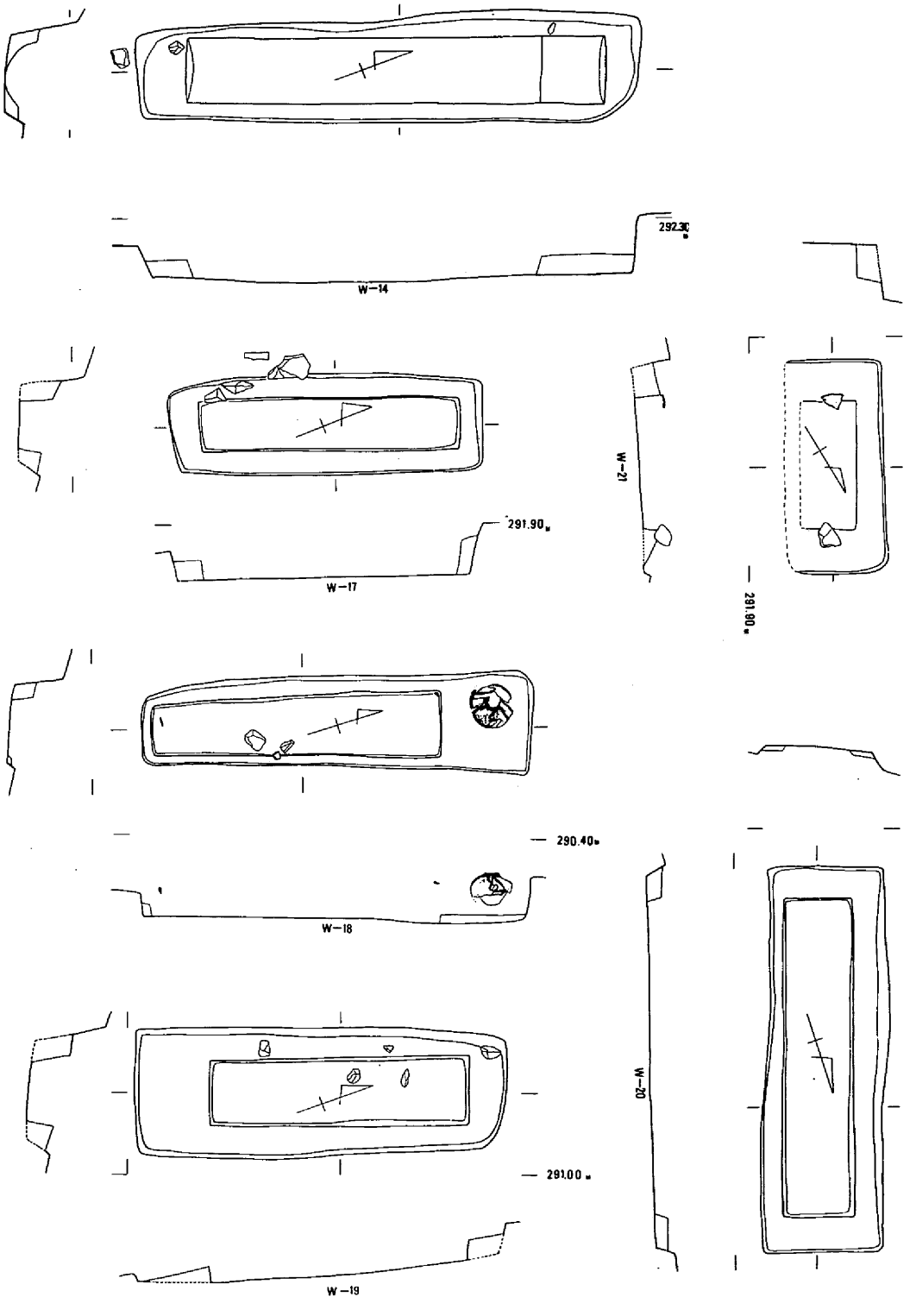
土壙掘り方は，3m4cm×64cm，深さ45cm，木棺2m54cm×40cmを測るが，北よりに段を有するので木棺の長さは，2mほどになる。
方位はN—W19.5°をとる。棺底はU字状を呈すが，箱形の棺と考えられる。

W—16（図79）

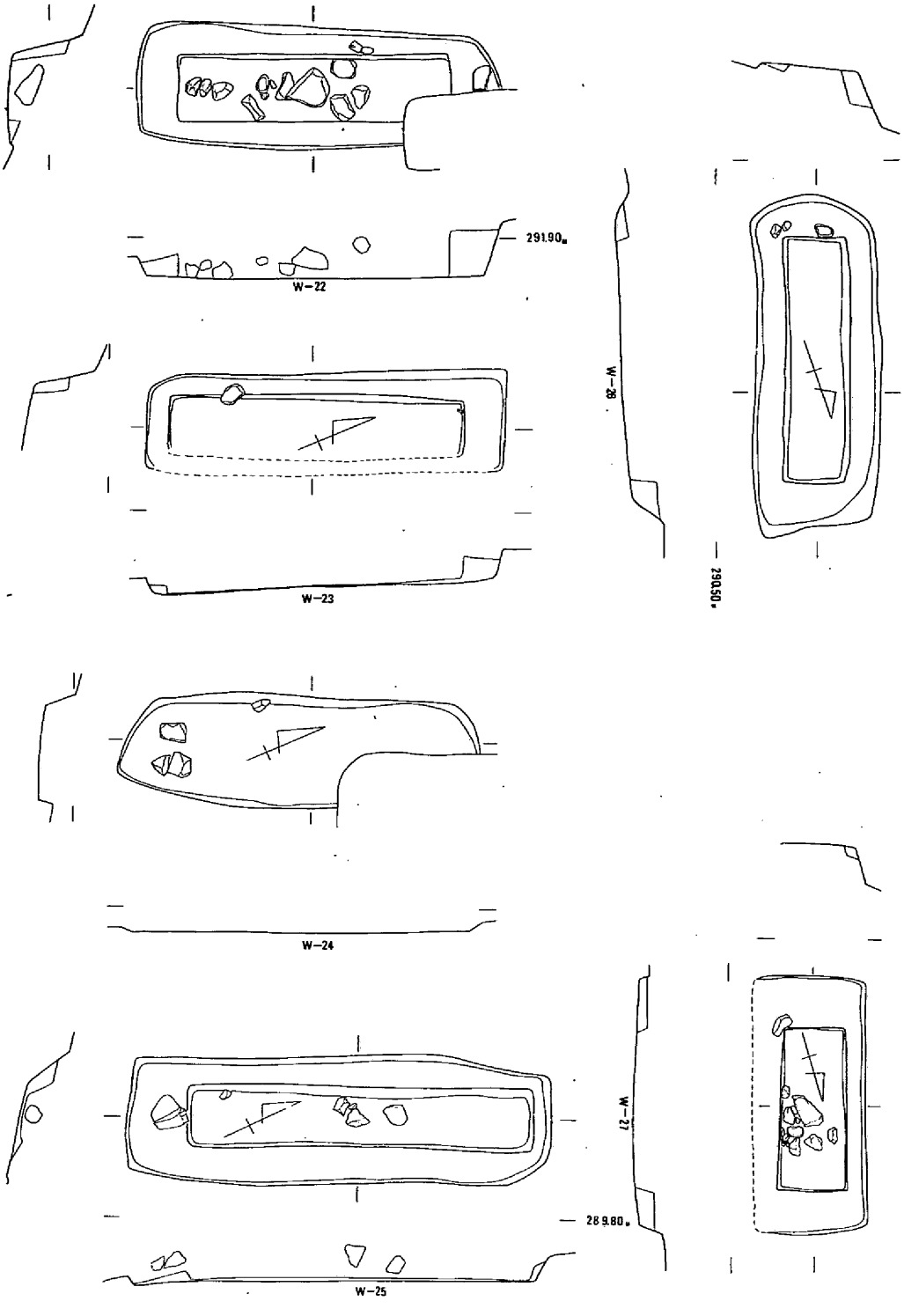
平面形態は円形を示し，規模は63cm×60cm，深さ34cmを測る。

W—17（図80）

土壙掘り方は，1m90cm×62cm，深さ40cm，木棺1m59cm×32cmをそれぞれ測る。



第80図　東斜面木棺墓



第81図　東斜面木棺墓

方位はN—W21.5° をとり，南より西側の棺外から掘り方にかけて礫が存在する。

W—18（図80）

土壙掘り方は，2m37cm×54cm，深さ33cm，木棺1m77cm×36cmをそれぞれ測る。
方位はN—W17° をとり，棺上中央に礫が存在する。

北側棺外掘り方内に，完形品（土圧の為押しつぶされている）の短頸壷形土器が供献として置かれていた。

W—19（図80）

土壙掘り方は，2m26.5cm×78cm，深さ48cm，木棺1m58.5cm×42cmをそれぞれ測る。
方位はN—W20° をとる。

W—20（図80）

土壙掘り方は，2m37.5cm×72cm，深さ14cm，木棺1m95cm×42.5cmをそれぞれ測る。
方位はN—W17.5° をとる。

W—21（図80）

土壙掘り方は，1m32cm×60cm(＋a)，深さ34cm，木棺80cm×34cm(＋a)をそれぞれ測る。
方位はN—W20.5° をとり，南端の棺上に礫が存在する。

遺物は，北端の棺上に特殊壷形土器の胴部破片を検出する。

W—22（図81）

土壙掘り方は，2m15cm×71cm，深さ33cm，木棺1m60cm×40.5cmをそれぞれ測る。
方位はN—W22° をとり，木棺を被うように礫が存在する。

W—23（図81）

土壙掘り方は，2m12cm×60cm(＋a)，深さ38cm，木棺1m75cm×40cm(＋a)をそれぞれ測る。
方位はN—W23° をとる。24号を切る。

W—24（図81）

土壙掘り方は，2m8cm×66cm，深さ20cm，木棺は残存が浅かった為，確認されなかった。
方位はN—E24° をとり，南端よりに礫が存在する。

W—25（図81）

土壙掘り方は，2m52cm×77cm，深さ26cm，木棺2m5cm×36cmをそれぞれ測る。
方位はN—E26° をとり，棺中央，及び北棺外に礫が存在する。

W—26（図81）

土壙掘り方は，2m×75cm，深さ36cm，木棺1m48.5cm×38cmをそれぞれ測る。
方位はN—W16° をとり，棺中央よりやや北よりに礫が存在する。

W—27（図81）

土壙掘り方は，1m55cm×64cm(＋a)，木棺98cm×40cmをそれぞれ測る。
方位はN—E16° をとり，棺中央よりやや北よりに礫が存在する。

W—28（図83）

土壙掘り方は，2m17cm×75cm，深さ23cm，木棺1m87cm×45cmをそれぞれ測る。方位はN—E18°をとり，棺中央よりやや南よりと北よりに礫が存在する。

棺底はU字状を示すが，他のこの種の状態を呈するものと同様なことから，箱形木棺を埋置したものと考えられる。

W—29（図83）

土壙掘り方は，2m11.5cm×78cm，深さ30cm，木棺1m62cm×38cmをそれぞれ測る。方位はN—E9.5°をとり，棺中央より西より掘り方にかけて礫が存在する。

W—30（図83）

土壙掘り方は，1m99.5cm×70.5cm，深さ42cm，木棺1m27cm×37cmをそれぞれ測る。方位はN—E21.5°をとり，北側掘り方に礫が存在する。

W—31（図83）

土壙掘り方は，2m2cm×58.5cm，深さ34cm，木棺1m58cm×30.5cmをそれぞれ測る。方位はN—E25.5°をとり，棺北よりに礫が存在する。

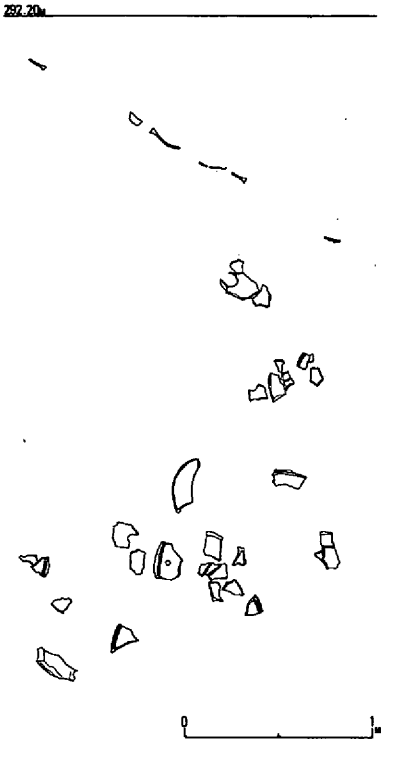
W—32（図83）

土壙掘り方は，1m99cm×77cm 深さ35cm，木棺1m48cm×39cmを測る。方位はN—E25.5°をとる。

W—33（図83）

土壙掘り方は，2m1cm×72cm，深さ32cm，木棺1m58cm×35cmをそれぞれ測る。方位はN—E16°をとり，棺内北よりと掘り方外に礫が存在する。

棺底はU字状を呈するが，前述した如く箱形の棺の埋置と考える。

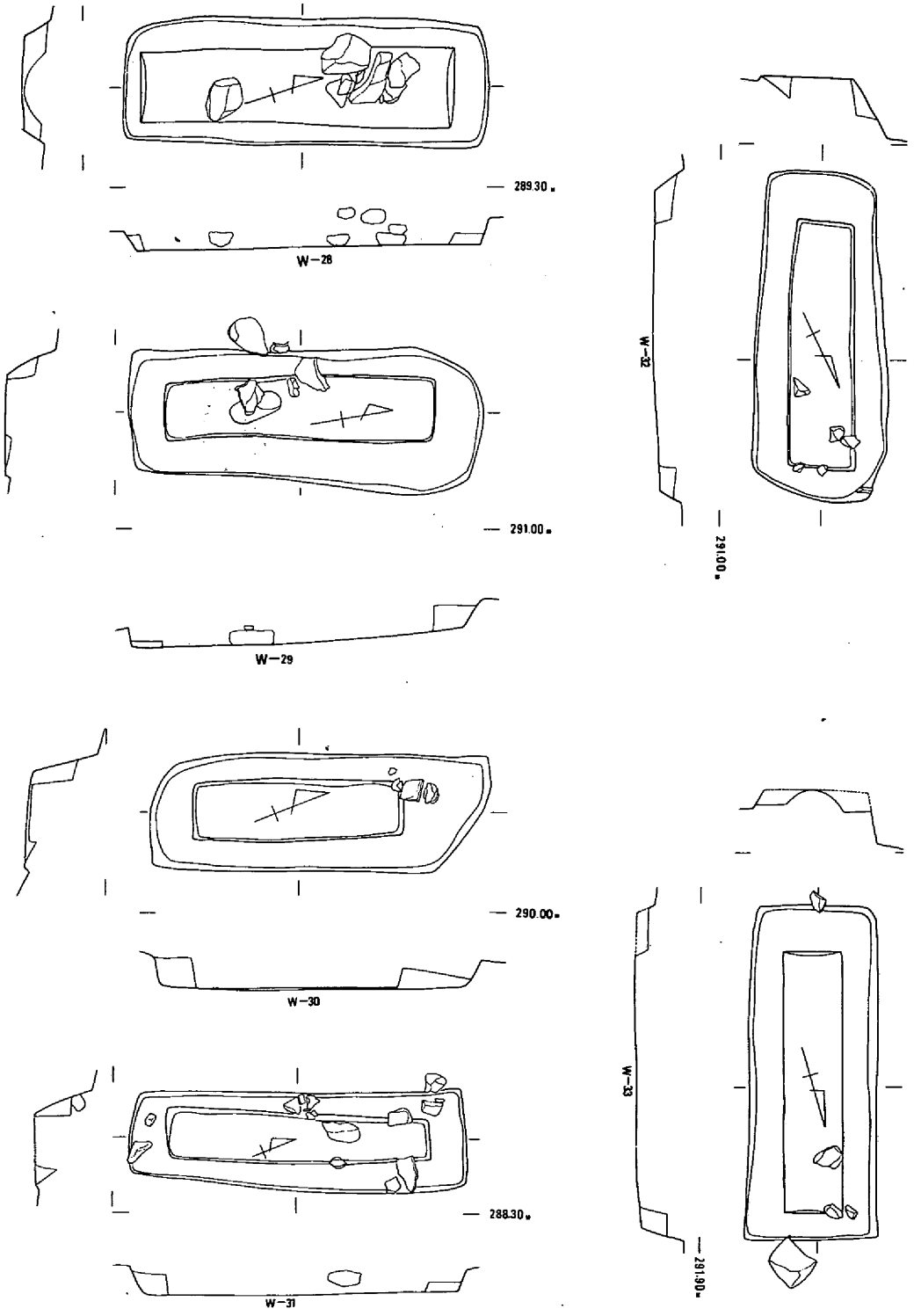


第82図　東斜面器台・壷出土状態

第2節　出土遺物

1．東斜面器台周辺出土土器

W—T—11（図92）（図版28）は，口径36cm，台部径38cm，器高18.4cmを測る。形態的には，かなり遍平な器台形土器である。口縁端は大きく上下に拡張し，5本の凹線を施こす。台端部は内側に屈曲し，凹線が施こされている。脚部は上下4個づつの円形透しがあり，その穿孔は非常に丁寧であり，穿孔に伴う粘土は食み出しは見られない。この円孔の間に，3本の沈線を施こす。又，台端部に4本の凹線，杯



第83図　東斜面・西斜面木棺墓

部内面に3本の凹線をそれぞれ施こしている。

整形痕は，器面の風化が著じるしく詳細な観察は出来なかったが，ほぼ全面に篦磨きがみられる。台部内面は措置の篦削りがなされる。丹塗りがされる。

胎土は金雲母で細い石粒を含み，特殊系の土器のそれと同じである。焼成は良好であり，色調は赤褐色を示す。

なお，台部に故意に打撃を与えたと考えられる部分がみられる。

W—T—10（図92）（図版29）は，胴部破片である。出土状態，及びW—T—11の器台形土器の台部径に合うことなどから，器台とセットになった特殊壷形土器である。

胴部に残る凸帯は2本であるが，3本の凸帯を有していたものと考えられる。凸帯断面形は，やや丸味を持つて貼り付けている。

凸帯面は，横ナデ，下は横位と縦位の細い櫛状工具により整形されている。内面は，篦削りによっている。丹塗りがなされる。

胎土は黒雲母，細砂を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示す。特殊系の胎土と同じである。

W—T—12（図92）（図版28）は，口径14cmを測る壷形土器である。撫肩の肩部からやや内傾する長頸部をもち，口径部分は外反し，端部を直立さす。

口径部内面に篦状工具による凹部をもつ，器壁の荒れが著じるしく，整形痕などの観察はできなかった。

胎土は金雲母で石粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。特殊系の土器胎土と同じである。

W—T—4（図93）は，特殊壷形土器の肩部の破片である。断面形が楕円状を呈する凸帯を貼りつけ，凸帯上部に3本の凹線を施こす。

胎土は黒雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は暗褐色を示す。

2. 東斜面木棺墓群出土土器

W—1—13（図92）は，推定口径12.2cmを測る壷形土器である。口径部を上下に拡張させ，端面下方に横ナデの凹部つくる。

胎土は微砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

W—7—9（図93）は，杯部径20cm，台部径9.6cm，推定器高14cmを測る高杯形土器である。杯部は屈曲し外へ広がり，端部を拡張する。凹線などは施こされていない。台部は端部が内に屈曲し，上下に2本の沈線を施こす。台部の円孔透しは，2個1対である。

杯部器壁の内外面は，剝離が著しく図示できなかったが，篦磨きがみられる。脚部から台部にかけての内面は，縦位の後に横位の篦削りがみられ，台部は横位の篦削りがなされる。

胎土は石粒を多く含み，焼成は脆弱気味である。丹彩りがなされる。

W—11・19—6（図93）（図版29）は，凸帯部が3本貼りつけられているのが解る唯一の小形特殊壷形土器である。算盤玉形の胴部に付く3本の凸帯はいずれも貼り付けで，断面形は楕円状を示す。上段凸帯の上面に4本の凹線を施文する以外，凸帯面には何らの文様も認められなかった。底部は平

底となると考えられるが，焼成後の穿孔がなされる。

整形は，凸帯部分は横ナデにより，内面は箆状工具による削りがなされる。

胎土は黒雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされている。特殊系の胎土と同じである。

なおこの破片は，11号木棺墓壙上面と19号木棺北より出土した破片が接合した。

W—11—5（図93）は，口径部径20cmを測る壷形土器か，器台の口縁部である。口縁部に4本の凹線を施文し，丹塗りされている。

胎土は金雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示す。特殊系の胎土と同じである。

W—11—7（図93）は，台部径14.4cmを測る高杯形土器の台部である。端部は外方に拡張部を持って屈曲する。屈曲部には，横ナデによる幅広の凹部を有する。

胎土は石粒を含み，焼成は良好である。色調は淡黄褐色を示す。

W—11—17（図92）は，器台形土器の杯部下半から脚部上半にかけての破片である。

外面は箆磨き，内面は横位の箆削りがみられる。

胎土は金雲母を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色で，丹塗りされている。特殊系の土器の胎土と同じである。

W—11—8（図93）は，台部径15cmを測る高杯形土器の破片である。端部に屈曲部をもち，箆状工具の先端による沈線を1本施文している。外面は縦位の箆磨き，内面は横位の箆削りがみられる。

胎土は金雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。

W—18—18（図94）（図版28）は，口径9.7cm，底部径7cm，器高21cmを測る短頸の壷形土器である。口縁部は短かく外反して終り，端部に沈線を施こす。肩部は強く張り，脚部大径は中ほどよりやや上位にある球形の細部につながる。底部は平底を呈する。肩部より上半は，細い櫛状工具と箆磨きと推定されるが，器面の風化のため図示できなかった。胴部上半より下は，縦位の荒い櫛状工具による削りのあと，箆状工具による磨きがされる。底部は箆磨きがされる。内面は，頸部から胴部下半にかけて，箆状工具の大と小の2者によって削りがおこなわれている。底部にかけては，縦位の箆削りがみられる。

器面の全体的な調整は非常に丁寧であり，箆磨きによる凸凹もほとんど観察されない。

胎土は黒雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。特殊系の胎土と同じである。

W—18—3（図93）（図版29）は，特殊壷形土器の破片である。凸帯は貼り付けされ，断面形が楕円状を示す。凸帯上面に4本の凹線が施文される。

内面は，横位の箆削りがされる。

胎土は金雲母と黒雲母，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。特殊系の胎土と同じである。

なお，この破片は他に3号墳よりの東傾面，及び同器台周辺より出土している。

W—19—14（図92）は，特殊壷形土器の肩部から凸帯にかけての破片である。凸帯は貼り付けで，

断面形が楕円状を示す。凸帯上面に4本の凹線を施文する。

胎土は黒雲母で細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りがされる。

W—22—15（図92）は，特殊壷形土器の肩部から凸帯にかけての破片である。貼り付け凸帯をつけ，凸帯上面に5本の凹線を施文する。凸帯部の断面形は，楕円状を呈する。

内面は，篦削りをおこなっている。

胎土は黒雲母で，細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。

W—22—16（図92）は，特殊壷形土器の凸帯から底部にかけての破片である。内面は横位の篦削りによる。

胎土は黒雲母で細砂を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示し，丹塗りされる。特殊系の胎土と同じである。

この他に，図示したW—1及びW—2は木棺群検出の過程で検出された破片である。

第3節　S1～S13の木棺墓及び甕棺

S1～S13は，2号墳から6号墳にかけて，墳墓の区画より外れて存在する一群である。東傾面の木棺群に比して，その集中度はみられない。

遺物は，S—4の壷棺に用いられたもの，S—1号，S—7号，S—11号などの棺上供献がみられる。

以下，個々の木棺墓及び出土遺物について述べてゆく。

S—1（図84）

土壙掘り方は，2m53cm×93cm，深さ58cm，木棺1m88cm×45cmをそれぞれ測る。方位はN—W10°をとる。中央より南よりにかけて，供献用の破砕された土器群と礫が棺上面で検出された。

S—2（図84）

土壙掘り方は，1m58cm×76.5cm，深さ45cm，木棺1m8cm×38cmをそれぞれ測る。
方位はN—W32.5°をとり，北棺外に礫が存在する。

S—3（図84）

60cm×55cm，深さ34cmを測る平面形態が楕円形を示す土壙である。

S—4（図85）

2号墳の墳丘表土剝ぎの過程では確認できず，墳丘断ち割りで検出されたものである。したがって，西側部分は掘り過ぎており，棺も又破砕してしまったが，壷棺の埋置の状態とその周囲を囲ったと考えられる礫は，把握することができた。

平面形態は隅丸方形を呈し，規模は54cm(＋a)×53.5cm，深さ42.5cmを測る。角礫は北辺から東，及び南にかけて存在する。壷棺はその角礫の中に据えるように，口縁部を東に向け，その口縁部に蓋をするように，半分に割られた壷が口縁を上にした状態で検出された。

S—5（図85）

土壙掘り方は，2m27cm×91cm，深さ71cmを測る。両小口には小口溝を有し，北小口よりに西傾面に延びる長さ約2m20cm，幅72cmのスロープ状の掘り込みが付けられている方位はN—W24°をとる。

S—6（図85）

土壙掘り方は，1m29cm×63cmを測り，木棺痕跡は確認されなかった。
方位はN—W41.5°をとる。

S—7（図86）

土壙掘り方は，1m86cm×81cm，深さ30cm，木棺1m53cm×42cmを測る。両小口にはそれぞれ小口溝を有する。方位はN—W38°である。遺物は，北小口よりに特殊壷が供献されていた。

S—8（図84）

土壙掘り方は，2m60cm×1m8cm，深さ54cm，木棺2m13cm×54cmをそれぞれ測る。
方位はN—W5°をとり，南よりに棺上及び棺内に礫が存在する。

S—9（図84）

土壙掘り方は，2m32cm×72cm，深さ45cm，木棺1m98cm×44cmをそれぞれ測る。
方位はN—W6.5°をとる。

S—10（図84）

この木棺墓は，図示した如く重複している可能性も考えられる。しかしながら，掘り方底の中心がずれるだけで，木棺それ自体が掘り込みより浅くとも問題はないと考えられる。又，供献の土器類と礫との状態から重複はないものと考えられる。

土壙掘り方は，2m6cm×1m31cm，深さ（遺物が検出され，地山の掘り込みが認められた地点からの深さである）92cmであり，他方木棺については，1m51cm×53cm，深さ60cmを測る。方位はN—W7.5°をとり，掘り方南端土面に，37cm×26cmの礫が存在する。

遺物は，その礫の周辺と西より，さらに北よりの掘り方上面にそれぞれ供献用の土器が検出された。

S—11（図86）

土壙掘り方は，2m23cm×78cm，深さ29cm，木棺1m49×49cm×43cmをそれぞれ測る。
方位はN—W6.5°をとり，北掘り方上面に礫が存在する。

S—12（図86）

この土壙は6号墳の墓域に接してあり，木棺の形態が割竹状である。さらに内容的には，6号墳の第1主体，第2主体と相い通じる。このようなことからすれば，時期的には，6号墳の時期と相前後するものと考えられる。

土壙掘り方は，3m×1m35cm，深さ53cm，木棺2m49cm×51.5cmをそれぞれ測る。棺はU字状を示す。方位はN—W22°をとり，木棺を被うように礫が存在する。

1. 出土遺物

西斜面第1木棺墓棺上出土土器

S—1—1（図91）（図版30）は，口径12cm，器高9.8cmを測る甕形土器である。頸部がくの字状に

屈曲し，複合口縁をつくる。口縁部には上部に幅広の凹線と，下部にはそれより狭い凹線の２本を施こしている。胴部最大径は中位にあり，口縁部の径よりわずかながら小さくなっている。底部は丸底である。

外面調整は，胴部中位から下半にかけて縦方向の荒い櫛状工具による整形を行い，さらにその上に下方から上方に向けて，篦状工具による磨きをおこなっている。胴下半から底部にかけては，横位の荒い櫛状工具による整形をおこなっている。さらに，胴部上半は横位の篦状工具により，下半は細い櫛状工具により調整がされている。

胎土には石粒が多く，金雲母も含まれ，焼成は良好である。色調は褐色を示す。口縁部内面から底部外面にかけて丹塗りがされている。

なお，金雲母を含むが，他の特殊系統の土器の，所謂，赤褐色系の土器の一群とは異なる。

Ｓ－１－２（図91）（図版30）は，口縁17cmを測る甕形土器である。口縁部は複合口縁を示し，胴部は張らず，なだらかに底部に移行するものと思われる。複合口縁は，横位の篦磨きにより平坦面をつくる。

胴部外面は，器面が荒れており調整方向は不明であるが，篦状工具による磨きがなされる。口縁部内面には，外面と同様に篦状工具による整形がみられる。胴部は横位の櫛状工具のあとから，横位の篦削りをおこなっている。

焼成は良好で，色調は褐色を示す。胎土中に金雲母を含むが，Ｓ－１－１の土器と同様に特殊系の胎土ではない。

Ｓ－１－３（図91）は，口径17.9cmを測る高杯形土器の杯部の破片である。杯部が外方に大きく開き，端部は下方に屈曲する。内面は横位の篦状工具による削りがみられる。

胎土は石粒を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

Ｓ－１－４（図91）は，高杯形土器の杯部の破片である。Ｓ－１－４と同様，外に開く器形をとると考えられるものである。器面の剝離が著じるしく，整形の観察は困難であった。

胴部は石粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

Ｓ－１－５（図91）（図版30）は，口径18.5cm，台部径17cm，器高16.4cmを測る器台形土器である。杯部口縁部端を上下に，やや内傾気味に拡張し，８本の凹線を施こす。脚部から台部へはなだらかに移行し，台部端を内側に屈曲さす。脚部には３個１対の円形穿孔が４ケ所みられ，上方の円孔の間に６本の沈線が施こされている。台部端の屈曲面は，ナデによる整形がなされ，若干凹線になる部分もみられるが，この部分の器面が荒れている為詳細には観察できなかった。

杯部内外面は縦位の篦磨きがみられ，脚部から台部にかけては，方向は不明であるが篦状工具による磨きがなされている。脚部から台部にかけての内面は，横位の篦削りがなされている。

杯部内面から外面及び台部内面にかけて丹塗りされている。

胎土は石粒及び金雲母を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示す。特殊系統の胎土と同一のものである。

西斜面甕棺

S－4－1（図97）（図版29）は，口径16cm，器高27.3cmを測る。上下に，ほぼ中央から割って甕棺の蓋として用いた壷形土器である。口縁部は複合口縁になり，胴部最大径は上半にあり，底部は明瞭な陵線をもたず丸底風である。口縁には沈線状の凹線を施こし，内面も横ナデによる凹部を有する。頸部はやや立上がり気味で凹線を施こす。胴部外面整形は，胴部上半まで細い篦状工具による削りがみられる。内面は，頸部において篦状工具による凹線がみられ，胴部中ほどにかけて横位の，底部にかけては縦位の削りがみられる。肩部においては，篦削りの後から押圧による調整がなされている。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

S－4－2（図98）（図版29）は，口径17.2cm，器高32.4cm，底部径4.5cmを測る甕形土器である。複合口縁を示し，下方に拡張されていない。頸部から胴部への移行は肩を張らず，胴部最大径は上位にあり器形を示す。

口縁部は横ナデによる整形により幾分凹凸部分がみられる。外面整形は，頸部から肩部にかけて横位の篦磨き，胴部下半は風化が著じるしく観察できなかったが，ほぼ同じように胴部上半から底部にかけて荒い櫛状工具による。底部についても同様である。内面は頸部から胴部中ほどにかけて横位の篦削り，それ以下は縦位の篦削りがなされる。底部は押圧による整形がみられる。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

S－7－1（図91）（図版29）は，口径11.2cm，推定器高14.6cmを測る小型特殊壷形上器である。口縁部は外方に開く直口を有し，端部に稜をもつ。胴部は算盤玉形を示し，削り出しの手法による凸帯が2本つける。底部は焼成前の穿孔がみられる。

器壁の風化が著しく，詳細な観察はできなかったが，口縁部内面は縦位・胴部外面は横位の篦磨きと削りがみられた。

口縁部内面から外面全体に丹塗りがなされている。胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

全体の器壁は荒れており，整形の状態も荒い。

S－10－1（図95）は，底部径5.8cmを測る壷形土器である。胴部最大径は上位にあり，強く肩が張る。底部は平底で，焼成後の穿孔がみられる。

外面整形は，細く深い櫛状工具による整形ののち，胴部最大径部分は横位で，他の肩部と胴部下半については，縦位の篦磨きがなされる。内面は，肩部が横位，以下縦の篦削りがなされている。

胎土は石粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。丹塗りされている。

S－10－2（図95）（図版30）は，口径12.9cm，推定器高12.4cm，底部径3.7cmを測る甕形土器である。やや立ち気味の頸部を有し，口縁部は外方に開き気味の複合口縁をもつ。底部は平底である。口縁部は数本の凹線を施こした後，横ナデを行なっている。肩部には櫛状工具による刺突が施こされている。

胴部外面整形は，器面に凹凸が残るほど明瞭な篦状工具による整形がなされる。内面は頸部から胴

部下半にかけて横位，底部は縦位の篦削りがなされる。丹塗りがなされる。

胎土は細砂を含み，焼成は良好である。色調は淡褐色を示す。

S—10—3（図95）（図版30）は，口径20cm，器高径13.4cm，台部径11.4cmを測る高杯形土器である。杯部は，口縁部が短かく屈曲して外方へ広がる端部を有する。台端部は屈曲し，櫛状工具による沈線状の凹線を施こしている。脚部は3個1対の円孔を3ケ所にあけている。

整形痕は，器面の風化が著しく，細い観察は出来ないが，篦状工具による調整がなされているようである。脚部は横位の篦削りがなされる。丹塗りがなされる。

胎土は石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

第4節　W—34の石棺墓

W—34は10号墳墓の墳丘裾部より下方の東斜面に位置している。地形測量の段階では全く何の変化も認められず，10号墳及び，11号墳の墳端確認の過程においてその所在が確認された。（図87）（図版24—3，4）

墳墓は，尾根に平行して斜面高所と墓域を区切る半円形の周溝を掘っている。周溝は，長さ5.10m幅（中央部）0.55m，深さ0.55mを測り，南および北側は斜面に沿って自然消滅している。

周溝中央部東端より60cmには周溝と平行して箱式石棺を構築している。また周溝と箱式石棺の間には，箱式石棺壙上面より約15cm上部にほぼ水平に5～20cmの割石が東西0.7m，南北1.6mの範囲に置かれていた。これらの石は溝上部より滑り落ちてきたようなものではなく，溝を埋めたかあるいは埋まった時期に置かれたものと考えられ，どのような意図をもって造られたのか判断しがたい。

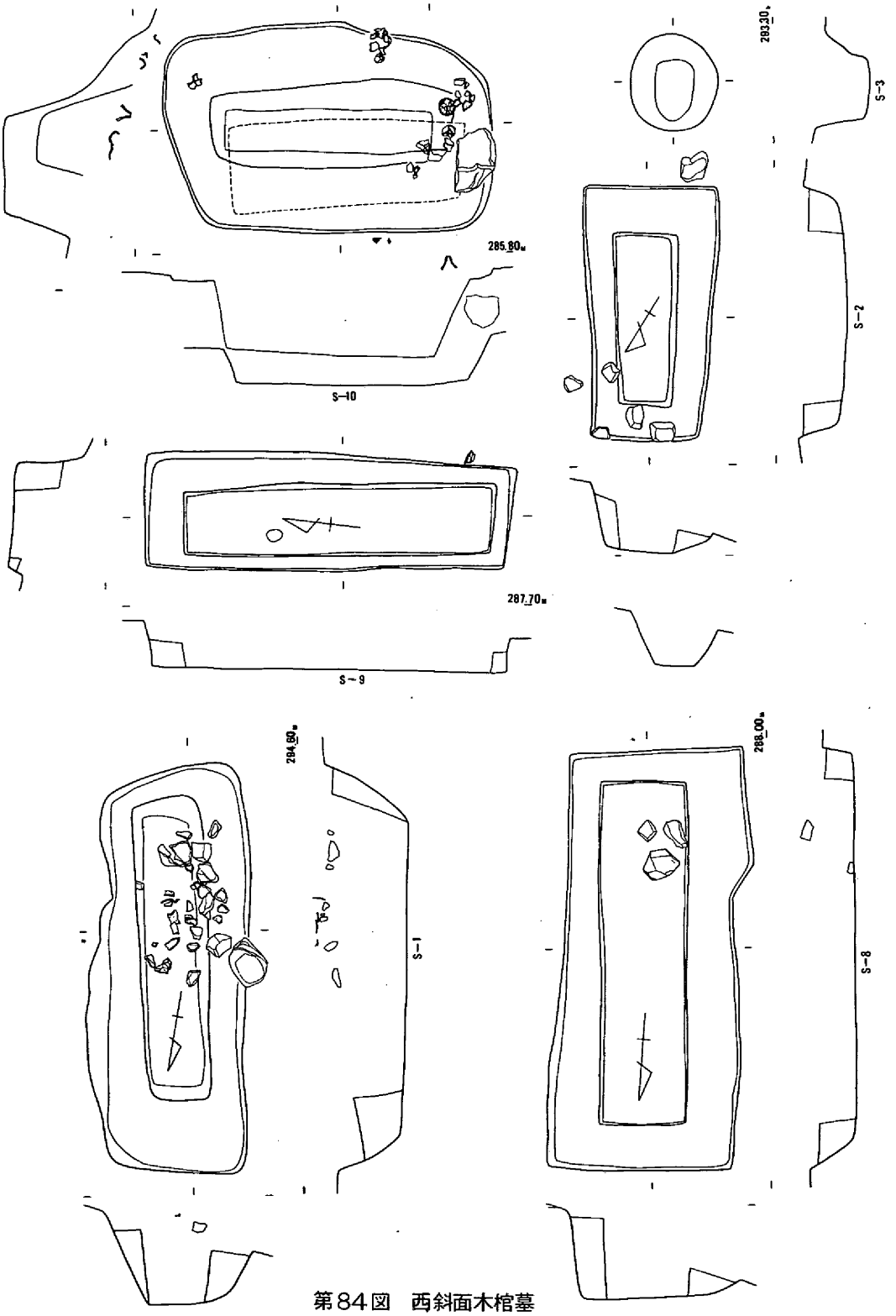
箱式石棺は，周溝の東端より0.60mの位置に，尾根と平行してほぼ南北に造られている。

土壙は，長さ1.12m，幅0.40mの隅丸長方形で，深さは約0.30mを測る。土壙壁は南壁を除いて急傾斜で一気に掘り込んでおり，土壙底には側石の安定を計るための溝などは認められない。

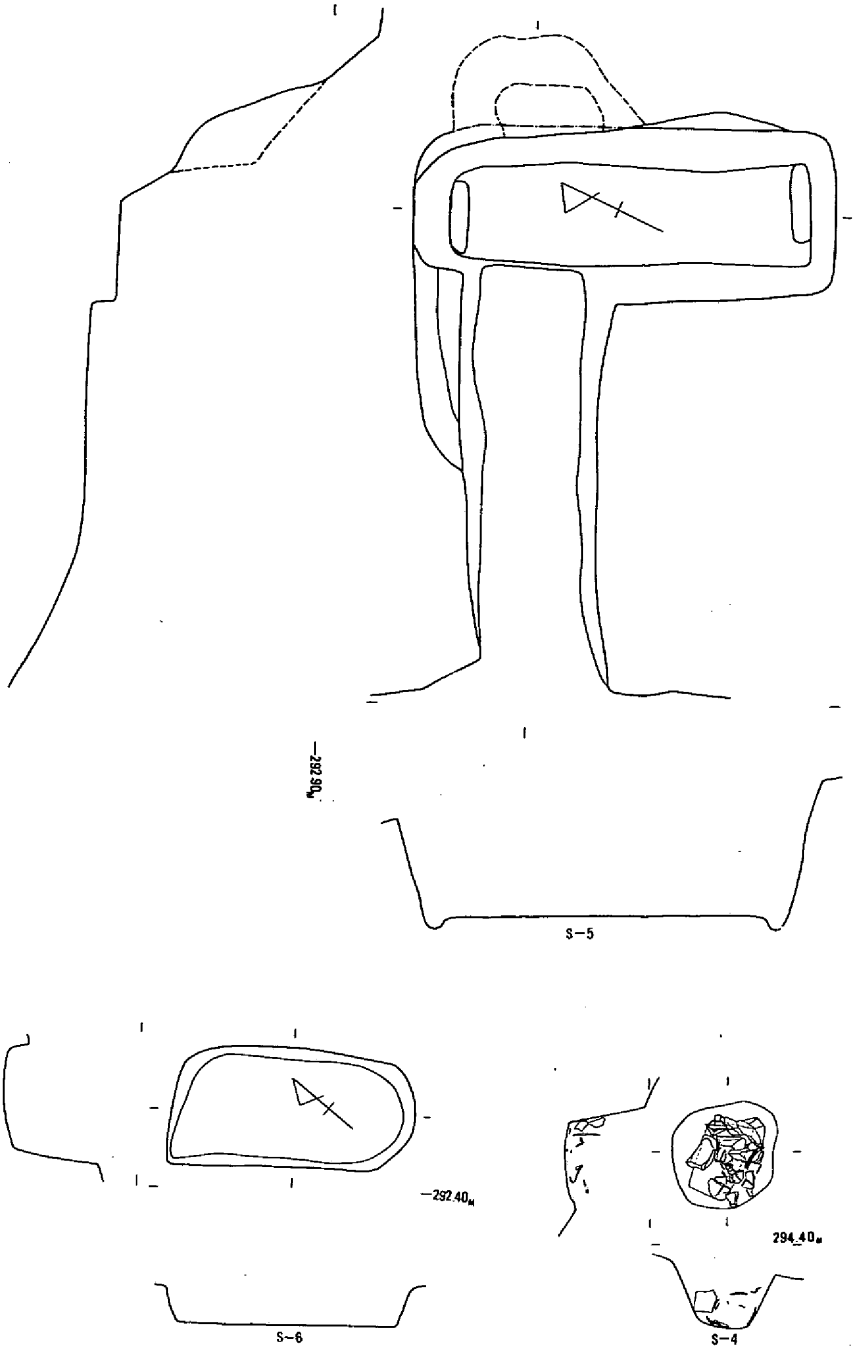
石棺を組んでいる東西の長側石は，ともに3枚を並べてたて掛けている。一方，南北の小口部にあたる短側石は，各1枚ずつで長側石の内側に組まれている。石棺の内法は長さ0.82m，南端部幅0.18m，北端部幅0.20m，深さ0.24mを測る。

天井石は，4枚の板石を並べて棺身を蓋しており，さらにその上には同様の板石数枚で各天井石の隙間を蓋している。

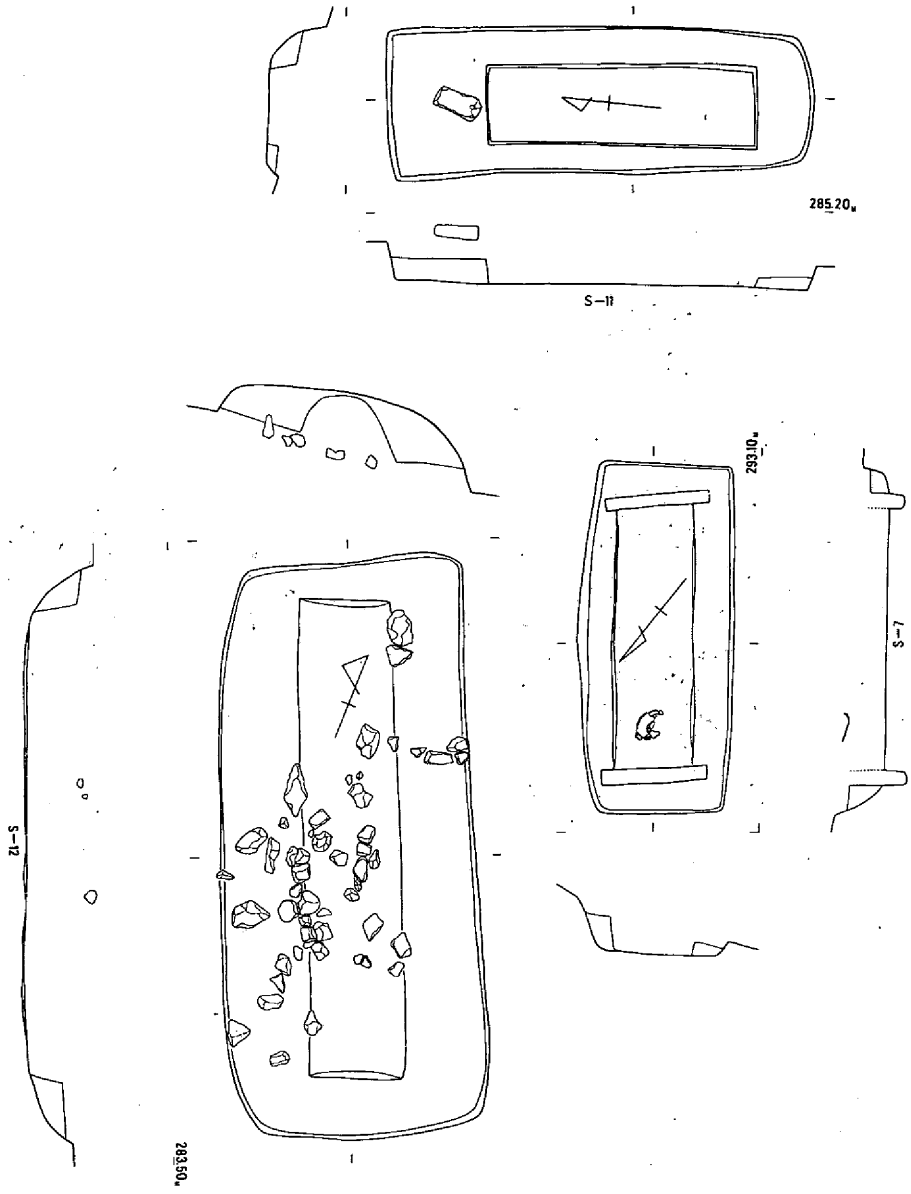
棺床は，土壙底より南端で2cm，北端で4cmの厚さに赤褐色土を敷いており，北端には枕石を置いている。枕石は，15×8cm，厚さ2.5cm，長方形の扁平石を棺床に置いて頭部を置くところとしており，さらに頭部の安定を計るために東西の両側石に沿って厚さ1.5cmと非常に薄い板石が2枚ずつ置かれている。なお，棺内には遺物は認められなかった。



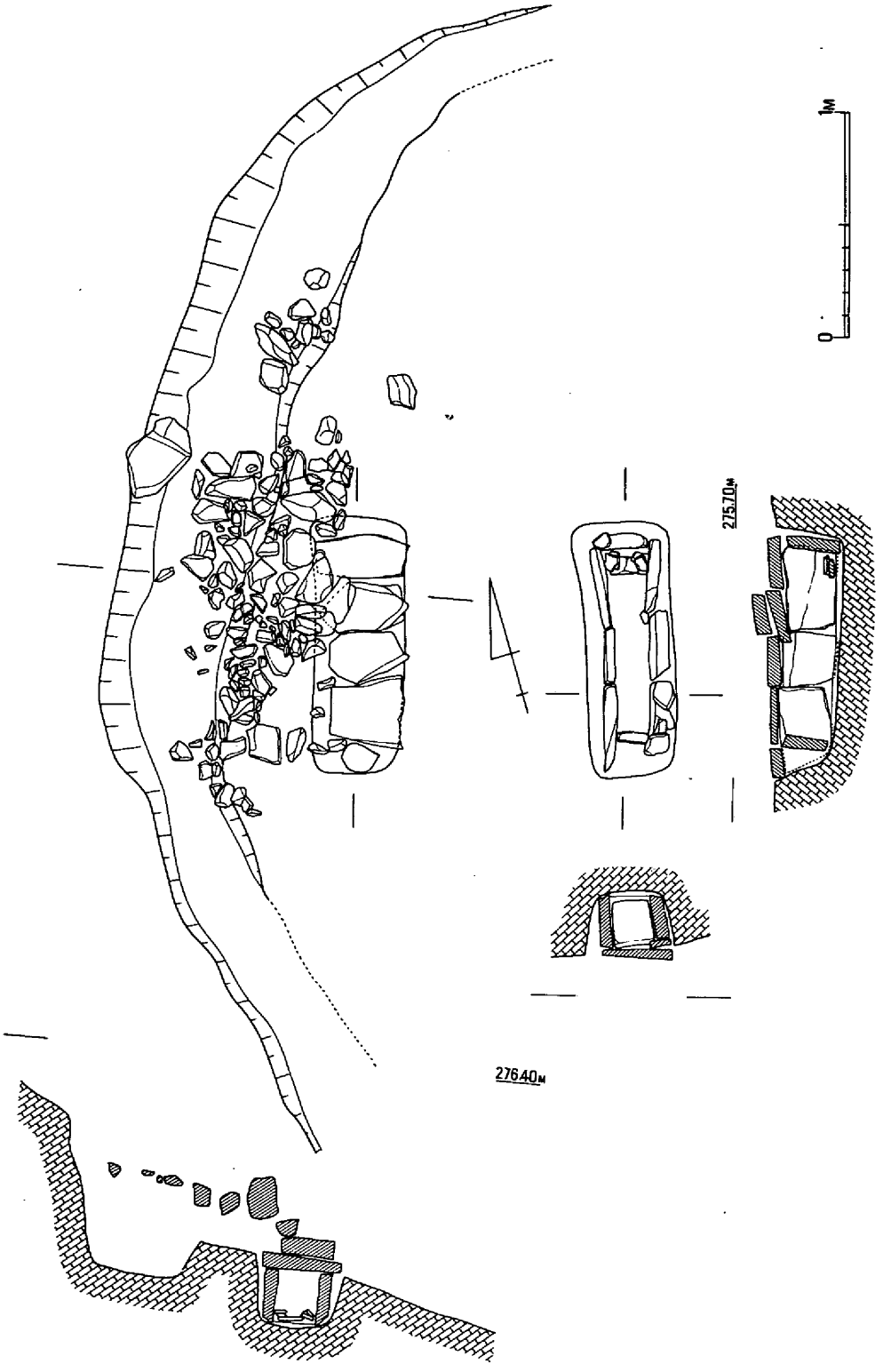
第84図　西斜面木棺墓



第85図　西斜面木棺墓



第86図　西斜面木棺墓



第87図 W－34

1. 出土遺物

W—34（図96）は，棺上面を被っていた集石中より出土したものである。口径9㎝を測る。頸部は緩やかに外反し，端部を上方へ立ち上がらせる。胴部最大径は，中位にある。

器壁の風化が著しく，整形痕などの観察は出来なかった。胎土は，石粒を多く含み，焼成は脆い。色調は褐色を示す。

尚，胎土，焼成は，10号墳墓第2主体出土の鼓形器台などのそれと同一である。

第5章　中世墳墓と近世墓

第1節　中　世　墳　墓

調査に入る以前にすでに，地表に礫の集石が露出していた関係から，墳墓群に伴なうものとして考えていた。集石を露出していく過程で，中央に円形状の炭化粒を非常に多く含む部分がみられ，さらには，礫の間より瓦器質の縞目の叩きを有する土器片を検出したことにより，これら集石が墳墓に伴なわないものであることが明らかになった。

土壙は約1m70cm前後の円形のもので，周囲を礫により囲んでいる。礫は室をつくることはなく，土壙上面の周囲に円形状に集石している。土壙内面は，炭化粒が入れられており，中ほどで宝篋印塔の笠の部分が検出された。この出土遺物から，礫の間から出土する縞目の叩きを有する土器片は，骨甕として用いられたものと思われるのである。

宝篋印塔の出土状態からすれば，2次的な手が加えられたと考えられる。基礎及び塔身は11号墳上にあったものが，用地外へ移動されている。

1. 出土遺物

宝篋印塔（図版10—1）

軒下幅18.3cm，軒幅25.7cm，軒上幅13.3cm，高さ21.4cm，露盤凹部深さ4.9cm，軒下凹部深さ2.7cmをそれぞれ測る。四隅の装飾突起は，外方に開き，軒上に5段，軒下に2段の造り出しを有する。埋土中より検出されたが，若干の風化を受けている。

甕形土器（図90）

推定口径21.5cmを測る，胴部を欠する甕形土器である。頸部から底部にかけて縞目の叩きを用いる。内面は青海波がみられ，頸部に顕著にみられるが，底部にかけては細い刷毛状工具により消されており，あまり目立たない。胎土，焼成とも瓦器質である。

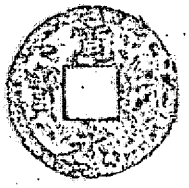
古銭（図89）

土壙埋土中より出土したものである。熙寧元寳で，北宋のものである。その年代は1068年～1077年の間である。

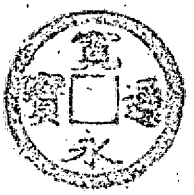
第2節　近　世　墓

10号墳墓の北よりの東西と並列して存在する。

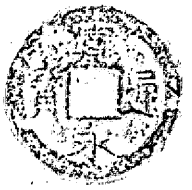
10号墳のものは，北東よりの部分に三基まとまるものである。形態は，円形と楕円形を示し，土壙深さも21cm～10cmを測り，内部には礫が置かれている。埋土は，非常にやわらかい黒色土が充填され



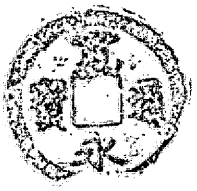
8号墳墓



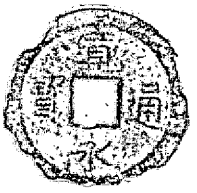
8号墳墓



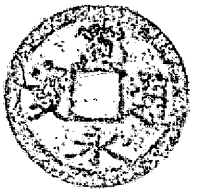
8号墳墓



9号墳墓

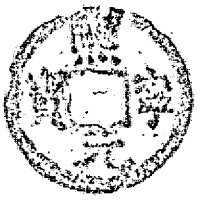


9号墳墓

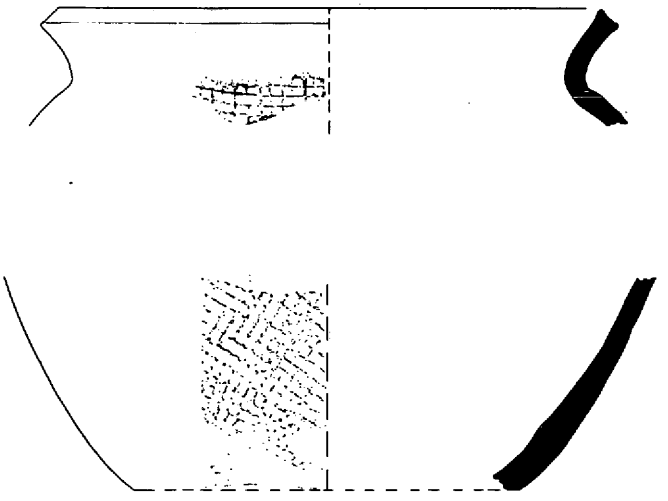


10号墳墓

第88図　近世墓出土銭拓影



第89図　中世墓出土銭拓影



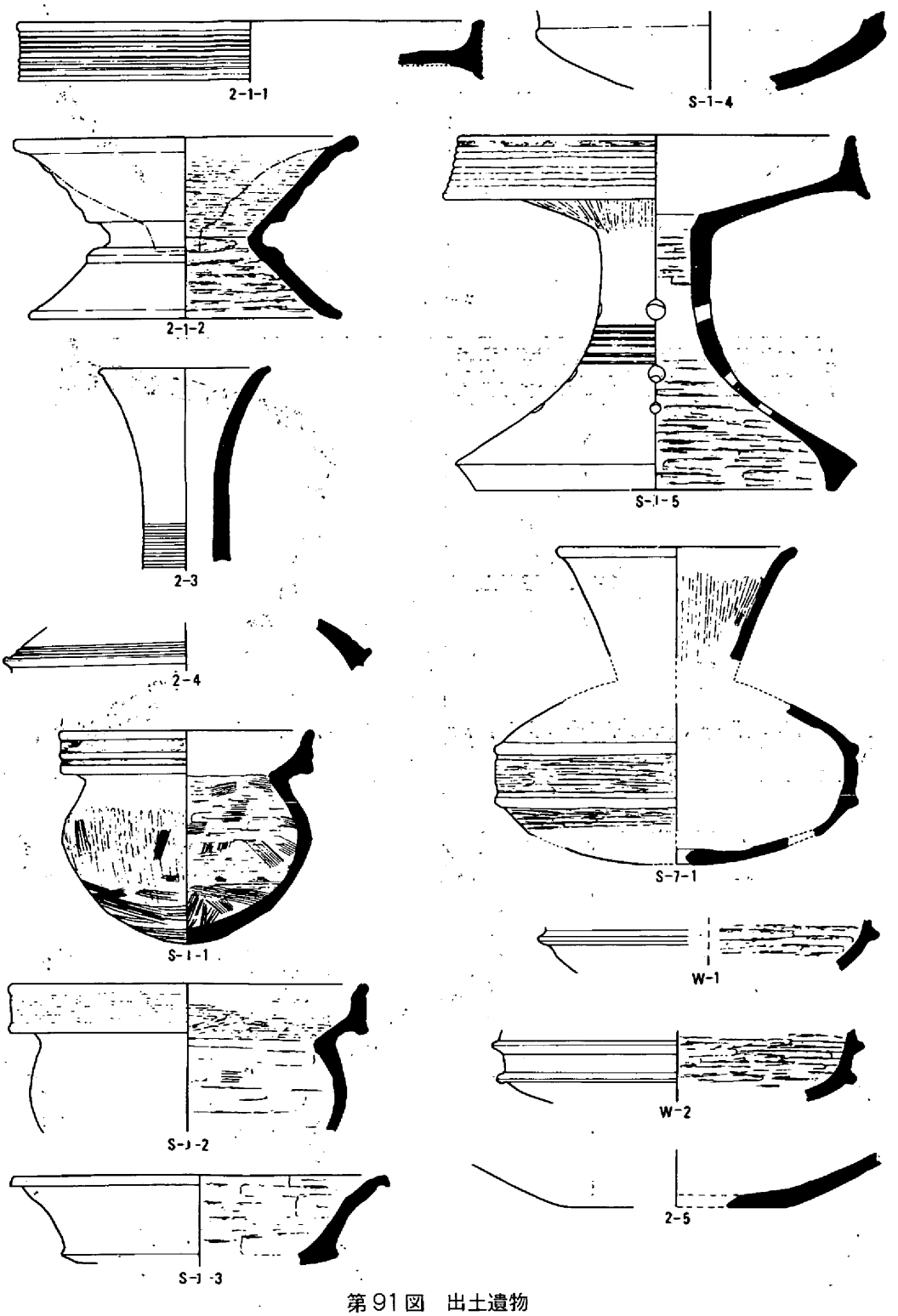
第90図　中世墓出土甕形土器

る。

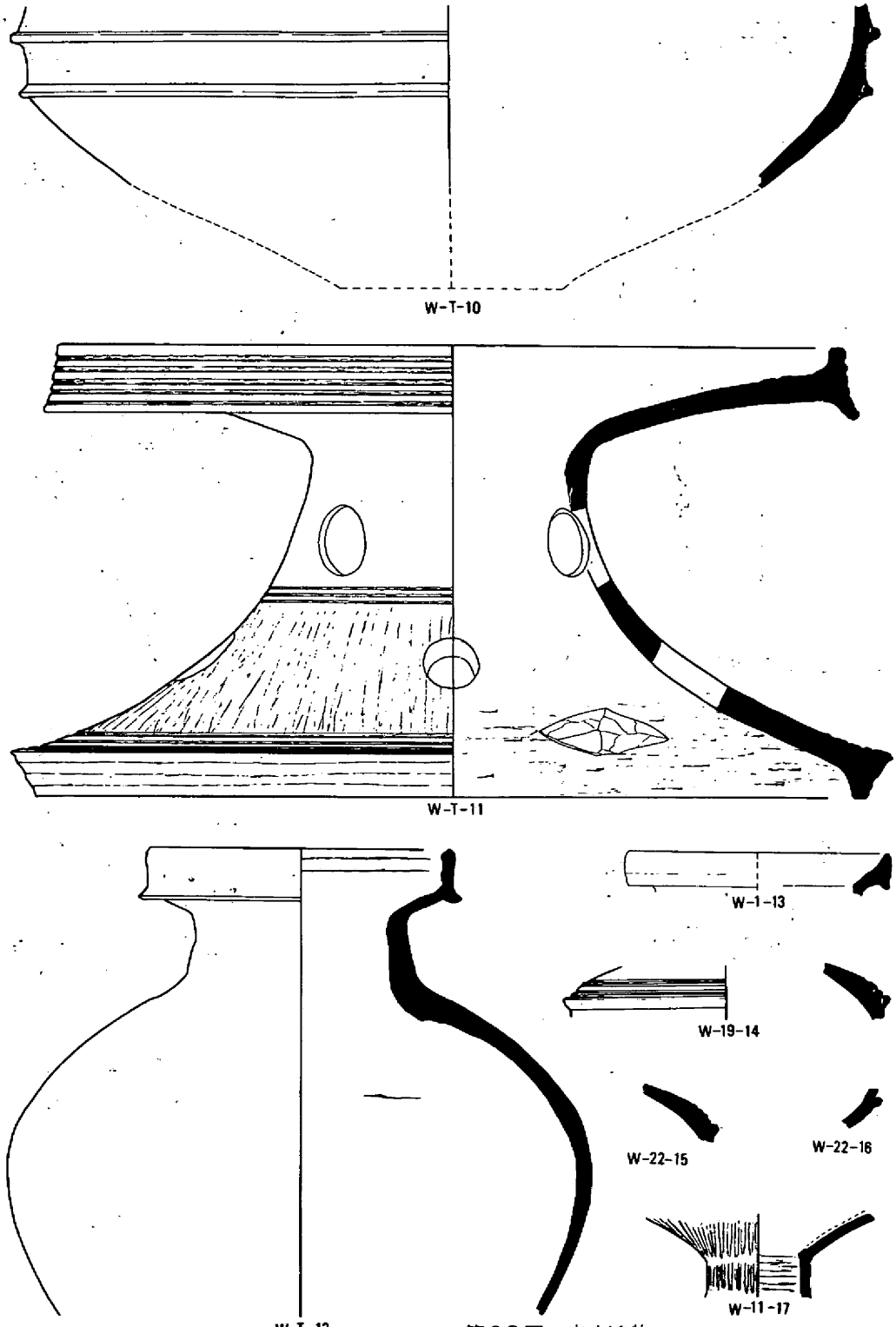
11号墳墓に存在するものは，北側部分にほぼ東西に並列して存在するものである。形態は円形・隅丸方形・楕円形を示し，土壙深さも15㎝～35㎝を測り，内部には10号墳のそれと同様に礫が置かれている。

これらの土壙の時期は，それぞれ寛永通寶（図88）が出土していることから近世墓と考えられる。

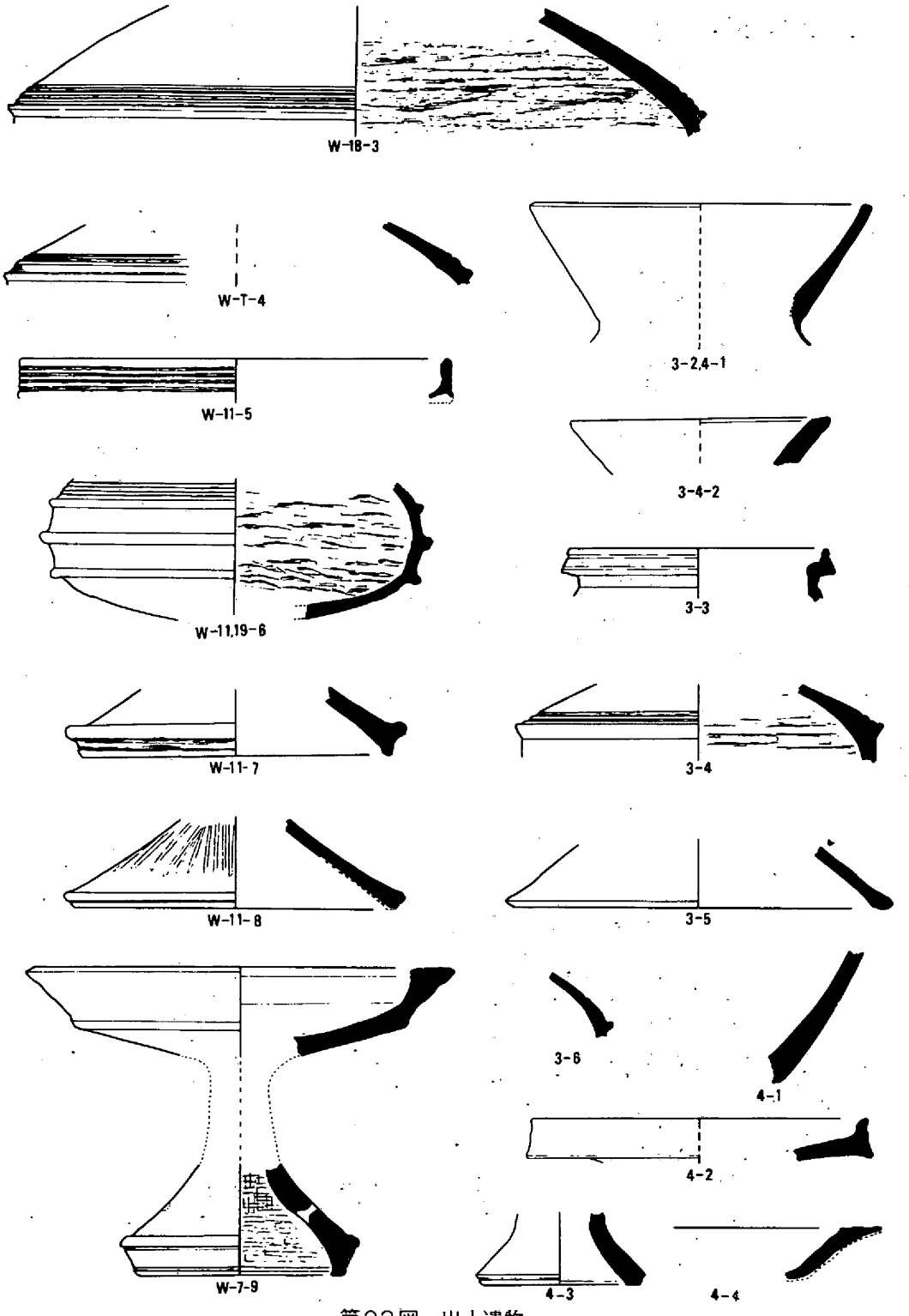
なお，8号墳中より3枚の寛永通寶を出土しており，この部分においても近世墓が存在していたものと考えられるのである。



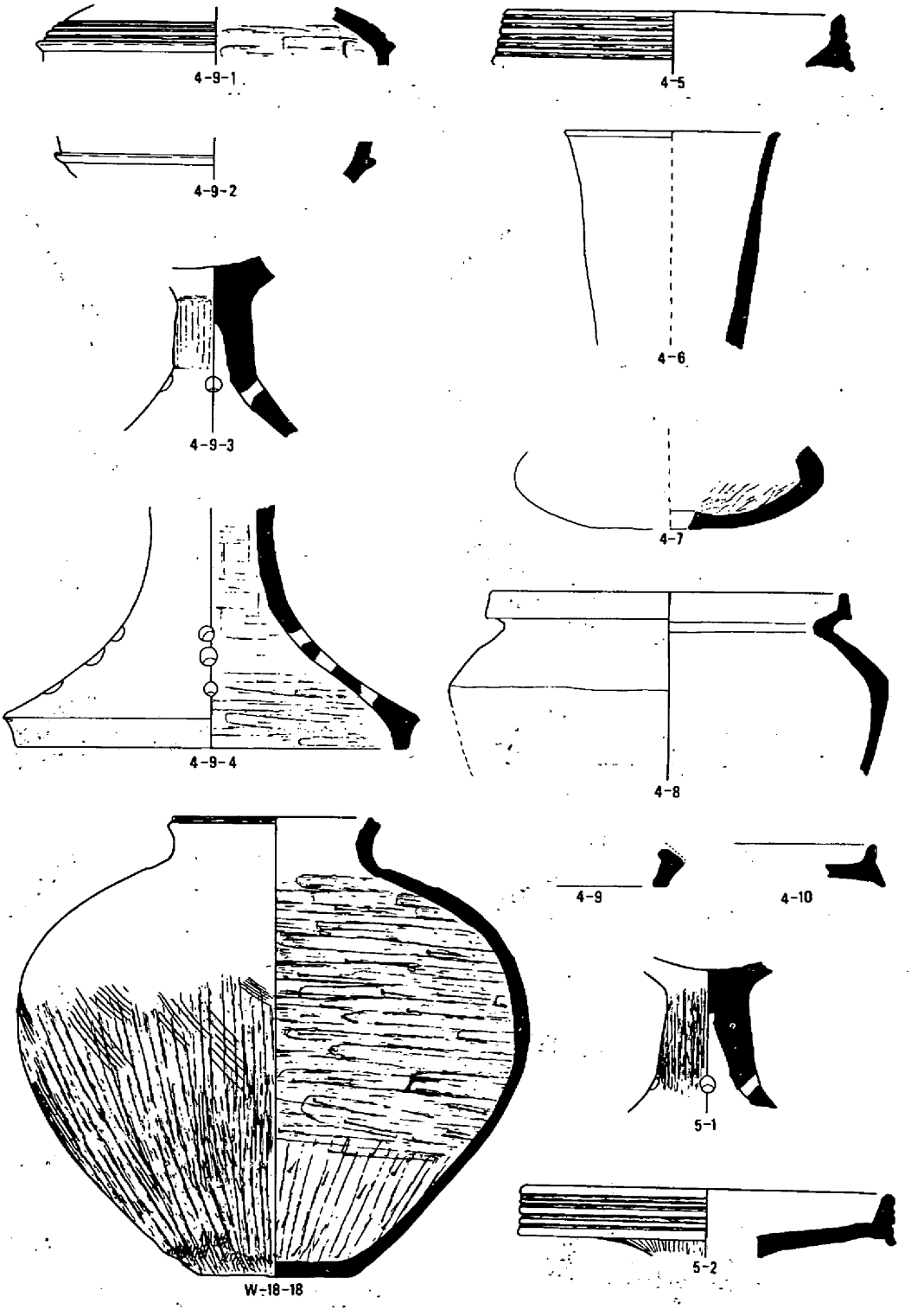
第91図　出土遺物



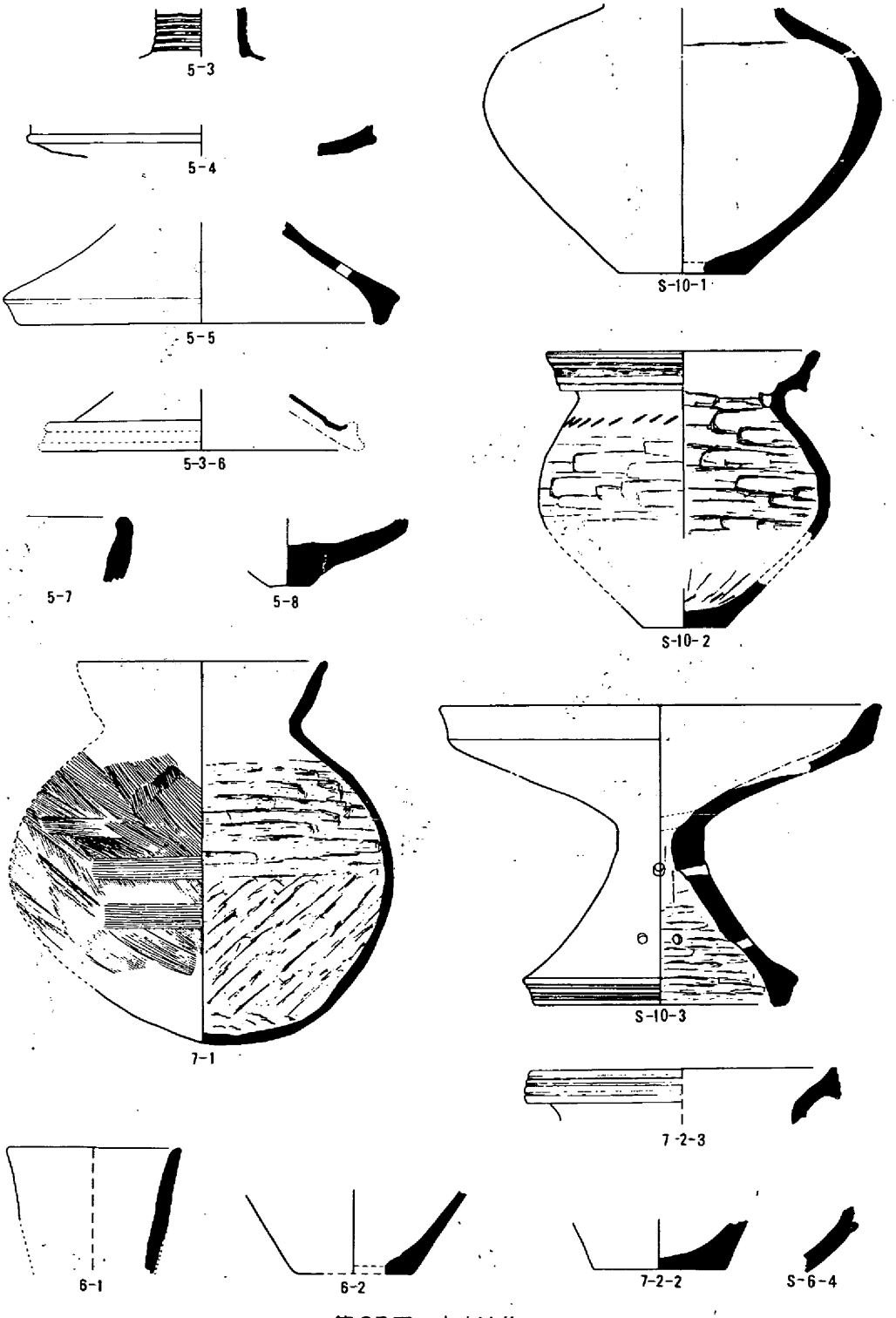
第92図　出土遺物


W-18-3
W-T-4
3-2,4-1
W-11-5
3-4-2
W-11,19-6
3-3
W-11-7
3-4
W-11-8
3-5
3-6
4-1
4-2
W-7-9
4-3
4-4

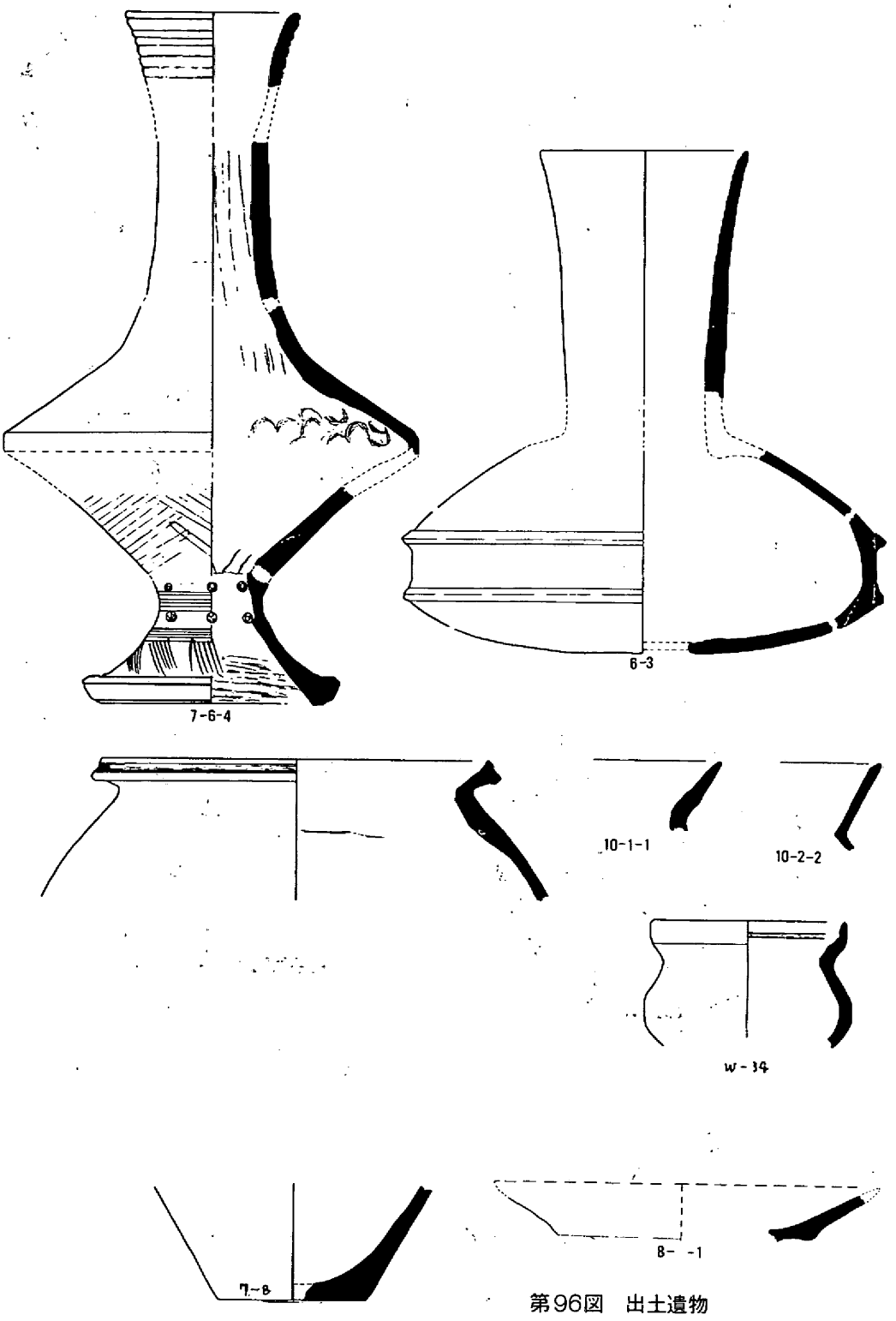
第93図　出土遺物



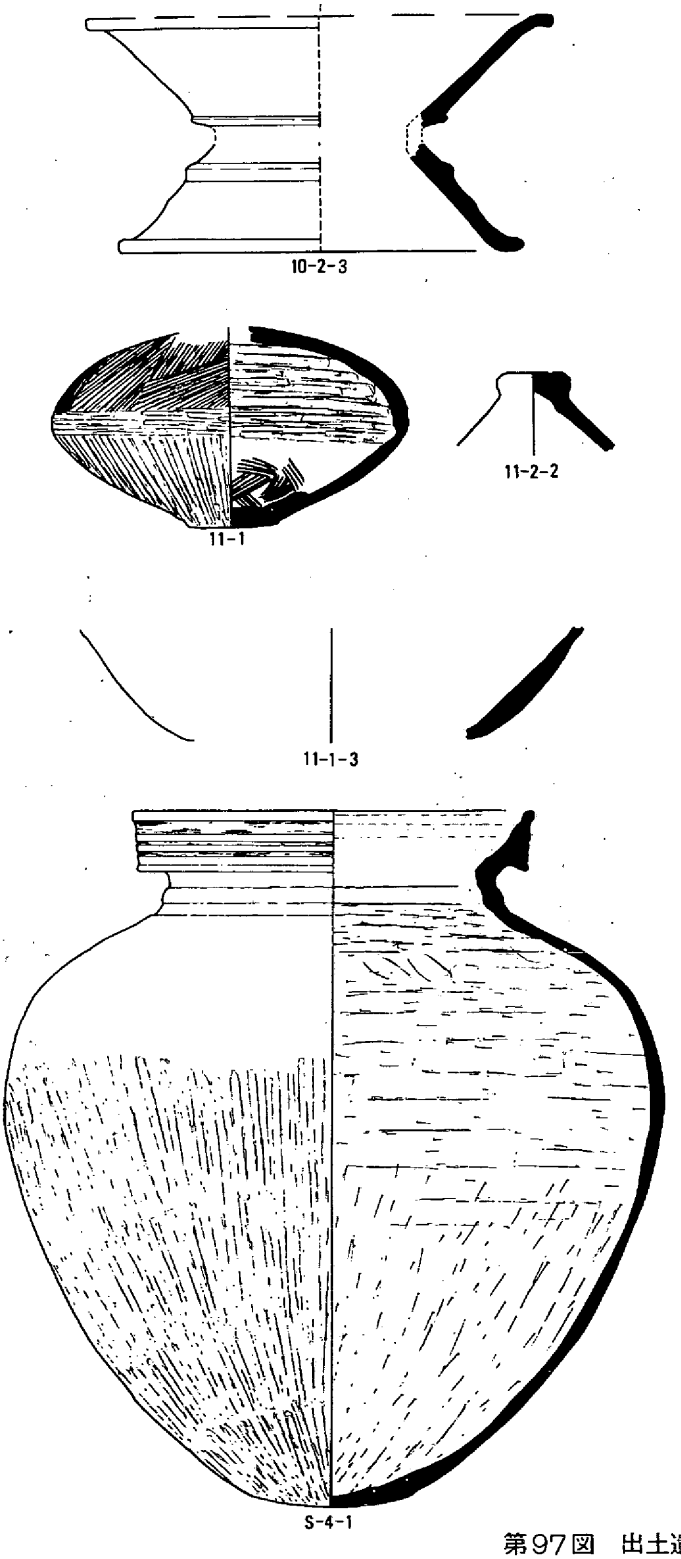
第94図 出土遺物



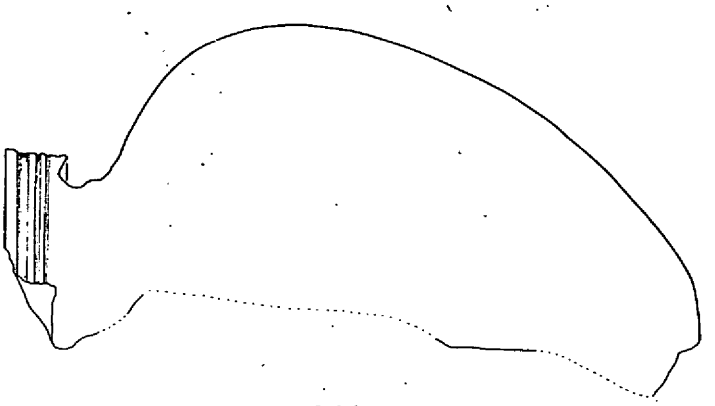
第95図　出土遺物



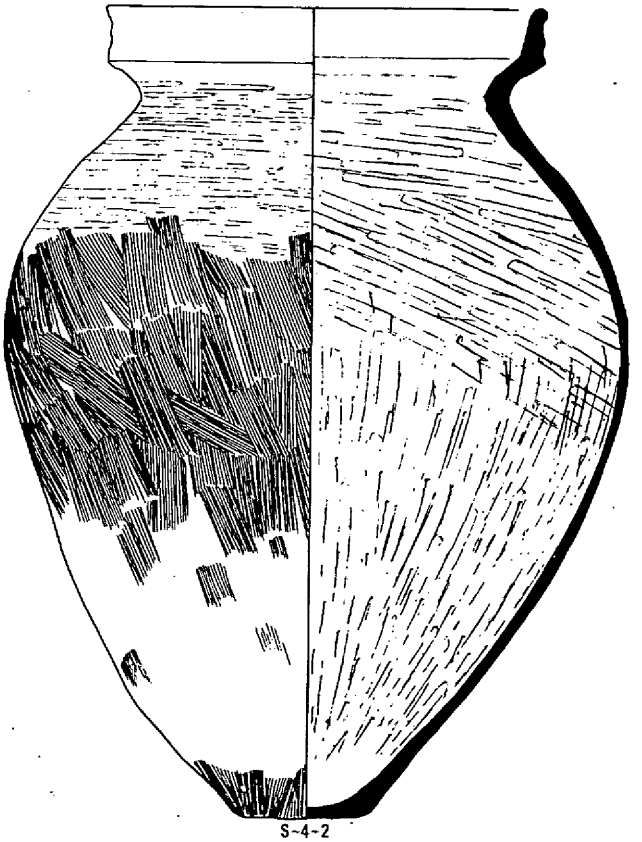
第96図　出土遺物



第97図　出土遺物

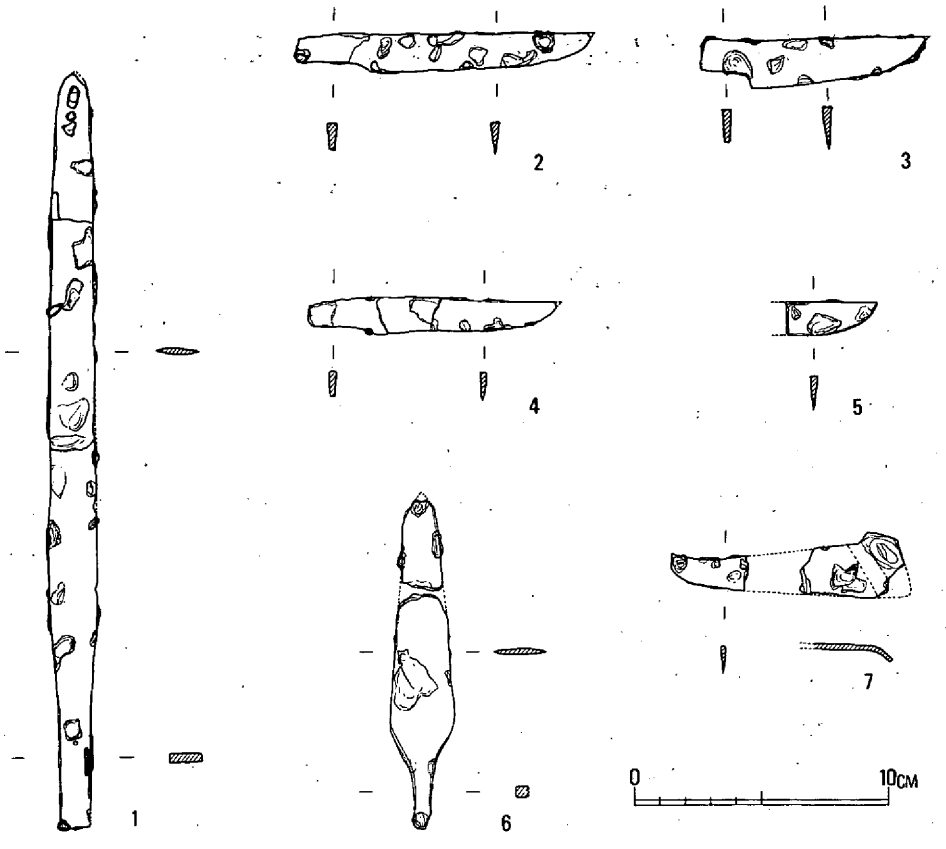


S-4-1



S-4-2

第98図　出土遺物



第99図　出土遺物

第6章　出土遺物と石室についての考察

第1節　出土遺物について

横見墳墓群より出土した土器は，個体数にすれば100個体ほどであり，遺構の数からすれば土器の少なさが注意せられる。出土土器の内の約70パーセントほどが金雲母を含み，焼成堅緻・色調は赤褐色によって示される特殊系の土器の一群である。これら特殊系統の土器群は，横見墳墓群が形成された直後から出現し，石室を在する時には姿を消してしまうのである。

特殊系の特徴を持たない土器群に先行した土器と認められるのは，7号墳第6主体・同第8主体より出土した台付長頸壷と甕である。台付長頸壷は，県南において中期末の仁伍式に伴なうことが知られ（註1），又県北での谷尻遺跡（註2）では後期前半の土壙に伴なって出土している。さらに，久米郡久米町久米レジャーランド内（註3）においても，中期末～後期前半の住居址から出土していることが確認されている。甕形土器については，肩部がよく張り，裾部にかけて細くしまってゆく。内面整形は，肩部において横位の篦削りが認められるなど，後期前半の様相をよく示している。

これらの土器に相前後するものは，W9の棺上供献として出土した高杯形土器である。杯部は外反する口縁部をもち，裾部を被厚させ，特に台端部を屈曲し立ち上がらせる器形は，備中西南部において特徴的にみられ，白江遺跡において白江Ⅰ式（註4）とよんだものに比定されよう。この様相を有する土器は，第4号墳墓第9主体の台部，及び口縁部が第4号墳より出土している。

これらの土器について，横見墳墓群においてはⅠ期に相当するものである。Ⅰ期の時期には，すでに特殊系の胎土を有する土器の一群が出現しているのである。4－9－4・4－9・4－5・4－8（図94）は，いずれも特殊系のそれを備えたものである。

Ⅱ期は，西傾面の第11木棺墓の棺上供献土器＝S－10－1・S－10－2・S－10－3＝（図95），東傾面の壷形土器＝W－T－10，W－T－11（図92），東傾面木棺墓群＝W－18－18（図18）などによって示されるものである。西斜面第10主体の供献一括を除いて，他は特殊系のそれと同一であることは墳墓の中の出土遺物のところで述べた如くである。特に，算盤玉形の胴部に2本ないし3本の凸帯を貼り付ける特殊壷形土器が，大形の器台形土器のセット関係からほぼこの期の前後より出現してきたことがうかがえるのである。このことは，これ以外の特殊壷形土器について単独・遊離の出土状態のものが多く，個々に明確な時期決定は困難であった。遺構の状況（後に詳しく述べるが，これらの遺物の出土時期が限定可能）から小形の特殊壷形土器も同様なことがいえるものと考えるのである。

S－11－3の高杯形土器の脚部がゆるやかに外反し，台端部を屈曲させるなどは，岡山市雄町遺跡（註5）出土の9類に相当するものであろう。これと同じく，S－11－1も脚部最大径が胴部上位になり，かなりよく肩部が張ることなどからすれば，この時期に属するものと考える。W－T－11の大形器台形土器は器高は低くなり，扁平な感を与えるが，台部屈曲上面と口縁部内面の凹線など比較的

古い様相を残している。W—18—18の短頸壷形土器は，倉敷市男女岩遺跡（註6）において出土している。しかしながら，男女岩遺跡のそれは，ほぼ直すぐ立ち上がる短かい口縁部と，強く肩部の張る形態をしめている。当遺跡のそれと比較すれば，時期的な差を強く受けるのである。島根県九重遺跡（註7）出土のそれは口縁部が長く，肩部の張りが弱いが，全体の器形と内外面の整形手法において強い類似が認められるのである。さらに西斜面の第11木棺墓より出土した甕形土器においても，口縁部が外方に開く傾向を示すが，内外面の調整及び肩部上半の刺突文の施文などについても九重遺跡出土のそれとの共通性をみいだせるのである。

Ⅲ期は，棺上供献としてセットで出土，あるいは遺構のまとまりからも時期の限定の可能な出土状態を示すものが多い。西斜面第1主体の棺上供献（図95），同甕棺（図98），東斜面の壷形土器（図92）などの土器によって示される時期である。

東斜面出土の壷形土器（S—T—12）は，Ⅱ期の器台形土器と特殊壷形土器とは同じような状態で出土したものである。器台と壷は斜面に流れた状態を示し，壷形土器は茶褐色土中より検出されたもので，明らかに流れたものではなく，木棺墓に伴なったと考えられるのである。この壷形土器は，芋岡山遺跡でこのタイプの壷の出土が知られている。口縁端部の立ち上がりがゆるく，端部も細く丸味を有する。さらに胴部最大径が胴部上位に器壁も薄くなっているなどの細部において相違を見い出せるが，基本的には時期を異にすることはないであろう。

西斜面第1主体棺上供献土器中の器台形土器は，島根県的場遺跡（註8），あるいは芋岡山遺跡（註9）などからその出土が知られているものである。前者については，鋸歯文の施文，台部に縦の3個の円孔など飾る側面を強く表現している。後者においては，脚部から台部にかけて他の高杯形土器のそれと同様の形状を示し，口縁端面に平行沈線を施文するのみである。しかし，芋岡山遺跡の台端部の屈曲部は別に粘土をつけたして，立ち上がらせることにより，より仮器に近い土器として表現している。

これに対して，横見墳墓出土の器台は口縁端面に凹線文が，脚部下半に凹線の施文，脚部から台部への移行は高くふくら味をもつなどからすれば，芋岡山遺跡出土のものよりか，やや古い様相をもつと考えられる。

甕棺の棺に用いられたと考えられる甕形土器は，五万原遺跡（註10）で多数出土した甕形土器よりも先出的であり，上東遺跡（註11）においては，才ノ町Ⅰあるいは鬼川市Ⅲとしているものにみられる。蓋として用いられた壷形土器は口縁端面に凹線を持ち，頸部にも凹線を施こすなどしているが，肩部がよく張り，底部は丸底を示すことなどからすれば，才ノ町Ⅰの段階に近いと考えるのである。

これらの他に木棺墓から単独で出土し，埋葬主体の配置状態からこの時期に属すると考えられるのが，西側斜面第7木棺墓棺上供献の小形特殊壷形土器である。

Ⅳ期は，3号墳第2・第4主体より出土した口縁部の破片である。いずれも口縁部の破片で，3—2・4—1（図93）については，壷形土器の口縁部と推定される。上東遺跡P—ト（註12）より出土した単純口縁を有する壷形土器の器形を示すものと推定される。3—4—2（図93）については，鼓形器台の形状を示すが，器壁が厚く一般的な鼓形器台のそれと異なる。鳥取県青木遺跡（註13）出土

のそれと同様に小形で凸帯を持たない器形を推定せざるをえない。

V期は，2号墳第1主体より出土した鼓形器台が時期を示す唯一の遺物である。W—34の壷形土器は古い様相をもっているが，胎土・焼成がVI期の土器群と同一であるため時期を下げた。

鼓形器台は他に10号墳より出土したものがあり，この2者と比較すると，杯端部及び台端部が10号墳のそれは，受け口状に外反の度合が大きくなっており，その差については時期的なものと考えている。

VI期は，当墳墓群で最も新らしい一群の土器群である。

10号墳第2主体出土の鼓形器台，11号墳第1主体出土高杯形土器，6号墳周溝に伴なう甕形土器などがこの一群に入る。

10—2—4の鼓形器台は，2号墳出土のそれと比較検討した結果，10号墳出土のものが時期的に新らしい器形をし示しているものと判断した。杯端部及び台端部が受口状になるものは，島根県小谷遺跡（註14）出土の鼓形器台に見い出されるものである。11—1—3の高杯については，杯部に稜をつくらずに口縁部を若干外反すると考えられる。7—1についてもこの期のものと考えられるが，口縁部の立ち上がりが強く，端部を被厚させないなど，5—7の甕形土器の口縁端部の特徴を示される布留式（註15）のそれとについては確定できない。しかしながら，胴部の球形化，内外面の整形は布留式に見られるものであり，11—1—3の高杯とさらに甕形土器の破片からすれば布留式の時期に入れられるであろう。

又，8—6—1の壷形土器の口縁部破片については，口縁部の外反が強くこの時期に属するか疑問であるが，全体の器形の推定が不可能なため一応の目安としておきたい。

墳墓群出土土器について，上記した如くI期〜VI期に渡ることが示された。それではこれらのI期〜VI期について，時期的に同じ地域と如何なる関係を存するのかについて述べてゆきたい。

横見墳墓群出土土器において最も注意されるのは，出雲との土器の編年的な位置付けであろう。

出雲と土器の上で具体的にでてくる時期は，II期からである。西斜面第11主体の甕形土器，東斜面木棺墓群の短頸壷形土器の2個体で，幸いに前者は胴下半を除いて全て，後者は完形器として資料的な価値が高い。この2個の土器は，鳥取県九重遺跡第3土壙（註16）にみられるものである。この2個の内，甕形土器について伴出の土器の時期は，岡山市雄町遺跡（註17）で9類と，山陽新幹線建設によって調査された上東遺跡（註18）では鬼川市IIとされているものである。この2遺跡の編年からすれば，いずれも後期中葉の時期にあっている。

九重式土器は，山本清氏によって『鍵尾よりも古いと考えられる』（註19）と述べられ，さらに『山陰の九重式の次の鍵尾式（古式土師器）』（註20）とし，明らかに弥生式の範疇としておられる。この範疇が弥生後期のいつ頃の時代に比定されるかについては，山本氏は『弥生式後期後半の土器』（註21），又九重式について書かれた東森市良氏は『九重式土器は山陰の終末期弥生式土器と確定され，形式名として一般化されると考える』（註22）とされている。両氏とも九重式の次の土器の一群を鍵尾I式，あるいは的場式とよんでおられることからすれば，九重式土器は土師器の間に他の土器群の入らない弥生式後期後半として理解できるであろう。

このことは，吉備においては後期中葉の土器と伴出するものが，出雲では後期後半のそれと伴出することになる。従来九重式と呼ばれているもののうちで，他地域において如何なる土器と伴出するのであろうか。特に，鼓形器台の祖形とされる器台についてみてゆく。九重遺跡については，杯部及び台部とも上下の拡張を示している。この口縁端部の下を拡張しないで，上方に拡張する器形を示すものが鳥取県福市遺跡（註23）・青木遺跡・広島県戸宇・牛川遺跡（註24）において出土が確認されている。広島県戸宇牛川遺跡においては，近藤義郎氏が「埴輪の起源」の中で述べられた（註25）特殊器台の祖形となるであろう矢掛町芋岡山遺跡出土の器台と同様な器台と共に伴出している遺跡である。この他に，図示されていないが，台端部の屈曲が断面三角形状を示す台部の破片が出土している。又，弥生時代の石棺群と考えられている広島県鍵向山石棺群（註26），及び白江遺跡（註27）からも出土している。このような伴出関係からすれば，杯端部及び台端部が上下とも拡張するものと，下方に拡張しないものにしいて時期的な差が存在することが妥当であろう。このことについて，近藤正氏は『九重式と鍵尾Ⅰ式の間に一形式の土器群を推定することが可能ではなかろうか』（註28）として，一群の土器を推定した。しかしながらこれは九重式の器台が鍵尾Ⅰ式にみられる鼓形器台に移行するという考えをもとにではあったが，後期後半の土器の存在を推定していた。このようなことから，杯部及び台部の端部を下方に拡張しない器台について九重Ⅱ式とし，これを除いた器台について九重（Ⅰ）式（註29）とし，九重Ⅱ式は弥生後期後半の時期としたい。

Ⅴ期に枕として用いられている鼓形器台は，一応，鍵尾Ⅱ式に相等するものとした。鼓形器台は，九重式の器台から鍵尾Ⅰ及びⅡ式として鼓形器台の出現を認める見方が一般的である。しかしながら，山本清氏が述べられた鍵尾Ⅱ式の範疇に横見2号墳出土の鼓形器台が入るかについては疑問が残る。鍵尾Ⅰ式（註30）あるいは的場式（註31）として言われている鼓形器台の特徴を備える器台を，出土地は出雲を出ていないようである。又，鍵尾Ⅱ式として示されたものは，吉備では新市谷遺跡（註32）においてその出土が確認され，青木遺跡でⅣ期に伴出する鼓形器台が相当するものと考える。

鍵尾Ⅱ式のタイプとされる鼓形器台は，鳥取県仲仙寺古墳群（註33）の第10号墳より，鍵尾Ⅰ式の鼓形器台と伴出している。さらに島根県平所遺跡（註34）でも，鍵尾Ⅰ式とされる住居址の伴出遺物として鍵尾Ⅱ式の鼓形器台が出土している。このようなことからすれば，九重式の器台及び，鍵尾式の鼓形器台は出雲的な色彩の強いものであり，従来言われてきた鍵尾Ⅱ式タイプとされる。背が低く，杯部及び台部の脚部へ移行し，外反する部分に凸帯状の稜を有するものについては，その出自は，出雲の中における鼓形器台の系譜からは出て来ないものであろう。

このことは，Ⅴ期の鼓形器台が鍵尾Ⅱ式と全く時期を異にするものではなく，このタイプの鼓形器台が他に横見10号墳より出土し，小谷遺跡（註35）出土のものと非常に近い様相を示していることから，やはり鍵尾Ⅱ式平行として問題はないと考えるのである。

以上，横見墳墓群出土土器についての時期的な問題について述べてきたが，特殊器台・特殊壺の問題については第7章総括においてとりあげる。

なお，横見墳墓群出土土器によって示されるⅠ期からⅥ期について，その編年的位置について表に示した。

第2節　石材使用の主体について

横見墳墓群中，新しい時期と考えられる12基の台状墓には，土壙，木棺，箱式石棺，竪穴式石室など多数の埋葬施設が構築されている。このうち石材使用のものは32基で，全体の½以上を占めている。

以下，石材使用の埋葬主体の分類と変遷をまとめておきたい。

分類

竪穴式石室

竪穴式石室には，板石で組まれているものと，板石は使用せず山石で小口積んでいる2つのタイプがみられる。

（Ⅰ）類　2号墳第1主体，9号墳第3・4・5主体。これらの竪穴式石室は，天井石，側石，底石，控え積石から構成されており，ほぼ同様な構造を示している。しかし，各竪穴式石室を詳細に比較してみると，その手法には若干の違いが認められるようである。まず，石室を構成している側石をみると，長側石は，いずれも3～5板の板石を2～3段にタテに並べて積んでいるが，短側石は2号墳第1主体・9号墳第4，5主体が1枚をたてているのに対し，9号墳第3主体は3～4枚の板石を小口積んでいる。底石は2号墳第1主体を除いてすべて1重である。2号墳第1主体の底石下部には，2重にバラスと厚みのある板石を重ねる3重構造に造られている。

一方，天井石の構造は2～3重に板石で蓋していることは共通しているが，9号墳第3主体では最終段階において，3重目の天井石を固定するかのように同様の板石を斜めにたて掛けているのに対し，2号墳第1主体では拳大の山石を2・3重の天井石隙間に置いている。また石室と土壙の間に裏込めされている石材は，2号墳第1主体・9号墳第4主体は板石と山石を，9号墳第3主体は板石だけとそれぞれ使用されている石材が異っている。土壙も2号墳第1主体が1段に対し，9号墳第3・4・5主体は2段に掘り込まれている。

これら（Ⅰ）類の竪穴式石室は，基本的には箱式石棺を大型にした構造を呈しているが，2号墳第1主体底石下の排水施設や石室と土壙の間に認められる控え積手法など，従来の箱式石棺と呼ばれているものとは明らかにその構造には相違が認められることが指摘されよう。従って（Ⅰ）類の竪穴式石室は，本来，石棺系竪穴式石室とでも呼ぶべきものであろうが，未だこのような埋葬施設にはその系譜がたどれないところから，本墳墓群中検出のものも竪穴式石室としておきたい。

この種の竪穴式石室に近似しているものには，兵庫県朝来郡山東町柿坪中山古墳群中の第2号墳第1・2竪穴式石室，第3号墳竪穴式石室（註36），広島県広島市高陽町西願寺遺跡群中のC地点第2号竪穴式石室（註37）などがある。

（Ⅱ）類　10号墳第1主体，12号墳第1主体。

両者の竪穴式石室における石室部の組み方は，ほぼ同様の構造を示しているようである。しかし，石室基底部に敷き石を敷いてその上面に小口部の存在から木棺を納めたと考えられる10号墳第1主体

と石室基底部のさらに下部に土壙を掘って箱式石棺を構築している12号墳第1主体とは前者が木棺，後者が石棺と相違を示している。また石室と土壙の間に認められる控え積みは，10号墳第1主体にはほとんど認められないのに対し，12号墳第1主体には石室を巡るように構築されている。一方，天井石は両石室とも最初から存在しなかった可能性が強く木蓋などが推定されよう。

10号墳第1主体の竪穴式石室と同様な構造を示すものには，岡山県磐赤郡山陽町さくら山方形台状墓第3主体（註38），12号墳第1主体部の竪穴式石室には，広島県広島市高陽町西願寺遺跡群C地点第1号竪穴式石室（註39）に類似が認められる。

箱式石棺

箱式石棺は2種に大別される。

（Ⅰ）類　4号墳第6主体，5号墳第5主体。

これらの箱式石棺はいずれも厚さ6～10cmの板石で組まれており，長側石は各3枚をヨコ長に，短側石は1枚をタテ長にたてている。長側石と短側石の組み方は，長側石の内側に短側石をはめ込むように組まれており，底石は認められないなど構造がよく似ている。

（Ⅱ）類　4号墳第1主体，7号墳第1主体。

土壙は，両者とも2段に掘られている。石棺側石は，長側石が3～7枚をヨコ長に並べているが，4号墳第1主体には，一部にタテ長手法が認められる。短側石は1枚をタテ長にいずれもたてており，長側石と短側石の組み方は，（Ⅰ）類とほぼ同様である。これら（Ⅱ）類の箱式石棺は，基本的には（Ⅰ）類と同様な構造を示していると言えるが，その構造は，複雑化する傾向が認められる。その他に，（Ⅰ）・（Ⅱ）類とは異なる構造を示しているものに，7号墳第1主体の箱式石棺がある。

これら（1）・（2）類の箱式石棺は各地の遺跡で検出されているものとほぼ同様の構造を示している。

小型箱式石棺

小型の箱式石棺には2つのタイプがみられる。

（Ⅰ）類　6号墳第5・8主体，7号墳第3・4主体，8号墳第5主体，9号墳第6主体。

これらの小型箱式石棺の構造をみると，土壙の掘り方は1段・2段共にあるが，石材は板石ではなくすべて山石を使用している。石棺の側石は，長側石は1～3枚を1～2段にヨコ長に積んでおり，短側石は1枚をたてている。棺底にはいずれも底石は認められず，天井石は1～2重に各隙間を覆うように蓋されている。石棺と土壙の間には控え積などの施設は認められないなど，共通する構造を示している。なお，（1）類で底石を有しているするものに9号墳第6主体がある。

（Ⅱ）類　8号墳第6・7主体，9号墳第8・9主体，10号墳第4主体。

（Ⅱ）類の小型箱式石棺は，土壙は（Ⅰ）類同様1段・2段共にあるが，石材は石棺部がすべて板石，控え積石が山石とその使用が区別されている。長側石と短側石は，いずれも1段積で，ヨコ長に底石の上面より組まれているが，その組み方は意識して内・外側にはめ込むのではなく，石材の長さに応じて内側および外側に組まれている。天井石は2～3重に蓋されており，さらにその上に控え積みされている石材と同様の山石で隙間を塞いでいる。

これらの小型箱式石棺も普通にみられるものである。

石蓋土壙墓

石蓋土壙墓はいずれも小型棺として造られており，3・5・6・10号墳墓で検出されている。石蓋土壙墓は単に土壙を掘って石蓋をするのは共通であるが，詳細にみると天井石の構造に相違が認められ，次の2つのタイプに大別することができる。

（Ⅰ）類　天井石が板石で蓋されているもの――2号墳第7主体，5号墳第3・4主体，6号墳第7主体。

（Ⅱ）類　天井石が板石以外の石材（山石）で蓋されているもの――10号墳第5・6主体。この（Ⅰ）・（Ⅱ）類に分類した天井石の構造にも（Ⅰ）類では，3号墳第7主体は3枚並べているが，5号墳第3・4主体，6号墳第7主体は大型の1枚石で蓋しており，（Ⅱ）類では10号墳第5主体は4枚の平石を重ね掛けしているのに対し，第6主体においては平石を2重に蓋するといった石材の蓋し方に相違が認められる。第6主体の天井石の蓋し方は8・9墳の小型箱式石棺と近似しているように思われる。

石蓋土壙墓は近年，岡山県内において御津郡御津町岩井山古墳郡（註40），真庭郡落合町宮ノ前遺跡（註41），同中山墳墓群（註42），阿哲郡哲西町西江遺跡（註43）などから発見されているが，これらの石蓋土壙墓はいずれも（Ⅱ）類に属するものであり，（Ⅰ）類の板石1枚で蓋するような石蓋土壙墓は管見では見当たらない。

変遷

前述において，横見墳墓群中における石材使用の埋葬主体を竪穴式石室2類，箱式石棺2類，小型箱式石棺2類，石蓋土壙墓2類に分類してその類似性を述べてきた。以下これらをもとにして，分類した各埋葬主体における変遷を若干述べておきたい。

先ず，竪穴式石室には2種ある。

（Ⅰ）類の竪穴式石室は，横見墳墓群中最も標高の高い所に位置する2号墳と中央部よりさらに先端部に近い位置に築かれている9号墳は，距離にして約90mあり，その間には3～8号墳が築かれている。しかし，両者の竪穴式石室は非常に近似した構造を示しており，どちらが先に構築されたのかは現況では判らない。おそらく同時期あるいはどちらが先であっても，その両者の年代は近時であったと考えられる。

（Ⅱ）類の竪穴式石室は，10・12号墳に認められ，横見墳墓群中では丘陵先端部に位置している。両者の石室もその構造には個々の相違は認められるようであるが，この種の類例が乏しい現況では，どちらの竪穴式石室が先に構築されても不思議はないように思われる。ただ10号墳第1主体の竪穴式石室は石室内の敷石上面に木棺を納めているのに対し，12号墳第1主体の竪穴式石室は，石室内のさらに下部に箱式石棺を納めている。12号墳の竪穴式石室は，石室部と石棺部を区別して構築しており，いわゆる幾内型と呼ばれている竪穴式石室の構造に近似している（註44）ようで，10号墳第1主体の石室をより発展させたものと考えられる。

次に（Ⅰ）類と（Ⅱ）類の竪穴式石室の関係をみると，（Ⅰ）類は先にも述べたごとく，控え積み

除いた中央の石室だけをみると，その構造は箱式石棺そのものであり，箱式石棺を発展させて竪穴式石室に変化させていると言えよう。これに対して（Ⅱ）類は（Ⅰ）類のごとく箱式石棺からの変化というよりは全く異なる新たな手法をもって構築されているようで，（Ⅱ）は類（Ⅰ）類より後出的と考えられる。

次に箱式石棺は，横見墳墓群4～7号墳と群中央部に集中して認められる。（Ⅱ）類の箱式石棺である4号墳第1主体と7号墳第1主体をみると，7号墳第1主体には棺底に底石を敷いており，土壙平坦部にはバラスを敷くなどその構造に新しい要素が認められる。また7号墳第1主体の石棺長側石は，ヨコ長に並べているのに対し，4号墳第1主体の石棺長側石には一部にタテ長に並べて石棺を組んでいる部分が認められる。このタテ長の手法は，ヨコ長に比べて先行すると考えられているので，4号墳第1主体→7号墳第1主体への移行が考えられよう。

（Ⅰ）類の箱式石棺については，その構造に変化が認められない。

小型箱式石棺については，（Ⅰ）類の4基を比較検討してみても，9号墳第6主体において底石が認められる以外は全く同手法と言え，これらの小型箱式石棺には変化が認められないようである。一方，（Ⅱ）類においても（Ⅰ）類同様で，その変化は認められない。ただ，（Ⅱ）類の石棺については，竪穴式石室（Ⅰ）類を小型にした様相を呈しており，竪穴式石室（Ⅰ）類からの出現が推測される。またこれらの検出地点をみると（Ⅰ）類は6～9号墳，（Ⅱ）類は8～9号墳といずれの墳墓にも1～2基ずつ造られている。また8・9号墳には（Ⅰ）・（Ⅱ）類ともに造られている。

石蓋土壙墓については2類に分けて説明を行ったが，その形態は全く異なっているので，現況ではこれらの変遷を考えることはできない。

さて，これまでに竪穴式石室は（Ⅰ）類，（Ⅱ）類は，このうち（Ⅱ）類は10号墳第1主体→12号墳第1主体，箱式石棺は（Ⅱ）類が4号墳第1主体→7号墳第1主体への移行が考えられるのは先にも述べたが，次に竪穴式石室と箱式石棺について考えてみたい。

竪穴式石室（Ⅰ）類と箱式石棺（Ⅱ）類を比較した場合，竪穴式石室（Ⅰ）類の石室は，箱式石棺（Ⅱ）類の石棺をより複雑化した構造を示すところから，箱式石棺（Ⅱ）類と竪穴式石室（Ⅰ）類とは，非常に密接した関係が考えられよう。しかし，個々の構造について詳しくみると，各部にわたってその構造には相違が認められるようであり，単なる様相だけで箱式石棺（Ⅱ）類から竪穴式石室（Ⅰ）類への移行を推定するのは早計であろう。そこで，箱式石棺（Ⅱ）類と竪穴式石室（Ⅰ）類を検討するにあたって，7号墳第2主体の箱式石棺の構造を考えてみたい。その構造の特徴をまとめてみると，

① 土壙は，1段素掘りである。

② 長側石は，1枚石をたてた部分と3～4段に小口積された部分の両方が認められる。

③ 短側石は，各1枚で安定を計るためには土壙底よりさらに深く掘り込みたてている。

④ 石棺の組み方は，長側石のうち1枚をたてているものは底石の外側に，小口積んでいるものは底石の上面より組んでいる。

⑤ 天井石は，2枚重ねの上に拳大の割石で隙間を塞いでてる。

土壙一覧＝墳丘上埋葬＝（表１）

(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方　位	礫	遺物	小口溝	有段	備　考
2－2	2.85×66	2.75×48	22	N－E106°					
3－1	3.37×1.25	2.0(＋a)×54	18	N－E6°	○				3－2と重複
2	2.70×36.5		28	N－E52.5°	○	○			3－1，10，11と重複
3	2.68×83	1.87×37	40	N－E43°	○				
4	1.90×1.12	1.14×44	19	N－E21.5	○				
10									3－2と重複
11									3－2と重複
4－2	2.38×84	1.77×38	26	N－E72°					
3	2.08×83	1.60×31	4	M－W15.5°	○				
4	2.06×77	1.47×43	20	N－E81.5°					
5	2.15×87	1.79×42	18	N－E86°					
7	?×87	?×52	17	N－W5.5°	○				
5－1	?×1.18	?×58	30	N－E10°					5－2，4と重複
2	?×71		12	N－E47°					5－1，3，4と重複
6－1	4.42×1.82	3.44×59	34	N－E85°	○				
2	2.80×95	1.70×42	13	N－E13°					
S－12	300×1.35	2.49　51.5	53	N－W22°	○				
8－1	2.81×1.12	2.04×50	64	N－W67.5°				○	
2	2.51×85		44	N－W72°					8－5，6と重複
3	1.47×65	1.01×40	38	N－W71°					8－4と重複
4	3.01×1.22	?　×44	15	N－W65°					8－5と重複
9－1	3.78×66		53	N－E38°	○				8－3と重複
2	2.22×76		62	N－E61.5°	○				
10－2	1.45×69	1.06×34	52	N－W70°		○			10－9と重複
3	2.11×99	1.50×41	48	N－W55°	○				10－9と重複
11－1	3.32×1.09	2.895×60	32	N－W93°		○			
3	2.455×1.14	1.70×51.5	42	N－E21°	○	○			

土壙表＝墳丘下埋葬＝（表２）

(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方位	礫	小口溝	遺物	有段	備考
2－3	2.18×68		47	N－W25.5°					
4	1.00×61		30	N－W43°					
5	2.23×？		40	〃				○	
6	1.03×43		20	N－W79.5°		○			
7	2.10×70	1.58×38	40	N－W77.5°	○				
8	1.19×48		45	N－W73.5°					
4－8	2.29×98	1.71×56	70	N－W120°		○			
5－6	2.325×52		25	N－E21°					
7	1.02×？	81×26	47	N－E12°					5－8と重複
8	1.78×97	1.29×58	43	〃					5－7と重複
9	2.26×78	1.33×51	29	N－E18.5°					
10	1.88×76	1.36×40	38	N－E35°					
11	1.99×68	1.59×45	30	N－E39.5°					
12	1.40×51	1.10×35	25	N－E32.5°	○	○			
13	2.04×71		21	N－E0.5°					
14	2.00×71	1.59×39	63	N－E2.5	○				
6－9	1.91×87	1.31×37	40	N－W52.5°					
10	2.10×81.5	1.78×40	32	N－W14°		○			
11-1	2.50×49		51	N－E19°					
11-2	？×38		53	〃					
12	2.33×82	1.68×40	80	N－E31.5°					
13	2.16×90	1.73×38	38	N－E19°					
14	1.80×70	1.26×34	33	N－W40°					
15	？×69	？×30	23	N－W80°					
16	？×73	？×43	74	N－E６°					
17	1.39×？		50	N－E21°					
18	1.59×1.65		59	N－W72°					
19	2.45×？	1.74×42	61	N－W82.5°		○			
20	？×？		42	N－E７°					
7－5	2.82×？	1.69×33	56	N－E28°	○			○	
6	2.65×？	1.61×43	92	N－E23.5°			○		
7	2.24×60		36	N－E33.5°					

横見墳墓群

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方位	礫	小口溝	遺物	有段	備考
9—11	2.32×88	1.67×41	35	N—W66°					
10—7	?×56		41	N—E12.5°					
8	2.32×1.02	1.65×44	41	N—E38.5°					
9				N—E54°					10—2，3と重複
10	2.25×86	1.75×39	27	N—E14°					
11	1.94×84		27	N—E0.5°					
12	1.42×60		32	N—E 9°					
13	2.20×99	1.37×45	64	N—E28°					
12—2	2.18×57		32	N—W55.5°					
3	?×90		55	N—E42°					
4	2.23×78	1.64×37	57	N—E50°	○				
W—1	1.90×67	1.36×35.5	43	N—W 7°					
2	2.40×?	1.32×34	23	〃	○				
3	2.09×57	1.45×32	34	N—W14°	○				
4	2.70×82	2.20×35	47	N—W19°	○				
5	2.68×74.5	1.47×21	41	N—W15°	○				
6	2.475×74.5	1.90×42	45	〃	○				
7	2.03×64	1.685×39.5	29	N—W17°	○		○		
8	1.70×68.5	1.265×38	37	N—W 7°	○				
9	2.19×70	1.47×42	26	N—W13°	○				
10	1.08×66	70×29	12	N—W17°	○				
11	1.04×47		26	N—W11°	○				W—33と重複
12	3.13×5.05	2.33×31	34	〃	○				
13	2.235×68	1.72×41	39	N—W16°	○				
14	3.04×64	2.54×40	45	N—W19.5°	○				
16	63×60		34						
17	1.90×62	1.59×32	40	N—W21.5°	○		○		
18	2.37×54	1.77×36		N—W17°	○				W—22と重複
19	2.265×78	1.585×42	48	N—W20°	○				
20	2.375×72	1.95×42.5	14	N—W17.5°					
21	1.32×?	80×?	34	N—W20.5°			○		
22	2.15×71	1.60×40.5	33	N—W22°	○				W—18と重複
23	2.12×?	1.75×?	38	N—W23°	○				W—24と重複

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方位	礫	小口溝	遺物	有段	備考
W—24	2.08×66		20	N—W24°	○				W—23と重複
25	2.52×77	2.05×36	26	N—E26°	○				
26	2.00×75	1.485×38	36	N—E19°	○				
27	1.55×？	98×40	24	N—E16°	○				
28	2.17×75	1.87×45	23	N—E18°	○				
29	2.115×78	1.62×38	30	N—E9.5°	○				
30	1.995×70.5	1.27×37	42	N—E21.5°	○				
31	2.02×58.5	1.58×30.5	34	N—E23°	○				
32	1.99×77	1.48×39	35	N—E25.5°	○				
33	2.01×72	1.58×35	32	N—E16°	○				W—10と重複
S—1	2.53×93	1.88×45	58	N—W10°	○				
2	1.58×76.5	1.08×38	45	N—W32.5°	○				
3	60×55		34						
4	甕棺								
5	2.27×91		71	N—W24°	○	○	○		
6	1.29×63		50	N—W41.5°					
7	1.86×81	1.53×42	30	N—W38°		○	○		
8	2.60×1.08	2.13×54	54	N—W 5°	○				
9	2.32×72	1.98×44	45	N—W6.5°					
10	2.06×1.31	1.51×53	90	N—W7.5	○		○		重複か
11	2.23×78	1.41×43	29	N—W6.5°	○				

⑥　枕石が南北に1対ずつ置かれている。

これらの特徴を箱式石棺（Ⅱ）類，竪穴式石室（Ⅰ）類の構造と比較検討してみると，①に対しては，箱式石棺（Ⅱ）類は共に2段掘りであるが，竪穴式石室（Ⅰ）類においては，2号墳第1主体が1段掘りであり，共通をもっている。②・④に対しては，箱式石棺（Ⅱ）類，竪穴式石室（Ⅰ）類両者の特徴を示している。③に対しては，箱式石棺（Ⅱ）類と共通性をもっている。⑤に対しては，竪穴式石室（Ⅰ）類のグリ石を隙間に塞める手法と同様と考えられる。⑥に対しては，南側の枕石は箱式石棺（Ⅱ）類の7号墳第1主体，北側の枕石は竪穴式石室（Ⅰ）類と，その置き方が酷似している。

これらのことからもわかるように，7号墳第2主体の箱式石棺は，箱式石棺（Ⅱ）類と竪穴式石室（Ⅰ）類の共通する要素をもって構築されており，両者の中間型式と言えるものであり，箱式石棺（Ⅱ）類→竪穴式石室（Ⅰ）類への移行が考えられよう。

以上，石材使用の埋葬主体の変遷について検討を加えてきた。これら箱式石棺，竪穴式石室，石蓋土壙などには，年代決定につながる遺物がほとんど副葬されておらず，埋葬主体の構造よりの推測であるが，横見墳墓群の埋合箱式石棺から竪穴式石室へ，すなわち，4号墳第1主体→7号墳第1主体→7号墳第2主体・9号墳第3・4・5主体→10号墳第1主体→12号墳第1主体と言う変遷がある程度考えられるのではなかろうか。（表　参照）

石材使用主体一覧（表３）

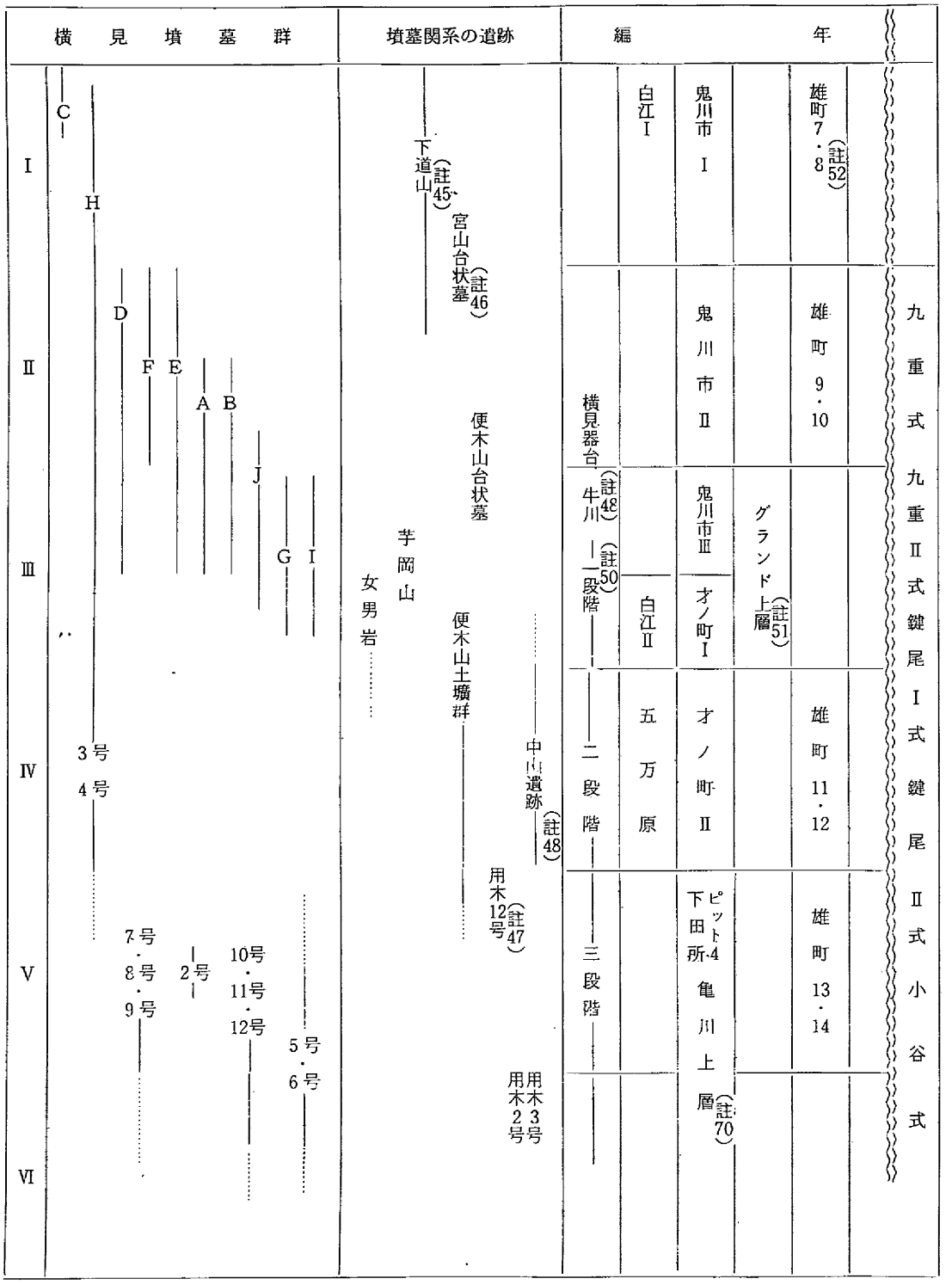
番号	土壙規模	主体規模	深さ	有段	小口溝	床石	枕石	槨	石蓋	方位
2－1	4.40×2.40	2.42×0.40	0.9			○	○	○	3重	N65W
3－5	1.18×0.93		0.15	○	○					N67W
3－6	0.78×0.44		0.25							N18E
3－7	1.10×0.68		0.45	○					1重	N87W
3－8	0.66×0.80									N26E
4－1	3.46×1.55	2.40×0.70		○	○		○		2重	N74E
4－6	1.70×0.62	1.22×0.28	0.25						不明	N70E
4－9	0.54×0.28		0.24							N66E
4－10										N65E
5－3	0.95×0.86		0.22		○				1重	
5－4	0.73×0.66		0.15						1重	
5－5	1.60×0.71	0.90×0.20	0.20		○				不明	N81W
6－3	?									
6－4	0.95×0.65	0.65×0.35							不明	N90W
6－5	0.74×0.68	0.40×0.40	0.15						不明	N66E
6－6	0.85×0.52	0.60×0.20							不明	N15E
6－7	0.63×0.35	0.40×0.30		○					1重	N77W
6－8	1.00×0.63	0.58×0.25	0.13						2重	N2E
7－1	2.50×1.25	1.63×0.41	0.62	○	○	○	○		2重	N15E
7－2	3.45×1.76	2.08×0.65	1.00		○	○	○		2重	N36E
7－3	? ×0.45	0.50×0.10			○				?	N72W
7－4	0.83×0.54	0.24×0.15	0.17				○		2重	N70W
7－8	2.55×0.94		0.78							
8－5	1.42×0.93	0.82×0.29		○	○				2重	N31E
8－6	1.70×1.31	?	0.15			?		○	不明	N74W
8－7	0.92×0.72	0.58×0.12	0.10			○		○	不明	N35E
9－3	4.16×1.95	1.97×0.33	0.70	○		○	○	○	3重	N81W
9－4	3.04×1.50	1.55×0.33	0.60	○		○		○	2重	N67W
9－5	2.97×1.55	1.33×0.36	0.90	○		○	○	○	2重	N70W
9－6	1.21×1.74	0.40×0.18	0.53			○	○		1重	N52W
9－7	0.72×0.51	0.46×0.17	0.20						2重	N89W
9－8	1.24×0.85	0.61×0.15	0.54	○		○		○	3重	N11E
9－9	1.40×約0.80	0.74×0.20	0.30			○	○	○	2重	N14E
10－1	4.00×1.20	2.42×0.52	0.85			○				N76W
10－4	1.05×1.62	?	0.20						?	N61W
10－5	1.03×0.73	0.53×0.37	0.15	○			○		2重	N78W
10－6	1.20×0.71	0.72×0.30	0.11	○					1重	N52W
11－2	2.41×0.87	1.30×0.35	0.22							N87E
12－1	4.00×2.00	2.70×0.60	0.60	○			○			N80E
W－34	1.12×0.40	0.82×0.20	0.30				○		2重	N16E

単位　m

石材使用主体形態分類（表４）

		1号墳墓	2号墳墓	3号墳墓	4号墳墓	5号墳墓	6号墳墓	7号墳墓	8号墳墓	9号墳墓	10号墳墓	11号墳墓	12号墳墓
竪穴式石室	Ⅰ		(2-1)							(9-3, 9-4, 9-5)			
	Ⅱ										(10-1)……	………	……(12-1)
箱式石室	Ⅰ				(4-1)……	……	……	(7-2, 7-1)					
	Ⅱ				(4-6)……(5-5)								
							(6-4, 6 6)						
小型箱式石室	Ⅰ						(6-5, 6-8)……(7-3, 7-4)……(8-5)……(9-6, 9-7)						
	Ⅱ								(8-6, 8-7)……(9-8, 9-9)……(10-4)				
石蓋土壙墓	Ⅰ			(3-7)		(5-3, 5-4)……(6-7)							
	Ⅱ										(6-5, 6-6)		

編　年　表（表5）



横見墳墓群
墳墓関系の遺跡
編年
I
II
III
IV
V
VI
C
H
D
F
E
A
B
J
G
I
3号
4号
7号・8号・9号
2号
10号・11号・12号
5号・6号
下道山（註45）
宮山台状墓（註46）
便木山台状墓
芋岡山
女男岩
便木山土壙群
中山遺跡（註48）
用木12号（註47）
用木3号
用木2号
白江I
鬼川市I
雄町7・8（註52）
鬼川市II
雄町9・10
横見器台
牛川（註48）
一段階（註50）
鬼川市III
グランド上層（註51）
白江II
オノ町I
二段階
五万原
オノ町II
雄町11・12
三段階
ピット4
下田所
亀川上層（註70）
雄町13・14
九重式
九重II式
鍵尾I式
鍵尾II式
小谷式

第7章　総　　括

横見墳墓群は，第6章第1節で述べた如く，その出土土器よりⅠ期からⅥ期に亘ることが明らかになった。Ⅰ期からⅢ期までの埋葬数は88主体であり，その埋葬手法は極く一部を除いて木棺を使用している。Ⅳ期からⅥ期において，埋葬数は68主体で，その埋葬手法は石棺を用いたものが半数以上を占め，又その約半数が小児墓と考えられるものである。

図101に示した如く，Ⅰ期からⅢ期の主体はそれぞれまとまりをもって分布していることから，ここでは次の如く，AからKまでにおきかえて論を進めていく。

A＝12－2～12－4，B＝10－7～10－13，C＝7－5～7－8，D＝6－9～6－19，E＝5－6～5－14，F＝S－8～S－11，G＝4－8～4－10，H＝W－1～W－33，I＝S－1～S－7，J＝2－3～2－8の如くである。

埋葬の開始は，4個の木棺より形成されるIよりで，これと相前後して営なまれるのがHである。Hは出土遺物からみて，Ⅰ期～Ⅲ期まで継続されて埋葬がおこなわれている。これらの時期に引き続いて埋葬がおこなわれるのが，Fである。Fは4号墳墓から5号墳墓の西斜面に，南北に存在する木棺群である。FとEとの関係は，Eの木棺群に伴なう土器がなく，わずかに，墳丘上より出土している土器によって判断を加えるならば，時期的にはFとの差はないと考えられる。さらにEが存在する部分は，南側部分の地山を削り出して，方形台状の墓域を画している。このようなことから，Fは，Eの方形台状墓と時期的な差を持たずに埋葬が開始されたことになる。又，Eが方形台状の墓域を画すると同様に，Dについても，方形台状の区画がみいだされる。DもEと同じように，木棺に直接伴なう遺物は検出されていないが，墳丘上からの遺物からEの方形台状墓と時期的な差はみいだされない。従って，D－Eの方形台状墓域外にFの埋葬がなされていることからすれば，これらのものよりか，若干後出的な可能性もある。

これらに続く埋葬として，A・Bそして，J・G・Iがあげられるであろう。A・Bについては，木棺に伴なう遺物は検出されず，AとBとの東よりに検出された算盤玉状の胴部と，11号墳墓2区墳丘外より出土した長頸壺の平行直線文を有する頸部を検出している。特に，この頸部は，Hより出土しているものと同一内容を示していることなどから，その時期の目安となろう。これらに続くものとしては，J・G・Iである。IのS－1及びS－4に伴なう遺物によってその時期が示されよう。Gについては，古い様相を有する脚部が出土しているが，棺内から新しい様相の高杯の脚部が出土していることから，この時期を移動しないであろう。Jについては，直接伴出する遺物は見い出されなかったが，2号墳墓第1主体の掘り方埋土中より，壺あるいは器台の口縁部が検出されていることからすれば，第1主体の石室に伴なうものではなく，棺丘下の木棺群に伴なうと考えられる。このことから，A・Bをして，J・G・Iが順次埋葬を繰り返していったものと考えられるのである。

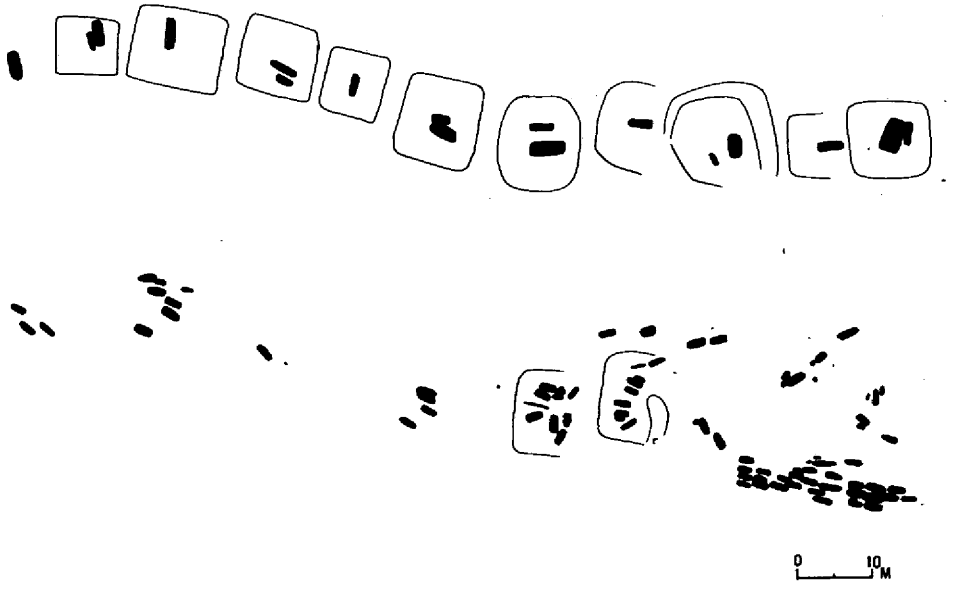
Ⅰ期からⅢ期について以上のような埋葬の推移が認められたが，Ⅳ期からⅥ期について特に，Ⅲ期

とⅣ期の相違は，特殊系の胎土を有する土器群が姿を消すこと，明確な墓域を持ち，かつ墓域に対してメインとなる主体部を有することなどが挙げられるであろう。このメインなる主体について，その幾つかは石材を用いて埋置されていることなどは，Ⅲ期までの埋葬形態と全く相違するところであり，個々の主体に対しての土器供献も行なわれないなど，葬法そのものについても明らかに異なってきている。このⅢ期とⅣ期の変化は，横見墳墓群を墓所とする社会の変質といえよう。

まず，この問題を述べる前に，Ⅳ期からⅥ期の墳墓の変遷について述べてゆく。

第6章第2節で述べている如く，石材使用の主体部の変遷について，4号墳墓第1主体→7号墳墓第1主体→7号墳墓第2主体・9号墳墓第3・4・5主体→10号墳墓第1主体→12号墳墓第1主体といった構造の変化を見い出しえた。この変化により，2号墳墓第1主体は，9号墳墓と構造的に極めて類似することから，7号墳墓から9号墳墓に埋葬がおこなわれる過程において，2号墳墓が営まれることになる。丘陵主軸に直行し，各墳墓の南―北を画する為に用いられている溝は，相互に重複して切り合うこともなく，順次掘削されていったことが，土層断面の観察において明らかであった。このことは，溝を共有する墳墓は上から順次墳丘を整えてゆかなければ，このような溝の状態にはならないということである。これは，石棺使用の主体の変遷と対応するものである。

このようなことからⅣ期に続いて埋葬が営まれるのは，3号墳墓・4号墳墓であり，以後5号墳墓から12号墳墓まで順次営まれていくが，7号墳墓から9号墳墓へ行く過程で，2号墳境に埋葬がおこなわれるのである。しかしながら，出土遺物の関係においては，6号墳墓と7号墳墓の間にある溝の，6号墳墓よりの溝裾部に甕形土器が置かれた状態で出土し，5号墳墓の墳丘表土より出土した口縁部破片も，布留式の範疇に入るものと考えるものである。8号墳墓第5主体より出土の壺の口縁部



第100図　(上)Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期の第1・第2主体
(下)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の木棺墓

は，５号墳墓・６号墳墓出土の土器よりも，やや先出的なものと考える。さらに，11号墳墓第１主体より出土している土器は，布留式に入るものであり，特にこの土器にみられる胎土は，10号墳墓第２主体出土の鼓形器台，及びW—34の礫上より出土したものと胎土・焼成とも同一内容を示している。

このように，出土遺物から墳墓の推移を追っていくと，３号墳墓・４号墳墓→７号墳墓・８号墳墓・10号墳墓→２号墳墓→10号墳墓・11号墳墓・12号墳墓→５号墳墓・６号墳墓という結果になる。この過程は，３号墳墓・４号墳墓の埋葬が終ったことによって次の墳墓が形成されて埋葬がおこなわれていくのではない。具体的には，７号墳墓が形成され，埋葬がおこなわれている時点で相前後して，８号墳墓にも同時に埋葬がおこなわれたということであり，相互に継続して埋葬が営まれていたことが知られるのである。また，５号墳墓・６号墳墓が，横見墳墓群で終末段階に位置付けられることは，土器の問題との外に，２基の墳墓の下には方形台状墓が存在することが上げられよう。この方形台状墓は前述した如く，５号墳墓と６号墳墓の部分だけに認められるもので，この他にこのように明確な墓域を画している所は見られない。このことから，３号墳墓・４号墳墓から墳墓を造成する時点において，その存在の為に７号墳墓へ移行したものと考えられるのである。

この出土遺物からの検討において，小型箱式石棺とされる小児石棺の変遷と，墳丘の溝との関係で，矛盾する結果を導きだしたことになる。しかしながら，墳墓に対してのメイン埋葬主体は，継起的なものがみられない側面からすれば，５号墳墓・６号墳墓が，10墳墓・11号墳墓・12号墳墓に対して埋葬がおこなわれる過程において埋葬が開始されたと考えられる。このことは，10号墳墓と11号墳墓の東斜面に存在する箱式石棺の存在が示唆となろう。

以上，Ⅰ期からⅥ期に旦ってその推移を述べてきたことが，あらためて横見墳墓群を形成した社会的背景についてみてゆきたい。

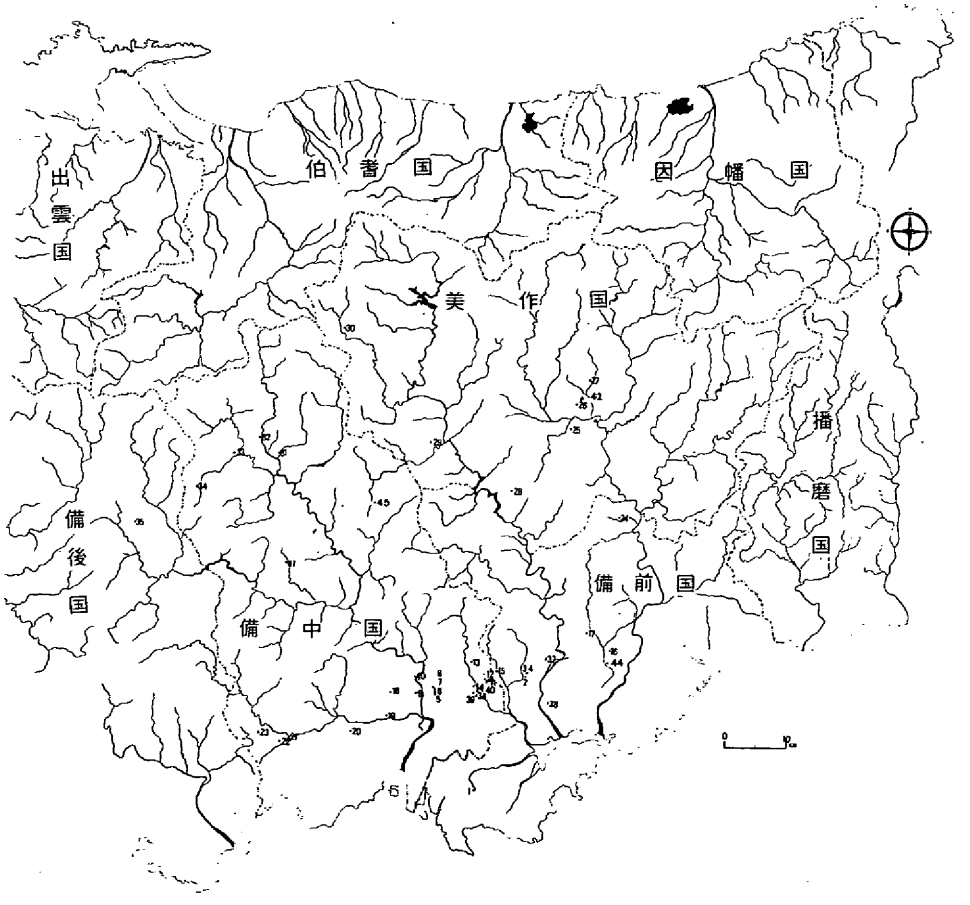
横見墳墓群において，埋葬が開始されたのは後期初頭からであり，その出現時から数個のまとまりを持って営まれている。ただ，Ｗ１～W33においては，Ⅰ期～Ⅲ期に旦って継続されて埋葬を繰り返している。このまとまりは，ＤとＥにおいて地表を削り出して，方形状の墓域を画するのを除き，明確な墓域を画するものを有していない。１つのまとまりを持つことによって，他の埋葬集団と，明らかな区分を設けている。

この間，特殊系の胎土を有する土器の伴出は，Ⅰ期の段階に伴うが，特殊器台・特殊壷の出現はⅡ期より始まっている。この土器群は，Ｃの西斜面墳丘中と，Ｇより出土する外は，Ｗ１～W33の木棺群よりの出土によって占められている。ＩおよびＦが時期的にも単一の時期を示し，個々の埋葬主体に供献をする要素がみられる。しかしＨは，特殊器台・特殊壷の出土状態からみるかぎり，埋葬主体全てに対しての祭祀がおこなわれていたとみられる。また，Ｈより出土する特殊壷などは，完形品はなく，ほとんどが破片であり，個々の埋葬主体に供献した出土状態を示していない。特殊壷が，単独の埋葬主体に対して供献されているのは，西斜面第７主体の棺上出土しているものがそれである。しかし，この特殊壷は，特殊系の胎土・焼成・色調も全く異なり，胴部の凸帯も篦による削り出しによってなされるなど，その内容について異質の感を受けるのである。

当墳墓群において，特殊と呼ばれる器台は，高橋護氏の器台形土器（註53）の内容説明のそれと

は，全く形態を異にしている。近藤義郎氏が「埴輪の起源」の中で『特殊化してある器台形土器』（註54）とされている矢掛町芋岡山遺跡のE遺構出土の器台形土器，あるいは，この器台形土器よりも型式的に古い可能性がある広島県東城町戸宇牛川遺跡出土の器台形土器とも形態的にかなりの差異を持っている。芋岡山遺跡・戸宇牛川遺跡とも，特殊壷形土器を伴ない，胎土も同一であり，埋葬行為という限定された目的に対して，製作され，使用されていることが報告により明らかである。このことからすれば，横見墳墓群の器台形土器は，前2者の如く，より顕著な姿で脚台端部の立ち上がりを示さないが，明らかにその傾向が認められる。かつ，特殊壷とセットで使用されていたこと，胎土の面からも，さらには前述した使用目的からも，特殊器台と呼んでもさしつかえないものと考える。このような考え方が許容されるならば，狐塚省蔵氏が「異貌」で，吉備型器台として特殊器台4型式に分けられた（註55）中では，当然第1型式以前のものと考えるのである。その時期も，第6章第1節で述べた如くであり，より詳しくは上東Ⅱ式のより後半に位置付けられると考えられる。

特殊壷は，前述した特殊器台とセットとなるものを除いて，小形のものである。この小形の特殊壷は，鶴首状の口縁部をもち，器形は算盤玉状を示し，胴部中央には2ないし3本の凸帯部を形成し，



第101図　特殊器台・特殊壷出土地点

上段の凸帯部上面に数条の凸線を施すのが一般的である。この胴部の凸帯は，大形のそれと同様に断面は台形状にならず，すべて楕円状を示している。このことに関連して，特殊系の土器に施される文様を施された土器の破片は，全く当墳墓では認められなかった。

特殊器台と特殊壷とによって示された内容は，ほぼ単一の内容を示していることがいえる。なぜならば，この種の遺跡の全容が報告されることは極くまれではあるが，矢掛町芋岡山遺跡では小形の特殊壷と，凸帯断面台形状の大形の特殊壷が伴出し，最近調査された真備町黒宮大塚（註56）においても，両者の共伴がみられる。といった如く，２つのタイプのものが伴出する墳墓と，そうでない横見墳墓を構成する個々の共同体の領域の相違とも考えられるのである。

現在まで知られている特殊器台，特殊壷の吉備地域での出土地は第図（註57）に示した通りであり，図の番号の遺跡名について下に記す。

1. 向木見遺跡	2. 七ツ坦三号墳	3. 都月坂２号墳
4. 都月坂１号墳	5. 鋳物師谷２号墳	6. 柳坪遺跡
7. 八神九号墳	8. 宮山墳墓群	9. 伊与部山遺跡
10. 山崎遺跡	11. 立田遺跡	12. 八幡山遺跡
13. 浦尾遺跡	14. 天神山遺跡	15. 観音堂遺跡
16. 陣場山遺跡	17. 便木山遺跡	18. 立坂遺跡
19. 黒宮大塚	20. 芋岡山遺跡	21. 長法寺遺跡
22. 名称不詳（註58）	23. 金敷寺裏山墳墓	24. あたご山遺跡
25. 円山遺跡	26. 下道山遺跡（註59）	27. 上原遺跡
28. 仁王免遺跡	29. 西河内中山遺跡（註60）	30. 向山墳墓群
31. 桑原遺跡（註61）	32. 横見墳墓群	33. 古坊遺跡（註62）
34. 西江遺跡（註63）	35. 広島県東城町宇戸・牛川遺跡	36. 女男岩遺跡
37. 片山南斜面遺跡	38. 網浜茶臼山古墳	39. (伝)大坦ひさご塚
40. 楯築遺跡	41. 本郷遺跡	42. 小原権現山遺跡（註64）
43. 浦間茶臼山	44. 矢の内遺跡	

以上，広島県東城町を入れ，吉備においては45ケ所が認められ，他に総社市今宮の天狗松よりの出土があるが，その出土地点が不詳の為，図にはドットしていない。これを加えれば45ケ所にのぼることになる。

この分布からは，高梁川流域と及び西から東流して高梁川と合流する小田川流域における存在が際立っていることがうかがえる。岡山県において，三大河川のうち吉井川と旭川は，備前国・備中国・美作国といった古代律令制度における国境となり，かつ国を越えてその流域を持っている。これに対し，高梁川は備中国のほぼ中央部を流れ，他の国への流路を持っていない。かつまた，西から東へ流路を持つ小田川を支流としており，これら河川の果す役割は絶対的なものと考えられる。

このことは小田川と高梁川の合流近くに黒宮大塚，新本川と高梁川との合流近くに伊与部山遺跡によって示され，小田川以西においてはかなりの密度で確認され，新見においても，その最上流に確認

されていることなどによって認められる。他の流路にみられるような点ごとの分布状態と，かなりの様相の違いをみせている。

この高梁川の上流に存在するのが，横見墳墓群である。この高梁川下流域を中心とする集団（註66）との交通手段は，専ら河川によっていたと考えられる。文永8年の「新見庄地頭方東方団地実検名寄帳」において船給がみられ，13世紀頃には船による運搬手段が用いられていたことが知られる。これ以前に，吹屋銅山・小泉銅山が大元2年と大同3年の開坑と伝えられ，いずれもが9世紀前半である。この開坑は，当然運搬路の開拓が伴なうものであり，銅山から成羽までは牛馬背による運搬手段が用いられたと考えられる。成羽から高梁川を経て，高梁川下流域へは船の利用が最も妥当と考えるのである。このことは，若干年代が下るが，鉄の運搬とも同じで，藤沢晋氏が詳しく考察されておられるが（註67），神代郡・野辺郡の鉄は，一たん八鳥（哲西町）に集荷され，吹屋を経て成羽に出ていることなどからも伺いえる。

高梁川から成羽川を経て神代川，高梁川から西川を経て神代川へ達するいずれもが備中国内におけるルートである。

しかしながら，第1章で述べた如く，横見古墳群においては，高橋護氏あるいは狐塚省蔵氏が示された特殊器台・特殊壷が出土していないことと合わせて，興味ある事実である。

横見墳墓群は，特定の共同体の埋葬地として選定されたものでなく，複数の共同体によるものであったことが知られる。この埋葬は，墳墓を構成する個々の共同体の限定された構成員の埋葬場としている。この埋葬対象者は木棺あるいは土壙内掘り方の規模からすれば成人とされよう。この成人埋葬は，墳墓群における主体を占めていたことが知られる。そして，共同体の規制がいまだに構成体である家族に対して有効に果していたことが伺える。この規制を侵して，具体的にその姿を現わしてくるのは，Ⅲ期以降であることがDとEの存在で明らかであろう。いのD及びEは，明確に地山を削り出して墓域としての区画を設けている。特に，Eについてその埋葬主体の構成は，3つの主体が1つの単位を示している如く，複数の家族の埋葬場として方形台状墓を形成している。すでに，共同体を構成する家族の中に，具体的な姿で格差がみられるのである。この方状台形墓の形成される反面，Hにおいていまだに共同体による葬送の祭祀が営なまれており，かつ，Ⅲ期においても特定木棺墓において，土器の供献がなされている。

このことは，墳墓群を構成する個々の共同体の家族が，その立地的条件により広汎な形で，富の収奪が出来なかったことがいえる。従って，特定家族が共同体規制を越えて，共同体を支配するまでには，その社会的格差が達していない，あるいは，その形成が緩慢な形でしか進行しなかったと考えられる。

Ⅳ期以降にみられる，明確な墓域を持ち，それに対してのメインの埋葬主体部を形成する段階になっても，この基本的な姿の変化は認められない。ただ，各共同体においてその共同体の規制を越える形での埋葬がみられる。しかしながら，この姿は各共同体内部における特定家族の格差の具現化であって，各共同体そのものを越えて，特定個人に対しての絶対的なヒエラルキーの形成ではない。あくまでも各共同体内部における格差の問題であるといえよう。石材を使用して埋葬主体を形成する共同

体においては，すでに竪穴式石室の手法を取り入れていながらも，直線的な形では受け入れていない。特に，鋸歯文鏡を副葬していた11号墳の第3主体は，メインの主体ではない。鏡の副葬そのものが，主体内部ではなく棺上副葬されるなどは，土器を棺上に供献する形と基本的に同じ観念が働いているものと考えられる。竪穴式石室の手法を用いながら，本格的な竪穴式石室を用いず，その内部には石棺を埋置するといったかなり独自の埋葬形態を保っていたことが知られる。

近藤義郎氏は『前方後円墳は，―中略―幾内を盟主として諸地方諸集団をふくめた，政治的結集体の形をその成立の主体要因として』（註69）と述べられた形での諸地方諸集団における政治的結集体が，吉備において特殊器台・特殊壷によって具体的な形で把握できるならば，当墳墓群は，特殊器台の矛盾がでてくる異質なものといわざるをえない。

当墳墓群が，その立地条件により時代が進むにつれて，その高梁川流路における伯耆国から出雲国へ貫けるルートとしての役割の重要度は増大したと考えられる。この増大は，それと伴なって生産活動において富の蓄積が伴なうものであれば，前述した如く，個々の共同体を越えて政治的領域を形成できたものと考えられる。特に，各墳墓を構成する共同体の生活の場は，丘陵下だけではなくかなり広範囲に亘っていたと思われる。2号墳墓・4号墳墓・11号墳墓・12号墳墓を除く他の墳墓には，小児棺が伴なっており，各共同体における特定された家族の存在が知られる。しかしながら，これらの中から各共同体そのものを把握してゆき，実質的にはその地域におけるヒエラルキーの実体者となりうる特定個人が出現する段階には達していなかったことがいえる。（ただ，この段階が社会の発達度における進歩の度合を意味するものではない。）

Ⅲ期からⅣ期に移行するにあたって，葬法そのものを変えながらも，その実質的な内容において変化をみなかったことは，広範な地域を有する政治的結集体に組み込まれていく過程での共同体の変化とは，別な側面からみなければならないであろう。第4号墳墓第1主体より出土した，剣・刀子の副葬は，この墳墓群を構成する共同体の姿を現わしているといえよう。このことは，構成する共同体間においては，隔絶していなかったとはいえ，横見墳墓群を中心とした1つの政治的領域を形成していたものと思われる。この政治的領域は，墳墓群の立地条件により一層強化されていた反面，生産活動における富の収奪が不十分であったため，各共同体内部における隔絶化が進まず，ましてや共同体を超えたヒエラルキーの形成を阻んだものといえよう。

今回の調査は，横見墳墓群の全容をほぼ把握し得たが，報文においては，その内容を十分言及出来なかった部分が多くあり，又，別の機会に稿を起したい。

引用・参考文献

註1　山本慶一　『倉敷市児島仁伍遺跡』　倉敷考古館研究集報第8号　1973年7月
註2　『谷尻遺跡』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（11）
註3　橋本惣司氏の御教示による。221遺跡と呼ばれている。
註4　間壁忠彦　『岡山県矢掛町白江遺跡』　倉敷考古館研究集報第1号　1966年3月
註5　高橋護他　『雄町遺跡』　埋蔵文化財発掘調査報告　1972年3月
註6　間壁忠彦・間壁葭子　『女男岩遺跡』　倉敷考古館研究集報第10号　S.49.11

註7　近藤正・東森市良　『島根県安来平野における土壙墓』　上代文化第36輯　S.40
註8　近藤正・前島己基　『島根県松江市的場土壙墓』　考古学雑誌第7巻第4号　S.47.3
註9　間壁忠彦・間壁葭子　『岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告』　倉敷考古館研究集報第3号　S.42.8
註10　間壁忠彦・間壁葭子　『岡山県美星町五万原遺跡』　倉敷考古館研究集報第5号　S.43.10
註11　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一他　『上東遺跡の調査』　埋蔵文化財発掘調査報告第2集　S.49.3
註12　註11と同じ
註13　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　青木遺跡発掘調査（Ⅰ）　S.51.3
註14　註7に同じ
註15　坪井清足　『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』　S.31.3
註16　註7に同じ。東森市良　『九重式土器について』　考古学雑誌第57巻　第1号　S.47.7
註17　註5と同じ
註18　註11と同じ
註19　山本清　『山陰の土師器』　山陰古墳文化の研究　S.46.7
註20　山本清　『山陰地方』　新版考古学講座4　雄山閣　S.44.10
註21　山本清　『山陰地方』　新版考古学講座5　雄山閣　S.45.6
註22　東森市良　『九重式土器について』　考古学雑誌第57　第1号　S.46.7
註23　『福市遺跡の研究』　山陰考古学研究所記録第1196年　『福市遺跡』　来子市教育委員会1968年
註24　向田裕始　『戸宇・牛川遺跡の発掘調査』　帝釈文化　東城町立帝釈郷土館第7号　1976年3月
註25　近藤義郎・春成秀爾　『埴輪の起源』　考古学研究第13巻　第3号　S.42
註26　広島県教育委員会　『鍵向山石棺群』　加茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告　1976年3月
註27　註4と同じ
註28　註8と同じ
註29　前島己基氏が　『季刊文化財』　第18巻の中で九重Ⅰ式・Ⅱ式と使い，鍵尾Ⅰ式・Ⅱ式と併認しており，その具体的細分化について言及していない。
註30　註19と同じ
註31　註8と同じ
註32　井上弘・竹田勝　『新市谷遺跡』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第15集　1977年3月
註33　近藤正　『仲仙寺古墳群』　安来市教育委員会　S.47.2
註34　勝部昭・松本岩雄　『平所遺跡』　国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　島根県教育委員会　S.51年3月
註35　註7に同じ
註36　樫本誠一・小川良太　『柿坪・中山古墳群』　山東町教育委員会　1974年
註37　金井亀喜他　『西願寺遺跡群』　『広島市高陽町矢口所在遺跡群の調査概報』　広島県教育委員会　1974年
註38　神原英朗　『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』　『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業団地内埋蔵文化財発掘調査概報(3)』　1973年
註39　註37と同じ
註40　神原英朗他　『岩井山古墳群』　岡山県御津町教育委員会　1976年
註41　二宮治夫・浅倉秀昭他　『宮の前遺跡』　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)』　岡山県教育委員会　1976年
註42　山磨康平氏の御教示による
註43　正岡睦夫氏の御教示による
註44　従来，竪穴式石室とは板状石を小口に積み上げて石室を造り，内に木棺あるいは石棺を収めたものを言い，一般的に近畿地方を中心に構築されている。横見墳墓群中におけるものは様相的に近いものであっ

て，いわゆる幾内型と呼ばれる構造を示す竪穴式石室ではない。

註45　岡山県教育委員会により1976年度に調査された。

註46　神原英郎　『宮山方形台状墓』　『便木山遺跡発掘調査報告』　岡山県営山陽新住宅市街地市発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第３・第２集　山陽町教育委員会　Ｓ.48.3・Ｓ.46.7

註47　神原英郎　『用木古墳群発掘調査概報』　1971年３月　『用木古墳群』　Ｓ.50.3

註48　岡山県教育委員会により1976年度に調査された。

註49　註24と同じ

註50　孤塚省蔵　『吉備型器台論（上）（下）』　異貌４・５　1976年５月・1976年11月

註51　高橋護・正岡睦夫　『津島遺跡出土の遺物について』　岡山県埋蔵文化財報告　５　1975年３月

註52　註５と同じ

註53　高橋護　『三輪山墳墓群の調査から』　岡山県総合文化センター館報第39号　Ｓ38年10月

註54　註25と同じ

註55　註50と同じ

註56　倉敷考古館によって1977年３月に調査された。間壁葭子氏御教示

註57　孤塚省蔵氏の『吉備型器台』の中の出土地名表によることが大であり，氏に何かとご無理を聞いていただきここで記して感謝する次第である。

註58　藤田憲司氏御教示による。

註59　栗野克己氏御教示による。

註60　山磨康平氏御教示による。

註61　中国縦貫道により1976年に調査

註62　〃　〃　〃

註63　〃　〃　〃

註64　河本清氏御教示による。

註65　西川宏　『吉備の国』学生社　1975年３月　の中で述べられている　『政治的領域』　を考えている。

註66　藤沢晋　『14世紀の成羽川水運開発記念碑「笠神文字岩」について』　岡山大学教育学部研究集録第18号　1964年

註67　註10と同じ

註68　近藤義郎　『古墳以前の墳丘墓』　岡山大学法文学部紀要第37号　1977年１月

註69　都市計画道路に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告16，岡山県教育委員会　Ｓ52．３

補記　この章を書き上げた後ち，石材分析の結果が出され，２号墳墓第１主体と７号墳墓第１主体に用いられた石材が同一であることが明らかになった。このことは，石材使用の主体部の形態的側面からの推移を若干変更せざるをえなくなった。さらに，墳墓の主体部に用いられたと考えられる石材の分布が墳墓を中心として，0.5㎞～4.0㎞の周辺に存在することが明らかになった。これらの指摘について，章の終りに記した如くあらためて稿を起したい。

附章1　石材同定について

<岡山理科大学教授　三　宅　　寛>

（Y.4）4号墳第2蓋石：流紋岩――暗灰色で石英の粗粒斑晶に富み，節理に沿う板状の外形を示す石英斑岩質岩である。鏡下では，斑晶は融蝕された石英・斜長石・アルカリ長石および角閃石で，石英以外は著しく変質している。石英も割目に沿い方解石脈により貫かれることが多い。石基は石英・長石の微小結晶から成り完晶質であるが変質が進んでいる。流理は全く見られない。墳墓の東方約0.5㎞馬塚下部落を南下する高梁川河床に岩盤として露出するものと同一岩石である。

（Y.1）2号墳第1主体：流紋岩――灰黒色で板状外形を示す。鏡下では，斑晶は斜長石・角閃石・アルカリ長石および石英からなり，石基は微結晶質乃至ガラス質で流状組織を示し，全体に炭酸塩鉱物による交代作用が顕著である。角閃石や長石の溶脱による隙孔がしばしば見られる。墳墓の南西方約2.5㎞の舞尾部落の通称カスが谷に分布するものと同一岩石である。

（Y.6）7号墳第1主体：流紋岩――Y.1と同一岩石である。

（Y.11）9号墳第4主体：流紋岩（火砕流岩質）――節理に沿う板状，淡黄緑灰色岩で，捕獲溶流した多量の他種岩片が特徴的に見られる。鏡下で玄武岩・玢岩・珪長岩等の岩片が確認される。流状組織は著しい。同一岩石とみなされる露頭が，墳墓の西方約2.0㎞，小谷部落東岸の林道沿いに見られる。

（Y.2）4号墳第1主体：流紋岩――Y.1とY.11との中間的な岩相・組織を示す。

（Y.10）9号墳第1主体：流紋岩質砕屑岩――表面は風化され黄褐色であるが，暗灰色で流理は明瞭である。鏡下で石基にガラス質の部分が多いのが，上記各流紋岩と異る特徴である。粘板岩・チャート・完晶質珪長質岩等の岩片を多数含んでいる。他の流紋岩と一連のものである。

（Y.8）7号墳第2主体枕石中央：流紋岩（熔岩）――淡紫灰色で流理に沿った節理による板状の岩片で，熔岩流による薄層の累重と，その中の捕獲岩片とが明瞭に観察されるのが特徴である。鏡下では，石英・斜長石・アルカリ長石および少量の黒雲母の流理に沿った微斑晶帯と，これに平行な微晶の石基帯の繰りかえしが認められる。既述した同一岩体とみなされる各流紋岩（Y.4～Y.10）とは異なる岩体をなすものと岩相から推察される。墳墓の南方約3.0㎞の布原部落および西方約3.5㎞の小谷部落に類似の岩石が散見される。

（Y.5）7号墳蓋石：流紋岩――Y.8と同一の岩石である。

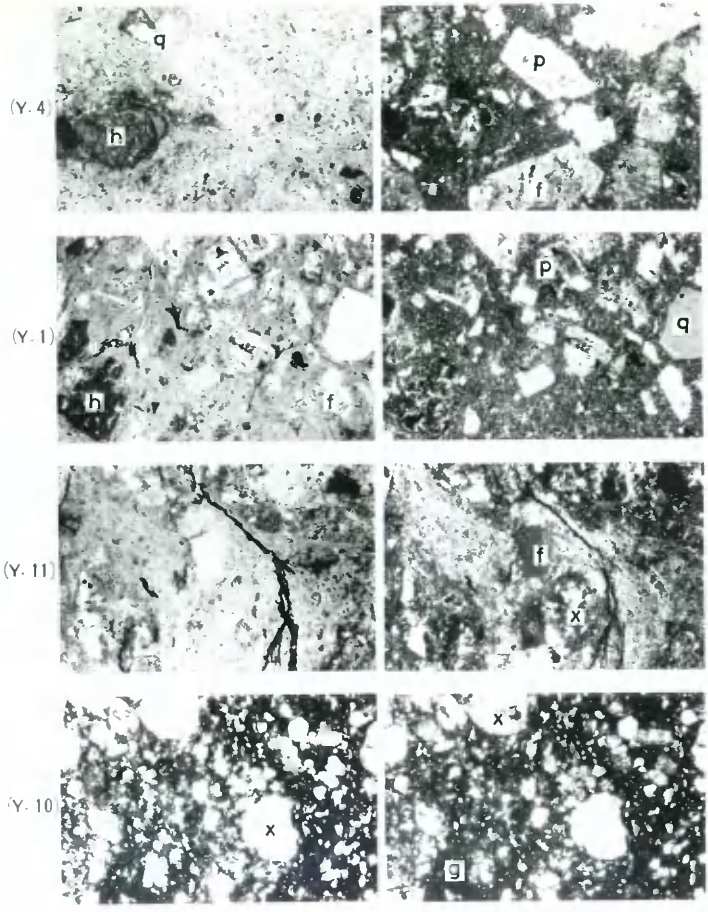
（Y.3）4号墳第1蓋石：珪長岩――優自色，細粒岩の岩片である。鏡下では石英・一部変質した長石・殆んど酸化鉄化した黒雲母が主成分で，ほぼ粒状組織を示す。墳墓の北方の坂本部落一帯に分布する花崗岩に伴う脈岩ではないかと推定される。

（Y.7）7号墳第1主体枕石西：かんらん岩ないし蛇紋岩――表面は風化し黄褐色土壌化してい

るが，内部は帯暗青灰色のかんらん石とこれを脈状に交代した黒色の蛇紋岩からなる礫塊である。墳墓の周辺地域において，Y．4～Y．10の流紋岩類に次いで広く分布する三郡変成岩類に伴うもので，墳墓の西方3.0㎞の小谷部落に典型的なものが露出している。

（Y．9）7号墳第2主体枕石西：斑れい岩――として白色の斜長石と淡緑灰色の輝石とからなる礫塊で，粒状組織を示す。輝石の殆んどは異剝石で裂開の発達が特徴的である。鏡下では斜長石は半透明でソーシュライト化し，単斜石（異剝石）はその裂開面に沿い斜方輝石離溶している。墳墓の北西方約4.0㎞の伯備線路沿いに，かんらん岩乃至蛇紋岩体に伴って，小岩体として露出するものと同一の岩石である。

No. 1

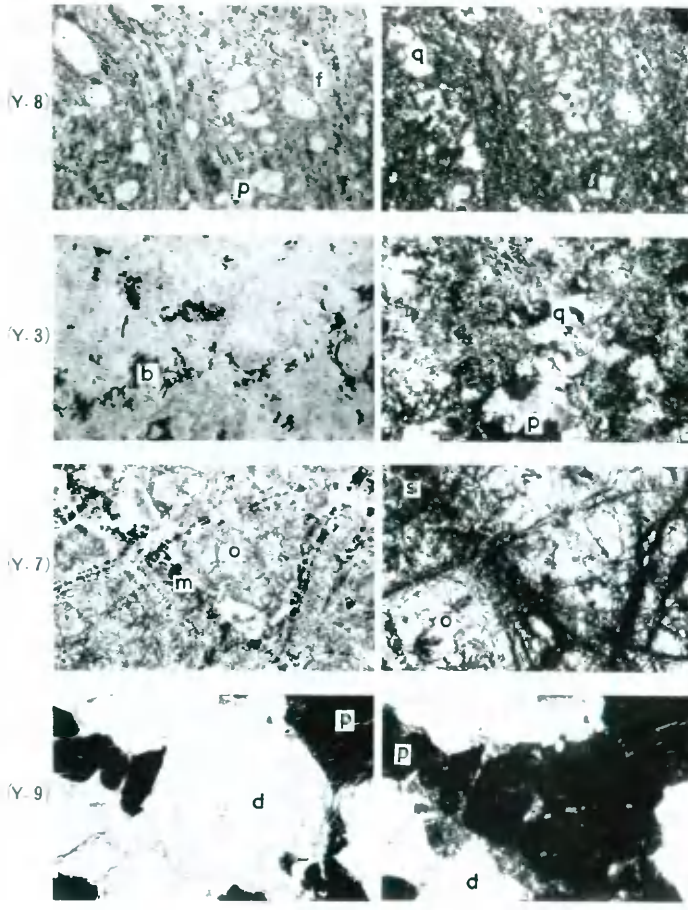


(Y. 4)　4号墳第2蓋石：流紋岩（石英斑岩質岩）
(Y. 1)　2号墳第1主体：流紋岩
(Y. 11)　9号墳第4主体：流紋岩（火砕流岩）
(Y. 10)　9号墳第1主体：流紋岩質砕屑岩

p：斜長石、　f：アルカリ長石、　q：石英、　h：角閃石、
x：捕獲岩・砕屑物、　g：ガラス質部

左側写真：下方ホーラーたけ　　右側写真：直交ホーラー

No. 2



(Y. 8)　７号墳第２主体枕石中央：流紋岩（熔岩）
(Y. 3)　４号墳第１蓋石：珪長岩
(Y. 7)　７号墳第１主体枕石西：かんらん岩乃至蛇紋岩
(Y. 9)　７号墳第２主体枕石西：斑れい岩

p：斜長石、　f：アルカリ長石、　q：石英、　m：黒雲母、
m：磁鉄鉱、　o：かんらん石、　s：蛇紋石、　d：単斜輝石

左側写真：下方ポーラーだけ、　右側写真：直交ポーラー

附章2　岡山県新見市横見墳墓群出土の赤色顔料物質をふくむ試料3種からの赤色顔料の化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸・青園泰子・則近　薫

標記の墳墓群から採取された赤色顔料物質か含む3試料の微量化学分析を行ない，結果をまとめたので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取：

1. 横見墳墓群第4号・第1主体部出土，箱式石棺より採取された赤色顔料を含むと思われる茶褐色棺内埋土（300g）。顔料による赤色の着色がきわめて不明瞭であったので，任意の部分2個所より土壌300mgずつを採取し，分析用試料溶液を調製。——①，①
2. 同墳墓群第7号・第2主体部出土，赤色顔料物質が全面に付着した組合式箱式石棺の天井石破片（15cm×7cm×0.8cm）。その赤色が特に顕著な部分より鋼針にて赤色顔料物質約20mgを採取し分析用試料溶液を調製。——試料溶液②
3. 同墓群第7号・第2主体部出土，組合式箱式石棺より採取された赤色顔料を含むと思われる茶褐色棺内埋土（260g）。顔料による赤色の着色がきわめて不明瞭であったので，任意の部分2個所より土壌300mgずつを採取し，分析用試料溶液を調製。——試料溶液③，③

以上の3試料を筆者らの常法[1]に従って分析用試料溶液を調製し，それらについて，ペーパークロマトグラフィーによる微量化学分析で赤色顔料成分の検索を行なった。

実験の部

試料溶液の作製：

上記各試料をそれぞれガラス尖形管に移し，濃硝酸および濃塩酸を適当少量加え，加温し，酸可溶性成分を溶解させた後，蒸留水を適当量加え，適心分離機にかけて酸不溶性成分を分離した上澄液を加熱濃縮して，ペーパークロマトグラフィー用の試料溶液とした。

ペーパークロマトグラフィーと検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認：

2cm×40cmの東洋ろ紙No.53を使用しブタノール硝塩酸を展開溶媒として，各試料検液および対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終った各ろ紙を風乾後，縦に二分し，その一方には，確認試薬として1％ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し，他方には確認試薬として0.05％ジチゾ

ンのクロロホルム溶液を噴霧し，その際に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf 値として表現）と色調を検した。

上記各試料溶液ならびに対照イオンの標準液について得られた，沪紙上のスポットの Rf 値と色調は下記のとおりである。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：

(Hg^{2+} は紫色，Fe^{3+} は紫褐色のスポットとして検出)

	Rf 値	(色　調)
試料溶液①：	0.19	(紫褐色)
〃　①：	0.17	(　〃　)
〃　②：	0.17	(　〃　)
〃　③：	0.18	(　〃　)
〃　③：	0.16	(　〃　)
Fe^{3+} 標準液：	0.15	(　〃　)
Hg^{2+} 標準液：	0.82	(紫　色)

(2) ジチゾンによる検出：(Hg^{2+} が存在すれば橙色のスポットとして検出。Fe^{3+} は発色せず，反応陰性)

試料溶液はすべて呈色反応が陰性であった。

判定：

以上のように，各試料溶液から検出されたのはすべて Fe^{3+} のみで Hg^{2+} はまったく検出されなかった。そのような結果から，3試料の赤色物質の成分としては水銀朱（HgS）は含まれておらず，すべてベンガラ（Fe_2O_3）であるということができる。ただし，試料1と試料3は赤色部分が非常に不明瞭でもあり，一方，Fe^{3+} は土壌から豊富に検出される成分であるから，Fe^{3+} の呈色のほとんどが，土壌の鉄成分からという可能性もある。対照用土壌が供与されていないので今回の実験からだけでは，試料1と試料3については，ベンガラの存在する可能性は大きいものの，その存在の程度を確言することは困難である。

〔註〕

1) 安田博幸・鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」『古代学研究 第49号』 P. 9 (1967).

安田博幸・鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡17号棺からの水銀朱の検出」『古代学研究　第53号』 P. 127 (1968).

安田博幸：「埋蔵文化財の分析化学」『考古学と自然科学　第4号』 P. 133 (1971).

1．横見墳墓群　　（東より）

2．横見墳墓群（西より）

図版２

１．２号墳墓より北を望む

２．１号墳墓

1．２号墳墓・第１・第２主体（南より）

2．３号墳墓主体（南より）

図版４

１．４号墳墓（南より）

２．５号墳墓（北より）

１．６号墳墓（南より）

２．７号墳墓（北より）

図版６

１．８号墳墓（北より）

２．９号墳墓（南より）

１．10号墳墓（北より）

２．11号墳墓（東より）

図版８

１．東斜面本棺墓群（南より）

２．東斜面本棺墓群（北より）

1．２－１検出状態（南より）

2．２－１石室と槨（北より）

3．２－１蓋石除去状態（南より）

4．２－１鼓形器台出土状態（北より）

図版９

図版10

1．宝篋印塔

2．3－6（西より）

3．3－7（北より）

4．3－8（西より）

1．4－1第1蓋石検出状態（南より）

2．4－1第2蓋石検出状態（南より）

3．4－1蓋石除去状態（南より）

4．4－1遺物出土状態（南より）

図版12

1．4－6・4－5（西より）

2．4－9・4－10検出状態（南より）

3．4－9蓋石除去状態（南より）

4．4－10蓋石除去状態（南より）

1．5－3（南より）

2．5－4（西より）

3．5－5（北より）

4．5号墳墓墳丘下埋葬（北より）

図版13

図版14

1．6号墳墓と7号墳墓の溝（東より）

2．6－4（南より）

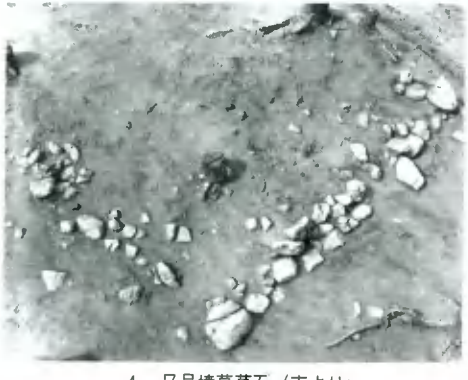
3．6－5（南より）

4．6－7（南より）

1．6－8蓋石検出状態（西より）

2．6－8蓋石除去状態（西より）

3．6号墳墓墳丘下埋葬（北より）



4．7号墳墓葺石（南より）

図版15

図版16

1．7－1・7－2蓋石検出状態（南より）

2．7－1・7－2蓋石除去状態（南より）

3．7－8棺上礫検出状態（南東より）

4．7－8棺上礫除去状態（南西より）

1．７－４蓋石検出状態（南より）

2．７－４蓋石除去状態（南より）

3．７－３（北より）

4．７号墳墓墳丘下埋葬（南より）

図版 17

1．８－５蓋石検出状態（東より）

2．８－５蓋石除去状態（東より）

3．８－７（南東より）

4．９号墳墓葺石（南より）

1．9－2・9－1（北より）

2．9－10（南より）

3．9－3蓋石検出状態（北より）

4．9－3蓋石除去状態（北より）

図版20

2．9－4蓋石除去状態（北より）

4．9－5・9－6蓋石除去状態（東より）

1．9－4蓋石検出状態（北より）

3．9－5・9－6蓋石検出状態（北より）

1．9－7・9－6蓋石検出状態（東より）

2．9－7・9－6蓋石除去状態（東より）

3．9－8蓋石検出状態（西より）

4．9－8蓋石除去状態（西より）

図版21

図版22

1．9－9蓋石検出状態（北より）

2．9－9蓋石除去状態（西より）

3．10－1（南より）

4．10－4（南西より）

1．10－5蓋石検出状態（南より）

2．10－5蓋石除去状態（南より）

3．10－6蓋石検出状態（北東より）

4．11号墳墓上の中世墓（北より）

図版23

図版24

1．12－1検出状態（西より）

2．12－1石室検出状態（西より）

3．W－34・検出状態（東より）

4．W－34・石棺検出状態（東より）

1．東斜面器台出土状態（東より）

2．W－18（東より）

3．W－17遺物検出状態（東より）

4．W－17（東より）

図版25

図版26

2．S－1（東より）

1．S－1遺物出土状態（西より）

4．S－10（北西より）

3．S－10遺物出土状態（北西より）

1．11－3土壙及び鏡検出状態（東より）

2．11－3鏡検出状態

3．S－5検出状態（西より）

4．S－7遺物出土状態（南西より）

図版27

W－T－11

W－T－12

W－18－18

出土遺物

S－4－1

W－T－10

W－11・19－6

S－4－2

W－18－3

3－4

W－2

W－22

S－7－1

6－3

出土遺物

S－1－5

S－10－3

5－1

4－9－3

S－1－1

S－1－2

S－1－1

S－10－2

4－2

3－3

出土遺物

2－1－2

11－1

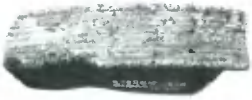
2－3

6－3

11

6－1

5－2

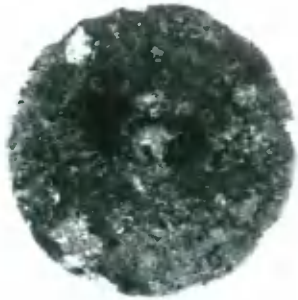


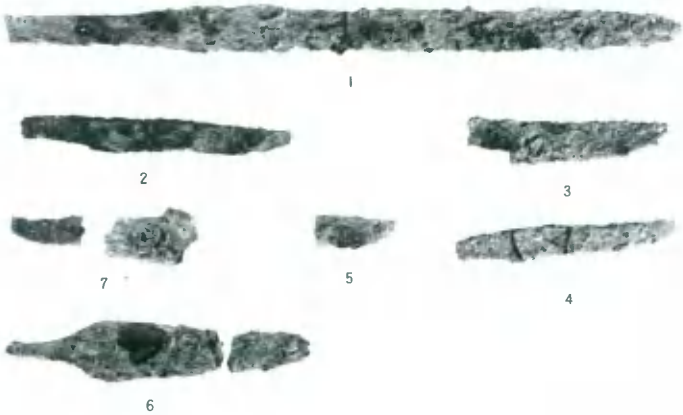
2－1－1

5－5

出土遺物

図版32





出土遺物

第Ⅱ部　横見古墳群

目　次

第1章　調査の経過・日誌抄…… 220
第2章　1号墳の調査…… 227
　第1節　古墳の構造…… 227
　第2節　内部構造…… 235
　第3節　遺物出土状況…… 239
　第4節　遺物各説…… 246
　小結…… 279
第3章　2号墳の調査…… 280
　第1節　古墳の構造…… 280
　第2節　内部構造…… 280
　第3節　遺物出土状況…… 287
　第4節　遺物各説…… 287
　小結…… 287
第4章　その他の遺構・遺物…… 294
　第1節　1号墳周辺の遺構と遺物…… 295
　第2節　2号墳周辺の遺構と遺物…… 296
終章　まとめにかえて…… 298

図　目　次

第1図　横見古墳群位置図（$\frac{1}{1500}$）…… 221
第2図　発掘区域図（$\frac{1}{300}$）…… 225
第3図　1号墳墳丘概形図（$\frac{1}{80}$）…… 228
第4図　1号墳墳丘列石と石室の位置（$\frac{1}{60}$）…… 229
第5図　1号墳墳丘・周湟土層断面図（$\frac{1}{50}$～$\frac{1}{60}$）…… 231
第6図　1号墳前面墳丘断面図（$\frac{1}{60}$）…… 233
第7図　1号墳南側周湟内大甕出土状況（$\frac{1}{20}$）…… 235
第8図　1号墳周湟出土須恵器大甕実測図（$\frac{1}{8}$）…… 236
第9図　1号墳周辺・墳頂部出土須恵器（$\frac{1}{3}$）…… 239
第10図　1号墳玄室展開図・断面図（$\frac{1}{40}$）…… 237

第11図　1号墳玄室内須恵器・土師器・大刀・棺台石出土状況（$\frac{1}{20}$）…… 240
第12図　1号墳玄室内須恵器出土状況（$\frac{1}{20}$）…… 241
第13図　1号墳玄室東側壁付近遺物出土状況（$\frac{1}{20}$）…… 243
第14図　玄室内出土須恵器実測図（蓋・杯・椀・短頸壷）（$\frac{1}{3}$）…… 247
第15図　玄室内出土須恵器実測図（蓋・杯）（$\frac{1}{3}$）…… 248
第16図　玄室内出土須恵器実測図（高杯）（$\frac{1}{3}$）…… 249
第17図　玄室内出土須恵器・土師器実測図
（盤・台付盤・平瓶・直口壷・甕・甕形土器）（$\frac{1}{3}$）…… 250
第18図　玄室内出土須恵器（横瓶）（$\frac{1}{4}$）…… 251
第19図　勾玉・管玉・小玉出土状態平・断面図（$\frac{1}{4}$）…… 261
第20図　石帯・勾玉・管玉・小玉実測図（$\frac{1}{1}$）…… 262
第21図　1号墳玄室内鉄器出土分布平・断面図（$\frac{1}{20}$）…… 265
第22図　玄室内出土鉄器実測図（$\frac{1}{2}$）…… 266
第23図　玄室内出土大刀・大刀残欠実測図（$\frac{1}{4}$）…… 267
第24図　玄室内出土鉄鏃実測図－1（$\frac{1}{2}$）…… 268
第25図　玄室内出土鉄鏃実測図－2（$\frac{1}{2}$）…… 269
第26図　玄室内出土鉄鏃実測図－3（$\frac{1}{2}$）…… 270
第27図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図－1（$\frac{1}{2}$）…… 272
第28図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図－2（$\frac{1}{2}$）…… 273
第29図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図－3（$\frac{1}{2}$）…… 274
第30図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図－4（$\frac{1}{2}$）…… 275
第31図　玄室内出土棺釘Ⅰ式・不明鉄塊実測図－5（$\frac{1}{2}$）…… 276
第32図　玄室内出土棺釘Ⅱ式実測図（$\frac{1}{2}$）…… 278
第33図　1号墳石室掘り方埋土出土縄文式土器・玄室内出土銭貨・土師器実測図（$\frac{1}{2}$）279
第34図　2号墳石室・周湟平面図（$\frac{1}{30}$）…… 280
第35図　2号墳玄室平・断面図・展開図（$\frac{1}{30}$）…… 281
第36図　2号墳石室掘り方土層断面図（$\frac{1}{30}$）…… 283
第37図　2号墳西側周湟平・断面図・広口壷出土状態実測図（$\frac{1}{20}$）…… 285
第38図　2号墳周辺・周湟内出土須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）…… 286

第39図　玄室内・玄室周辺出土須恵器（蓋・杯）（$\frac{1}{3}$）…… 288
第40図　玄室内・玄室周辺出土須恵器（杯・高杯・提瓶・壺）土師器杯実測図（$\frac{1}{3}$）　288
第41図　溝状遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）…… 294
第42図　1号墳付近・西方斜面出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$）…… 295
第43図　1号墳西方斜面出土小刀実測図（$\frac{1}{2}$）…… 296
第44図　2号墳付近グリッド出土縄文式土器（$\frac{1}{2}$）…… 296
第45図　2号墳付近・グリッド出土土器実測図（$\frac{1}{3}$）…… 297

表　目　次

第1表　調査員調査担当表…… 219
第2表　1号墳出土須恵器観察表…… 252
第3表　ガラス小玉計測表…… 263
第4表　鉄鏃分類計測表…… 271
第5表　1号墳出土棺釘Ⅰ式一覧表…… 277
第6表　1号墳出土棺釘Ⅰ式完形品計測表…… 278
第7表　1号墳出土棺釘Ⅱ式一覧表…… 279
第8表　1号墳出土棺釘Ⅱ式完形品計測表…… 278
第9表　2号墳出土須恵器観察表…… 289

図　版　目　次

図版第1－1　横見墳墓群と横見古墳群遠景＜南方水田より＞…… 299
2　発掘着手前石室開口状況＜南より＞…… 299
図版第2－1　発掘着手前墳丘遺存状況＜西より＞…… 300
2　墳丘遺存状況＜北より＞…… 300
図版第3－1　墳丘前面土層断面と石室正面＜南より＞…… 301
2　墳丘土層断面と石室＜南西より＞…… 301
図版第4－1　墳丘北東側土層断面＜南より＞…… 302
2　墳丘北側土層断面と石室構築壙掘り方＜西より＞…… 302
図版第5－1　1号墳後方より上市小盆地をのぞむ＜北より＞…… 303
2　1号墳と2号墳の位置＜西より＞…… 303
図版第6－1　墳丘上列石俯瞰＜北より＞…… 304
2　墳丘西側列石と周湟内大甕出土状態＜西より＞…… 304
図版第7－1　墳丘列石近景＜北東より＞…… 305
2　墳丘東側列石近景＜北より＞…… 305

図版第８－１　墳丘北側列石近景＜北より＞…… 306
２　墳丘西側列石遠景（完掘後）＜西より＞…… 306
図版第９－１　北側周湟近景＜東より＞…… 307
２　玄室正面＜南より＞…… 307
図版第10－１　玄室東側壁＜南西より＞…… 308
２　玄室西側壁＜南東より＞…… 308
図版第11－１　１号墳玄室調査開始初期・土師器出土状況＜南より＞…… 309
２　土師器出土状況＜南より＞…… 309
図版第12－１　１号墳玄室内遺物出土状況（竹串は棺釘・鉄器）＜南より＞…… 310
２　１号墳玄室内遺物出土状況＜南より＞…… 310
図版第13－１　１号墳玄室奥壁より中央部遺物出土状況＜南東より＞…… 311
２　１号墳玄室奥壁西側横瓶・直口壺・椀出土状況＜南より＞…… 311
図版第14－１　１号墳玄室奥壁付近遺物出土状況＜東より＞…… 312
２　１号墳玄室奥壁より中央部遺物出土状況＜南より＞…… 312
図版第15－１　１号墳玄室中央部杯１～４・勾玉２出土状況＜南東より＞…… 313
２　１号墳玄室内東側壁付近台付盤・杯・鬲・高杯片出土状況＜西より＞ 313
図版第16－１　１号墳玄室東側壁大刀・盤・鉄鏃出土状況＜西より＞…… 314
２　同上盤取上げ後，蓋・短頸壺出土状況＜西より＞…… 314
図版第17－１　１号墳玄室内石帯出土状況＜西より＞…… 315
２　１号墳玄室内大刀残欠・勾玉１・杯出土状況…… 315
図版第18－１　１号墳玄室内管玉・ガラス小玉出土状況＜東より＞…… 316
２　１号墳玄室東側奥壁付近須恵器出土状況＜南より＞…… 316
図版第19－１　１号墳玄室奥壁付近須恵器出土状況＜西より＞…… 317
２　１号墳玄室奥壁より東側壁付近最終出土遺物＜南より＞…… 317
図版第20－１　１号墳玄室内人骨出土状況＜北より＞…… 318
２　１号墳墳丘除去後石室遠景＜北より＞…… 318
図版第21－１　１号墳石室＜東より＞…… 319
２　１号墳石室＜西より＞…… 319
図版第22－１　１号墳石室と石室構築壙＜東より＞…… 320
２　１号墳石室奥壁・天井石近景＜北より＞…… 320
図版第23－１　１号墳西側周湟内大甕出土状況＜西より＞…… 321
２　須恵器大甕…… 321
図版第24　１号墳玄室内出土須恵器（蓋・杯・椀）（$\frac{1}{3}$）…… 322
図版第25　１号墳玄室内出土須恵器（杯・蓋）（$\frac{1}{3}$）…… 323
図版第26　１号墳玄室内出土須恵器（蓋・杯・盤・台付盤・平瓶・直口壺・横瓶）（$\frac{1}{3}$） 324

図版第27　1号墳玄室内出土須恵器（短頸壺・甕）・土師器（$\frac{1}{2}$・$\frac{1}{3}$）…… 325
図版第28　1号墳玄室内出土須恵器（高杯）（$\frac{1}{2}$・$\frac{1}{3}$）…… 326
図版第29—1　1号墳玄室内出土須恵器・1号墳周辺出土須恵器・土師器（$\frac{1}{3}$）… 327
2　2号墳周辺グリッド出土土師器…… 327
図版第30　1号墳玄室内出土石製品（石帯・勾玉）・ガラス小玉（$\frac{1}{1}$）…… 328
図版第31　1号墳玄室内出土鉄器（馬具・鉄留金具・鏃状鉄器・大刀・刀装具・針）… 329
図版第32—1　1号墳玄室内出土鉄器（刀子・弧状鉄器）…… 330
2　1号墳玄室内出土鉄鏃…… 330
図版第33—1・2　1号墳玄室内出土鉄鏃…… 331
図版第34—1・2　1号墳玄室内出土棺釘完形品（1～90）…… 332
図版第35—1・2　1号墳玄室内出土棺釘完形品（103～182・N1・N3）…… 333
図版第36—1　2号墳玄室＜北東より＞…… 334
2　2号墳玄室＜南西より＞…… 334
図版第37—1　2号墳玄室北側壁調査状況＜南より＞…… 335
2　2号墳北側壁付近須恵器出土状況＜北東より＞…… 335
図版第38—1　2号墳玄室南西玄門付近＜北より＞…… 336
2　2号墳玄門付近須恵器杯出土状況＜北東より＞…… 336
図版第39—1　2号墳玄室と周湟の位置関係＜北東より＞…… 337
2　2号墳周湟内須恵器広口壺出土状況＜南より＞…… 337
図版第40　2号墳玄室及び周辺出土須恵器（蓋・杯）…… 338
図版第41　2号墳玄室周辺出土須恵器（杯）・土師器杯・周湟出土広口壺・グリッド出土弥生式土器・土師器…… 339
図版第42—1　西方斜面溝状遺構と1号墳＜南西より＞…… 340
2　溝状遺構＜南より＞…… 341
図版第43—1　1号墳玄室内出土銭貨・土師器・鉄器…… 341
2　2号墳周辺・グリッド出土縄文式土器…… 342
図版第44—1　1号墳西方斜面須恵器（杯・高杯杯部）出土状態＜東より＞…… 342
2　1号墳東方斜面須恵器出土状態＜東より＞…… 342

第1表　調査員調査担当表

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
岡　田		岩倉遺跡			横　見	古墳群 谷	内遺跡	
浅　倉		岩倉遺跡		横見	古墳群		報告書作成	
田　仲	桃山遺跡	報告	書作成	空古墳 報	告書作成	横見 谷	古墳群 内遺跡	西江遺跡へ
1号墳の調査				6日				5日
2号墳の調査					18日			5日

第1章　調査の経過・日誌抄

新見市上市横見に所在する横見古墳群は，朝倉山山塊より南西に派生する狭長な丘陵の南斜面裾部に位置する。新見市史（註）によれば，かつて4基の古墳が存在したことが記され，今回の調査対象となった横見1号墳・2号墳のうち，前者は前方後円墳として認識されている。また，後者についてはその存在は全く認識されておらず，後述の調査結果によっても中世にすでに墳丘・石室の大半を失ったことが知られるのである。新見市史に記述された4基のうち1基は，明らかに1号墳を指すものであるが，他の3基はかつて1号墳に近接する位置に存在したものの開墾によって破壊され横穴式石室に用いられた石材の一部が民家に残されているに過ぎない。したがって市史に記された4基の古墳のうち2基は，かなり以前に消滅したことは明らかである。1号墳の北東方の丘陵南裾にも石材が散乱する地点が認められ，この古墳を加えればかつて内部主体を横穴式石室を中心とする6基の群集古墳が存在したことをまず認識しなければならない。

1958年，市営住宅建設に伴い1号墳の前部が破壊された際多数の遺物が出土し，現在新見市民会館にその一部が保管されている。大半は散逸，個人蔵に帰している。出土品として残されているものの多くは須恵器で，大甕・大形提瓶・提瓶・杯・高杯・長頸壷などすべて完形遺物である。工事の際の状況は推測の域を出ないが，破損したものは放棄され完全な遺品のみ現在に至っているのであろう。

当初の発掘調査計画では，第Ⅰ部で述べた横見墳墓群の存在認識はなく，「横見古墳」として単一古墳の調査が予定されていた。1975年4月，新見市埋蔵文化財分布調査の結果や，調査員の踏査によって丘陵部に前方後円墳あるいは円墳と推定される高まりを認め，急拠「横見古墳」は「横見古墳群」と改称し，1号墳はその中の12号墳と呼称されることとなった。その後，新規発見遺跡の調査計画・調査進行遺跡の発掘期間変更などの事情によって新見市高尾所在の岩倉遺跡を調査していた岡田・浅倉が，「横見古墳」を担当することとなった。調査中には，丘陵上の「横見墳墓群」は横見古墳群と呼称し，本稿で報告する横見古墳群は第2号墳発見後の呼称である。報告書の上梓にあたって，第Ⅰ部横見墳墓群は，調査事実の整理・検討後の結論的呼称であり，第Ⅱ部横見古墳群と呼称重複を避ける意図に起因するものではない。

横見墳墓群の保存に関わる，対策委員会の指摘あるいは，調査員内部の意見が対策委員会，調査員会議の席上，上程されたが，トンネル工法による保存にせよ破壊されるにせよ，横見古墳群の保存は困難を極める情況であった。したがって，横見古墳群の調査は消滅を前提とした調査を行なった。1号墳の調査は常に石室石材の崩落の危機にさらされ，玄室内精査の完了後墳丘調査を行なわざるを得ない調査階梯の逆転を強いられた。また，残存する石室石材の一部を崩落防止のため除去せざるを得なくなった部分もあることを記しておく。2号墳の発見は全く偶然の出来事で，墳丘調査に着手できない状況を打開するため市営住宅跡にグリッド・トレンチを設定，発掘した際に玄室の一部が検出されたのである。

以上が横見古墳群の調査に至るまでの経過と調査の概要である。発掘調査にあたっては，岩倉遺跡以来，調査員と一心同体となって協力していただいた地元作業員の方々，調査員の持ち帰った出土遺物の水洗・分類・注記番号の記入等，煩雑かつ微細な作業を快く進めていただいた宗金遺跡調査事務所，岡本静子事務担当員には深甚の謝意を表する次第である。

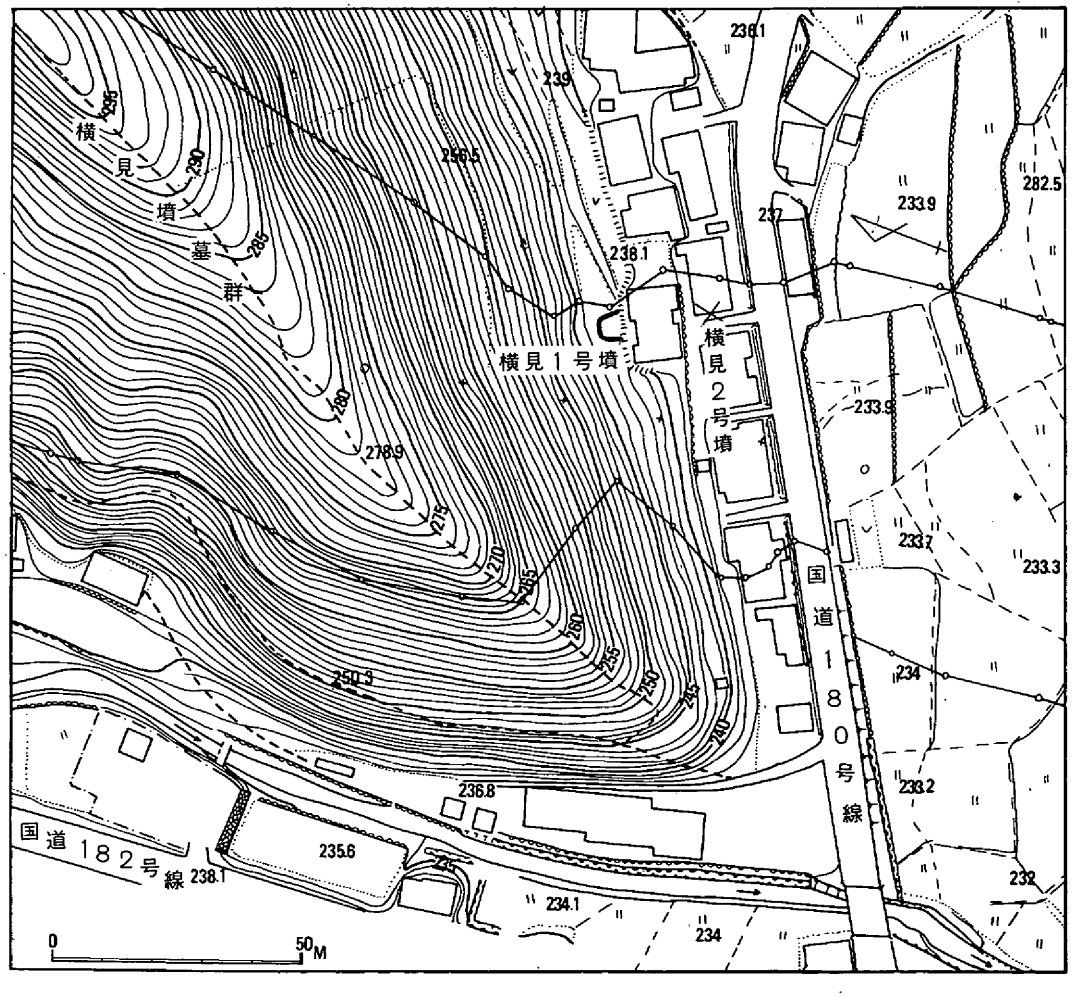
報告書の作成にあたっては1977年１月下旬より，岡田・浅倉が担当し，岡田・田仲・浅倉３名の調査員による調査結果をまとめた。浅倉は１号墳出土の棺釘の実測・分類整理，２号墳及びその周辺出土遺物の実測・分類整理を行ない，他の遺構・遺物については岡田が担当した。

＜発掘調査期間＞

1975年８月６日～12月５日

＜報告書作成期間＞

1977年１月下旬～３月21日



第１図　横見古墳群位置図（$\frac{1}{1500}$）

横見古墳群

＜発掘調査従業員＞（敬称略）

上田孝子・山崎春恵・松永里美・山本光三郎・平山政夫・小谷光久・岡本清治・浅野豊・小谷百代・平山房代・太田保子（順不同）

＜日誌抄＞

1975年8月6日（水）～9日（土）1号墳周辺樹木・雑草伐採除去作業員休憩用テント小屋建築。露呈する1号墳玄室開口部の石垣除去，排土作業。1号墳西方斜面にトレンチ設定，発掘開始。

8月11日（月）～14日（木）現状写真撮影。玄室内に充満する流入土除去作業。専ら調査員があたる。開口部床面近くで須恵器蓋・土師器出土。玄室前面墳丘切断面の土層観察のため清掃開始。第1トレンチに続いて，第2トレンチを新設発掘開始。

8月18日（月）～23日（土）玄室前面石垣除去作業・玄室内排土作業続行。玄室側壁崩落の危険が高まる。棺釘・銭貨（中世）天井石より0.6～1 m前後で出土。天井石近くのイタチの頭骨に驚く。墳丘前面土層断面線引き後写真撮影・実測。第2トレンチより土師器片出土，第1トレンチと第2トレンチの間の部分で弧状の溝状遺構検出，古式土師器出土。溝西肩近くで須恵器高杯杯部・杯出土。

8月26日（火）～30日（土）玄室内排土作業続行，床面より20～30cm前後でとめる。棺釘が立錐の余地もない程出土，調査員右往左往，爪先立って疲れる。週末に至って，奥壁に接して横瓶，東側壁に沿って台付盤・瑞・高杯・石帯・人骨など出土確認。墳丘外表調査を始める，人頭大の石が存在，外部構造の精査を検討。墳丘前面土層断面検討，追測・写真撮影終了。1号墳西方斜面，トレンチを拡張，平面調査に移行。小刀出土。

9月1日（月）～6日（土）玄室内調査続行。側壁はおろか天井石まで崩落する危険性が強く，従来の方針通り，岡田・浅倉以外内部調査に作業員を加えることを断念，2名でリレー排土を行なう。炎天下にもかかわらず玄室内部は幽玄な冷気が漂い，側壁崩落恐怖感も加わり涼味満点。遺物増加に伴い，実測ポイント設定，中軸線を定め，墳丘上にもポイント移動を行う。墳丘外表調査続行，人頭大～小児頭大の礫は列石様にほぼ直線的に並ぶ。墳丘西方では周湟確認，残存状況は良好ではないが須恵器大甕の破片が散乱。

9月8日（月）～13日（土）玄室西側壁の1部・天井石の一部が崩落，幸いにも怪我人なし。玄室内実測割付け作業終了，玄室開口部より棺釘等実測開始。人骨は1点のみ，ゼラチンで固めて取上げる。棺釘はレベル計測後取上げ，須恵器等はそのまま全体写真撮影まで置く。玄室奥壁付近には須恵器が約20個かたまって出土。台付盤付近では大刀（直刀）が出土。住宅跡にグリッド・トレンチを新設，土師器・弥生式土器片出土。墳丘外表調査は，西方周湟上面検出，東方列石検出作業に重点を置く。浅倉関節炎のための注射，激痛に苦しむ。

9月16日（火）～20日（土）玄室内清掃・実測・レベリングを行う。墳丘西方周湟発掘作業。周湟上面須恵器大甕清掃・写真撮影。住宅跡グリッドより2号墳発見，須恵器片多数出土。付近より縄文式土器片出土。

9月22日（月）～27日（土）玄室中央奥壁よりでガラス小玉出土，棺釘・鉄鏃多数出土。実測・レ

ベリングに追われる。床面で破砕された須恵器片検出，追測作業。住宅跡グリッドは5か所，うち1か所は隔離病舎があった所で，消毒剤の悪臭がひどく放棄する。1号墳西斜面溝状遺構・トレンチ土層等実測・写真撮影。1号墳墳丘土層断面写真撮影・実測図作成開始。

9月29日（月）～10月4日（土）玄室内ガラス小玉出土地点付近精査，新に勾玉出土。竹串で少しずつ除去作業，極力原位置を確認するため。 鏃・鉄器等実測， レベリング・写真撮影終了後取り上げ。2号墳玄室内排土作業，床面には平たい角礫・円礫・小礫が敷きつめられ床石をなす。玄室北側中央部に便所跡，ウジ虫の蛹多数散乱。周辺では，須恵器片多数散乱。鉄滓・土師器（中世）出土。9月30日をもって浅倉新見を去り，報告書作成のため津山市田邑文化財収蔵庫に向う。10月4日より田仲合流。

10月6日（月）～11日（土）玄室内実測続行。玉類一括½実測図作成，写真撮影。2号墳清掃，周辺発掘区拡張，周湟検出，上層より広口壷出土。

10月13日（月）～18日（土）1号墳玄室内遺物出土状態実測・写真撮影・取り上げ作業終了。棺台石断面図作成。2号墳周湟追及を行うが判然とせず。周辺はすでに撹乱されて築造時の状況復元は困難。

10月20日（月）～25日（土）1号墳玄室床面精査，柱穴検出，平瓶片埋没。床面で出土した漆膜付木片・石膏で固め取り上げ。墳丘西須恵器大甕出土状態実測開始。

10月27日（月）～11月2日（日）1号墳玄室中軸線にトレンチ設定床面土層を確認する。墳丘列石全容写真撮影。1号墳玄室展開図用割付け開始。2号墳写真撮影。

11月4日（火）～8日（土）1号墳玄室展開図・断面図作成。墳丘列石実測開始。

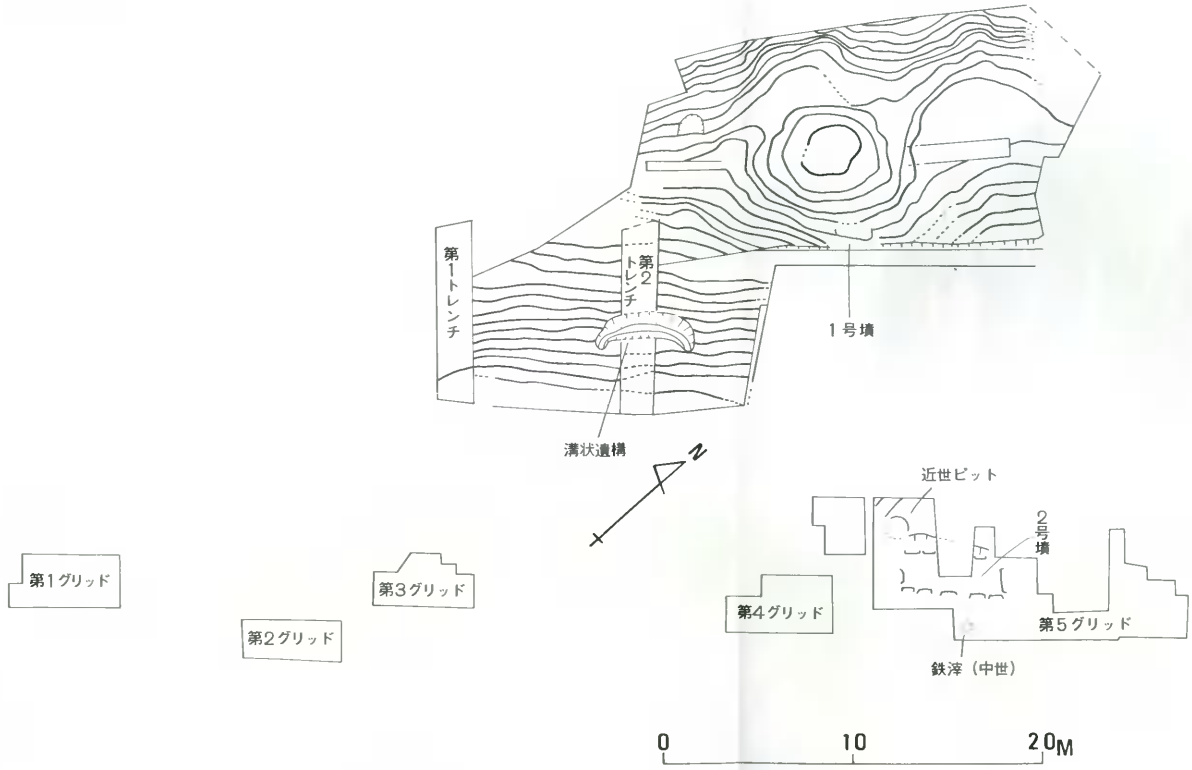
11月10日（月）～15日（土）1号墳玄室展開図・断面図実測終了。墳丘列石実測続行。墳丘概形平板測量。

11月16日（日）～22日（土）1号墳墳丘列石精査，追測作業。側面図作成。部分写真撮影。2号墳周湟付近実測・調査。玄室実測。

11月24日（月）～29日（土）1号墳墳丘調査，大胆なトレンチ設定。石室構築壙プラン検出。墳丘除去中，遂に天井石等転落する。各地点墳丘土層断面図作成。

12月1日（月）～5日（金）1号墳墳丘断面図作成。石室外容清掃，写真撮影。石室構築壙平板測量。2号墳付近土層断面図作成。発掘区平板測量，補足写真撮影をもって全調査終了。

（註）昭和40年8月10日，新見市刊。横見の古墳の項を設け，詳述している。



第2図　発掘区域図（$\frac{1}{300}$）

第2章 1号墳の調査

第1節 古墳の構造(第3～6図)

丘陵裾部に至る急斜面が緩斜面に移行する位置に墳丘を築いている。墳丘前部を住宅建設の際，破壊されたため墳形は不明であるが，石室開口方向すなわち平野部に向けて墳丘基底部がやや開く方墳と考えられる。墳頂からは高梁川が蛇行し，かつては氾濫原であったと考えられる上市の小平野を眺望することができる。墳丘の大半は盛土で，墳頂部から墳裾部にかけて人頭大～小児頭大の角礫・円礫からなる列石がめぐる。残存度の良好な位置では3段で，中段列石は更に二重に開く地点もみられるが，築造当初の状況は明らかにできなかった。この列石は本来，墳丘上面に近い部分に存在するが，外表に露呈するものではなく，より豪壮な墳丘を盛りあげるための土留め目的のため埋設されたのではないかと推定される。墳端部にあたる地点では周湟が存在し，墳丘北側背後・西部において残存度が高く北東部では畑地開墾等の手が加えられ明確な状況を把握することができなかった。墳丘背後部の周湟は巾約2.5m・深さ約0.6mを測り，黄色土地山を幾分削りとっており，墳丘封土あるいは石室裏込め土に利用されたものであろう。墳丘西部の周湟はやはり旧地表より地山に達する掘り込みを行い，墳丘側の周湟地山肩は石室構築壙の肩と同一面となり巾約35㎝の鞍部を成している。地山切込み肩巾は約2m・深さ約40㎝を測り，下段列石の位置・他の観察良好な部分の状況を考察すれば当初の巾は2.5m前後，深さ1m前後を測る規模であったものと推定される。この墳丘南西地点の周湟上層で須恵器大甕（第7・8図）が出土している。列石中段レベルとほぼ同レベルで，周湟が若干のくぼみを生じる程度まで埋設した時点での埋積状況を示している。墳頂にまで至らぬものの列石付近で葬送儀礼あるいは供献に用いられたものと推定できるが，果して破砕もしくは一部を欠失せしめた状態であったのか否かは明らかではない。

以上の諸点から考慮し墳丘の現存規模は，墳丘北西背後で周湟を含め約6m，北東辺約8m，南西辺約7.5mを測る。墳丘前面残存部巾は推定約14mを測り，墳丘・列石は開き続ける状況を示し，帰結する墳丘・列石の形状に謎を残している。いずれにせよ正面より見上げれば実際の計測値よりは，より壮大な墳丘に見える形態を示す築造者の視覚的企図を推察できよう。墳丘土層断面図を参考にして古墳築造の段階を復元すると以下のように推定できる。

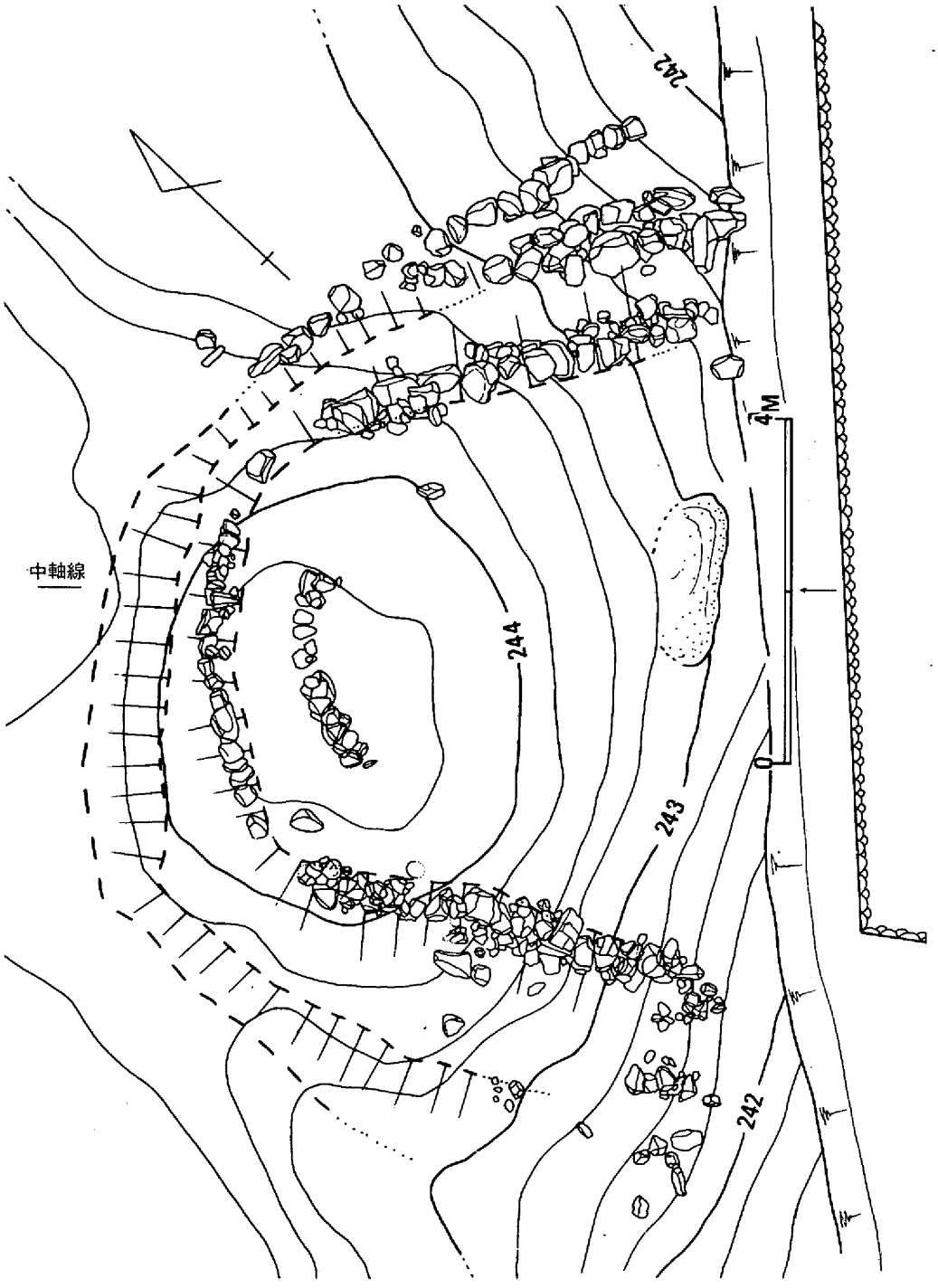
(1) 築造地の選定，整地。

(2) 旧地表面から地山に達する長方形石室構築壙の掘り下げ，構築壙周辺の整地。

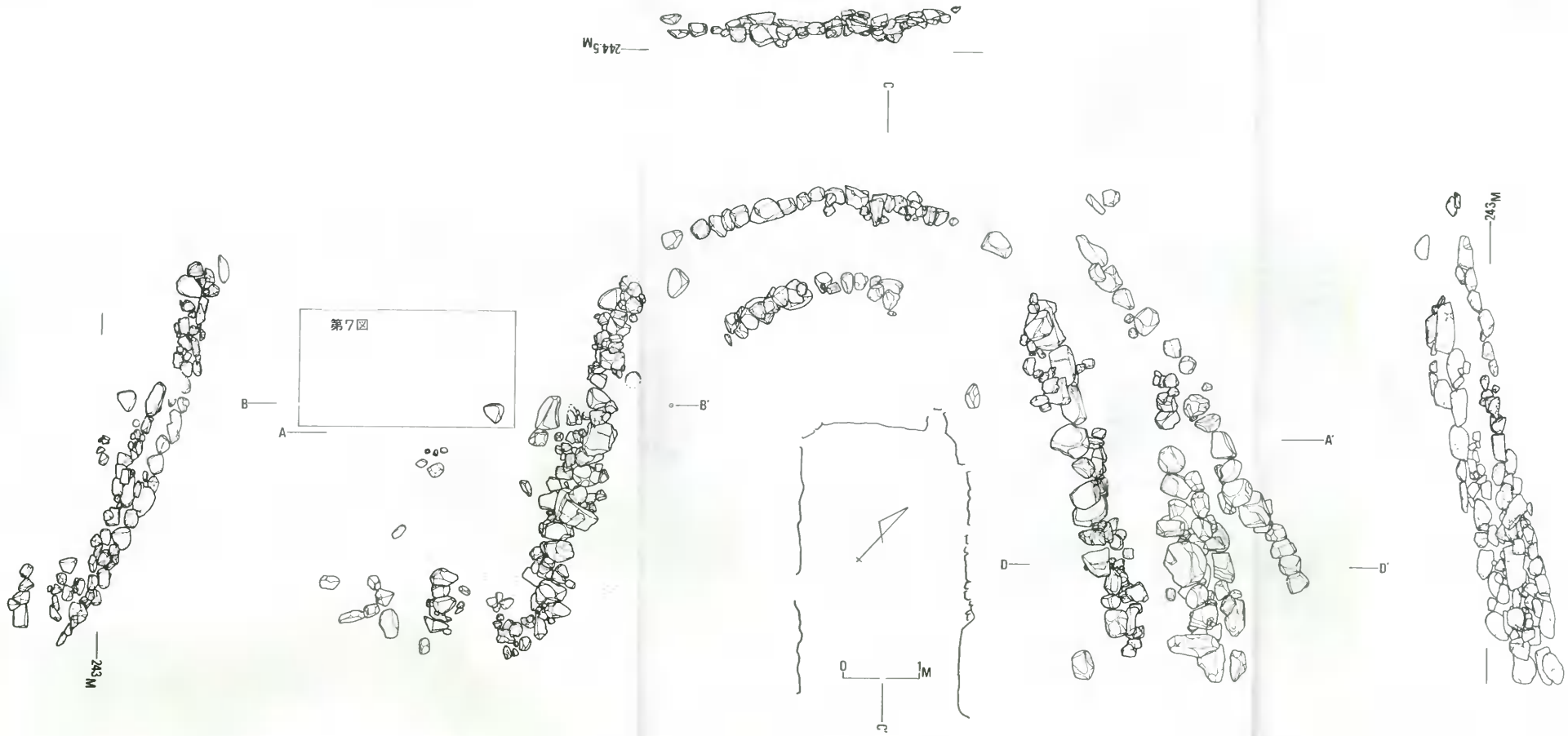
(3) 玄室石材の搬入・埋置，掘り方を埋めて版築状に叩きしめる。

(4) 奥壁・側壁頂部レベルに達するまで掘り方を埋めた時点で天井石の上に目貼り様に土を叩きしめ盛り上げる。

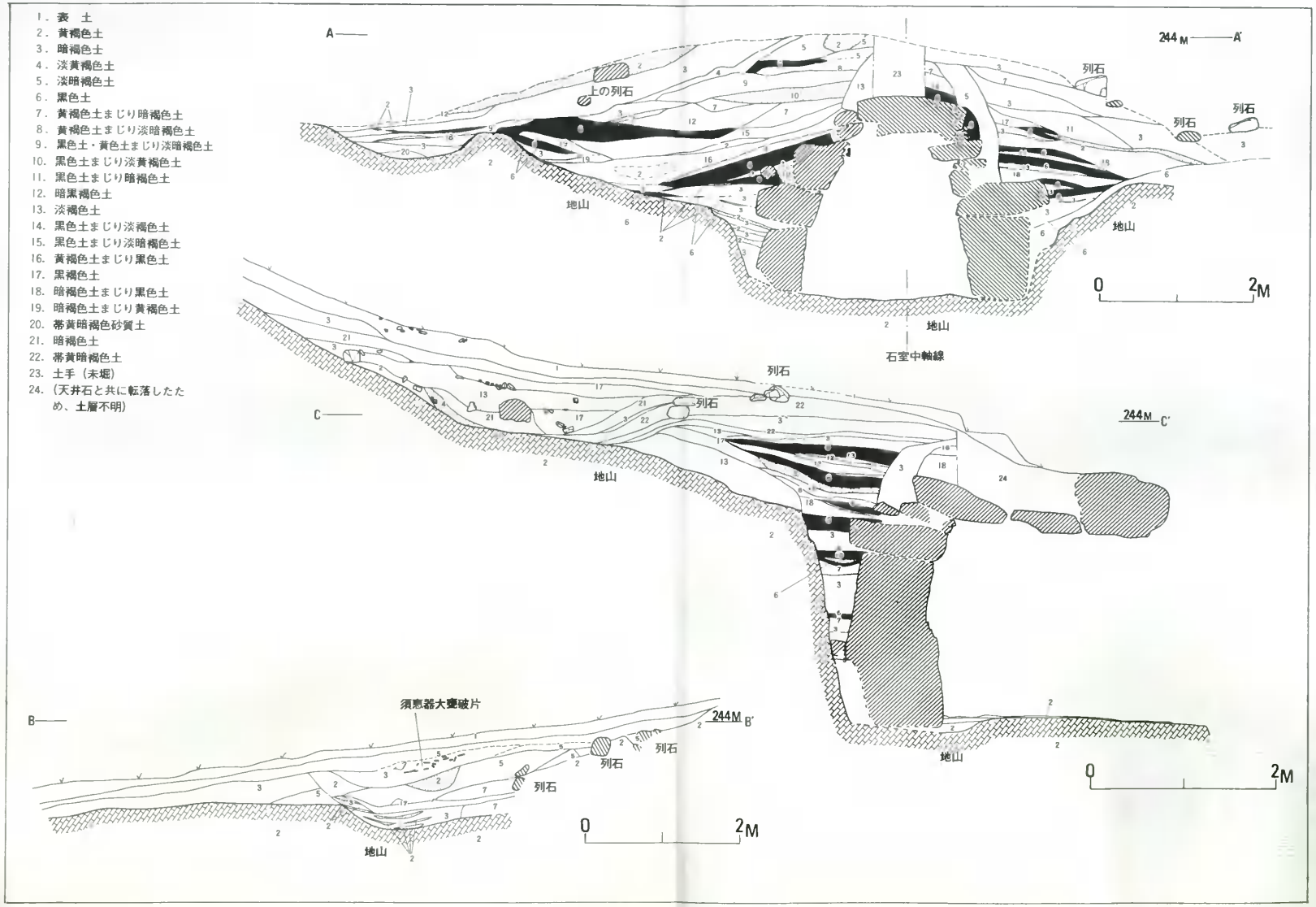
(5) 墳丘封土盛上げ作業，順次列石を敷設。(墳形の確定)



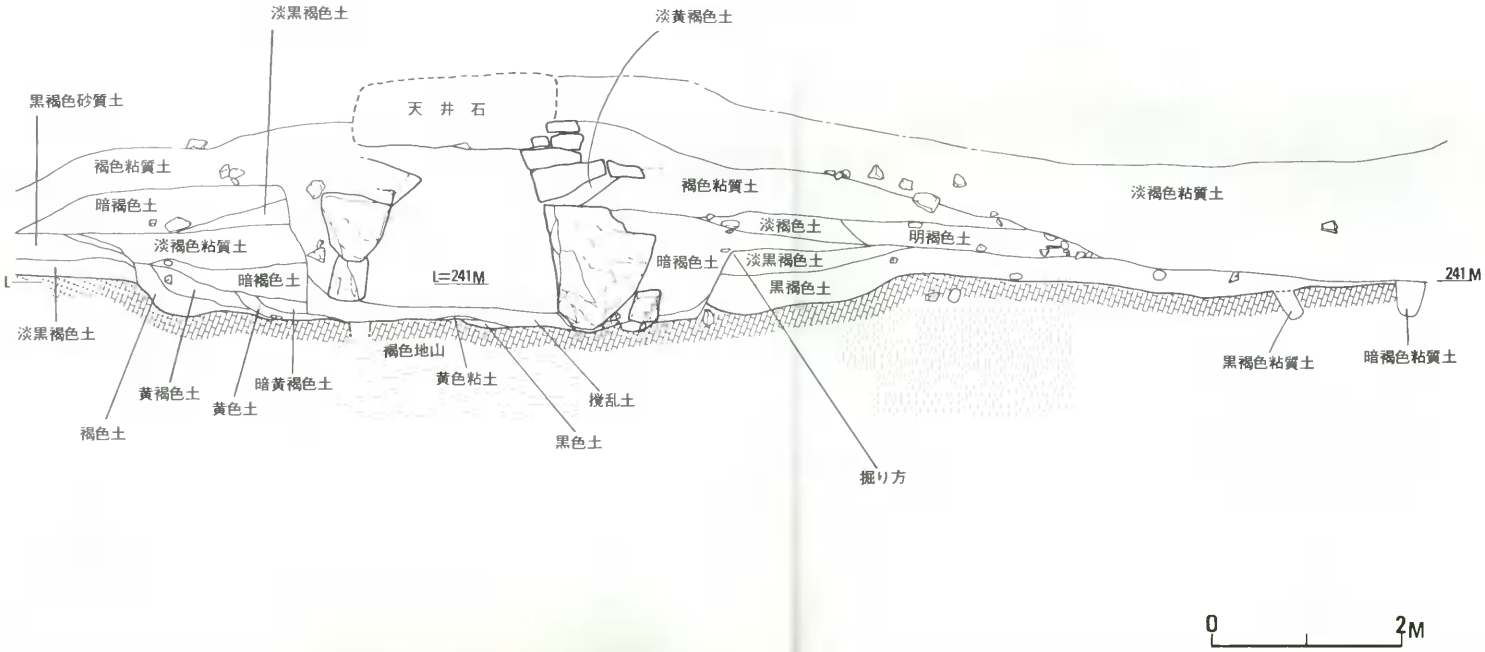
第３図　１号墳墳丘概形図（$\frac{1}{80}$）



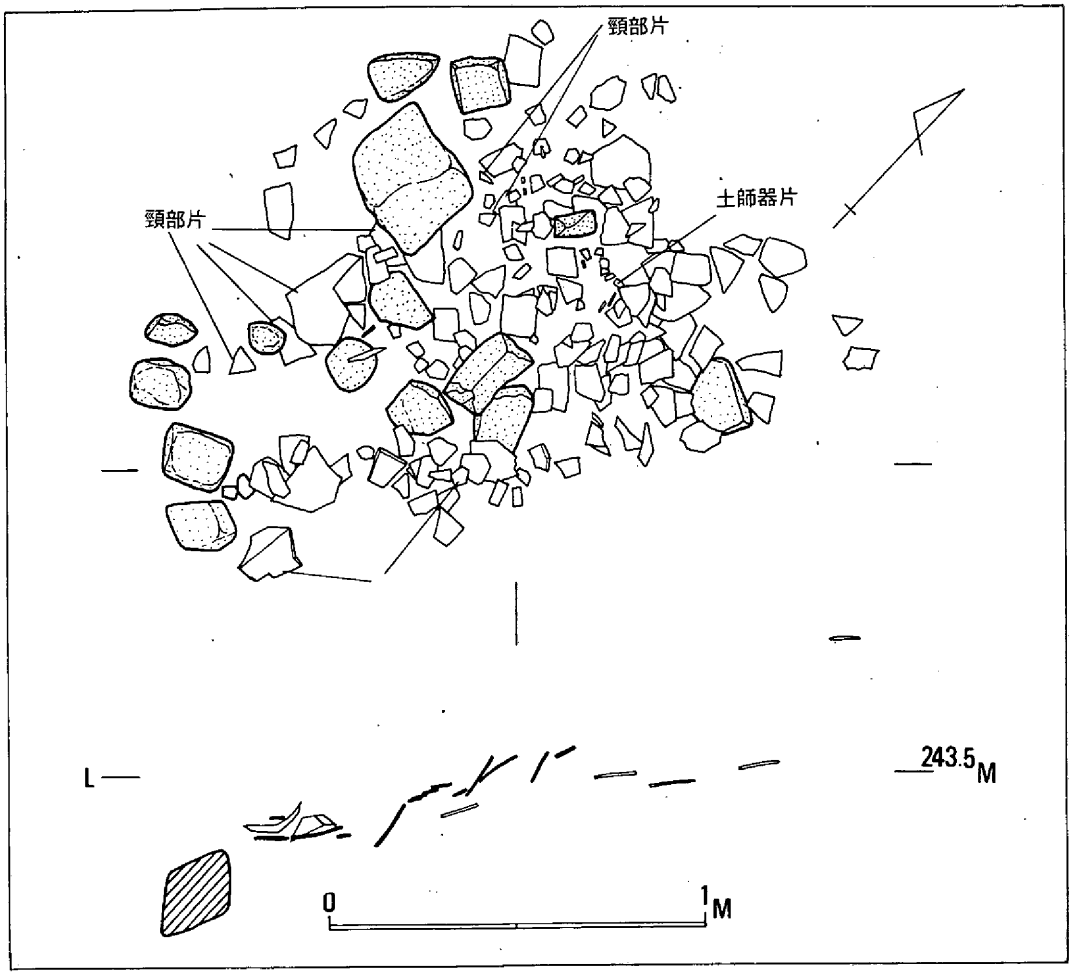
第4図　1号墳墳丘列石と石室の位置（$\frac{1}{60}$）



第５図　１号墳墳丘・周湟土層断面図（$\frac{1}{50}$～$\frac{1}{60}$）



第6図　1号墳前面墳丘断面図（$\frac{1}{60}$）



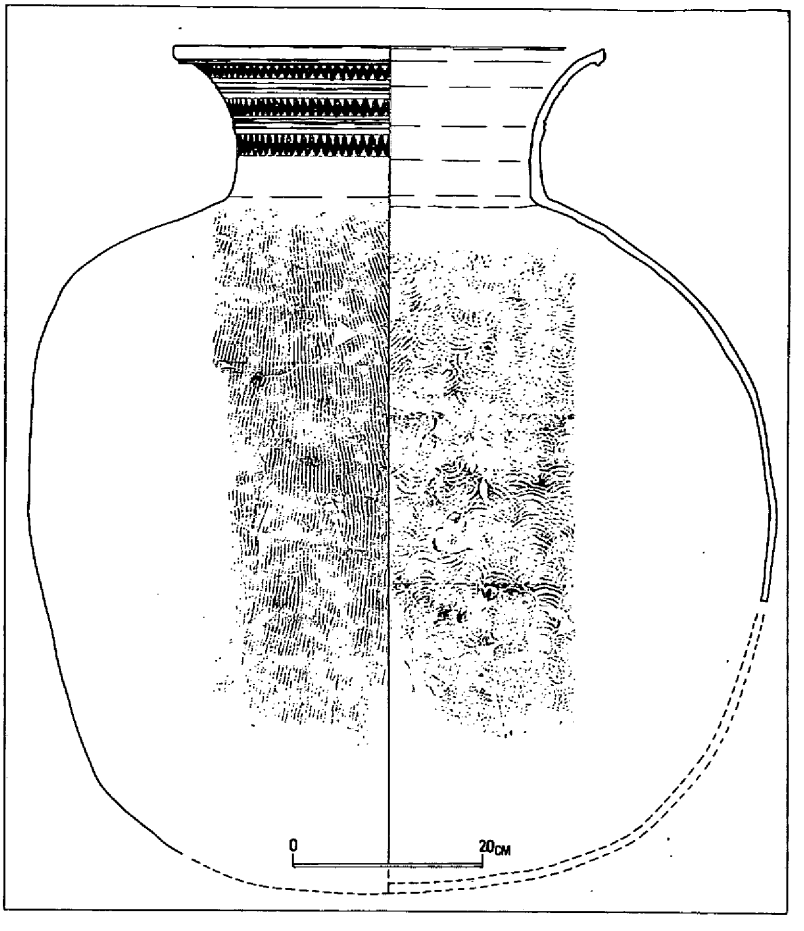
第7図　1号墳南側周溝内大甕出土状況（$\frac{1}{20}$）

(6) 盛大な葬送儀礼，初次埋葬，大甕供献，小形高杯（第9図）など墳頂部に供献，玄門の仮封鎖。

以上の築成工程の中で（2）と（3）の間には石材をいかにして積上げ構築するかが問題で，特殊な道具を用いれば個々の石材を懸垂してのせることが可能であったろうが，むしろ単純に側壁を埋置する過程で土を順次充填してゆき側壁上部・天井石を置いた玄室内部の充填した土をとりのぞいたのではないかと想到するものである。

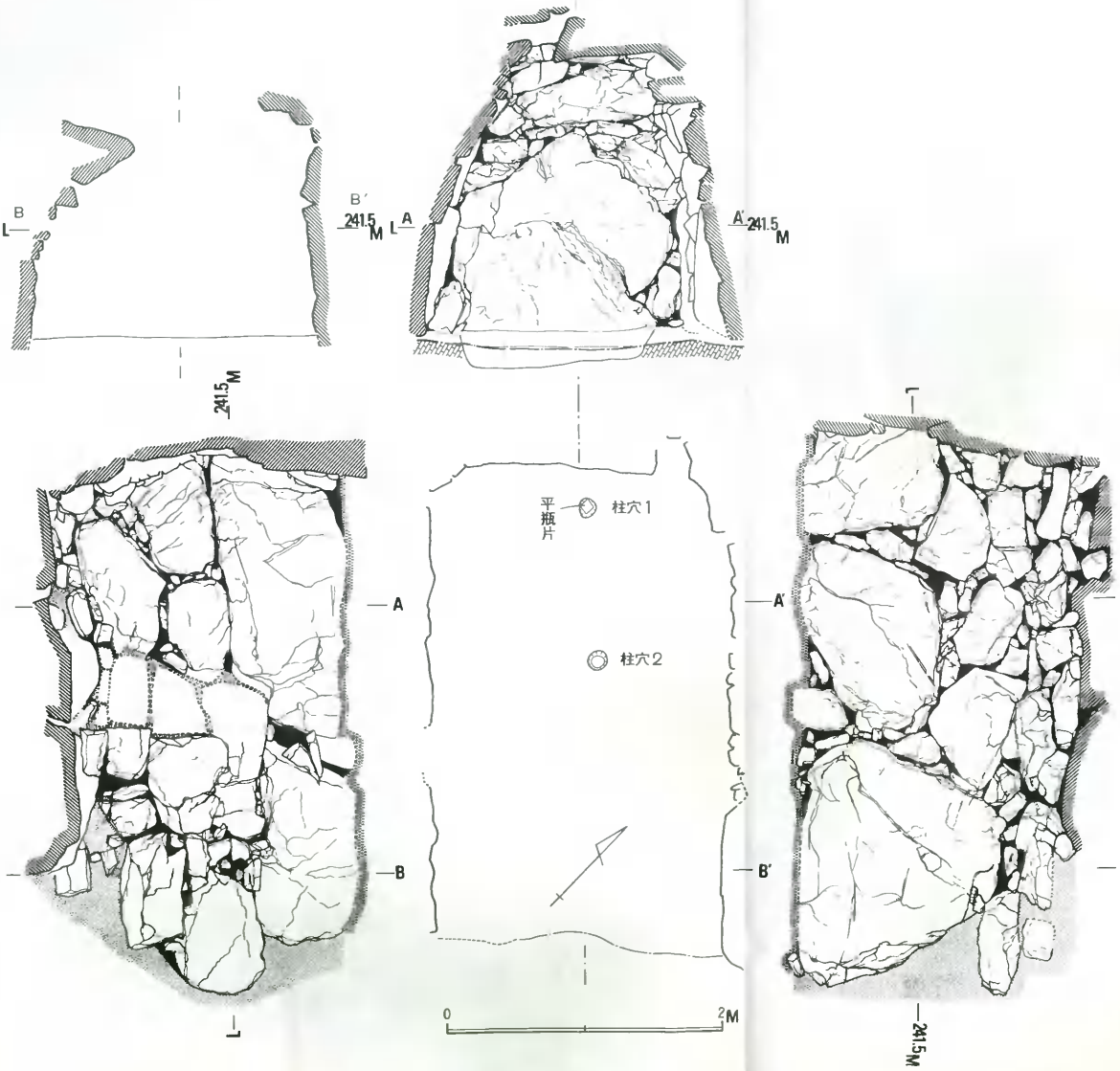
第2節　内部構造（第10図）

内部主体は横穴式石室で主軸はN43.5°Wである。奥壁は第1段を最大巾1.6m，高さ1.7mを測るややいびつな五角形を示す巨石を据え上部，天井石に至る0.7～1.2mの間隙を不揃いな石材を用いて

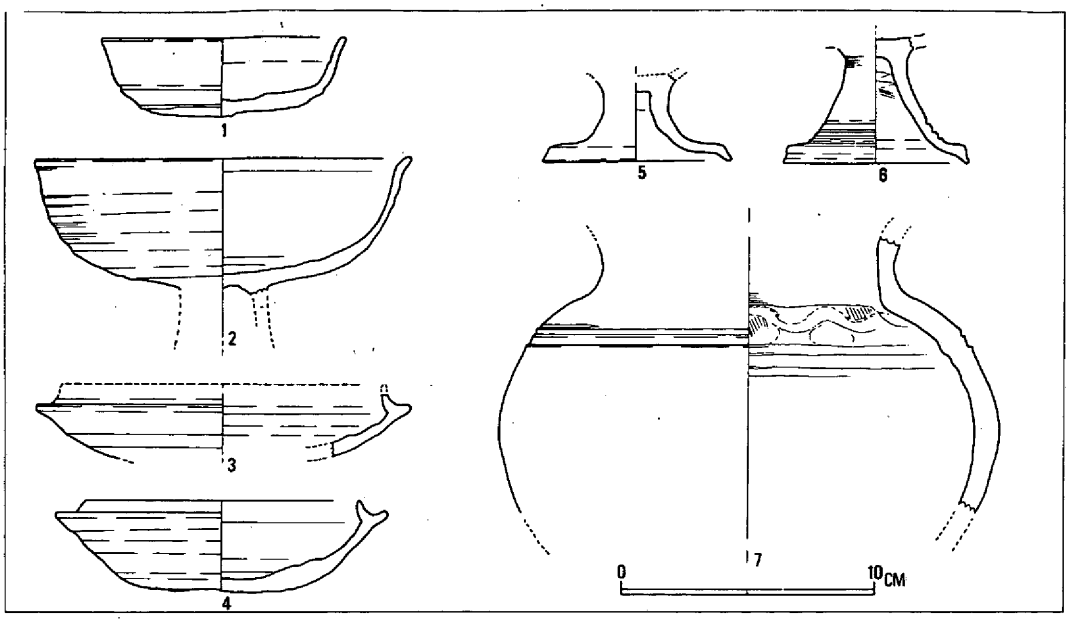


第８図　１号墳周湟出土須恵器大甕実測図（$\frac{1}{8}$）

積上げている。上部に向かうにしたがってやや持ち送りがみられるが，さほど目立った状態を示していない。東側壁は第１段をやはり不揃いな巨石の広口・横口を玄室内部に向け据えている。奥壁と接する側壁基底石は１ｍ前後の長方形のもので，奥壁より更に北西方に面が延びる。残存する中央の側壁基底石は１～1.2ｍのいびつな石を用い，下部を40×30cmの石で支えるように据えている。開口方の側壁基底石は奥壁に用いられている石より一まわり大きく高さ約1.5ｍ，巾約1.9ｍを測るいびつな巨石を用いている。以上の第１段側壁の上部第２～４段は，大きなもので80×60cm，小さなもので小児頭大の石を用い，原則的に横口積を基調とするが不揃いな印象を与える。天井石に至るまで，ほぼ直線的な持ち送りがみられるが面は一定していない。一方，西側壁は，第１段基底石を長さ2.2ｍ，高さ約１ｍの長方形の巨石を奥壁に接して据え，開口方に1.5×0.8ｍの石材をやや間隙をあけて据えている。第２段は80×60cm前後の均一な石を用いて横口を内面に向け面もほぼ揃えている。第３段はいく分第２段と重複する部分もあるが，１×0.6ｍ前後の石を最大として80×60cm前後の石を横口積にしている。第４段は天井石と一部重複し二人持ち大の石を主体としている。概して東側壁よりは石材が均一で横口積の特色をよく残している。持ち送りはやや弧状を呈し天井石に至る。第10図のＢ—



第10図　1号墳玄室展開図・断面図（$\frac{1}{40}$）



第9図　1号墳周辺・墳頂部出土須恵器（$\frac{1}{3}$）

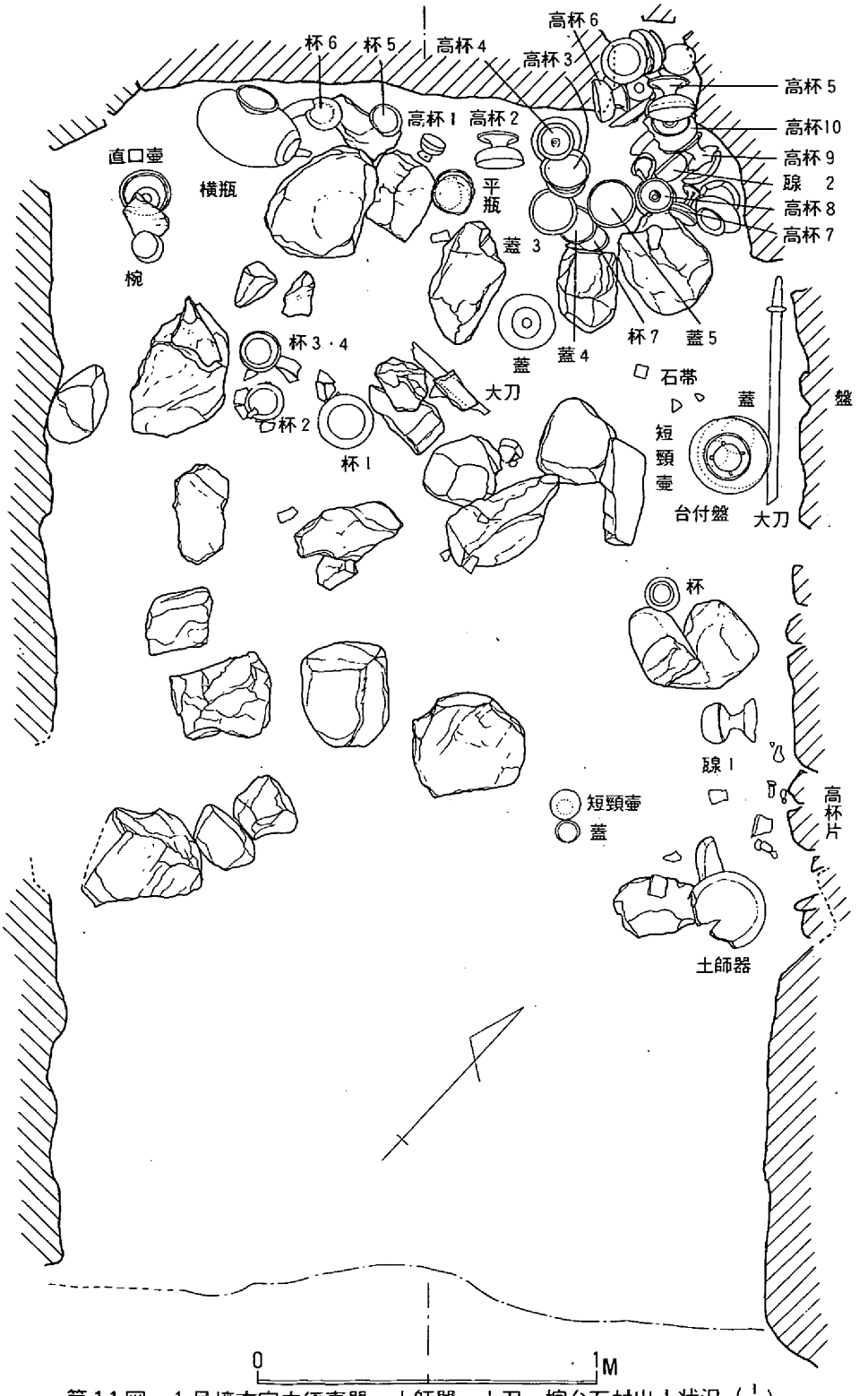
B′断面による傾きは石室構築後に生じたもので側面図点線で記した崩落石と同様かなりせり出している状態であった。これは持ち送りが弧状を示す構築方法・石材の選択の欠陥と理解される。左右両壁共に横口積を原則とし，第4段で天井石に到達し，側壁高は床面より1.9～2.2mを測り，床面より天井石までは1.9～2mを測る。

玄室平面規模は，残存全長（床面）約3.5m残存巾2.1～2.2mを測り，胴張りは認められない。尚，第10図に示した床面の柱穴は石室構築時のものではなく追埋葬過程のものであり，崩落に備える側壁・天井石の支柱を立てかけた痕跡と思われる。奥壁よりの柱穴1からは平瓶の体部片が出土しており，床面に副葬品があった状態時に柱穴が掘り込まれたとみられる。また柱穴2からは折損した鉄鏃が出土しておりやはり追葬過程の掘り込みであることを示している。いずれも径約15cm前後，深さ約20cmを測る。

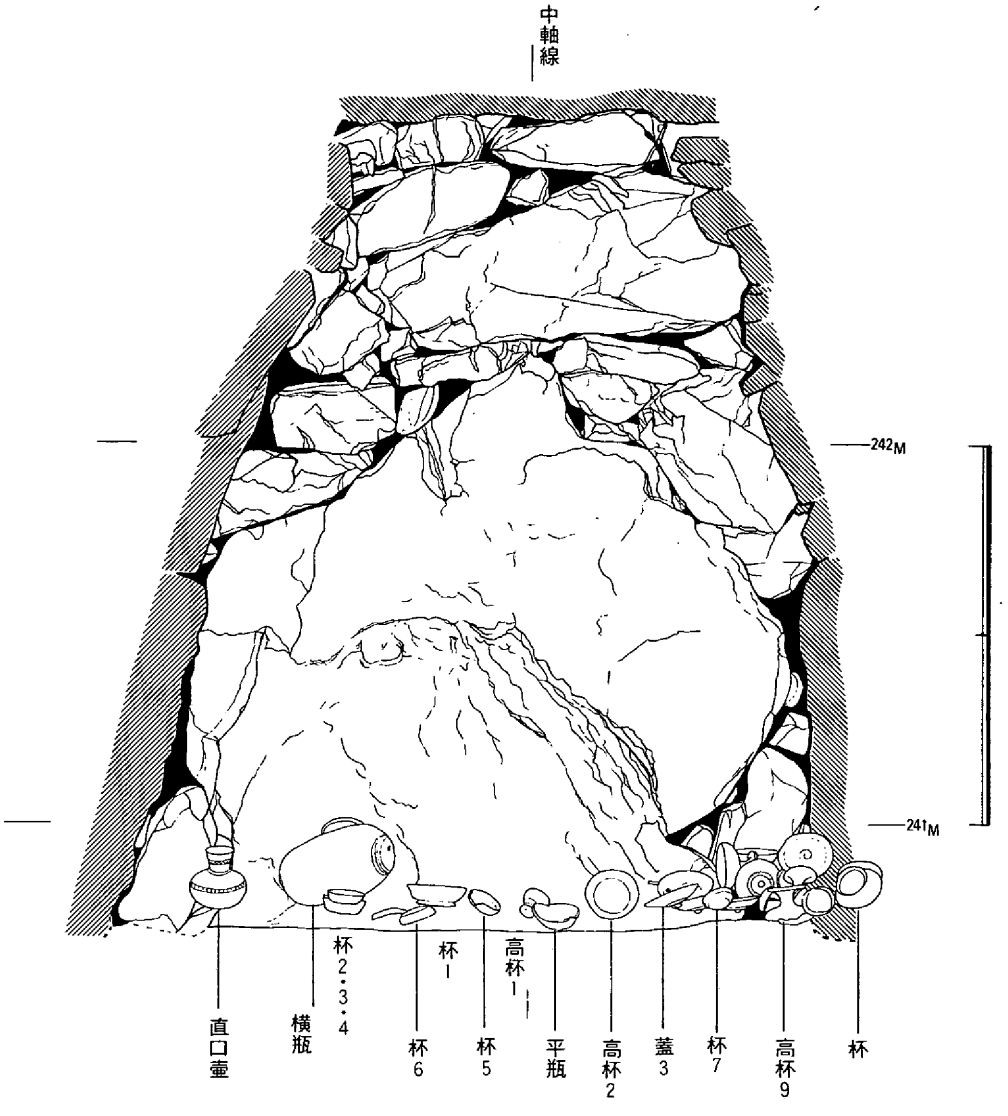
第3節　遺物出土状態

(1)　墳頂部（第9図）

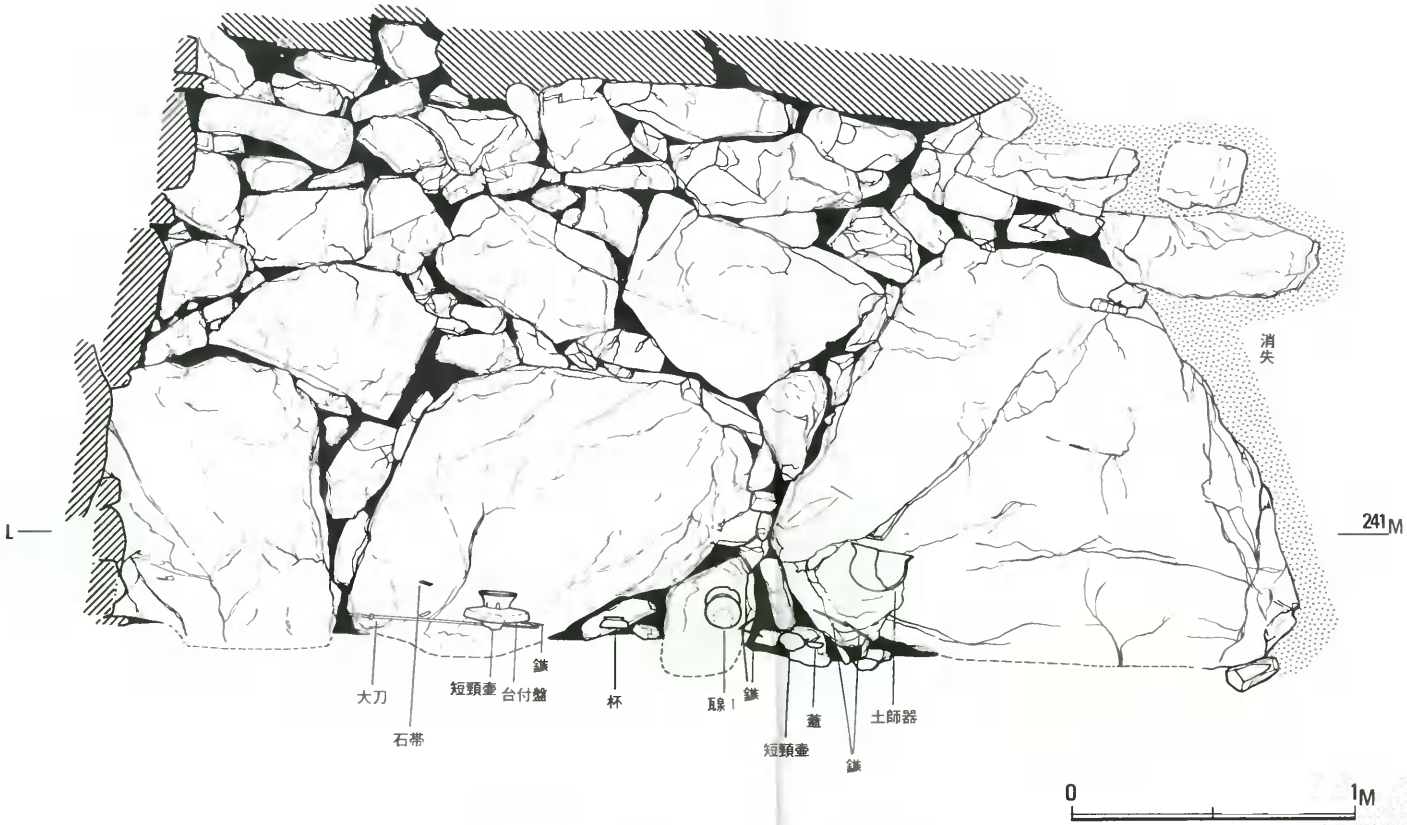
第1節で述べた墳丘供献土器と考えられる須恵器は第9図―5～7である。いずれも墳頂封土中より採集した破片である。5・6は杯部を欠失した小形高杯脚部でいずれも脚端に丸味をもったカエリを持つ。7は体部上半にヘラ描き沈線3条が認められる広口壺片で胎土精良，極めて良好な焼成を示



第11図　1号墳玄室内須恵器・土師器・大刀・棺台石材出土状況（$\frac{1}{20}$）



第12図　1号墳玄室内須恵器出土状況（$\frac{1}{20}$）



第13図　1号墳玄室東側壁付近遺物出土状況（$\frac{1}{20}$）

す。いずれも1号墳築造時の時期を示す遺物と考えられ，6世紀後半に比定することができる。第10図—3は先に取上げた須恵器大甕出土地点付近の周湟内より出土した杯小片である。4は墳丘北東方周湟の肩付近と推定される地点で出土した杯完形品である。平滑な底部が特徴的で短かい立上がりが観察できる。胎土・焼成共に良好で灰青色を呈する。3・4いずれも時期的に大差なく，5—7と同様6世紀後半に比定できるものであろう。

＜付記＞（第9図1・2）

直接1号墳に伴う遺物ではないが，後章で述べる西方斜面に存在する弧状の溝状遺構西肩で出土した須恵器杯・高杯杯部片である。弧状の溝状遺構が古墳の周湟とすれば前章の4基から成ったと新見市史に記されたうちの1基にあたる可能性を秘めている。1は形状から杯と判断したが蓋となる可能性もある。体部には沈線様の凹みが認められヘラオコシの後ナデ調整を行った底部に至る。胎土・焼成共に良好で青色を呈する。2は脚部を欠失した須恵器杯部で，1号墳玄室内部出土品と比べ器壁は薄く体部は丸味を持って緩かに外反する口縁部に至る。胎土は微砂を含むが（焼成と共に）良好で，灰青色を呈する。時期的には前述の須恵器と大差なくやはり6世紀後半に比定できる。

(2) 玄室内（第11～13図・19・21図）

玄室内出土遺物は大きく2時期に分類することができる。床面より約30cmの巾で古墳に直接伴う副葬遺物が遺存し，約1mの流入土をはさむ天井石の間では中世銭貨・土師器片が出土しており，中世に玄室は開口部が認識され埋葬が行われたことを示している。後者は第4章に記述し本項では，前者の古墳すなわち玄室構築当初の初次埋葬より最終埋葬までの遺物出土状態について述べる。

玄室内でもっとも多量に出土した棺釘は，まさに立錐の余地もない程で，ほぼ全面にわたって分布が認められた。ただ，開口方側の約1m×2mの平面では住宅建設の法面となり，石垣が築かれていたため撹乱を受け，床面の状況は良好であったにもかかわらず遺物の残存状況は悪かった。遺物の原位置確認と精査が可能であったのは，奥壁から開口方約2.5mの間で多量の棺釘に加えて，鉄器（武器・馬具など）・須恵器・土師器・玉類・石帯が出土している。第11図にみられるように木棺の棺台として用いられた人頭大～小児頭大の角礫が，その分布と企を一にしている。このことは，住宅建設の際の玄室破壊は残存部までにとどまるが，出土品の持ち去り・玄室内の撹乱は残存玄室内約1mにまで及んだことが知られるのである。

これら多量の出土遺物の集中度は奥壁付近がもっとも密な状態を示し，追葬過程における，追葬以前の副葬品が奥壁方へ取り片付けられた状態を示しているものと思われる。東側壁側では埋葬時の副葬状態をそのまま残していると思われ，奥壁側中央部と同様である。奥壁側中央部では勾玉，ガラス小玉が出土しほぼ埋葬原位置を保っていた。付近の須恵器杯（杯1～4）もほぼ原位置を保っている。奥壁北西側で出土している須恵器椀と直口壺は副葬の機会を異にし，直口壺と椀の間に扁平な角礫が存在し副葬の前後を示している。最終埋葬に伴うとみられる石帯・土師器は他の一連の副葬須恵器よりややレベルが高い位置で出土している。棺釘のレベルの高さを考慮すれば埋納遺体は，初期より一貫して木棺に納められるのを基調としていたようである。棺釘の綿密な実測・レベル分布測定にもかかわらず木棺埋納位置・状況を復元することはできなかった。個々の棺釘のレベル分類と形式分

類の細分化が報文上梓後残された研究課題である。個々の遺物の出土状態については第4節に補足説明を加える。

第4節　遺物各説（第14～18図・20・22～33図）（第2～6表）

玄室内出土遺物の形態・機能分類および数量を下記に述べる。

(1)　容器（須恵器・土師器）……50点

(2)　装身具（石帯・勾玉・管玉・ガラス小玉）……25点

(3)　馬具（鐙金具・鉸具・留金具）……3点

(4)　武器等（大刀・大刀残欠・刀子・刀子残欠・鉄鏃・その他）……42点余

(5)　棺具（棺釘）……188点余

(6)　その他（人骨・漆膜付木片等）

(7)　中世遺物（土師器・銭貨・棺釘）……29点

以下個々の項目について述べたい。

(1)　容器――須恵器・土師器（第14～18図）

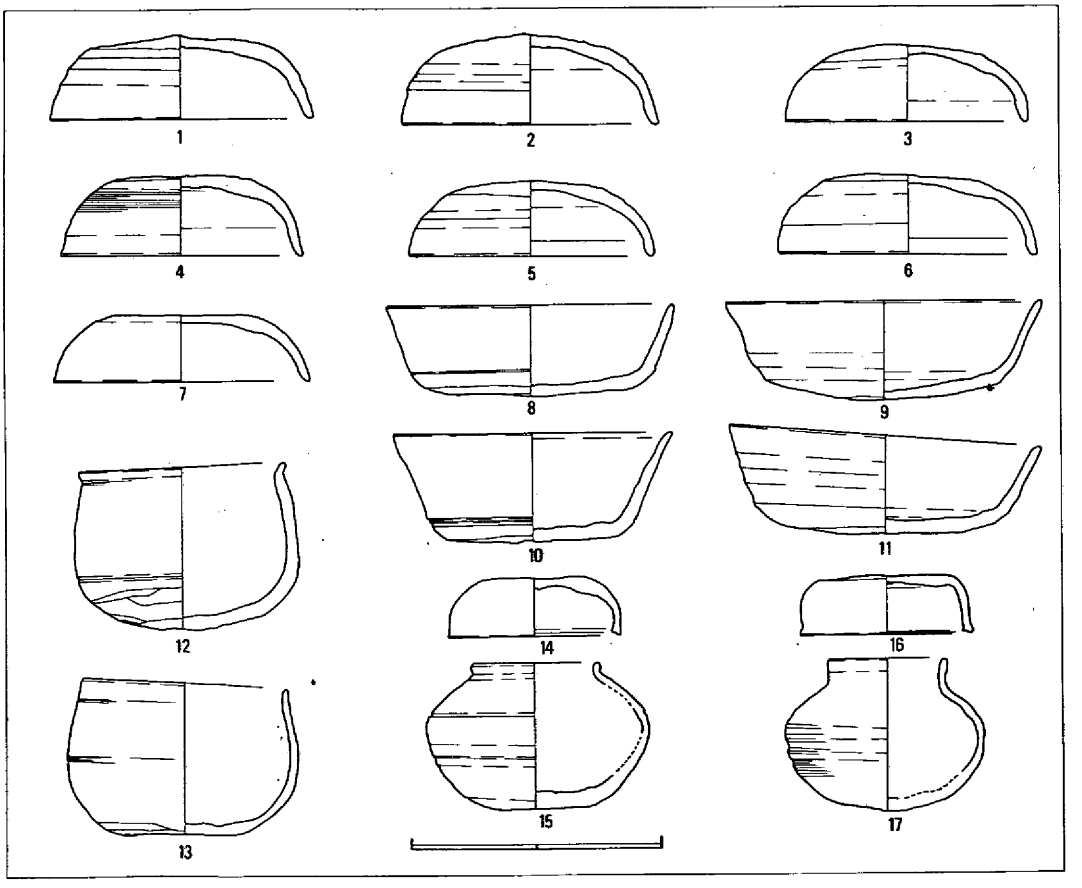
各々の須恵器の特徴については観察表（第2）に掲げたので詳述しない。出土状態による副葬の同時性グループはある程度推測することができる。しかし，奥壁凹部にあたかも取り片付けられたような状況を示す一群の須恵器は必ずしも一括同時性を示していない。なぜならば玄室内埋葬の廃絶が近付くにつれ，各埋葬時の副葬品が恣意的に片付けられた可能性が強いからである。したがって，本節では徒らに型式分類と副葬契機の同時性を追及せず，製品としての焼成・胎土の類似性，あるいは明らかな同時埋葬を示す複数個体の組合せについて述べたい。

第14図1～7の須恵器小形蓋は7を除いてすべて奥壁凹部で出土した。第16図―3～13の高杯のうち杯部内面に重ね焼痕をもつものがあるがその径と計測値がほぼ合致し胎土・焼成共に酷似する個体もみられ，同一工房・同時焼成を示唆している。第14図8～11は出土位置が極めて近接するが形態は様々である。9は8・10・11と第15図―12（杯1～4）付近で押しつぶされたように破砕されていたもので同時副葬ではない。なお10は11と重ねられて出土している。第14図―12・13はいずれも椀であるがさほど類例を見ない形状を示している。12は直口壷の上，13は奥壁凹部の一群の須恵器の下部で器体の一部を欠失して出土している。第14図―14・15は玄室開口方の床面がやや凹んだ地点で対となって出土している。第14図―16は奥壁凹部の一群の須恵器の中より出土したものであり，17は盤の下から出土したもので必ずしも対とはならぬかもしれないが玄室内の遺物残存状況から推定すれば対として扱って差支えなかろう。

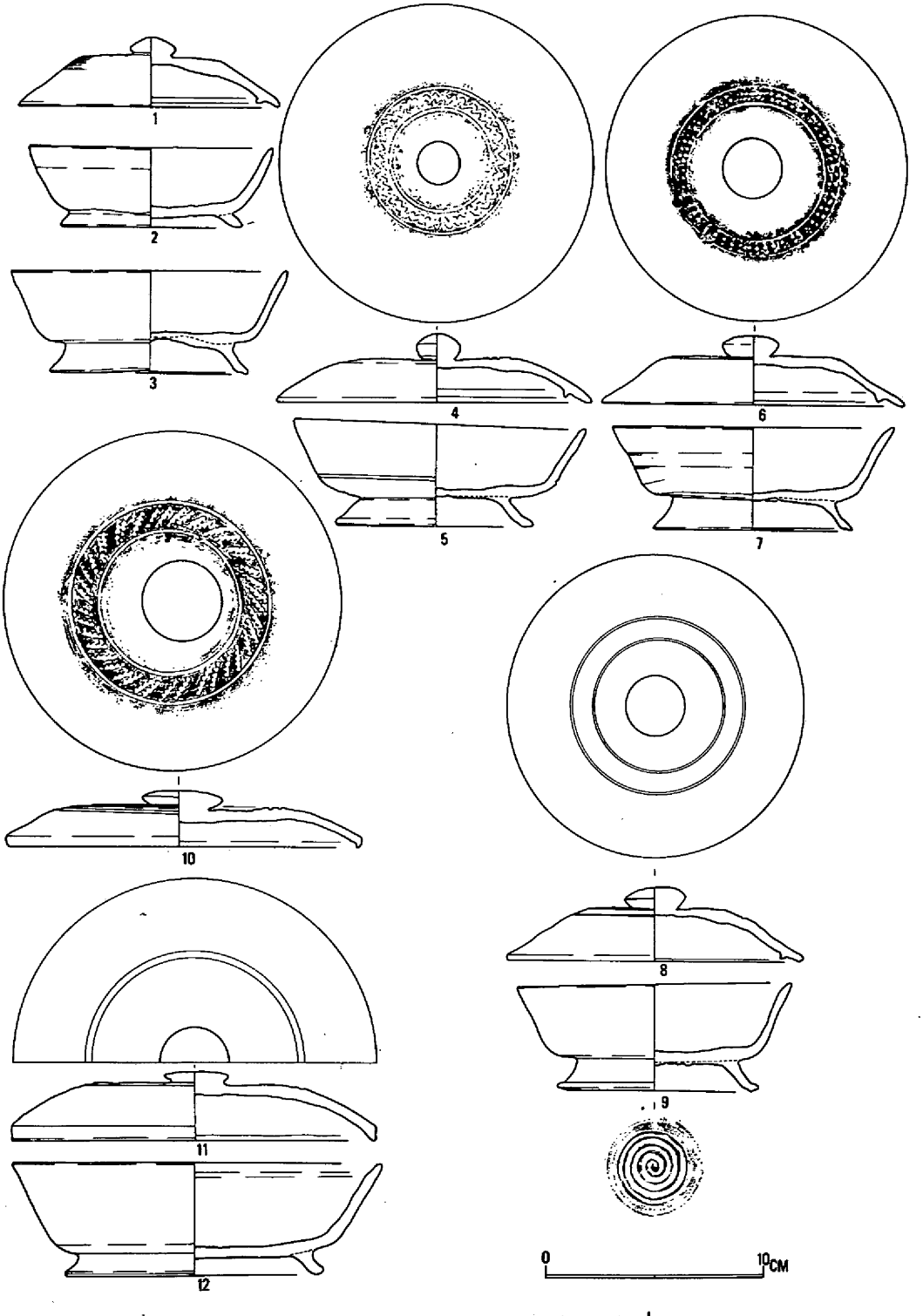
第15図に掲げる蓋・杯は特徴的な須恵器で，ことに蓋は天井部に文様帯をもつ特色がある。3～9は計測値から製作企画性が類似する。蓋の場合は，オリジナル・デザイン的な文様帯の有無・相違があり，ツマミの形状も異なるが杯はほとんど斉一的に製作されている。第15図―10は開口部付近で出土したやや大形の蓋で口縁内面のカエリは認められない。胎土・焼成共に極めて良好で他の杯・蓋と

相違する。11・12（杯1）はやや隔絶された地点・レベルで出土しているが胎土・焼成・成形技法は全く同一である。以上の須恵器蓋杯は1～9まで同一工房による製作・同一窯による焼成を，わずかな形状の差異を認めながらも首肯することができるのではないかと推察する。

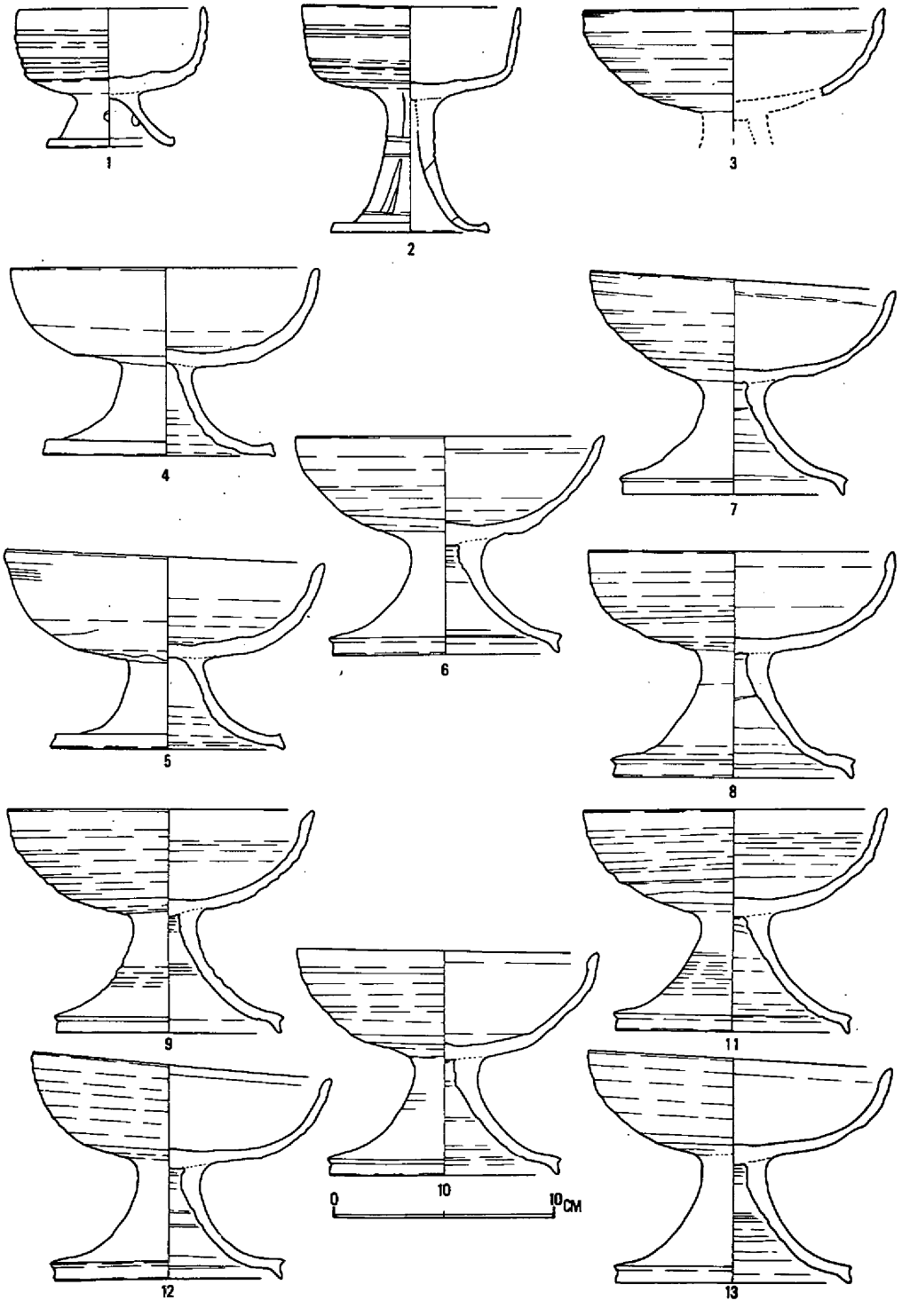
第16図に掲げる須恵器高杯は3を除いてすべて奥壁付近で出土したものである。1は小形低脚高杯で脚に比べ杯部が不均合に大きい特異な個性をもつ。2は強いていえば長脚二段透しをもち優美な容姿を維持している。3は開口方，隠付近を中心に散乱していた破片の接合による杯部で6～13までの奥壁の一群の高杯と同種である。4・5は6～13の高杯とはやや異なり胎土は粗悪で形態も鈍重である。この点についても製作工房・焼成窯の相違を示すものと考えられる。第17図―1・2は盤・台付盤である。胎土・焼成全く同一で副葬も同時で，第14図―6，蓋・17，短頸壷が置かれその上に盤，さらに台付盤が伏せ置かれた状態で出土した。3は柱穴1付近に破片となって散乱していた平瓶でその状況からしても埋葬初期の副葬品とみることができる。4は直口壷で奥壁北西方で出土し，装飾性に富む優美な器体成形が行われている。胎土・焼成共に第15図の一連の杯・蓋とほぼ同一である。5は東側壁開口方で出土し奥壁の一群の須恵器の下部より出土した6とほとんど同一胎土・焼成を示し



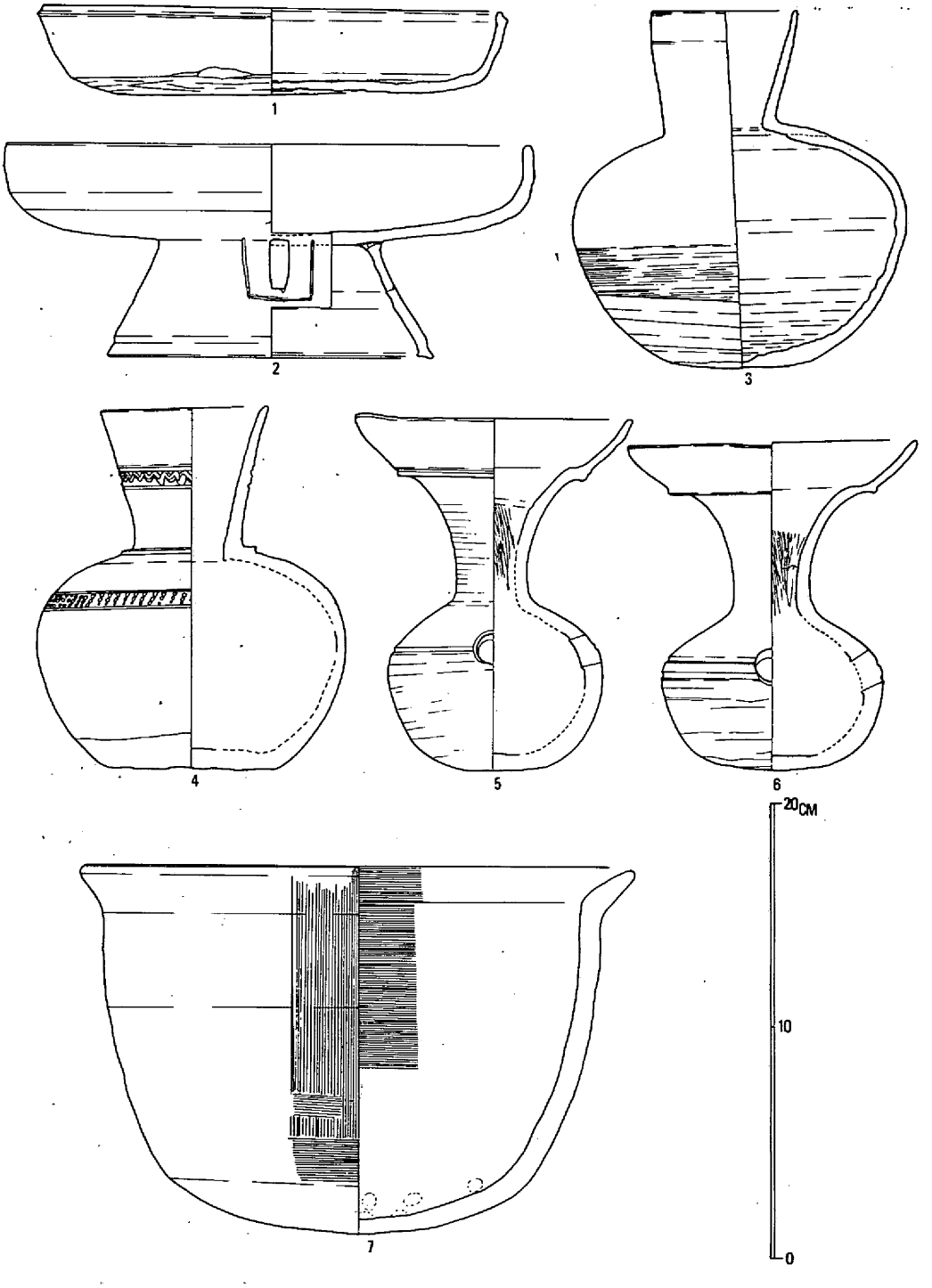
第14図　玄室内出土須恵器実測図（蓋・杯・椀・短頸壷）（$\frac{1}{3}$）



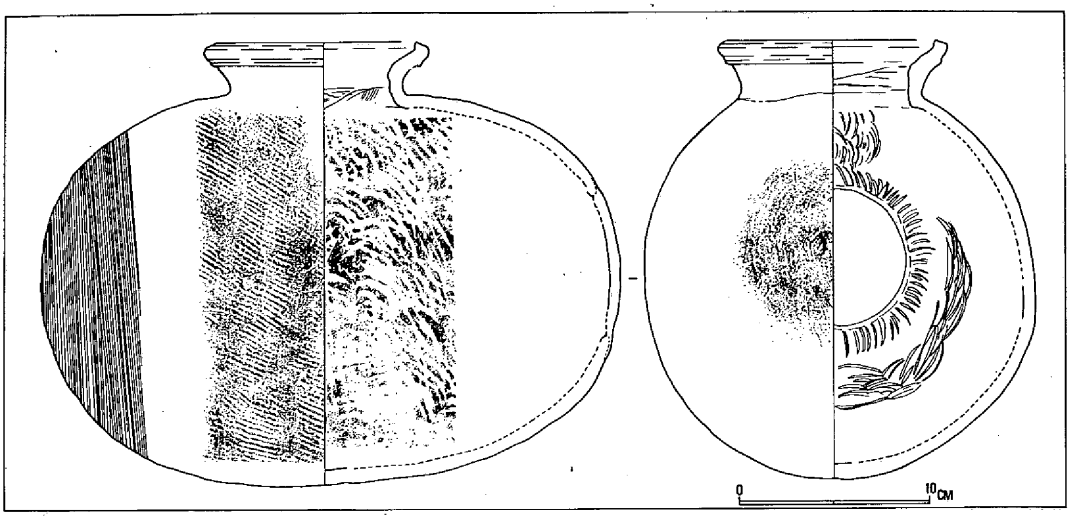
第15図　玄室内出土須恵器実測図（蓋・杯）（$\frac{1}{3}$）



第16図　玄室内出土須恵器実測図（高杯）（$\frac{1}{3}$）



第17図　玄室内出土須恵器実測図(盤・台付盤・平瓶・直口壺・鼎)・土師器　($\frac{1}{3}$)



第18図　玄室内出土須恵器実測図（横瓶）（$\frac{1}{4}$）

ている。

第18図は，玄室内で出土した須恵器の中でも最大のもので奥壁付近で出土した。内部より数本の棺釘・棺釘片が出土していることからも埋葬初期の副葬品と推定されるものであろう。胎土は粗悪であるが，焼成は秀逸である。

第17図―7は土師器鍋形土器で，レベルからも最終埋葬時に用いられた骨蔵器ではないかと推定している。器高15.3cm・口径24.3cmを測る。内外面共に荒い刷毛ナデを施し，内面底部には指頭圧痕を残す。体部外面には煤状炭化物が付着し転用されたことを示している。器壁は極めて軟弱で胎土も粗砂多く焼成不良，暗赤褐色を呈す。内部には骨片等の出土は認められなかった。他に土師器片1片が床面より出土しているが直接古墳に伴うものとは考えられない。

以上の須恵器は6世紀後半から7世紀中葉前後にかけて玄室内に副葬されたことを示していることが推定される。各々の器種のグルーピング・いわゆるアトリエ（製作工房）・焼成窯との関係を一部記述したにとどまるが，結論は備中北部という地理的位置における須恵器生産の大要解明を待たねばならない。更に，備後地域あるいは備中南部地域との商品としての須恵器流通の史的実態の解明・研究が待たれるものである。

第2表　1号墳出土須恵器観察表

単位：cm　作成：岡田

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
第8図	大甕	約90	45	周湟内	口縁部は外方し口唇部はほぼ垂直に丸味を帯びておわる。頸部には鈍い沈線に区画された櫛描き波状文帯が3条みられる。体部外面は平行叩き目文・内面は青海波叩き目文あり。焼成良好，全体的に灰褐色を呈し，部分的に窯変。	体部下半・底部を失う。器壁は薄く7～8mm。最大体部径78.5cm。
第14図―1	蓋	3.3	10.5	玄室奥壁付近	天井部へラケズリ，体部～口縁部はヨコナデ調整，内面はヨコナデ・任意のナデ調整。胎土は比較的精良，焼成不良，灰黒色～乳白色を呈する。	遺物取上げ番号(杯5)完形品
第14図―2	蓋	3.57	10.3	玄室奥壁付近	天井部はヘラケズリを行う。体部～口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。胎土は比較的精良で焼成不良，乳白色～灰黒色を呈する。	遺物取上げ番号(杯6)器体に棺釘付着。完形品
第第14―3	蓋	3.05	9.55	玄室奥壁付近	ろくろは，時計逆まわり，天井部はヘラケズリ後平滑なナデ仕上，胎土は粗砂多く不良，焼成良好，灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(杯7)完形品
第14図―4	蓋	3.25	9.65	玄室奥壁付近	ろくろは時計逆まわり，天井部はヘラケズリ，体部はカキ目調整がみられ口縁部はヨコナデ調整でおわる。胎土は比較的精良，焼成良好，灰青色～青色を呈する。	遺物取上げ番号(杯13)完形品
第14図―5	蓋	3.0	9.8	玄室奥壁付近	ろくろは時計逆まわり，天井部はヘラケズリ後ナデ仕上げ。口縁部はやや肥厚。胎土はやや不良，焼成良好，灰青色～青色を呈する。	遺物取上げ番号(杯14)完形品
第14図―6	蓋	3.15	10.2	玄室内盤の下	ろくろ時計逆まわり。天井部はヘラケズリ，体部はヨコナデ調整。	完形品

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					胎土は比較的良好，焼成良好，青灰色～青色を呈する。口縁部はやや肥厚。	
第14図―7	蓋	2.6	10.2	玄室閉口部	天井部はヘラケズリのままで平滑。体部～口縁部はヨコナデ調整。口縁部はわずかに肥厚。胎土は精良，焼成良好，灰青色を呈する。	破片復元½個体
第14図―8	杯	3.6	11.5	玄室奥壁より中央部	ろくろは時計逆まわり。口縁部より体部はヨコナデ調整，一条の沈線を経てヘラケズリ底部に至る。胎土は精良，焼成極めて良好，灰色を呈する。	遺物取上げ番号(杯身2)完形品
第14図―9	杯	3.9	12.5	玄室奥壁より中央部	ろくろは時計逆まわりか。口縁部～体部は凹凸あり，ヨコナデ調整。底部は不安定なヘラケズリ。胎土は粗砂多く不良，焼成良好，灰青色～暗青色を呈する。	破片接合完形品
第14図―10	杯	4.3	11.2	玄室奥壁より中央部	ろくろは時計逆まわり。口縁部～体部はヨコナデ調整。体部下半に沈線あり。底部はヘラケズリ。胎土精良，焼成極めて良好，淡灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(杯4)完形品 杯3の中に重ねられて出土。
第14図―11	杯	4.3 ～ 3.4	12.4	玄室奥壁より中央部	口縁部より体部はヨコナデ調整。底部はヘラケズリ後ナデ仕上げ。胎土は粗砂多く不良，焼成良好暗青色を呈する。器形はややいびつで傾く。	遺物取上げ番号(杯3)完形品
第14図―12	椀	6.5	8.25	玄室奥壁より直口壺の上	口縁部は短かく外反する。口縁部～体部下半はヨコナデ仕上げ。一条の沈線をはさんでていねいなヘラケズリの施された底部に至る。胎土不良，焼成良好，灰色を呈する。	完形品

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
第14図—13	椀	5.8 〜 6.2	8.2	玄室奥壁付近磚2の下	口縁部はゆるやかに外反。口縁部〜体部下半はヨコナデ調整。底部はていねいなヘラケズリ仕上げ。胎土は精良，焼成は極めて良好で青灰色〜暗青色を呈する。	½欠失
第14図—14 —15	蓋 短頸壺	2.3 5.8	6.9 5.1	玄室開口方より中央部	蓋の口縁部は凹みをもって肥厚する。天井部はヘラケズリ後ナデ調整。短頸壺は頸部は短かく丸味をもって外反する。肩部には一条の沈線がみられる。いずれも胎土はやや不良，焼成良好，暗青色〜灰青色を呈する。	セットで出土。完形品
第14図—16 —17	蓋 短頸壺	2.3 6.0	6.8 4.5	玄室奥壁より盤の下	蓋の天井部はヘラケズリ後，ナデ仕上げ。肩部は張り，やや肥厚し，外反する口縁部に至る。短頸壺は頸部はやや長く直立する。体部はヨコナデ調整丸味をもってナデ調整された底部に至る。いずれも胎土，焼成共に良好，暗青色〜灰褐を呈する。	セットになる可能性が強い。完形品 蓋は(F 7)
第15図—1	蓋	3.12 〜 3.13	11.7	玄室奥壁付近	ツマミはやや高い。天井部から口縁部は平滑なヨコナデ調整。内面にはカエリがある。胎土は白っぽい精良な土を用い，焼成やや不良内外面共に乳白色を呈する。ろくろは時計逆まわり。	遺物取上げ番号(F 4) 第15図—2とセットか。 完形品
第15図—2	杯	3.6	10.95	玄室東側壁付近	口縁部〜付高台はヨコナデ仕上げ。高台は外方する。底部はヘラオコシ後ナデ仕上げ。胎土は比較的精良，焼成良好，灰白色を呈する。口縁部は灰黒色部分あり。	完形品
第15図—3	杯	4.6	12.5	玄室奥壁付近	口縁部より高台までヨコナデ調整。底部より高台まで貼付け。高台端	遺物取上げ番号(杯12)

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					部はやや平坦面をもち，全体が強く外反する。胎土精良，焼成やや不良，暗灰色～灰色を呈する。	完形品
第15図—4 —5	蓋 杯	3.15 4.8 ～ 4.45	14.4 13.3	玄室奥壁付近	ツマミは丸味を持ってやや高い。天井部には2条の沈線にはさまれて1条のヘラ描き波状文がめぐる。口縁内部にカエリがある。全体的にナデ，ヨコナデ調整。杯は口縁部～底部はヨコナデ調整，体部に1条の沈線がめぐる。高台は底部と共に貼付け。いずれも，胎土は普通，焼成良好，灰色～暗灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(F3) (杯10) 窯変状態からセットと断定。 完形品
第15図—6 —7	蓋 杯	3.1 4.6	13.9 12.9	玄室奥壁付近	ツマミはやや扁平，天井部には2条の沈線にはさまれた刺突列点文がめぐる。天井部より口縁部にかけてはナデ，ヨコナデ調整，口縁内面には断面三角形のカエリがある。杯は口縁部～高台部はヨコナデ調整，底部の一部を含めて高台は貼付け。いずれも，胎土は精良，焼成不良，乳白色～灰青色を呈する。	完形品 7は(杯9)セットと推定
第15図—8 —9	蓋 杯	3.35 4.6 ～ 4.9	13.6 12.5	玄室奥壁付近	蓋のツマミはやや扁平，天井部には2条の沈線がめぐるが文様はない。全体的にナデ，ヨコナデ調整でていねいに仕上げる。内面に断面三角形のカエリがある。杯は口縁部～高台部はヨコナデ調整，高台は底部を含めて貼付け，底部はヘラ描き沈線回転痕がみられる。いずれも胎土良好，焼成良好，灰白色を呈する。	遺物取上げ番号(F5) (杯8) 完形品 セットと推定いずれもろくろは時計まわり

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
第15図—10	蓋	2.55	15.8	玄室開口付近採集	ツマミは扁平で大きい。天井部には2条のヘラ描き沈線にはさまれて櫛描き列点文がめぐる。全体はナデ，ヨコナデ調整で仕上げる。カエリは短かく丸味を帯ぶ。胎土，焼成共に良好，明灰色を呈する。	完形品
第15図—11 —12	蓋 杯	3.1	16.4	玄室奥壁付近 玄室中央部	ツマミは扁平で小形。天井部に1条の沈線がめぐる。全体はナデ，ヨコナデ調整で仕上げる。ろくろは時計まわり。杯は口縁部～高台部はヨコナデ仕上げ，高台は貼付け高台で，外反し端部は丸味を帯ぶ。いずれも胎土は精良，焼成はやや良好，やや暗い灰色を呈する。杯はろくろ回転，時計逆まわり。	杯は遺物取上げ番号(杯1)完形品セットと推定。
第16図—1	高杯(低脚小形)	6.15 〜 6.2	8.3 (脚端径) 5.7	玄室奥壁付近中央部	杯部は沈線様凹凸あり，脚端に至るまでヨコナデ調整。脚端はやや肥厚する。円孔透しは3。胎土は極めて精良，焼成良好，灰青色～淡灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯1)脚部の一部を欠く。
第16図—2	高杯(長脚二段透し)	10.1	9.8 (脚端径) 7.1	玄室奥壁付近側壁より	杯部は沈線様凹部が数条みられる。立ち上がりはほぼ直立。脚部は2条の沈線をはさんで2段透しが3か所みられる。上段は退化し，一条のヘラ沈線様で切込みも浅い。脚端はやや肥厚し外反する。全体的にナデ，ヨコナデ調整。胎土精良，焼成極めて良好，明灰色～灰緑色（自然釉）を呈する。	遺物取上げ番号(高杯7)脚端はやや焼けひずみあり。形態優美。
第16図—3	高杯	(杯部高) 4.5	13.4	玄室開口方東側壁付近	杯部は凹凸あり，体部はヨコナデ調整を経てヘラケズリ底部に至る。内面はていねいなナデ仕上げ，口縁部はやや肥厚するクセをもつ。	脚部欠失 破片接合

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					胎土，焼成共に良好，暗灰青色を呈する。	
第16図—4	高杯	8.25	13.35 (脚端径) 10.5	玄室奥壁東側壁より	杯部は口縁部～体部はヨコナデ調整，ヘラケズリ痕を残す底部に脚を接合後ナデ仕上げを行っている，脚端は丸味をもったカエリが外方する，胎土は粗砂多く不良，焼成良好，灰青色～暗青色を呈する。ろくろは時計逆回り。	遺物取上げ番号(高杯2)完形品
第16図—5	高杯	8.2 ～ 8.8	14.3 (脚端径) 10.5	玄室奥壁東側壁より	4とほぼ同様。杯部径はやや大きい。全体的に鈍重な印象を与える。3・6～13の高杯とは異なった様相を示している。ろくろは時計逆まわり。	遺物取上げ番号(高杯6)完形品
第16図—6	高杯	9.7	13.9 (脚端径) 10.2	玄室奥壁東側壁より	やや肥厚する口縁部より体部下半は内外面共にヨコナデ調整，ヘラケズリ痕を残す底部に脚が接合されナデ調整で仕上げられる。脚は弧を描いて外反し，明確な稜をもつ脚端に至る。脚端カエリはやや外方するが，ほぼ直立し，シャープである。胎土は精良で焼成良好，杯部内面は明灰色他は灰色～灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯3)完形品
第16図—7	高杯	9.05 ～ 9.85	13.6 (脚端径) 9.85	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろは時計回り。内面に径約10cm前後の重ね焼痕を残す。内面は明灰色～淡灰青色，外面は明灰色を呈す。	遺物取上げ番号(高杯4)完形品
第16図—8	高杯	10.0	13.1 (脚端径) 10.6	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろは時計回り。内面に7と同様径10.3cmの重ね焼痕を残す。内面灰色～青色，外面はくすんだ灰色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯5)完形品
第16図—9	高杯	9.8 ～ 9.9	13.3 (脚端径) 10.1	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろは時計逆回り。内面に7と同様径 9.7cmの重	遺物取上げ番号(高杯8)

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					ね焼痕を残す。内面は灰青色～くすんだ灰色，外面は暗灰青色～灰色を呈する。	完形品
第16図—10	高杯	9.8 ～ 10.05	13.6 (脚端径) 10.3	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろは時計逆回り。内面重ね焼痕なし。内面は灰黄褐色，外面は暗灰青色～くすんだ灰色，灰褐色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯9) 完形品
第16図—11	高杯	9.75 ～ 9.95	13.5 (脚端径)	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。杯部内面には重ね焼痕を残さず。内外面共に灰色～灰青色を呈す。ろくろは時計回り。	遺物取上げ番号(高杯10) 完形品
第16図—12	高杯	8.85 ～ 10.1	13.5 (脚端径) 10.2	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろは時計回りか。内面には7と同様径約9cmの重ね焼痕を残す。内面はくすんだ灰青色～明灰色，外面は暗青色～灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯11) 完形品
第16図—13	高杯	9.5 ～ 10.3	13.55 (脚端径) 10.4	玄室奥壁東側壁より	6とほぼ同様。ろくろ回転方向は不明。内面には7と同様,径9.8cmの重ね焼痕を残す。内面は灰色～灰青色，外面は淡灰青色を呈する。	遺物取上げ番号(高杯12)
第17図—1	盤	3.7 ～ 4.0	20.2	玄室東側壁付近	口唇部はやや内反し丸味をもって肥厚する。体部はヨコナデ調整を施し，任意斜方向ヘラケズリで仕上げられた底部に至る。内面底部は凹凸がみられ任意ナデ調整で仕上げられる。胎土は石英・長石多く含み不良，焼成良好，内外面共に暗青色を呈する。ろくろは時計逆回りと推定。	完形品 台付盤の下より重なって出土，銅盤の模倣形態か。
第17図—2	台付盤	9.45	23.2 (台径) 14.4	玄室東側壁付近	盤部の口縁は丸味をもってわずかに内反して終る。口縁部～体部中位まではヨコナデ調整，底部にかけては台接合部までヘラケズリ痕を残す。台部は直線的に外方し端部はやや凹み，平坦面を持ちなが	完形品 この下より盤・蓋・短頸壺・鉄鏃出土。特異ではあるが

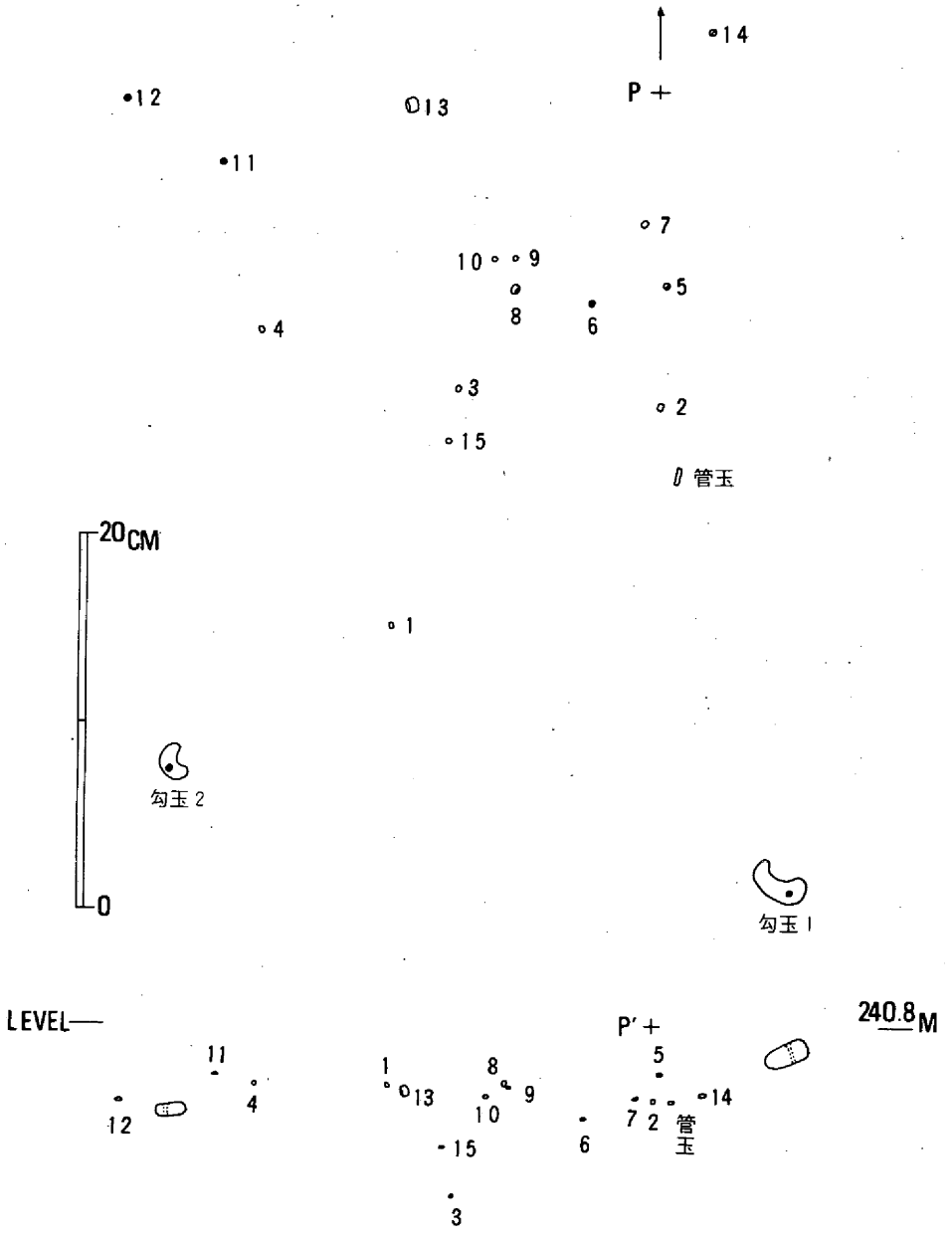
掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					ら肥厚して終る。台部接合部に近接して，長方形透しが4か所あり，そのうち1か所にはヘラ描き沈線で三方を囲まれる。器物の正面を示す作為であろうか。内面には重ね焼部分がみられる。内面は灰青色～暗青灰色，外面は灰青色～暗青色を呈する。胎土，焼成は盤と同一。	バランスのとれた形態を示す。
第17図—3	平瓶	15.7 ～ 15.85	6.5 (最大体部径) 14.9	玄室奥壁より中央部散乱。柱穴1内より破片出土。	頸部～体部にかけてはヨコナデ調整，体部～底部にかけては横方向のハケナデ，ヘラケズリを行う。体部内面は回転ヘラケズリを施し，凹凸が目立つ。底部はヘラオコシのままである。胎土，焼成共に良好で灰色を呈する。ろくろ回転方向は，器体成形時は時計まわり，ヘラケズリ時は逆である。	破片接合ほぼ完形。(杯1・高杯1・柱穴付近で出土した破片を接合)
第17図—4	直口壺	15.8 ～ 16.0 cm	7.45 (最大体部径) 13.7 (底径) 約7	玄室奥壁付近西側壁より	口縁部・頸部～体部下半は，ヨコナデ調整で仕上げ，ヘラケズリ痕を残す体部下半をはさんで荒いナデ調整を施した底部に至る。頸部の中ほどには2条の沈線にはさまれた1条のヘラ描き波状文がめぐる。頸部とり付け部には箍状の段が装飾的にめぐる，肩部にはやはり2条の沈線にはさまれた櫛刺突列点文がめぐる。胎土は粗砂（石英・長石）が目立ちさほど精良とはいえない。焼成はやや不良。明灰色～くすんだ灰色を呈する。内面底部には格子目叩き目文が1部に観察できる。	完形品装飾的直口壺である。
第17図—5	鼎	15.5	12.4	玄室玄門	口縁部～体部沈線までヨコナデ調	遺物取上げ

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
		～15.6		方，東側壁付近	整を施し，沈線より底部にかけては荒いナデ仕上げを行っている。頸部内面にはシボリ痕を残す。体部穿孔はやや右上がり斜方向である。胎土，焼成共に極めて良好で，灰色～青色～明灰色を呈する。	番号(H1)完形品
第17図－6	甕	14.2～14.5	12.8	玄室東奥壁付近	5とほぼ同様。体部沈線は2条で穿孔は急激な右上がり斜方向である。5よりも器高は低い。胎土，焼成共に良好で暗青色～明灰色～灰褐色を呈する。ろくろは時計逆回りである。	遺物取上げ番号(H2)完形品
第18図	横瓶	23.15	10.6(体部巾) 30.8(体部径) 20.4	奥壁付近やや西より	口頸部は短かく外反し，口縁部は肥厚し端部は鋭く内反する。体部は平行叩き目文，内面は青海波叩き目文が施される。体部側面はろくろ回転（時計回り）を利用したカキ目がみられる。反対側面は径8cmの円孔を穿ち，その後円板でふさいでいる。胎土は粗砂（石英・長石）で極めて多く不良，焼成は極めて良好，灰褐色～青色を呈する。	内部より棺釘出土

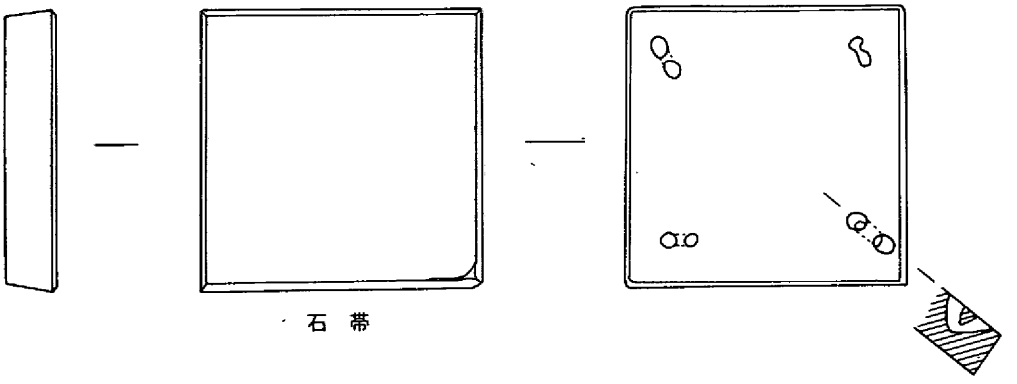
(2) 装身具（第19・20図）（第3表）

石製銙帯（以下石帯と記す）は玄室奥壁側，床面より約30cmの位置で出土している。いわゆる巡方といわれる部分を示しているが，1点のみの出土で革製の帯に装着された状態で埋納されたものでなく，象徴的な副葬品として貴人たる被葬者の傍にそえられたものであろうか。石質は流紋岩で表面は極めて平滑に磨かれ光沢さえ帯びている。やや截頭台形を示し，第20図の状態での計測値は側辺各々3.55cm，上辺3.575cm，下辺3.645cmを測る。裏面の糸を革帯に綴じるための孔は2孔を1対とし，対角線上四隅に位置している。1対2個の小孔は径約2～3mm前後で，斜方向より各々穿ち連絡し，貫通断面はV字型を呈する。

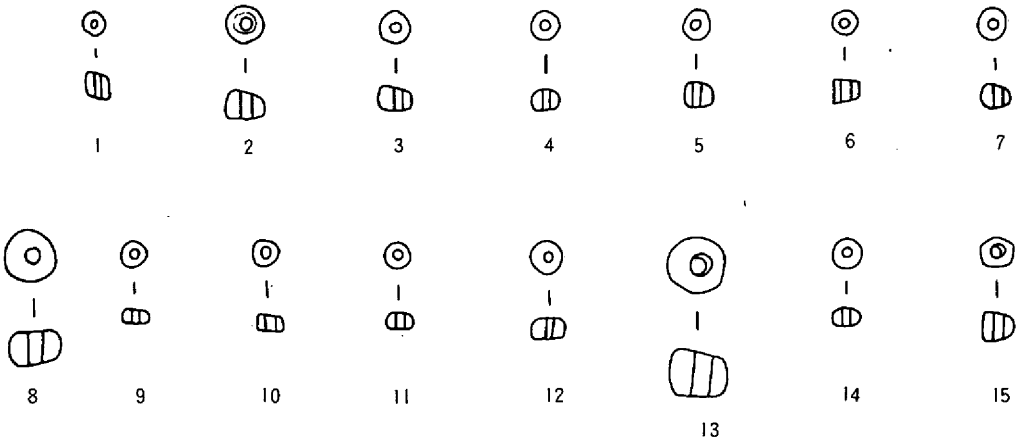
勾玉1・2は奥壁中央部で後述のガラス小玉類と共に出土している。勾玉1は瑪瑙製で，いわゆる赤瑪瑙を用いている。頭部より尾部の長さ約2.23cm，胴部径約0.9cmを測り，孔頸部に両側面より穿



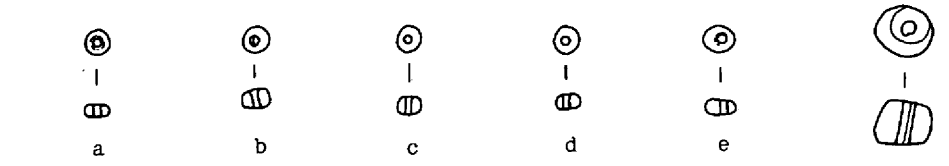
第19図　勾玉・管玉・小玉出土状態平・断面図（$\frac{1}{4}$）

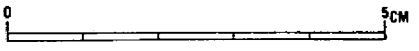


ガラス小玉（第19図）



玄室内排土中表採





第20図　石帯・勾玉・小玉実測図（$\frac{1}{1}$）

第3表 ガラス小玉計測表　　単位：mm　　作成：岡田

項目／番号	径（mm）	孔径（mm）	厚さ（mm）	色彩	備考
1	3.2～3.4	1.1	2.8～3.2	淡青色	いわゆるセルリアン・ブルー
2	5.2	1.6	2.2～3.7	淡青色	
3	4.45	1.2	2.45～3.2	濃青色	いわゆるコバルト・ブルー
4	4.0	1.1	2.65～2.75	淡青色	
5	3.9	1.2～1.4	2.9～3.4	濃青色	
6	3.55～3.6	1.4	2.6～3.15	淡青色	
7	4.1	1.35	2.6～3.1	淡青色	
8	7.0	2.0	3.7～4.5	やや暗い淡青色	やや大形
9	3.7～3.9	1.4	1.6～2.0	濃青色	
10	3:6	1.4	2.1～2.2	淡青色	
11	3.7	1.2	2.0～2.2	濃青色	
12	4.45～4.5	1.2	2.7～2.8	淡青色	
13	6.95～8.0	2.5	5.45～6.4	濃青色	やや大形でいびつ
14	4.0	1.3	2.6	濃青色	
15	4.4	1.6	3.0～3.6	淡青色	
a	3.4～3.45	1.0	1.6	濃青色	以下玄室排土中採集
b	3.9	1.2	2.25～2.45	濃青色	
c	3.4～3.5	1.0	2.45	淡緑色	
d	3.7	1.05	1.9～2.15	濃青色	
e	3.6～4.1	1.0	1.55～2.0	淡青色	
f	5.9～6.2	1.85	4.9	濃青色	

たれ，径1～2㎜を測る。側面の一方はやや扁平で稜線が明瞭であるが，一方は丸味をもって研磨されている。勾玉2は水晶製でやや小形なつくりである。頭部より尾部の長さ約1.98㎝，胴部径0.55㎝を測り，頸部よりやや下った位置の両側面より穿たれた孔径は1.5～2.5㎜を測る。

管玉は碧玉すなわち青瑪瑙製で長さ1.65㎝，径4.45㎝，孔径1.95～2.0㎜を測る。端部の状態は長軸に直角に仕上げられていない。

ガラス小玉はすべてアルカリ石灰ガラス製で濃青色（コバルトブルー）あるいは淡青色を呈する。ただ，第20図ーCは淡緑色を呈し，化学成分のわずかな相違が認められる。

(3) 馬具（第22図1～3）

3点の出土をみ，いずれも奥壁付近で出土している。1は鐙金具で木製輪鐙に伴う金具である。鐙の木製部の上端に装着し力革に連なり，この部分の断面は隅丸長方形を示している。上部力革に連なる部分は4.5㎝，巾0.8㎝を測る。輪鐙に装着される部分は長8.7㎝，巾0.8㎝～最大巾約1.7㎝を測り，

最大巾部分よりやや下った所に釘が遺存している。側面はややいびつで中央部でややふくらみ徐々に巾を狭めつつ尖った下端に至る。やはり側面中央部よりやや下った位置に輪鐙に達する釘がうちこまれる。尖った下端部は屈曲し，この部分も釘と共に輪鐙にうちこまれたことが推定される。側面は上端0.8㎝を測り中央部でややふくらみ，下端屈曲部に至って狭まる。上端よりこの部分まで7.6㎝，最大巾1.6㎝を測る。

2は鉸具で力革と鞍金具とを連ね鐙をつり上げたものと考えられる。各部断面は径約5㎜前後を測り，残存長7.8㎝，上部巾5.2㎜，下長巾3.8㎜を測る。

3は，留金具で2.1×2.3㎝を測る長方形を示す。四隅に頭部径5㎜，身部径1.5～2㎜を測る鋲がうちこまれ，力革などの皮革部分に装飾的に用いられたものであろう。

以上，3点の馬具について述べたが，その他の鉄器の微細な観察にもかかわらず3点以外その存在を認めることができなかった。

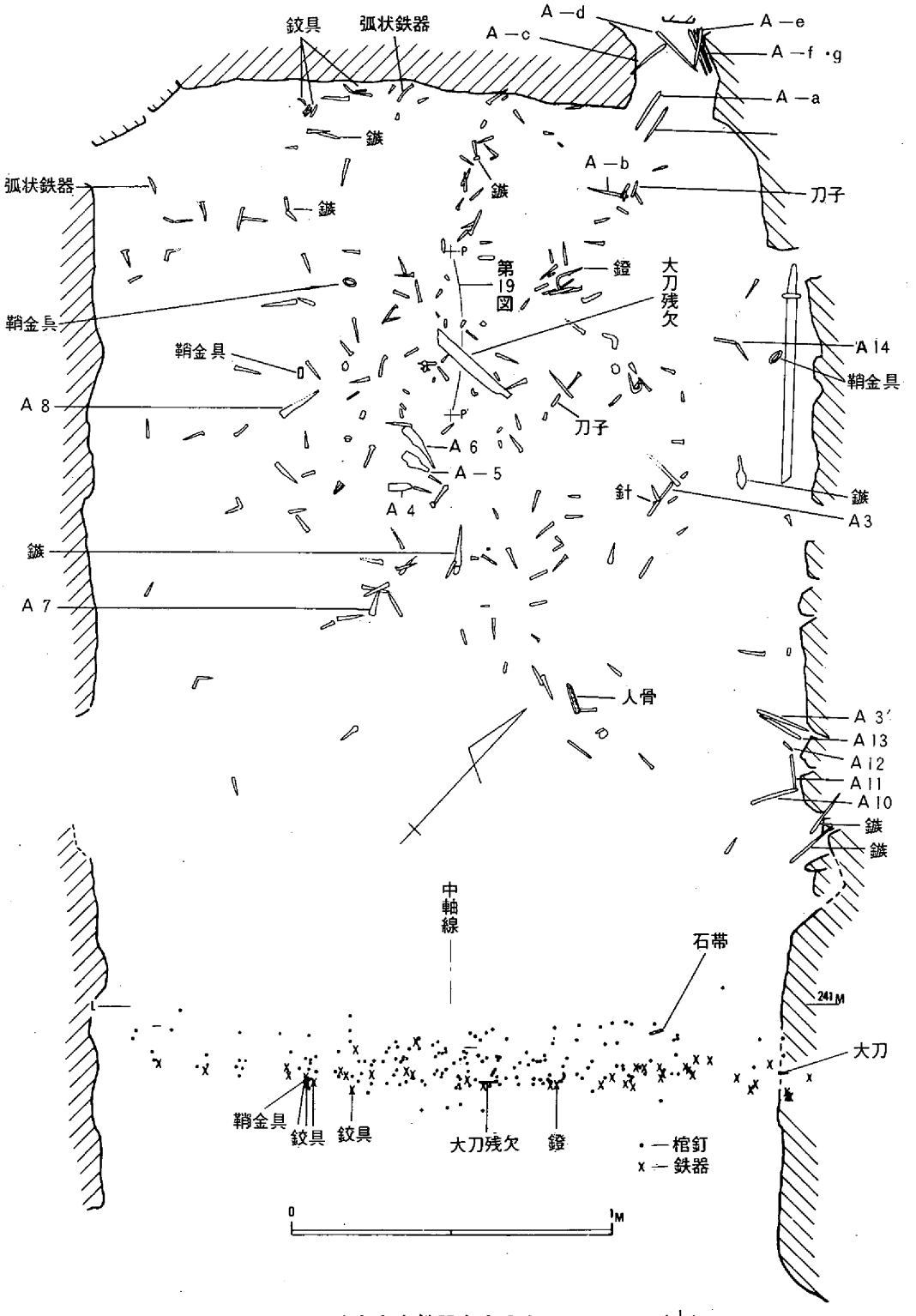
(4) 武器等（第21～23図）

第23図―1・2は大刀・大刀残欠である。1は須恵器盤・台付盤に近接する東側壁奥壁側で切先を開口方に向けて出土したいわゆる直刀である。全長68.7㎝，刀身長57.7㎝，茎長11㎝余を測り，倒卵形の鍔・鏁が残存し，茎部には目釘が残存している。刀身峰から刃部にかけての断面は鋭い三角形を示し，鏁部分で巾3.2㎝，中央部で2.8㎝を測る。切先はいわゆる鰤刃切先様を呈するが一部欠失している。2は，大刀残欠で勾玉・ガラス小玉出土地点床面で出土した。茎部と刀身の一部を残し，残存長30.3㎝，刃部巾2.7㎝を測る。切先は玄室中軸線より西方奥壁に向けて副葬されたものである。残存部より切先方には，鉄片の板状剝片が顕著に出土したが，追葬過程で埋葬に携わる人々の所為によって破損したのであろうか。

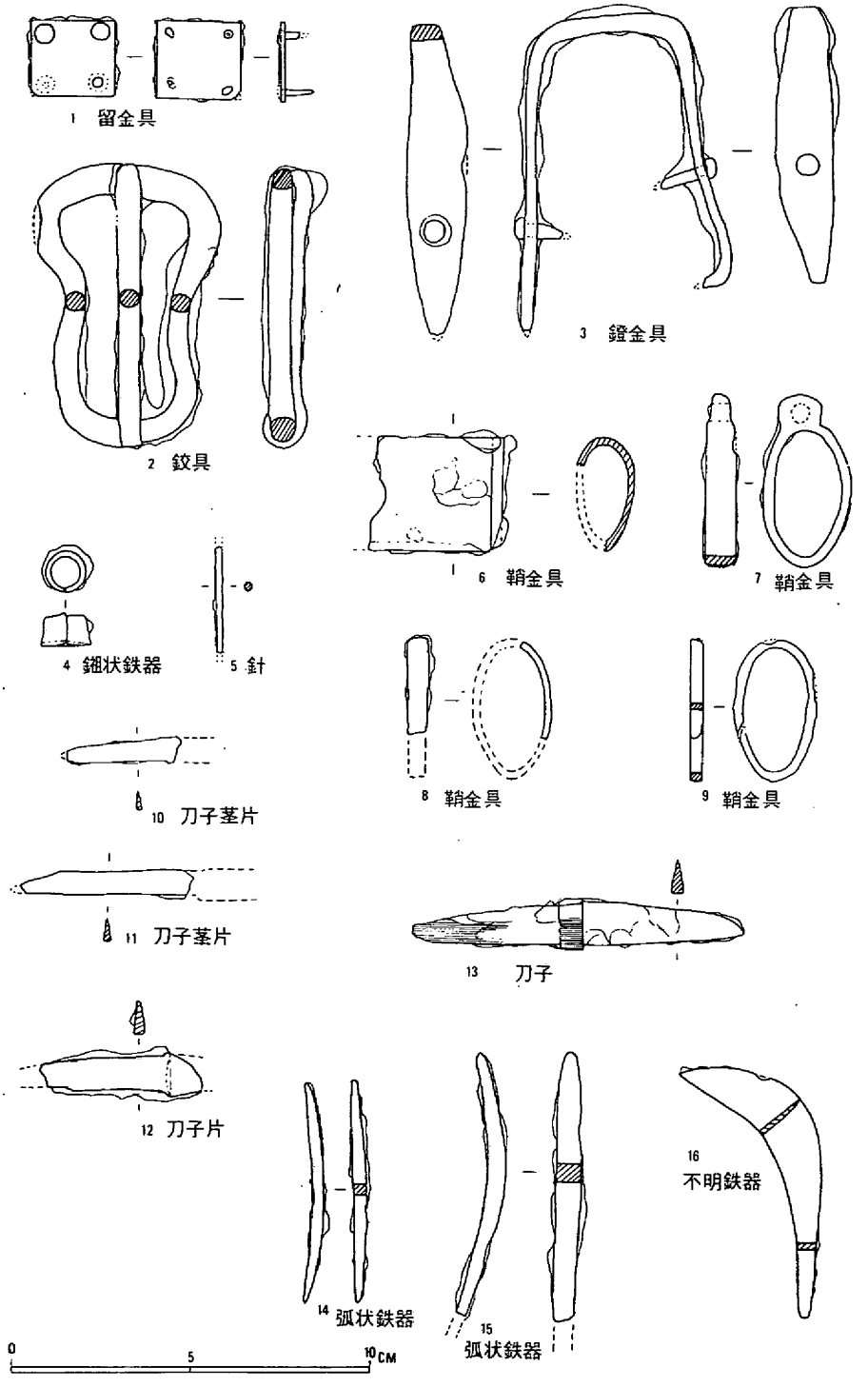
第22図―6～9は，以上の大刀の鞘金具である。6は鞘口近くの金具で内法に木質が遺存する。木質と金具の間には漆膜が遺存し，鞘は漆塗りであったことがわかる。断面は倒卵形を示し一部欠失する。7は，いわゆる足金物で大刀をつり下げるための孔が一部に造られている。断面は，倒卵形を示すが，左右対称ではなく片面がややふくらみ，大刀をつり下げる際の正面を示している。6と同様，木質，漆膜が遺存する。8は，責金具で破片となっている。復元するとやはり断面倒卵形を示す。9は，8と同様責金具で巾3.5㎜を測る薄手な造りで下方の一部に継ぎ目がみられ，断面倒卵形を示す。6・8は大刀残欠付近，7は大刀に近接して出土していることから各々の大刀に伴うものであることがわかり，大刀は抜身の状態で，鞘から大刀を抜き，傍に近接して置かれたことが推定される。8は出土地点不明である。

第22図―10～13は刀子残欠・刀子で玄室内床面でいずれも出土している。10・11は茎片，12は茎と関部の一部を残す。13は，大刀残欠付近で出土し，茎部分に木質を残す。残存長9.85㎝，茎長5.35㎝，刃部長4.5㎝を測る。刃部巾は関部に近い位置で1.2㎝，刀身中央部で1㎝を測る。刃部断面は二等辺三角形を示す。

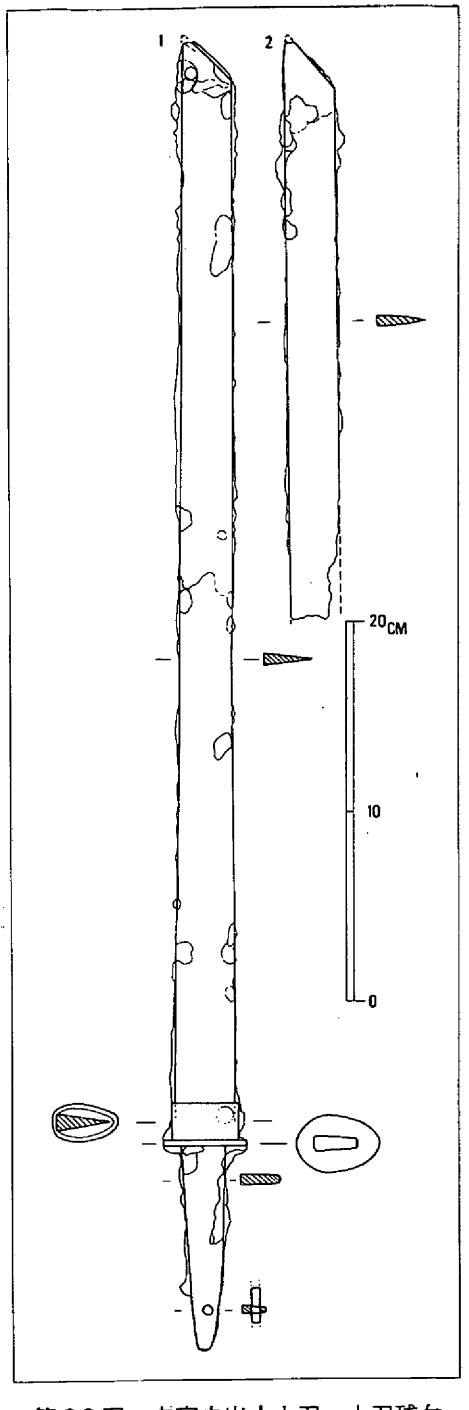
第24～26図は鉄鏃である。大別して方頭広根斧箭式・圭頭広根斧箭式・棘箧被ぎ柳葉式の3型式に分類することができる。方頭広根斧箭式鏃は8点出土し玄室中央部，勾玉・ガラス小玉出土地点付近



第21図　1号墳玄室内鉄器出土分布平・断面図（$\frac{1}{20}$）



第22図　玄室内出土鉄器実測図（$\frac{1}{2}$）



第23図　玄室内出土大刀・大刀残欠実測図（$\frac{1}{4}$）

でまとまって出土しており，うち数本には矢柄が遺存する。圭頭広根斧箭式鏃は大刀付近の須恵器盤の下で出土したもの1点のみである。出土位置は大刀の切先と先端方向はほぼ平行し，玄室開口方を向く。棘篦被ぎ柳葉式鏃の出土分布は玄室内床面の広範囲にわたるが，東側壁開口方須恵器甕付近で7本，奥壁東凹部で10本余，圭頭広根式鏃付近で数点出土し実測可能なもの計19点出土している。いずれも長い篦被ぎをもち茎部との境に棘をもつ。棘部まで矢柄が插入され，その上を桜樹皮を巻き漆で固着する状態が一部の鏃から看取することができる。広義の柳葉式に分類できるが，鎬造りが明瞭なものもあり端刃棘篦被ぎ柳葉式と細分した。大半のものは，片丸造りであるが銹化状態が進行している鏃については，詳細な観察はできなかった。また，先端部が圭頭様を呈するものもみられるが折損によるものか否か明らかではない。

第22図―4は用途不明鍬状鉄器で径1.1～1.4cm，高さ0.9cm，厚さ1.5mmの薄手の鉄片を輪状に折り曲げたものである。下部はやや裾開きとなり，矢柄に付属する金具と推察したい。

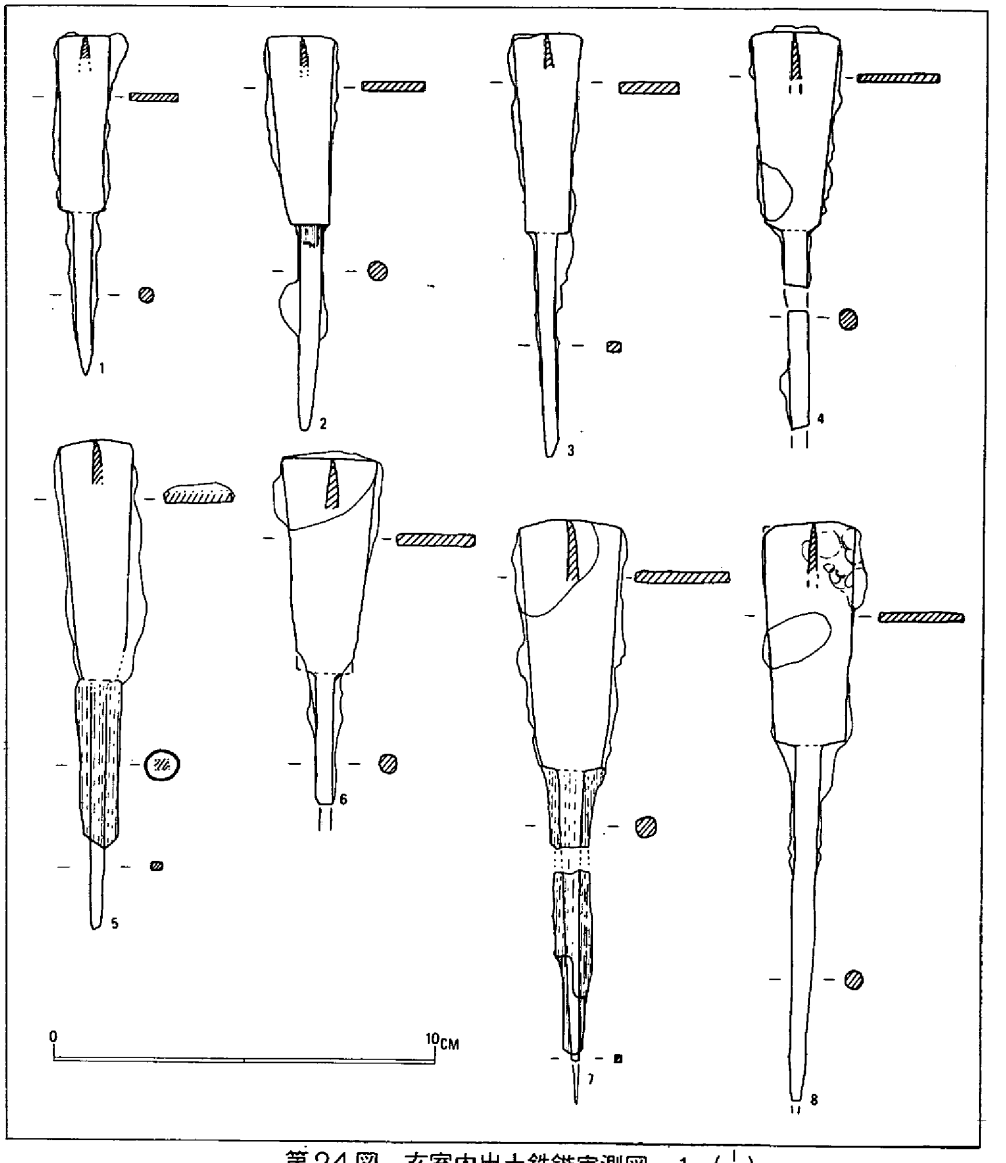
第24図―5は針で残存長2.95cm，径2mmを測り，須恵器盤の南西方約50cmの位置で出土している。出土例にさほど恵まれない貴重な鉄器である。

第24図―14・15は用途不明弧状鉄器でいずれも断面長方形を示し，端部はやや狭まり鋭利な状態を観察することができる。木棺の蓋に用いる板材の接合継ぎ合せに用いた釘の可能性も考えられる。

第24図―16は後述の棺釘Ⅱ式に伴うもので弧状を描く長刀（薙刀）の刃部形に似る。弧の外面は刃状に鋭く柄（茎）部分は断面長方形を示す。残存長6.9cm，刃部最大巾1.5cmを測る。

(5)　棺具（第24～32図）（第5―6表）

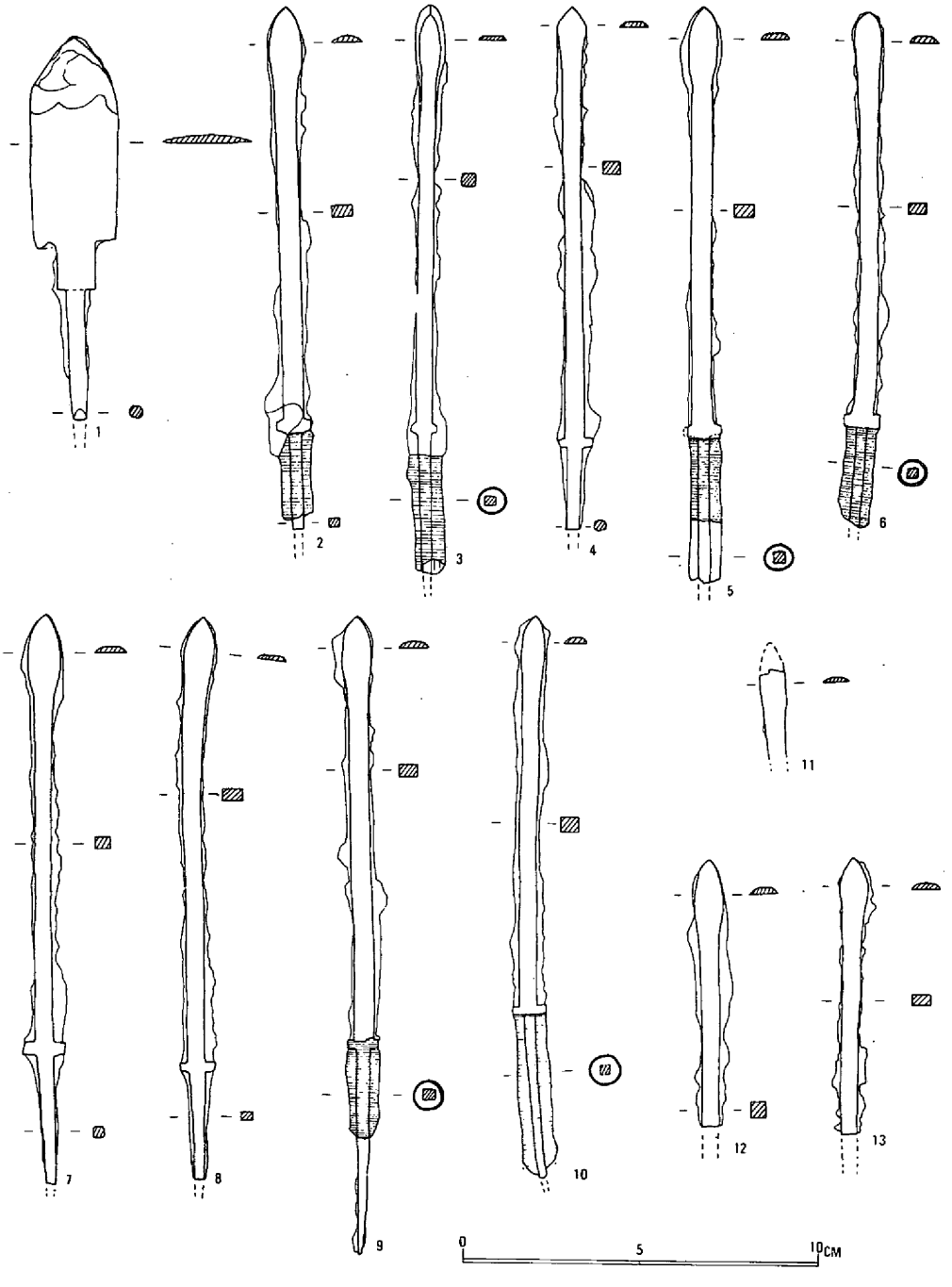
すべて鉄製棺釘で床面で出土する須恵器等と同様に古墳本来の木棺埋納に用いられたものをⅠ式，床



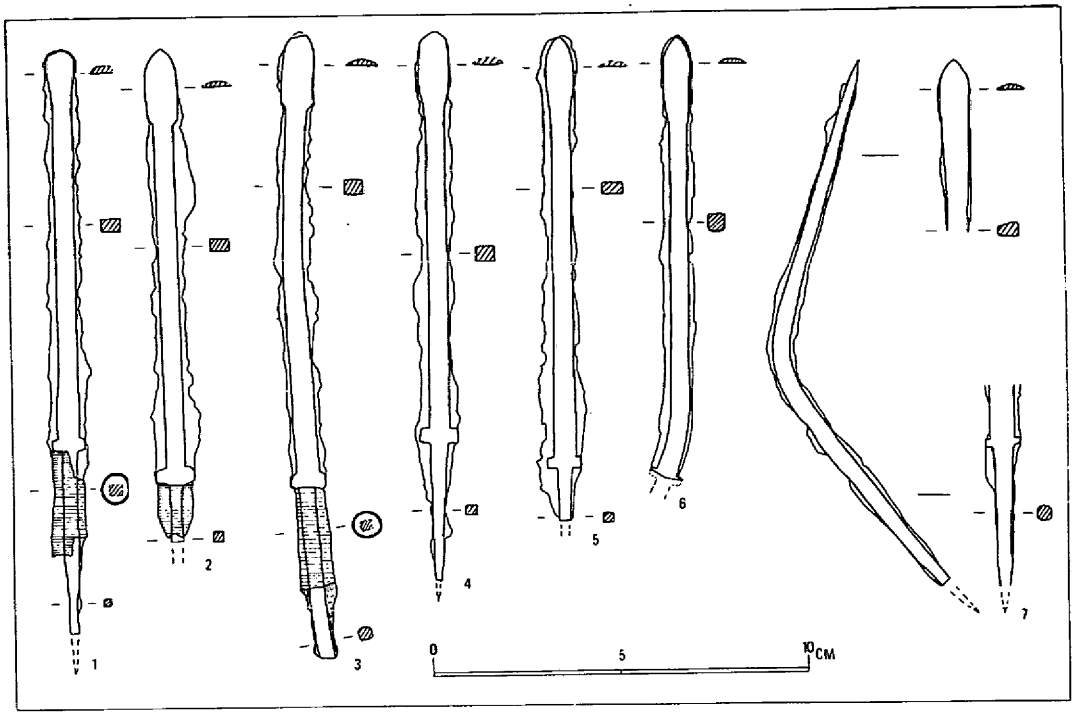
第24図　玄室内出土鉄鏃実測図—1 (1/2)

面より1m前後から天井石下方で出土した中世の棺釘をⅡ式とする。

Ⅰ式は出土総数188点を数え，玄室内床面のほぼ全面から出土しているが，密度の高い分布を示すのは奥壁より開口方2.5mの範囲で，西側壁付近は比較的分布密度が低い。ほとんどの棺釘には木質の一部が遺存し，木棺を形づくる板材の組み合せに用いられたことを示している。いずれも頭部は鈎形に折り曲げられ木棺に打ちこまれた状態が観察でき，平面形は扁平で，いびつな方形・円形を呈している。棺釘計測表にみられる大小分布は木棺底板・蓋・木口部分と多様な用い方によって区別されたかと思われるが追葬過程での型式差を考慮し，明確な判断・細分は不可能であった。木棺の腐朽と共に脱落し，更に追葬木棺の搬入によって外的撹乱による原位置移動は免れ得なかったであろう。本報文に検討結果を記すことができなかった点は，個々の棺釘の計測値と，出土レベル・位置の整理で



第25図　玄室内出土鉄鏃実測図―2（$\frac{1}{2}$）



第26図　玄室内出土鉄鏃実測図－3（$\frac{1}{2}$）

ある。今後の研究課題として保留しておく。

(6)　その他（人骨・漆膜付木片）

玄室開口方床面よりやや上面で人骨1点が出土している。風化が甚しくゼラチンで取上げたが，おそらく四肢骨の一部と思われ，直線的な部位であることが観察できる。

漆膜および漆膜の付着した木片は奥壁方床面に多数の残片をみた。奥壁東側壁側では床面が湿潤でこれらの遺存を助長している。木質の多くは失っているが，木棺ではなく特殊な木製容器，たとえば靫・胡禄などの残片ではないかと推定される。

(7)　中世遺物（第33図）

玄室内に古墳時代の遺体埋納が中断して後，中世に至るまで利用されることはなかった。すでに土砂が流入し，床面より約1m前後のレベルに達した地点で，棺釘Ⅱ式・土師器銭貨が出土した。発掘過程では床面の精査以前に出土したものである。

棺釘Ⅱ式は総数25点出土しており，頭部は平たく鈎形に折り曲げ，身部は断面方形を示す。出土数量からも多次にわたっての木棺埋納は行われなかったとみるべきであろう。

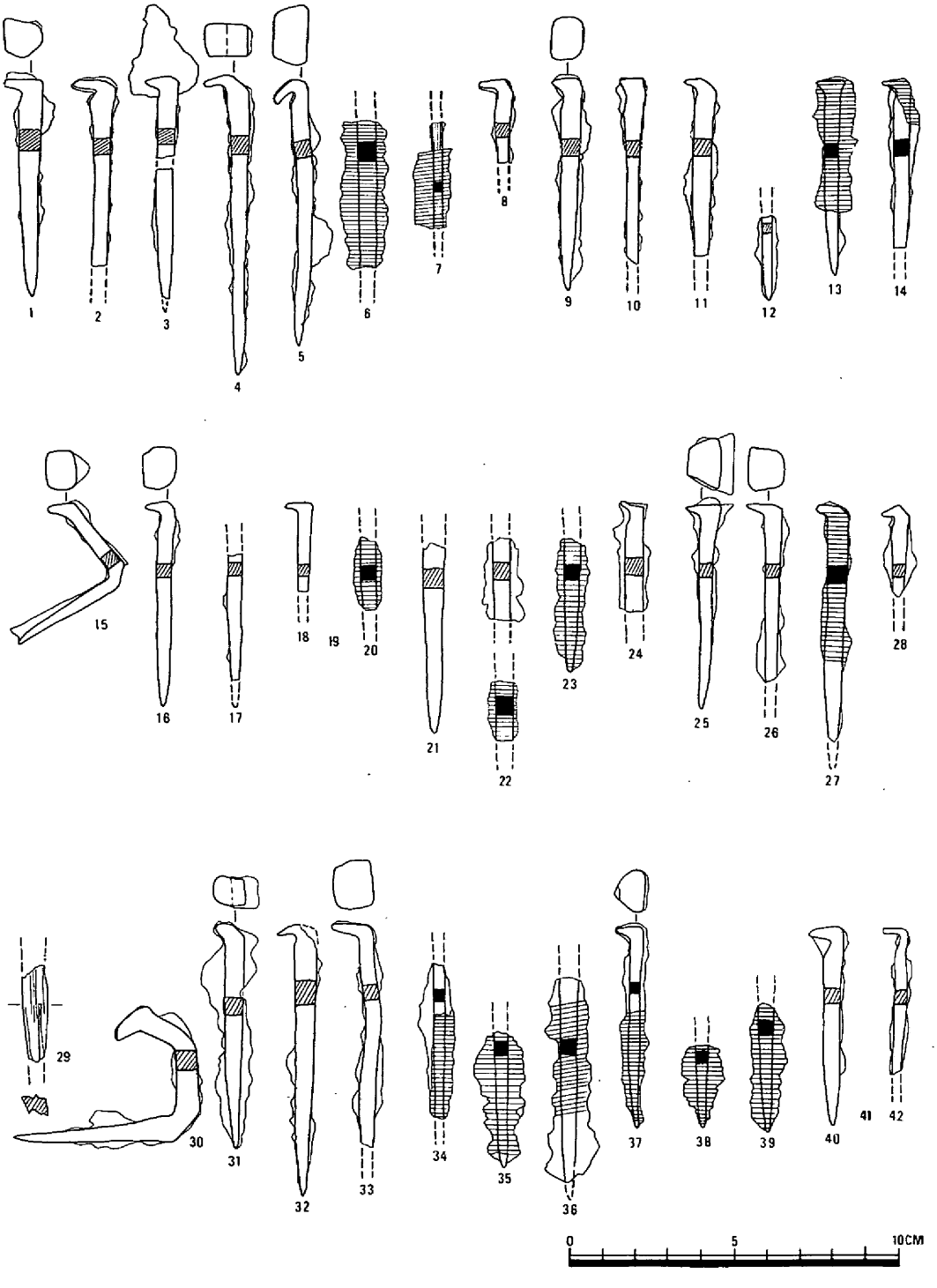
土師器はいわゆる燈明皿で残存底径約6cm，白っぽい膚色を呈し，底部はヘラオコシである。

銭貨は宋銭2点が出土している。第33図－4は嘉祐元宝で1056～63年の鋳造になるもので，5は1086年初鋳の元祐通宝である。3は近世備前焼燈明皿破片で，玄室内に流入したものである。同様な燈明皿は1号墳南西方斜面で出土している。また，墳丘上でも寛永通宝2枚が出土していることを付

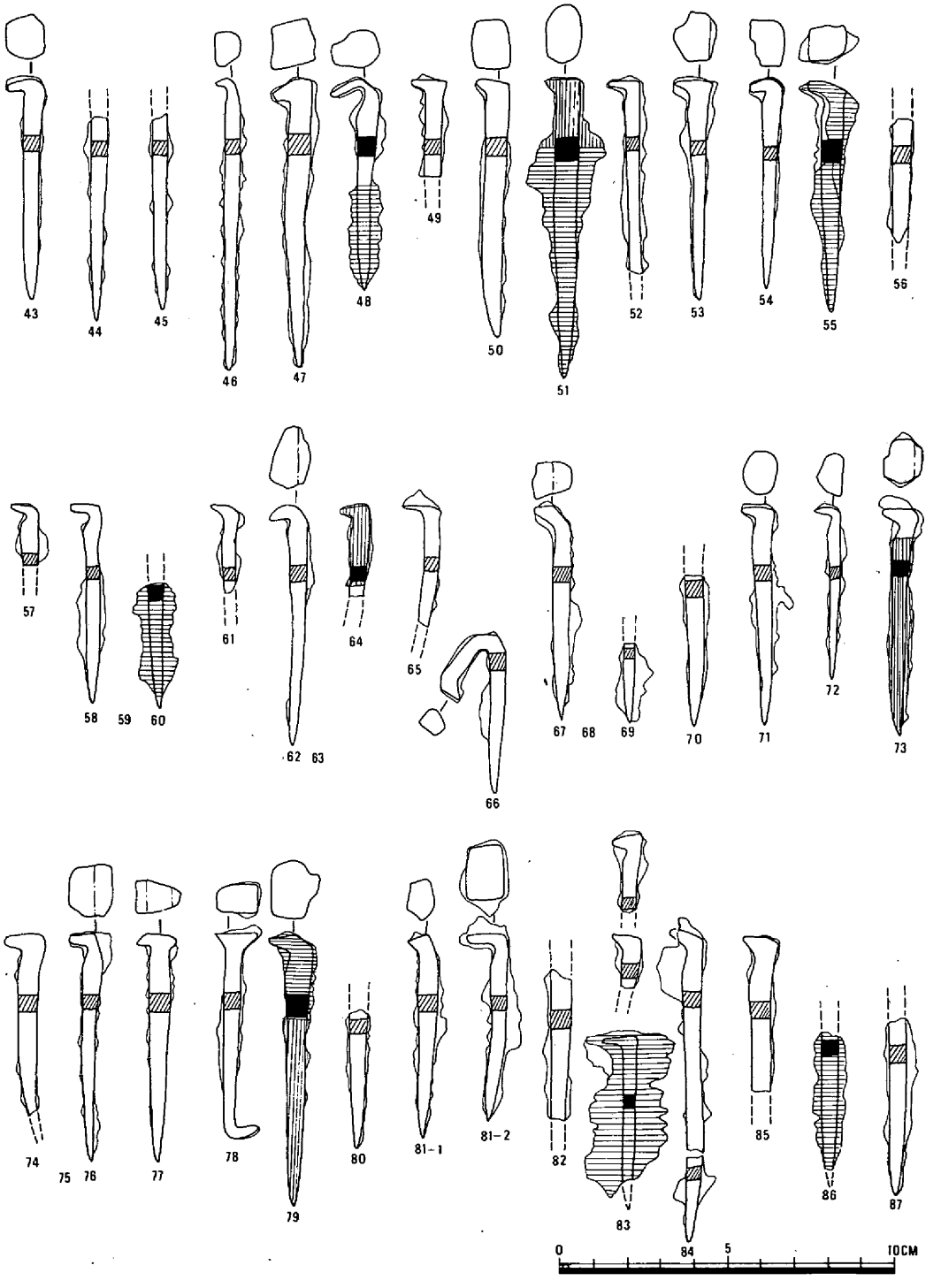
第4表　鉄鏃分類計測表

単位：cm　　作成：岡田

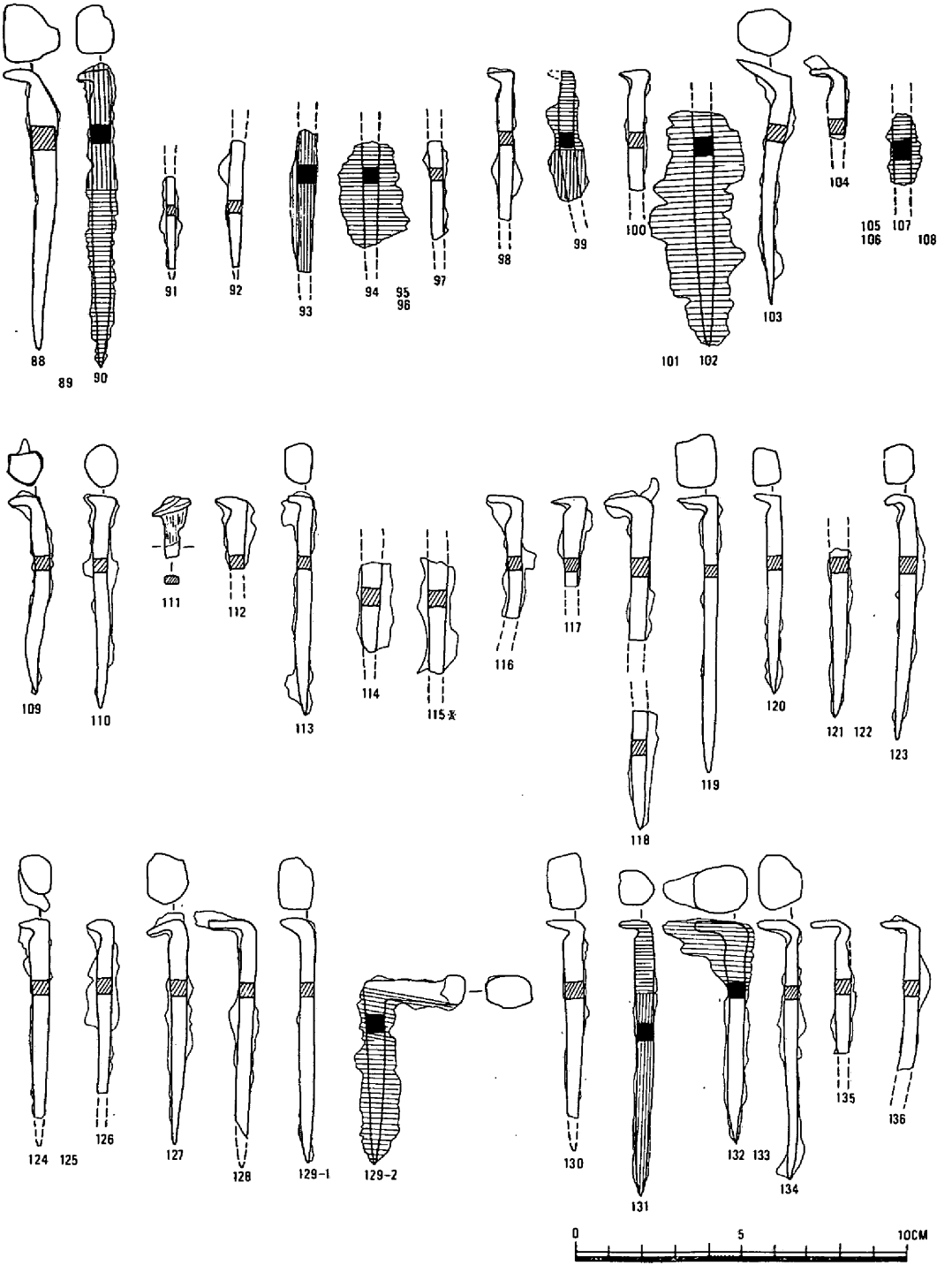
No.	掲載図	取上げ番号	型式名	残存長(cm)	備考
1	第24図－1		方頭広根斧箭式	9.1	棺釘番号137・63接合
2	第24図－2		方頭広根斧箭式	10.5	75.10.14注記。矢柄木質残存
3	第24図－3	A－9	方頭広根斧箭式	11.3	
4	第24図－4	A－8	方頭広根斧箭式	約10.6	
5	第24図－5	A－4	方頭広根斧箭式	13.0	先端はやや円頭になる。矢柄木質残存。
6	第24図－6	A－7	方頭広根斧箭式	9.2	
7	第24図－7	A－5	方頭広根斧箭式	14.4	先端はやや円頭になる。矢柄木質残存。
8	第24図－8	A－6	方頭広根斧箭式	15.4	茎まで残存。
9	第25図－1		圭頭広根式	10.7	盤の下より出土。五角形式ともいわれるもので短い篦被ぎがみられる。
10	第26図－2	A－a	棘篦被ぎ柳葉式	14.5	片丸刃．矢柄残存，その上に桜の樹皮を漆で巻く。
11	第25図－3	A－b	端刃棘篦被ぎ柳葉式	15.35	鑿箭式ともいうべき鏑がみられる。棺釘No.195と接合。矢柄残存，桜樹皮を漆で巻く。
12	第25図－4	A－c	棘篦被ぎ柳葉式	14.5	先端は圭頭様。
13	第25図－5	A－d	棘篦被ぎ柳葉式	15.95	片丸造。矢柄残存，桜樹披を漆で巻く。
14	第25図－6	A－e	棘篦被ぎ柳葉式	14.3	矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。
15	第25図－7	A－f	棘篦被ぎ柳葉式	15.8	
16	第25図－8	A－g	棘篦被ぎ柳葉式	15.6	やや先端がひずむ。
17	第25図－9	197	棘篦被ぎ柳葉式	17.7	完形。棘部分より矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。杯13に付着。
18	第25図－10	142	棘篦被ぎ柳葉式	15.6	棘部分より矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。
19	第25図－11	114	棘篦被ぎ柳葉式	3.2	
20	第25図－12	163	棘篦被ぎ柳葉式	7.4	
21	第25図－13		棘篦被ぎ柳葉式	7.7	玄室床面柱穴No.2より出土
22	第26図－1	143	棘篦被ぎ柳葉式	15.4	先端は圭頭様，欠失か。矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。
23	第26図－2	A－3	棘篦被ぎ柳葉式	13.0	矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。
24	第26図－3	A－3	棘篦被ぎ柳葉式	16.4	矢柄残存。桜樹皮を漆で巻く。
25	第26図－4	A－13	棘篦被ぎ柳葉式	14.5	先端は圭頭様。
26	第26図－5	A－11	棘篦被ぎ柳葉式	12.75	
27	第26図－6	A－10	棘篦被ぎ柳葉式	12.2	棘部より茎部を欠く。
28	第26図－7	A－14	棘篦被ぎ柳葉式	約15.7	篦被ぎ中央部より曲がる。完全に折損していない。



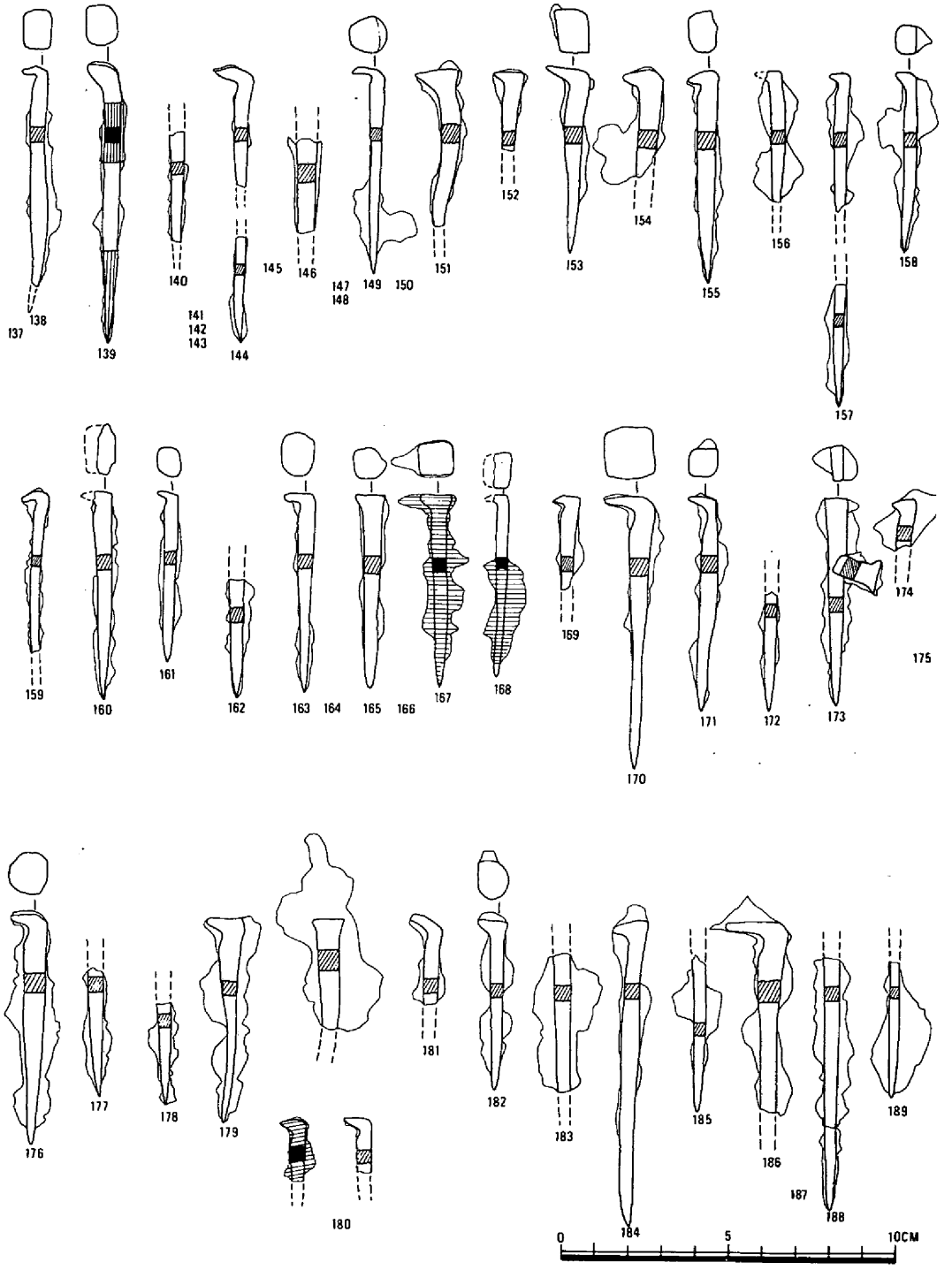
第27図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図―1 (1/2)



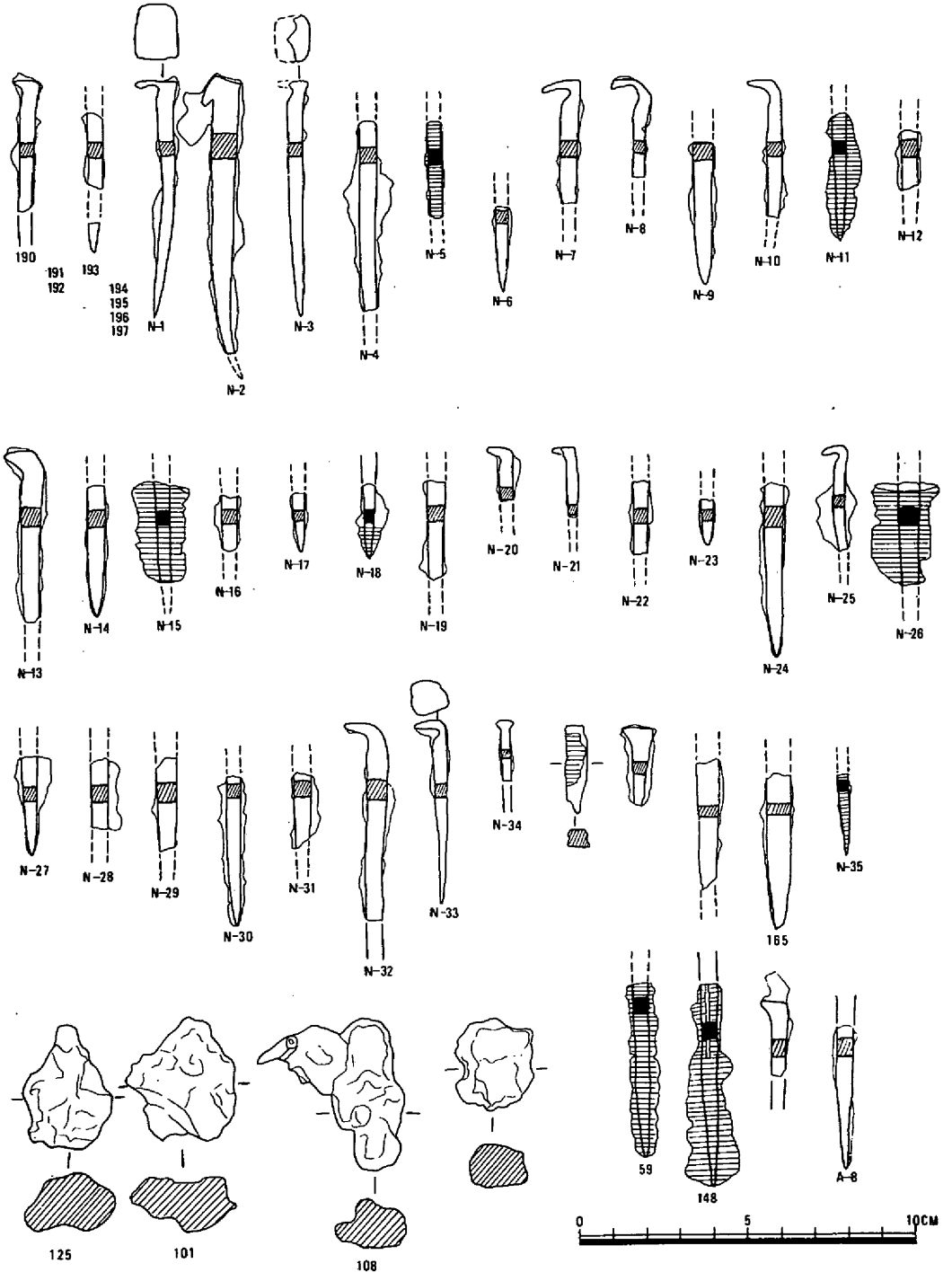
第28図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図―2（$\frac{1}{2}$）



第29図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図―3（$\frac{1}{2}$）



第30図　玄室内出土棺釘Ⅰ式実測図—4（$\frac{1}{2}$）

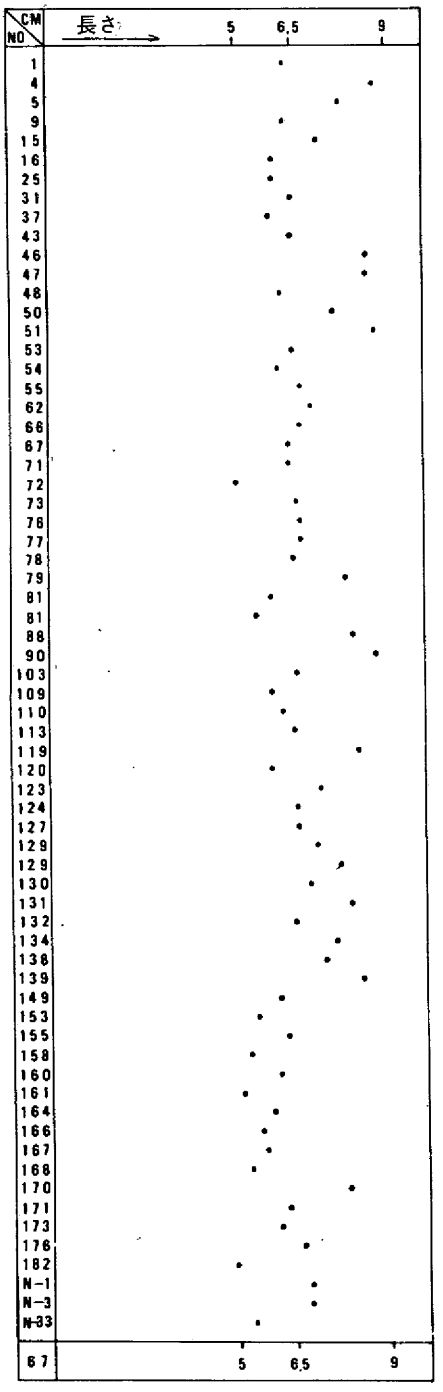


第31図　玄室内出土棺釘Ⅰ式・不明鉄塊実測図（$\frac{1}{2}$）

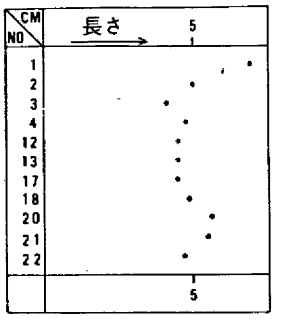
第5表　**1号墳出土棺釘Ⅰ式一覧表**（○完形・△欠損・×欠番あるいは接合）（単位　cm）作成：浅倉

No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ
1	○	6.3	34	△		67	○	6.4	99	△		131	○	8.0	164	○	5.9	197	鉄鏃	
2	△		35	△		68	×	接合	100	△		132	○	6.5	165	△		N 1	○	6.9
3	△		36	△		69	△		101	鉄器		133	不明	鉄器	166	○	6.6	N 2	△	
4	○	8.7	37	○	6.9	70	△		102	△		134	○	7.6	167	○	5.7	N 3	○	
5	○	7.8	38	△		71	○	6.4	103	○	6.6	135	△		168	○	5.3	N 4	△	
6	×	接合	39	△		72	○	5.0	104	△		136	△		169	△		N 5	△	
7	×	接合	40	△		73	○	6.6	105	×	接合	137	鉄鏃		170	○	7.9	N 6	△	
8	△		41	不明	鉄器	74	△		106	＝		138	○	7.3	171	○	6.3	N 7	△	
9	○	6.3	42	△		75	鉄鏃		107	△		139	○	8.3	172	△		N 8	△	
10	△		43	○	6.5	76	○	6.7	108	不明	鉄器	140	△		173	○	6.1	N 9	△	
11	△		44	△		77	○	6.7	109	鉄器	5.9	141	不明	鉄器	174	△		N10	△	
12	△		45	△		78	○	6.5	110	○	6.2	142	鉄鏃		175	＝	149	N11	△	
13	△		46	○	8.6	79	○	7.9	111	○		143	鉄鏃		176	○	6.7	N12	△	
14	△		47	○	8.5	80	△		112	△		144	△		177	△		N13	△	
15	○	7.2	48	○	6.2	81	○	5.9	113	△	6.5	145	刀子	?	178	△		N14	△	
16	○	6.0	49	△		81	○	5.5	114	○		146	△		179	△		N15	△	
17	△		50	○	7.6	82	△		115	鉄鏃		147	鉄器		180	△		N16	△	
18	△		51	○	8.7	83	△		116	鉄鏃		148	△		181	△		N17	△	
19	刀子		52	△		84	△		117	△		149	○	6.1	182	○	4.9	N18	△	
20	△		53	○	6.6	85	△		118	△		150	刀子	?	183	△		N19	△	
21	△		54	○	6.1	86	△		119	△	8.2	151	△		184	△		N20		
22	△		55	○	6.7	87	△		120	○	5.9	152	△		185	△		～	△	
23	△		56	△		88	○	8.1	121	○		153	○	5.5	186	△		N32		
24	△		57	△		89	×	接合	122	△	接合	154	△		187	馬具	6.9	N33	○	5.4
25	○	6.0	58	△		90	○	8.7	123	×	7.2	155	○	6.3	188	△		N34	△	
26	△		59	△		91	△		124	○	6.6	156	△		189	△		N35	△	
27	△		60	△		92	△		125	○		157	△		190	△				
28	△		61	△		93	△		126	鉄器		158	○	5.3	191	馬具				
29	△		62	○	7.0	94	△		127	△	6.6	159	△		192	馬具				
30	△		63	＝	137	95	×	接合	128	○		160	○	6.1	193	△				
31	○	6.5	64	△		96	×	接合	129	△	7.2	161	○	6.1	194	馬具				
32	△		65	△		97	△		129	○	7.7	162	△		195	鉄鏃				
33	△		66	○	6.7	98	△		130	○	6.9	163	鉄鏃		196	刀子				

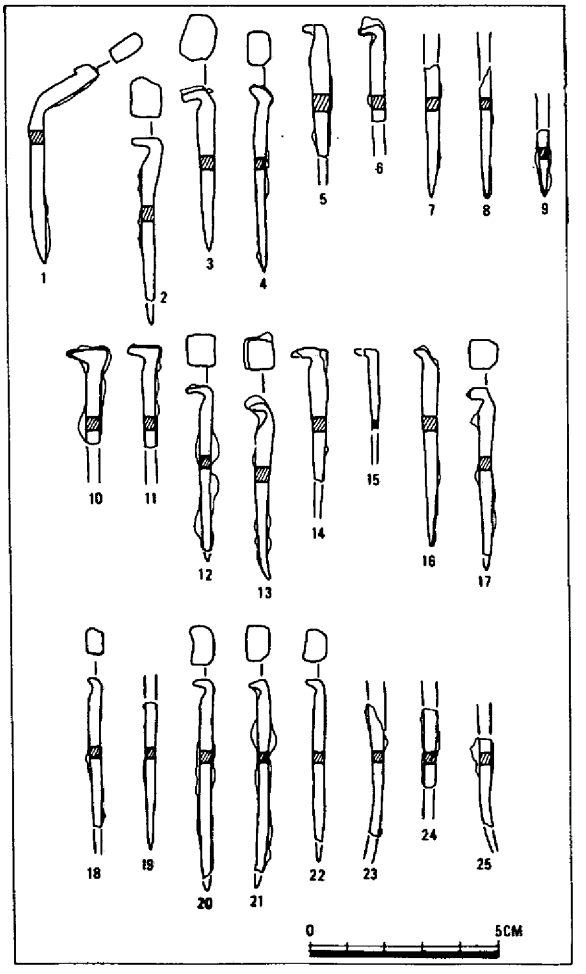
合　計　232
釘以外　—23
欠　番　—11
棺　釘—188本
完　形　—67本
平均長—6.5cm



第 6 表　棺釘Ⅰ式完形品計測表



第8表 棺釘Ⅱ式完形品計測表

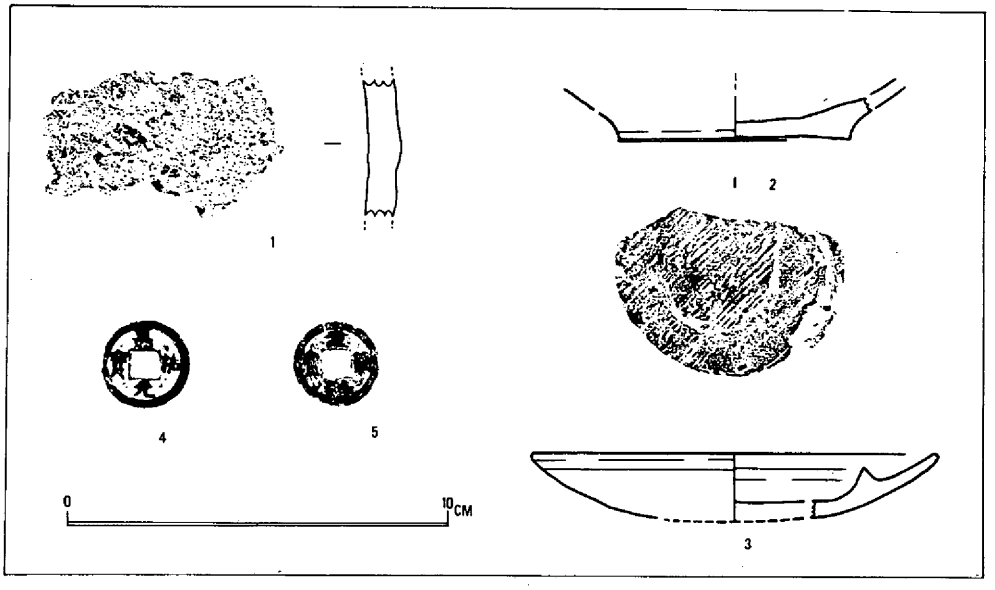


第32図　玄室内出土棺釘Ⅱ式実測図($\frac{1}{2}$)

第7表　1号墳出土棺釘Ⅱ式一覧表　（○完形・△欠損・単位：cm）　作成：浅倉

No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ	No.		長さ
1	○	6.5	2	○	5.0	3	○	4.3	4	○	4.8	5	△		6	△		7	△	
8	△		9	△		10	△		11	△		12	○	4.6	13	○	4.6	14	△	
15	△		16	△		17	○	4.6	18	○	4.9	19	△		20	○	5.5	21	○	5.4
22	○	4.8	23	△		24	△		25	△										

※合計25本・完形11本・平均長5.5cm



第33図　1号墳玄室掘り方埋土出土縄文式土器・玄室内出土銭貨・土師器（$\frac{1}{2}$）

記しておく。

小結

以上1号墳の概要について述べた。古墳構造については，この地域の後期古墳の中では比較的規模が大きく，墳形が方形を呈すること，3段の列石をめぐらすことなどを含めれば特異な様相を看取することができる。近隣の後期古墳の中でも方墳の例をみず，出雲地方に盛行する方墳とも趣を異にするものである。石室の規模も，破壊された部分の規模が明らかではないが，築造当初は現存長3.5mより更に数m長く5mを越える規模をもっていたことが推定される。出土遺物は須恵器の出土が顕著で，年代比定，すなわち古墳築造・初期埋葬から廃絶期の時期的巾を示している。築造・初期埋葬は6世紀後半～末期と考えられ，最終埋葬すなわち玄室の死者の奥津城としての性格を失った時期は7世紀中葉前後～後半に比定できる。

第3章 2号墳の調査

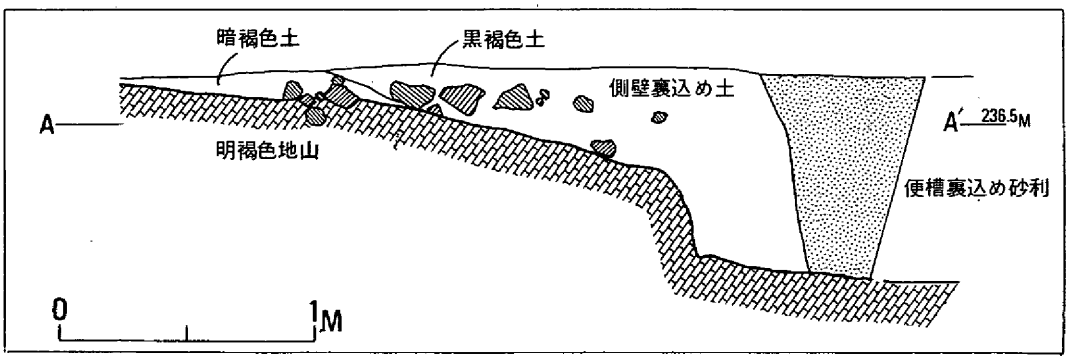
第1節 古墳の構造

2号墳はグリッド・トレンチ調査を実施中，偶然発見されたもので当初よりその存在はおろか，地域的伝承も「新見市史」にもその記載はなく，調査担当者はその存在は全く認識していなかった。2号墳の発見によって「横見古墳群」と改称し，発掘調査期間の延長が実施され，1号墳の調査と平行して行なうこととなった。

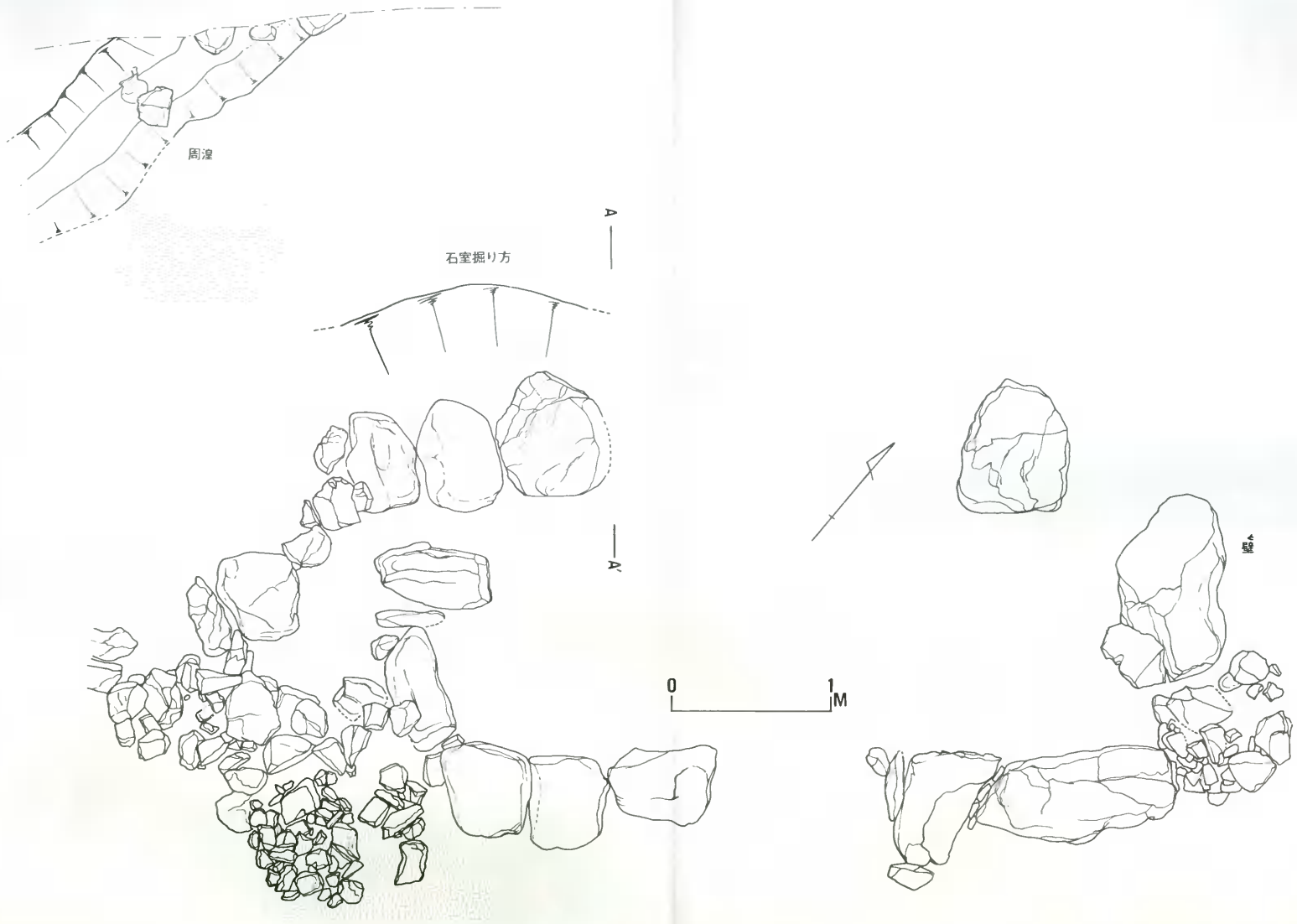
墳丘および石室の大半は，市営住宅建設以前，古くより破壊されており周湟の一部・玄室第一段の側壁基底石を残すにすぎない。石材は一部抜き取られ，奥壁石の一部と推定する石材は人為的な破砕を受けた状態で検出した。玄室中央部には市営住宅付設のコンクリート便槽が深く掘り込まれ，除去を試みたが果たせず，住宅の基礎を形成するコンクリート壁もすべて除去することができず，周辺の詳細な調査を行うことができなかった。

第2節 内部構造

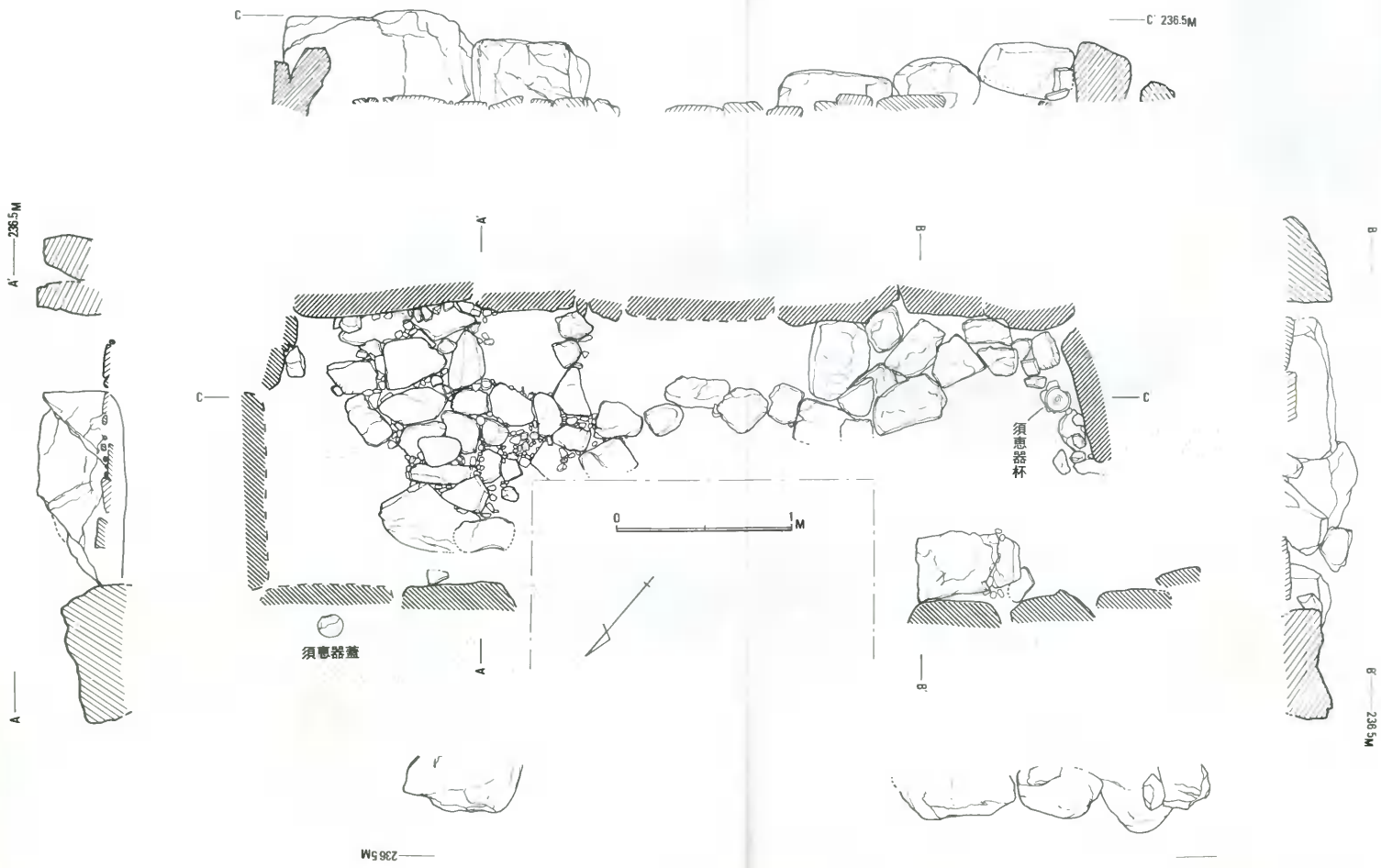
現存する石室は主軸を約N50°Eを測る横穴式石室で，花崗岩の均質な石材横口を玄室内面に向け据えている。奥壁とみられる石は，破損しているが巾約1mを測り，他の側壁に用いられている石も50cm～1m前後の花崗岩を用いている。玄室開口方と思われる南西方には袖状に約35×70cmの石が置かれ，北西側壁は更に曲折して南方にのび羨道部をなしている。玄室の上部構造が残存せず，復元推定は困難であるが，片袖式の横穴式石室であった可能性が考えられる。北西側壁が曲折して南に約1.2mの地点に二人持ち大，人頭大の石が集積し開口部閉塞石と考えられる。以上の大要をもとに計測値



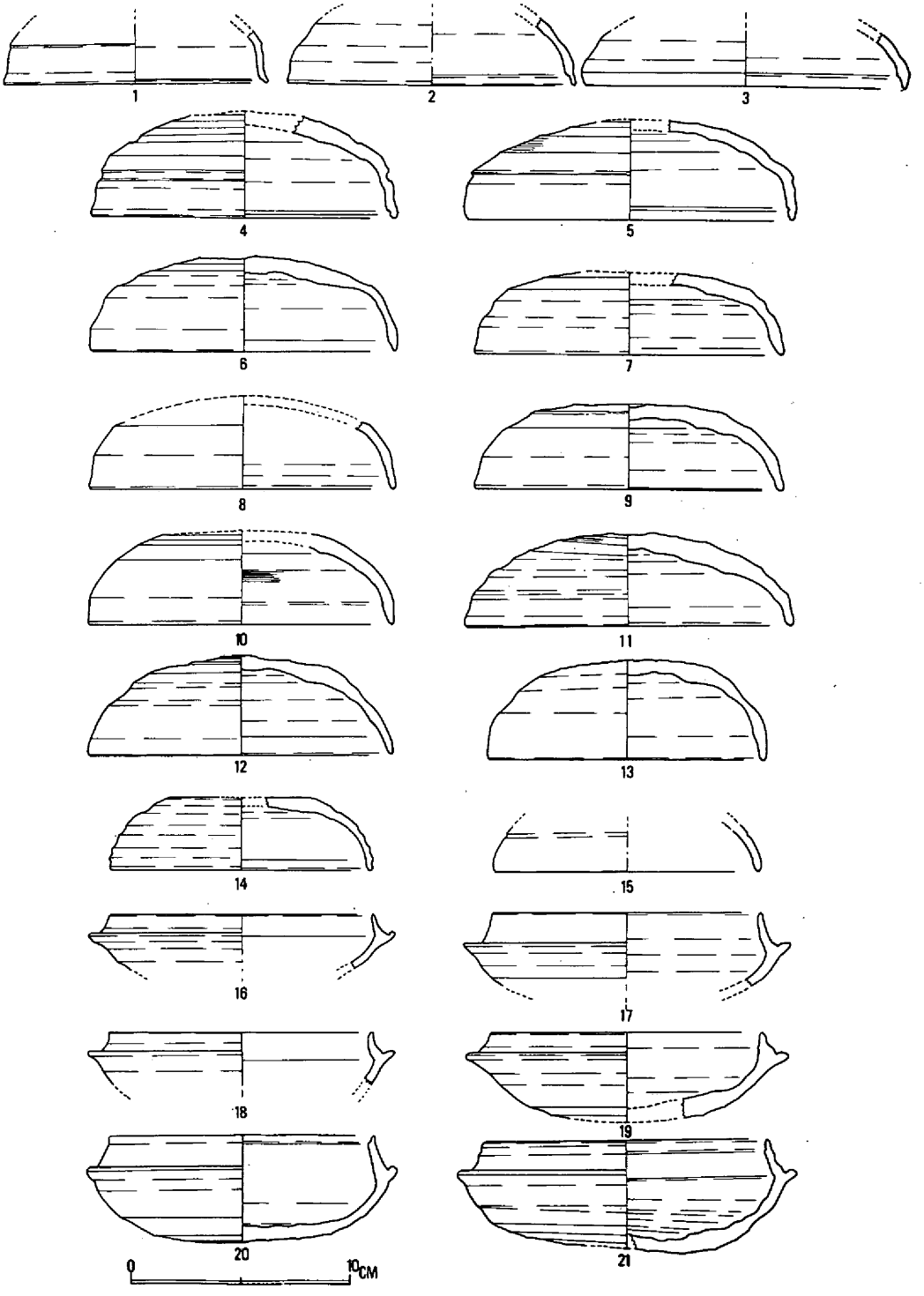
第34図 2号墳石室掘り方土層断面図（$\frac{1}{30}$）



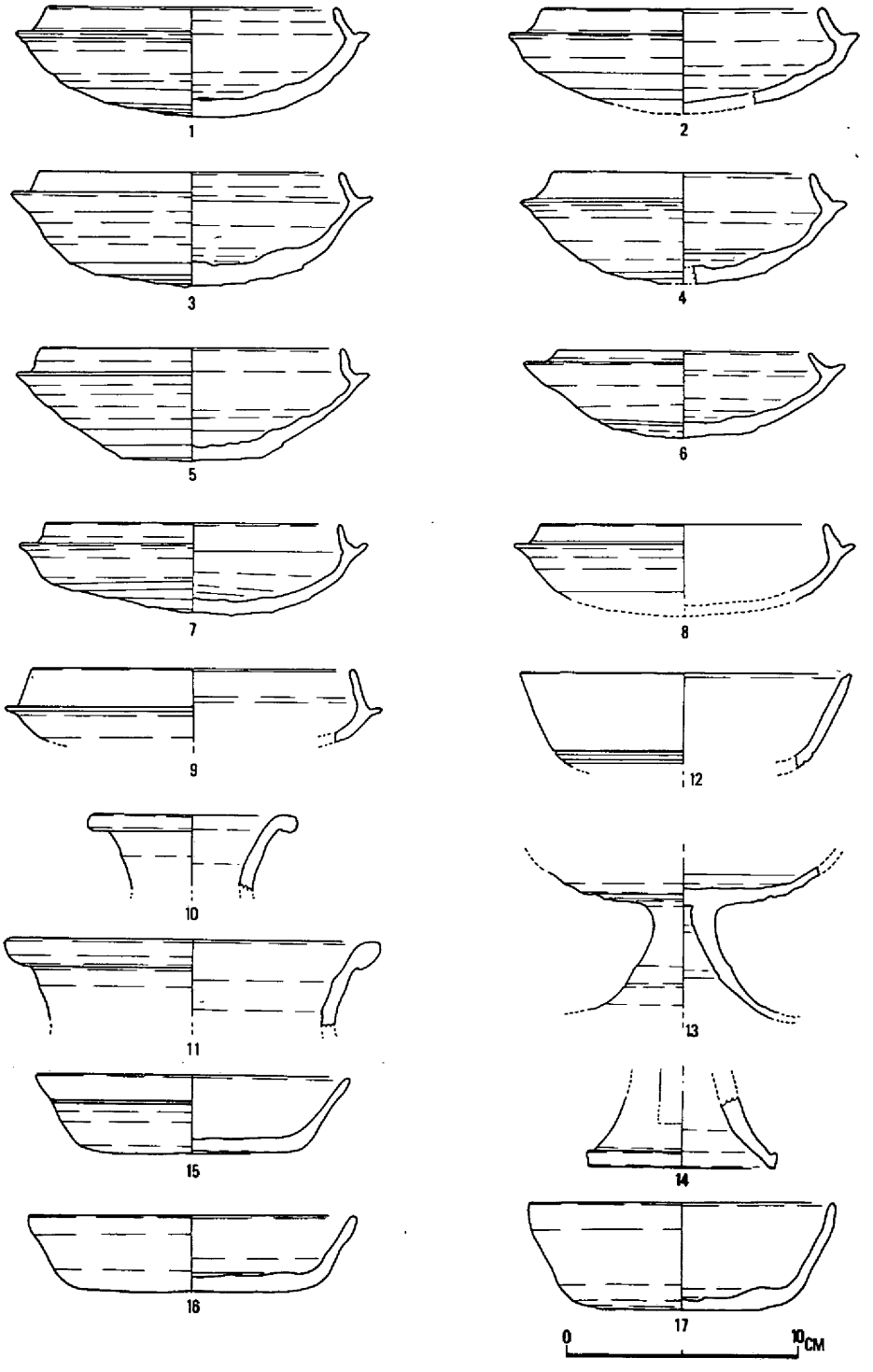
第35図　2号墳石室・周湟平面図（$\frac{1}{30}$）



第36図　2号墳玄室平・断面図、展開図（$\frac{1}{30}$）



第37図　玄室内・玄室周辺出土須恵器蓋・杯（$\frac{1}{3}$）



第38図　玄室内・玄室周辺出土須恵器(杯・高杯・提瓶・壺)、土師器杯実測図 (1/3)

を与えれば玄室長約4.5m玄室巾約1.6m，袖部巾約1mを測る。また南東壁全長は約4.5m，北西側壁全長は羨道曲折部まで約5mを測り，羨道部は約1.2mである。

玄室床面には扁平な角礫・円礫を用い床石とし，その間隙を小礫でうめているが，玄室内の約$\frac{1}{2}$部分のみで検出することができた。玄室の構築は，地山を掘り凹めた後に玄室石石材を据え置かれたとみられ，一部でその構築壙掘り方を検出することができた。

第3節　遺物出土状況

前節で記述を省いた周湟は長約2.5mの範囲の確認にすぎない。平面プランはゆるやかに弧を描くが墳丘の規模を推定するだけの円弧の復元は不可能で，その位置形態からして墳形は円墳であることを示すと考えられる。検出した周湟の残存巾は約70～80㎝前後，深さ約30㎝前後を測る。周湟埋積土中より須恵器広口壷が転倒して出土している。

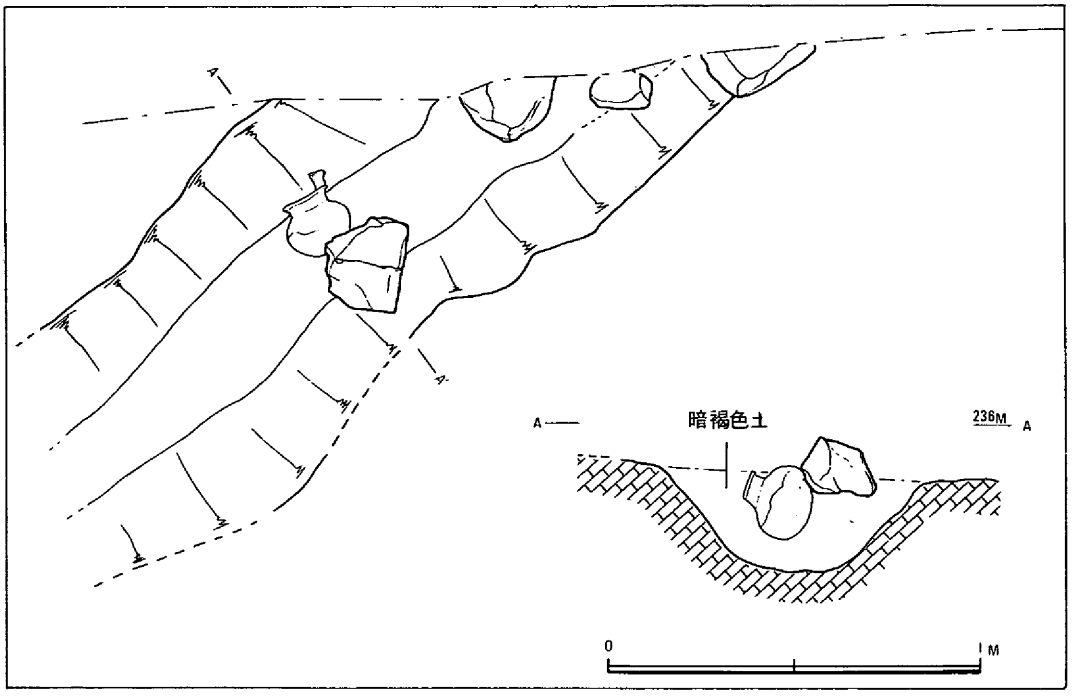
玄室内床石面での遺物の出土はわずかで，大半は玄室周辺あるいは玄室内撹乱土中より出土し須恵器を主体としている。図化できなかった破片の中には横瓶・提瓶・壷・甕などの器種がみられるが，いずれも焼成・胎土共に良好な様相を示している。他に，鉄器（大刀・刀子）の細片が玄室周辺より出土しているが，1号墳でみられる棺釘の出土はみなかった。

第4節　遺物各説（第38～40図）

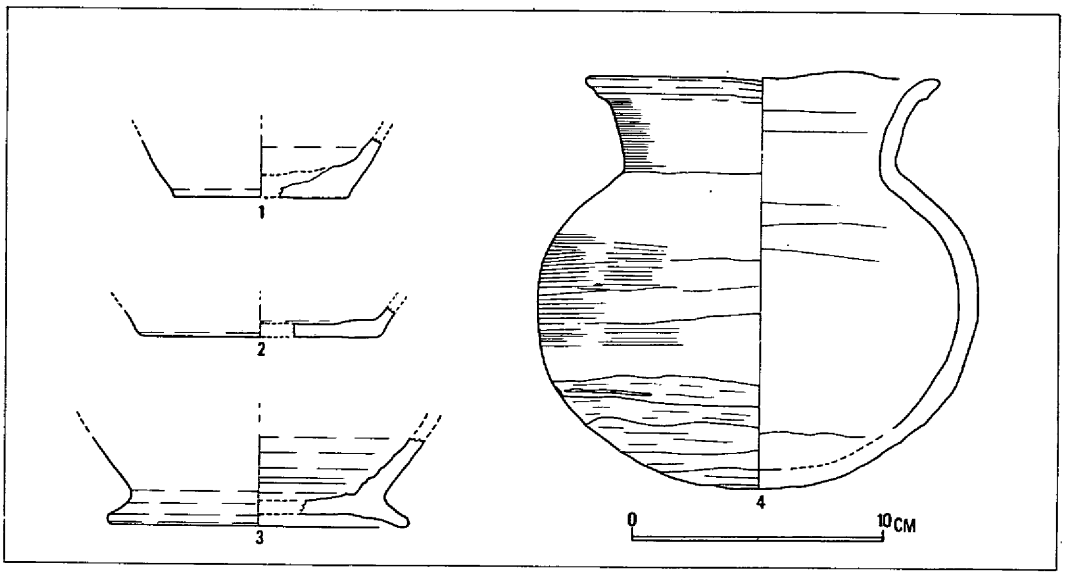
前節で述べたように，玄室床面における遺物の出土はわずかで，第39図―1の須恵器蓋が確実なものである。他のほとんどは玄室内において出土したにもかかわらず原位置を移動，あるいは撹乱土中で出土した。須恵器から推定できる年代巾は6世紀中頃～6世紀後半である。詳細な個々の須恵器の観察は第9表に掲げる。

小結

残存状態に恵まれなかったが，比較的豊富な出土品によって築造・埋葬使用時期を明らかにすることができた。時期的には，1号墳に先んじて築造され，最終埋葬と1号墳築造はほぼ連続する可能性が強い。石室の構造は，使用石材の選択とみても1号墳より精緻であり，床石の敷設とあわせかなり整美された石室を内部主体としていたことが推察できる。



第39図　2号墳西側周湟平・断面図、広口壺出土状態実測図（$\frac{1}{20}$）



第40図　2号墳周辺・周湟内出土須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）

第9表　2号墳出土須恵器観察表

単位：cm　　作成：浅倉

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
第39図—1	蓋	不明	12.0 (推定)	玄室内	ロクロは時計回りで，天井部と体部の境に鈍い稜をもち，口縁端部はやや外反し，端部内側に鋭い稜をつくる。胎土は不良で，焼成は良好，暗褐色を呈する。	小片
第39図—2	蓋	不明	13.0 (推定)	付近表採	ロクロは時計回りで，天井部と体部の境は浅い凹線を有し，口縁端内側に深い凹線をもつ。胎土は良好で，焼成不良，淡灰褐色。	小片
第39図—3	蓋	不明	14.4 (推定)	玄室東	ロクロは時計回りで，天井部と体部の境に浅い凹線を有し，口縁部は肥厚し，内側に浅い凹線をもち，胎土・焼成とも良好，暗灰色。	小片
第39図—4 図版40—1	蓋	4.7 (推定)	14.0	玄室北東	ロクロは時計回りで，ヘラ削りの回転数は5回。天井部と体部の境に深い凹線を有し，口線端内側にも太く深い凹線をもつ。胎土不良，焼成良好，灰褐色を呈する。	器体の½を残すのみ
第39図—5 図版40—2	蓋	4.5 (推定)	14.7	玄室東	ロクロは時計回りで，ヘラ削りの回転数は4回。天井部と体部の境は鈍い稜と浅い凹線で，体部はほぼ垂直で，口縁端部を丸くおさめ，内側に沈線を有す。内面に青海波が残り，胎土不良，焼成良好，灰色を呈す。	器体の¼を残すのみ
第39図—6	蓋	4.1	13.9 (推定)	玄室東	コクロは時計回りでヘラ削りの回転数は4回。天井部と体部の境は不明瞭。口縁部内側に内傾する面を有す。胎土は不良，焼成良好，灰色を呈す。	破片
第39図—7	高杯杯部か？	不明	14.0 (推定)	不明	ロクロは時計回りで，口縁はやや内湾して拡がり，端部を丸くおさめる。内面に指頭圧痕がある。	小片

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					胎土・焼成不良で，灰色を呈す。	
第39図―8	蓋	不明	14.0 (推定)	玄室北東	ロクロは時計回りで，天井部と体部の境は鈍い稜しかない。胎土は良好，焼成良好，灰色を呈す。	1/8遺存
第39図―9	蓋	3.8	14.0	玄室内	ロクロは時計回りで，ヘラ削りの回転数は2回で，天井部と体部の境は鈍い稜。胎土はやや良好で，焼成は非常に良好で外面は赤褐色に発色している。内面は暗褐色を呈する。	1/8が遺存
第39図―10	蓋	4.2 (推定)	14.0	玄室北東	ロクロは時計回り。ヘラ削りをナデて消す。内面にカキ目が見える。胎土は良く，焼成は極良好で赤褐色に発色する。	1/4が遺存
第39図―11 図版40―3	蓋	4.1	14.8	玄室北東	ロクロは時計回りで，ヘラ削りの回転数は4回。天井部と体部との境は浅い凹線。胎土は不良で，焼成は良好。暗灰色を呈する。	1/4を失なう
第39図―12 図版40―4	蓋	4.4	13.8	玄室東	ロクロは逆時計回り。天井部はナデ仕上げて，指紋が残る。粘土ヒモの痕跡が残る。境は浅い凹線。胎土は不良で，焼成はやや良く，灰白色を呈す。	ほぼ完形
第39図―13 図版40―5	蓋	4.4	12.6	SWを暗褐色土	ロクロは逆時計回りで，天井部は粗い仕上げで，粘土と毛痕と，指紋が残る。境は浅い凹線。胎土は不良。焼成良好。灰色を呈す。	1/8を失なう
第39図―14	蓋	3.3 (推定)	12.0 (推定)	第3G茶褐色土	ロクロは逆時計回りで，天井部は平坦でていねいなナデ。体部に3本の凹線。胎土はやや良い。焼成は良好。暗灰褐色を呈する。	1/8の破片
第39図―15	蓋	不明	12.0 (推定)	不明	ロクロは時計回り。天井部と体部の境は鈍い稜と浅い凹線。胎土良好。焼成良好で自然釉がみられる。灰色。	小片

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
第39図—16	杯	不明	不明	不明	ロクロは時計回り。たちあがりは内傾する。受部は丸い。胎土不良。焼成良好。灰褐色。器壁が極く薄い。	極小片
第39図—17	杯	不明	12.0 (推定)	不明	ロクロは時計回り。たちあがりは長くやや内傾する。受部は外に水平に伸び上方に沈線をもつ。胎土良好。焼成良好。灰色を呈す。	小片
第39図—18	杯	不明	12.0 (推定)	玄室東	ロクロは時計回り。たちあがりは段がつく。受部は外上方にのび沈線をもつ。胎土・焼成良好。暗灰色を呈する。	小片
第39図—19	杯	4.0 (推定)	12.4 (推定)	玄室東	ロクロは時計回り。たちあがりはほぼ垂直にあがり断面三角形を呈す。受部に沈線あり。胎土不良。焼成良好。暗灰褐色を呈す。	$\frac{1}{2}$が遺存
第39図—20	杯	4.7	12.0	不明	ロクロは時計回りでヘラ削りの回転数は5回。たちあがりは長くやや内傾し端部に凹線がある。受部は丸い。底部は粗いカキ目が見える。胎土・焼成良好。灰色。	口縁$\frac{1}{4}$周と底部大半が遺存する
第39図—21 図版40—6	杯	4.8	12.7	玄室内	ロクロは時計回りでヘラ削りの回転数は4回。たちあがりは長くやや内傾し端部に凹線をもつ。受部上方に沈線がある。胎土やや良。焼成良好。灰色を呈す。	$\frac{1}{2}$を失なう
第40図—1 図版41—1	杯	4.6	12.3	玄室内と奥壁裏	ロクロは時計回りでヘラ削りの回転数は5回。たちあがりの内傾度が大きく端部に浅い凹線をもつ。受部に沈線がある。内面に青海波が残る。胎土やや良。焼成良好。灰色を呈する。	$\frac{3}{8}$を欠なう
第40図—2	杯	4.4 (推定)	12.0 (推定)	玄室東土手上層	ロクロは時計回り。たちあがりは大きく内傾し端部は丸い。受部は水平に伸	$\frac{1}{3}$が遺存

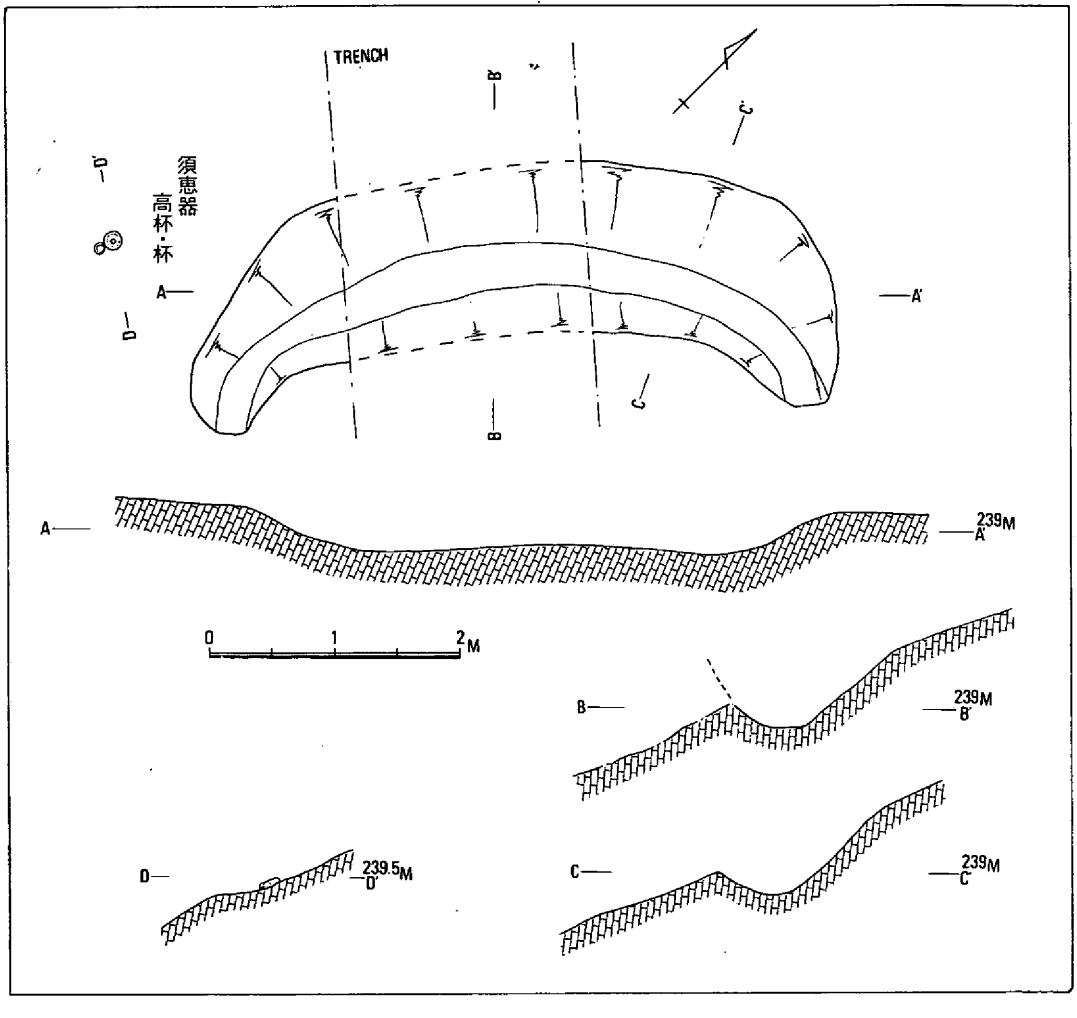
掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					び沈線をもつ。胎土は不良で炭化物を含む。焼成やや良。灰褐色を呈する。	
第40図—3 図版40—7	杯	4.8	12.8	玄室内玄門近く	ロクロは逆時計回りでヘラ削りの回転数は4回。たちあがりは内傾し端部は丸い。受部はやや上方に長く伸びる。内面に青海波が残る。胎土は粗く炭化物を含む。焼成良好。淡灰色を呈する。	ほぼ完形
第40図—4	杯	4.7 (推定)	11.2 (推定)	玄室奥壁裏側	ロクロは時計回りでヘラ削りの回転数は3回。たちあがりは内傾し端部は丸い。受部は水平で沈線をもつ。胎土・焼成良好。外面に暗灰褐色自然釉。内面は明灰色。	1/4弱が遺存
第40図—5	杯	4.8	12.8	玄室東	ロクロは時計回り。たちあがりは段をもつ。受部は水平にのびる。底部は水平である。胎土は良好。焼成良好。内面淡灰色で外面暗灰色を呈する。	約1/8遺存
第40図—6 図版40—8	杯	3.7	11.0	SW区暗黒褐色土	ロクロは時計回り。たちあがりは大きく内傾し短かい。受部は長く外上方にのびる。粘土ヒモ痕が残る。胎土不良。焼成良好。暗灰色を呈する。	ほぼ完形
第40図—7 図版40—9	杯	3.8	12.5	玄室東 玄室北東	ロクロは時計回りでヘラ削りの回転数は5回。たちあがりは段をもつ。受部は上方にのびる。胎土良好。焼成良好。灰色を呈す。	ほぼ完形
第40図—8	杯	不明	12.2 (推定)	不明	ロクロは時計回り。たちあがりは厚く内傾度は大きく端部は丸い。受部に沈線をもつ。胎土良好。焼成良好。内は灰白色で外は暗灰色で光沢がある。	
第40図—9	杯	不明	不明	玄室内	ロクロは逆時計回り。たちあがり長くやや内傾し端部は丸い。受部は水平にのび薄い。ていねいな仕上げ。胎土・	極小片

掲載図	器形	器高(cm)	口径(cm)	出土位置	手法・形態の特徴	備考
					焼成良好。灰色を呈する。	
第40図—10	提瓶	不明	9.0	不明	ロクロは逆時計回り。口縁端部は玉縁になる。ていねいなナデ仕上げされる。胎土・焼成良好。内面は灰色，外面は暗灰色を呈す。	口縁の$\frac{1}{3}$周が遺存
第40図—11	壷	不明	不明	不明	ロクロは逆時計回り，口縁部は玉縁になる。胎土はやや良好。焼成は良好で内面に緑色がかった灰褐色の自然釉が見える。外面は黒褐色から灰褐色を呈する。	極小片
第40図—12	高杯	不明	不明	不明	ロクロは時計回り。やや内湾する口縁部の端部に浅い凹線をもつ。杯部の屈曲部に2本の沈線がめぐる。胎土やや良。焼成良好。灰褐色を呈する。	極小片
第40図—13	高杯	不明	不明	閉塞石付近	ロクロは時計回り。杯部は数条の浅い凹線をもつ。脚部は中央がやや肥厚して大きくラッパ状に広がる。胎土は良好。焼成良好。暗灰色を呈する。	端部を欠く
第40図—14	高杯	不明	不明	東攪乱土	ロクロは逆時計回り。ラッパ状に広がる脚の端部は屈曲して上下に肥厚する。方形か三角形の透し孔が見える。胎土やや良。焼成良好。灰白色から淡灰色を呈する。	小片
第38図—4 図版41—2	広口壷	16	14	周湟内	胎土中粗砂多く石英・長石の粗砂目立つ。口縁部から体部にかけてはヨコナデ調整，底部にかけてカキ目・ヘラケズリで仕上げられる。色調，暗灰色～灰青色。	完形品

第4章　その他の遺構・遺物

はじめに

当初計画では1号墳のみの発掘調査が目的であったが，周辺調査の必要性を重視し1号墳西方斜面・2墳周辺市営住宅跡にトレンチ・グリッドを設定，全面調査を行うことはできなかったが各所で遺構の検出・遺物の出土をみた。以下主な遺構・遺物について略述したい。



第41図　溝状遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

第1節　1号墳周辺の遺構と遺物

遺構としては1号墳の南西方斜面に位置する溝状遺構があげられる。平面形態はやや弧状を呈し，残存長約5m，巾約1.3m，深さ約20～30cmを測る。前章で述べたようにこの溝状遺構の南東方約1mの地点で須恵器杯・高杯杯部が出土しており，古墳に伴う周湟の残存部となる可能性がある。溝内埋積土中より第42図―1の古式土師器が出土している。復元口径約14cmを測り体部下半を欠くが，口縁部は横方向の刷毛ナデがみられやや内傾しつつ直立する。胎土は比較的良好で，焼成普通，膚色を呈しいわゆる王泊6層期に比定されるものである。この土師器が直接溝状遺構に伴うものかどうかは断定できない。

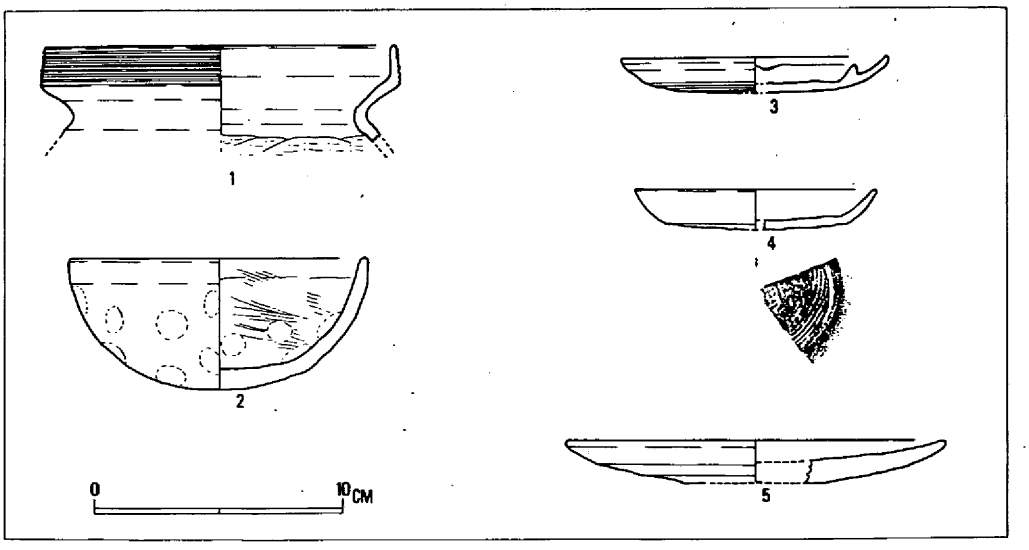
以下遺構に伴わない遺物について略述してみたい。

第42図―2は第1トレンチ（1号墳南西方斜面）出土の土師器椀である。器高5cm，口径12cmを測る完形品で，体部外面は口縁部のナデ調整部分を経て指頭圧痕を残す。胎土は石英・長石の粗砂を含み，焼成はやや良好，赤味を帯びた暗褐色を呈する。正確な時期は不明であるが弥生時代に遡るものではなかろう。

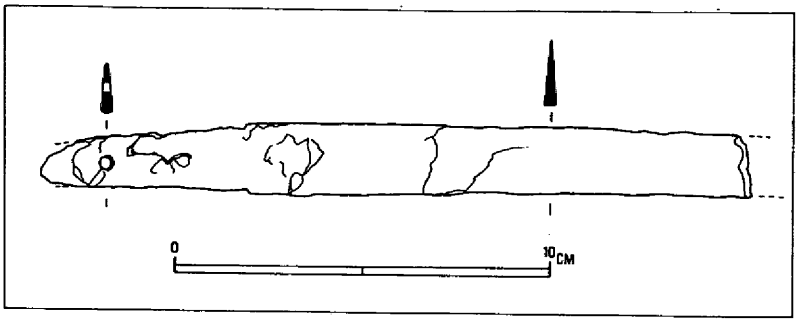
第42図―3・5は1号墳南西方料面で出土した備前焼灯明皿で近世，それも江戸時代に使用されたことが推定される。

第42図―4は1号墳墳丘表土より表採した土師器皿で，底部は糸切底である。復元器高1.6cm，口径9.5cmを測る。胎土は緻密で粗砂はほとんど含まず明るく白っぽい膚色を呈する。その形状から中世遺物と推定したい。

第43図は小刀残欠で刀身の一部を欠く。残存長18.9cm，刀身部巾1.8cm，茎長関部より5.4cmを測る。茎部の目釘孔は1個で径3.5mmを測る。中世～近世の遺物と推定できる。



第42図　1号墳付近・西方斜面出土遺物（$\frac{1}{3}$）

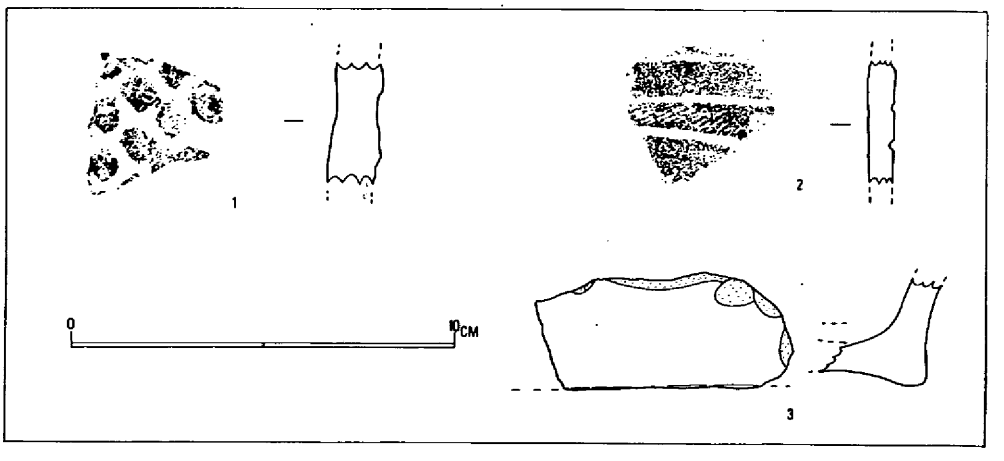


第43図　1号墳西方斜面出土小刀（$\frac{1}{2}$）

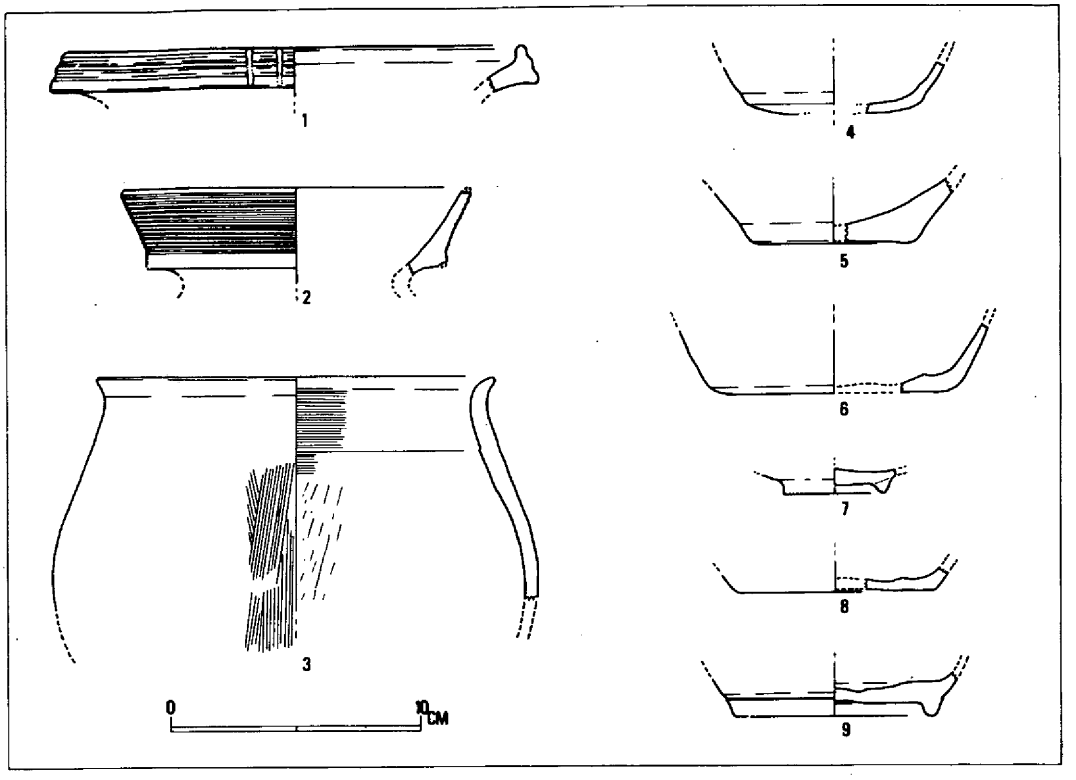
第2節　2号墳周辺の遺構と遺物

国道沿いに建築されていた住宅跡にグリッドを設定したが，遺構としては2号墳以外みるべきものはない。2号墳付近では近世～近代の円形土壙が検出できたにとどまる。遺物としては，まず縄文式土器があげられる。1号墳玄室掘り方埋土中にも縄文後期粗製土器片（第33図―1）が出土しているが，この古墳群の位置する丘陵裾部にかつて縄文時代の遺構が存在したことを物語っている。第44図1は粗大楕円押型文土器で石英・長石を含む胎土を用い，焼成良好堅微な器体を観察することができる。2は沈線文三条を残し中央部分に縄文を認め上下は磨消している。胎土は微砂を多く含み，焼成はやや不良，暗茶褐色を呈する。3は底部破片で石英・長石粗砂を多量に含み，やや焼成不良，膚色を呈する。1は縄文早期，2・3は縄文後期に比定することができる。

第45図はグリッドおよび，2号墳周辺で出土した弥生式土器・土師器である。1は凹線2条をめぐらせ，やや内傾する口縁部に棒状浮文を加飾した壷形土器片で，弥生時代中期末に比定できる。2は弥生時代後期後半に比定できる壷形土器片で外反する口縁部には櫛描き沈線がみられる。3は甕形土器で短かく外反する口縁部をもつ。時期は明確ではないが，7世紀代以降に下る土師器であろう。4は丹塗り古式土師器片で高杯形土器と考えられる。細片ではあるが胎土・焼成共に良好で丹もムラが



第44図　2号墳付近グリッド出土縄文式土器（$\frac{1}{2}$）



第45図　2号墳付近・グリッド出土土器実測図（$\frac{1}{3}$）

なく器壁も平滑に仕上げられる。 5は弥生式土器底部細片であるが，時期は明らかではない。 6・8・9はいずれも杯・椀の底部であるが6・8は2号墳出土土師器杯と同一形態を示す。9は底部に付高台をもち，8世紀以降に下る時期の土師器であろう。7は土師器椀で2号墳付近の鉄滓と共に出土している。底にひも状の粘土を輪状に付着した単純な高台をもつ。鎌倉時代〜室町時代に比定できよう。

以上，遺構に伴わぬ遺物について略述した。この地域は中世において新見荘が設置され，上市小平野には二日市という地名が伝えられている。 また，古墳群の北方数100mには横見政所跡として比定される地点があり，中世遺物（土師器・鉄滓等）の出土は数的には微量であるが中世集落の位置とひろがりを示唆しているといえよう。

終章 まとめにかえて

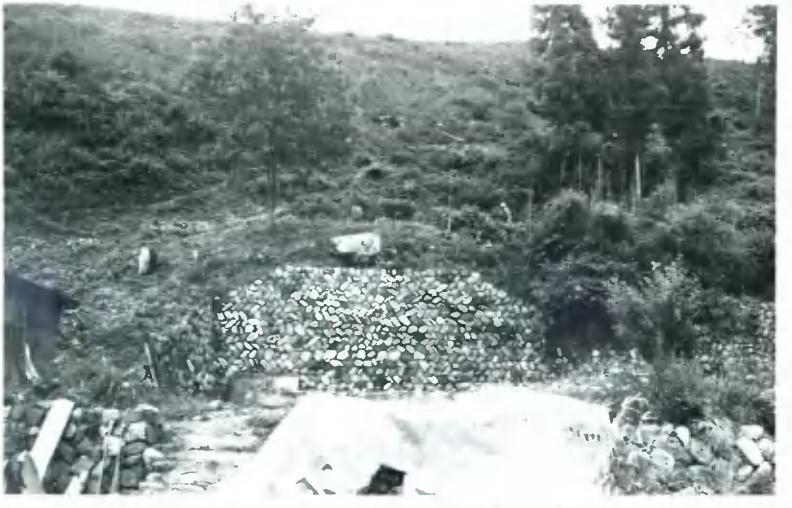
かつて6基から成る横見古墳群の中でも1号墳は古墳造営終末期に近い時期に築造され，埋葬・追葬が行われたとみてよいだろう。相前後する時期に他の古墳が築造されたと想定しても，もっとも良好な占地形態を示し，連綿と追葬が続けられた持続性からみれば最終埋葬時まで有力な豪族の墓としての機能と内容を兼備しているといえよう。玄室奥壁にみられる蓋(ツマミ付装飾的タイプのもの)・杯（高台付）などの示す7世紀中葉は，大化改新による中央政治権力の地方への浸透が開始されるという政治的背景が厳然として存在する。このような情勢の中で備中北部の豪族たちはどのような対応をはかり，身の処し方を策したのであろうか。象徴的とも思われる石帯の出土は，その副葬時期を正確には知ることができないが，副葬された被葬者の豪族から地方官人への転身の達成を暗示するに足る遺物と考えたい。

備中北部では，南部と対照的に古代寺院の所在・官衙の存在が明らかにされておらず，国家権力と一体となった仏教文化の浸透と，地域文化との異相と融和を知ることができない。地域における終末期古墳被葬者の支配基盤と寺院・官衙の地理的関係を，今後研究してゆく必要を痛感する。横見古墳群の所在する位置は，北東山間部をぬって伯耆に至り，西方は狭小な盆地の連らなりを経て備後に至る交通の要衝であり，本文中に述べたように新見庄横見政所の所在地と近接する位置を占めることに重要な史的・地理的共通性がある。中世においても交通の要衝すなわち軍事の要衝と認識されるのである。

以上，筆の進むまま本古墳群のもつ諸問題について述べた。古墳の構造・出土遺物についての有機的詳述はできず，不備な点の多々あることを付記しておく。

尚，報告作成にあたっては岡山県総合文化センター勤務高橋護氏をはじめ，調査員諸氏に有益な助言をいただいた。深謝の意を表するものである。

1．横見墳墓群と横見古墳群　遠景（南方水田より）



2．発掘着手前石室開口状況（南より）

図版２

１．発掘前墳丘遺存状況（西より）

２．墳丘遺存状況（北より）

１．墳丘前面土層断面と石室正面（南より）

２．墳丘土層断面と石室（南西より）

図版４

１．墳丘北東側土層断面〈南より〉

２．墳丘北側土層断面と石室構築坑掘り方〈西より〉

１．１号墳後方より上市小盆地をのぞむ（北より）

２．１号墳と２号墳の位置（西より）

図版６

１．墳丘上列石俯瞰（北より）

２．墳丘西側列石と周濠内大甕出土状態（西より）

１．墳丘列石近景〈北東より〉

２．墳丘東側列石近景〈北より〉

図版８

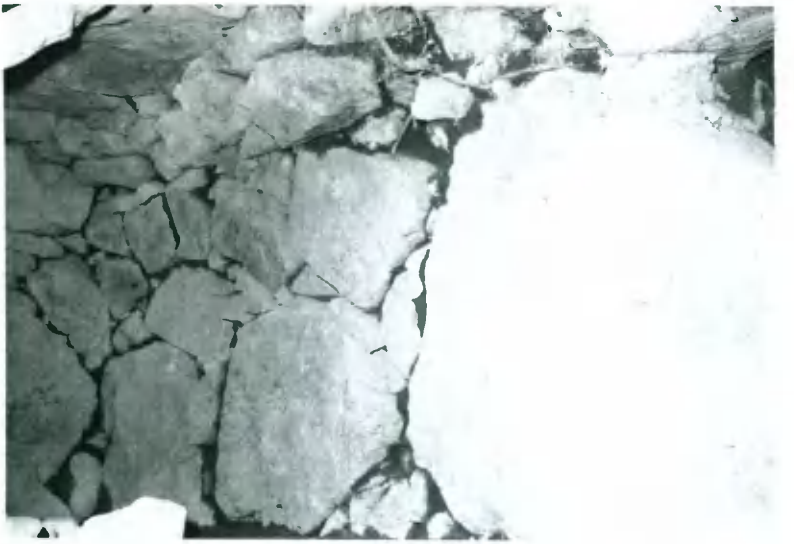
１．墳丘北側列石近景（北より）

２．墳丘西側列石遠景（完掘後）（西より）

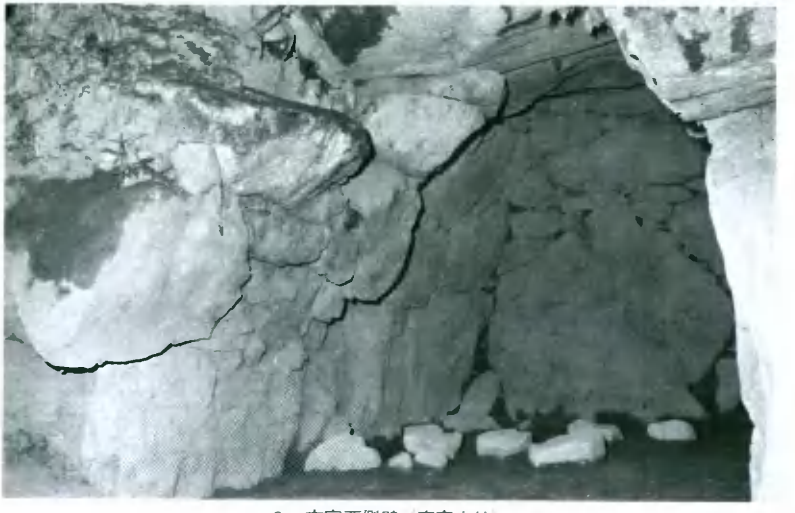
１．北側周湟近景〈東より〉

２．玄室正面〈南より〉

図版10



1．玄室東側壁（南西より）



2．玄室西側壁（南東より）

1．1号墳玄室調査開始初期・土師器出土状況（南より）

2．土師器出土状況（南より）

図版12

1．1号墳玄室内遺物出土状況（竹串は棺釘・鉄器）（南より）

2．1号墳玄室内遺物出土状況（南より）

1．1号墳玄室奥壁より中央部遺物出土状況〈南東より〉

2．1号墳玄室奥壁西側横瓶・直口壺・椀出土状況〈南より〉

図版14

1．1号墳玄室奥壁付近遺物出土状況（東より）

2．1号墳玄室奥壁より中央部遺物出土状況（南より）

1．1号墳玄室内中央部杯1～4・勾玉2出土状況（南東より）

2．1号墳玄室内東側壁付近台付盤・杯・甕・高杯片出土状況（西より）

図版16

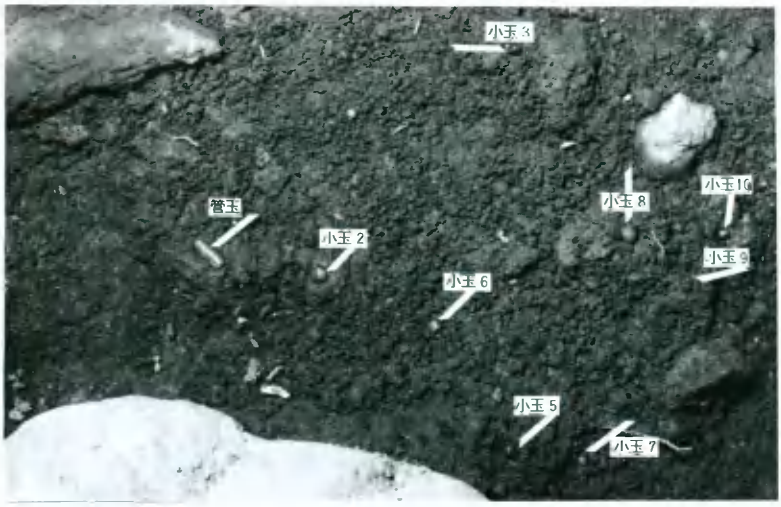
1．1号墳玄室東側壁大刀・盤・鉄鏃出土状況（西より）

2．同上盤取上げ後・蓋・短頸壺出土状況（西より）

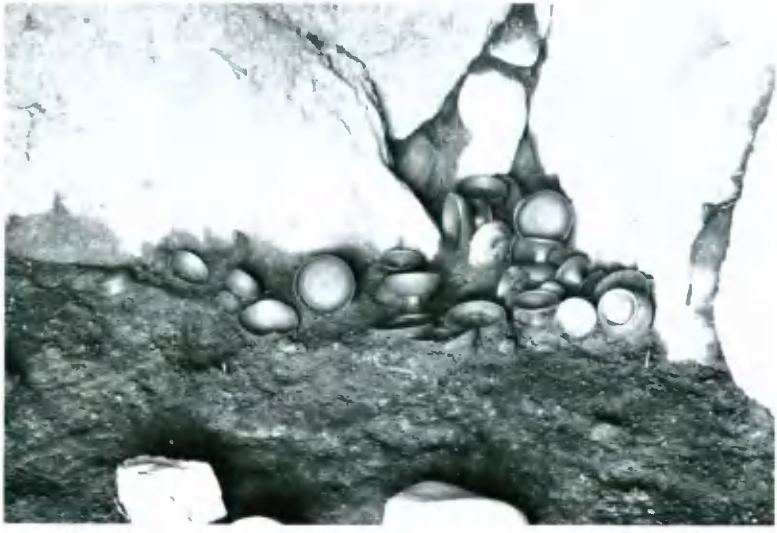
1．1号墳玄室内石帯出土状況（西より）

2．1号墳玄室内大刀残欠・勾玉1・杯出土状況

図版18



1．1号墳玄室内管玉・ガラス小玉出土状況〈東より〉



2．1号墳玄室東側奥壁付近須恵器出土状況〈南より〉

1．1号墳玄室奥壁付近須恵器出土状況（西より）

2．1号墳玄室奥壁より東側壁付近最終出土遺物（南より）

図版20

1．1号墳玄室内人骨出土状況（北より）

2．1号墳墳丘除去後石室遠景（北より）

1．1号墳石室（東より）

2．1号墳石室　西より

図版22

1．1号墳石室と石室構築坑（東より）

2．1号墳石室奥壁・天井石近景（北より）

1．1号墳西側周湟内大甕出土状況（西より）

頸部櫛描き波状文

体部縦方向平行叩き目文

2．須恵器大甕（約$\frac{1}{12}$）

第14図－1

第14図－2

第14図－3

第14図－4

第14図－5

第14図－6

第14図－8

第14図－10

第14図－9

第14図－11

第14図－12

第14図－13

1号墳玄室内出土須恵器（蓋・杯・椀）（縮尺$\frac{1}{3}$）

第15図－1

第15図－2

第15図－3

第15図－4・5

第15図－6・7

第15図－8・9

1号墳玄室内出土須恵器（杯・蓋）（縮尺$\frac{1}{3}$）

図版26

第15図—10

第15図—11・12

第17図— 4

第17図— 1

第17図— 2

第17図— 3

第18図（$\frac{1}{5}$）

1号墳玄室内出土須恵器（蓋・杯・盤・台付盤・平瓶・直口壺・横瓶）（$\frac{1}{3}$）

第14図—14・15（$\frac{1}{2}$）

第14図—16・17（$\frac{1}{2}$）

第17図—5（$\frac{1}{3}$）

第17図—6（$\frac{1}{3}$）

第17図—7（$\frac{1}{3}$）

1号墳玄室内出土須恵器（短頸壺・瓶）・土師器

図版28

第16図－1（$\frac{1}{2}$）

第16図－2

第16図－4

第16図－5

第16図－6

第16図－7

第16図－8

第16図－9

第16図－10

第16図－11

1号墳玄室内出土須恵器高杯（$\frac{1}{3}$）

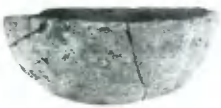
第16図—12

第16図—13

第9図—1

第9図—2

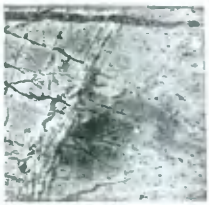
第9図—4



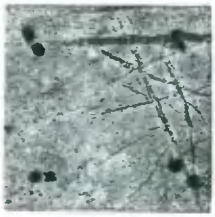
第43図—2

1．1号墳玄室内出土須恵器・1号墳周辺出土須恵器・土師器（縮尺$\frac{1}{3}$）

2．2号墳周辺グリッド出土土師器



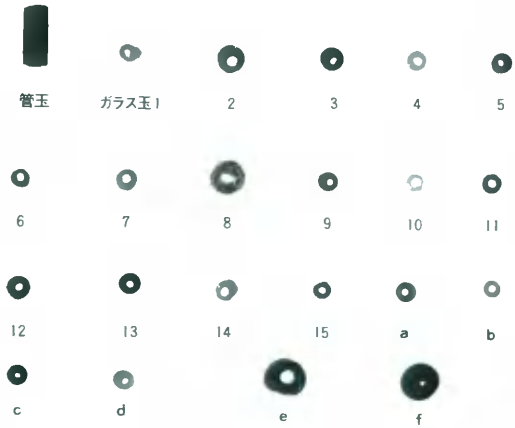
石帯（表）



（裏）

勾玉 1

勾玉 2



1号墳玄室内出土石製品（石帯・勾玉）・ガラス小玉（$\frac{1}{1}$）

鐙金具

鉸具

留金具

鎹状鉄器

大刀

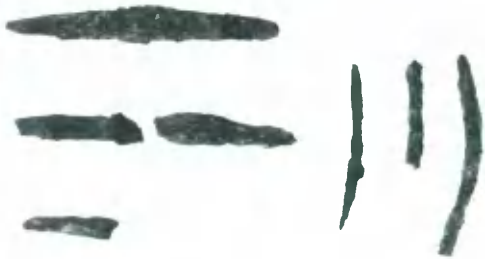
南西斜面出土小刀

大刀残欠

針

鞘金具

1号墳玄室内出土鉄器（馬具・鋲留金具・鎹状鉄器・大刀・刀装具・針）



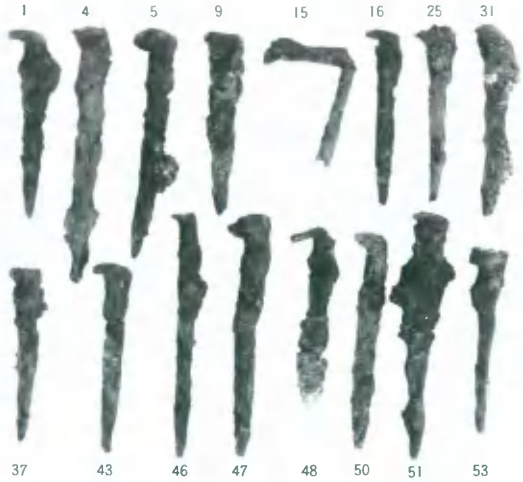
1．刀子・弧状鉄器（$\frac{1}{2}$）

2．鉄鏃

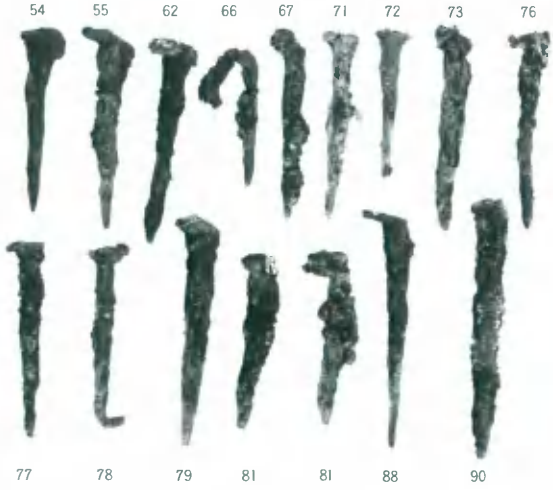
1．1号墳玄室内出土鉄鏃

2．1号墳玄室内出土鉄鏃

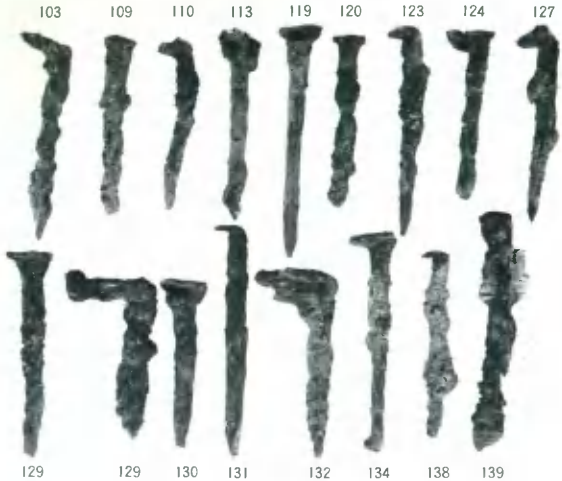
図版34



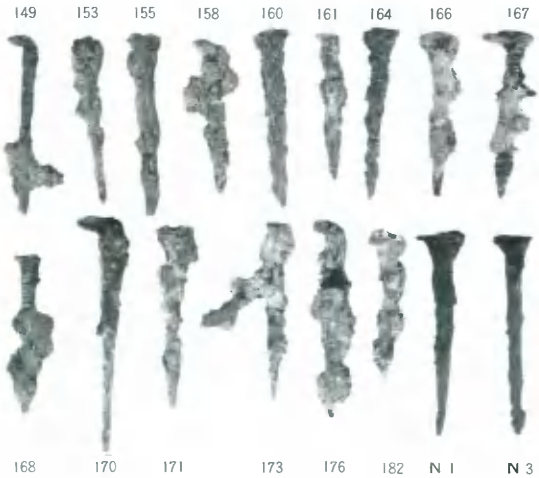
1．1号墳玄室内出土棺釘完形品



2．1号墳玄室内出土棺釘完形品



1．1号墳玄室内出土棺釘完形品



2．1号墳玄室内出土棺釘完形品

図版36

1．２号墳玄室（北東より）

2．２号墳玄室（南西より）

1．２号墳玄室北側壁調査状況（南より）

2．２号墳北側壁付近須恵器出土状況　北東より

図版38

1．２号墳玄室南西玄門付近（北より）

2．２号墳玄門付近須恵器杯出土状況（北東より）

1．２号墳玄室と周湟の位置関係（北東より）

2．２号墳周湟内須恵器広口壺出土状況（南より）

図版40

第39図－4

第39図－5

第39図－11

第39図－12

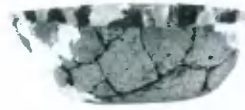
第39図－13

第39図－21

第40図－3

第40図－6

第40図－7



第40図－7

2号墳玄室及び周辺出土須恵器（蓋・杯）

内面タタキ

第40図－1

第38図－4 周溝出土広口壺

第40図－15

第40図－16

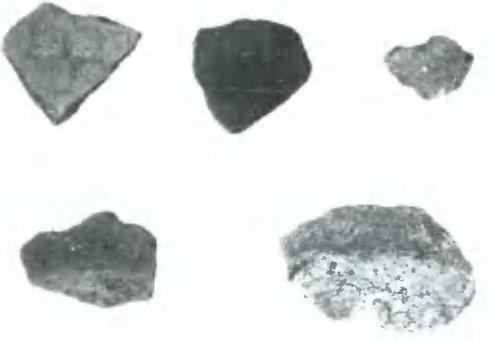
グリッド・2号墳付近土師器・弥生式土器片

図版42

1．西方斜面溝状遺構と1号墳（南西より）

2．溝状遺構（南より）

1．1号墳玄室内出土銭貨・土師器・鉄器



2．2号墳周辺グリッド出土縄文式土器

図版44

1．1号墳西方斜面須恵器出土状態（杯・高杯）（東より）

2．1号墳東方斜面須恵器杯出土状態（東より）

下神代の遺跡

目　　次

第1章　調　査　経　過……350
　第1節　調査に至る経過……350
　第2節　日　　誌　　抄……351
第2章　遺跡の位置と概要……353
第3章　迫三方塚古墳，迫遺跡の調査……356
　第1節　遺跡の立地と調査概要……356
　第2節　迫三方塚古墳……356
　第3節　迫　　遺　　跡……364
　第4節　小　　結……370
第4章　新市谷遺跡の調査……371
　第1節　トレンチ調査……371
　第2節　遺　構，遺　物……374
　　1　住　　居　　址……374
　　2　建　　物　　址……390
　　3　土壙，貯蔵穴……390
　　4　その他の遺構……398
　第3節　遺構に伴わない遺物……400
　第4節　小　　結……410
第5章　古坊遺跡の調査……417
　第1節　遺　　構……417
　　1　土　　壙　　墓……417
　　2　土　　壙……424
　　3　住　　居　　址……425
　第2節　遺　　物……425
　　1　遺構に伴わない遺物……425
　　2　遺構に伴う遺物……430
　　3　丹塗り土器と特殊器台……431
　第3節　小　　結……432
第6章　総　　括……438

図　目　次

第1図　遺跡周辺地形（S＝1/1500）……355
第2図　迫遺跡，迫三方塚古墳地形図とグリッド設定図……357

第3図　迫三方塚古墳地形図…… 358
第4図　迫三方塚古墳縦横断面図…… 358
第5図　迫三方塚古墳横穴式石室実測図（S＝1/60）…… 359
第6図　迫三方塚古墳出土遺物分布図…… 361
第7図　迫三方塚古墳出土遺物…… 362
第8図　迫三方塚古墳出土遺物…… 363
第9図　迫遺跡遺構全体図(1)…… 364
第10図　迫遺跡遺構全体図(2)…… 365
第11図　No.1，No.3，No.7，住居址，平面図，断面図…… 366
第12図　No.2，土壙，平面図，断面図…… 367
第13図　箱式石棺平面図，断面図…… 368
第14図　迫遺跡出土の遺物…… 369
第15図　新市谷遺跡グリッド設定図（S＝1/1000）…… 372
第16図　新市谷遺跡地形図　（S＝1/600）…… 373
第17図　2～5号住居址，平面図，断面図…… 375
第18図　6号住居址，平面図，断面図…… 377
第19図　出土遺物実測図…… 379
第20図　住居址，平面図，断面図…… 381
第21図　住居址及び出土遺物実測図…… 383
第22図　11号住居址，平面図，断面図…… 385
第23図　出土遺物実測図…… 386
第24図　12号住居址，平面図，断面図…… 387
第25図　14・15号住居址，平面図，断面図…… 388
第26図　16号住居址，平面図，断面図…… 390
第27図　建物址及び住居址，平面図，断面図…… 391
第28図　土壙墓及び出土遺物実測図…… 392
第29図　1号貯蔵穴及び出土遺物実測図…… 393
第30図　2号貯蔵穴，平面図，断面図…… 394
第31図　3号貯蔵穴及び出土遺物実測図…… 396
第32図　集石遺構，平面図，断面図…… 399
第33図　出土遺物実測図…… 401
第34図　出土遺物実測図…… 402
第35図　出土遺物実測図…… 406
第36図　遺構配置図及び地形断面図…… 415
第37図　土壙，平面図，断面図(1)…… 418

第38図　土壙，平面図，断面図(2)…… 421
第39図　土壙，平面図，断面図(3)…… 422
第40図　1号住居址，平面図，断面図…… 423
第41図　2号住居址，平面図，断面図…… 423
第42図　3号住居址，平面図，断面図…… 424
第43図　古坊遺跡出土遺物…… 426
第44図　古坊遺跡出土の遺物…… 427
第45図　古坊遺跡出土の丹塗り土器と特殊器台…… 428
第46図　古坊遺跡出土の特殊器台…… 429
第47図　古坊遺跡，地形図，遺構配置図…… 434
第48図　出土土器編年図（試案）…… 441

表　目　次

表1　迫三方塚古墳出土須恵器一覧表…… 363
表2　新市谷遺跡遺構一覧表…… 414
表3　古坊遺跡土壙墓計測表…… 437

図　版　目　次

図版　1—1　迫三方塚古墳調査前遠景…… 443
　　2　調査前の横穴式石室…… 443
　　3　発掘後の横穴式石室…… 443
図版　2—1　箱式石棺と遺物出土状態…… 444
　　2　迫三方塚古墳と No. 1 住居址…… 444
図版　3　迫三方塚古墳出土遺物…… 445
図版　4—1　No. 3 住居址…… 446
　　2　No. 7 住居址…… 446
図版　5—1　No. 2 土　壙…… 447
　　2　箱　式　石　棺…… 447
図版　6—1　遺 跡 の 遠 景…… 448
　　2　11・12・13号住居址付近…… 448
図版　7—1　2・4・5号住居址，断面…… 449
　　2　2～6号住居址付近…… 449
図版　8—1　6 号 住 居 址…… 450
　　2　2～5号住居址…… 450
図版　9—1　8 号 住 居 址…… 451

2　10号住居址…… 451
図版 10—1　12号住居址…… 452
2　11号住居址…… 452
図版 11—1　16号住居址…… 453
2　15号住居址…… 453
図版 12—1　14号住居址…… 454
2　建　物　1…… 454
図版 13—1　建物1及び14号住居址…… 455
2　集石遺構…… 455
図版 14—1　土壙墓全景…… 456
2　鉄器出土状態…… 456
図版 15—1　1号貯藏穴…… 457
2　2号貯藏穴…… 457
図版 16—1　1号貯藏穴，遺物出土状態…… 458
2　3号貯藏穴，遺物出土状態…… 458
図版 17　新市谷遺跡，出土遺物…… 459
図版 18　新市谷遺跡，出土遺物…… 460
図版 19—1　土壙墓　1…… 461
2　土壙墓　2…… 461
3　土壙墓　7…… 461
4　土壙墓　15…… 461
図版 20—1　土壙墓　3…… 462
2　土壙墓　5…… 462
図版 21—1　土壙墓　8…… 463
2　土壙墓　9…… 463
図版 22—1　土壙墓　10…… 464
2　土壙墓　14…… 464
図版 23—1　土壙墓　11…… 465
2　土壙墓　12…… 465
3　袋状土壙…… 465
図版 24—1　土壙墓18・19…… 466
2　土壙墓　21…… 466
図版 25—1　土壙墓群近景…… 467
2　土壙墓24・25…… 467
図版 26—1　1号住居址…… 468
2　2号住居址…… 468

図版 27—1　3 号 住 居 址…… 469
　　2　土 壙 29 ・ 30…… 469
図版 28　　古坊遺跡，出土土器（⅓）…… 470

第1章　調　査　経　過

第1節　調査に至る経過

『下神代の遺跡』として報告する遺跡は，迫三方塚古墳，迫遺跡，新市谷遺跡，古坊遺跡である。それ等は，いずれも隣接しており，迫三方塚古墳から古坊遺跡まで約200mの距離をおくものである。その距離は，谷尻遺跡の全長に比べれば，約3分の1であるが，各地点の小字名に依拠して遺跡名とした。

『下神代の遺跡』として報告する遺跡の所在地は，岡山県の北西部，広島県，鳥取県との県境近くに在る。以下，各遺跡の所在地を列記する。

迫三方塚古墳　阿哲郡神郷町下神代小字迫
新市谷遺跡　　阿哲郡神郷町下神代小字新市谷
古坊遺跡　　阿哲郡神郷町下神代小字古坊

昭和49年4月の時点では，新見以西の文化財発掘調査遺跡数は，8遺跡であった。しかし，現地において再三の遺跡の発見があった。そこで，県教委文化課及び，津山教育事務所は，次年度から新見以西の遺跡の調査に着手するに当って，各遺跡に関してのより精密な資料を必要としていた。そこで，同年7月に8遺跡の内容的な検討と，自動車道路線内における遺跡の再確認を兼ねて，担当調査員を中心として自動車道の用地内の踏査を実施した。その結果10数ケ所の遺跡が新たに発見された。そして，ここに報告する新市谷遺跡もその時に発見された遺跡である。

昭和49年7月当時の迫三方塚古墳は，巨大な天井石が露出する横穴式石室墳であった。石室内は，土砂が流入しており，大人がやっと通れるほどの空間があるのみであった。分布調査において確認したのはこの一基のみであった。古墳の発見当初は，小字名から迫塚古墳と呼称していた。その後，昭和50年5月に，調査中の安信古墳群を，町教委の職員が訪ねて来られ，迫塚古墳が破壊された旨を伝えられた。知らせを得た調査員は，ただちに現地におもむき，その状況を確認した。その状況は，露出していた天井石が全て持ち去られていた。その旨を県教委文化課及び，高梁教育事務所に連絡した。その後，文化課の指示で，破壊された間の事情を聴取することにして現地に旧地権者，町教委，調査員の三者が立合，その間の説明を受けた。それによると，古墳を含めてその周辺は同家の墓地であった。さらに，古墳の天井石の上には祠を置き，同家による祭祠が続いていた。そのため，自動車道の用地となった時，墓地移転と同時に，その祭祠権を継承するために同様に移転する必要があった。その時に，地権者が祠のみを移転すれば問題は起きなかったが，祠の乗る天井石もその一部と考えて同時に移転したものである。地権者が移転を急いだのは，移転に伴う工事の報告を日本道路公団に提出する必要があった。そこで，報告書の提出を急いだ地権者は，ブルトーザーを使用して，その巨大な天井石を移転したものである。以上の経過を聞く過程で知ったことであるが，地権者としては，そこ

に文化財が在るとは知らされていなかった点である。県教委と道路公団との発掘調査に関する会議は，回を重ねているため，公団にとっては周知の遺跡であっても，用地の取得にあたっては，用地事務所が当るため，その間に疏通を欠く点があれば，上記の事柄は再び起きることである。

新市谷遺跡は，昭和49年7月の調査により発見されたものである。丘陵上で土器片等を採収したことによりその所在が知られることとなった。

古坊遺跡は，最初は新市谷遺跡の範囲に含まれていた。しかし，トレンチ調査の結果，墳墓群が予想されるため，新市谷遺跡と区別するため，同地点の小字名に拠り古坊遺跡と命名した。

以上の遺跡は，同一地域内の遺跡ではあるが，それぞれに，古墳群，集落址，墳墓群が予測されたため，個別の遺跡名を付した。

下神代の遺跡の調査は，井上，竹田の2名が担当した。調査期間を略述すると，昭和50年7月に，まず新市谷遺跡に着手した。同遺跡の調査は，同年12月中旬をもって完了した。迫三方塚古墳の調査は，9月上旬に着手し，迫遺跡の調査も同時に実施して，11月上旬に完了した。古坊遺跡は，11月上旬にトレンチ調査に着手し，1月末に調査を完了した。

各遺跡の調査は，新市谷遺跡，古坊遺跡は主として井上が，迫古墳群，迫遺跡は竹田が担当して調査を実施した。報告書も，概ねそれに従って記述した。（井上・竹田）

第2節　日　詩　抄

1975年7月15日～7月22日　草刈り

7月23日～8月8日　草刈り。トレンチの設定と掘り下げを行う。その結果弥生時代後期から古墳時代前期，中世の遺物遺溝を検出した。

7月9日～8月26日　D－1グリッドより表土剝開始。黒ボコが厚く堆積しているのと暑さのため作業が捗らなかった。

8月27日～8月30日　№6住居址の検出。斜面のため残りは良くない。

9月1日迫三方塚古墳の調査開始。古墳周辺草刈り。

9月2日～9月9日　新市谷遺跡はC－3グリッド表土剝とD－1グリッドの遺構検出を行う。迫三方塚古墳は草刈と地形測量を行う。

9月10日～15日　新市谷遺跡はC－3グリッド表土剝とD－1グリッド遺構検出。迫三方塚古墳石室内発掘。

9月16日～9月23日　新市谷遺跡，D－1グリッド平板実測とC－3グリッドの遺構検出を行う。迫三方塚古墳は墳丘トレンチ掘り下げと石室実測。

9月24日～9月25日　新市谷遺跡はC－3グリッド遺構の掘り下げ。迫三方塚古墳周辺に遺構確認トレンチを設定し，掘り下げた所，弥生時代の住居址を検出したので，迫遺跡とした。

9月26日～10月14日　新市谷遺跡D－1グリッドは完了。C－3グリッド遺構の掘り下げ。C－2Gの表土剝。迫三方塚古墳墳丘トレンチ掘り下げ。石室実測。

10月15日～10月20日　新市谷遺跡C－2グリッド表土剝完了。遺構検出。住居址検出作業はクロボコの堆積が厚く困難をきわめた。迫三方塚古墳は石室実測，トレンチのセクション実測。2号墳としたシスト発掘。

10月21日～10月25日　新市谷遺跡C－1グリッド表土剝開始。C－2Gグリッド遺構検出作業。迫三方塚古墳調査完了。迫遺跡の調査開始。

10月27日～11月8日　新市谷遺跡C－2グリッド遺構掘り下げ。B－2グリッド，A－2グリッド表土剝，迫遺跡のシスト実測完了。迫遺跡表土剝。

11月9日～11月17日　新市谷遺跡A－2グリッド遺構検出。迫遺跡遺構掘り下げ。

11月18日～11月24日　新市谷の南側尾根上より土器片が出土し，土壙墓群の存在が予想された。B－2グリッド遺構掘り下げ。

11月25日～12月2日　新市谷遺跡№25土壙より鉄鋌などが出土。また南側尾根上の遺跡を古坊遺跡として表土剝を開始。

11月3日～11月16日　新市谷遺跡C－1グリッド，B－2グリッド遺構掘り下げ。古坊遺跡から特殊器台片出土。

11月17日～12月26日　新市谷遺跡調査完了。古坊遺跡表土剝を終了し，遺構検出作業。

1976年1月6日～1月17日　古坊遺跡表土剝と土壙墓検出および土壙墓の実測。写真撮影。

1月19日～1月26日　古坊遺跡遺構実測および発掘後の地形測量。雪のため作業が進まなかった。

1月27日　発掘調査完了。　（竹田・井上）

第2章　遺跡の位置と概要

遺跡の位置

岡山県の北西部，高梁川の支流である西川と神代川の合流点付近に小平地が見られる。西川に沿っては，伯備線，神代川に沿っては，芸備線が走っており，その交点が備中神代駅である。この二川が合流して下流は渓谷となり，平地より見れば，急崖が見られる。また神代川右岸の丘陵は，準平原である吉備高原の北端の境でもある。神代川の左岸には，神代川により形成された二段の河岸段丘が見られる。現在の集落は，この下位の河岸段丘上に立置している。神郷町字新市の集落がそれである。上位の河岸段丘と，背後より迫る山稜の傾斜変換地付近に安定した緩斜面が見られる。この緩斜面は，山稜の裾を南北に細長く続いている。南東に向くこの緩斜面は，概ね黄色を呈する三紀層であり，その上面に漆黒色（黒ホコ）が堆積している。中国縦貫自動車道は，この緩斜面上に計画され，建設されている。

今回報告する遺跡は，北から迫三方塚古墳，新市谷遺跡，古坊遺跡である。それ等が先に述べた緩斜面に連続的に並ぶものである。その範囲は，南北に約200mである。地形的に見ると，その谷部に迫三方塚古墳があり，丘陵上に新市谷遺跡，古坊遺跡がある。

周辺に他の遺跡を見ると，現在までに知られる遺跡の数は少ない。新市谷遺跡の北約1kmに舞尾原がある。西川沿に見られた平地もこの付近から急にその巾を狭めてくる。その付近に箱式石棺が出土したことが知られており，その周辺に土器の散布地が知られるのみである。また，西川の左岸，現在の神郷中学校の敷地内より土器の出土したことが伝えられているが，時期等については不明である。新市谷遺跡の南約500mには，中世の山城である岩屋城址がある。この岩屋城址の所で神代川を挾む丘陵がせり出しており，地形的な区画を成している。つまり，舞尾原から，岩屋までの間が，地形的に一つの地域を形成するものと考えられる。この地域にあって，生活の中心となるのは，地理的にも，地形的にも今回報告する遺跡の所在地付近とすることができるであろう。

遺跡の概要

下神代の遺跡として報告するのは3遺跡である。遺跡の数からすれば3遺跡となるが地理的に見れば，相互に関連を持つ遺跡群と考えることができるであろう。そうであるから，独立して各遺跡の報告をするよりも，関連性を考慮しつつ報告するのがより合理的と考える。この章では，各遺跡の概要を記して，個別遺構を報告するための序章としたい。

迫古墳群，迫遺跡

古墳群は，横穴式石室墳1基と，箱式石棺1基より構成される。横穴式石室墳は，迫三方塚（さこさんぼうづか）古墳と呼称されるものである。この名称は，小字名「迫」と，同古墳の天井石の上に祠られていた「三方崎社」に依拠している。横穴式石室は，すでに盛土は流失しており，周溝等も検出されなかった。石室

内には，組合式石棺１基が遺存していた。石室内からは，須恵器の蓋５，杯２，高杯２，小壷２，直刀１等が出土した。組合式石棺は，周囲を果樹園とする時に一度掘り起されたが，その後，地権者が祟を恐れて再び埋めもどしたものである。

古墳の周辺には，緩斜面が広がっていた。また，横穴式石室の入口でも住居址を検出したこともあって他に住居址等の遺存することが予想された。古墳の調査と平行して，周辺の調査も実施した。その結果，残存状態は悪いが，住居址３軒を検出した。他に出土遺物として弥生式土器がある。

新市谷遺跡

新市谷（しいちだに）遺跡は，丘陵の先端に広がる緩斜面の上に立地している。この遺跡は，現在の集落との比高は，約30mを測り，遺跡からは，地域一帯を見通すことができる。検出した遺構は，弥生式土器の後期から，土師式土器の初頭にかけてのものである。遺構の数を概略すると，住居址16，貯蔵穴３，建物址２，土壙墓１，土壙等である。遺跡が立地する地形が斜面であるため，検出した住居址の遺存状態は悪く，床面を３分の１程度残すものであった。出土遺物としては，弥生式土器，土師式土器，石庖丁，鉄鏃，鎌，クワ先，鉄鋌等である。弥生式土器は，後期のものがほとんどで，前期，中期のものが数点づつ出土している。鎌，クワ先，鉄鋌は，土壙墓と考えられる遺構の床面に密着して，一括で出土したものである。

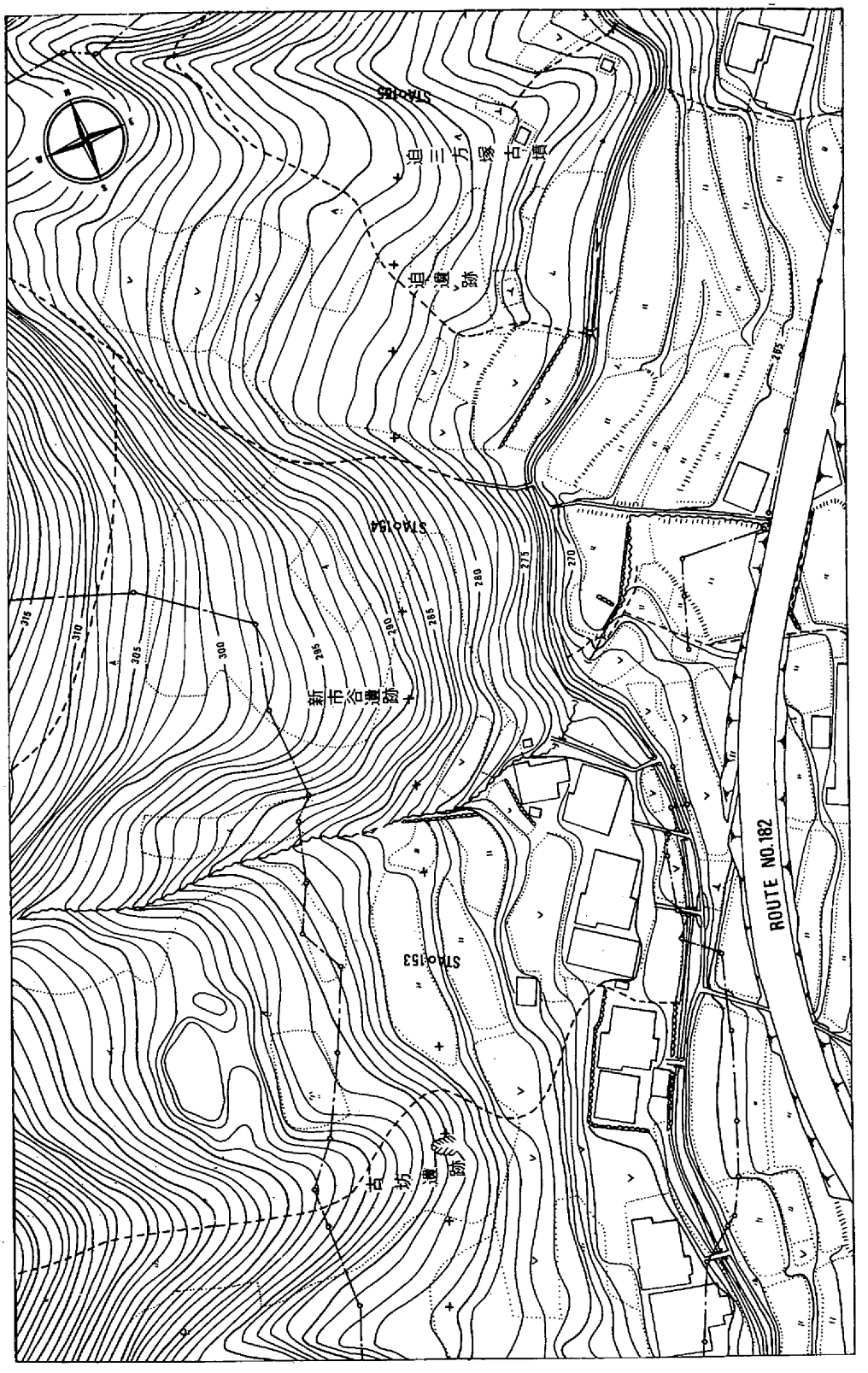
古坊（ふるぼう）遺跡

新市谷遺跡と浅い谷を挟んで隣の尾根上に立地するものである。検出遺構は，土壙墓24，住居址３，土壙３である。土壙墓は，尾根上に，等高線にほぼ平行した状態で検出したものである。土壙墓内よりの出土遺物はなかった。住居址は，尾根上に１，丘陵の下段に２を検出した。土壙は，尾根上に袋状のもの１，丘陵の下段に２個を検出した。出土遺物としては，縄文式土器（晩期），弥生式土器（前期，中期，後期），石鏃，石庖丁等である。中でも我々の注意を引いたのは，特殊器台片が出土したことである。

各遺跡で検出した遺構，出土した遺物の概要は以上である。上記の遺跡は，先にも述べたように，地形的にも，地理的にも関連を保ちつつ歴史的に発展したものと考えられる。そこで，その点を考慮に入れて，以下の各章において，各遺跡の遺構，遺物等について，できるだけ詳説したい。（井上）

付記

神郷町下神代地内における，中国縦貫自動車道関係の発掘調査は，今回報告する３遺跡を含めて，７遺跡である。それらの歴史的，地理的環境は，ほぼ同一と考えられる。この地域の，それに関する記述は，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告14』所収の「下神代の古墳」に記載があるので，それを参照していただきたい。



第1図　遺跡周辺地形図（S＝1/1500）

第3章　迫三方塚古墳・迫遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と調査概要

遺跡は阿哲郡神郷町下神代迫に所在する。岡山県の北西部を流れる西川と神代川は，国鉄備中神代駅付近で合流し，下流の新見市で高梁川に注ぎこむ。この合流地点には両河川による沖積地が広がっているが，三方は山に囲まれている。西側は神代川の両岸に細長い沖積地が発達し，哲西町まで続く。

遺跡は合流地点に広がる沖積地の北側，ゆるやかな傾斜をもって沖積地にせりだす尾根上に位置する（第1図)。この沖積地北側山裾には遺跡が点在し，それぞれ尾根ごとに遺跡名を付しているが，関連する遺構遺物も存在することから一遺跡と考えることもできる。

調査は当初迫三方塚古墳だけが対象であったが，横穴式石室の主軸方向と，それに直行するように設定したトレンチから弥生式土器や住居址などが出土したため，周辺の斜面にも確認トレンチを設定した。その結果弥生時代や中世の遺構が存在することが予想されたので，迫遺跡として全面調査することにした（第2図)。

発掘にあたっては20mのグリッドを設定し，必要に応じ，10m，5mのグリッドを設定した。しかし，グリッドごとに発掘するという方法をとらず，遺構の検出されたトレンチを中心に掘り進めてゆく方法をとった。

遺跡の土層は，尾根上では褐色をした表土層があり，その下はすぐ礫を多く含んだ黄褐色の第三紀層がある。谷部では黒色土が厚く堆積し，その下は崖錐の堆積物となっている。

遺構の検出は，黒色土中では識別が困難なためすべて地山面（第三紀層）で行なった。

第2節　迫三方塚古墳

I　石室（第3図～第5図）

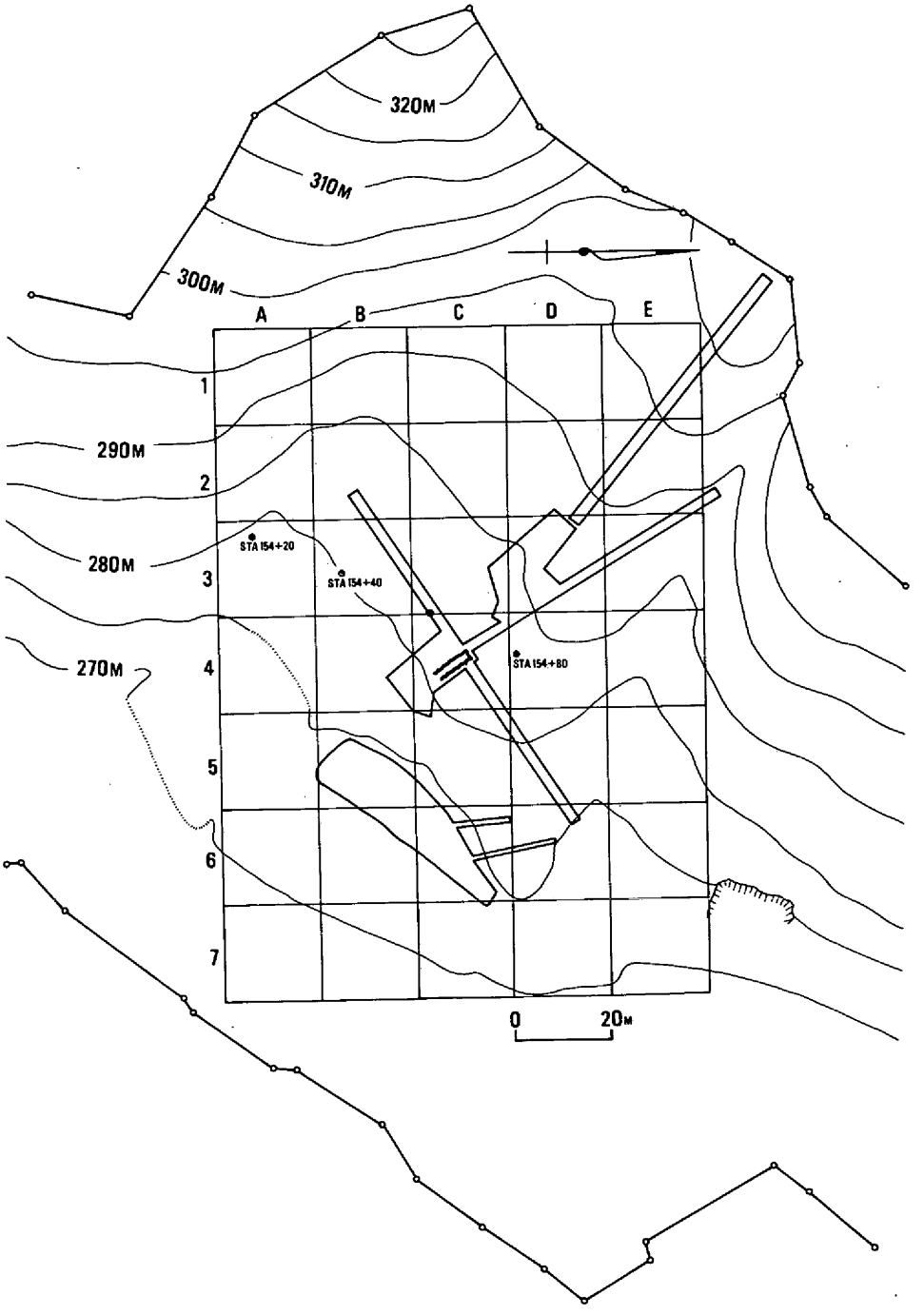
古墳は尾根の先端近くに位置し，南東方向に開口する横穴式石室である。前述したごとく，地権者の誤解によって天井石などが持去られてはいたが，側壁などは比較的良く残存していた。

石室内の箱式石棺も蓋石は1枚しか残存しておらず，古墳の周辺にその石材が散乱していた。

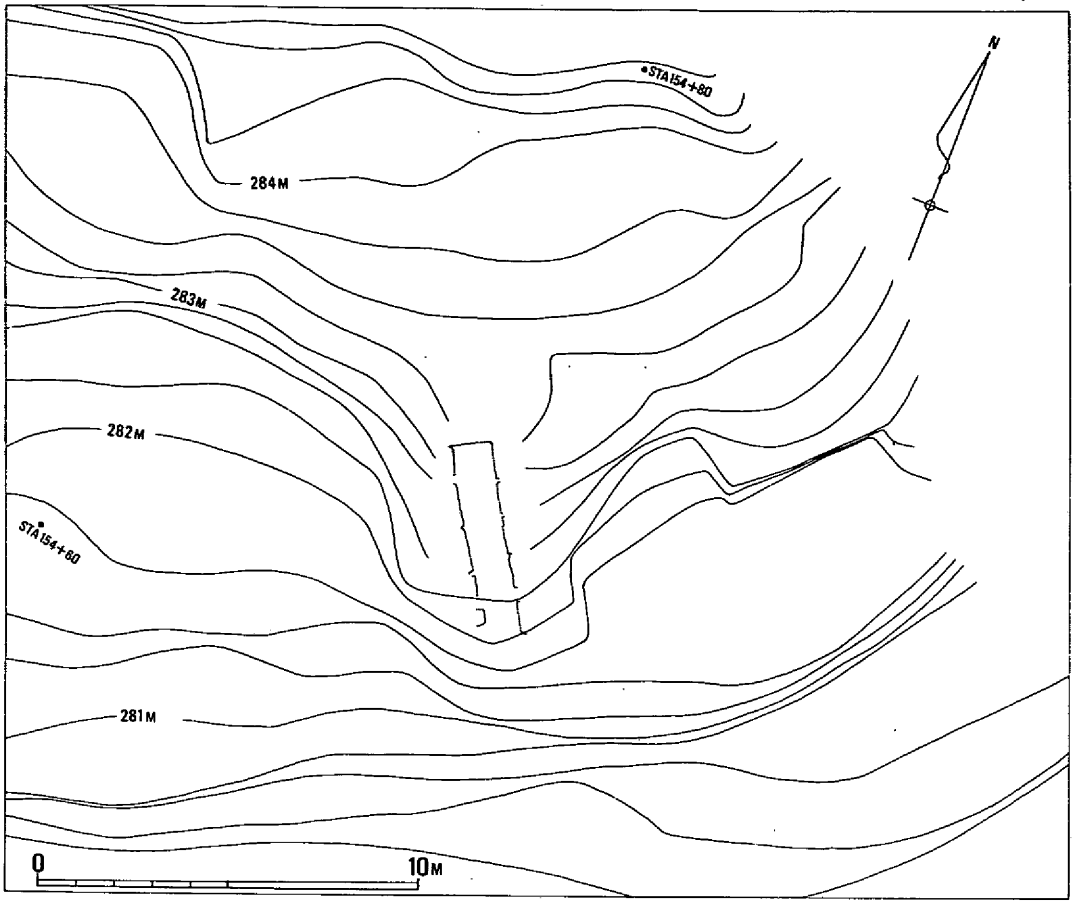
墳丘はすでに流失しており，周溝なども認められなかった。

石室は無袖式のやや胴張りを呈する横穴式石室である。弥生式土器を包含する黒色土層，さらに下の黄褐色土層を「コ」の字状に掘り込み，その中に構築されている。

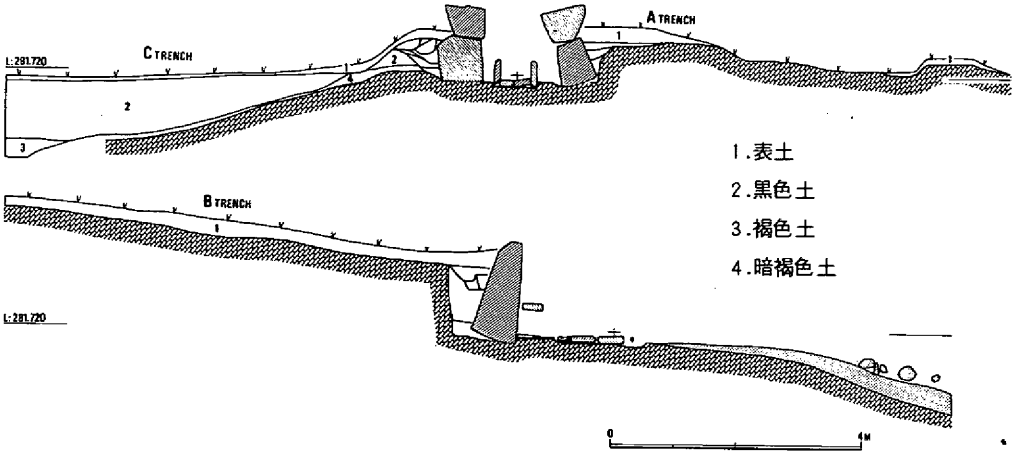
石室内には板状の石を使用した箱式石棺が奥壁に接して作られている。小口の石はすでに持去られ



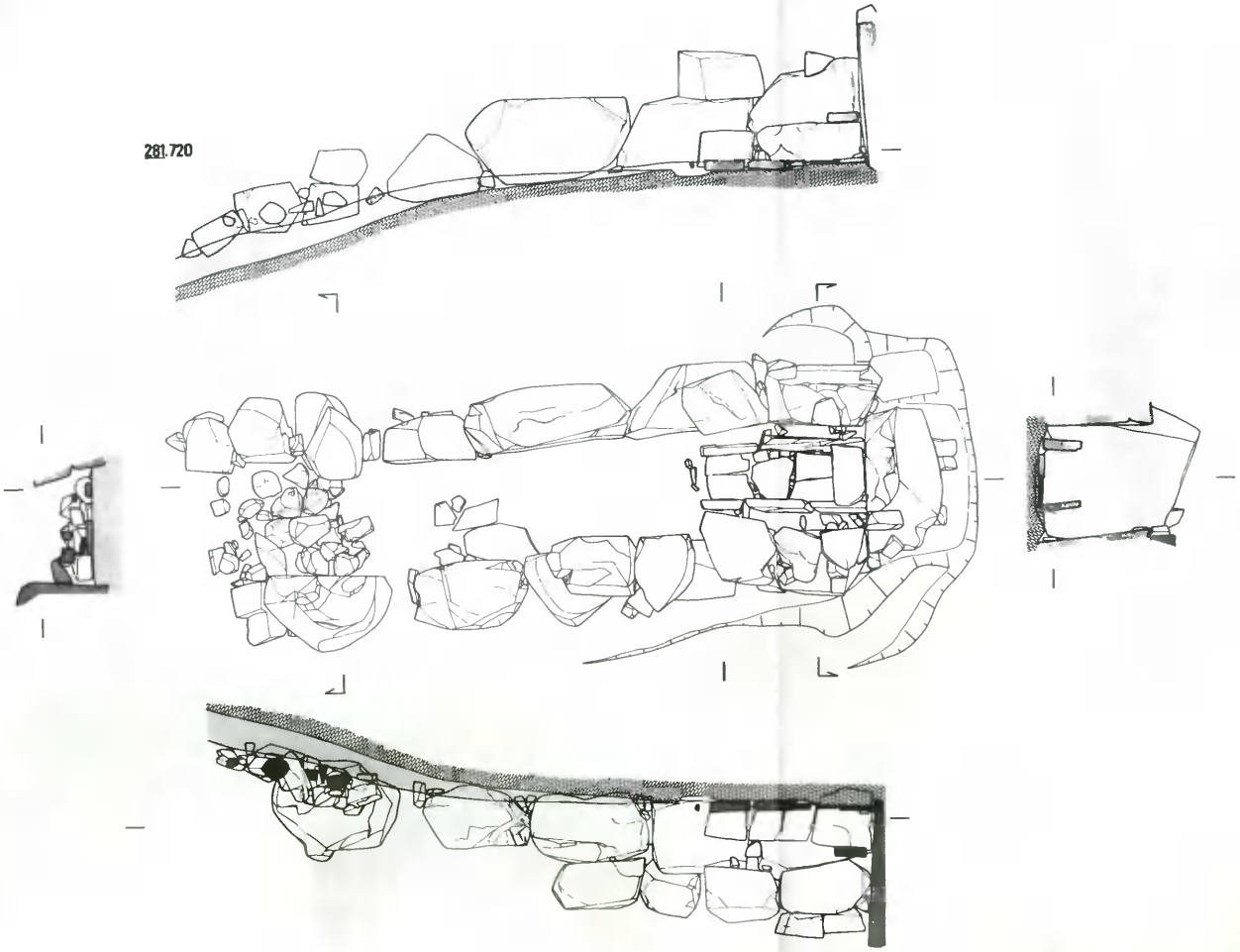
第2図　迫遺跡・迫三方塚古墳地形図とグリッド設定図



第3図　迫三方塚古墳地形図



第4図　迫三方塚古墳縦・横断面図



第5図　迫三方塚古墳横穴式石室実測図

ていたが，痕跡は残っていた。

床面には敷石があったものかどうか断定できないが，一部板石が残存し，また古墳周辺にも石棺以外の板石が散乱していることから，板石を敷いていたとも考えられる。入口付近では地山面が傾斜するため，黄褐色土を含む黒色土を敷いて床面としている。

入口には閉塞石が若干残存していた。

II　遺物（第6図～第8図）

遺物は箱式石棺内からは出土せず，すべて棺外からである。大まかに遺物の分布をみると石棺の両側と入口に近い場所からと出土している。

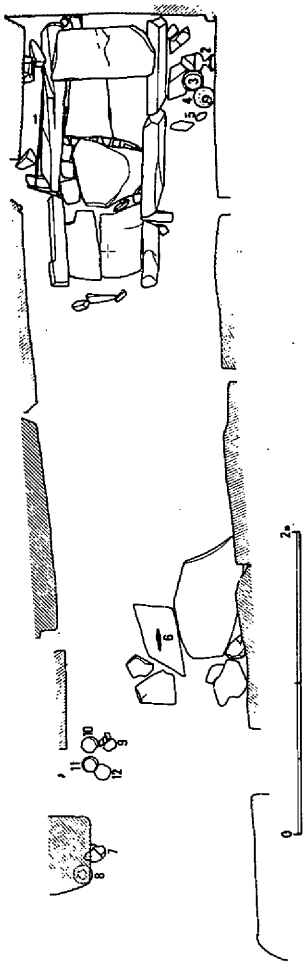
＜須恵器＞　（第7図）

杯（第7図1～2），やや小型化し，たちあがりは内傾し，非常に低い。底部は平坦になり，ヘラ削りはおこなわれず，不規則なナデによって仕上げられている。胎土が荒いためか，器表はザラザラとした感触がする。色調は暗灰色を呈する。

蓋（第7図3～7），3以外は小型化が著しいものであるが，7は短頸壷の蓋と考えられる。

口縁部と天井部との間にクセをもち，天井部は平坦に作られる。3・4は天井部をヘラ削りによって仕上げているが，他のものはナデによる仕上げである。

高杯（第7図9～11），9・10は脚部に透しはなく，裾部が大きくひろがるものである。いずれも胎土が荒く器表はザラザラしている。11は脚部はないが，おそらく脚は長く，透しをもつものではなかろうか。



第6図　迫三方塚古墳遺物分布図

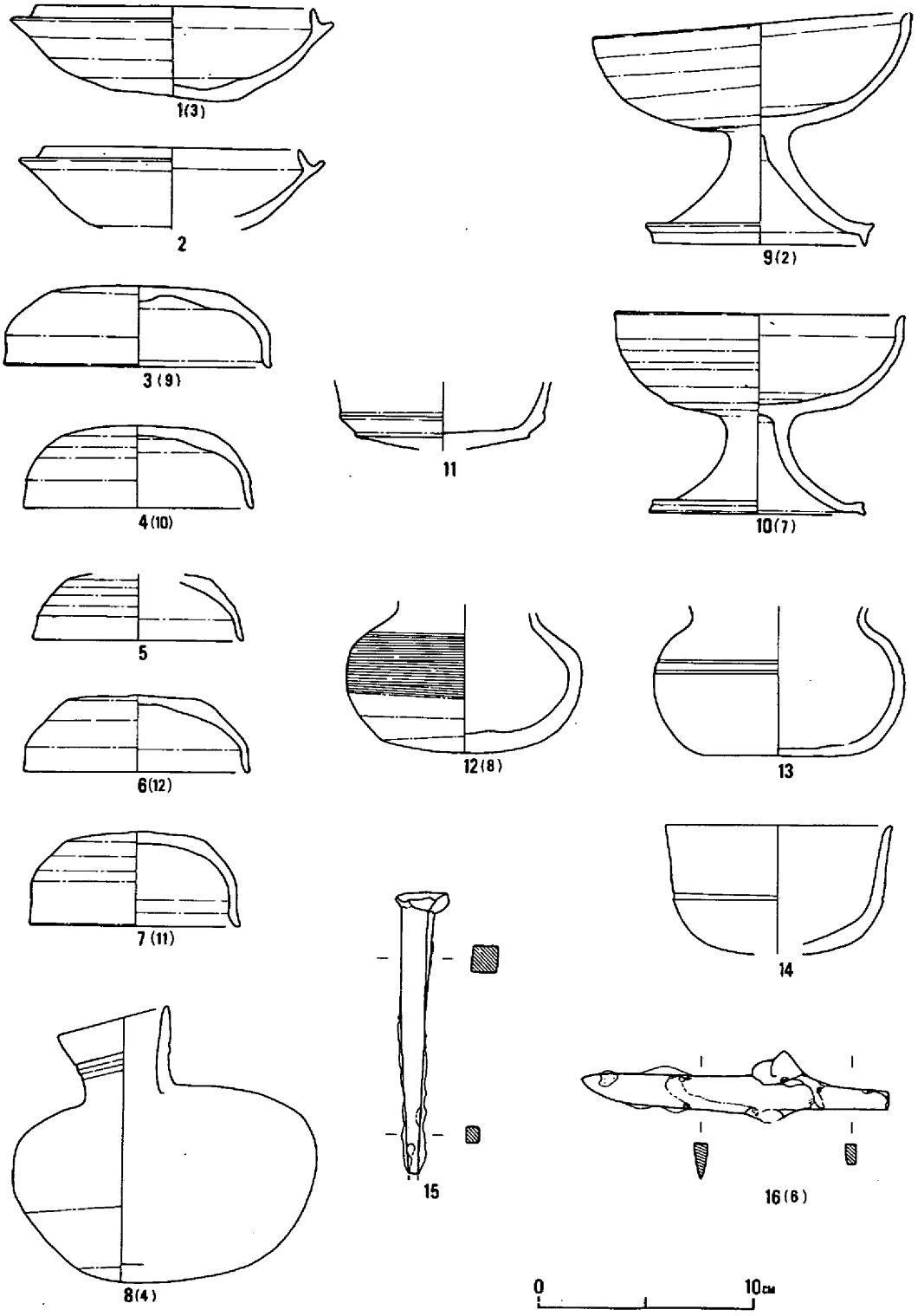
短頸壷（第7図12～13），いずれも口縁端部を欠損しているが，12は短かくほぼ直立するものと思われ，13は短かく外方に折りまがるものであろう。12は肩部以下クシ状の工具により整形がなされている。13は肩部に沈線が2本めぐり，底部は平坦である。

椀（第7図14），椀か杯か迷ったが，一応椀とした。体部および口縁部はゆるく外反しながら立上り，端部はやや尖りぎみにおさめている。体部と底部の境に沈線状の段がめぐる。

平瓶（第7図8），器体は概して丸味をもち，口縁部はやや開きぎみで，沈線が2本めぐる。

＜鉄器＞

鉄刀（第8図），箱式石棺の横に置かれていたもので，やや内反りをなす。全長83㎝，刃幅3㎝で両関に造られ，茎に目釘孔が一ケ所みられる。



第7図　迫三方塚古墳出土遺物〈( )内は遺物分布図の番号〉

刀子（第７図16），石室床面に敷いてあったと考えられる板石の上にのっていたもので銹化が著しいがほぼ全形をとどめていた。全長14cm，刀幅1.7cmを測る。

鉄釘（第７図15），先端部は欠損しているが，大形のもので断面はほぼ正方形を呈する。

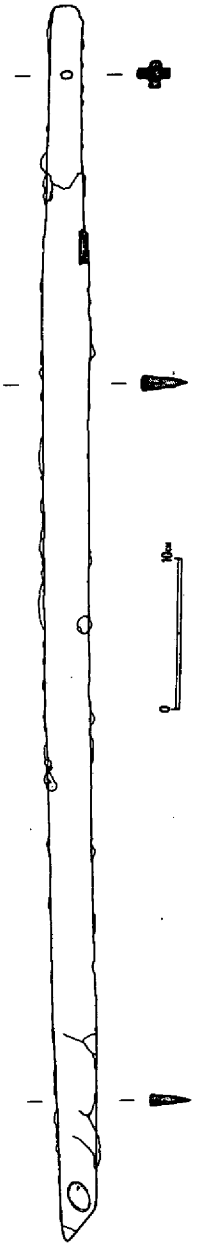
さてこれら石室内出土遺物は分布を見ると２つに分れる。１つは奥壁に接した箱式石棺の両側に置かれたもので，明らかに石棺内の被葬者に伴うものと思われる（第８図，第７図１・８・９）。

一方入口に近い所に存在した一群は追葬時のものとも考えられるが（第７図３・４・６・７・10・12・16），須恵器で比較するかぎり，明確に分れるとは言いがたい。ただ石棺の両側に置かれていた一群の須恵器の方が，やや古そうな感じがするのと，鉄釘が存在するところから，もう一人埋葬されていた可能性が強い。

石室中央部はすでに掘られており，原位置で遺物を検出することはできなかった。須恵器は多少の新旧関係はあるかも知れないが杯においては小型化の傾向をもち，立上りも短かく内傾し，高杯も透しをもたず裾が大きくひろがり，平瓶などが出現していることを考えれば，６世紀末ないし７世紀初頭のものと言える。

表１　**迫三方塚古墳出土須恵器一覧表**

図版番号	器種	口径	器高	ヘラケズリ	焼成，胎土	色　　調
7図—1	杯	12.6	4.3	なし	良好，砂粒含む	外面，暗灰色・内面，灰白色
2	杯	11.6	3.6	なし	良好，砂粒含む	灰白色
3	蓋	12.0	3.7	不規則	良好，砂粒含む	灰白色
4	蓋	10.4	3.8	左方向	やや不良，砂粒含む	灰白色
5	蓋	9.6	3.0	なし	良好，砂粒含む	青灰色
6	蓋	10.0	3.5	なし	良好，砂粒含む	青灰色
7	蓋	9.4	4.3	なし	良好，砂粒含む	灰褐色
8	平瓶	5.0	14.0	右方向	良好，砂粒含む	青灰色
9	高杯	13.4	9.2		良好，砂粒含む	青灰色
10	高杯	14.9	10.0		良好，砂粒含む	青灰色
11	高杯				良好，砂粒含む	青灰色
12	短頸壺				良好，砂粒含む	青灰色
13	短頸壺				不良，砂粒含む	暗灰色
14	椀	10.6	7.5		良好，砂粒含む	青灰色



第８図　迫三方塚古墳出土遺物

第3節 迫　遺　跡

遺跡は南面する緩斜面，迫三方塚古墳が位置する尾根上に広がっているものと思われる。西側の谷をへだてて新市谷遺跡が存在し，眼下には西川と神代川によって形成された沖積地が広がっている。

迫三方塚古墳発掘中に弥生時代の住居址が検出され，全面調査を行うことになった。ただ遺構の存在が予想される場所は果樹園とか畑によって削平を受け，ほとんど遺構が残存していないことがトレンチによって確認できた。そこでトレンチに遺構が検出された場所を中心に，削平を受けていない場所だけを調査した。

その結果，弥生時代の住居址，箱式石棺，中世の土壙などが検出された（第9図，10図）。

I　遺構・遺物

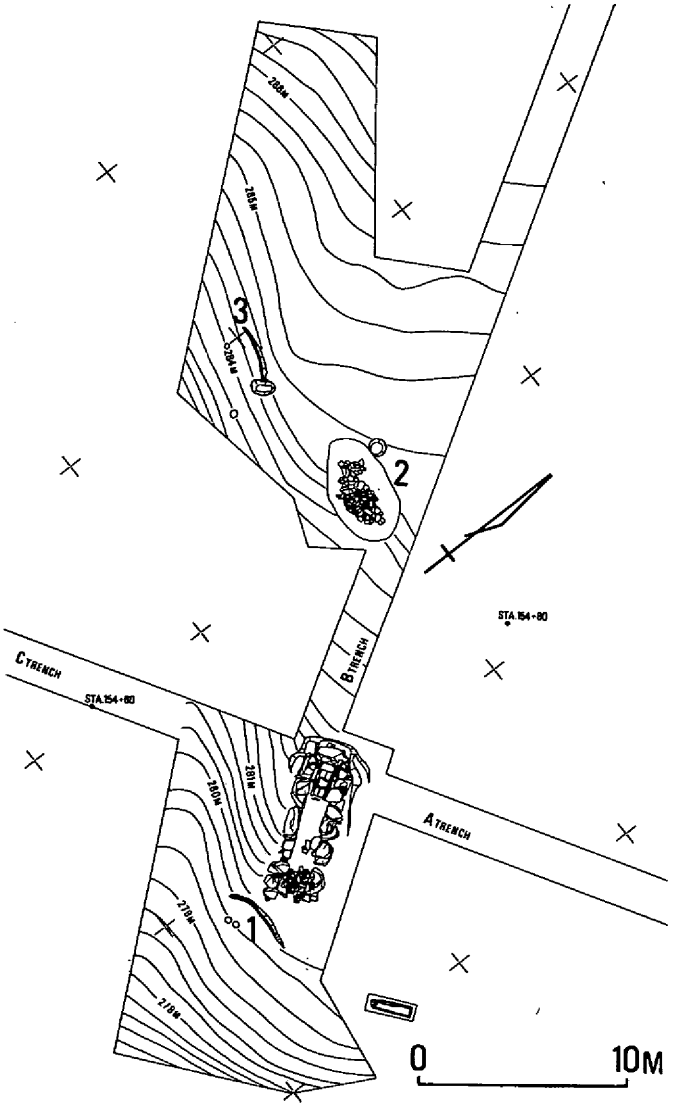
No. 1　住居址（第11図1）

No. 1　住居址は迫三方塚古墳の石室入口の下で検出された。急傾斜のため壁の一部と床面を少し残すだけであった。埋土は黄褐色土や小礫を含む黒色土である。

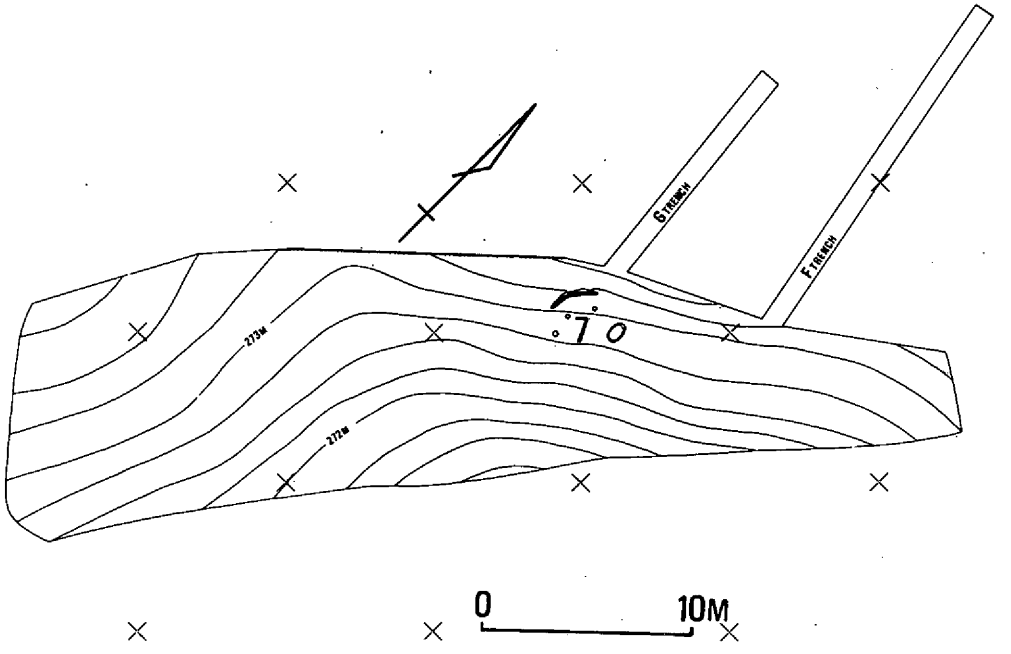
住居址床面ないし埋土中からも遺物は検出されず時期は断定できないが，周辺から出土した土器などから考えれば弥生時代中期後半～後期初頭頃ではないかと思われる。

No. 3　住居址（第11図2）

迫三方塚古墳の西北部，谷に向う斜面で検出された。溝を一部残すのみで，溝端部を時期不明の土壙に切られてい



第9図　迫遺跡遺構全体図（1）



第10図　迫遺跡遺構全体図（2）

る。埋土は黒色土で，遺物は弥生式土器が溝の中より出土している。

＜土器＞　（第14図12～13）

12は甕になると思われ，肩にクシ状工具による波状文がめぐる。外面は刷毛整形がなされ，内面下半はヘラ削りがおこなわれる。

13は外面ヘラ磨き，内面はヘラ削りにより仕上げられている。

これらの土器は内面下半にヘラ削りがなされることや，底部の形などから弥生時代中期後半のものと考えられる。

No. 7　住居趾　（第11図3）

迫三方塚古墳の東側40mほどの所，尾根から谷に移行する緩やかな斜面から検出され，溝の一部と柱穴が残存するのみであった。

遺物は埋土の中から一片土器が出土しているが，この住居址の時期を決定するには資料不足と言えるであろう。

＜土器＞　（第14図14）

口縁部は上方に拡張され，横ナデによる凹凸がみられる。肩にはヘラ状工具の先端による列点文がめぐる。胴内面はヘラ削りで仕上げられている。

この土器の示す時期は弥生時代終末か，古墳時代初期と考えられる。

No. 2　土壙　（第12図）

迫三方塚古墳の西北尾根上で検出したもので，不整な楕円形を呈するものである。内部には礫が集

積されているが，板石も認められる。埋土は炭を含む褐色土が存在するが，床面になっても地山が現われず，地下2m以上にわたり黒色土や小礫を多く含む土が存在した。さらに土壙の長軸方向にトンネル状の穴が検出され，水がその穴の奥より湧いてきた。この土壙の山側にはさらに土壙が検出され，同じような方向にトンネルがのびていた。

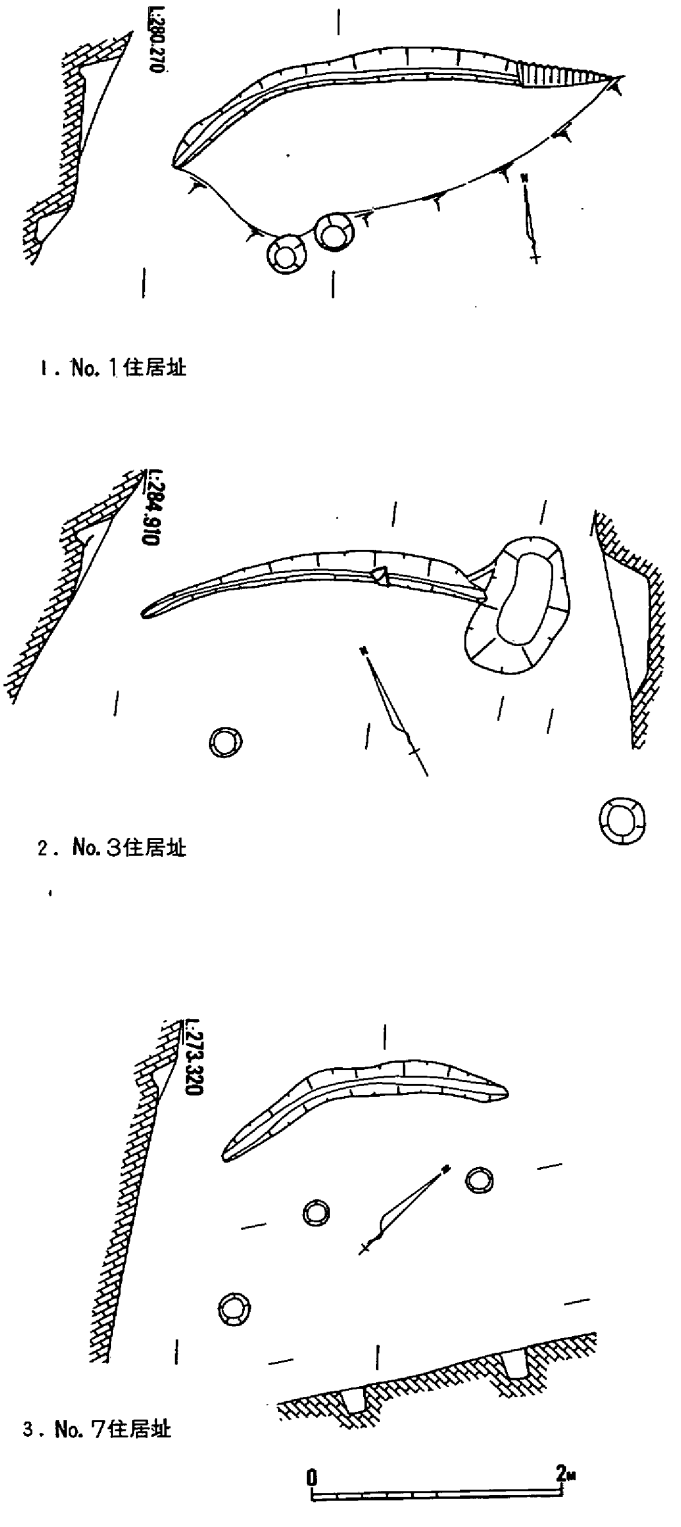
当初この土壙の性格がわからなかったため，全部掘ってみたが，土壙内の埋土は小礫や黒色土がまざり，水が通りやすい構造になっていた。さらにこの辺の小字名が「水穴」と言われていたことから，これらの土壙は地下水の水路が部分的に陥没したものと考えるようになった。

No.2 土壙はその窪地を利用したものと思われ，集石の上部より土鍋が出土している。

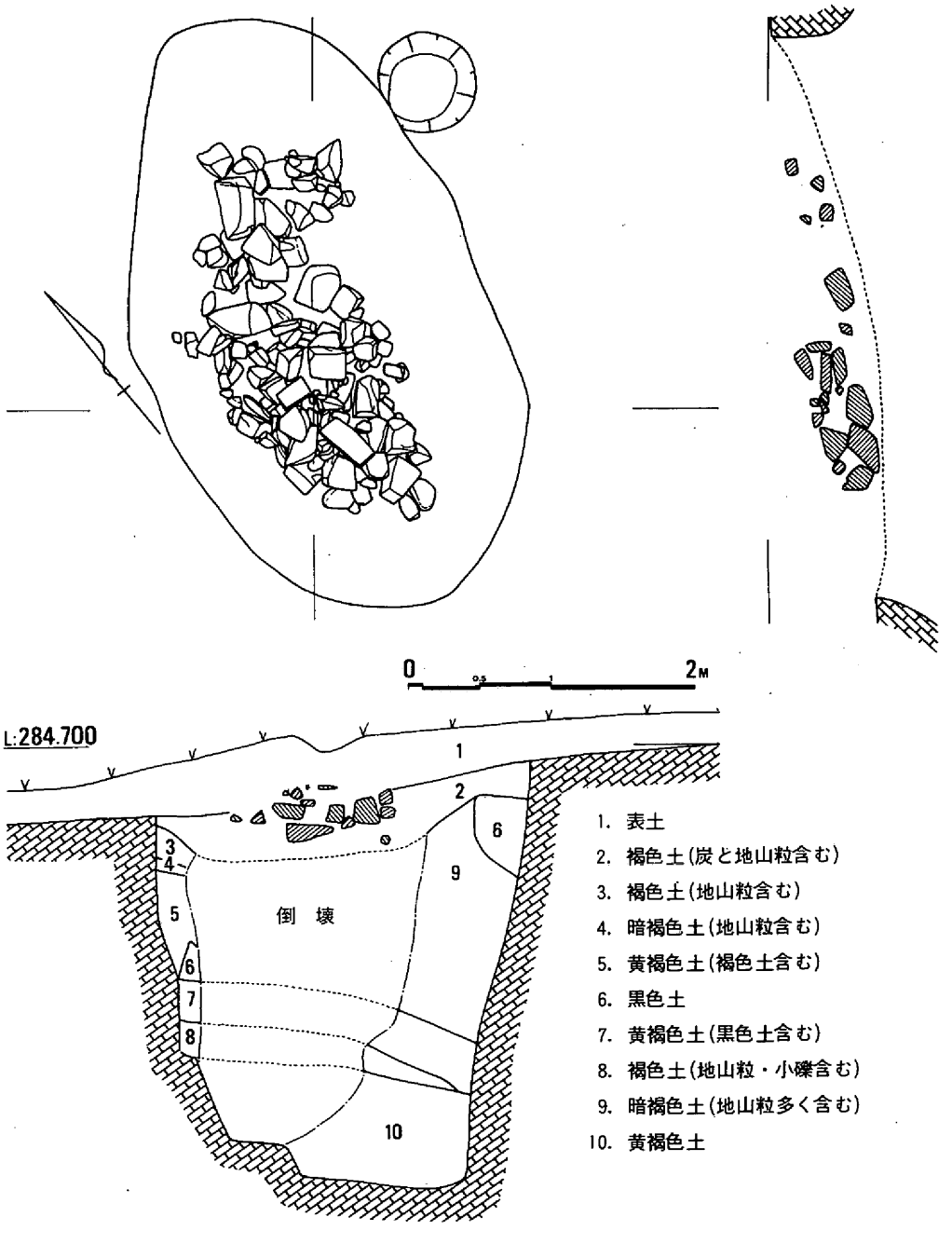
＜土器＞ （第14図15）

「く」の字状に外反する口縁をもち，内外面とも刷毛状工具により丁寧に仕上げられている。外面にはススが厚く付着している。

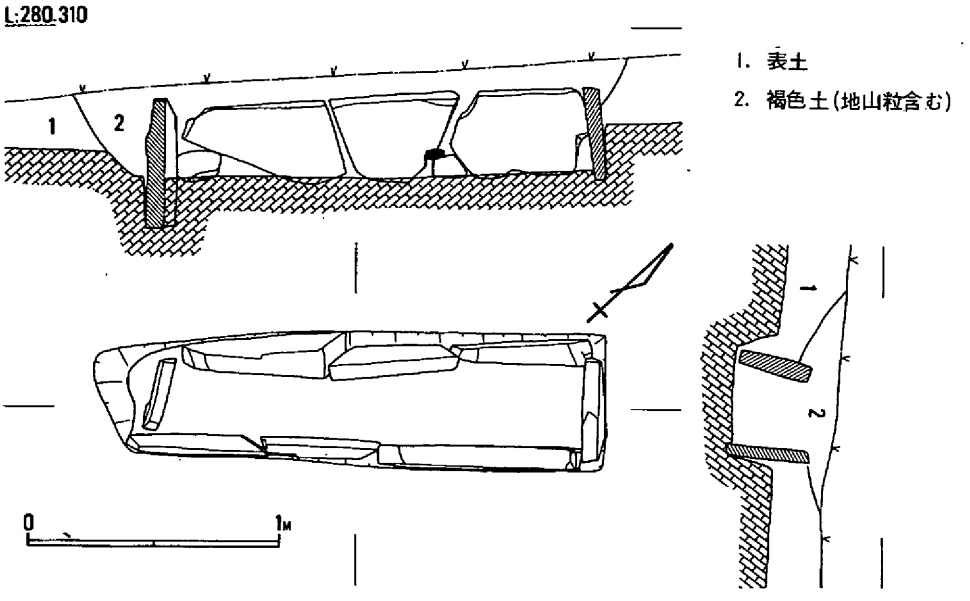
中世の土鍋であろう。



第11図 No.1・No.3・No.7住居址平面図・断面図



第12図　No.2土坑平面図・断面図



第13図　箱式石棺平面図・断面図

箱式石棺　（第13図）

迫三方塚古墳の東側に小さな祠があり，その下から検出した。

この箱式石棺は，地元の人に知らされ掘ったものである。いつごろか不明であるが，開墾中に刀を掘り出したので，たたりを恐れて再び埋め戻し，祠を作ったと言うことであった。その言葉通り祠の下から箱式石棺が検出され，一度掘ったことが確認できた。しかし刀はなく，銹化してなくなったものか，刀の話しは記憶違いだったのかはわからない。

遺物がまったく無いため時期は不明であるが，板石でしかも長さが1ｍ80cmもあることから，後期古墳以前の可能性が強い。

Ⅱ　遺構に伴なわない遺物

＜土器＞　（第14図）

1は口縁部が強く外反し，端部は少しつまみ出している。外面にはススが付着し，淡茶褐色を呈する。弥生時代中期中葉に属する。

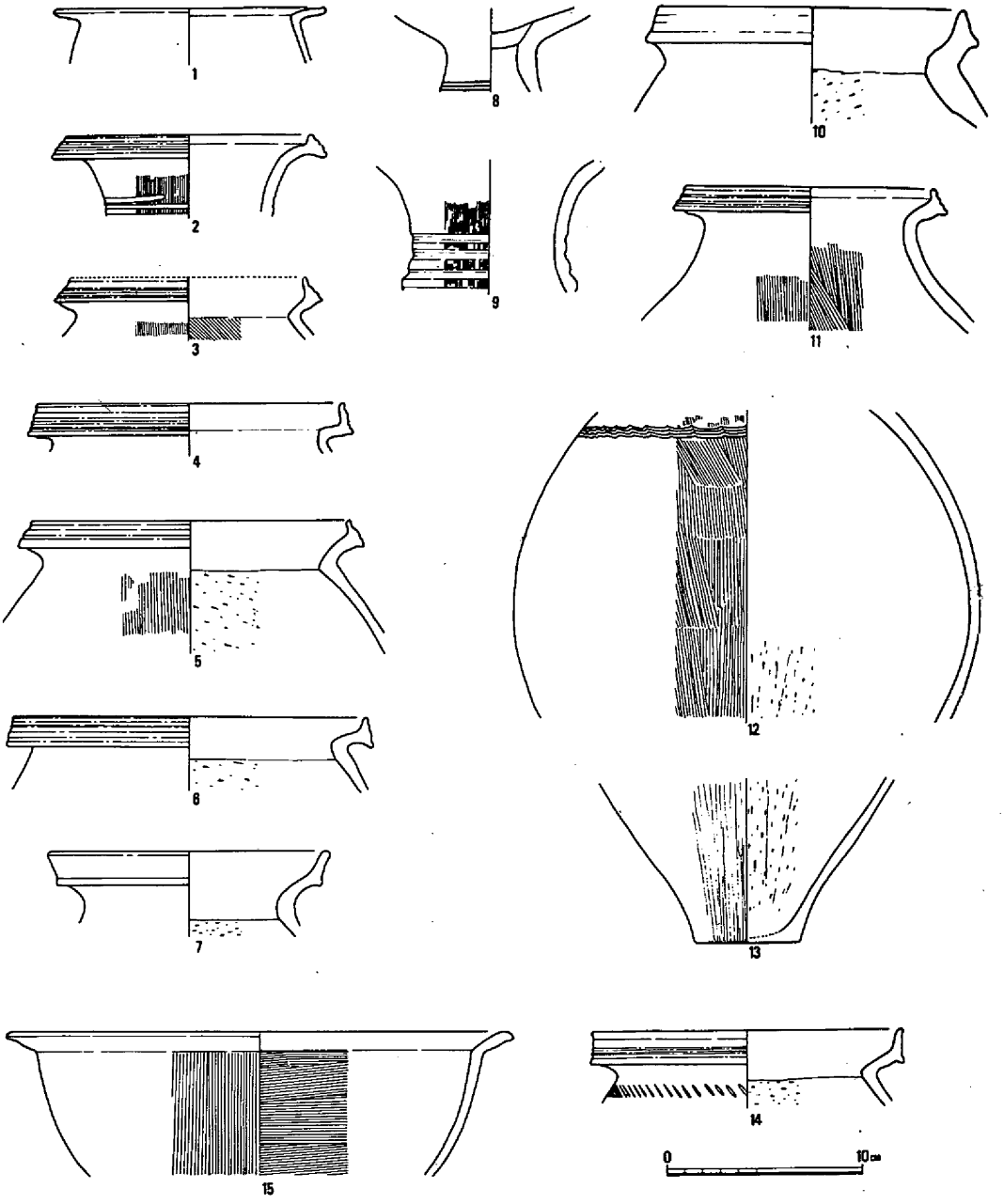
3は甕で，口縁部は内傾しながら上方へ拡張され，凹線が施される。内外面とも刷毛目が認められる。

4も甕で，上方に拡張された口縁に凹線を施したものである。

8は高杯で，脚部にヘラによる沈線がめぐる。

9は壺で，頸部に刷毛による整形後凹線が施される。

以上3・4・8・9の土器は弥生時代中期後半のものであろう。



第14図　迫遺跡出土の遺物

1～9	遺構に伴なわない土器
10～11	No. 1住居址周辺出土土器
12～13	No. 3住居址出土土器
14	No. 7住居址出土土器
15	No. 2土坑出土土器

5・6は甕で，拡張された口縁部へ退化した凹線が残る。内面はヘラ削りで仕上げられる。時期は弥生時代後期前半と考えられる。

7は外反しながら上方へ拡張された口縁をもつもので，古式土師器と考えられる。

第4節　小　　結

I　迫遺跡について

迫遺跡で最も古い遺物は弥生時代中期中葉の土器である。この時期の遺構は検出されなかったが，新市谷遺跡側の谷に設定したトレンチ内より出土した。この時期の土器は新市谷遺跡，さらに谷をはさんで南西の尾根上にある古坊遺跡などでも少量ずつ出土している。したがって小さな集落が各地点ごとに存在したのかもしれない。

住居址は全部で3軒検出できたが，そのありかたはかなりの距離をおいて点在している状態であった。もちろん全面発掘されたわけでなく，また果樹園や畑によって削られた部分も多いとは思うが，集落を呈していない。時期も比較的よくわかるNo. 3住居址以外は不明な点が多く，集落の構成などは知ることはできない。

ただ迫遺跡で遺物の多い時期は弥生中期後半〜後期初頭であり，その時期にもっとも活発にこの地が利用されたであろう。

II　迫三方塚古墳について

古墳は西川と神代川合流地点に発達した沖積地を見下す尾根上に位置する。

石室中央部は撹乱されていたが，奥壁に接する箱式石棺の両側と入口周辺からはほぼ原位置で遺物を検出できた。したがって中央部は不明であるが，最低二人の被葬者が考えられるのではなかろうか。

最初の被葬者は石棺内に埋葬されており，石室も7 mと，この地域においては最も大きなクラスに属する古墳を構築した人間であろう。

眼下の西川と神代川の合流地点は古代の交通の要地であった。西川沿は出雲へ，神代川沿は備後へ，さらに西川を下れば備中の中枢部へ出られる。このような要地を見下し，さらに神代川流域に点在する古墳群への入口に存在することなどから，神代川ないしその流域を管理していた首長と考えられないだろうか。この合流地点の沖積地に面しては他に横穴式石室は存在せず，迫三方塚古墳だけが堂々と尾根上に構築されているのである。

追葬は最初の被葬者より少し後に行なわれたものと思われ，須恵器を比較しても時間的な差はあまり感じられない。

この古墳の築造時期は6世紀末ないし7世紀初頭と考えられるが，下神代地域においては6世紀後半に爆発的に古墳が築造され，7世紀になって築造される例は少ない。現在までのところでは下神代地域で一番新らしい時期の古墳と考えられる。　　（竹田）

第4章　新市谷遺跡の調査

第1節　トレンチ調査

新市谷遺跡の調査は，その範囲を確定する調査から着手した。頭初の新市谷遺跡の範囲は，北限については迫古墳群までであったが，南限については，必ずしも明確ではなかった。また，同所は，サービスエリアとなるため，道路用地巾も広く，最大巾は100m以上の距離があった。そのため，遺構の密集する範囲を限定する必要があった。そこで，地形等を考慮に入れ，グリッドに沿うトレンチを設定した。グリッド（第15図）は，調査着手前に，測量会社により，20m方目の杭打ちが完了していた。グリッド方向は，磁北を基準として設定した。

トレンチは，まず3列に沿うもの（3－1杭より3－5杭まで）を設定した。その結果（第36図下段）は，水田である3－5杭付近は上位河岸段丘上になり，地表より約1mで砂，円礫の堆積層であった。その層までは，灰色，もしくは灰褐色の土層となり，近世陶磁器が混入していた。また，下層の砂礫層には，遺構の存在する様子は見られなかった。以上のことから，この水田は，近世以後に成立（註1）したものとの結論に達した。3－4杭から3－2杭にかけては，斜面が急であり，トレンチにおいても遺構の存在は確認されなかった。3－2杭から3－1杭にかけては，緩斜面が見られたが，このトレンチでは遺構の存在は確認されなかった。以上のことから，3－2杭より上段に遺構が存在するものと予測して，1列，および2列に沿うトレンチを設定した。この両トレンチからは，多くの土器の出土と，住居址の一部を確認した。また，1列のトレンチより約10m北付近からは，斜面の傾斜が急になることから，北限をその付近に想定した。南限は，1列のトレンチにおいては，遺構は確認されなかったが，緩斜面がさらに12～13m南へ続くため，その付近に設定した。東限は，1－2杭と3－2杭を結ぶ線を想定したが，1列および2列の間は，若干東まで拡張するものと予測して，範囲を決定した。（第16図）以上の範囲を，新市谷遺跡の主体と考えて調査に着手した。

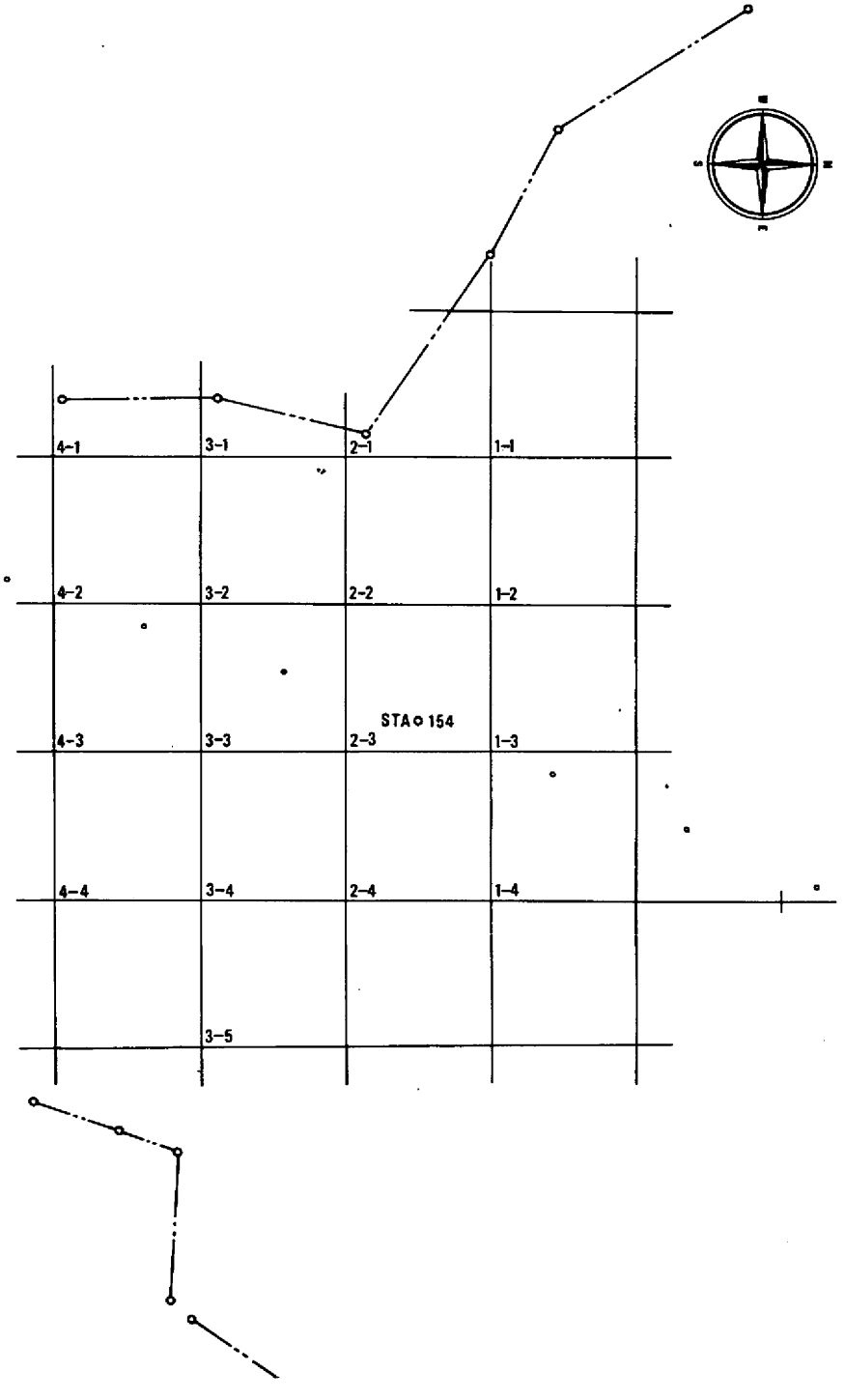
しかし，上記の範囲の南側に，小さな谷川を挟んで緩斜面があり，さらに尾根があった。また，その尾根上からは，箱式石棺が出土したことがあるとの情報を得たので，その確認を含めて，尾根上にトレンチを設定した。その結果，遺構は検出しなかったが，特殊器台片等が出土した。以上のことから，尾根上へ墳墓が存在するものとの予測し，調査範囲を設定した。

上記の経緯から，調査中は，尾根部分は新市谷遺跡南区としていたが，南区は，墳墓がその主体であるのに対し，新市谷遺跡は，集落址であるため，南区は，同所の小字名に依り古坊遺跡と命名した。

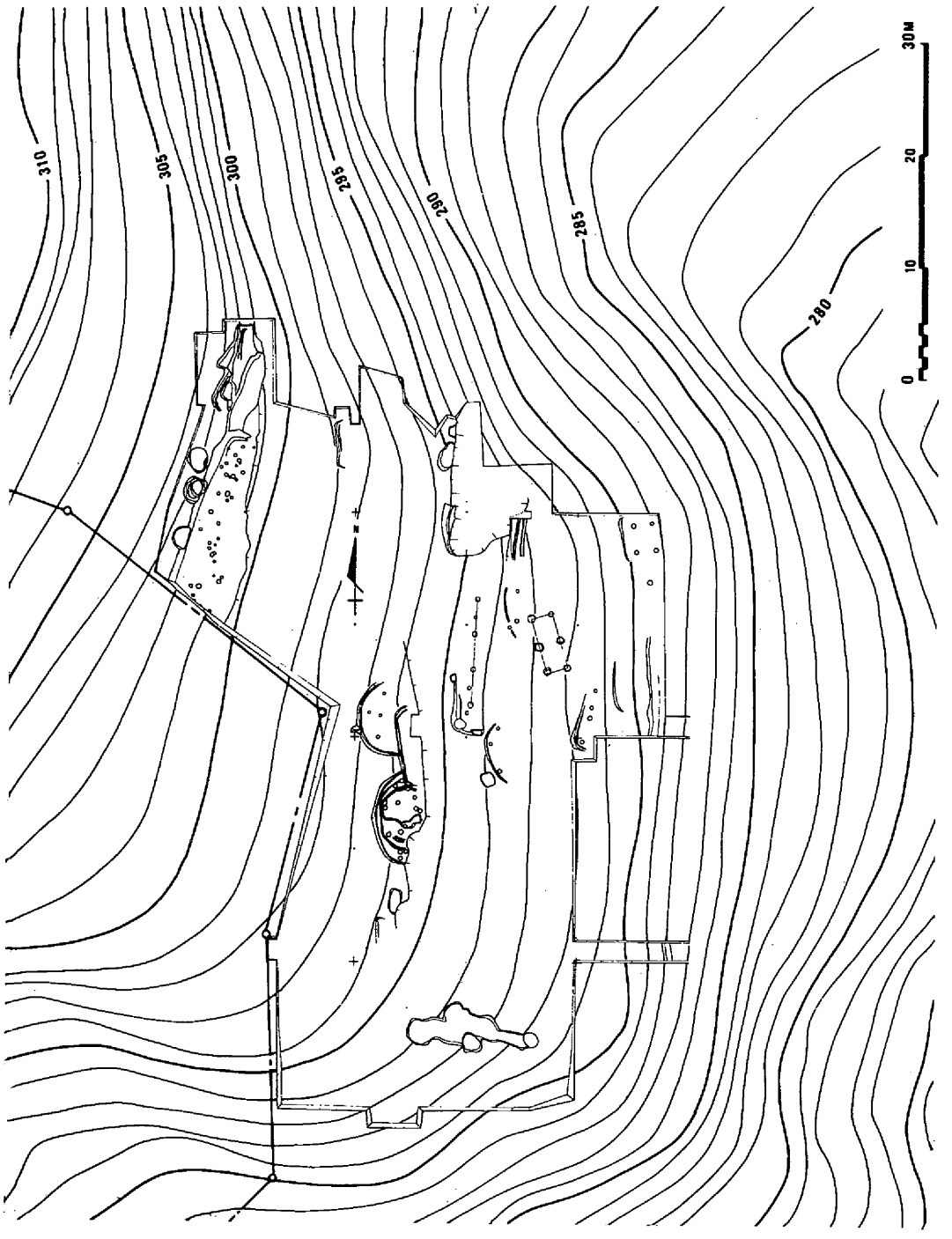
（井上）

註

註1　白根正寿『神郷町史』



第15図　新市谷遺跡グリッド設定図（S＝1/1000）



第16図　新市谷遺跡地形図（S＝1/600）

第2節 遺構 遺物

1. 住居址

新市谷遺跡において検出した遺構で，その数の最も多いのは住居址である。検出した地形が斜面であるため，遺存状態の良好なものは少なかった。以下，検出遺構について若干の説明を加えたい。また遺構より出土した遺物についても説明を加えてゆきたい。

2号住居址（No. 3） 第17図

2号住居址から5号住居址までの4軒を重複した状態で検出した。その重複した住居址の最上段の住居址である。住居址の埋土は，漆黒色土（クロホコ）が主体であるため，重複した住居址の一つ一つの全体は確認できなかった。確認できたのは，西側壁体の一部と，南側壁体の一部である。そして，それに沿う壁溝を検出した。住居址の平面形は，隅丸方形を呈するものである。

出土遺物 第19図—1

2号住居址より出土した土器で，図示できたのは1点のみである。その形状を見ると，やや外反する口縁部を持ち，その端部は丸くおさめられている。口縁部外面には，浅い凹線状のものが7～8条めぐる。内面は，わずかに屈曲する面を持っており，胴部内面は口縁部との境までヘラ削りが見られる。

3号住居址（No. 4） 第17図

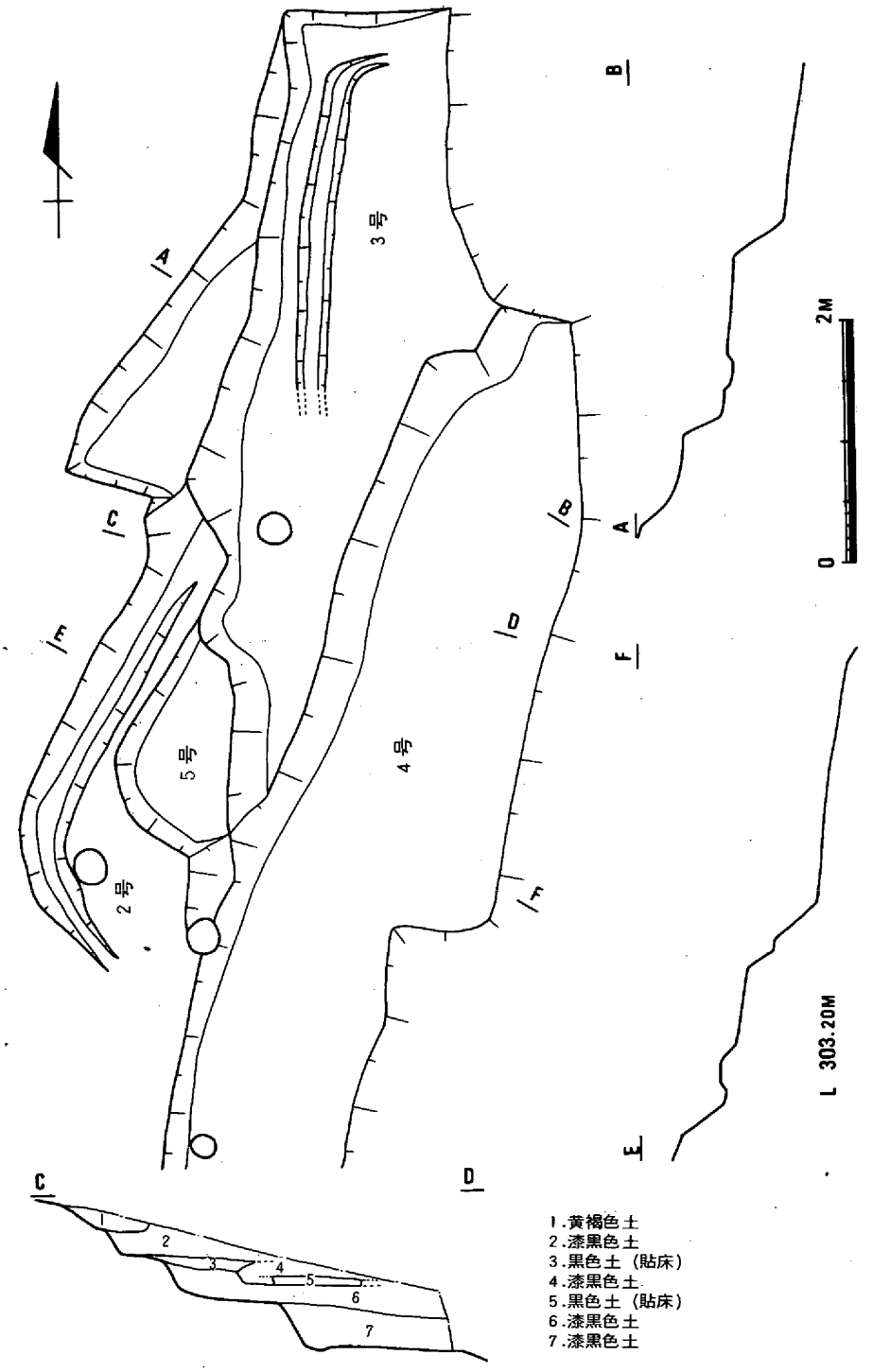
2号住居址の北側に，重複した状態で検出した。確認した遺構は，壁溝と床面である。確認した壁溝は，西壁部分を約3 mまで検出した。床面は，東側が削平されているため最大巾で1.3mまでを検出した。この住居址は，C—D断面でも観察されるため，西辺は4 m以上はあるものと推測される。住居址の平面形は，隅丸方形を呈するものである。

4号住居址（No. 7） 第17図

重複する住居址の最下位に検出したものである。西壁は，約8 mまで確認した。それ以南は，6号住居址により切られているため不明である。北壁は，削平を受けているが，かろうじてその一部が残存していた。検出した床面の最大巾は2 mである。住居址の平面形は隅丸方形を呈するものと推測される。

出土遺物 第19図—3～6

図示できた遺物は4点である。その内，3～5は床面において検出したものである。**3**は，外傾する口縁部の端部は丸く，外面には浅い凹線が6条施されている。胴部内面のヘラ削りは，口縁部の境まで見られる。胎土は砂粒を多く含み，色調は淡褐色を呈している**4**は，口縁端部がわずかに上下に広がるものである。体部はほぼ球形を呈し，内面のヘラ削りは，口縁部との境まで見られる。外面は，工具による，荒いカキ目が見られる。胎土は砂粒を多く含み，暗灰褐色を呈す。**5**は，鉢形の土器である。体部は，口縁部に向けてほぼ直線的である。口縁端部は平坦である。器体の内外面には，丹塗りが見られる。胎土は，砂粒を多く含み，焼成は良好である。**6**は，底部である。外面はクシ状工



第17図　2～5号住居地・平面図・断面図

具によるナデが見られ，内面は下から上へのヘラ削りが見られる。胎土には砂粒を多く含み，色調は褐色を呈する。外面および底部の二ケ所に籾の圧痕が見られる。

5号住居址（No. 9）　第17図

5号住居址は，西壁，南壁の一部を検出したのみである。以上の住居址の重複状態を，C—D断面に観察すると，全ての住居址の床面を見ることができる。2号，5号住居址の貼床と，3号住居址の床面が見られる。その重複状態は，4号が古く，3号，5号，2号と下から上へと新しくなる。出土遺物から，その時期を見ると，4号住居址出土遺物は，弥生式土器の後期前半の時期と考えられる。また，2号住居址出土の遺物は，弥生式後期の後半の時期と考えられる。

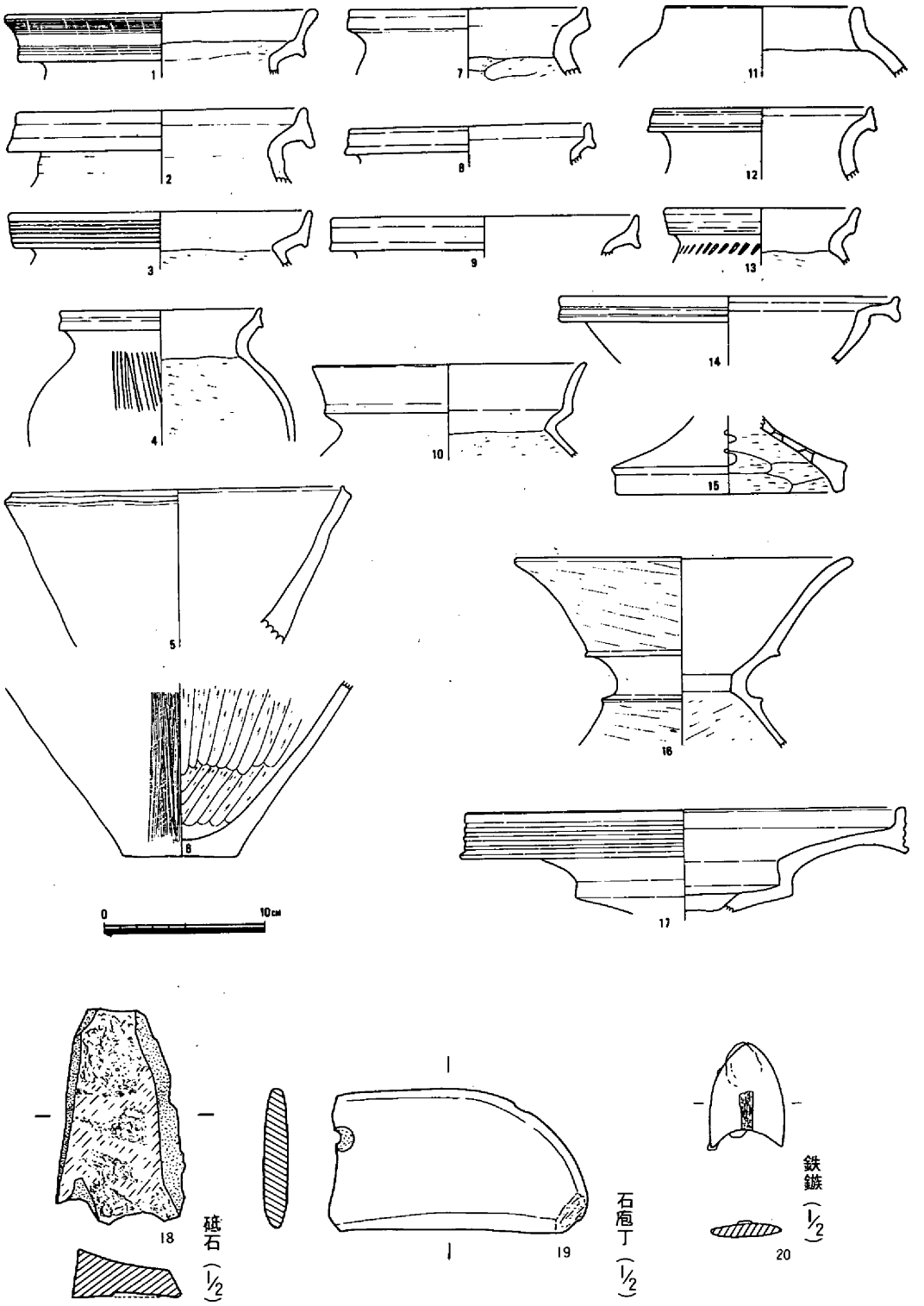
6号住居址（No. 8）　第18図

住居址の名称を使用したが，その形状からすれば，疑問がないでもない。自動車の用地巾の関係もあって，その全体は検出しえなかったが，西壁部分を約11mまで検出した。住居址は，黄色土の地山層を掘り込んで造るもので，床面はほぼ水平である。床面には，多数の柱穴を検出したが，4本までは直線的に連続するも，その半ばまで続くのみである。また，連続する柱穴列に対応する列は，検出した床面には確認されなかった。検出した床面の最大巾は，4.2mを測る。

出土遺物，第19図—7～17

7は，外反する口縁端部がわずかに肥厚するものである。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土は，砂粒を多く含み，暗褐色を呈している。8，9は，口縁端部が上下に拡張するもので，外面にはわずかに起伏が見られる。胎土は，微砂を含むもので，色調は淡赤褐色を呈する。10は，ゆるく外反しながら立ち上り口縁部の端部は丸い。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。内外面は，ヨコナデによる調整がなされており，外面にはススが付着する。胎土には，砂粒をやや多く含み，色調は淡褐色を呈する。11は，やや内傾ぎみに立上る口縁部の端部は丸くおさめられている。体部内面は，口縁部との境までヘラ削りがみられる。胎土は砂粒を多く含み，色調は赤褐色を呈する。12は，弧を描きながら外反する頸部に，口縁端部は上下に広がるものである。口縁端部外面には，浅い凹線状のものが二条施されている。胎土には砂粒を多く含み，色調は赤褐色を呈する。13は，やや外反しながら立上る口縁部で，端部は丸くおさめられている。口縁部外面は，板状工具によるヨコナデ調整が見られる。胴部外面は，ヘラ状工具による施文が見られ，内部は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土には，細砂を多く含み，色調は乳褐色を呈する。14は，高杯で口縁部が水平に広き，口縁端部が肥厚するものである。体部は，ゆるく弧を描くものである。器体の内外面には丹塗りが施されている。15は，高杯の脚である。脚部は，その端部に向けて大きく開くもので，2孔一対の円孔がうがたれている。内面は，全体にヘラ削りが見られ，外面には，脚端部を除いて，丹が施されている。16は，鼓形器台である。脚台の下半は欠損しているが，上台は，外反しながら，直線的に伸びるものである。筒部の内面は，平坦面が形成されておりほぼ垂直に作られている。上縁径が20.8cmを測るのに対し筒部の径は6.8cmを測る。脚台内面にはヘラ削りが見られる他は，工具によるヨコナデの跡が見られる。脚台内面を除いて丹が施されている。胎土は精良で，乳褐色を呈する。17は，高杯である。杯部は二段に造られており，端部外面には4本の凹線が施されている。器

第18図　6号住居址・平面図・断面図



第19図　出土遺物実測図

体の内外面には，入念なヘラミガキが見られる。脚部と杯部の境は，円盤状の粘土で充填するものである。器面の内外面には，丹が施されている。

7号住居趾（No. 6）　第20図

住居址は，4号住居址の東約7 mの位置に検出した。傾斜の急な部分に遺存していたため，残存状態は悪い。検出したのは，西壁と，それに沿う壁溝の一部である。住居址の平面形は隅丸方形を呈するものである。検出した床面の最大巾は50cmである。柱穴等については，検出できず不明である。西壁の一辺は約4 mを測る。一点鎖線は残存する床面の範囲を示すものである。

8号住居趾（No.20）　第20図

7号住居址の東南約10mの位置で検出した。検出した位置は，緩斜面であるが，後世の土取りにより大きく削平されており，検出したのは，その痕跡程度である。残存する住居址は，西壁と，それに沿う壁溝の一部である。住居址の平面形は隅丸方形を呈するものと推測される。検出した床面の最大巾は，40cmを測る。また，検出した西壁は，約4.2mを示すものである。

出土遺物　第23図—12～15

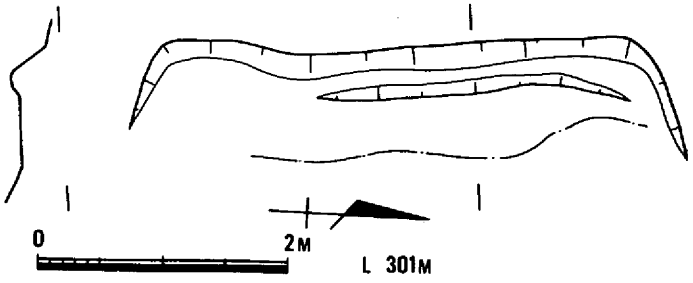
わずかに残存する。住居址の床面から一括で出土したものである。**12**は，口縁端部が上方に拡張するもので，その外面には，4本の凹線文が施されている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土は，大粒の砂粒を含み，色調は赤褐色を呈する。**13**は，「く」字状に外反した口縁部の端面が，上下に広がるものである。口縁端部外面には，3本の凹線が施されている。他の部分は，ヨコナデの調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。**14**は，鉢形の土器である。外反しながら，ほぼ直線的に伸びる体部と，口縁端部は，水平に造られ，浅い凹線が3本施されている。胴部の内外面は，横方向のヘラミガキがなされており，外面のヘラミガキは，小まかくなされている。胎土は，良好ではあるが砂粒を含み，色調は淡褐色を呈する。**15**は，底部である。外面は，入念な上下方向のヘラミガキが見られ，内面は，ヘラ削り後にナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を少々含み，色調は，暗褐色を呈する。

9号住居址（No.13）　第20図

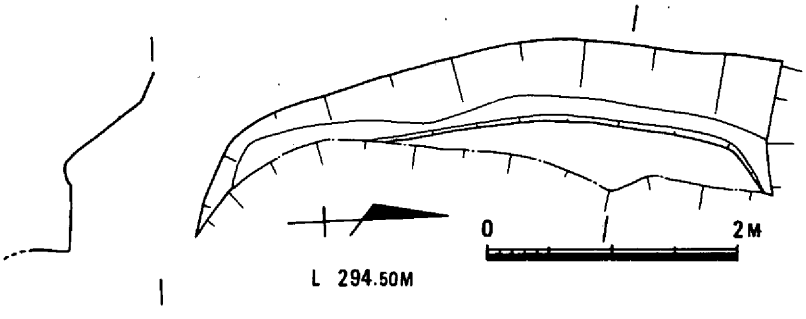
緩斜面に検出したのであるが，地表面までが浅く，壁体は，西壁を除いて流出していた。残存していた西壁は，全長約4 mを測る。検出した床面は傾斜しており，住居址本来の床面は流失したものと考えられる。床面には，4個の柱穴を検出した。柱穴間の距離は西側列，東側列の南北間は，それぞれに2.5mを測る。東西方向の距離は，北側列，南側列ともに1.8mを測る。

10号住居址（No.19）　第21図

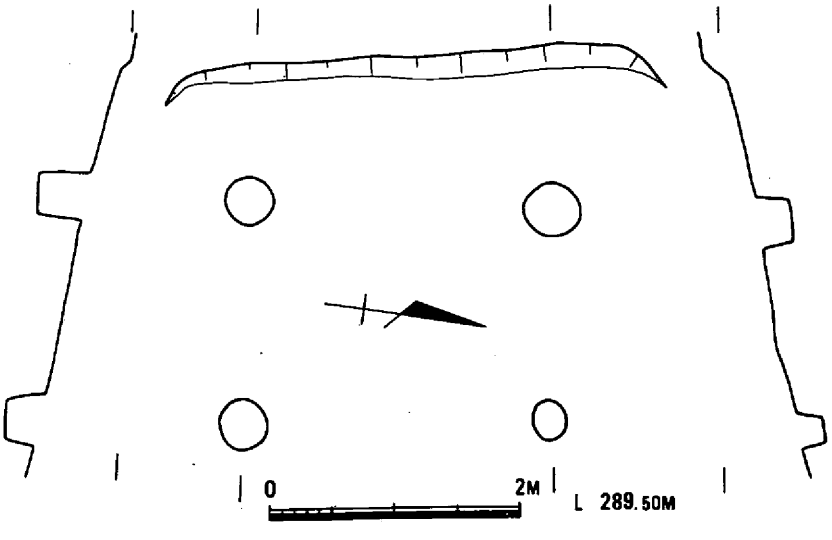
8号住居址の東約5 mの位置に検出した。北側は，後世の土取りにより削平されており，漆黒色土の堆積が厚く，検出は不可能であった。検出しえたのは，西壁の一部である。確認した壁の全長は約8 mを測る。床面は，漆黒色土に黄色土を含む貼床であり，その上面で，長頸壺，直口壺等を検出した。貼床の下面からは，2本の溝を検出した。この溝は，10号住居址に関わるものと考えられ，2回の建て変えが考えられる。また，北東の隅は，土壙により切られていた。この土壙は，北側が土取により削平されているため，その一部のみを確認した。この土壙より第21図—6の鼓形器台が出土した。



7号住居址



8号住居址



9号住居址

第20図　住居址・平面図・断面図

出土遺物，第21図—1～5

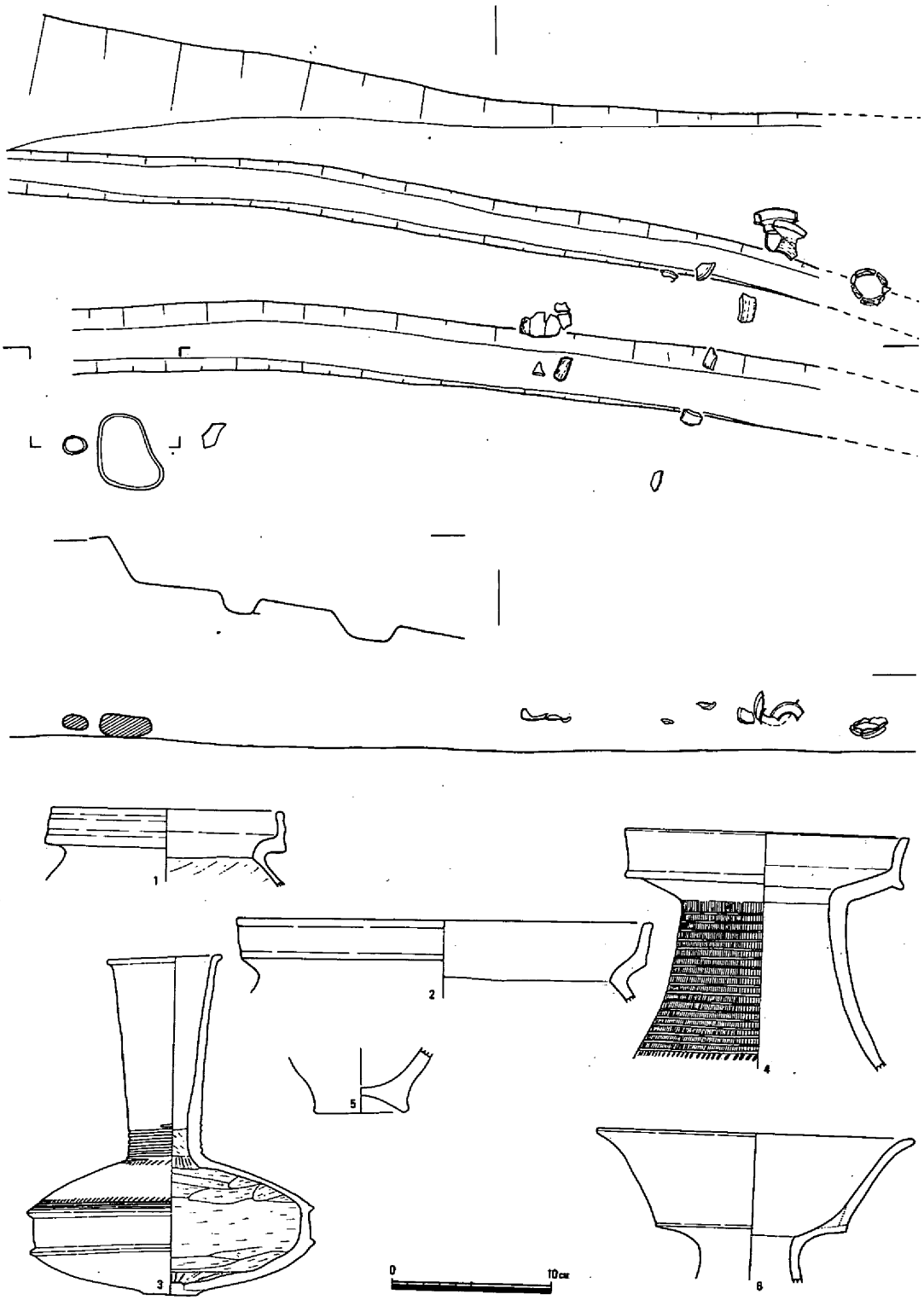
住居址の最終の床面上に一括で検出した土器である。1は，口縁端部が，やや内傾して立ち上るもので，外面には，浅い凹線状のものが2本見られる。胴部内面には，口縁部との境までヘラ削りが見られる。他の部分は，ヨコナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を含み，色調は淡褐色を呈する。2は，口縁端部が，やや外反しながら立上るもので，端部上面には，やや平坦面が見られる。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られ，他の部分は，板状工具による入念なナデによる調整がなされている。ヘラ削りの部分を除いて，丹が施されている。胎土は，良質で細砂を含み，赤褐色を呈する。3は，直口壷である。頸部は，やや開きながら長く立ち上るものである。頸部の最下部には，凹線が螺線状に施されており，その他は，入念なヘラミガキが見られ，内面も，凹線部分の内面がヘラ削りである他はヘラミガキ及び，ヨコナデによる調整が施されている。胴部は，算盤玉状であり，中央部に2本の凸帯を付し，上段の凸帯に接して，2本の凹線，さらに，ヘラによる施文が見られる。底部は，直径3㎝ほどに，わずかに平坦面が見られる。その部分は，粘土を充填することにより造られている。胴部内面はほぼ全体にヘラ削りがなされており，底部の一部分にしぼり込みの跡が残っている。ヘラ削り部分を除いて，全体に丹が施されている。胎土は良質で，乳褐色を呈する。4は，長頸壷である。口縁部は，やや外反しながら立ち上り，内外面はヨコナデ調整が見られる。頸部は，下方に向けて開くもので，外面は，上下のハケナデ後に凹線文が施されている。内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。ヘラ削り部分を除いて丹が施されている。胎土は良質で微砂を含み，赤褐色を呈している。6の鼓形器台は10号住居址を切り込む土壙より出土した。器台は，下半を欠損しているため，その形状は不明である。上台は，外傾してほぼ直線的に立上るもので，口縁部近くで，さらにゆるやかに外反するものである。器壁は，風化しているため，調整技法等は不明であるが，わずかに丹の付着が見られる。上縁径が19.8㎝を測るのに対し，筒部の径は6.1㎝を測り，筒部が細く引き締った形態を呈している。全体に器壁は薄く，筒部の長さも長い様相を示している。

11号住居址（No.18）　第22図

6号住居址の南東約15mの位置に検出したもので，トレンチ調査において確認した住居址である。この住居址は，新市谷遺跡で検出した住居址の中では，最も遺存状態の良好な例である。住居址は，西側は黄色粘質土層に掘り込まれているが，東半は漆黒色土層中に造られている。そのため，西半の壁は確認できたが，東半に関しては必ずしも明確ではない。図中の1点鎖線は，床面の推定線である。住居址の平面形は，概ね円形（楕円）を呈するものである。壁体に沿っては，壁溝が廻るものである。しかし，これも漆黒色土層においては明確でない。壁溝も，一部で2本を検出した。床面には，漆黒色土に，黄色粘質土を混じる貼床を検出した。破線の壁体は，この貼床の範囲を示すものである。住居址の確認しえた最大径は，6.95mを測る。床面には，4本の柱穴を検出した。直列に並ぶ3本の柱穴間の距離は，各々2mを測る。

出土遺物，第23図—1～11

1は，外反した口縁部の端部が，上下に拡張したもので，口縁端部外面は，ヨコナデによる若干の凹凸が見られる。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土は良質で微砂を含む。色



第21図　10号住居址（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物実測図

調は，淡褐色を呈する。2は，短かい頸部に，外反する口縁部の先端が上下に拡張するものである。内外ともにヨコナデによる調整がなされている。胎土には，細砂を多く含み，色調は，赤褐色を呈する。3は，高杯である。杯部の先端が上方に屈曲するもので，端部は水平に造られている。口縁端部外面には3本の凹線が施されている。胎土は，良質で，色調は淡褐色を呈する。4は鉢形土器である。体部は外反しながらほぼ直線に造られるもので，端部は肥厚している。端部外面は，少し傾斜しており，5本の浅い凹線が施されている。外面は，端部の直下はヨコナデが，その下方にはハケ状工具によるナデ調整が見られる。内面はヘラ削りが施されている。胎土は，砂粒を含むも，比較的良質である。6は，やや外反して立上る口縁部で，その端部は，丸みをおびている。口縁部内面は，ゆるく弧を描くもので，ヨコナデ調整が施されている。外面は，小まかく入念なヘラミガキである。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされており，その他の部分には丹彩が施されている。胎土は，砂粒を含むが良質であり，乳褐色を呈している。8は，住居址の床面に検出したものである。器形は不明であるが，口縁部の形態は6に似るものである。相違点は，6のヘラミガキの部分が，8ではヨコナデになる点である。他は，丹彩，胎土ともに同じである。9は，外反する口縁部は厚手であり，端部においてもほとんど変化はない。胴部内面には，ヘラ削りがなされており，他の部分はヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含み，色調は褐色を呈する。10は，外反しながら立上る口縁部の，端部は丸くおさめられている。口縁部内面は，ゆるやかに弧を描くものである。胴部中面には，口縁部との境までヘラ削りがなされている。その他の部分は，ヨコナデによる調整が見られる。11も，10と形状，形態ともにほぼ同じである。ただ，口縁部の立上りが短かく，肉厚である。10，11ともに，外面にはススが付着している。胎土は，砂粒を含むも，比較的良質である。色調は淡褐色を呈する。

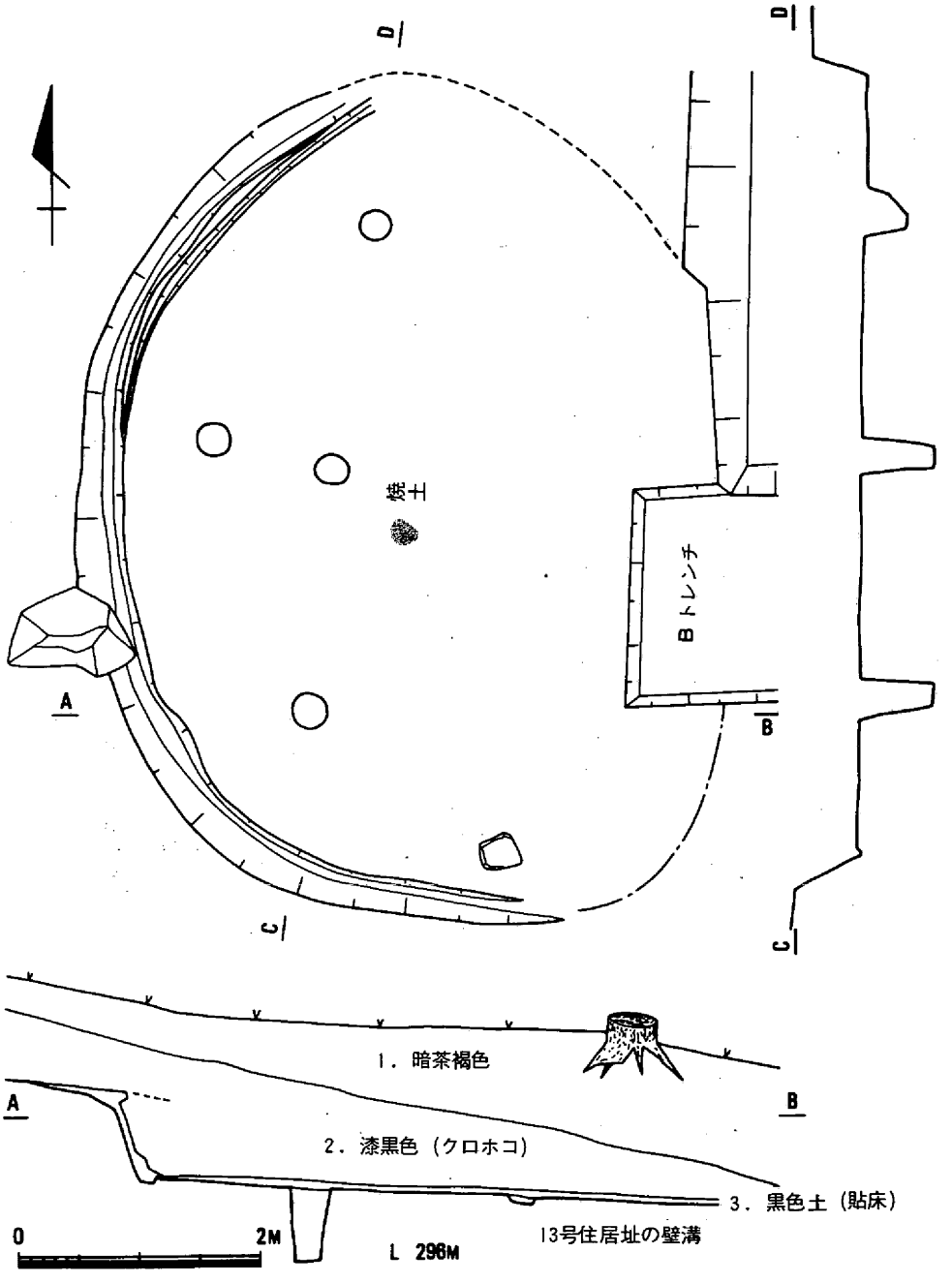
住居址の床面からは，半壊しているが磨製石庖丁（第19図—19）が出土している。石材は緑色片岩である。

12号住居址（No.24）　第24図

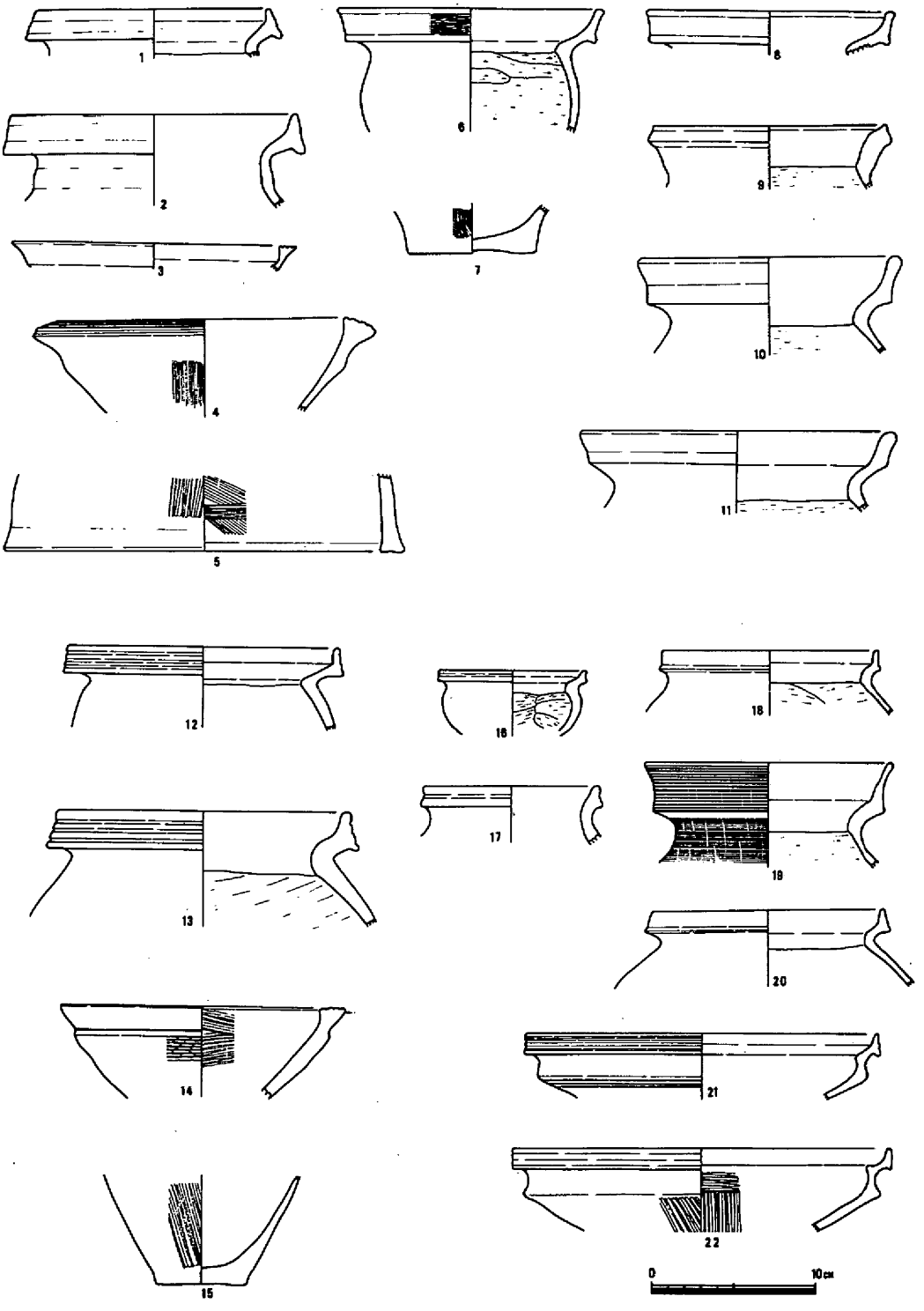
11号住居址の南側に隣接して検出した。今回検出した住居址の中では，最も複雑な様相を呈する住居址である。この住居址も，西側の約半分が遺存するのみで，東側半分は削平されていた。残存状態が悪いため，その全体の形態については不明である。検出した部分からすれば，同住居址は，6角形ないしは，8角形の住居址と推測される。住居址の床面には壁に沿う溝が造られている。また最終面である貼床を除去すると，多数の溝状遺構が出現した。それ等の数からすれば，少なくとも4回の修築がなされたものと考えられる。床面の，ほぼ中央には，中央穴を検出した。中央穴には西側壁溝から，床溝が続いている。床面には，15個の柱穴を検出した。しかし，それ等の対応関係は不明である。検出した部分での最大径は，8.55mを測る。

出土遺物　第23図—16～22

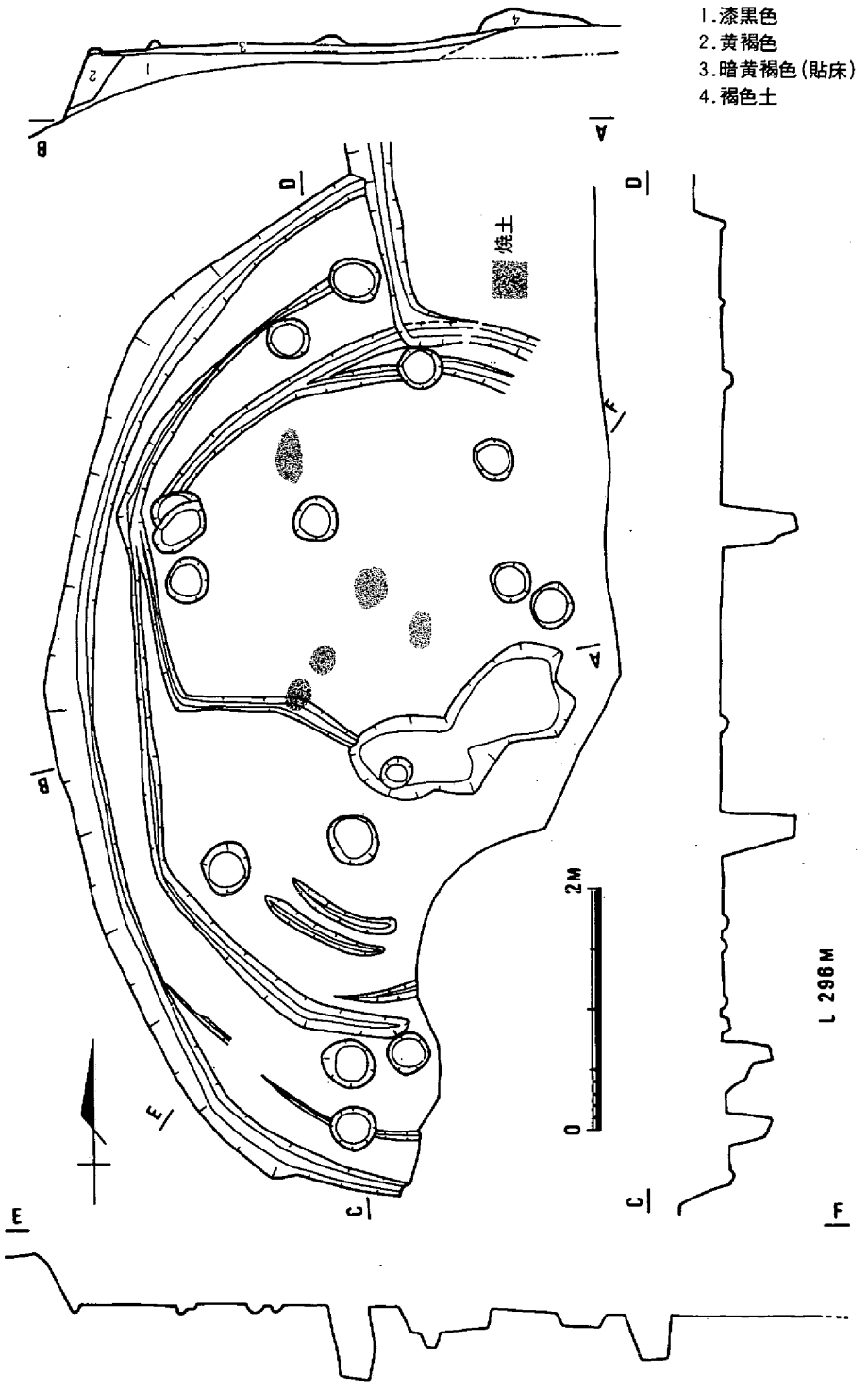
16は，小型の鉢形土器である。外反する口縁部の端部がわずかに上方に伸びるものである。胴部内面は，口縁部との境付近までヘラ削りがなされており，他の部分は，ヨコナデ調整がなされている。ヘラ削り部分を除いて丹が施されている。胎土は，良質で細砂，雲母を含み，淡赤褐色を呈する。17



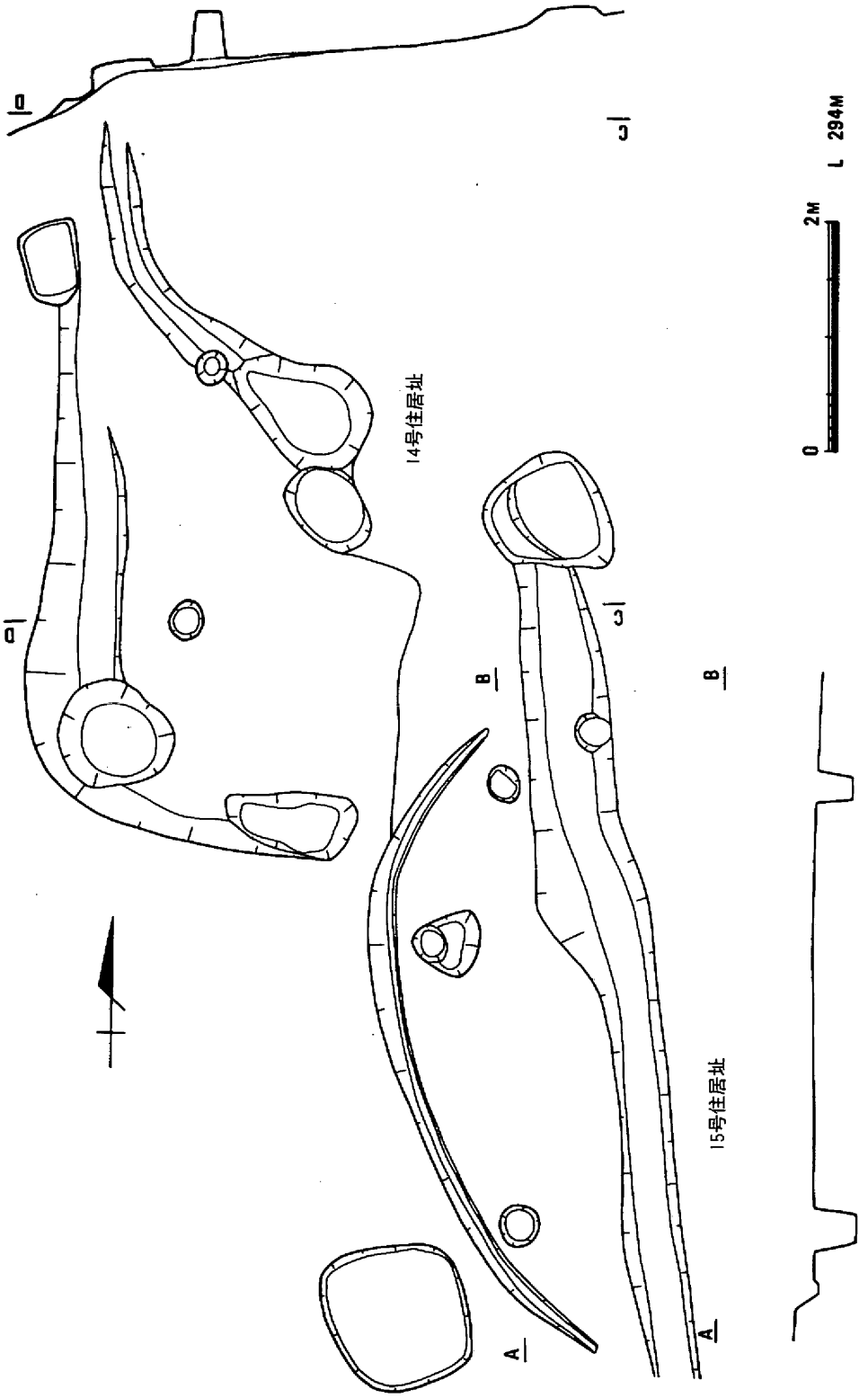
第22図　11号住居址・平面図・断面図



第23図　出土遺物実測図



第24図　12号住居址平面図・断面図



第25図　14・15号住居址平面図・断面図

は，外反する口縁部の端部が若干肥厚するもので，内外面ともにヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含み，色調は乳褐色を呈する。18は，外反する口縁部の先端が，垂直に上方に拡張するもので，先端は丸くおさめられている。胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りがなされており，他はヨコナデ調整がなされている。胎土は，細砂を含むも良質で，色調は褐色を呈する。19は，外反しながら立上る口縁部を持ち，端部は丸くおさめられている。内面は，ヨコナデ調整であるが，外面は13～14本の沈線が施されている。胴部内面は口縁部直下までヘラ削りがなされており，外面は沈線が施されている。20は，外反した口縁部の先端が上方に拡張するもので，端部は丸くおさめられている。胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りがなされており，他はヨコナデ調整がなされている。ヘラ削り部分を除いて全体に丹が施されている。外面には，部分的ではあるがススが付着している。胎土は良質である。21は，高杯である。口縁部は上下に拡張し，外面には2本の凹線が施されている。杯部内面は，ヘラ削り後にヘラミガキによる調整をなしている。杯部外面の下半はヘラ削りであり，他はヨコナデ調整がなされている。土器は，内外面に丹彩が施されている。胎土は，微砂，金雲母を含んでおり，粘土も良質であり，淡赤褐色を呈している。22も高杯である。形態は21にほぼ同じであるが，口縁部外面に施文は見られない。杯の内外面は入念なヘラミガキがなされている。胎土は，微砂，金雲母を含み，良質である。住居址の埋土中より鉄鏃1個が出土した。鉄鏃（第19図—20）は，凹基式で，全長，31.4㎜，最大巾22.9㎜を測り，厚さは3.5㎜を測る。また，鉄鏃の片面には一部木質が残存している。

14号住居址（No.17） 第25図

11号住居址の東約5 mの位置で検出した。検出した遺構は，西部及び南壁の一部と，それに沿う壁溝の一部である。検出した遺構の状態から住居址の形態を推測すれば，隅丸方形を呈するものと考えられる。検出した壁体の長さは，西壁が4 m，南壁が2.5m を測るものである。住居址に関わる柱穴であるが，一つは，住居址のコーナー近くに検出したものである。他に，住居址の東側，北側に在る新い時期の溝に重なって検出したものがそれと考えられる。南北の柱穴間の距離は，2.1m，東西間の距離は，3.6mを測る。残存する床面の最大巾は，2.5mを測る。

15号住居址（No.23） 第25図

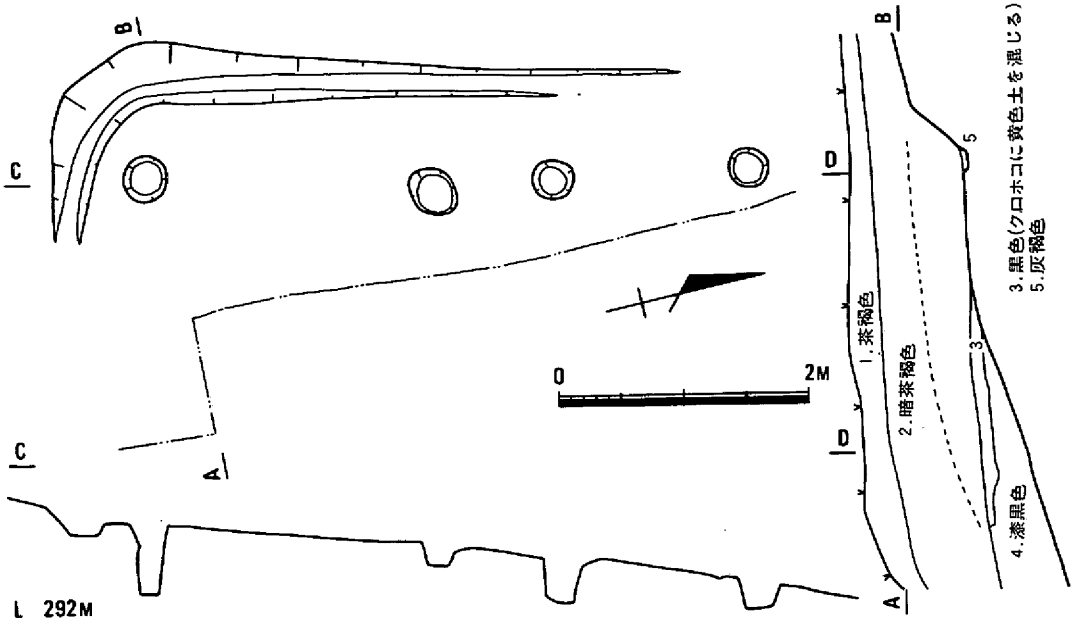
14号住居址と，一部重複する状態で検出した。住居址は，大きく削平されているため，検出できたのはその3分の1程度である。検出した壁体の形態は，弧状を呈するものである。壁に沿っては壁溝が廻るものである。

16号住居址（No.14） 第26図

15号住居址の東約6 mの位置に検出した。この住居址も，遺存状態は悪く，検出した住居址は，西側の壁体と，南側の壁体の一部と，それに沿う壁溝である。検出した壁の長さは，西壁で，4.3m，南壁で1.5mを測る。検出した壁体の形態から，隅丸方形を呈する。床面には，西壁に沿う柱穴4本を検出した。柱穴間の距離は，南から1.6m，1 m，2.2mを測る。

13号住居址（No.27） 第27図

11，12号住居址と重複して検出した。住居址は，11，12号住居址とほぼ同一平面で重複しているた



第26図　16号住居址平面図・断面図

め，壁体を検出したのは一部分である。11，12号住居址の間で壁体が残存するのみで，他は壁溝のみの検出である。検出した壁溝は，西側の全体と，北側，南側の一部である。西側の全長は，6.4m を測る。検出した壁溝の状態から，住居址は，隅丸方形を呈するものと推測される。　（井上）

2. 建　物　址

建物1（No.15）　第27図

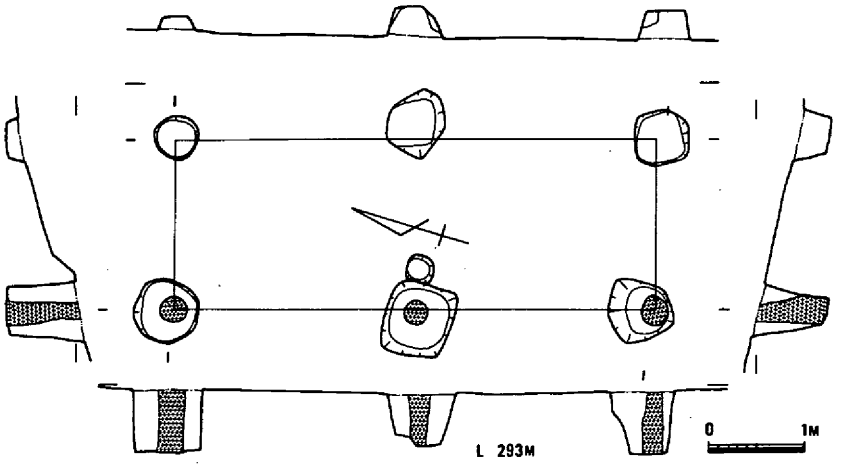
16号住居址の北約 3 mの位置で検出した。建物は，桁行2間，梁間1間である。桁行は，2.6m 間隔を測る。梁間は，1.8mを測る。柱穴は，西側列の遺存状態は良好であり，柱痕跡も観察された。西側列と東側列との高低差は，50cmを測り，基底部のみを検出する柱穴もあった。

建物2（No.21）　第27図

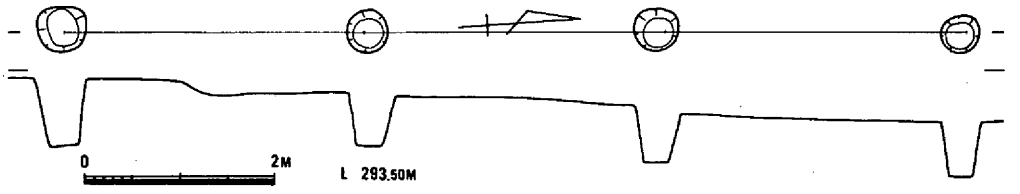
建物1の西5 mの位置に検出した。検出したのは，1列の柱穴列である。柱穴は，4本あり，その方位は，ほぼ北を向くものである。柱穴の残存状態は，全て良好であり，その深さは検出面より平均60cmを測る。柱穴間の距離は，3.18cmを測る。　（井上）

3. 土壙，貯蔵穴

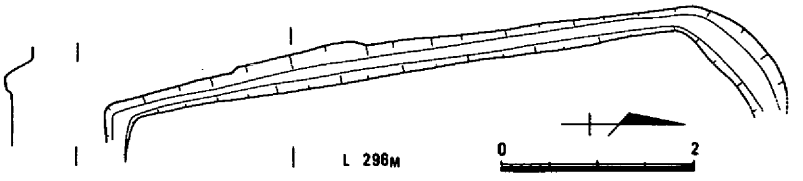
新市谷遺跡においては，6個の土壙を検出した。それ等は，その機能が推測されるものと，そうでないものとがある。機能の不明なものは，削平が著しくてその一部分のみが検出できた土壙等であ



建物址 1



建物址 2

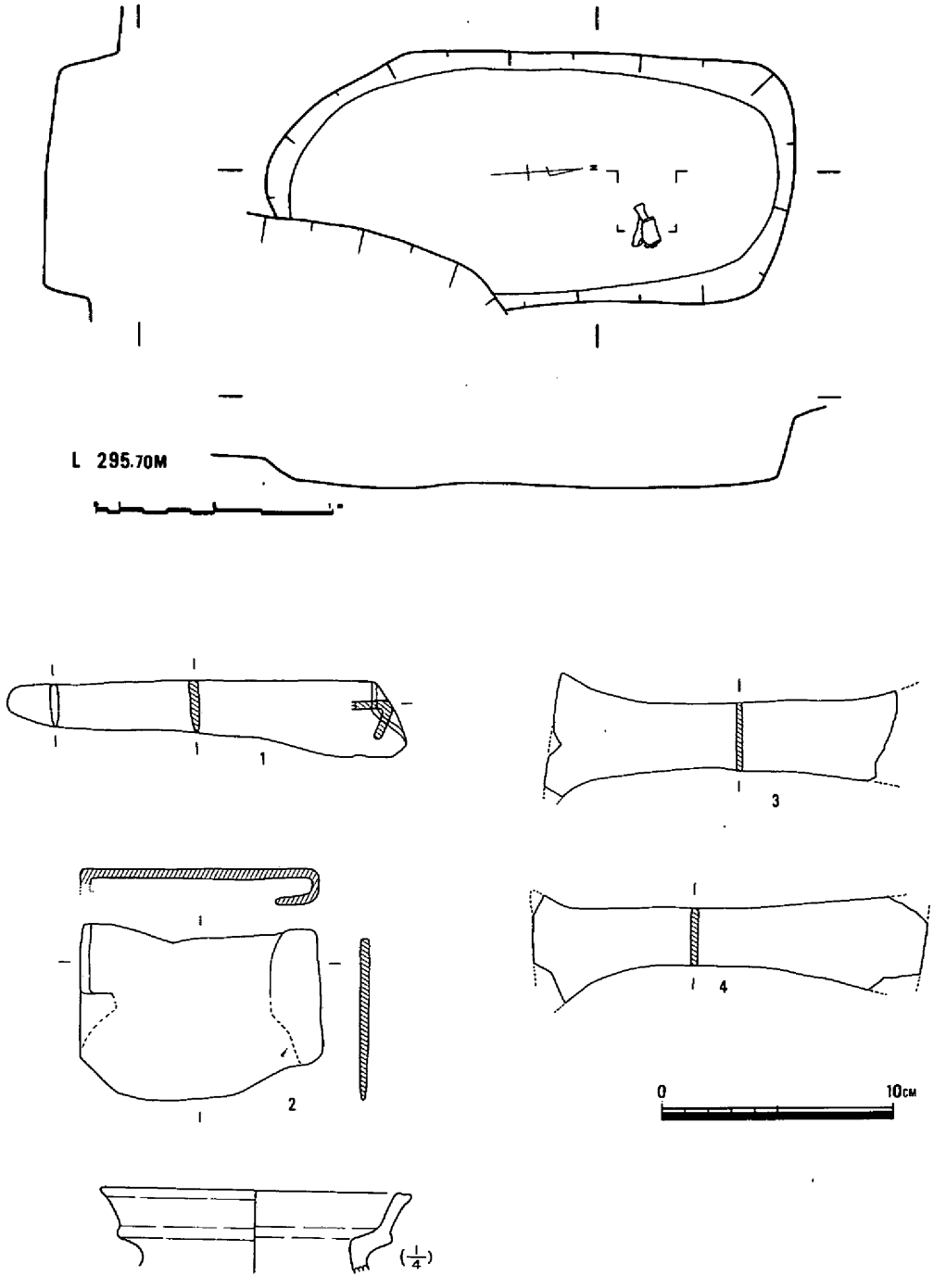


13号住居址

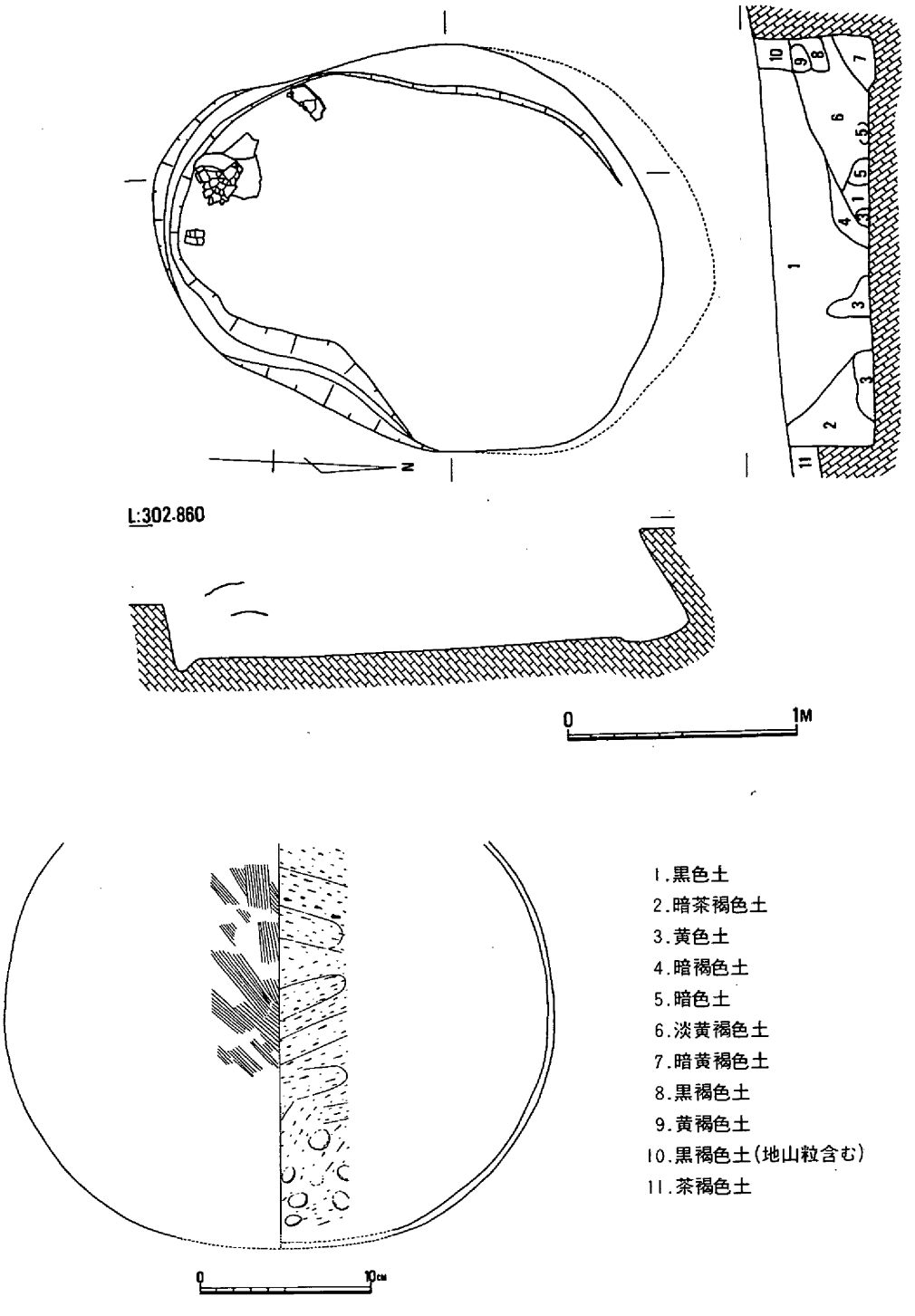
第27図　建物址及び住居址平面図・断面図

る。 また，出土遺物等の皆無である土壙も，時代等を推察さる点からも問題が多い。 その中にあって，No.25 の土壙は，後述するように土壙墓と推測されるものである。

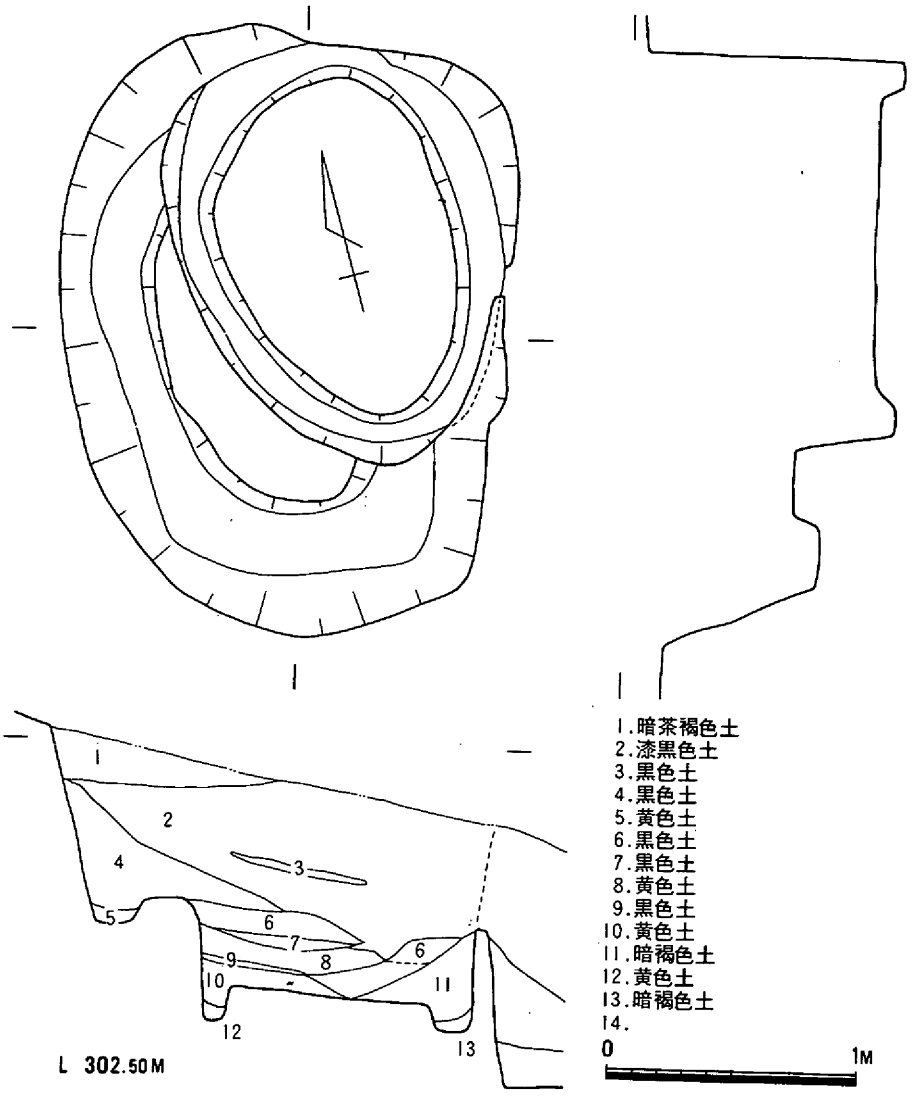
検出した土壙の形状を見ると，方形を呈すもの，長方形を呈すもの，楕円形を呈すもの等がある。中には，周囲のほとんどを削平されており，形状のまったく不明な土壙もある。その一例に，10号住居址と重複する土壙である。この土壙からは，鼓形器台を出土しており，土器を考察する上で重要な位置にあるが，土壙の形状は不明である。出土遺物の無い土壙として，No. 10，26，28がある。それ等は，土器を全く出土しなかったものか，もしくは，時代を推定させるに充分な大きさの土器を出土し



第28図　土坑墓及び出土遺物実測図



第29図　1号貯蔵穴及び出土遺物実測図



第30図　3号貯蔵穴平面図・断面図

ていない。しかし，それ等土壙の埋土は全て漆黒色土であり，時代的に古い様相は示しているものと考えられる。6個検出した土壙の中でNo. 25以外にも，土壙墓の存在を考えることはできるが，現状ではそれを推定するには不十分な点が多い。

土壙墓（No.25）　第28図

12号住居址の南約2 mの位置に検出した。土壙墓の長軸の方向は，N—4°—Eである。土壙墓は，南東の一部を削平されている以外はその形態を保っている。検出面でその形状を見ると，東西の両長

辺は，ほぼ直線的である。短辺は，北側のそれは，ゆるやかに弧を描くが，南側は，大きく弧を描くものである。検出面での規模は，長さ2.25m，巾1.06mを測る。床面は，ほぼ水平に造られている。床面での形状は，検出面でのそれに似るが，両長辺もゆるやかな弧を描くものである。床面での規模は，長さ2.07m，巾0.92mを測る。墓壙は，黄色粘質土層に掘り込まれており，埋土は，漆黒色土（黒ボコ）であった。出土遺物としては，鎌・クワ先・鉄鋌等の鉄製品を一括で床面に検出した。検出した位置は，北東の隅に近い位置である。その出土状態は，床面上に鎌を置き，その上に二枚の鉄鋌を重ねて置くもので，さらにその上にクワ先が乗るものである。以上のように，積み重ねられた状態で，一括出土したものである。

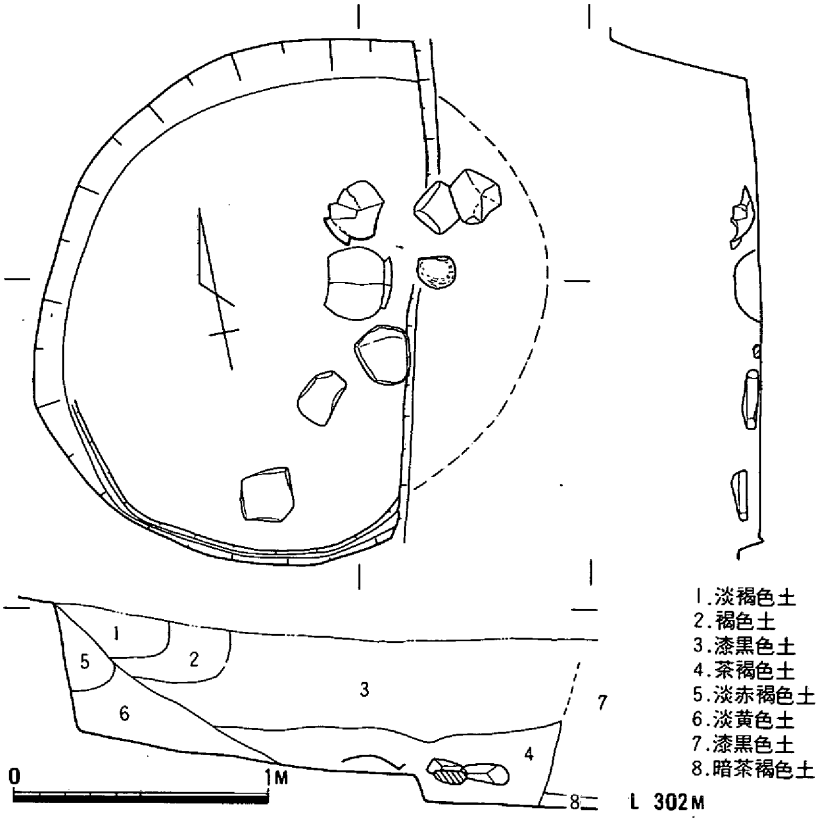
出土遺物　第28図―1～5

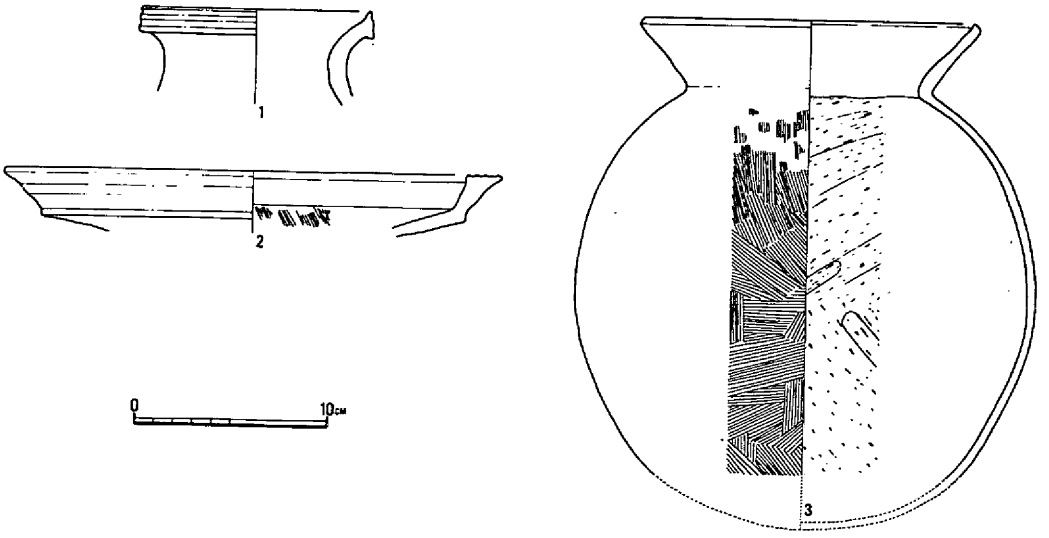
1は，鎌である。全長は，16.9cmを測る。鎌は，一端を斜めに折り返すもので，折り曲げた角度は，約66°である。折り返した付近での最大巾は，3.2cmを測る。鎌の背は直線的であり，端部は丸い。刃部は，ゆるやかに湾曲するもので，中央付近での最大巾は，2.34cmを測る。刃部が湾曲するのは，使用による磨耗と考えられる。鎌の厚さは，3.3mm～3.09mmを測るものである。**2**は，クワ先である。クワ先は，鉄板の両端を，内側に折り曲げるものである。巾は，10.1cmを測る。折り曲げられた部分の巾は，2.1cmを測る。中央部分での長さは，6.68cmを測る。刃部の均整のとれないのは，欠損によるものと考えられる。クワ先の厚さは，刃部の先端で2mmを測り，背で3.5mm～4mmを測る。鎌，クワ先ともに，遺物取り上げ後の不用の錆を落す段階で充分に注意しながら作業を進めたが，木質の付着する様子は観察されなかった。**3**は，鉄鋌である。図示する左側は，その端部も残っている。その端部での最大巾は，5.2cmを測る。中央部付近の巾は2.7cmあり，両端に向けてその巾が広がるものである。右端は，端部に近い位置で欠失している。鉄鋌の厚さは，2～3.1mmを測り，残存する全長は，15.4cmを測る。**4**も鉄鋌である。4は，両先端が残っており，その全長を知ることができる。また，4隅を欠落するものであるが，その全体は，3とほぼ同様で，両端は，巾が広がるものである。計測値を示すと，中央部付近の巾は，2.3cm，図中右側の最大巾は，3.6cm，左側は，4.7cmを測る。また，厚さは，2～3mmを測り，全長は，17.1cmを測るものである。3の鉄鋌も，ほぼこの全長に近い数値になるものと考える。以上の二枚の鉄鋌は，その全長からすれば小型鉄鋌の部類に入るものであり，その形態は，よく均整のとれたものである。**土器**は，外反しながら立上る口縁部の上面は平坦に造られており，浅い凹線が一本施されている。口縁部の内外面は，ヨコナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含み乳褐色を呈している。この土器が，土壙墓の造られた時期に最も近いものと考えられる。（井上）

貯蔵穴

貯蔵穴と考えられる遺構として3個を検出した。それ等は，南北に一列に並ぶ状態で検出した。遺構を調査した場所は，6号住居址の西隣である。また，2個は，6号住居址と重複した状態で検出した。貯蔵穴の中で，2個は，土壙内から土器が出土しており，その時期を知ることができる。土壙は，重複した部分を除いては，黄色粘質土層に掘り込まれていた。（井上）

1号貯蔵穴（No. 2）　第29図





第31図　3号貯蔵穴及び出土遺物実測図

6号住居址に接して3基土壙が並ぶが，その一番北側のものである。平面プランは不整な楕円形を呈し，部分的に床面が広くなり，いわゆる袋状ピットと言われているものになる。

床面には溝がめぐっている。

遺物は土師器の甕が埋土の中より出土土している。

出土遺物　第29図

甕になると思われ，胴部はほぼ球形になる。底部内面には押えつけの指頭圧痕が残り，ヘラ削りにより仕上げられる。外面は刷毛により調整される。

この土器の示す時期は，口縁部などが欠損しているため断定できないが，古式土師器の中でもやや新らしい様相を呈している。　（竹田）

2号貯蔵穴（No. 5）　第30図

1号貯蔵穴の南側で検出した。貯蔵穴は，2個が重なるものであり，さらに6号住居址とも重複している。貯蔵穴は，仮に床面が低い方をA，高い方をBとして説明を加える。Aは，残存する壁を見ると，上方に少し開く壁面を持つ，壁体の裾には，壁に沿って溝が廻るものである。その巾は狭いが，深く掘られている。平面の形態を見ると，楕円形を呈している。その長軸の方向はほぼ北を向くものである。最大径は，170cm，最小径は，138cmを測る。検出面から床面までの深さは，12cm，溝の底面までは，102cmを測る。また，検出した床面の最大径は，133cm，最小径は，88cmを測る。Bの床面は，Aより約32cm高くなる。Bも，概略の形態は，楕円形を呈している。検出面での最大径は，243cm，最小径は，推定径であるが，164cmを測る。壁は，上方に向けて若干開くもので，壁に沿っては，溝が廻るものである。平均して10cmの深さを測り，その巾も広い。検出面より床面までの深さは，西側で約80cmを測る。

貯蔵穴の重複する状態を東西断面に観察すると，Bの床面までの埋土の堆積は，水平堆積である状態が見られる。また，その堆積は，互層状に黄色粘質土の層位が見られる。その上の層は，西から東への傾斜の見られる堆積である。それ等の状況からして，Aの土壙を埋め，Bの土壙の床面としている状態と考えられAが古く，Bが新しい状態を呈するものである。また，水平堆積が∨字状に切れ目を見せるのは，Bの壁に沿って廻る溝と考えられる。　（井上）

3号貯蔵穴（No.29）

2号貯蔵穴の南約2mの位置で検出した。貯蔵穴は，その約3分の1が6号住居址と重複した状態で検出した。検出した遺構の平面形は，ほぼ円形を呈しており，その最大径は，2.8cmを測る。床面は，南側において，壁に沿う溝を検出した。溝は，検出した床面の約3分の1まで廻るものである。床面における形状も，検出面における形状とほぼ同じであり，円形を呈している。床面での最大径は，推定で1.90mを測る。壁面は，やや開くもので，検出面より，床面までの深さは，50cmを測る。床面からは，径20cm前後の扁平な石を6個と，壊れてはいるが1個体分の土器を検出した。

この遺構は，先にも述べたように，6号住居址と重複して検出した。その状況を断面に観察すると，漆黒土層の下層に，土器，石を包含する層位があるが，同層が，住居址内まで延びており，住居址の埋土と明確な差違を示している場所がある。その位置は，検出した貯蔵穴の床面の範囲とも一致

している。それ等の状況は，住居址よりも貯蔵穴が新しい状況であることを明示しているものと言える。 （井上）

出土遺物　第31図

1と2は理土の中より出土し，3は床面より出土した。

1は口縁端部を上下に拡張し，退化凹線を施したものである。

2は高杯で，口縁端部を水平に拡張し，凹線が施される。内面は刷毛目が残る。

3は「く」の字状に外反した口縁をもち，端部が少し上方へつまみ出されている。胴部は球形を呈し，外面は刷毛，内面はヘラ削りによって仕上げられる。

1と2は弥生時代後期初頭と考えられ，3の土器とは時期が異なる。3は床面に貼りついて出土しており，この土壙の時期はほぼ3の土器の示す頃であろう。

3は備前原遺跡（註1）や王泊遺跡の五層（註2）より出土したものに似ているが，口縁端部などはやや古い様相を呈している。上東遺跡の亀川上層とされている一群の土器があるが（註3），その中に含まれるものと思われる。 （竹田）

（註1）　間壁忠彦，三杉兼行　「備前原遺跡の土器」『遺跡26号』　1957年間壁忠彦　「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報第2号』　1966年

（註2）　坪井清足　『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』　1956年

（註3）　「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・2』　1974年

4.　その他の遺構

前項までは住居址，建物址，土壙等について概述してきたのであるが，その他にも，性格の充分に知り得ない遺構がある。それ等は，若干時代の新しいと考えられるものもある。この項では，それ等の遺構について，発掘により知り得た事柄をできるだけ記述しておきたい。

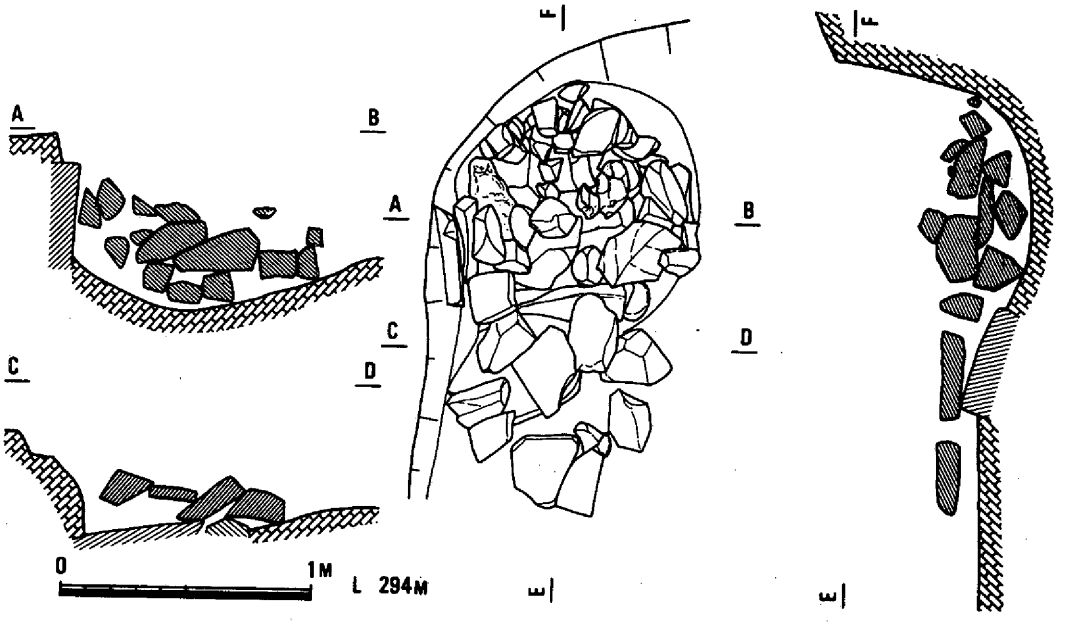
集石遺構（No.16）　第32図

14号住居址と完全に重複して検出した。平面図に「L」字状に掘り方の一部が見えるのが14号住居址のコーナー部分である。

遺構は河原から採収されるような石の角に丸みをもつものばかりである。その様な石が，東西，1.70m，南北，1mの間に集中するものである。石は，一つ一つが組み合された状態を示すものではなく，集石の状態は乱雑である。集石する石も西よりの部分の床面が若干凹んでおり，また，その部分により多くの石が集中し，その部分が，この遺構の中心をなすことを示すものと考えられる。

この遺構の発掘中に，石組の間から，一片ではあるが，青磁片が出土した。また，石の間に埋まる土は，茶褐色であり，住居址を埋める土である漆黒色土とは，明確に区別され，漆黒色土を掘り込む状態であった。それ等は，いずれも住居址より新しい時代のものであることを示すものである。

遺構番号30は，形状の定まらぬ土壙である。土壙の掘り込みは浅く，10～20cmを測るものである。



第32図　集石遺構平面図・断面図

この東端に，一段と深く掘られた部分があった。その平面形は円形を呈しており，ほぼ垂直に掘り込まれるものである。この円形土壙は，壁面が赤く焼けており，さらに，内部に遺存していた石は，火を受けていた。さらに，石と石の間からは，若干の木炭および灰を検出した。この部分を含め，全体の埋土は，茶褐色を呈しており土壙墓（No. 25）を削平した部分を埋る土であり，さらには，集石遺構の埋土とも共通する土である。

段状遺構（No. 12）

最初は，3列のトレンチで検出した。その形状は，地山を「L」字状に地り込むものであり，住居址の一部とも考えた。しかし，2列のトレンチにても検出し，さらにその部分を調査するに至って，それが継続する状況が推測されるに至った。そこで，両トレンチの中間において，2～3本のトレンチを設定し調査を行なった。それ等のトレンチにも，同様な遺構の検出があり，それは，一つの段として連続しているものと考えるに至った。その段状部の巾は，50～70cmを測るものである。それは，丘陵の斜面を，低位から，上位へと斜めに横切るものである。また，これ等を埋める土は，漆黒色であった。

この段状遺構について，その性格については，十分に明確ではない。段状遺構が位置する地形は，住居址等が立地する部分よりも，傾斜はより急である。その様に，やや急な斜面が三方を取り囲み，その中央のやや平坦部分に住居址等は所在している。その様な住居址へ平地から通うのに通路を予想する必要がある。その通路についてその形状は不明ではあるが，斜面に平坦面を造るものと推測することができる。この新市谷遺跡においても，日常的に使用する通路の存在を予測する必要があろう。そこで，その様な遺構の可能性を検討するためにも，その一例としてこの段状遺構を提示してみたい。

（井上）

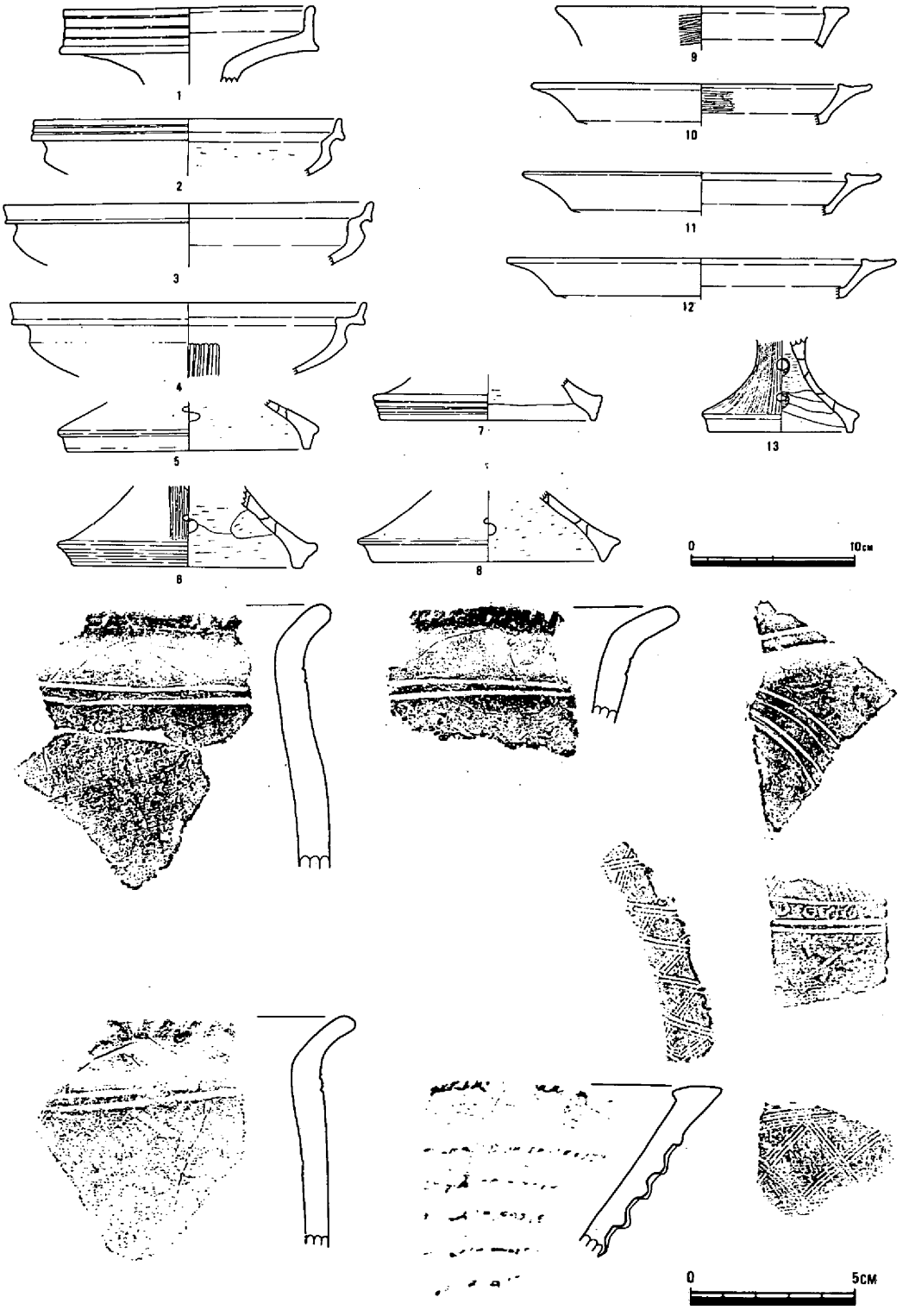
第3節　遺構に伴わない遺物

新市谷遺跡出土の遺物は，整理箱（37×60×15cm）にして16箱である。その内訳は，ほとんどが土器片である。石器，鉄器の類は，各々数点を数えるのみである。また，出土した土器片も，その大半が包含層からの出土である。遺構に伴って出土した遺物に関しては，前節で，遺構の説明と合せてその形態等について記述した。この節では，遺構に伴わない遺物について，その形状を略述してゆきたい。

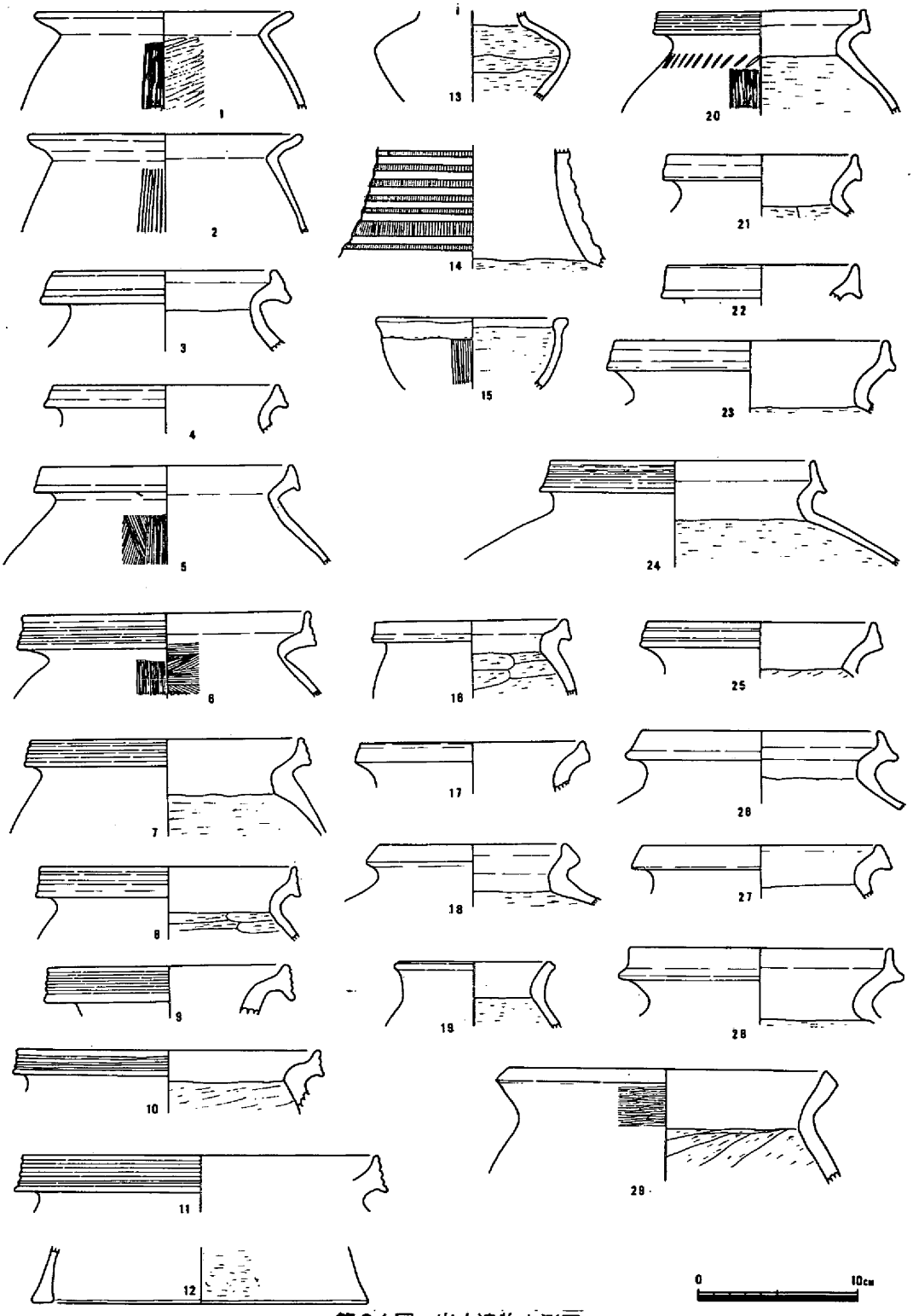
第33図－1は，器台形土器と考えられるものである。口縁端部は，垂直に立ち上り，先端は丸くおさめられている。口縁部の内外面は，ヨコナデによる調整が見られ，丹を塗るものである。胎土は，良質で，砂粒，雲母を含み，淡赤褐色を呈する。

2～4,9～12は高杯形土器である。 **2**は，外反する口縁部の端部が上下に拡張するものである。口縁端部外面は，若干内傾しており，2本の浅い凹線が施されている。口縁部の内面は，ゆるく屈曲するものである。体部内面は，ヘラ削りにより，他は，ヨコナデによる調整がなされている。内外面ともに丹が施こされており，胎土は，良質であり，微砂，金雲母を含むものである。**3**は，外反した口縁端部の外面が，若干外傾して立上るもので，ヨコナデによる調整がなされている。口縁部の内面は，弧を描くものである。土器の内外面には，丹が施されている。胎土は良質で，微砂，雲母を含み，淡赤褐色を呈する。**4**も，口縁端部が，やや外傾しながら立上るものである。口縁部の内面は，弧を描き，平坦面を形成する。口縁部はヨコナデ調整が，また体部内面は上下方向のヘラミガキによる調整が見られる。内外面には，丹が施されている。胎土は，良質で，微砂，金雲母を含み，淡赤褐色を呈している。**9**は，口縁端部が水平方向に肥厚するもので，外面は平坦である。平坦面には，外縁に沿って，浅い凹線が一条廻るものである。杯の外面は，ヘラミガキによる調整がなされており，内外面ともに丹が施されている。胎土は，良質である。**10**は，口縁端部が，水平方向に拡張するものである。口縁端部は，浅く凹み入念なヘラミガキによる調整がなされている。内面にも細かく入念なヘラミガキが見られ，外面は，ヨコナデ調整が見られる。口縁部外面は，ゆるく弧を描き，体部との境には，稜線を形成する。土器には，全体に丹を施している。胎土は良質で，微砂，金雲母を含み淡赤褐色を呈す。**11**は，形態，調整，胎土等10と同じである。この高杯には，丹塗り後に，体部にススの付着が認められる。**12**も，形態は，10，11に同じであるが，口縁端部外面及び，内面にヘラミガキ後にヨコナデによる調整が見られる。器には，全体に丹が施されており，外面には，ススの付着が認められる。胎土は，良質で微砂，金雲母を含み，淡赤褐色を呈する。

5～8，**13**は，高杯の脚と考えられるものである。**5**，**13**は，脚の端部が，垂直に下方に伸びるも



第33図　出土遺物実測図



第34図　出土遺物実測図

のである。5は，内面はヘラ削りが見られ，外面には丹が施されている。13は，内面はヘラ削りであり，外面は，上下方向のヘラミガキによる調整がなされている。端部外面は，ヨコナデによる仕上がなされており，外面には，全体に丹が施されている。また，2孔一対による円孔が見られる。胎土は，ともに良質であり，微砂を含み，色調は赤褐色を呈している。6は，脚端部が若干拡張するもので，外面には，浅い凹線が3本施されている。脚の内面は，ヘラ削りであり，外面は，上下方向のヘラミガキによる調整がなされている。端部外面は，ヨコナデによる仕上がなされており，外面には，全体に丹が施されている。また，2孔一対による円孔が見られる。胎土は，ともに良質であり，微砂を含み，色調は赤褐色を呈している。7は，脚端部が肥厚するもので，外面には，3本の沈線が施されている。内面は，端部の直上まで全体にヘラ削りがなされており，脚端までの約1㎝の間はヨコナデ調整がなされている。端部外面はヨコナデによる調整がなされている。外面は，上下方向のヘラミガキによる調整がなされており，丹が施されている。胎土は，良質で微砂を含み，淡赤褐色を呈する。

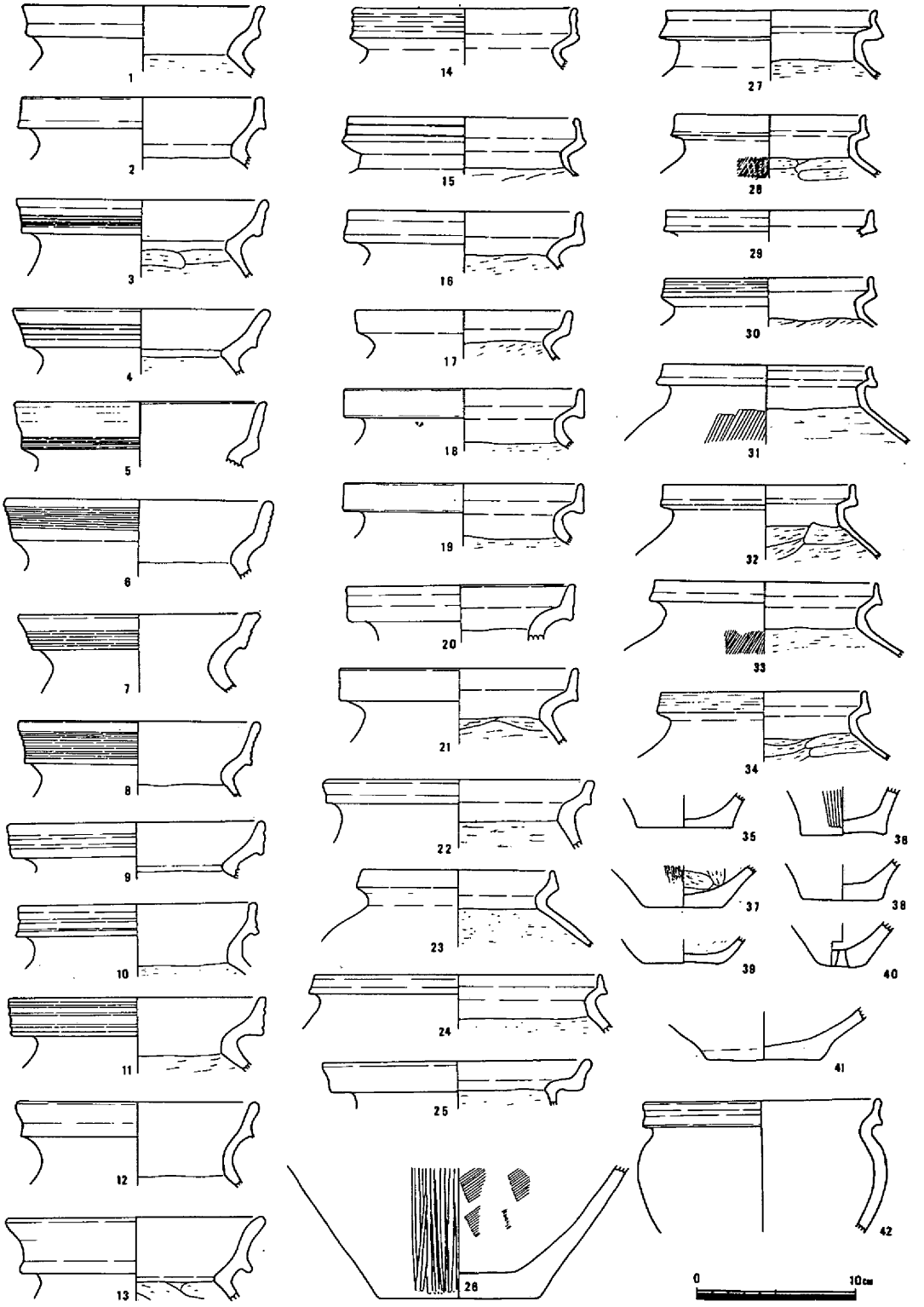
下段拓本の左側3個は，前期弥生式土器である。いずれも，ゆるく外反した口縁部をもち，端部は丸くおさめられている。口唇部には刻み目が見られる。口縁部直下には，ヘラによる2条の凹線文が見られる。胎土には，砂粒を多く含み，色調は，茶褐色を呈している。

第34—1は，「く」字状に外反する口縁部をもつ甕である。口縁部はヨコナデ調整が見られ，端部は丸くおさめられている。胴部外面は，ハケ状工具によるナデであり，内面は，ヘラ状工具によるナデが見られる。胎土は，砂粒を含み，やや粗雑であり，焼成も軟調である。色調は，褐色を呈するものである。2も「く」字状に外反する口縁部をもつもので口縁部は，ヨコナデによる調整がなされており，端部は，丸くおさめられている。胴部外面は，クシ状工具によるナデであり，内面は，ハケ状工具によるナデが見られる。胎土は，微砂を含むもので，乳褐色を呈している。3は，外反する口縁部の先端が，上下に拡張するものである。口縁端部外面は，ほぼ平坦で，若干の凹凸を呈する。胴部内面は，ヘラ削り後，ヨコナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を含むも良質である。色調は，淡赤褐色を呈する。4は，外反する口縁部の先端が大きく肥厚するものである。口縁端部外面は，平坦に造られている。土器は，内外面ともにヨコナデ調整がなされており，胎土は粗である。焼成も軟調で，色調は，褐色を呈する。5は，外反する口縁部の先端が大きく肥厚するものである。口縁部外面は，平坦に造られている。胴部外面は，クシ状工具によるナデであり，他の部分は，ヨコナデの調整が見られる。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は淡褐色を呈する。土器の外面には，ほぼ全面にススが付着している。6は，大きく外反した口縁部の先端が，上方に拡張するものである。口縁端部外面には，3本の凹線が施されている。胴部内面は，ヘラ削り後に，クシ状工具によるヨコナデ調整が見られる。また，胴部外面は，クシ状工具による，上下方向のナデ調整がなされている。他の部分は，ヨコナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を含むも良質で，色調は，乳褐色を呈する。7は，外反する口縁端部の先端が若干上方に拡張するものである。口縁端部外面には，3本の凹線が施されている。胴部内面は，口縁部との境の直下までヘラ削りがなされており，他は，ナデ，及び，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含むも良質で，色調は，淡褐色を呈

する。8は，外反する口縁部の先端が，上方に拡張するもので，口縁端部外面には，浅い凹線が2本施されている。胴部内面は，ヘラ削りであり，他は，ヨコナデ調整が見られる。胎土は，砂粒を含み，色調は淡褐色を呈する。9は，外反する口縁部の先端が，上下にやや拡張するものである。口縁端部外面には，4本の凹線が施されている。口縁部の内外面は，ヨコナデ調整が見られる。胎土は，微砂を含み良質であり，色調は赤褐色を呈している。10は，外反する口縁部の先端が，やや拡張するものである。口縁端部外面には，3本の凹線が施されている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされており，他の部分は，ヨコナデによる調整が見られる。胴部外面には，ススが付着している。胎土は，粗で砂粒を含み，色調は，淡褐色を呈している。11は，外反する口縁部の先端が，やや拡張するものである。口縁端部外面は，4本の浅い凹線が施されており，口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を含むも良である。色調は，淡褐色を呈するものである。12は，ゆるく外傾して立ち上るもので，その先端は肥厚する。端部上面は，平坦に造られている。外面は，工具によるナデ調整がなされており，内面は，端部の直下まで入念なヘラ削りがなされており，内外面は，丹が施されている。胎土は良質で，砂粒，金雲母を含み，色調は，乳褐色を呈する。外面の調整は，6号住居址（№8）埋土中より出土した鼓形器台の外面調整と相似している。13は，壷の胴部のみである。胴部は，その中ほどで大きく屈曲するもので，やや扁平な形態を呈している。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされており，外面は，肩部にハケナデ調整が見られる。頸部の内外面と，胴部外面の底部の下半を除いて丹彩が施されている。胎土は，良質で微砂及び黒雲母を含み，淡褐色を呈している。14は，壷の頸部である。頸部は，胴部に向けて開くもので，外面は，ハケ状工具によるタテナデ後に凹線を施すものである。頸部と，胴部の境から胴部にかけては，ヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を多く含むも良質であり，色調は，淡赤褐色を呈する。15は，小型の鉢形土器である。ゆるく弧を描く体部をもち，端部はやや肥厚し，端面は平坦である。体部外面は，クシ状工具によるナデ調整が見られる。内面は，口縁端部の直下までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を含むも良質で，色調は，淡褐色を呈している。16は，外反する口縁部の先端が肥厚するものである。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られ，その他の部分はヨコナデ調整がなされている。胎土は，細砂を多く含み粗である。色調は褐色を呈しており，外面にはススが付着している。17は，外反する口縁部の端部がやや肥厚するものである。口縁端部外面は，やや内傾しており，若干の凹凸が見られる。口縁部は，内外面ともにヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含みやや粗であり，色調は褐色を呈する。18は，外反する口縁部が肥厚するもので，口縁端部外面は平坦である。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。他の部分は，ヨコナデ，ナデによる調整が見られる。胎土は，砂粒を含むも良質であり，色調は，淡褐色を呈する。19は，ゆるく外反しながら立上る口縁部をもつもので，端部に向けて厚さを若干減じている。口縁端部外面は，わずかに凹む。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされており，口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。ヘラ削り部分を除いて丹彩が施されている。胎土は，細砂を含むも良質で，色調は，淡赤褐色を呈する。20は，外反する口縁部の端部が上方に拡張するものである。口縁端部外面には，3本の浅い凹線が施されている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされており，外面は，ハケ状工具によ

るナデが見られる。口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，細砂を含むも良質で，色調は淡褐色を呈する。21は，外反する口縁部の端部が拡張するもので，口縁端部外面には若干の凹凸が見られる。口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，良質で微砂を含み，色調は褐色を呈している。22は，外反する口縁部の端部が拡張するもので，口縁端部外面は平坦である。口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は褐色を呈する。外面には，ススが付着している。23は，外反する口縁部の端部が上方に拡張するもので，口縁端部外面は，ほぼ平坦に造られている。口縁部は，ヨコナデ調整がなされており，胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。24は，外反する口縁部の先端が，上方に大きく拡張するものである。口縁端部外面には，浅い凹線状の線が3～4本施されている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。このヘラ削りされた部分を除いて，全体には丹が施されている。胎土は，良質であり微砂を含み，色調は，赤褐色を呈している。この土器は，胴部の器壁は薄く，全体に入念に造られている。25は，外反する口縁部の先端が上方に拡張ぎみに肥厚するものである。口縁端部外面には，浅い凹線が2本施されている。口縁部は，全体にヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，淡褐色を呈している。土器の外面には，ススが付着している。26は，外反する口縁部の先端が，内傾して上方に拡張するものである。口縁端部外面は，平坦に造られており，口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，淡褐色を呈する。27は，外反する口縁部の先端が肥厚するものである。口縁端部外面は，平坦に造られており，口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。胎土は，砂粒を多く含むも良質であり，色調は，淡褐色を呈する。28は，外反する口縁部の先端が，上方に拡張するものである。口縁端部外面は，弧を描き，口縁部は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りが見られる。このヘラ削り部分を除いて，丹が施されている。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，淡褐色を呈する。29は，「く」字状に外反する口縁部をもつもので，器壁の厚さはほとんど変化しない。口縁端部は平坦に造られている。口縁部の外面は，入念なヘラミガキであり，内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を含むも良質で，色調は，乳褐色を呈している。

第35図—1は，外反した口縁部の先端が，やや開きながら上方に拡張するものである。口縁部内面，及び，口縁端部外面はゆるく弧を描くもので，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は良質で微砂を含んでおり，色調は淡赤褐色を呈する。2は，外反する口縁部の先端が，ほぼ垂直に上方に拡張するものである。口縁端部外面は，板状工具によるヨコナデであり，口縁部の他の部分は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りが見られ，口縁部と，ヘラ削りとの間は，ほぼ垂直に造られており，ナデによる調整が見られる。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，褐色を呈する。土器の外面には，部分的にススの付着が見られる。3は，外反する口縁部の先端がやや開きながら上方に拡張するものである。口



第35図　出土遺物実測図

縁端部外面は，下半は沈線文であり，上半は，沈線の施文後にヨコナデ調整を施している。口縁部内面は，ゆるやかに弧を描くもので，板状工具によるヨコナデ調整がなされている，胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りであり，口縁部との間はほぼ垂直に造られており，ナデ調整がなされている。胎土は，良質で砂粒を含んでおり，赤褐色を呈する。口縁部外面には，ススが付着している。**4**は，外反する口縁部の先端が，外傾して上方に拡張するものである。口縁端部外面には，下半よりに3条の沈線が施されている。口縁部内面は，わずかに弧を描くもので，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，ヘラ削りであり，口縁部との境はほぼ垂直に造られている。外面には，ほぼ全面にススが付着している。胎土は，砂粒を多く含み，色調は，暗褐色を呈している。**5**は，外反する口縁部の先端が，やや外傾して，上方に大きく拡張するものである。口縁端部外面は，下半に沈線が3条施されており，上半は，板状工具によるヨコナデ調整がなされている。口縁部内面は，ゆるく屈曲するもので，ヨコナデ調整がなされている。土器の外面にはススが付着している。胎土は，砂粒を含みやや粗であり，色調は褐色を呈している。**6**は，外反する口縁部が，さらに上方に屈曲するもので，端部は丸くおさめられている。口縁部外面には，5本の沈線が施されており，内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，外面は淡褐色，内面は褐色を呈している。**7**は，外反する口縁部の先端が，外傾しながら上方に拡張するものである。口縁端部外面は，下半に浅い凹線が3本施されており，上半はヨコナデ調整がなされている。口縁部先端は，平坦に造られており，内面は，ゆるやかに弧を描き，ヘラ状工具によりナデ調整がなされている。胴部は，内外ともに器壁が剝離しているため調整技法等は確実には明らかではないが，内面はヘラ削りと推定される。胎土は，砂粒を多く含むも良質であり，色調は，淡赤褐色を呈する。**8**は，外反する口縁部の先端が，やや外傾しながら大きく拡張するものである。口縁端部は丸くおさめられており，外面は，浅い凹線が6本施文されている。口縁部内面は，ゆるく弧を描くもので，上半はヨコナデ，下半はヘラ状工具によるナデ調整がなされている。胴部外面は，ハケ状工具によるナデであり，内面は，口縁部直下までヘラ削りがなされている。胎土は，大粒の砂粒等含むも良質で，色調は，外面は淡赤褐色を呈する，**9**は，外反する口縁部の先端が拡張するもので，外面は，ほぼ垂直に造られている。口縁端部外面は，2条の浅い凹線が施されており，内面は，ゆるやかに弧を描くもので，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を多く含むも良質で，色調は，淡赤褐色を呈している。**10**は，外反する口縁部の先端が，ほぼ垂直に上向へ拡張するもので，その先端は丸くおさめられている。口縁端部外面は，浅い凹線が2本施されており，内面は，ゆるやかに弧を描くもので，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りがなされており，口縁部との間はほぼ垂直に造られており，ナデによる調整がなされている。胎土は，砂粒を含み，色調は，褐色を呈している。**11**は，外反した口縁部の先端が，ほぼ垂直に上方へ拡張するものである。口縁端部外面は，浅い凹線が4～5本施されるものである。内面は，ゆるやかに弧を描くもので，ヨコナデによる調整が見られる。胴部内面は，口縁部直下までヘラ削りがなされており，口縁部との間は，ほぼ垂直に造られている。胎土は，砂粒を多く含み粗であり，色調は，褐色を呈する。土器の外面には，ススが付着している。**12**は，外反する口縁部が，さらに延長するもので先端は丸くおさめている。口縁部内面は，ほぼ

平坦でありヨコナデによる調整がなされている。外面は，上端において丸く，下端に三角凸帯状に造られるものであり，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削り後にヘラミガキがなされており，口縁部との間は，ヘラミガキがなされている。また，外面には，ススが付着している。胎土は，砂粒を多く含み，色調は，外面で赤褐色，内面で乳褐色を呈している。13は，外反する口縁部がさらに延長するもので端部は丸くおさめられている。口縁部外面は弧を描いており，下端において凸帯状を呈する。口縁部外面は，ヨコナデ調整であり，内面は，上半はヨコナデであり，下半はクシ状工具によるヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は良質で微砂を含み，色調は，乳褐色を呈する。14は，外反する口縁部の先端が屈曲して立ち上るものである。口縁部端部は，ほぼ垂直で，外面には凹凸があり，ヨコナデ調整がなされており，ススが付着している。口縁部の内面は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，微砂を含み良質であり，色調は，赤褐色を呈する。15は，外反する口縁部の先端が，屈曲して立ち上るもので，先端は丸くおさめられている。口縁端部外面は，２本の浅い凹線が施された様に凹むもので，ヨコナデによる調整がなされている。口縁部内面は，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削りが見られる。胎土は，微砂を含み良質で，色調は，淡褐色を呈する。16は，外反する口縁部の先端が，屈曲して立ち上るもので端部は丸くおさめられている。口縁端部外面は，若干の凹凸があり，ヨコナデによる仕上げであり，内面も，ヨコナデによる調整がなされている。外面には，ススが付着している。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，やや粗であり，色調は，淡赤褐色を呈する。17は，外反する口縁部の先端が，外傾して屈曲し立ち上るもので端部は丸くおさめられている。口縁端部外面は，ほぼ平坦で，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，細砂を含みやや粗であり，色調は，淡赤褐色を呈する。18，19は，外反する口縁部の先端が，屈曲して，大きく上方へ拡張するもので，端部は丸くおさめられている。口縁端部外面は，平坦であり，ほぼ垂直に造られており，ヨコナデ調整がなされている。口縁部内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削りがなされており，口縁部との間は，ほぼ垂直に造られている。胎土は砂粒をやや多く含み粗であり，色調は，淡褐色を呈する。土器の外面には，ススの付着が見られる。20は，外反する口縁部の先端が屈曲して上方へ拡張するものである。口縁端部外面は，ほぼ平坦に造られており，ヨコナデ調整がなされている。口縁部内面は，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがみられる。ヘラ削り部分，及び，口縁部外面の下面を除いて丹が施されている。胎土は，砂粒を含むも良質であり，色調は，乳褐色を呈する。21は，外反する口縁部の先端が，屈曲して上方に拡張するものであり，端部は丸くおさめられている。口縁部外面は，平坦で，ほぼ垂直に造られており，ヨコナデ調整がなされている。口縁部内面は，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部との間は，ほぼ垂直に造られている。胎土は，砂粒を多く含みやや粗であり，色調は，淡赤褐色を呈する。22は，外反する口縁部の先端が，上方へ拡張するもので，その端部は丸くおさめられている。口縁端部外面は，ゆるやかに弧を描くものである。口縁部内面は，ゆるやかな曲線を描くものでヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削りがなされており，口縁部との間は，上方へやや開く。ヘラ削り部分を除いて丹が施されて

おり，外面には，ススが付着している。23は，外反する口縁部の先端が若干拡張するもので，端部は丸くおさめられている。口縁部外面は平坦で，やや内傾して造られている。口縁部は，内外面ともにヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削りがなされており，口縁部との間は，下方に向けて若干開く。胎土は，良質で微砂を含み，色調は，茶褐色を呈する。24は，外反する口縁部の先端が，屈曲して上方へ拡張するもので，端部は丸くおさめられている。口縁端部外面は，ほぼ平坦で，若干内傾している。口縁部は，内外面ともにヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，口縁部の下段までヘラ削りがなされており，口縁部との間は，下方に開くが，平坦に造られている。ヘラ削りの部分を除いて丹が施されている。胎土は，微砂，金雲母を含み良質であり，色調は，淡茶褐色を呈する。25は，ほぼ水平に外反する口縁部の先端が，屈曲して立ち上るもので，端部は丸くおさめられている。口縁部外面は，ゆるやかに弧を描くもので，内外面ともに，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，口縁部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，砂粒を含むも良質で，黄褐色を呈している。26は，土器の底部である。外面は，上下方向のヘラミガキであり，内面は，部分的にクシによるナデが見られる。胎土は，細砂を多く含むも良質で，色調は，暗褐色ないしは，黒色を呈している。27は，口縁部が，大きく外反するもので，その先端が屈曲して向傾ぎみに立ち上るものである。口縁部外面は，弧を描くもので，ヨコナデによる調整がなされてる。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされている。頸部内面は，ほぼ垂直に造られており，ヨコナデ調整がみられる。頸部外面は，下に向けて開くものである。胎土は良質で，微砂，金雲母を含む。色調は，淡茶褐色を呈する。28は，大きく外反する口縁部の先端が，屈曲して立ち上るものである。口縁端部外面は，ゆるやかに弧を描くもので，ヨコナデによる調整がなされている。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされており，頸部の内面は，ほぼ垂直に造られている。口縁部，頸部内面は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，良質で微砂を含み，色調は，茶褐色を呈している。29は，外反する口縁部の先端が，ほぼ垂直に立ち上るもので，口縁端部外面は，ほぼ平坦に造られている。口縁部の内外面は，ヨコナデ調整がなされている。胎土は，微砂を含むも良質で，色調は，赤褐色を呈する。30は，外反する口縁部の先端が，若干内傾して立ち上るものである。口縁端部外面は，板状工具によるヨコナデがなされており，条線状の痕跡が見られる。口縁部内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされており，頸部は，下方に向けて若干開くものである。胎土は，良質で微砂を含み，色調は，褐色を呈している。外面にはススが付着している。31は，外反する口縁部の先端が，屈曲して内傾して立ち上るものである。口縁端部外面は，平坦に造られており，口縁部の内外面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部外面は，クシ状工具によるナデであり，内面は，頸部との境までヘラ削りが見られる。頸部は，下方に向けて若干開くものである。胎土は，良質で，微砂を含み，色調は，茶褐色を呈する。32は，大きく外反する口縁部の先端が　曲してやや内傾して立ち上るものである。口縁端部外面は平坦に造られている。口縁部内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされており，頸部は，下方に向けて若干開くものである。胎土は，良質で，微砂を含み，色調は，暗褐色を呈する。33は，外反する口縁部の先端が上方へ大きく拡張するものである。口縁端部外面は平坦に造られてお

り，ヨコナデ調整がなされている。胴部外面は，板状工具によるナデが見られ，内面は，頸部との境までヘラ削りがなされている。頸部は，ほぼ垂直に造られている。胎土は，良質で微砂を含むもので，色調は，淡褐色を呈する。34は，外反する口縁部の先端が屈曲して立ち上るものである。口縁端部外面は，板状工具によるヨコナデがなされており，条線状の痕跡が見られる。口縁部内面は，ヨコナデ調整がなされている。胴部内面は，頸部との境までヘラ削りがなされている。胎土は，良質で，微砂を含むものであり，色調は，褐色を呈する。35～41は，土器の底部である。35は，底面が平坦に造られるもので，底面から体部にかけて稜線の明瞭なものである。36は，底面が若干上げ底に造られるもので，体部外面はヘラミガキであり，内面はヘラ削りがなされている。体部への立ち上りは，垂直に近い状態がみられる。37は，底面は平坦に造られており，底面から体部への境は丸みをもつ体部への立ち上りは，ゆるやかである。体部外面はハケナデであり，内面はヘラ削りがなされている。38も，底面は平坦であり，体部との境は，やや丸みをもつ。体部の立ち上りは，36と37の中間である。39は底部が上げ底に造られるもので底部と体部の境いは丸みをもち，明確さはない。内面にはヘラ削りが見られる。器壁は全体に薄手に造られている。40は，底面が弧状をなすもので，底面のほぼ中央には，孔が穿たれている。41は，底面は平坦に造られており，体部との境は丸みをもつ。体部は大きく外傾して立ち上るものである。42は，外反した口縁部の先端が上方に大きく拡張するものである。口縁部外面は，ゆるく弧を描くもので，ヨコナデ調整がなされている。胴部は丸い形状を呈すものである。胴部は，二次的に火を受けたため器壁が剝離する部分が多く，全体にわたっての細かい観察ができないが，外面は，板状工具によるナデであり，内面は，ヘラ削り後ラデによる調整がなされている。胎土は，大粒の砂粒等を含むもやや良である。色調は，褐色を呈する。（井上）

第4節　小　　結

土　　器

新市谷遺跡から出土した遺物のほとんどは土器である。その土器を見ると，数点の前期弥生式土器もある。しかし，大多数は，弥生時代の後期以後のものであり，新市谷遺跡としても，その時期に特色があるものと推察される。そこで，ここでは，その時期を中心に土器について2・3の特徴を述べてみたい。

土器の編年については，第48図に提示するものである。その中で，弥生式土器の後期後半の時期から土師式土器の時期にかけては，山陰地方の影響が見られる。つまり，第35図3～8は九重式土器（註1）に似るものが見られる。第21図6の鼓形土器は，松江市的場土壙墓出土の的場式（註1）に類似しており，第19図16は，鍵尾Ⅱ式（註2）に相当するものと考えられる。2～3の特徴ある土器についてのみ取りあげたが，山陰地方の関係を強く示す土器が多く出土でている。

第33図1～5は，矢掛町芋岡山遺跡出土の土器（註3）に類似しており，ほぼ同時期と考えられるように，備中の南部の土器の影響も同時に見られる。以上のように，山陽，山陰両地方の影響を受けており，地理的にもその接点であることを示している。

出土した土器に，丹塗りの見られるものが比較的多い。高杯，器台には，ほぼ確実に丹塗りが見られ，長頸壺もその多くに丹塗りが見られる。丹塗り土器の胎土は，精良なものが多いが，中には雑な胎土の土器も数点出土しており，丹塗り土器の占める比率は大きい。その点は，岡山県南部との差を感じさせる。

住　居　址

新市谷遺跡で検出した住居址は，15軒である。その形状を見ると，隅丸方形を呈するものがその主体をなしている。円形に近い形態を呈するものに，11号，15号住居址がある。そして，12号住居址は6角形，もしくは8角形を呈するものである。その他の住居址は，隅丸方形を呈するものである。

新市谷遺跡は，丘陵の斜面に立地している。そのため，傾斜の急な場所に造られた住居址は当然に遺存状態も悪い。遺存状態が良好な資料が少ないため，住居址内の柱穴の在り方等は不明である。ところで，6号住居址とした遺構であるが，その形状には注目すべき点がある。つまり，検出した形状を見ると隅丸方形を呈しているのであるが，西側の一辺が14mを測るが南側壁は検出されなかった。住居址は，黄色粘質土を「L」字状に掘り下げて，斜面に土を盛ることにより床面を形成するものと考えられる。しかし，一辺14m以上の方形の住居址を造成するとすれば膨大な量の土を必要とすることを考えれば，床面の張り出しはむしろ小さいものと考えるのが妥当かと思われる。その平面に建築物を考えるとすれば，長方形を呈するものを想定すべきかと思う。また，床面には，多数の住穴を検出したのであるが，その組合せは必ずしも明確でない。検出した柱穴は，直列に並ぶもの2組を確認したが，全長14mに到るものはなく，検出した床面の中間まで続くものである。また，直列に並ぶ柱穴列も，一列のみで，それに対応する柱穴列は確認されていない（註4）。この事実も，この遺構の特長の一つである。さらに，それに対応する柱穴列は，張り出した床面に所在したとすれば，現状では確認できない。また，そうであるとすればその間隔は，4m以上を測るものとすることができる。いずれにしても，この住居址の本来の形態を想定するには問題点が多すぎるが，14m四方の規模を想定するよりは，長屋状を呈する長方形の形態を想定する方が妥当性が高いと考える。

住居址の時期についてであるが，住居址から出土した土器より組合せてみると，まず4号，8号住居址を同時期とすることができる。出土した土器は，弥生式土器の後期の前半に位置するものでありこのグループが，検出した住居址の中で最も古い時期である。次に2号住居址となり，弥生式土器の後期の後半に位置する。次のグループは，12号，10号，6号住居址であり，11号住居址がそれに続くと考えられる。それ等は，土師式土器の初頭に位置するものとすることができるであろう。

以上は，土器を出土した住居址である。土器を出土しない住居址について考えてみると，まず13号住居址であるが，11号，12号住居址のいずれよりも古く，2号住居址と時期的に近いものと考えられる。3号，5号住居址であるが，これは，2号～5号住居址が重複しており，同時に2軒が共存する可能性は無い。これ等は，弥生式土器の後期の時期に，4号，3号，5号，2号住居址の順で逐次造られたものである。14号，15号住居址であるが，これも重複しており同時に存在することは考えられない。また，13号住居址の規模から考えれば，14号住居址とは共存することは考えられない。また，

15号住居址とも同様である。住居址の形態から見れば，14号，16号住居址は，壁溝の造り方等が6号住居址に似るものがある。15号住居址は，11号住居址に似るものがある。7号住居址と，9号住居址は，形態，規模に似るものがあり，その点は，8号住居址とも共通する点であり，8号住居址の時期に近いものと考えられる。

以上の所見をまとめると，4号住居址，8号住居址が最も古い。次いで，3号住居址，5号住居址，7号住居址，9号住居址が遂次構築されてゆく。そして，2号住居址から5号住居址は，4号→3号→5号→2号住居址の順序で造られる。7号住居址，9号住居址は，共存の可能性もある。次いで，6号住居址，10号住居址，12号住居址が構築される。14号住居址，16号住居址も，ほぼ同時に存在したものと考えられる。そして，11号住居址が構築されるものであり，15号住居址を，同時期のものと考えることができるであろう。

新市谷遺跡の住居址の在り方を見ると，弥生時代の後期以降の時期の各時期には，2～3軒もしくは，3～4軒を単位として集落が営なまれていたと考えられる。その集団単位は，古坊遺跡の住居址，迫遺跡の住居址等にも想定することができるであろう。遺跡内での集団単位は，判明したのであるが，単位集団内の住居構造等については，不明である。

貯蔵穴

貯蔵穴と考えられる遺構を3個検出した。その中の1個は，重複したものである。また，2個の貯蔵穴からは，土師式土器が出土した。いずれも，土師式土器としては，非常に古い時期に属するものである。3号貯蔵穴も，古式の土師器を出土した遺構である。この貯蔵穴は，6号住居址と重複して検出した。その検出状態からして，明らかに貯蔵穴が新しい時期のものである。貯蔵穴群と，11号住居址は，共存もしくは，非常に近い時期に位置すると考えられる。

鉄器

新市谷遺跡から出土した鉄器は，鉄鏃1，クワ先1，鎌1，鉇1，鉄鋌2である。鉄鏃は，12号住居址から出土したものである。凹基式の鉄鏃で，全長31.4㎜，最大巾22.9㎜を測る。厚さは3.5㎜を測り，両丸造りと考えられる。時期としては，13号住居址と同時期とすることができるであろう。クワ先，鎌，鉇，鉄鋌は，土壙墓（No. 25）より，一括で出土したものである。クワ先は，鉄板の両端を折り曲げたもので，最大巾は10.43㎝を測る。クワ先の厚さは約4㎜を測り，刃先に向って薄くなるものである。刃先が不整形な弧を描くのは，使用による欠損とも考えられる。鉄鎌であるが，全長約17㎝を測るこの鉄鎌は，元来の形態は直刃型であったと推測される。刃部が弧を描くのは，使用により研ぎ込まれたものと考えられる。クワ先，及び，鉄鎌の時期についてであるが，上限は，弥生時代中期であり，その下限を示せば，一般的には，5世紀の中頃とされるであろう。しかし，クワ先について述べれば，その大きさ，鉄板の厚さからすれば，4世紀の後半までに位置すると考えられる。また鉄鎌であるが，これは，5世紀の前半までに位置するものと考えられる。（註5）。個々の鉄器を取りあげて年代を推定すれば，その下限は，上記のようになる。鉇であるが，これは，2枚の鉄鋌に

挟まれており，それが銹び，付いているために，正確な形状は不明である。しかし，横から見るとゆるやかに弧を描く状態が見られ，その平面形は，長楕円形とも言うべき柳葉状を呈している。残長44㎜，最大巾は11㎜を測る。以上の結果から鉈と考えるものである。鉄製品に関しては以上である。クワ先及び，鎌について補足すれば，木の柄等が着装される部分について，綿密に銹落しをしたのであるが，木質の遺存する状況は見られなかった。そのいずれもは，充分に実用に耐えるものであり，また，実際に使用されたものである。それが，埋葬に際して副葬されたものである。鉄鋌であるが，これは2枚が出土している。鉄鋌は，薄い鉄板で，両端が撓状に開くものである。全長は17.1㎝を測り，小形鉄鋌の部類に入る。現在までに知られる鉄鋌の出土状況は，古墳から出土したものがほとんどで（註6）他に沖の島祭祀遺跡（註7）からも出土している。古墳から出土した鉄鋌は，中期古墳以後の古墳から出土しているため，その上限を5世紀中葉に考えられている。さて，新市谷遺跡出土の鉄鋌の年代について触れる必要がある。

現在までに出土している鉄鋌からその年代を考えると，先にも述べたが古くて5世紀中葉とすることができるであろう。また，同伴する鉄製品を見ても，その形態は古い様相を呈しており，5世紀の中葉を降ることはないであろう。クワ先のみについて考えれば，その形状は，むしろ実用品であり，鉄製模造品ではない。その点は，クワ先が，より古い時期の遺物であることを示唆するものであり，その下限を，4世紀におくことができる。鎌の年代をその時期におくことはさして矛盾するものではない，問題は鉄鋌である。鉄鋌の年代は，先にも述べた様に，5世紀中葉以降に考えられており，ここに，クワ先と鉄鋌の年代的差が考えられる。その点は，いずれかの遺物の年代を他方に一致させれば問題は解決することである。

ところで，新市谷遺跡から出土している他の遺物を見ると，本報告に図示した土器より時期の下る遺物もある。それ等は，須恵器片，備前焼片，磁器片等である。その多くは，小破片であるため図示できなかったが，5世紀代と考えられる遺物は見られない。また，検出した遺構では，貯蔵穴より出土した土器からして，その遺構が最も新しい時期のものとしうる。そして，この貯蔵穴が造られて以後は，この地は集落としての機能を一時停止するものである。土壙墓から数点の土器片が出土している。その土器は，口縁部の形状から貯蔵穴より出土した甕と時期的にほぼ同期と考えられる。以上の理由から，鉄鋌は，貯蔵穴と同時期，もしくは若干降るものとすることができるであろう。そして，概略の年代を，4世紀中葉から，4世紀の後半以降に想定できるものと考える。（井上）

〔註〕

註1　東森市良　「九重式土器について」『考古学雑誌』第57巻1巻

註2　山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』

註3　間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館報』　3号

註4　山陽団地内の用木山遺跡からも同様の遺構が検出されている。神原英郎『用木山遺跡』岡山県山陽町教育委員会

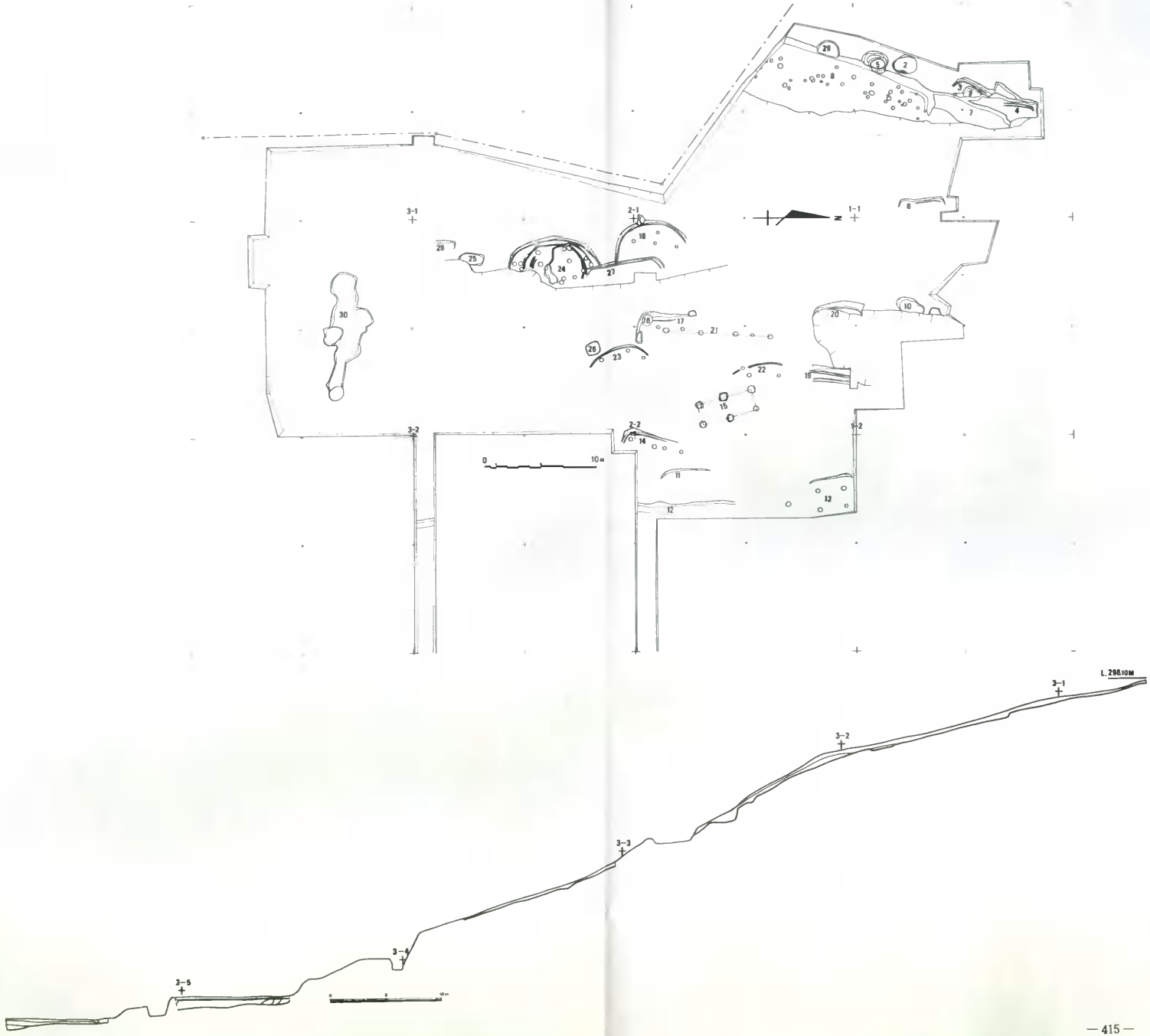
註5　都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13号第3号

註6　森浩一編　『鉄』　日本社会思想社
　　野上丈助　「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号

註7　『沖ノ島』Ⅰ・Ⅱ　宗像大社復興期成会

表2　新市谷遺跡遺構一覧表

No.	グリッド区	種　類	備　考
1	B・C－4	住居址？	
2	D－1	1号貯蔵穴	土師器
3	〃	2号住居址	
4	〃	3号　〃	
5	〃	2号貯蔵穴	
6	〃	7号住居址	
7	〃	4　〃	新3↔4↔7旧
8	〃	6　〃	埋土中より鼓形器台出土
9	〃	5　〃	新3－9－4－7旧
10	D－2	土壙	
11	C－3		
12	〃	段	丘陵の東斜面を，A－3～C－3Gまで続く
13	〃	9号住居址	
14	〃	16号住居址	
15	C－2	建物1	1×2（180×240・240）
16	〃	集石土壙	石組の間より青磁片が出土
17	〃	14号住居址	
18	〃	11　〃	
19	〃	10　〃	直口壷等
20	〃	8　〃	床面が30cm残る
21	〃	建物2	
22	〃		
23	B－2	15号住居址	
24	〃	12　〃	
25	〃	土壙墓	クワ先，鉄鋌，鎌
26	〃	土壙	
27	〃	13号住居址	
28	〃	土壙	
29	C－1	3号貯蔵穴	No.8を切る
30	A－2		



第36図　遺構配図及び地形断面図

第5章　古坊遺跡の調査

第1節　遺　　構

1. 土　壙　墓

土壙墓1　長軸がN—19°—Eを向くもので，形状は，巾に比べて，長軸方向に長い。北側の短辺は，ほぼ直線であるが，南側は弧状である。検出面での規模は，長，208cm，巾，49cmを測る。床面は，南側が若干高い。床面での規模は，長，183cm，巾，34cmを測る。検出面より床面までの深さは，36cmを測る。土壙墓は，黄色粘土層に掘り込まれており，小口板等の痕跡は見られなかった。

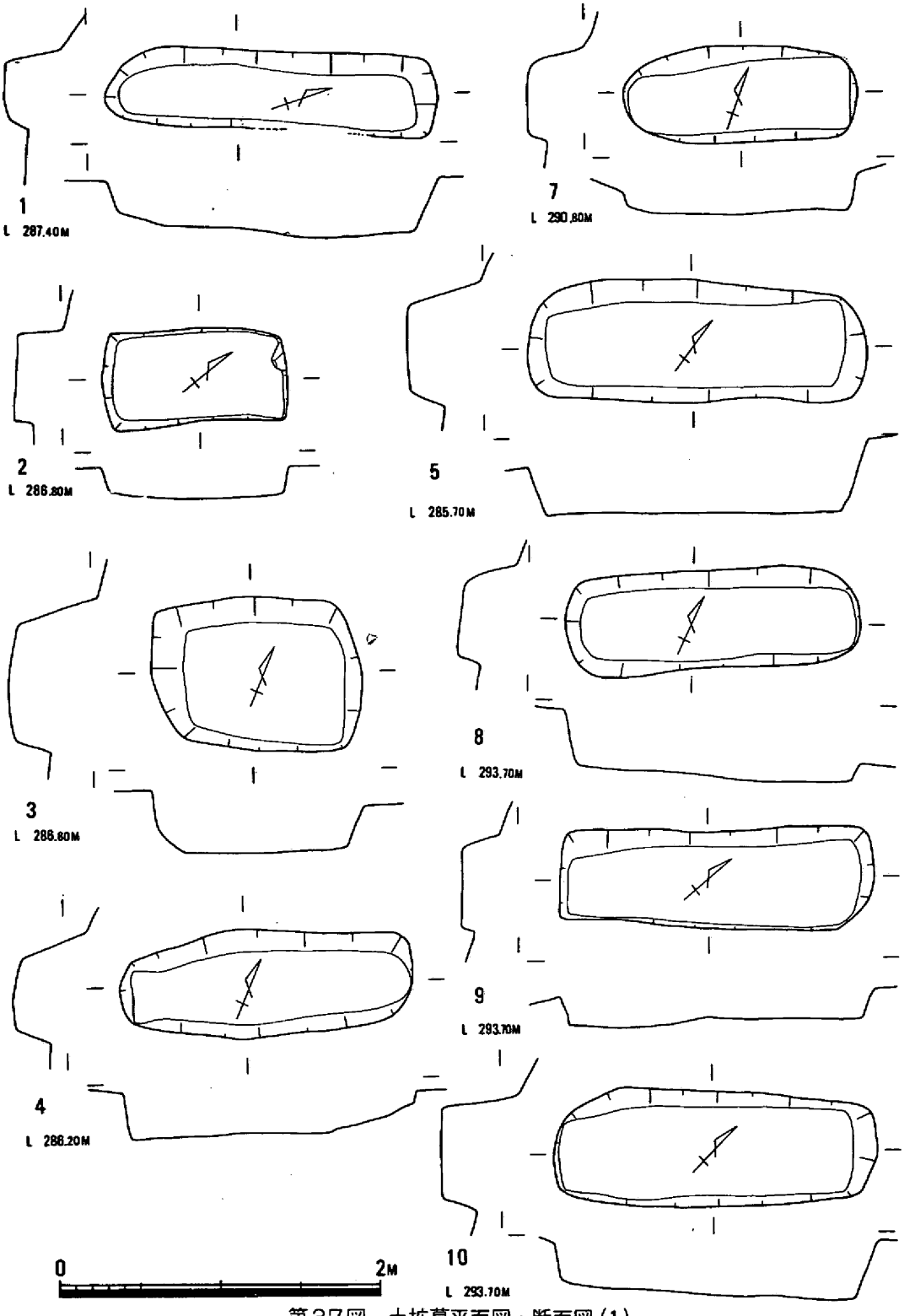
土壙墓2　土壙墓1の南西約10mの位置で検出した。長軸は，N—38°—Eを向くものである。その形状は，各辺ともに直線的で，長方形を呈している。検出面での規模は，長，115cm，巾，57cmを測る。床面は，ほぼ水平に造られている。床面での計測値は，長，107cm，巾，52cmであり，検出面より床面までの深さは，29cmを測る。土壙墓は，円礫を含む黄色粘土層に掘り込まれており，埋土は，黒色土であった。土壙内では，木棺等の痕跡は検出されなかった。

土壙墓3　土壙墓2の南西約60cmの位置に検出した。長軸は，N—67°—Eを向くものである。形状は，土壙墓2に似ており，それよりもさらに長さと巾の差は小さい。検出面での規模は，長，132cm，巾，94cmを測る。検出面での形状を見ると，両長辺は，ほぼ直線であるのに対し，短辺は，若干曲線的である。床面での規模は，長，98cm，短，74cmを測り，検出面より床面までの深さは，56cmを測る。床面は，ほぼ水平であり，床面での各辺は直線的である。

土壙墓4　土壙墓3の南南西約3mの位置において検出した。長軸の方向は，N—66°—Eである。検出面での形状は，各辺ともに若干曲線的であり，小判形を呈する。検出面での規模は，長，183cm，巾，68cmを測る。床面での形状は，東側の短辺は弧を描くが，西側は直線的である。長辺は，両側ともにゆるやかな曲線を描く。床面は，東側が高く，西側が低い。床面での規模は，長，174cm，巾，46cmを測り，検出面から床面までの深さは，45cmを測る。

土壙墓5　土壙墓4の南南東約1mの位置で検出した。長軸の方向は，N—57°—Eである。検出面での形状は，両長辺はほぼ直線的であるが，短辺は弧を描き小判形を呈する。検出面での規模は，長，214cm，巾，77cmを測る。床面で，形状は，東側の辺が若干曲線的であるがほぼ長方形である。床面での規模は，長，186cm，巾，54cmを測り，検出面より床面までの深さは，47cmを測る。底面は，ほぼ水平に造られている。

土壙墓7　土壙墓4の北西約14mの位置で検出した。長軸の方向は，N—71°—Eである。検出面での形状は，各辺とも曲線的であり，小判形を呈している。規模は，長，147cm，巾，58cmを測る。床面は，ほぼ水平に造られており，その形状は，東側短辺が直線的であるが，概略小判形を呈している。床面での規模は，長，138cm，巾，44cmを測り，検出面からの深さは，35cmを測る。



第37図　土坑墓平面図・断面図（1）

土壙墓8　土壙墓7の北約10mの位置に検出した。長軸の方向は，N—66°—Eである。検出面での形状は小判形を呈している。検出面での規模は，長，187cm，巾，61cmを測る。床面は，西側が高く，東側に低い。床面での形状も，検出面での形状にほぼ同じである。床面での規模は，長，171cm，巾，45cmを測り，検出面からの深さは34cmを測る。

土壙墓9　土壙墓8の南西に隣接して検出した。長軸の方向は，N—39°—Eである。検出面での形状は，両長辺及び，西側短辺は直線的であるが，東側短辺はゆるやかに曲線を描く。検出面での規模は，長，200cm，巾，59cmを測る。床面での形状は，検出面での形状にほぼ同じである。床面は，東半は，ほぼ水平であるが，西半は，西に向けて低くなる。床面での規模は，長，183cm，巾，49cmを測る。検出面からの深さは，25cmを測る。

土壙墓10　土壙墓9の南西に隣接して検出した。長軸の方向は，N—45°—Eである。検出面での形状は概略小判形を呈している。検出面での規模は，長，205cm，巾，71cmを測る。床面での形状も，ほぼ小判形を呈する。床面は，西側が高く，東側に低い。床面での規模は，長，184cm，巾，54cmを測り，検出面からの深さは，51cmを測る。

土壙墓11　土壙墓10の西約2mの位置で検出した。長軸の方向は，N—41°—Eである。検出面での形状を見ると東側に直線的な短辺が見られるが，概略楕円形を呈している。検出面での規模は，長，208cm，巾，59cmを測る。床面の形状も同様である。床面は，東側が高く，西側に低い。床面での規模は，長，190cm，巾，43cmを測る。検出面よりの深さは，39cmを測る。

土壙墓12　土壙墓11の南西約3mの位置で検出した。長軸の方向は，N—58°—Eである。検出面での形状は，北側の長辺が若干乱れるが，概ね小判形を呈している。検出面での規模は，長，174cm，巾，51cmを測る。床面での形状は，両長辺は，ほぼ直線を呈しており，両短辺は，ゆるやかに弧を描くもので，小判形を呈している。床面は，ほぼ水平に造られており，その規模は，長，166cm，巾，48cmを測る。検出面からの深さは，26cmを測る。

土壙墓14　土壙墓口の北東約11mの位置に検出した。長軸の方向は，N—26°—Eである。検出面での形状は，東側長辺は直線的であるが，西側長辺は，大きく弧を描くものである。検出面での規模は，長，139cm，巾，73cmを測る。床面の形状は，各辺ともに直線的で，長方形を呈している。床面は，北に高く，南に低い。床面での規模は，長，121cm，巾，34cmを測り，検出面よりの深さは，48cmを測る。土壙墓内には，両短辺側に，小口板の痕跡を検出した。小口板痕は，北側では掘方の基底部から約10cmの位置で，また，南側は，掘方の基底部に沿った位置に検出した。両小口板痕の内法は，98cmを測る。

土壙墓15　土壙墓14の東南東約12mの位置で検出した。長軸の方向は，N—37°—Wである。検出面での形状は，両長辺は直線的であるが，南側短辺は弧状である。検出面での規模は，長，132cm，巾，46cmを測る。床面は，南側が高く，北側に低い。北側短辺に沿う溝は，短辺の中間までしかないが小口溝の可能性もある。床面での規模は，長，124cm，巾，39cmを測り，検出面からの深さは，24cmを測る。

土壙墓16　土壙墓15の南東約2mの位置に検出した。長軸の方向は，N—85°—Wである。検出面

での形状は，若干の乱れは見られるが，小判形を基にしたものと推測される。規模は，長，126cm，巾，45cmを測る。床面の形状も，検出面のそれとほぼ同じである。床面は，西に高く，東に低い。規模は，長，109cm，巾，36cmを測る。検出面からの深さは，18cmを測る。

土壙墓17　土壙墓17の東約1mの位置に検出した。長軸の方向は，N—33°—Wである。検出面での形状は，南側短辺が直線的であり，北側は大きく弧を描くものである。検出面での規模は，長，184cm，巾，52cmを測る。床面は，ほぼ水平で，東側長辺の壁は削平されており，検出されなかった。床面での形状は，検出面でのそれと同様である。床面での規模は，長，175cm，巾，50cmを測る。検出面からの深さは，18cmを測る。

土壙墓18　土壙墓17の北東2.5mの位置に検出した。長軸の方向は，N—22°—Wである。検出面での形状は，西側長辺を除いて直線的である。検出面での規模は，長，197cm，巾，57cmを測る。床面は，南に高く，北に低い。床面での形状を見ると，西側長辺がゆるやかに曲線を描く他は直線的である。床面での規模は，長，191cm，巾，43cmを測る。検出面からの深さは，35cmを測る。

土壙墓19　土壙墓18の北東側に隣接して検出した。長軸の方向は，N—48°—Wである。検出面での形状は，南側長辺が，山なりの曲線を描く他はゆるやかな弧を描くものである。検出面での規模は，長，194cm，巾，74cmを測る。床面は，ほぼ水平に造られており，各辺は直線的である。床面での規模は，長，179cm，巾，50cmを測る。検出面から，床面までの深さは，41cmを測る。

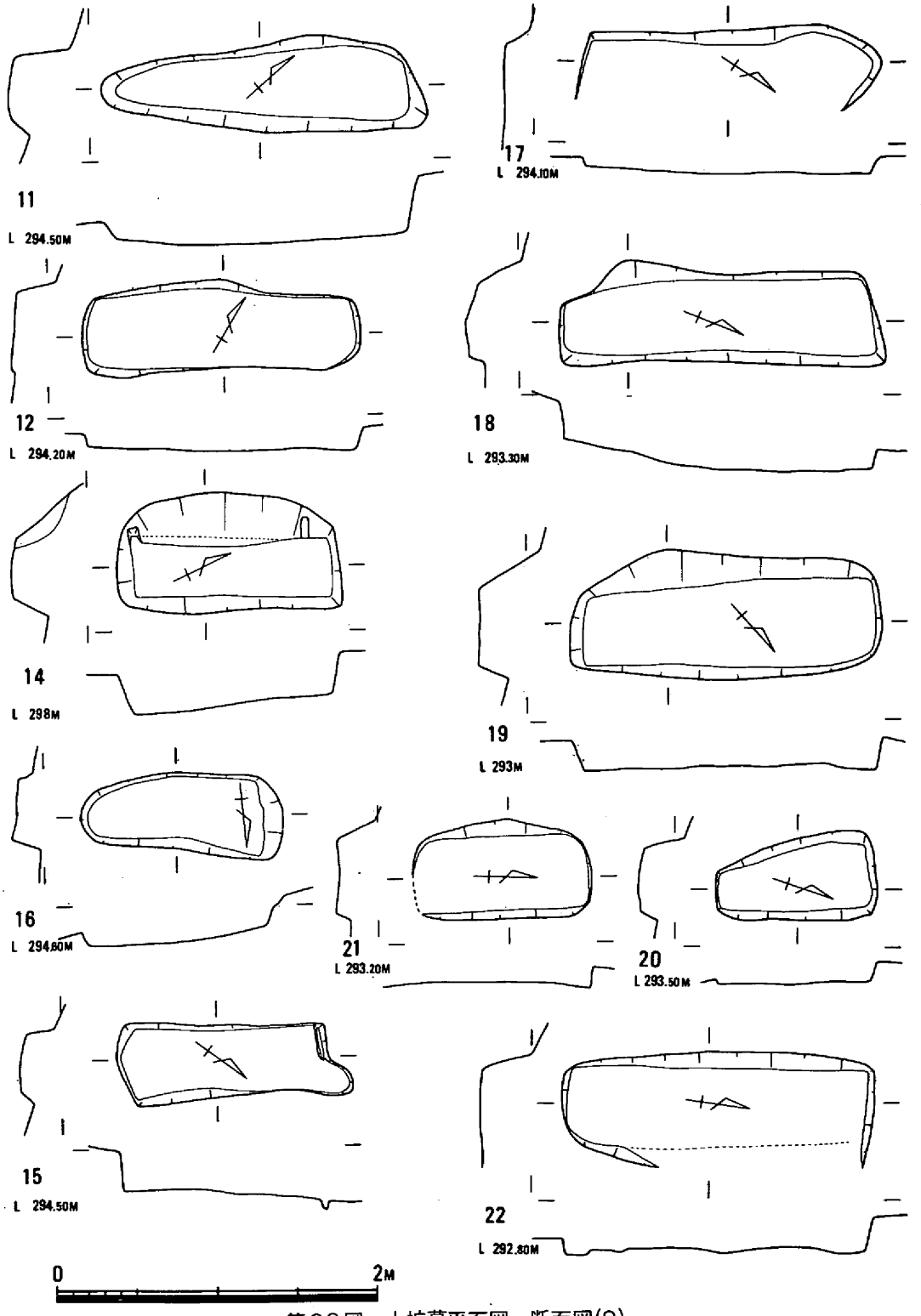
土壙墓20　土壙墓18の南西約1mの位置で検出した。長軸の方向は，N—19°—Wである。検出面の形状は，北側短辺が，南側のそれに比べて大きく，台形を呈している。検出面での規模は，長，100cm，巾，54cmを測る。床面は，ほぼ水平に造られており，その形状は，検出面のそれに似る。床面での規模は，長，94cm，巾，40cmを測る。検出面より床面までの深さは，29cmを測る。

土壙墓21　土壙墓20の東約1mの位置に検出した。長軸の方向は，N—2°—Wである。検出面での形状は，西側長辺が山なりに線を描くものである。各角は，弧を描き，それに対応する側辺は直線的である。検出面での規模は，長，112cm，巾，61cmを測る。床面は，水平に造られており，その形状は，各側辺ともに平行であり，角において弧を描くものである。床面での規模は，長，108cm，巾，45cmを測る。検出面から床面までの深さは，24cmを測る。

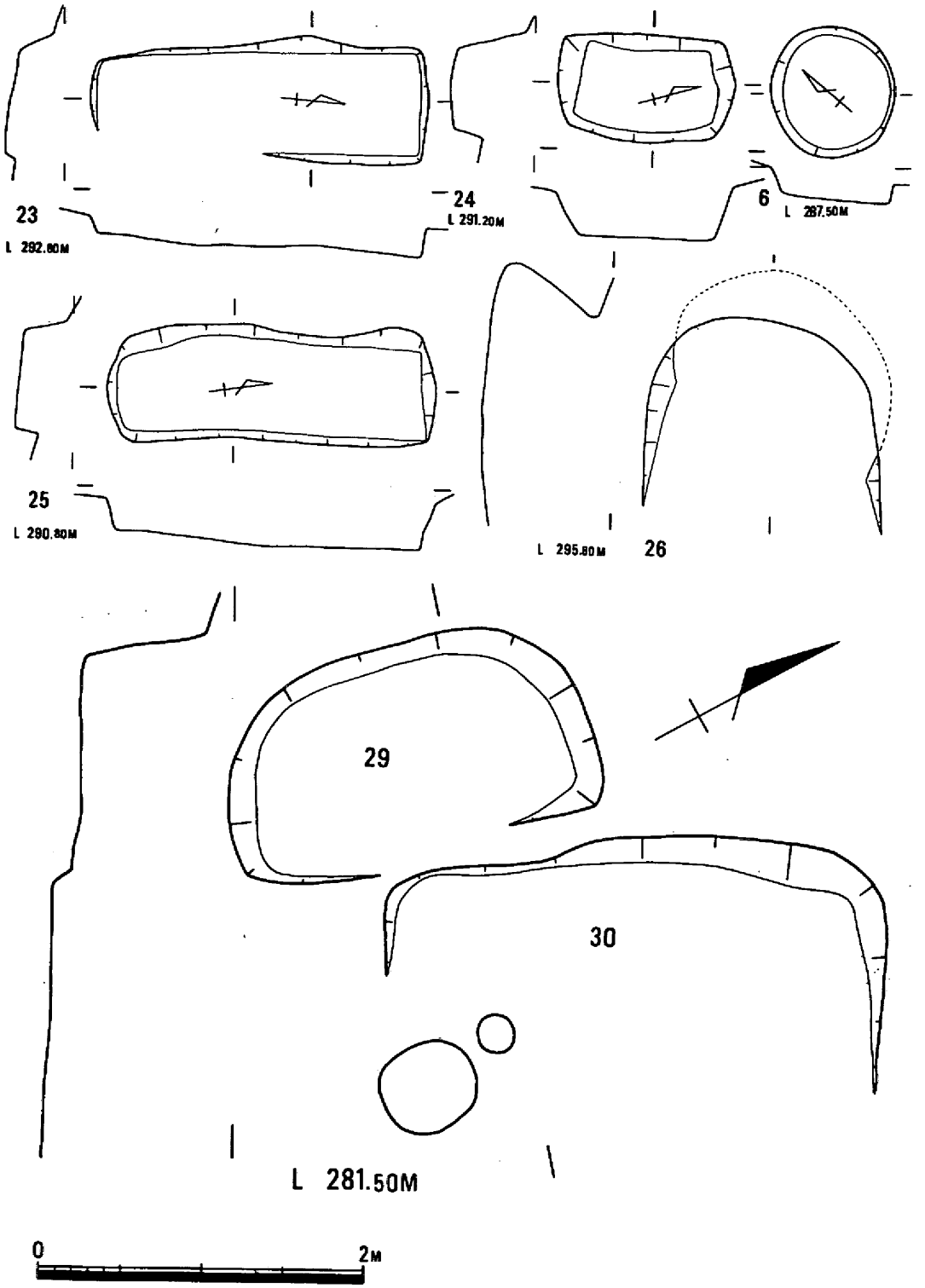
土壙墓22　土壙墓21の東約1mの位置に検出した。長軸の方向は，N—8°—Wである。検出面での形状は，各辺ともにゆるやかに曲線を描くものである。検出面での規模は，長，194cm，巾，68cmを測る。床面は，ほぼ水平に造られている。床面での形状は，東側長辺が削平されてはいるが，他の側辺はともに直線的である。床面での規模は，長，184cm，巾，49cmを測る。検出面から床面までの深さは，32cmを測る。

土壙墓23　土壙墓22の南約80cmの位置で検出した。長軸の方向は，N—5°—Wである。検出面での形状を見ると，各辺ともに直線的である。検出面での規模は，長，208cm，巾，73cmを測る。床面は，南に高く，北に低い。床面の形状は，東側長辺の一部が削平されてはいるが，各側辺ともに直線的である。床面での規模は，長，198cm，巾，61cmを測る。検出面から床面までの深さは，23cmを測る。

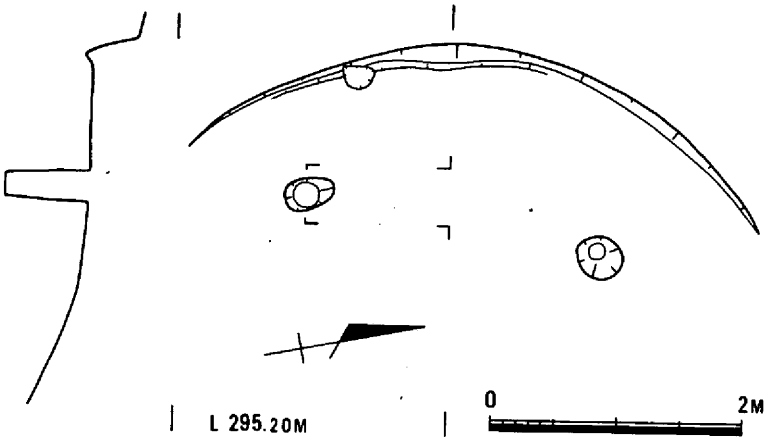
土壙墓24　土壙墓23の東約5mの位置で検出した。長軸の方向は，N—14°—Eである。検出面で



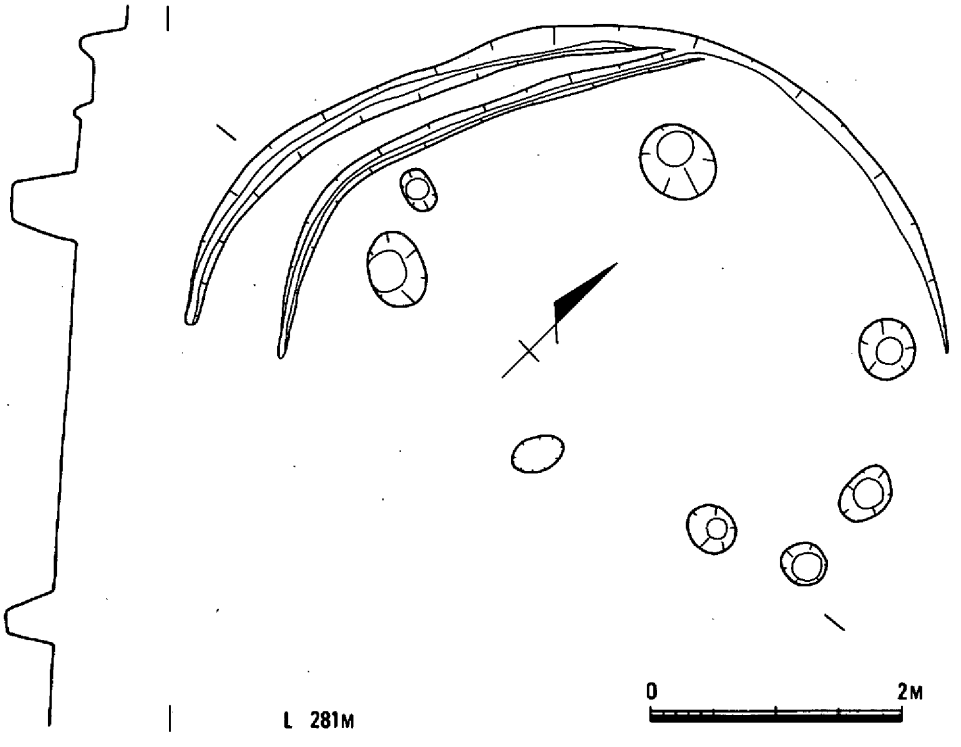
第38図　土坑墓平面図・断面図(2)



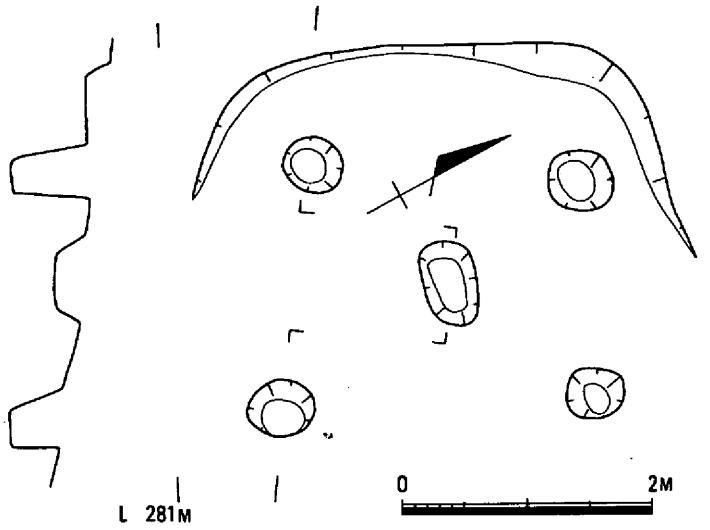
第39図　土坑墓及び土坑平面図・断面図(3)



第40図　1号住居址平面図・断面図



第41図　2号住居址平面図・断面図



第42図　3号住居址平面図・断面図

の規模は，長，110cm，巾，68cmを測る。床面はほぼ水平であり，床面での規模は，長，86cm，巾，50cmを測る。検出面から床面までの深さは，47cmを測る。

土壙墓25　土壙墓24の東側に隣接して検出した。長軸の方向は，N—8°—Eである。検出面での形状は，西側長辺は乱れるが，他は安定した曲線を描く。検出面での規模は，長，203cm，巾，69cmを測る。床面は，南に高く，北に低い。床面の形状は，西側長辺が，やや乱雑な側辺を見せるが，他は，比較的に直線的である。床面での規模は，長，185cm，巾，57cmを測る。検出面から床面までの深さは，28cmを測る。（井上）

2. 土　　壙

土壙26　土壙墓12の北西約2mの位置で検出した遺構である。その形状を見ると，南東側は木の根が存在したために破壊されていた。残存する部分を見ると，検出面より，床面に向けてラッパ状に開くものである。残存する床面の最大径は138cmを測る。また，床面までの深さは65cmを測る。この土壙は，小破片の土器しか出土していないが土壙墓群の中にあっても若干時期的に古いものと考えられる。

土壙29　土壙墓群の存在する尾根より一段低い台地の縁辺で検出した。土壙の最大長は226cmを測り，巾は130cmを測る。

土壙30　土壙29の東側に接して検出した。東側約半分は削平されていた。残存する西側の長さは，3.1mを測る。（井上）

3. 住　居　址

1号住居趾（No. 13）（第40図）

土壙26と同様に，尾根上の土壙墓群の間で検出した。丘陵の斜面が急であるため，その遺状態は悪く，2本の柱穴と，壁体の約3分の1を残すのみである。壁体は，概ね弧状を呈しており，壁体に沿って，わずかに溝状の遺構が見られた。残存する柱穴間の距離は，2.30mる測る。同住居址の床面からは，サヌカイト製の石庖丁状の石器が出土している。住居址の時期は，土壙26とほぼ同時期と考えられる。

2号住居趾（No.27）（第41図）

土壙墓群のある丘陵の下段の斜面で検出した。同住居址も，残存状態は悪く，壁体の約2分の1程度を残すのみである。床面には，7個の柱穴状のピットを検出したが，その対応関係は不明である。また，壁溝も2本検出した。

3号住居趾（No.28）（第42図）

2号住居址に隣接して検出した。この住居址も東半は削平されており，その形状の全てを知ることは不可能である。しかし，概ね隅丸方形を呈するものと推測される。柱穴は，4本を検出した。住居址のほぼ中央には，中央穴がある。（井上）

第2節　遺　　物

1　遺構に伴わない遺物

古坊遺跡における遺物はほとんど遺構に伴っていない。斜面あるいは谷部に流れて出土したものである。遺物の示す時期も縄文晩期から中世に属するものまで認められるが，弥生時代のものと，土壙墓に伴なうと考えられるものが主体をなしている。

縄文時代の遺物（第43図1・2）

縄文時代の土器は谷部のトレンチから出土している。いずれも深鉢の口縁部破片で，貼付の刻目突帯をめぐらすものである。内面は丁寧な作りであるが，外面は粗雑である。胎土に砂粒を多く含み，色調は茶褐色を呈する。

これらの土器は縄文時代晩期でも新らしい時期のものであり，岡山県の編年で黒土BⅡ式（註1）と言われているものに相当するであろう。

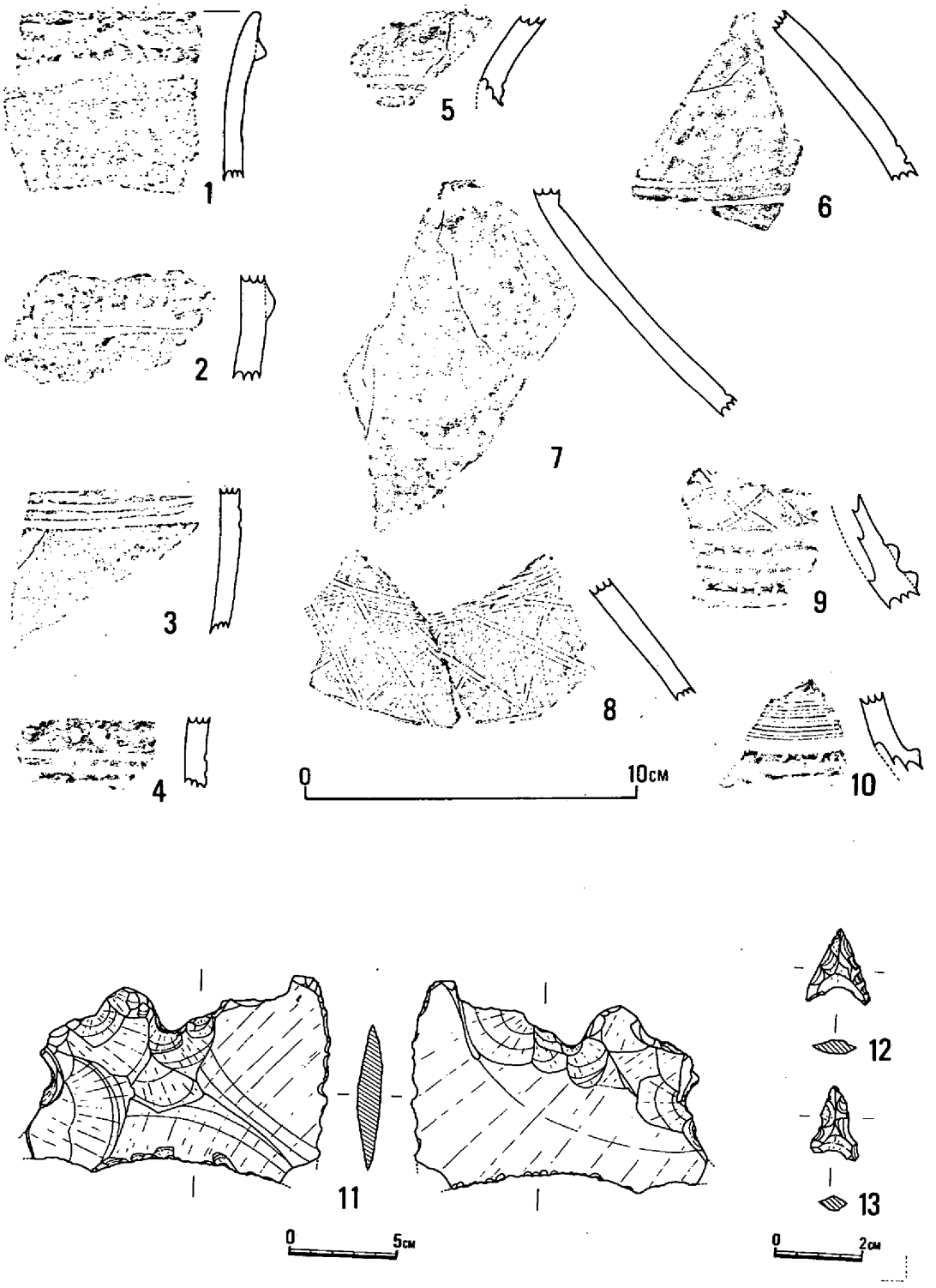
弥生時代の遺物

＜前期の土器＞　（第43図3～7，第44図1～2）

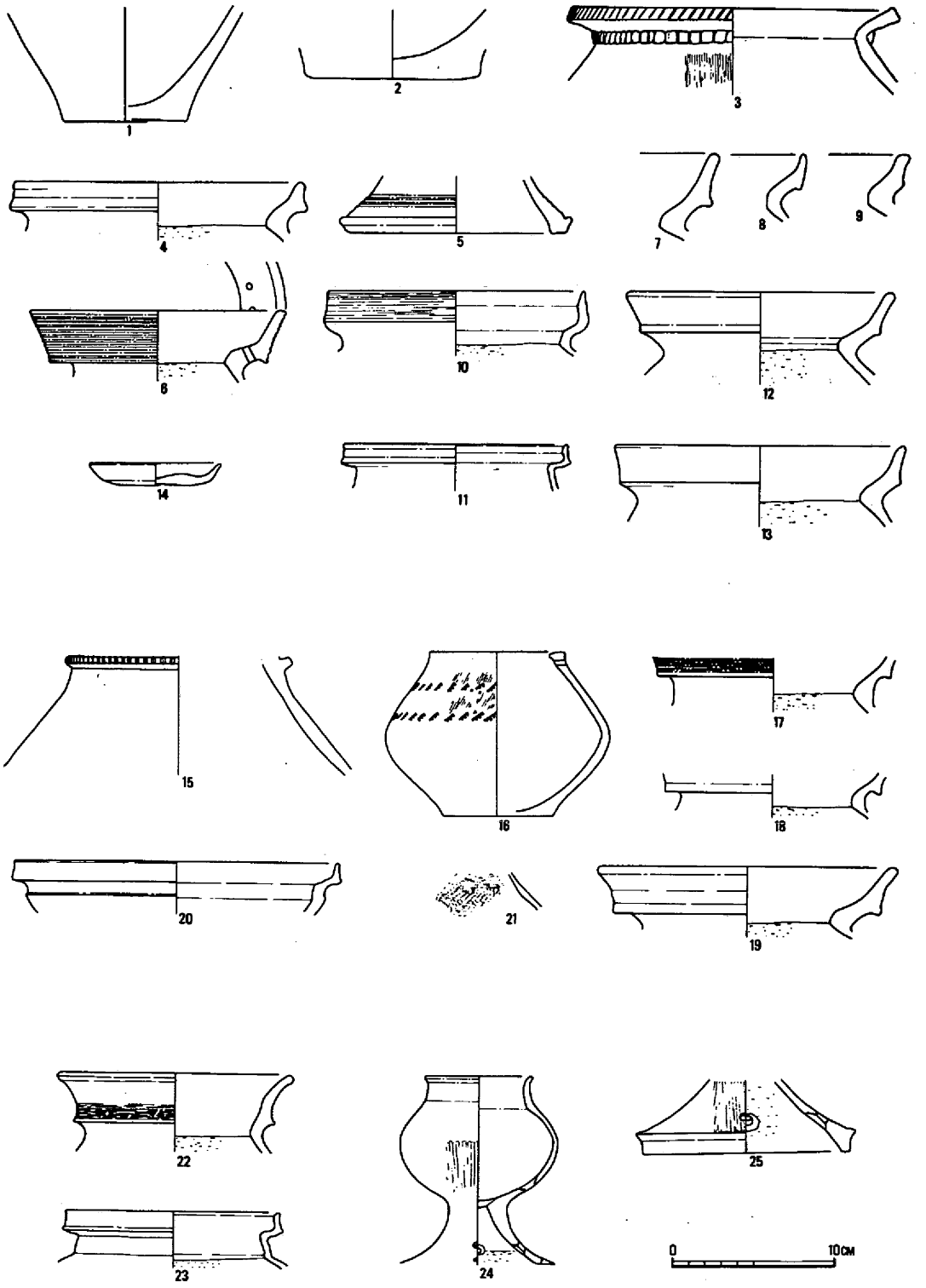
5～**7**は壷の破片である。**5**は頸部に沈線がめぐる。**6**は肩部に2本の沈線がめぐり，**7**は細い線による重弧文が施されている。いずれも丁寧な仕上げで，暗黄褐色を呈する。

3と**4**は甕の破片で，頸部に数条の篦描沈線を施すものである。

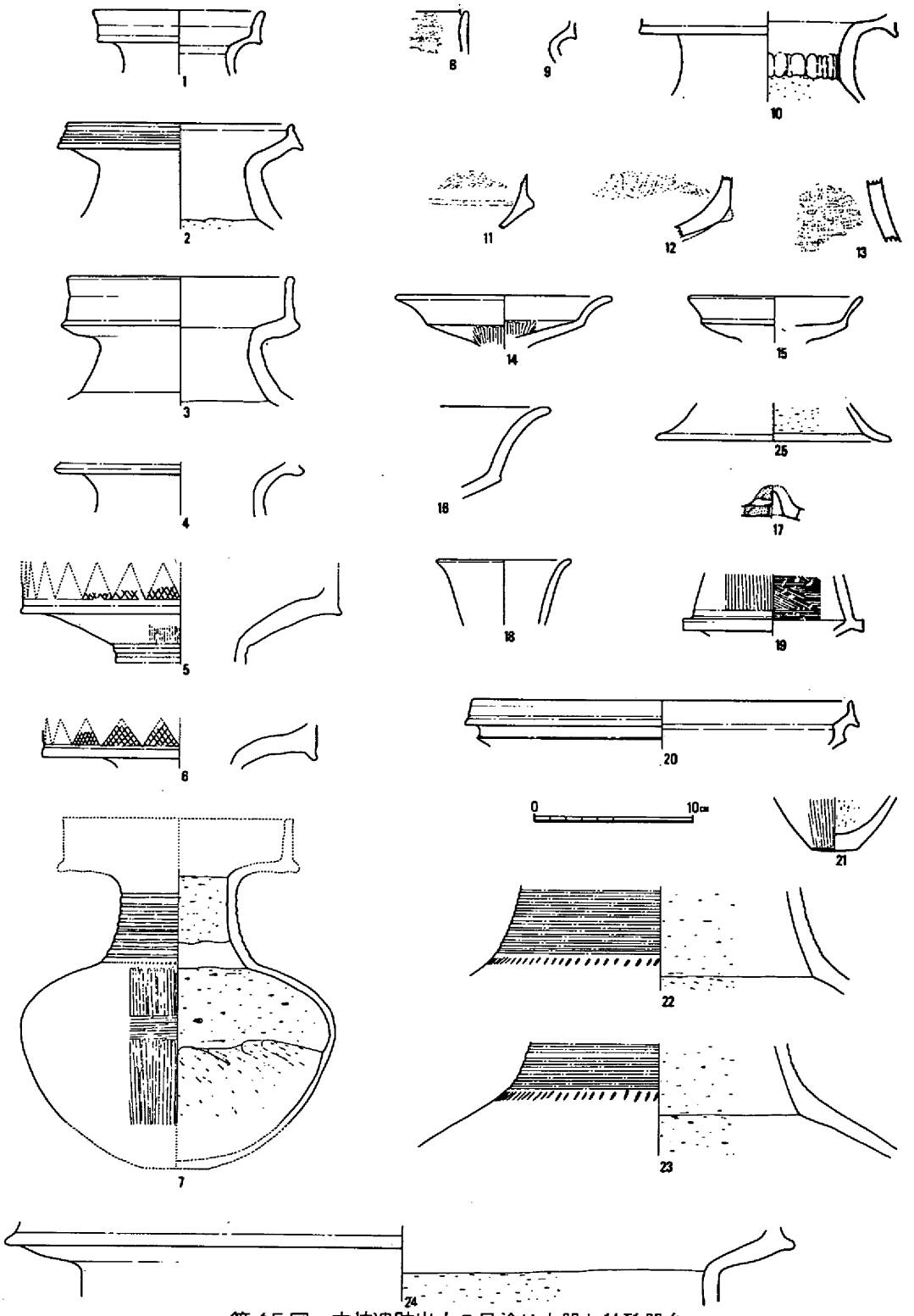
7の土器は前期でも非較的古い段階のものと考えられるが，その他はだいたい前期後半の時期と考



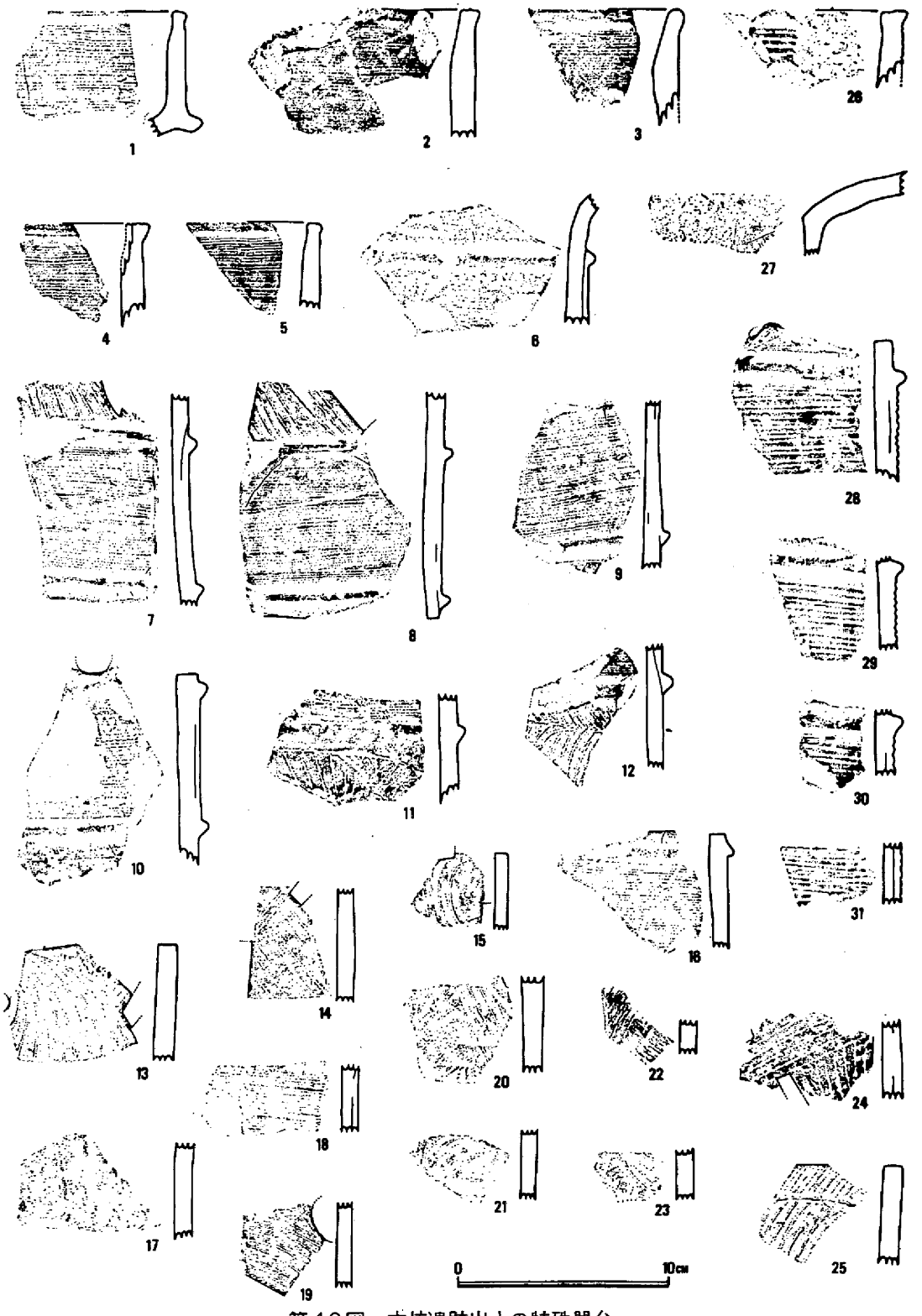
第43図　古坊遺跡出土遺物



第44図　古坊遺跡出土の遺物



第45図　古坊遺跡出土の丹塗り土器と特殊器台



第46図　古坊遺跡出土の特殊器台

えられる。

＜中期の土器＞　（第43図８～10，第44図３）

第43図８～10は壷の破片と思われ，櫛描による平行線文，格子目文様や刻目突帯で飾ったものである。キメの細かい胎土で，色調は黄褐色を呈する。

第44図３は甕の口縁部で，頸部に貼付突帯がある。口縁端部はやや上方につまみ出され，斜行する線刻が施される。外面は刷毛状工具により，内面はナデによって仕上げられている。

これらの土器は弥生時代中期中葉に属するものと考えられる。

＜後期の土器＞　（第44図４－６）

４は甕で，肉厚な口縁部をもつ。外面にはススが付着している。

５は高杯の脚で裾に沈線が３本めぐる。

これらの土器は後期前半のものである。

６は口縁端を上方へ拡張し，櫛状工具による条線が施される。対になると思われる穴が２つ認められる。山陰的な様相をもち，後期後半に位置ずけられるものと考える。

＜石器＞　（第43図12・13）

弥生時代のものと考えられる石鏃が２点出土している。いずれもサヌカイトでできている。

古墳時代の遺物　（第44図７～13）

古墳時代の遺物は土壙墓に伴なったものと考えられるが，丹塗り土器は一括して特殊器台などといっしょに説明を加えることにした。したがってここでは丹塗りでないものを取りあげている。

７～13はいずれも外面にススが付着しており，日常的な容器と考えられる。黄褐色や暗褐色を呈するものが多く，胎土には砂粒を多く含む。ただ11だけは緻密な胎土で，茶褐色を呈する。薄手で丁寧に作られ，他の土器と一見して異なっているのがわかる。

中世の遺物　（第44図14）

土師質の燈明皿で，他にも細片が認められたが図示できなかった。　（竹田）

2　遺構に伴う遺物

１号住居址の遺物　（第43図11）

サヌカイト製の石庖丁と考えられるものが１点出土したが，抉りの位置が通常のものと異なり，背部と側辺に認められる。また背部の刃潰し加工は行なわれていない。刃部には使用痕と思われる刃こぼれが認められる。

２号住居址の遺物　（第44図15～19）

住居址の埋土の中から出土したもので，各時期のものが混在している。

15は弥生時代前期の貼付突帯を有する壷である。

16は無頸壷で胴部に櫛状工具による刺突文が２段めぐる。外面は刷毛目が残るが胴部下半は丁寧な篦磨きによって仕上げられている。内面は押えつけた後にナデている。弥生時代後期後半に属する。

20は口縁を二重に屈曲さす高杯で，丹が塗られている。弥生時代後期終末のものであろう。

18～21は古式土師器である。21は肩に格子目の押型が施されている。18と19は甕で，外面にススが付着している。

土壙30（第44図22～25）

すべて埋土の中より出土したもので，弥生時代終末から古式土師器まで含んでいる。

22は上方に外反ぎみに拡張された口縁部をもち，条線が一部残っている。外面にはススが付着。

23は薄手に作られ，胎土は緻密で，茶褐色を呈する。

24は脚付の直口壷で，外面胴部下半は丁寧にヘラ磨きがおこなわれ，内面はヘラ削りで仕上げられる。全面丹塗りで，胴下半には人工的に外側より穴が穿たれている。

25は高杯の脚で，外面は篦磨き，内面は篦削りで仕上げられる。外面には丹が塗られている。

3　丹塗り土器と特殊器台

丘陵斜面で出土した土器の中から丹塗りのものだけを取り出したものである。したがってこれらの土器が一括して特殊器台などと共に土壙墓群などの葬送儀礼に使用されたものであるとは言えないが，この中の多くは土壙墓と関係あるものと考え，あえて抽出したものである。

＜丹塗り土器＞　（第45図1～23）

ここに一括した丹塗り土器は胎土が緻密で金雲母を含む。色調は茶褐色あるいは淡いチョコレート色を呈し，特殊器台と同じ様相をもっているものである。

1～4はわずかに長い頸部をもつ壷である。2は上下に拡張された面に退化した凹線が認められる。

5～7は長頸壷である。5と6は頸部に沈線をもち，口縁端部は垂直に上下へ立上り，鋸歯文が施される。7は口縁部と底部が欠損している。頸部には沈線がめぐり，胴部との境に連続刺突文を施す。胴部外面は篦磨きにより丁寧に作られ，内面は篦削りが行なわれるが，頸部内面まで篦削りがなされている。

22～23は大型の長頸壷である。頸部と胴部の境に篦先による刺突文がめぐる。外面は篦磨き，内面は頸部まで篦削りがおこなわれている。

8は壷の口縁端部と思われ，鋸歯文が施されている。

9は口縁端部か垂直に立ち上がる甕であろう。

11と12は胴部に突帯のつく壷であろう。11は突帯の間に鋸歯文が施され，12は櫛状工具による波状文がめぐっている。どちらも中にまで丹が塗られている。

13は長頸壷の頸部破片で，細い沈線が施され，その上に繊細な線で鋸歯文が描かれる。

14～17は高杯である。14は内外面とも篦磨きがなされている。17は短脚をなす高杯である。

18は直口壷の口縁部と思われる。

19は口縁部にむかって幅をせばめながら立ち上がるもので，底部との境にタガがめぐる。脚がつくものと思われる。外面は篦磨き，内面は刷毛によって仕上げられる。

20は二重に屈曲する口縁をもつ高杯である。

21は底部で，わずかに平坦面をもつ，外面は篦磨き，内面は篦削りが行なわれる。

25は鼓形器台の脚部で，丹は塗られていないが，ここに含めた。

ここに一括した丹塗り土器は壷を主体とし，次いで高杯が多い。これらの土器は一時期なものとは考えられないが，2以外の土器はほぼ同じ頃の時期と考えられる。

＜特殊器台＞　（第45図24，第46図）

特殊器台は斜面のNo. 2，No. 3土壙周辺よりまとまって出土した。（第47図アミメの部分）概して細片が多く，脚部がまったく認められない。これらの土器の胎土は堅緻で金雲母を含み，淡いチョコレート色ないし淡い黄褐色を呈する。

口縁部1～5は口縁端部が垂直に立ち上がり，櫛状工具による条線が施される。立ち上がり部の高さは5～6㎝である。口縁の屈折部には斜め下方に突出した突帯をもつ。受部の残る土器は少ないが，第45図24は幅5㎝の緩かな傾きを呈する受部をもち，屈折部は横に突出した半円形の突帯をもつ。

また以上記述したものと異なるものも存在する。口縁部の立ち上がり外表面に凹線文を施し，受部は幅の広い緩かな傾きをもち，胴部に綾杉文をもつものがある（第46図26～27）。

胴部，文様の全体を推定できるものはない。繊細な篦描き沈線により描かれるが，直線的な文様（14・24）はやや線が太い。

透し孔は巴形，三角形，長方形などが認められるが，三角形の透し孔は突帯に三角の先端がくるという，これまでの特殊器台とはやや異なっている。

間帯は櫛状工具による条線が施されるもの（6～12・16・18）と，退化した凹線を施すもの（28～31）とがある。間帯は文様帯にくらべ厚く作られている。一度文様帯と同じ厚さに作り，丹を塗った後間帯部だけ突帯も含めて粘土を貼付け器壁を厚くしている。

突帯は放物線形の丸みをもつもので，台形とか方形を呈するものはない。

これらの特殊器台は土壙墓に対して置かれていたものと思われ，口縁部だけみても2個体以上あったものと考えられる。（竹田）

註

註 1. 坪井清足 「黒土遺跡」『高島遺跡調査報告』1965年

第3節 小　　結

1 丹塗り土器と特殊器台について

土壙墓の存在する斜面からは丹塗り土器と特殊器台が出土した。この地域では集落においても丹塗り土器が多く出土し，丹を施すことがかならずしも非日常的容器への転化とはならないこともある。しかし古坊遺跡では土壙墓群の存在から，特殊壷，特殊器台などと共に，吉備における首長権継承儀礼（註1）に用いられた土器として評価したい。

さてその丹塗り土器であるが，壷が主体をなしている。壷は（2を除く）短かい頸部をもつものと長い頸部に沈線（擬凹線）を施すものがあり，口縁端部はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。前者は長頸壷が退化してきたもので，上東遺跡才の町Ⅰあるいは才の町Ⅱ（註2），酒津式（註3）と言われているものに類似する。

後者の長頸壷は，南部の集落では才の町Ⅰの段階でほぼ頸部は短かくなり，沈線も消えてゆくが，墳墓などでは後の時期まで残るし，北部では酒津式に相当する時期においても，かなり多く集落（註4）から出土する。ただ酒津式に相当する時期の長頸壷は頸部内面まで篦削りがおこなわれているものがあり，それ以前のものと異なっている。

20の二重に屈折する口縁をもつ高杯は備中西北部に中心をもつもので（註5），白江Ⅱ式（註6）に相当する時期であろう。

以上みてきたようにこれらの土器が示す時期は，弥生時代終末ないし古墳時代初期と考えられる。

特殊器台は二種類認められるが，文様に関してはどんな文様が胴部に施されるものか不明な点が多い。

一つは，口縁部ないし間帯に退化した凹線がめぐり，口縁受部は幅広く，胴部には綾杉文が描かれる。胴部の器壁は丁寧な篦削りによって薄く仕上げられるが，間帯は粘土を貼付てやや厚くしている。突帯は放物線形をなしている。

もう一つは，垂直に立ち上がる口縁端部に櫛状工具で条線を施し，受部はやや幅が狭くなる。胴部の間帯も口縁と同じ条線が施され，粘土を貼付て厚くしている。文様は繊細な篦描き沈線で描かれる。

この2種類のものが時間差なのか，文様がバラエティにとんでいるのかは細片のため十分な検討ができない。

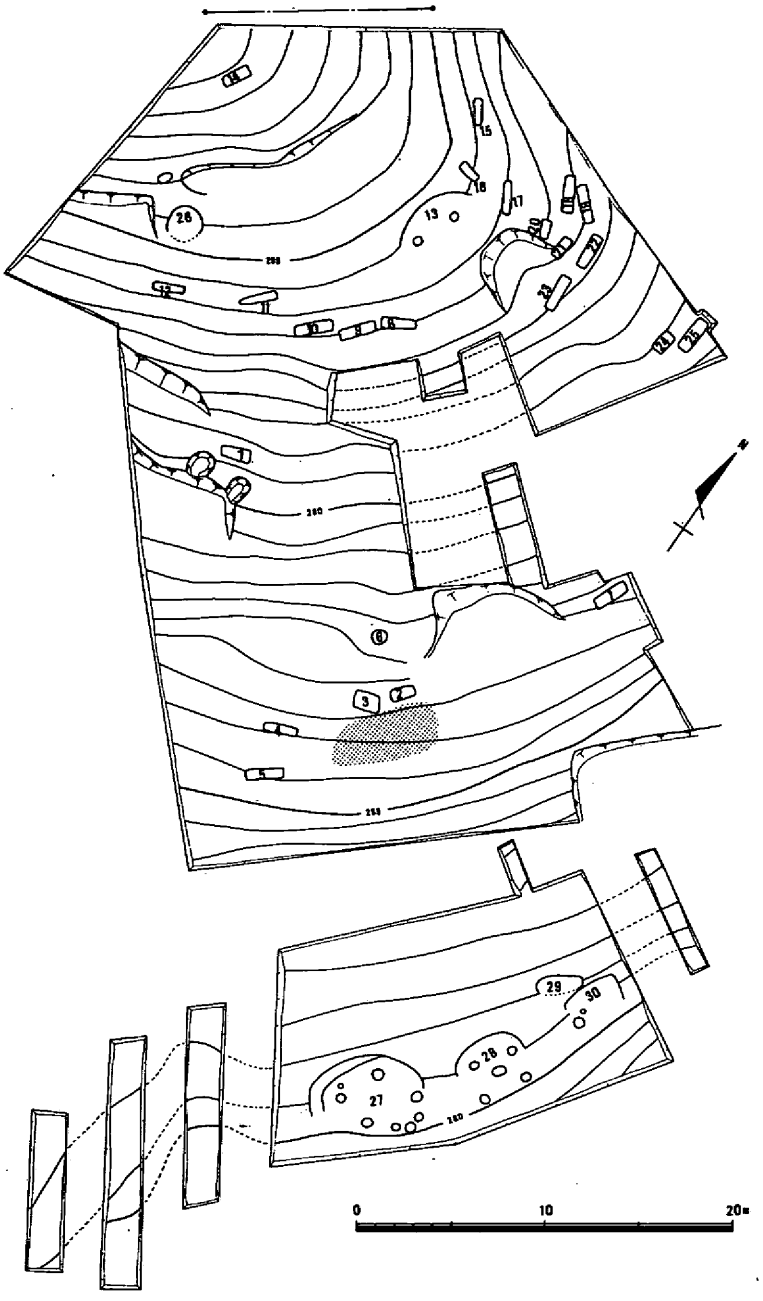
これらの特殊器台の編年的位置は，上に述べた特徴から向木見型（註7）と言われている時期，あるいは孤塚省蔵氏の言われる第Ⅱ段階の第2型式とされているものに最も近いものと考えられる。

近藤，春成論文の立坂型，あるいは孤塚氏の第Ⅰ期と言われている時期の特殊器台は分布がかぎられているのに対し，この時期の特殊器台は吉備全域にわたって出土し，さらに島根県にまでひろがっている。

神代川流域においても古坊遺跡だけでなく西江遺跡（註8）においても特殊器台が出土している。これらの出土状態を見ると，ある特定の墓に対して置かれたというものではないようである。もちろん設定された墓域の中に埋葬されたすべての人間が死亡するたびにこの特殊器台が用いられたのではなくて，ある特定の人間の死に際して用いられたものではあるが，その特定の人間の墓と他の人間との墓の区別はない。古坊遺跡の土壙墓群はまだ尾根上に特定の墓なるものが存在しないとは言いきれないが，発掘したかぎりでは一つ一つの土壙墓に差はない。

このことは一般的に言われている，集団墓地のなかでも特定の墳墓群あるいは特定の墓域（註9）にだけみとめられるのと異なる。それがこの地域の弥生時代を通じての生産力の未発達に規定されているものであろうか。

しかし未発達としても農業生産活動の調和をはかり，集団を維持する諸々の活動を指揮する人間は



第47図　古坊遺跡・地形図・遺構配置図

析出されつつあったと考えられる。農業共同体における指揮者は農耕祭祀をつかさどる人間として，あるいは共同体的規範を体現する人間となる。ただこの際指揮者と共同体成員との間は，特定の協同社会的活動における一時的かつ名目的な指揮—服従関係として現出するだけで，成員間における社会的な支配—服従関係として固定化されることはない。したがって指揮者の公的権力は他の共同体との関係のなかで祭祀的，政治的，経済的な共同体権力として顕在化するにすぎないのである。このような段階にある神代川流域の集団と，吉備南部の指導力を一段と強め，神格化と，それを媒介として一層の自立的独立化を生じつつあった集団の首長も同時に存在している。このような不均等な発展を呈す各集団の指揮者あるいは首長の結合＝首長会議（註10）は，共通の祭祀，共通の葬送儀礼を通じて選出された共同体の意志を代表する人間によって構成されたものであろう。

一方自らの集団内においては首長権継承儀礼であると同時に歌舞飲酒を通じ結束を強め，共同体的規範を共通観念として伝承する儀式としておこなわれる。

特殊器台や丹塗り土器はそれら儀式における観念の表出されたものとして使用されているのではなかろうか。（竹田）

2　土壙墓について

古坊遺跡の土壙墓群は，特殊器台片が出土したことにより，その存在が予測された。土壙墓の存在する尾根は，その最大巾で約30mを測る。今回調査した全長は45mを測るが，尾根はさらに延びており，遺跡もその部分に広がる可能性は充分にある。

今回検出した土壙墓の数は22個である。その検出した土壙墓の配置を見ると，そのほとんどが等高線にほぼ平行して造られている。また，複数の土壙墓が重複する状態は見られなかった。しかし，数個ごとのグループは見られる。土壙墓内の構造は，土壙墓14を除いて確認されなかった。また，その形状を見ると，長方形，もしくは小判形がほとんどである。以上が，発掘において得た概略である。それ等を基礎に，土壙墓群に関する簡単なまとめをしたい。

今回の古坊遺跡の発掘で検出した墳墓は，全て土壙墓である。それ等土壙墓は，若干の規模の差はあるが，各土壙墓間の差違は，ほとんどないものと考えられる。土壙墓14は，両端に平行な状態で小口板の痕跡を検出した。その点は，他の土壙墓との構造的差を示す唯一の例である。

土壙墓群を，その配置から分類すると，数個ごとのグループが見られる。土壙墓２～５，土壙墓８～12，土壙墓15～23，土壙墓24～25に分けることが可能であろう。さらに，土壙墓１，土壙墓14が単独に存在する。しかし，それ等は発掘区が限定されていることによるものと思われる。以上は，遺構の配置状態からの分類である。

土壙墓群を，その規模から分類すると，概ね３グループに分類できる。つまり，土壙墓１，４，５，８～12，17～19，22，23，25の細長い形態を示すグループ，土壙墓２，７，14～16，21のやや長さを減ずるグループ，そして，土壙墓３，20，24のさらに全長の短かいグループである。この中で，第１のグループである細長い形態を示すものが，数的に最も多く，それ等が配置の上で基本的なグループを成しており，その間へ，数個の第２，第３のグループに属するものが配置される。しかし，土

壙墓8～12のグループは，全て第1のグループにより構成されており，古坊遺跡の土壙墓群の中にあって特異な存在である。

土壙墓群の中にあって，最も密集しているのは，土壙墓8～23が位置する場所である。その間で半数以上を検出している。その点から見れば，同地区が，この墳墓群の主体を成すものと考えられ，そこに配置上の2つのグループが見られる。

古坊遺跡の土壙墓を検出した地区からは，特殊器台片及び，丹塗り土器片が出土している。それ等は，この土壙墓群に関係する遺物と考れられる。先にも述べたが，群としては特異なグループも見られるが，個々の土壙墓の規模，形態からは，その差異は見られない。土壙墓の若干の規模の差は，埋葬される人間の共同体における成員としての差を示すものであろう。そうであるとすれば，各土壙墓間における差はなく，特異な存在を示す土壙墓も見られない。以上のことを考慮に入れ，特殊器台の存在を考えれば，その特殊器台は，この土壙墓群の中にあって特定の土壙墓に対して供献されたものとして，土壙墓を限定することは非常に困難である。

前項でも述べた様に出土した土器より，この土壙墓の存続期間を見れば，さして長期間は考えられない。しかし，特殊器台は少なくとも2個体以上あることを考慮する必要はあろうが，その点は，必ずしも土壙墓の存続期間の長さを示すものではないであろう。特殊器台の充分な検討が必要ではあるが，もしそれが時間差であるなら，その間の継続期間が認められるものである。いずれにしても，土壙墓の重複関係等がないことも考えれば，むしろその継続期間は短いと考えるべきであろう。

この土壙墓群に対応する居住地であるが，出土した土器と並行的に存続した遺跡として隣接する新市谷遺跡をあげることができる。と言って，それを直接的に関連ずけて考えるには充分な検討が必要ではあるが，この土壙墓群が営まれた時期に，新市谷遺跡においては，集落として機能していたことが考えられる。

（井上）

註

註 1. 狐塚省蔵　「吉備型器台論」『異貌』四，五，1976年
註 2. 岡山県教育委員会　「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　1974年
註 3. 間壁忠彦　「倉敷市酒津・新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学』第2号　1958年
註 4. 岡山県教育委員会　「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　1976年
註 5. 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号　1866年
註 6. 註5に同じ
註 7. 近藤義郎　春成秀爾　「埴輪の起源」『考古学研究51号』　1967年
註 8. 中国縦貫自動車道建設に伴ない発掘調査が行なわれ、土壙墓群と特殊器台が出土した。土壙墓はほぼ均等で，特にすぐれた墓はなかった。
註 9. 註8に同じ
註10. 註2に同じ

表3　古坊遺跡土壙墓計測表

単位cm

	検出面		床面		
	長	巾	長	巾	深
1	208	49	183	34	36
2	115	57	107	52	29
3	132	94	98	74	56
4	183	68	174	46	45
5	214	77	186	54	47
7	147	58	138	44	35
8	187	61	171	45	34
9	200	59	183	49	25
10	205	71	184	54	51
11	208	59	190	43	39
12	174	51	166	48	26
14	139	73	121	34	48
15	132	46	124	39	24
16	126	45	109	36	18
17	184	52	175	50	18
18	197	57	191	43	35
19	194	74	179	50	41
20	100	54	94	40	29
21	112	61	108	45	24
22	194	68	184	49	32
23	208	73	198	61	23
24	110	68	86	50	47
25	203	69	185	57	28

第6章　総　　括

以上の各章で報告した遺跡は，名々独立した遺跡として報告してきた。しかし，先にも述べたが，連続する地形の，異なる地点で調査したそれ等遺跡も，地点こそ個々に別ではあるが，地理的にも，歴史的にも同一の背景を持つものである。また，それぞれが，他の遺跡の歴史的背景ともなるものである。その点を考えれば，三遺跡は，相互に関連を持ちつつ，それぞれの歴史を形成してきたものである。その事柄を物語る一つの資料として第48図を提示しておきたい。第48図は，個々の遺跡における歴史的展開を提示するのみならず，ある遺跡の，他の遺跡への関わり方を示している。一つの遺跡は，単にその遺跡として全てが完結するものではなく，生活における一つ一つの儀式が，それぞれに場所を必要とすることを知る必要があろう。その事は，その当時の，儀式に対する思考方法により必要とする場所と空間は異ってくる。そのことは，最も大きく時代的制約を受けるものである。それだけに，同一地域における，同時代の他の遺跡の性格，その在り方を知る必要がある。その点に関しては，ここに報告する遺跡は，良好な資料と言えるであろう。

そこで，各遺跡から出土した土器から，その歴史的経過をまとめてみたい。まず古坊遺跡であるが，出土した土器で最も古いものは，縄文式土器の晩期に属するものである。出土点数こそ少ないが，この地にヒトの足跡の見られる最初の遺物である。さらに古い時代に関しては，出土遺物を見ないため言及することはできないが，縄文時代の晩期に，その一歩が認められる。しかし，出土遺物が，土器数点のみであることと，それに伴う遺構の検出がないため，当時の生活を具体的に知ることは不可能である。ここでは，当時の生活の一端を垣間見るにすぎない。弥生時代では，前期，中期，後期と土器は出土している。出土土器の全体量も少ないが，前期，中期のものはそれぞれに数点出土している。出土土器で，全体の大半を占めるのは，弥生式土器の後期のものと，土師式土器の初頭に位置するものである。古坊遺跡で検出した住居址は，1号住居址（No 13）が最も古く，弥生時代中期末ないし後期の前半の時期に位置すると考えられる。そして，2号住居址（No 27），3号住居址（No 28）は，後期の後半の時期と考えられる。

古坊遺跡で検出した遺構で，最も多かったのは，土壙墓である。そして，同時に出土した特殊土器等の一連の遺物は，それに伴うものと考えられる。その土壙墓と住居址は，時期的に重複すると考えるよりは，若干の時期的な差があるものと推測される。

新市谷遺跡出土の土器を見ると，その最も古い時期の遺物は，前期弥生式土器である。その出土点数は，古坊遺跡と同様に少なく，その痕跡を示す程度である。中期の土器も，数点の出土が見られる。それ等は，いずれも遺構に伴うものではなく，当時の遺構と考えられるものは検出されなかった。新市谷遺跡より出土した土器の中で，そのほとんどは弥生時代の後期以後の遺物である。それ等は，量的に多いのみならず，それぞれの時期に相当すると推察される遺構を検出している。また土師式土器の初頭の土器も多く出土している。そして，それに伴う時期と考えられる住居址も検出して

いる。以上のように，古坊遺跡においてもそうであるが，前期，中期は，点在的であるが，それに比べて，弥生時代後期から，それに続く時期の遺物が最も多く，新市谷遺跡では，その時が最が充実している。

ここで注目したいのは，古坊遺跡の土壙墓群と並行する時期の遺物と遺構が新市谷遺跡内に見られることである。古坊遺跡の土壙群が，機能していた時期に，新市谷遺跡においても，ヒトの営が続けられていたと考えられるのである。その事のみをもって，古坊遺跡と，新市谷遺跡を直接的に関連付けて考えることには慎重でなければならない。ここでは，新市谷遺跡もその候補の一つであろうという指摘にとどめておきたい。

迫遺跡より出土した土器で，最も古いのは弥生時代の中期の遺物である。そして弥生式土器後期，土師式土器の初頭の時期へと続く。しかし，出土した土器の全体量が少ないために，その展開の詳細は不明である。しかし，古坊遺跡の土壙墓の時期に相当すると考えられる土器も出土している。そして，2～3世紀おいて横穴式石室墳の時期へと継続する。

各遺跡について出土した土器をもとに概述したものであるが，それ等は，完全に継続するものではない。古坊遺跡では，縄文式土器の晩期，弥生式土器の前期，中期，後期と土器は見られるが，まだ失なわれた環は多く，断続的なヒトの営みが見られるのみである。しかし，新市谷遺跡においては，弥生時代後期から，それに続く時期までは，継続するものと考えられる。

古坊遺跡では，土壙墓群とそれに伴うと考えられる特殊器台片が出土した。その特殊器台は，岡山県下を中心に発見されている。この特殊器台は，或る集団における，首長の死による新首長の選出と，その首長権継承の儀式に使用されたものと考えられている。（註1），つまり，古坊遺跡においても，首長権の継承と，それに伴う儀式が行なわれたものと考えられる。

ところで，古坊遺跡出土の特殊器台と併存すると考えられる土器が，新市谷遺跡，迫遺跡から出土している。迫遺跡に関しては，住居址の残存状態が不良であったため，その時期の決定には，慎重さを要し，今一つ確定的ではない。しかし，迫遺跡にも，同時期の住居址の所在した可能性もある。新市谷遺跡においては，同時期の土器の出土と同時に，その時期の住居址も確認されている。新市谷遺跡においては，弥生時代後期の前半から連続して住居址の所在したことがほぼ明らかである。その在り方を見ると，2～3軒が一つの単位として所在した様子が見られる。新市谷遺跡では，その一単位の生活が何代か続くのではあるが，大集落址を形成することはなかった。それは，立地する地形的制約も大きいと考えられる。このような一単位ごとの生活集団は，あるいは，迫遺跡にも想定することはできる。そのように，一定地域内に単位集団が点在していたことが推測される。（註2）

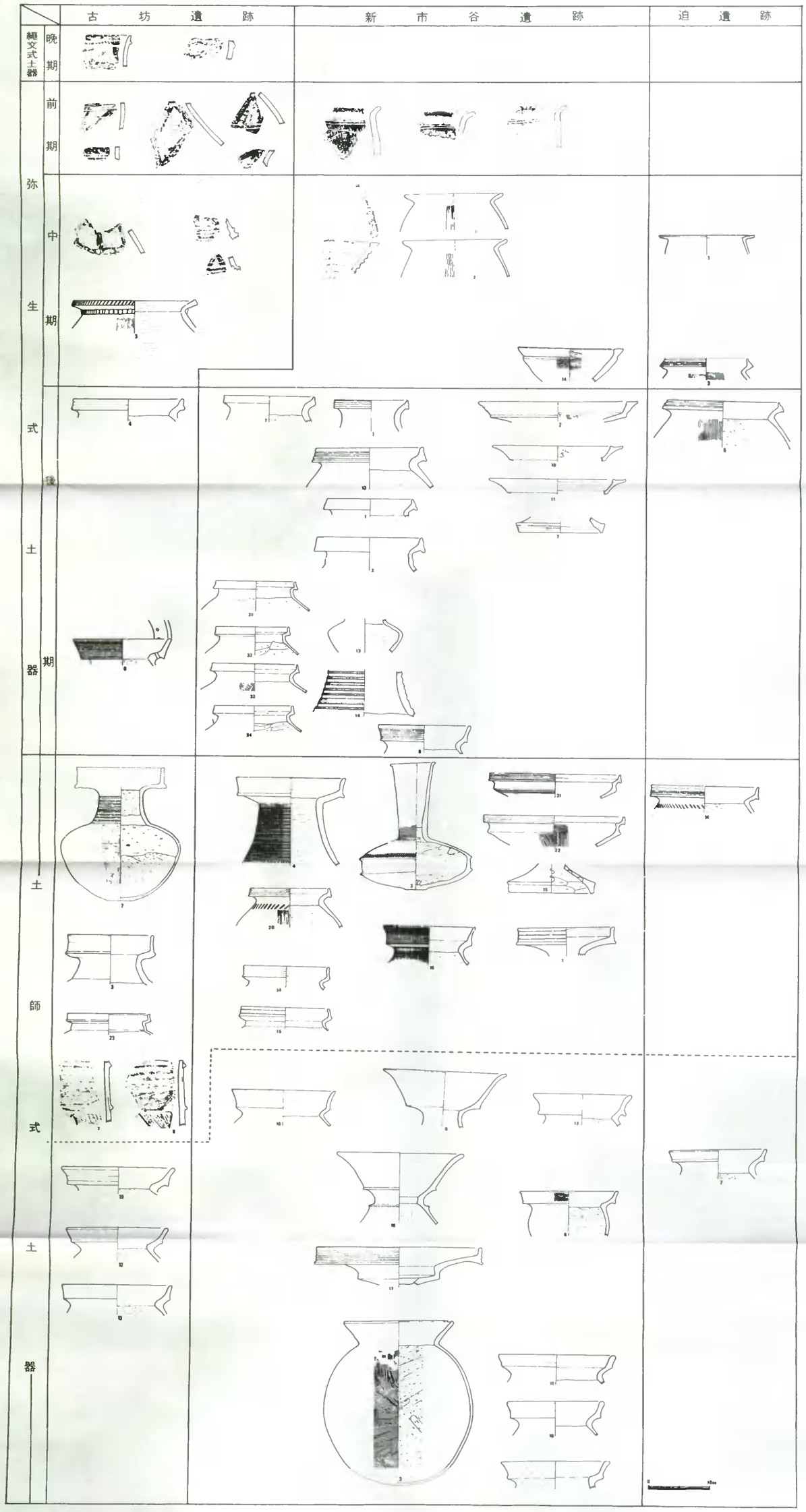
古坊遺跡の土壙墓群は，その数からして，大集団の墳墓と考えるより，むしろ，小集団の墳墓群と考える方が妥当であろう。それにしても，その土壙墓群を形成するためには，新市谷遺跡で見られる単位集団を，数単位は想定する必要があろう。その単位集団が，古坊遺跡を中心として，一定地域内に点在していたものと考えられる。その一単位が，今回調査した新市谷遺跡において見られたものである。古坊遺跡の土壙墓群を形成した集団を，むしろ小集団と推定したのは，その数もあるが，地理的にも，制約を加えられる面が大きいと考えられる。第5章第1節でも述べた様に，現在この地域を

形成する平野も，当時はその範囲を大きく限定されていたものと考えられる。つまり，新市谷遺跡の立地する台地の直下に見られる上位河岸段丘も，水田として開かれたのは近世のことである。つまり，上位河岸段丘の最上位にある灌漑用水が開削されて以後のことである。（註３）また，表土下ら0.5～１ｍからは，礫層であり，耕地としては必ずしも適していたとは考えられない。その点を考慮すれば，現在見られる平野のその大部分は，河川，及び，不可耕地として存在していたものと推測される。生産基盤が小さければ，当然に，それを基礎とする集団の規模も小さくなるように，新市谷遺跡等が所在するこの地域を生活の基盤とする限りは，その集団の規模には，大きな制約が加えられてくる。この様な地理的制約を背景として，古坊遺跡の墳墓群が形成され，新市谷遺跡に見られる生活集団が存在したものと考えられる。そして，その生活集団が，幾単位が集合して首長を選出したものであり，首長の死にあっては，その葬送儀礼を古坊遺跡においてとり行ったものと考えられる。

上記のように，自からの首長を選出してきた集団であるが，その後の展開に大きな進展性は見せない。むしろ停滞性を示すようでもある。つまり，古坊遺跡の特殊器続に続く時期に考えられる遺構に新市谷遺跡の土壙墓がある。この土壙墓は，ごく一般的な土壙墓であるが，床面から５点の鉄器が出土している。それ等は，クワ先，鎌，鉄鋌，それに鉋である。重ねられた状態で出土したその遺物と，その出土状態が，当時の社会状態を物語るものと言えよう。先にも述べたように，この地域の集団はけっして大きくはない。しかし，当時は貴重品であった鉄製品を一括で埋葬することは重大な問題である。クワ先，鎌は，相当に使用したものではあるが，鉄鋌はそうではない。加工すれば，さらに利用の範囲は広がるものである。それを埋葬することは，あるいは，鉄製品が恒常的に供給される社会組織が形成されていたことを物語るとも考えられる。しかも，それが製品としてのみならず素材としても流通していたと考えられる。そのような背景をもとに，鉄製品が，その土壙墓へ埋葬されていったものと考える。しかし，その墳墓は，土壙を主体とするものである。地域によっては，この時期に到ると，古墳も成立しているが，この地域にあってはその状態に到っていない。それは，彼らの生産基盤の弱さを示すものであり，それが一方では，彼らを停滞性へ向わせるものでもある。

（井上）

註１　近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』51号1967年
註２　近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究会』第６巻第１号
註３　白根正寿『神郷町史』



第48図　出土土器編年図

1．迫三方塚古墳調査前遠景

2．調査前の横穴式石室

3．発掘後の横穴式石室

図版２

１．箱式石棺と遺物出土状態

２．迫三方塚古墳と No.1 住居址

迫三方塚古墳出土遺物

図版４

１．No.３住居址

２．No.７住居址

１．No.２土坑

２．箱式石棺

図版６

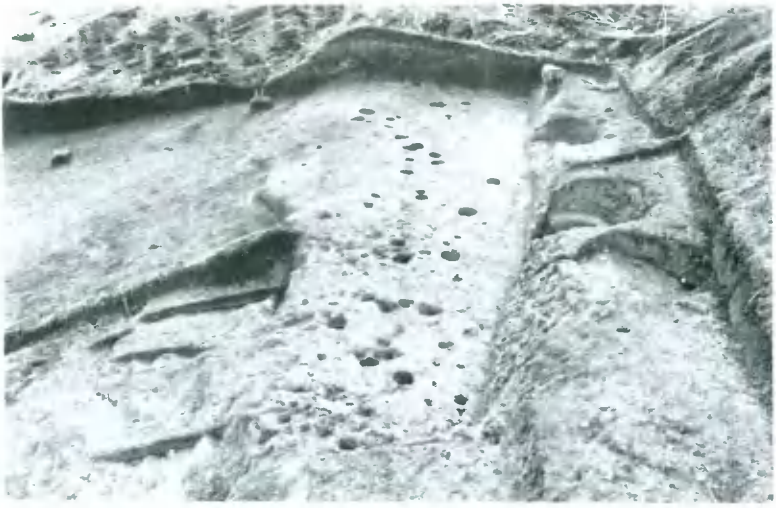
１．遺跡の遠景

２．11・12・13号住居址付近

１．２・４・５住居址断面

２．２～６号住居址付近

図版８



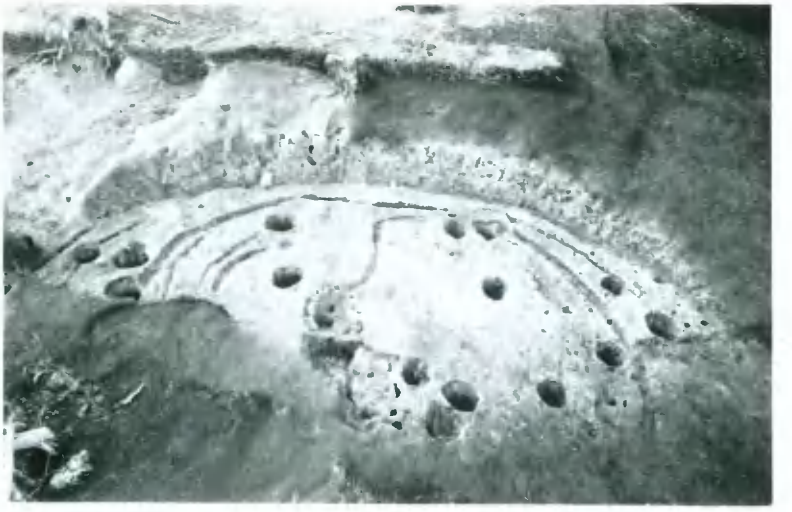
１．６号住居址

２．２～５号住居址

１．８号住居址

２．10号住居址

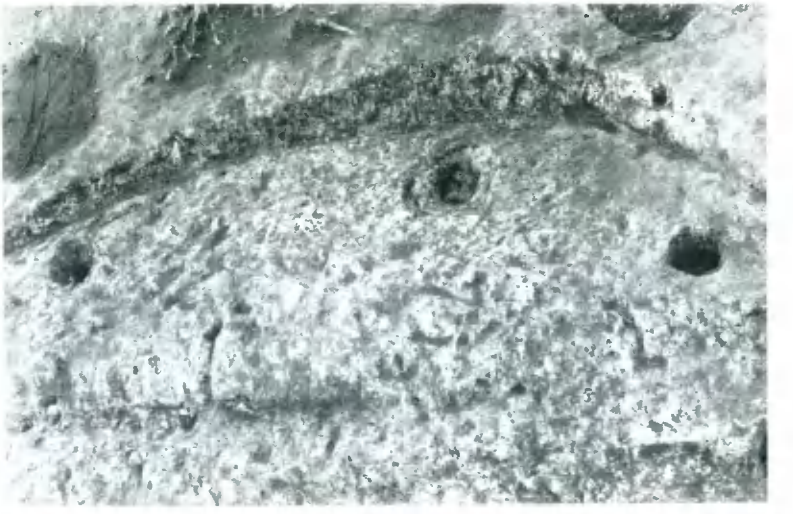
図版10



1．12号住居址

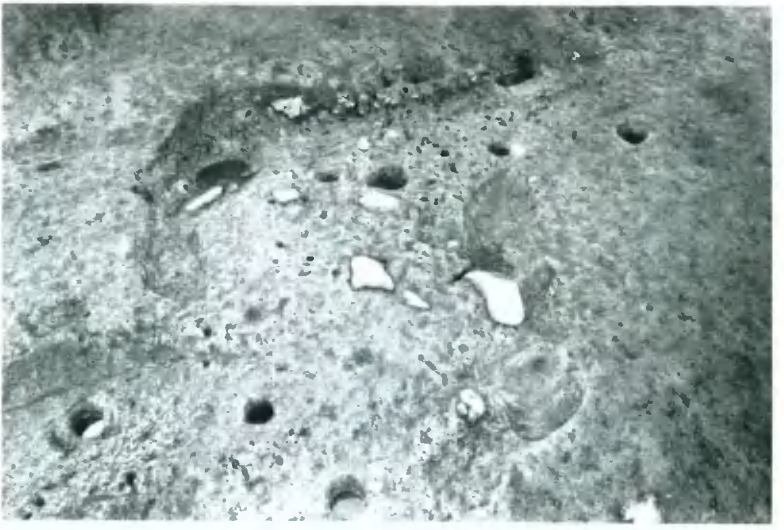
2．11号住居址

1．16号住居址



2．15号住居址

図版 12



1．14号住居址

2．建物1

1．建物1及び14号住居址

2．集石遺構

図版 14

1．土壙墓全景

2．鉄器出土状態

1．1号貯蔵穴

2．2号貯蔵穴

図版16

1．1号貯蔵穴遺物出土状態

2．3号貯蔵穴遺物出土状態

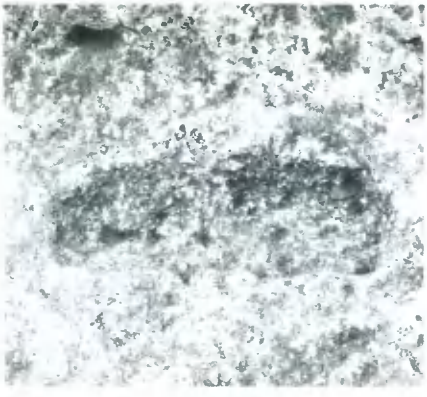
新市谷遺跡・出土遺物（1/3）

図版18

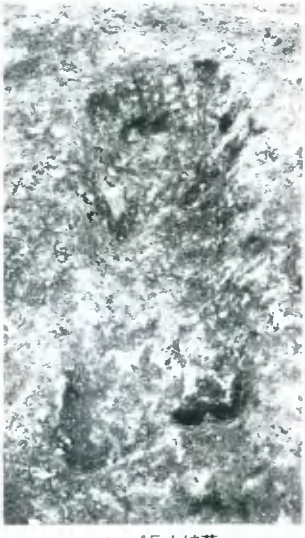
新市谷遺跡出土遺物

1．1土坑墓

2．2土坑墓

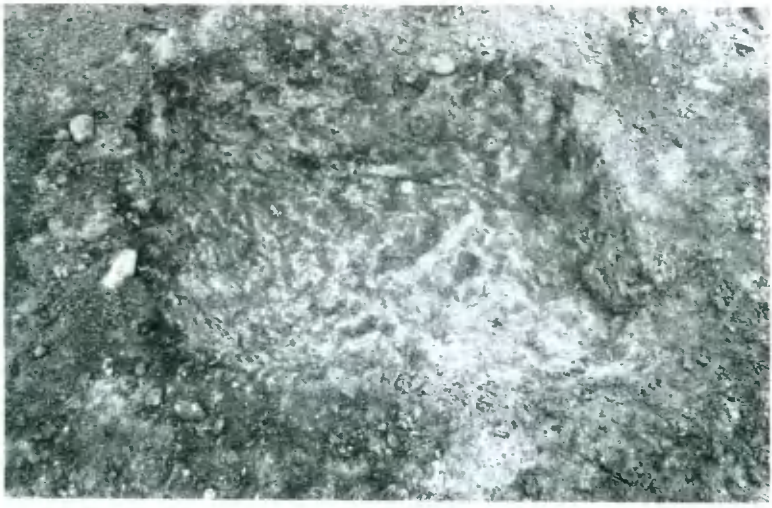


3．7土坑墓

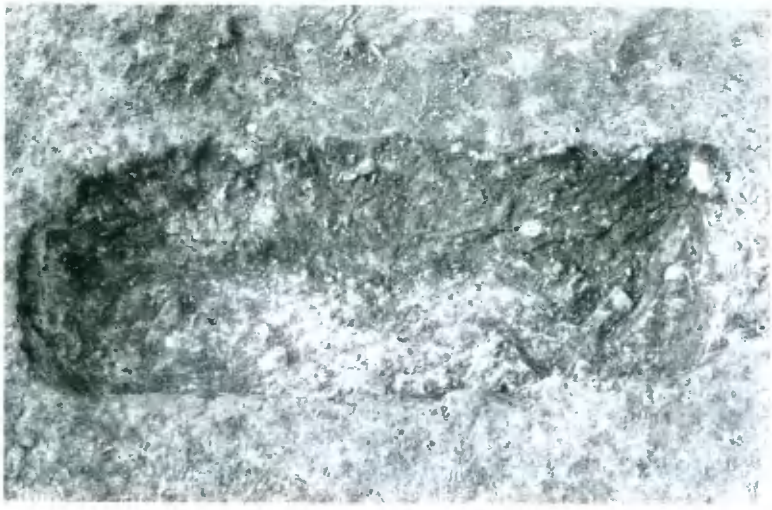


4．15土坑墓

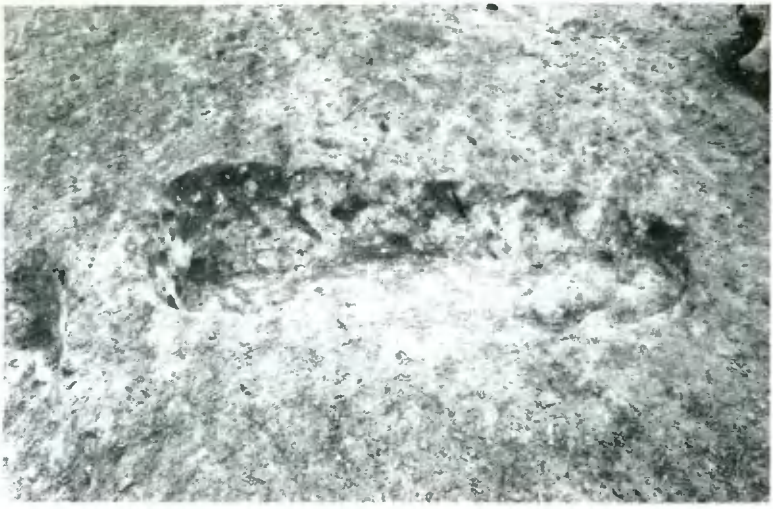
図版20



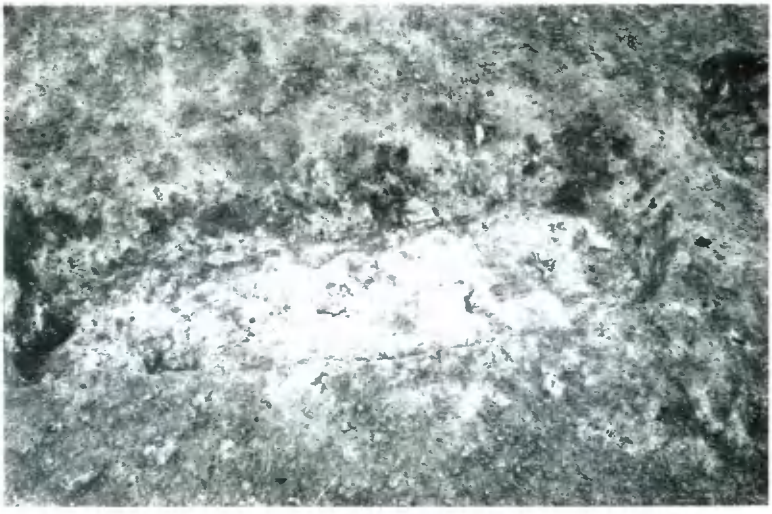
1．3土坑墓



2．5土坑墓



1．8土壙墓



2．9土壙墓

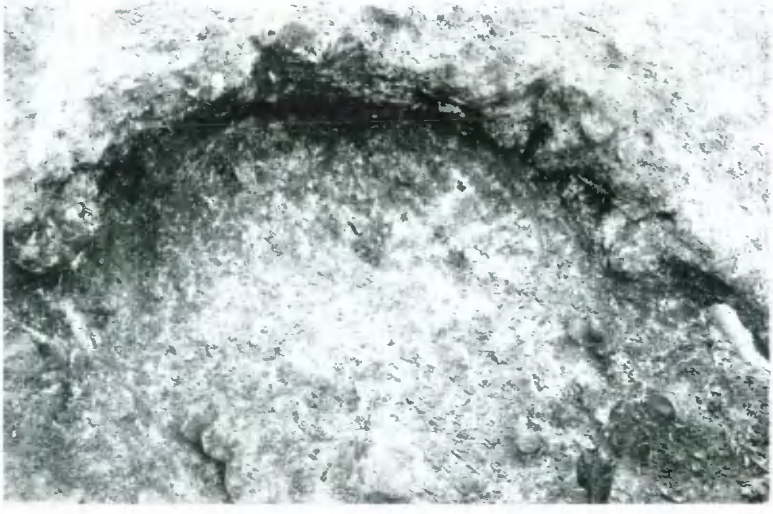
図版22

1．10土坑墓

2．14土坑墓

1．11土壙墓

2．12土壙墓



3．袋状土壙

図版24

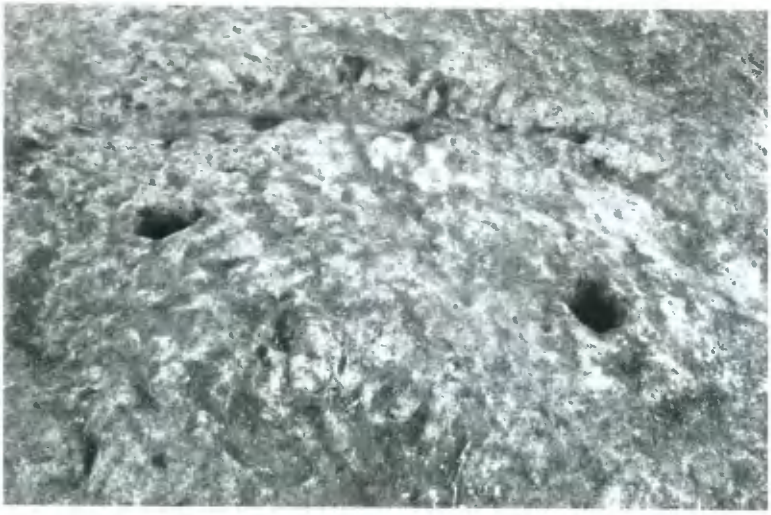
1．18・19土坑墓

2．21土坑墓

1．土坑墓群近景

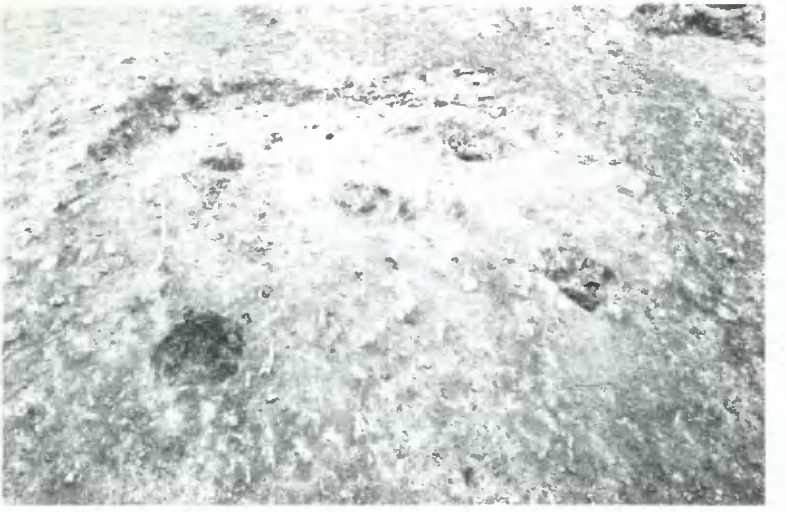
2．24・25土坑墓

図版26



1．1号住居址

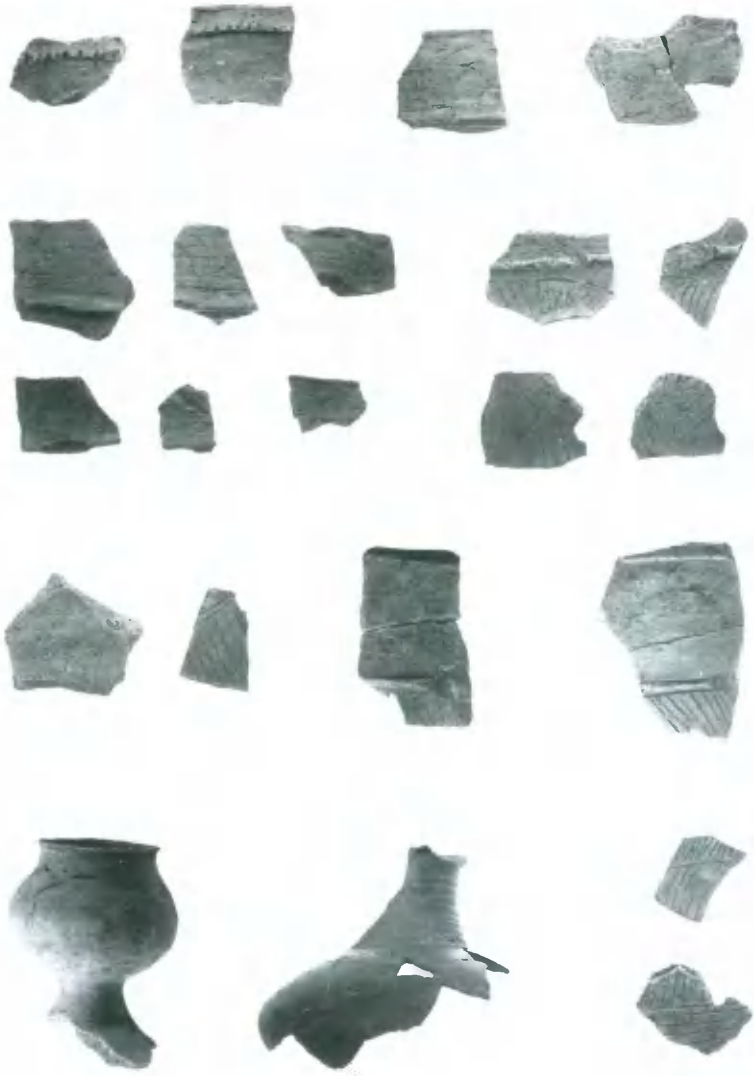
2．2号住居址



1．3号住居址

2．29・30土坑

図版28



古坊遺跡・出土土器（1/3）

阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

1. はじめに

中国縦貫自動車道(以下縦貫道という)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査も，岡山県内で75遺跡を調査して昭和51年10月30日に終了した。縦貫道は県北の美作・備北の2市9町を通っているが，この11市町のうち遺跡数の最多の所は阿哲郡哲西町である（75遺跡のうち23遺跡を占めている。哲西町内の遺跡の調査報告は，この分冊以後刊行が4冊予定されている。その4分冊には新見市及び阿哲郡神郷町内の遺跡も含まれている)。これら各遺跡の報告にあたって，各遺跡ごとに地理的歴史的環境について記述すれば，説明が重複することが考えられるので，哲西町内の遺跡の最初に出てくる報告の前に町内の地理的歴史的環境をまとめて記載することにした。各遺跡の報文では，その遺跡の立地を記述するにとどめた。

2. 地理的環境

哲西町は岡山県北西部に位置し，南北約15㎞・東西約5㎞の南北に細長い町で，西は広島県比婆郡に接し，他の三方は阿哲郡神郷町・同郡哲多町・川上郡備中町と境を接している。

哲西町の総面積は約 7700ha，その内水田は 580ha で残りの大部分は山林・原野・牧草地・畑となっている。総面積の7.5%しかない水田はその大部分が町内を南西から北東へ流れる神代(こうじろ)川（高梁川の一支流）沿いに細長く存在している。神代川沿いのわずかな水田地帯も，集落・国道182号線・国鉄芸備線・縦貫道などによって更に少ない面積を保持しているにすぎない。

哲西町の中央部・南部は準平原の「吉備高原」の北端部に位置しており，北部はややけわしい山が連なっている。神代川およびそのいくつかの支流沿いにわずかに沖積層が見られる。沖積層（水田地帯）の縁辺部（山裾および樹枝状に発達する小さな舌状の尾根部分）には新生代第三紀層が存在している。縦貫道は，その大部分がこの第三紀層の部分に建設され，一部が水田（沖積層）を埋めてつくられている。言葉を変えるならば，縦貫道用地内で調査した23遺跡はすべてこの第三紀層の上に形成されているといえる。

山間部の大部分は，中生代の閃緑岩（哲西町北部）・斑岩（中央部）・玢岩（南部）で構成されており，一部は中生代の橄欖石・蛇紋岩や古生代の石灰岩・粘板岩・砂岩で構成されている。荒神山・明神山・湯の明神山・高山・長松寺山・権現山などは新生代の玄武岩鐘である。

第三紀の中新統に属する灰色の泥板岩層は国鉄姫新線・芸備線沿いに細長く分布し，この層からはピカリア・ハマグリ・マテガイ・シジミ・サメの歯・カニ・カキ・オキシジミ・メタセコイヤ・ブナ・カシ・ヤナギなどの化石を産する。野馳(のち)の大野部ではエダサンゴの化石が出土している。縦貫道の工事中に各所からカキなどの化石がよく出土している(地質については第2図参照)。

3. 歴史的環境

哲西町は総面積に比して水田はわずか7.5%しか存在しない所であるが，遺跡の分布密度はかなり高い方である。町内を通る縦貫道の長さは7.6㎞であるが，この用地内に発掘調査を実施した遺跡の数は23に達した。これから見ても分布密度の高いことがわかる。

町内へ人間が足を踏み入れたのは古く旧石器時代に遡る。大字矢田字貝田に存在する二野遺跡（第1図59　以下「第1図」を略す）では，縄文時代から平安時代にかけての遺物の包含層から，旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器と尖頭器が出土している。これは平安時代までの遺物と混在しているため原位置の確認は出来ないが，偶然の出土とはいえない。西へ約10㎞の地点には帝釈峡遺跡群（註1）が存在し，北25㎞の所には野原遺跡（註2）が存在している。これらの遺跡を拠点に狩猟を行なっていた旧石器時代人がこの哲西町内に足を踏み入れたことは充分考えられる。

縄文時代の遺跡も，縦貫道用地内の発掘調査を契機にして，8か所が確認されている。大字下野部字栃峠では早期の石鏃が，土井上遺跡（註3）・馬場遺跡（註4）では早期の土器片が採集されている。塚の峯遺跡（72）では前期の土器片が，二野遺跡では前・後・晩期の土器片が，清水谷遺跡（71）では晩期の土器片が出土しており，西江遺跡（58）では晩期のピットと土器片が確認されている。佐藤遺跡（53）では，後・晩期の土器片が出土し，後期の住居址1軒が確認されている。佐藤遺跡の住居址・西江遺跡のピットを除いて他の遺跡では遺構は存在しない。土井上遺跡は，縦貫道の工事中に土器片が採集されたもので，発見時にはすでにオープン・カットされていて，調査しないで消滅した遺跡の一つである。馬場遺跡も土器を表面採集しているだけで遺跡の実態は不明である。

弥生時代になると遺跡数も多くなる。しかし前期に属するものは，西江・大倉(67)・清水谷・岸本下（74)の3遺跡に土器片が見られるのみである。中期になると，縦貫道関係では，山根屋遺跡（54）・野田畝遺跡（57）・西江遺跡・二野遺跡・横田遺跡（65）・大倉遺跡・清水谷遺跡が知られており，これら以外にも家坂（えさか）遺跡（20　註5）・善光院裏山遺跡（註6）・三角高下（みすみこうげ）遺跡（註7）などが知られている。山根屋・野田畝・西江・横田・大倉・家坂では，住居址やピット・溝などが確認，または調査されている。住居址もかなりあり，この時期以後人々が哲西の地に定住したものと考えられる。

弥生時代後期になるとさらに遺跡数も増し，縦貫道用地内に限っても前記の中期の遺跡に加えて，土井遺跡（61）・土井城址（62）・横田遺跡4区，藤木城址（66）・御供川（ごくうがわ）遺跡（69）・塚の峯遺跡・二本松遺跡（73）・岸本城址（75）・宮の尾遺跡（6）をあげることができる。西江遺跡では特殊器台・特殊壺の伴う土壙墓群が確認されている。

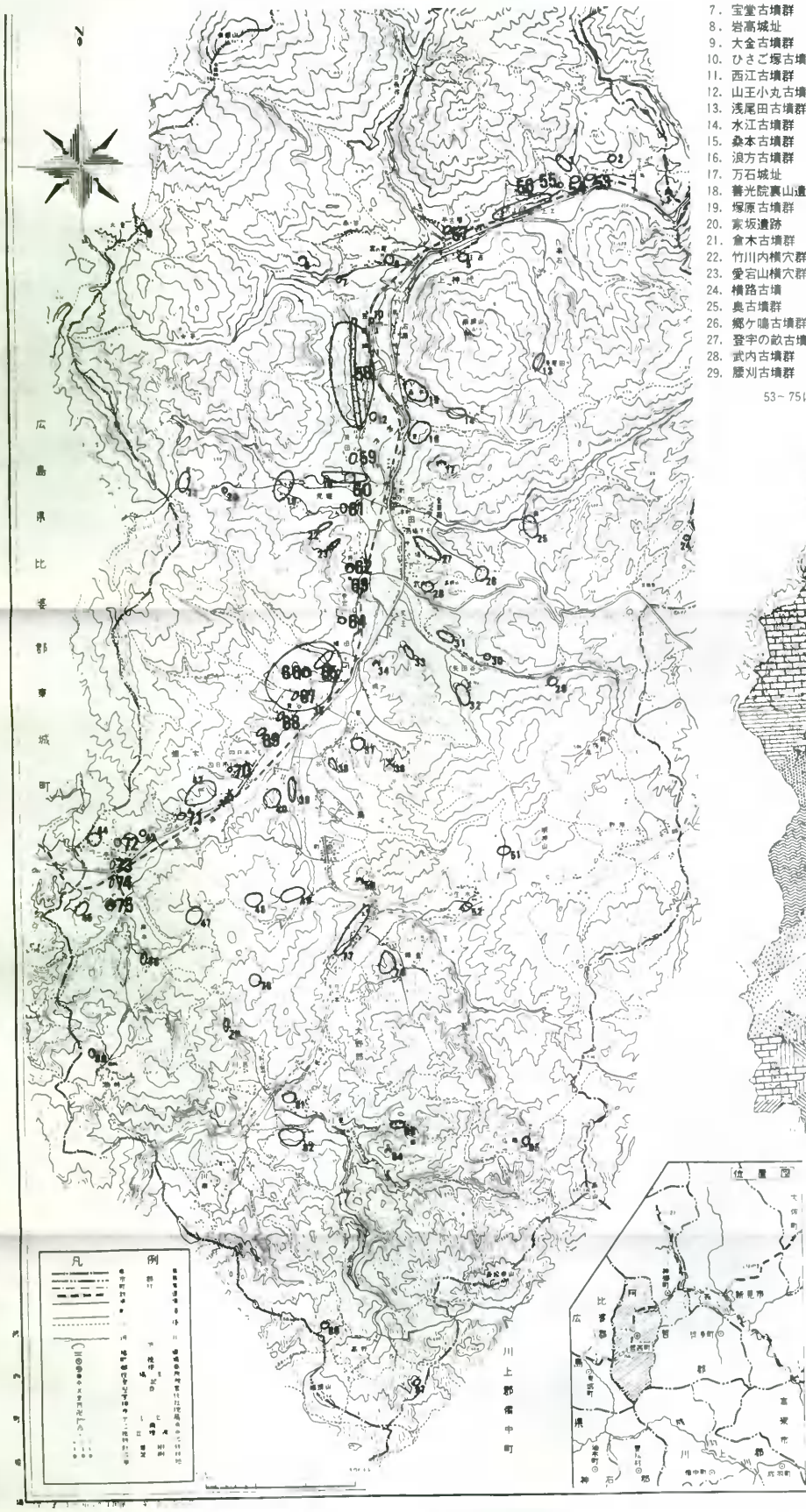
これらの弥生時代の遺跡は（家坂遺跡を除く），神代川沿いの狭長な沖積に向かって樹枝状にのびる第三紀層の丘陵上あるいは山裾部に位置し，家坂遺跡は大字矢田字元町から広島県境に展開する小さな谷の奥に位置している。家坂遺跡同様に谷間の遺跡が今後発見される可能性がある。

哲西町では昭和36年度に第1回目の分布調査が行なわれ，約250基にのぼる古墳などの遺跡が『岡山県遺跡地図』（註8）に載せられている。第2回の分布調査は，縦貫道予定線を中心に巾500ｍの範囲にわたって昭和44年度に実施され，これをもとに縦貫道の路線が決定された。この時点で路線内に含まれる遺跡は，中林遺跡（56）・西江遺跡の一部・二野遺跡（59横穴式石室1基のみ）・鳴山古墳群

第1図・2図ともに哲西町教育委員会提供の地形図（S＝1：25,000）に記入し、縮尺したものである（5ケ年分布調査を基本にして作成一田仲満雄）

1. 見坂山城址
2. 温光庵古墳群
3. 京の段古墳群
4. 市岡古墳群
5. 実本古墳群
6. 宮の尾遺跡
7. 宝堂古墳群
8. 岩高城址
9. 大金古墳群
10. ひさご塚古墳
11. 西江古墳群
12. 山王小丸古墳群
13. 浅尾田古墳群
14. 水江古墳群
15. 桑本古墳群
16. 浪方古墳群
17. 万石城址
18. 善光院裏山遺跡
19. 塚原古墳群
20. 家坂遺跡
21. 倉木古墳群
22. 竹川内横穴群
23. 愛宕山横穴群
24. 横路古墳
25. 奥古墳群
26. 郷ケ鳴古墳群
27. 登宇の畝古墳群
28. 武内古墳群
29. 腰刈古墳群
30. 上川内古墳群
31. 室ケ畝古墳群
32. 叶谷古墳群
33. 天王奥古墳群
34. 豆木城址
35. 膏谷古墳群
36. 井下谷遺跡
37. 塚の段古墳群
38. 茶筌田古墳群
39. 鳴木山東古墳群
40. 鳴木山古墳群
41. 住吉遺跡
42. 住吉古墳群
43. 御立山古墳群
44. 妙伝寺裏遺跡
45. 岸本西古墳群
46. 岸本古墳群
47. 岸本東古墳群
48. 上室古墳群
49. 小釜谷古墳群
50. 西山（要塞）城址
51. 清水奥古墳群
52. 林古墳群
53. 佐藤遺跡
54. 山根屋遺跡
55. 道の上遺跡
56. 中林遺跡
57. 野田畝遺跡
58. 西江遺跡
59. 二野遺跡
60. 光坊寺古墳群
61. 土井遺跡
62. 土井城址
63. 鳴山古墳群
64. 横田東古墳群
65. 横田遺跡
66. 藤木城址
67. 大倉遺跡
68. 忠田山遺跡
69. 御供川遺跡
70. 四日市古墳
71. 清水谷遺跡
72. 塚の峯遺跡
73. 二本松遺跡
74. 岸本下遺跡
75. 岸本城址
76. 頼重古墳群
77. 日の本古墳群
78. 七つ塚古墳群
79. 鳥田奥古墳群
80. 栃峠古墳群
81. 二条山古墳群
82. 塔の鼻古墳群
83. 山平古墳群
84. 青野城址
85. 大開古墳
86. 天堤古墳群
87. 地蔵ケ峠古墳群

53～75は中縦関係発掘遺跡一覧表の番号と同じ



第1図　阿哲郡哲西町遺跡分布図

新生代
- 沖積層
- 玄武岩
- 第三紀中新統

中生代
- 閃緑岩
- 石英斑岩
- 玢岩
- 硯石統
- 橄欖岩・蛇紋岩

古生代
- 石灰岩
- 古生層粘板岩・砂岩

第2図　哲西町地質図

（63）・大倉遺跡（67）・四日市古墳（70）・塚の峯遺跡（72）の7遺跡のみであった。昭和49年度になって発掘調査に先だち，縦貫道の調査担当者全員で精査した結果，佐藤遺跡・山根屋遺跡・野田畝遺跡・西江遺跡（延長1㎞に拡大）・二野遺跡・土井遺跡・土井城址・横田遺跡・藤木城址・忠田山遺跡（68）・御供川遺跡・清水谷遺跡・岸本城址を新たに確認した。また用地内の伐採終了後に，光坊寺古墳群（60）・横田東古墳群（64）を確認した。53～75（55・73・74を除く）の20遺跡を対象に発掘調査を開始した。

数度にわたる分布調査にもかかわらず，縦貫道建設工事中に発見された遺跡は，道の上古墳群（55）・宮の尾遺跡・土井上遺跡・二本松遺跡・岸本下遺跡の5遺跡をあげることができる。これらの遺跡では1片の土器も採集されなかった地点である。工事中発見のうち，二本松遺跡・岸本下遺跡については工事を中止して調査を行なうことができたが，宮の尾遺跡・土井上遺跡では発見したときにはすでに工事によって遺跡は消滅していた。また，野田畝遺跡では，たった1個の石庖丁のみを表面採集しただけであった。これらは埋蔵文化財の分布調査の難しさを痛感させた。

さらに岡山県全域の分布調査の一貫として昭和50年度に分布調査が実施された。この際は主として神代川の南の地域の分布調査が行なわれ，その成果は，前2回のものと合わせて『岡山県遺跡地図第5分冊』（註9）に載せられる予定である。

古墳時代になると，遺跡の分布は縦貫道沿いの所だけでなく，小さな谷の奥まった場所や山頂などにも点在している。集落址は佐藤・山根屋・野田畝・西江・土井城・横田・大倉・忠田山・御供川・清水谷・塚の峯・二本松・岸本下・岸本城の各遺跡で確認されている。弥生時代と同様に古墳時代の集落址は，縦貫道建設用地内の調査の行なわれた部分のみでわかっているのであって，その他の所にも存在しているものと思われる。

古墳時代初頭の墳墓は，山根屋遺跡・西江遺跡にあり，方形台状墓・シストあるいは土壙墓で形成されている。前半期の古墳群として光坊寺古墳群をあげることができる。これは円墳・方形墳から成っており，内部主体に竪穴式石室をもち，珠文鏡などの遺物が出土している。その他の場所では古墳時代前半期に属する古墳は明確にしえない。

古墳時代後半期に属するものは各所に散在している。内部主体は，シストあるいは木棺直葬のもの，横穴式石室が認められる。畑木の鳴木山古墳群（40）の一基（径5ｍの小円墳）からは，6世紀初頭の須恵器が出土している。横穴式石室は6世紀後半になって出現する。上神代吉が谷にあるひさご塚古墳は国鉄芸備線建設時に破壊されたものであるが，形象・円筒埴輪を持っており，5世紀中葉の築造と考えられる（註10）。埴輪を持つ古墳としては備中北部では唯一の例である。ただ西江遺跡の包含層から埴輪片1片が出土し，その地点はひさご塚古墳から南へ1㎞の地点である。西江遺跡出土の埴輪片は，どこの古墳に伴うものかは不明である。

後半期のもので特筆すべきものに横穴（おうけつ）がある。家坂横穴（20―1基）（註11）・竹川内横穴群（22―7基）・愛宕山横穴群（23―15基）・鳴山古墳群（2基）・寺畝横穴（青谷古墳群（35）の内―1基）の26基の存在が知られている。このうち家坂横穴・鳴山古墳群の3基は発掘調査が行なわれた。県中北部の久米町，加茂町，北房町などにその分布が知られている。

奈良・平安時代の遺構・遺物は，山根屋・西江・二野・土井・二本松・井下谷（36）の各遺跡で確認されている。

城址では，鎌倉時代の西山城（50）・万石城（17）・育野城（84）がある。室町時代のものでは，尼子方の見坂山城（1）・豆木城（34）・藤木城・岸本城・岩高城（8）があり，毛利方の育野城・要塞城（50—後に尼子方となる）がある。哲西町の北西部に尼子方が，南東部に毛利方が対峙していたものである。城址ではないが，建物群・墳墓などは，土井遺跡・忠田山遺跡・二本松遺跡などで確認されている。

製鉄関係の遺構は，鍛冶炉が西江遺跡・二野遺跡で確認され，鉄穴・水路などは栃峠と浅尾田に残っている。

（田仲満雄）

註 1.　広島大学が十数年来発掘調査を続けている。

註 2.　『岡山県埋蔵文化財報告 7』岡山県教育委員会昭和52年 3 月刊

註 3.　土井遺跡のすぐ南の尾根上にあった。

註 4.　矢田元町にある町役場の東側の山裾部分で採集された。

註 5.　藤田等「備中哲西町弥生式遺跡」『古代吉備』第 4 集古代吉備刊行会・昭和36年刊

註 6.　矢田荒堀の光坊寺古墳群の西に位置する南にのびる尾根上にある。

註 7.　八鳥の嶋木山東古墳群のある尾根が低く北にのび，その先端部に位置している。

註 8.　『岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会　昭和39年刊
『全国遺跡地図—岡山県』文化財保護委員会　昭和42年刊

註 9.　『岡山県遺跡地図第 5 分冊』岡山県教育委員会　近刊予定

註10.　遺物は現在，東京国立博物館と哲西町立矢神小学校に保管されている。

註11.　潮見　浩・難波宗明「備中哲西町家坂の横穴調査報告」『古代吉備』第 4 集古代吉備刊行会昭和36年刊

（参考文献）

『哲西町遺跡カード』哲西町教育委員会
『哲西史』哲西町　昭和38年刊
『阿哲郡誌』阿哲郡教育会　大正12年刊
『古代吉備』古代吉備刊行会　昭和36年刊

ふたの
二野遺跡 (59)
こうぼうじ
光坊寺古墳群 (60)

総　目　次

執筆者
第1章　はじめに……（高畑知功）……487
第2章　調査の経過……（福田正継）……488
第3章　二野遺跡……（高畑）……492
第1節　遺跡の概要……492
第4章　光坊寺古墳群……539
第1節　各古墳の外観……（福田）……539
第2節　1　号　墳……（福田）……539
1）調査の進め方……539
2）調査前の外観……542
3）墳　丘……542
4）外部構造……544
5）内部構造……552
第3節　2　号　墳……（高畑）……566
第4節　11　号　墳……（福田）……571
1）調査前の外観……571
2）墳　丘……571
3）外部構造……571
4）内部構造……571
第5節　出土遺物……（高畑）……575
1）土　器……575
2）金属器……579
第5章　光坊寺古墳群の諸問題……（福田）……580
第1節　光坊寺古墳群の立地と形成過程……580
第2節　1　号　墳……581
1）外部構造について……581
2）内部構造について……583
第3節　11　号　墳……584

表　目　次

表1　二野遺跡・光坊寺古墳群発掘調査概要（作成：高畑）……487
表2　二野遺跡・光坊寺古墳群発掘調査要員一覧表（高畑）……491
表3　二野遺跡・光坊寺古墳群作業工程表（高畑）……491

表４　二野遺跡遺構一覧表（高畑）…… 494
表５　二野遺跡出土中期弥生式土器比較表（福田）…… 585
表６　光坊寺１号墳の葺石構築法（福田）…… 551
表７　鏡計測値表（高畑）…… 577
　　小玉計測値表（高畑）…… 577
表８　光坊寺古墳群計測値表（福田）…… 585

図　目　次

第１図　二野遺跡・光坊寺古墳群，周辺地形図（作成：福田）…… 489
第２図　二野遺跡遺構全体図（作成：高畑）…… 493
第３図　４区遺構配置図（作成：高畑）…… 496
第４図　４Ｂ南区No.９建物（実測・製図：高畑）…… 497
第５図　４Ｂ南区No.10建物（実測・製図：高畑）…… 498
第６図　４Ｂ南区土壙（実測・製図：高畑）…… 500
第７図　４Ｃ区谷１土層断面（実測：行田裕美・高畑，製図：高畑）…… 501
第８図　４Ｂ区No.３住居址（実測：行田，製図：高畑）…… 503
第９図　４Ｂ区No.20建物（実測・製図：行田）…… 504
第10図　４Ｂ区No.16建物（実測・製図：高畑）…… 505
第11図　４Ｂ区No.８建物（実測・製図：高畑）…… 506
第12図　４Ｂ区土壙（実測：行田，製図：高畑）…… 508
第13図　５区遺構配置図（作成：高畑）…… 510
第14図　５Ｂ区No.21横穴式石室（実測：田中清美・高畑，製図：高畑）…… 511
第15図　５Ｂ区No.21横穴式石室出土遺物（実測・製図：高畑）…… 513
第16図　５Ｂ区No.11建物（実測・製図：高畑）…… 514
第17図　５Ｂ区No.２遺構（実測：田中，製図：高畑）…… 515
第18図　５Ｂ区土層断面（実測：田中，製図：高畑）…… 516
第19図　５Ｃ区土層断面（実測：田中，製図：高畑）…… 516
第20図　５Ｃ区No.１鍛冶址（実測：田中，製図：高畑）…… 517
第21図　５Ｃ区No.１鍛冶址（実測：田中，製図：高畑）…… 518
第22図　５Ｃ区No.１第１鍛冶炉（実測：田中，製図：高畑）…… 519
第23図　５Ｃ区No.１第２鍛冶炉（実測：田中，製図：高畑）…… 520
第24図　４Ｂ・Ｃ区出土石器（実測・製図：安川豊史）…… 521
第25図　４Ｃ区谷１出土縄文式土器（実測・製図：高畑）…… 522
第26図　４Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 524
第27図　４Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 525

第28図　4Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 526
第29図　4Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 527
第30図　4Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 528
第31図　4Ｃ区谷１出土弥生式土器拓本（実測・製図：福田）…… 529
第32図　4Ｃ区谷１出土紡錘（実測・製図：福田）…… 530
第33図　4Ｃ区谷１出土弥生式土器（実測・製図：福田）…… 530
第34図　4・5区出土須恵器・土師器（実測・製図：高畑）…… 535
第35図　建物配置図（作成：高畑）…… 537
第36図　光坊寺古墳群位置図（作成：福田）…… 540
第37図　1号墳調査前地形（測量：高畑・福田，製図：福田）…… 541
第38図　1号墳墳丘土層断面（実測・製図：福田）…… 543
第39図　1号墳葺石区分図（作成：福田）…… 545
第40図　1号墳遺構配置図（測量・実測：高畑・福田，製図：福田）…… 547
第41図　1号墳墳丘側面図（南から）（実測・製図：福田）…… 549
第42図　1号墳墳丘側面図（北から）（実測・製図：福田）…… 549
第43図　古道（測量・実測：高畑・福田，製図：福田）…… 553
第44図　1号墳第Ⅰ主体部（実測・製図：福田）…… 555
第45図　1号墳第Ⅰ主体部解体図（実測・製図：福田）…… 557
第46図　1号墳第Ⅱ主体部（実測・製図：福田）…… 558
第47図　1号墳第Ⅲ主体部（実測・製図：福田）…… 560
第48図　1号墳第Ⅳ主体部（実測・製図：福田）…… 561
第49図　1号墳第Ⅴ主体部（実測・製図：高畑）…… 563
第50図　第Ⅴ主体部工具痕および木棺の比較（作成：高畑）…… 564
第51図　1号墳集石遺構（実測・製図：福田）…… 565
第52図　2号墳調査前地形（測量：福田・高畑，製図：高畑）…… 567
第53図　2号墳調査後地形（測量：福田・高畑，製図：高畑）…… 567
第54図　2号墳土層断面（実測・製図：高畑）…… 568
第55図　2号墳主体部（実測・製図：高畑）…… 569
第56図　11号墳調査前地形（測量：高畑・福田，製図：福田）…… 572
第57図　11号墳土層断面（実測・製図：福田）…… 573
第58図　11号墳主体部（実測・製図：福田）…… 574
第59図　11号墳調査後地形（測量：高畑・福田，製図：福田）…… 575
第60図　1区1・2・11号墳出土遺物（実測・製図：高畑）…… 576
第61図　1号墳第Ⅴ主体部出土遺物（実測・製図：高畑）…… 577

図 版 目 次

図版１－１　西江遺跡安信地区より二野遺跡・光坊寺古墳群を望む（北東より）…… 587
　　２　二野遺跡４区全景（北東より）…… 587
図版２－１　４Ａ区No.18溝状遺構（西より）…… 588
　　２　４Ａ区谷底（南東より）…… 588
図版３－１　４Ｂ・Ｃ区全景（南西より）…… 589
　　２　二野遺跡全景（北東より）…… 589
図版４－１　４Ｂ南区No.９建物（南より）…… 590
　　２　４Ｂ南区No.10建物（南東より）…… 590
図版５－１　４Ｂ区No.８建物（南より）…… 591
　　２　４Ｂ区No.８・16建物（北より）…… 591
図版６　４Ｂ区No.８建物掘り方・柱根…… 592
図版７－１　４Ｂ区No.５土壙（東より）…… 593
　　２　４Ｂ区No.６石詰土壙（西より）…… 593
　　３　４Ｃ区谷底（南々西より）…… 593
　　４　４Ｃ区谷底土層断面（南々西より）…… 593
　　５　５Ｂ区No.21横穴式石室調査前状況（南東より）…… 593
　　６　５Ｂ区No.21横穴式石室調査後状況（南東より）…… 593
図版８－１　５Ｂ区No.21横穴式石室奥壁前面（南西より）…… 594
　　２　５Ｂ区No.21横穴式石室奥壁後面（北東より）…… 594
　　３　５Ｂ区No.21横穴式石室右側壁（北西より）…… 594
　　４　５Ｂ区No.21横穴式石室奥壁後込め（北より）…… 594
　　５　５Ｂ区No.21横穴式石室左側壁（北東より）…… 594
　　６　５Ｂ区No.21横穴式石室掘り方および根石抜き取り断面（北西より）…… 594
図版９－１　５Ｂ区No.19柱穴列（西より）…… 595
　　２　５Ｂ区No.11建物（東より）…… 595
図版10－１　５Ｃ区No.１鍛冶址周辺（北より）…… 596
　　２　５Ｃ区No.１鍛冶址（南東より）…… 596
　　３　５Ｃ区No.１鍛冶址（北より）…… 596
　　４　５Ｃ区No.１鍛冶址（南より）…… 596
　　５　５Ｃ区No.１鍛冶炉（東より）…… 596
　　６　５Ｃ区No.１鍛冶炉（東より）…… 596
図版11－１　４Ｃ区谷１出土縄文式土器…… 597
　　２　４Ｃ区谷１出土縄文式土器…… 597

図版12　弥生式土器(1)…… 598
図版12—1　壺形土器外面…… 598
2　壺形土器内面…… 598
3　甕形土器(1)…… 598
4　甕形土器(2)…… 598
5　甕形土器底部…… 598
6　紡錘…… 598
7　紡錘未製品…… 598
図版13　弥生式土器(2)…… 599
図版13—1　高坏形土器坏部外面…… 599
2　高坏形土器坏部内面…… 599
3　高坏形土器脚部…… 599
4　文様のある土器片…… 599
5　後期弥生式土器…… 599
図版14—1　5B区№21横穴式石室内出土遺物…… 600
2　二野遺跡出土鉄滓…… 600
図版15—1　4・5区出土須恵器・土師器外面…… 601
2　4・5区出土須恵器・土師器内面…… 601
図版16—1　光坊寺古墳群遠景(北東より)…… 602
2　光坊寺古墳群遠景(南より)…… 602
図版17—1　1号墳調査前全景(北西より)…… 603
2　1号墳調査中全景(西より)…… 603
3　1号墳全景(北西より)…… 603
4　1号墳遺構配置全景(西より)…… 603
5　1号墳調査後全景(北西より)…… 603
6　1号墳葺石近景(北西より)…… 603
図版18　1号墳第Ⅰ主体部…… 604
図版19—1　1号墳第Ⅰ主体部遺物出土状況…… 605
2　1号墳第Ⅰ主体部調査後(南より)…… 605
図版20—1　1号墳第Ⅱ主体部および集石遺構(北より)…… 606
2　1号墳主体部配置全景(西より)…… 606
図版21—1　1号墳第Ⅲ主体部(北東より)…… 607
2　1号墳第Ⅲ主体部(南より)…… 607
図版22—1　1号墳第Ⅳ・Ⅴ主体部(南より)…… 608
2　1号墳第Ⅳ・Ⅴ主体部(南より)…… 608

図版22—3　1号墳第Ⅳ主体部遺物出土状況（南より）…… 608
4　1号墳主体部配置近景（南より）…… 608
図版23　1号墳第Ⅴ主体部…… 609
図版24—1　1号墳第Ⅴ主体部遺物出土状況（南より）…… 610
2　1号墳第Ⅴ主体部出土鏡…… 610
図版25—1　1号墳環状配石…… 611
2　古道（東より）…… 611
図版26—1　光坊寺2号墳墳丘（南東より）…… 612
2　光坊寺2号墳掘り下げ（南東より）…… 612
3　2号墳盛土断面（東より）…… 612
4　2号墳主体部土層断面（南西より）…… 612
図版27—1　2号墳主体部上面土層（西より）…… 613
2　2号墳主体部検出上面（西より）…… 613
図版28—1　2号墳木棺内土層断面（西より）…… 614
2　2号墳木棺内土層断面（西より）…… 61
図版29—1　2号墳木棺痕跡・人形（ひとがた）残影（西より）…… 615
2　2号墳掘り方・粘土の関係（西より）…… 615
3　2号墳主体部検出（南東より）…… 615
4　2号墳棺外遺物出土状況（北より）…… 615
図版30—1　11号墳調査前全景（西より）…… 616
2　11号墳調査中全景（西より）…… 616
3　11号墳墳丘（北西より）…… 616
4　11号墳主体部（北西より）…… 616
図版31　光坊寺1・11号墳出土遺物…… 617
図版32　光坊寺1・2号墳出土遺物…… 618

第1章 はじめに

本報告書は中国縦貫自動車道路建設に伴い記録保存を目的として行った埋蔵文化財発掘調査概要である。（表1）

遺跡名	二野遺跡，光坊寺古墳群 （阿哲郡哲西町矢田）	合計	備考
発掘期間	昭和50年7月1日より 9月30日まで3ケ月 （実働日数79日） 1ケ月平均　26.3日実働	3ケ月 （79日）	1．7，8の2ケ月を調査予定に行ったが二野遺跡の遺構の広がりに伴い1ケ月延長して計3ケ月間行った
発掘作業員	男一 761人 女一 640人 計一1401人 1日平均——14.43人	1401人	1．哲西町内の農家の人達が主体となる（農繁期6,10月） 2．男の作業員が多数参加した
調査担当者	高畑知功　昭和50年7月1日より 昭和50年9月30日まで 福田正継　昭和50年7月1日より 昭和50年9月30日まで	148人	1．このパーティで，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，野田畝遺跡，塚の峯遺跡の計画が開始された 2．本遺跡では奈良大，国学院大の考古学専攻生，田中清美，行田裕美両君の援助をうけて作業を進行させた
実質発掘面積	二野遺跡——4，5区 2,000㎡ 光坊寺古墳群——1，2，3区 1,000㎡ （STA 60+30～STA 62+50）	3,000㎡ （延長 220m）	1．1区は古墳群周辺までを含めて調査を行った 2．2区，3区はグリット，トレンチ調査を行った 3．4A，5B地区表土除去はブルトーザーを使用した
遺構，遺物	二野遺跡　4区　21遺構 5区　10遺構 光坊寺古墳群　古墳　3基 1区　3基 2区　0 3区　0	31遺構 古墳3基	※ 遺構一覧表参照 遺物は岡山市西古松分室にて保管
写真	白黒　4×5判——437枚 （12枚×36本） 35㎜——1092枚 （36枚×31本） カラー　35㎜——63枚　（36枚×2本）	1592枚	1．遺構，遺物写真撮影は高畑が担当した
報告書作成	福田正継　（昭和51年11月1日から昭和52年3月20日まで） 光坊寺1，11号墳担当 高畑知功　（無） 二野遺跡，光坊寺2号墳担当	5カ月	○ 福田が岡山市西古松分室にて作成を行なった ○ 高畑は津山市二宮遺跡の発掘調査を担当しており，それと並行しての作成となった ○ 担当遺構に分担し，作成を行った

第2章　調　査　の　経　過

中国縦貫自動車道路が建設される岡山県ルートのうち，広島県境に位置する哲西町は，遺跡の多い所である（阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境第１図)。この道路建設に伴う遺跡の発掘調査が哲西町内で実施されたのは，昭和50年７月１日からであり，二野古墳群がその遺跡である。

発掘調査実施以前に行われていた分布調査で，『畑に破壊された横穴式石室が残存する。尾根上にも２基の円墳が所在する。未調査』という結果が示され，３基の古墳を調査対象にしたところの二野古墳群（ＳＴＡ60＋30～62＋50）と呼ばれていた。この調査は，高畑知功と福田正継が担当した。哲西町内の遺跡を検討するために，種々の文献（註１）を調べたり，古老から話を聞いたところによると，畑に残存する横穴式石室の古墳を二野古墳と呼び，尾根上に存在する２基の円墳は光坊寺古墳群を形成している古墳であるということが判明した。二野古墳と光坊寺古墳群の所在する位置が約180ｍの近接地になるために，当初の発掘調査範囲を便宜的に５つの区に分割（第１図）して調査を実施することにした。したがって二野古墳は５区，光坊寺古墳群は１区にあたる。

１区

１区は光坊寺古墳群が存在する山稜の尾根部分である。調査はまず下草刈りを行い，それに並行してトラバースを組んで地形測量に着手した。実際に掘り始めたのは地形測量を完了し，古墳調査のトレンチを設定してからであるが，この１区の調査は２基の古墳に集中し，調査参加者全員で行った。なお山稜の南側は岩盤が露出した急斜面になっており，作業を行うのに危険な状態であった。

１区には分布調査では確認できていなかった古墳（11号墳）が，調査段階で新たに見つかった。

２区

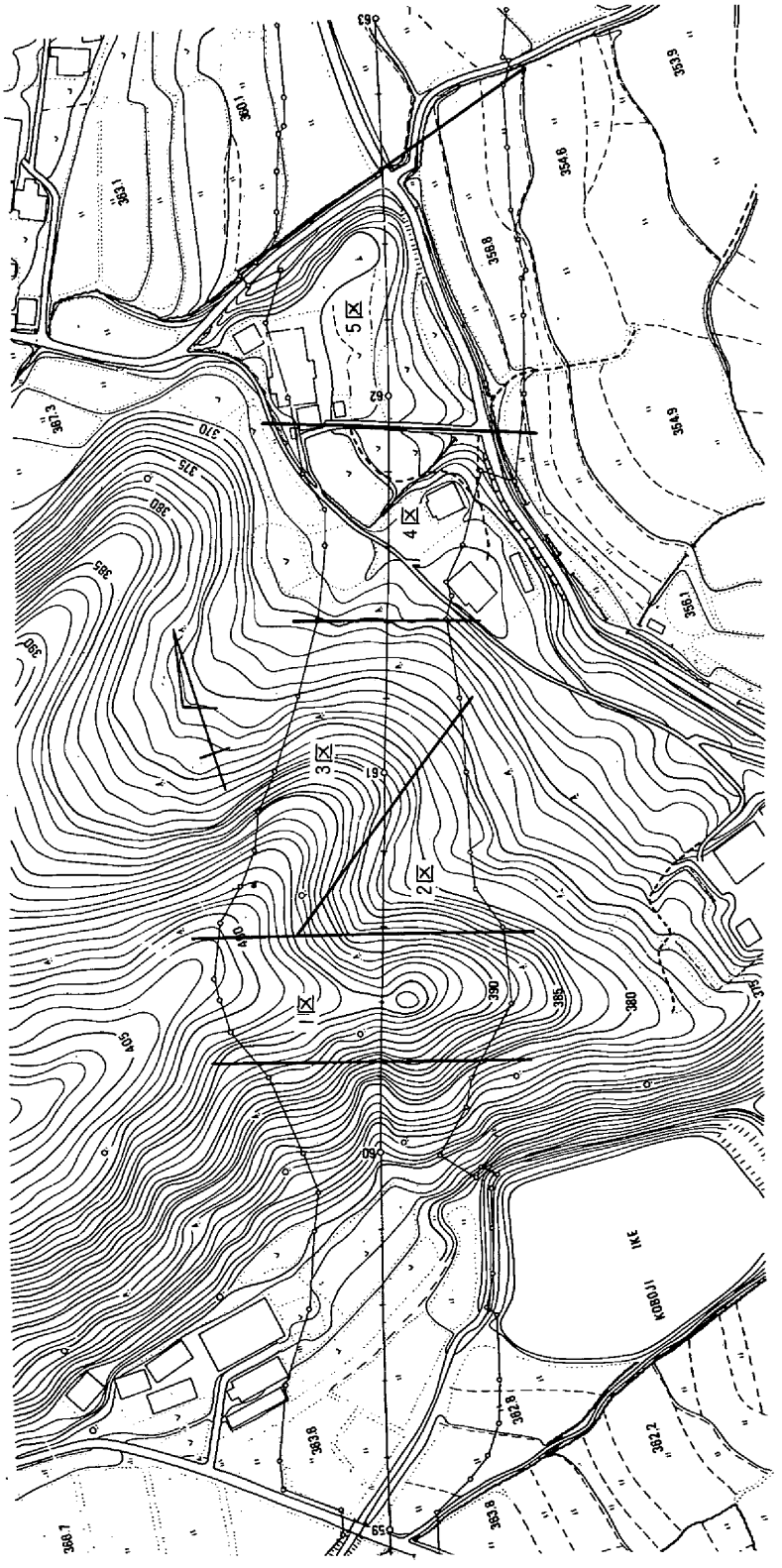
２区は１区と３区の中間にある谷部分である。１区と３区の地形測量と並行して一番最初に発掘調査を進めたところである。２区の調査を急いだのは１区の南斜面下方には小川があり，調査による土砂が雨水で流れ込むおそれがあったため，調査の排土を捨てる場所にしたいと考えたからである。

この２区は１区の古墳から転落した遺物があるかどうかということと，ほかの遺構（たとえば窯跡や住居址）が存在する（註２）かどうかという２点を主な目的に行った。

道路用地のセンター杭を結んで幅３ｍ・長さ32ｍのトレンチを設定した。その結果，１区や３区の山稜から流入したと考えられる地山風化土と黒色の火山灰が互層になって堆積しており，谷の中央では約２ｍの厚さに達していた。また古墳に関係すると考えられる遺物等は検出できなかったが，人頭大の割石が若干転落していたので，墳丘に葺石が存在する可能性を与えた。しかしながら遺構らしきものは確認できなかったので，１区の古墳調査を始めるようにした。

３区

３区は光坊寺古墳群が存在する山稜から，５区の二野古墳が所在する畑の方向へ舌状に張出した尾



第1図　二野遺跡・光坊寺古墳群、周辺地形図（S＝$\frac{1}{2000}$）

根部分である。地形から考えると，古墳が立地してもいい条件をそなえていた。尾根上にトレンチを設定し，部分的には周囲に拡張して調査を行ったが，表土面に地山が露出し，遺構の存在は確認できなかった。

4区との境界付近には，近年になって新しくつけられた林道が存在していたが，その林道によって削られた法面でも表土直下が地山で，遺構の存在する可能性は考えられなかった。

4区

現在では水田になっている神代川の氾濫原に面した台地上が，4区と5区である。4区のほぼ中央には近所の人々が利用している小道があり，それに直交して湧水が流れている。また5区に近接した地点は畑地になっている。したがって4区の現地形は以前から人工が加えられたもので，過去の自然地形とは異なるものである。なお西側の山に面した地点は，火山灰の黒色土が厚く堆積していたので，表土除去は機械力に頼らざるを得なかった。調査では湧水の処理に苦労した。

この4区は行田裕美君（国学院大学学生）に非常にお世話になったことを記しておきたい。

5区

二野古墳が存在する所である。西側は道路建設によって立退いた家の基礎がそのままの状態で放置されていた。東側はなだらかな傾斜地を利用して畑地になっている。北端には現代の墓地があった模様で，移転した無惨な跡を残していた。二野古墳はほぼ中央に位置し，古墳であるということがやっと確認できる程度で全壊に近い。

5区は二野古墳の調査が目的であったが，後述するように4区と5区を「二野遺跡」に名称をあらためた。

なお家の基礎が放置されていた地点の調査は，人力ではどうすることもできず機械を導入した。

この5区は田中清美君（奈良大学学生）に非常にお世話になったことを記しておきたい。

（福田正継）

調査参加者

哲西町は農業と林業を主体とする人口密度の低い町であるため，発掘調査に参加してもらえる人がおられるかどうかわからなかったので，哲西町教育委員会にお願いして町内全域に有線放送をしてもらった。また調査を始めてからは，すでに来てもらっている人の近所に声をかけていただいた。

以下お世話になった人々の名前を記し，感謝の意を表したい。

麻月千代　井上和夫　井上嘉弥代　小川恒雄　小田艶子　川上好友　川上初子　佐々木久二郎　佐々木文一　佐々木貞代　沢田晴夫　渋川雅雄　立川一重　立川照美　田中清美（奈良大学学生）　田辺浄二　津田正志　土屋トヨ子　南部誠吉　前田昌彦（東城高校学生）　三上愛恵　村上高代　森島幹子　森島哲也　安田一之　安田三四子　山本美夫　行田裕美（国学院大学学生）　横田愛子　横田益代　横山勅恵　横山正美　横山道子　吉井龍吾（新見農工高校学生）

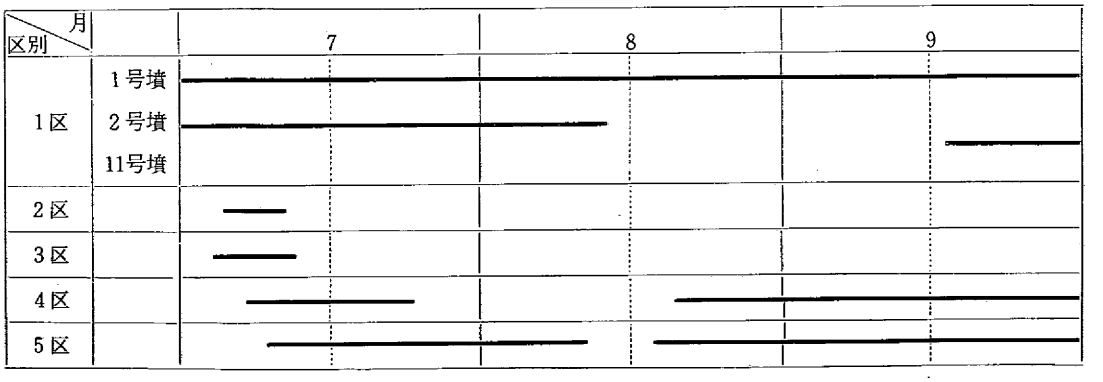
石器の実測・製図・文章の作成は，安川豊史氏の手によるものである。

二野遺跡・光坊寺古墳群発掘調査要員一覧表（表２）

○は本遺跡（報）報告書作成

	高　畑	福　田	中　野	二　宮	田　中	行　田
50年７月	○	○	上東遺跡	西江遺跡	○	
８月	○	○	〃	〃	○	○
９月	○	○	〃	〃	○	
10月	土井遺跡	土井遺跡	〃	〃		
11月	〃	〃	〃	〃		
12月	野田畝遺跡	野田畝遺跡	〃	〃		
１月	〃	〃	〃	〃		
２月	〃	〃	〃	〃		
３月	〃 （報）谷尻遺跡	〃 塚の峯遺跡	〃	野田畝遺跡 塚の峯遺跡		
４月	津山市二宮遺跡 (179号バイパス)	〃	塚の峯遺跡	津山市二宮遺跡 (179号バイパス)		
５月	〃	〃	〃	〃		
６月	〃	〃	〃	〃		
７月	〃	〃	〃	〃		
８月	〃	忠田山遺跡	忠田山遺跡	〃		
９月	〃	〃	〃	〃		
10月	〃	横田遺跡	横田遺跡	〃		
11月	〃	（報）野田畝	（報）川入	〃		
12月	〃	〃	〃	〃		
１月	〃	報　○	〃	〃		
２月	〃	○	〃	〃		
３月	〃	○	〃	〃		

二野遺跡・光坊寺古墳群作業工程表（表３）



第3章　二　野　遺　跡

第1節　遺跡の概要

遺跡は岡山県阿哲郡哲西町大字矢田小字二野に存在する。芸備線矢神駅より真西に見える丘陵に，11基からなる光坊寺古墳群が存在している。古墳群は，それらの東西にのびた尾根筋を占地する共通点を有している。二野遺跡は，これらの丘陵が海抜375m 地点で多少平坦部にうつるところ，現在の哲西町の牛市場を南端とし，北約310m，東は山裾より西丘陵端（水田との比高4m）まで幅40～60mの平坦部約16,000㎡の範囲と推定することができる。調査対象は，3区丘陵北部に存在するところの東に開口する谷（現在，小川となっている）を中心に南北110m東西60mの約6,600㎡の部分である。まず調査の便宜上，旧地権者酒木宅に通じる東西道を境に南側を4区とし，北側を5区と仮称した。4区をさらに平坦部高低差により上中下段とわけ，最も高い部分を4A区，最も広い中段をB区，その南をB南区，そして下段谷をC区とした。5区においても4B区につづく地形をB区，それより1段低い平坦部をC区（4C区とは若干異なる）とした。

4A区

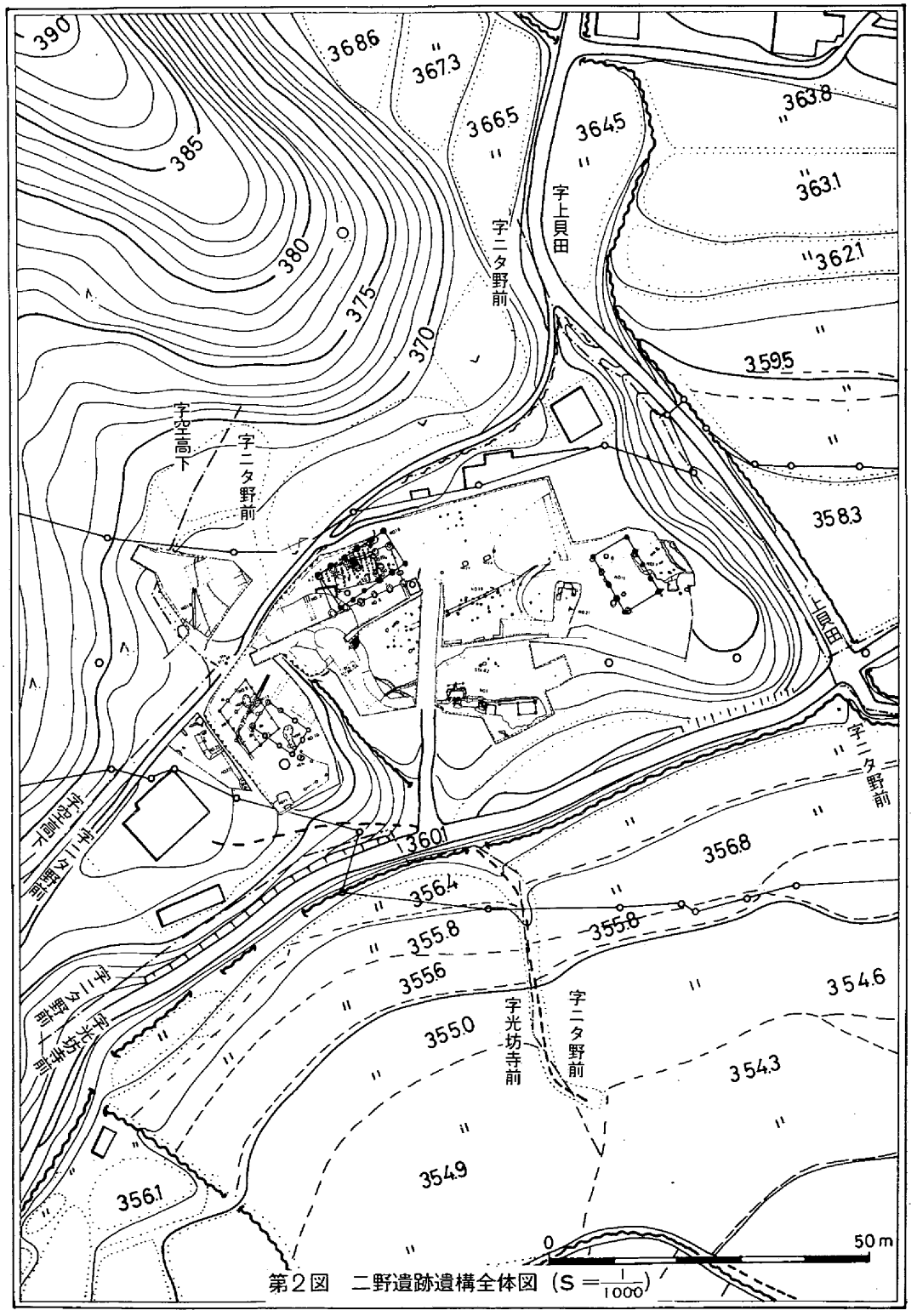
海抜367～369mを中心とする平坦部がこれにあたる。比高差約2mの4B区の建物群検出後に，区画を規す遺構の確認を目的とし，11.3×10.0m範囲の掘開を行った。現地表より約60cm下げた黒ボク面に幅50cm・長さ11m・深さ約10cmのNo.18溝状の遺構を検出した。これは新しい感じのものであり，建物に伴うものとは考えられなかった。さらに堆積した黒ボクを除去し，地面より約3mの深さで黄褐色地山面に到達した。これは東に開口する谷底の部分であり，黒ボク上位より下位にいたるまで弥生時代中期の土器片，石器を包含していた。No.18溝状遺構が検出されたのみである。

4B区

4A区との比高差約2m。4A区との間に現在使用の農道が南北に走っている。海抜365mコンターを中心にして最もフラットな面を有する。旧地形は4A区で検出した東にのびる谷が農道(未掘)直下にて北に折曲し，さらに東に流れをもどした幅15～20m・深さ2.8～3.0mの谷の痕跡がうかがえる。4A区と同じく弥生時代中期の遺物を中心に包含しており，谷底より上位2.6m付近で黒ボク堆積層の整地を行った跡がみられた。この整地面に平安期と考えられる建物3棟，時期不明の住居址1，溝2，柱穴列2，近世土壙4基が存在した。他に規則性のない小柱穴を全面に確認した。

4B南区

4B区の南側で若干レベルの高い所に位置する。表土層10～20cmを除去すると黄褐色地山面が検出され，4C区谷1の肩口であったことが明白であった。平坦部には現代（立退き時点）まで，小屋が建てられており，柱穴・基礎石が規則的に検出された。これら地山面には，No.16・8建物等と埋土を異にした大形建物2棟，性格不明の土壙8基，近代溝1，等が存在した。遺跡はここより南に継続する可能性がある。



第2図　二野遺跡遺構全体図（S＝$\frac{1}{1000}$）

二 野 遺 跡 遺 構 一 覧 表 （表4）

遺構番号	種類	地区	発掘担当者	図番号	図版番号	備考
1	鍛冶址	5 C	田中	第20.21 22.23図	図版10	住居址と建物が併用されたもの
2	石列	5 B	田中	第17図	—	黒ボク中に存在した
3	住居址	4 B	行田	第8図	—	4B.4B南区中央の谷内に半分かかっている
4	土壙	4 B	行田	第12図	—	不明
5	土壙	4 B	行田	〃	図版7—1	ガラス，ビン破片（近世）
6	土壙	4 B	行田	〃	図版7—2	№20と重複，石がつまっていた（近世）
7	土壙	4 B	行田	〃	—	不明
8	建物	4 B	行田，高畑	第11図	図版5—1.2 図版6	建物規模大にて，柱の基底付近を残す
9	建物	4B南	高畑	第4図	図版4—1	非常に浅く，新しい土質をもつ
10	建物	4B南	高畑	第5図	図版4—2	№8.16.11建物とは若干異なる土質をもつ
11	建物	5 B	田中	第16図	図版9—2	№16と直角をなす建物（同時期）
12	土壙	4B南	高畑	第6図	—	土壙内に黒ボクを含むサヌカイト小片を1点
13	土壙	4B南	高畑	〃	—	近世溝によりカット
14	土壙	4B南	高畑	〃	—	土壙内に角礫2石を有する（近世墓か）
15	土壙	4B南	高畑	—	—	現代建物に伴うもの（立退きしたもの）
16	建物	4 B	高畑	第10図	図版5—2	№11建物と直角をなす建物
17	土壙	5 B	田中	—	—	不明
18	溝	4 A	高畑	—	図版2—1	黒ボクを切ったもの
19	柱穴列	4B.5B	高畑	—	図版9—1	建物№8に並列する2列
20	建物	5 B	高畑	第9図		須恵器坏身片を検出する
21	横穴式石室	5 B	田中，高畑	第14図	図版 7-5.6 図版 8	半壊したもの，周溝痕跡を残す
22	段	4B南	高畑	—	—	4B南整地面を造る際の段状の囲
23	土壙	4B南	高畑	—	—	浅い凹み（近世）
24	土壙	4B南	高畑	—	—	黒ボクと地山土の混土（不明）
25	土壙	4B南	高畑	—	—	（不明）
26	土壙	4 B	高畑	—	—	（不明）
27	土壙	5 B	高畑	—	—	黒ボクが入っていた（不明）
28	土壙	5 B	高畑	—	—	黒ボクが入っていた（不明）
29	溝状	4 B	高畑	—	—	地山を掘開したもので丁寧につくられていた底部滑らかであった
谷1	包含層	4 C	高畑	第7図	図版7—3 4	この谷内より縄文，弥生時代石器土器が出土した 深さ3m
谷2	—	5 B	高畑	第18図	—	深さ0.6m

4 C区

現在小川が流れており，その谷部分を中心にした海抜361～365m付近の地点を呼ぶ。この谷は，4A区においても確認されており，黒ボク堆積土中より縄文・弥生時代の遺物の大半を出土した場所である。

5 B区

4 B区北に継続する海抜 365mを中心とする平坦部で，4 C区谷を形成する東にのびる北側丘陵の大半部分がこれにあたる。北西端に黒ボク土の堆積する浅い谷が存在し，黄褐色地山面には全壊に近い横穴式石室1基，No.16建物と直角の関係をもつ建物1棟，No. 8 建物と並行関係をもつ柱穴列2，土壙3基，柱穴等が存在した。なお，No.11 建物の北側は現代の墓地で地山が露出しており，遺構は確認できなかった。西側は排土場所としたため建物存在の確認ができていない。しかし，そのスペースからみて建物の存在する可能性が考えられる。

5 C区

5 B区と石垣で区画されており，海抜362～364m間の暖斜面20×15mの範囲で掘開を行った。現地表面より浅い所で 10cm，深い所で 1.3mにて黄褐色地山面に遺構が検出された。東隅においては，黒ボク土の生活面が確認された。遺構上面黒ボク堆積土中より須恵器・土師器片が出土している。遺構はコンターにそって鍛冶址1が存在した。鎌倉時代と考えられる。

遺構

古墳時代――横穴式石室墳

平安時代――建物4棟・柱穴列2

鎌倉時代――鍛冶建物址1・建物1棟

そ の 他――住居址1・土壙15

遺物

先土器時代――ナイフ形石器，尖頭器（サヌカイト製各1点）

縄文時代――土器：前・中・後・晩期（125片）

石器：2点（いつの時代か不明），黒曜石片，サヌカイト片

弥生時代――土器：中・後期（整理箱6），紡錘3点（1点未製品）

石器：打製石鏃，磨製石庖丁（各1点），スクレイパー1点

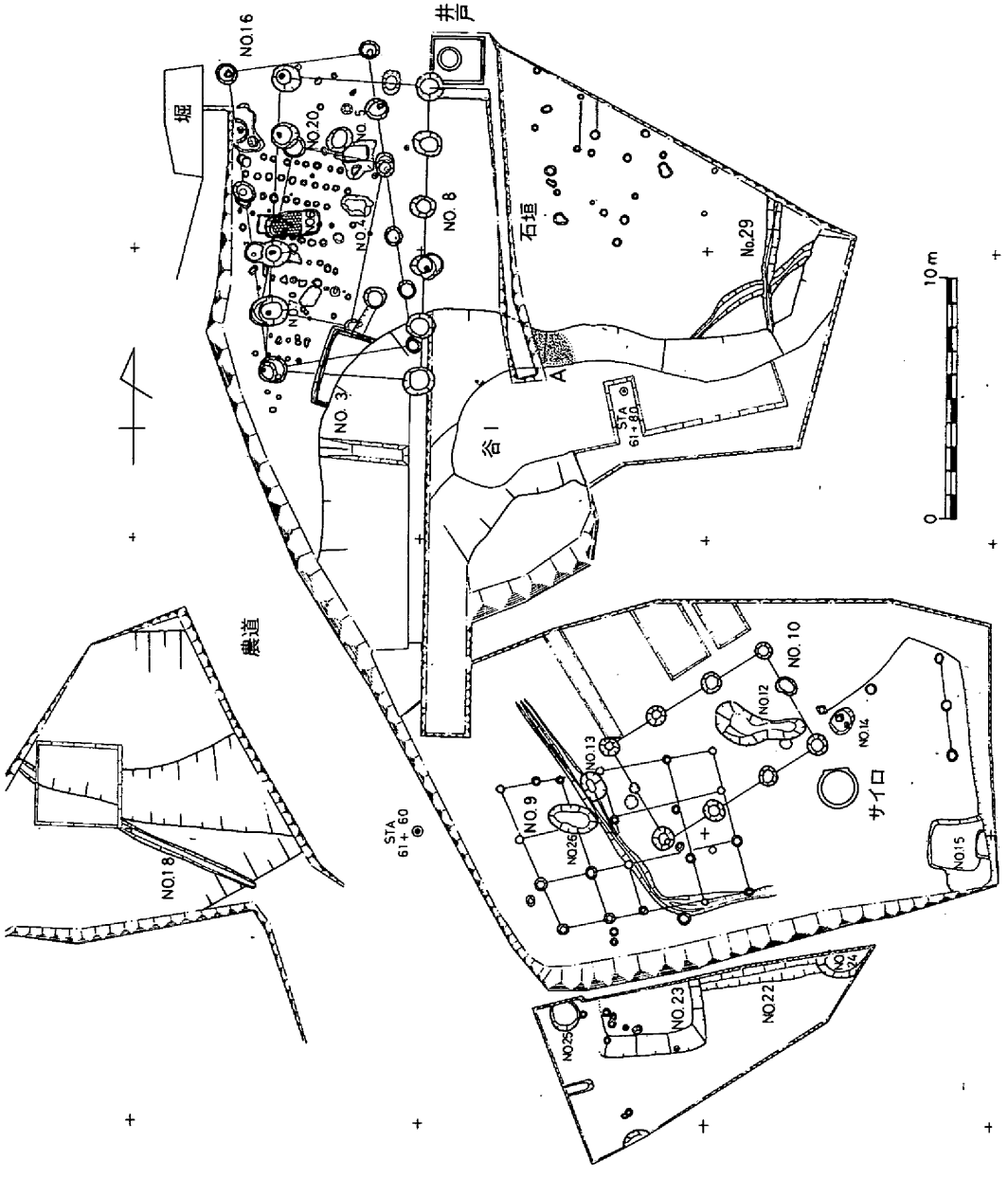
古墳時代――横穴式石室，土器：壷（須恵器・土師器各1点），坏身（須恵器1点），金属器：金環・銀環（各1点），柱穴より坏身片（須恵器）

平安以後――土器：大甕片（須恵器），土釜（土師質土器）・擂鉢片，鉄滓，鉄鍋片

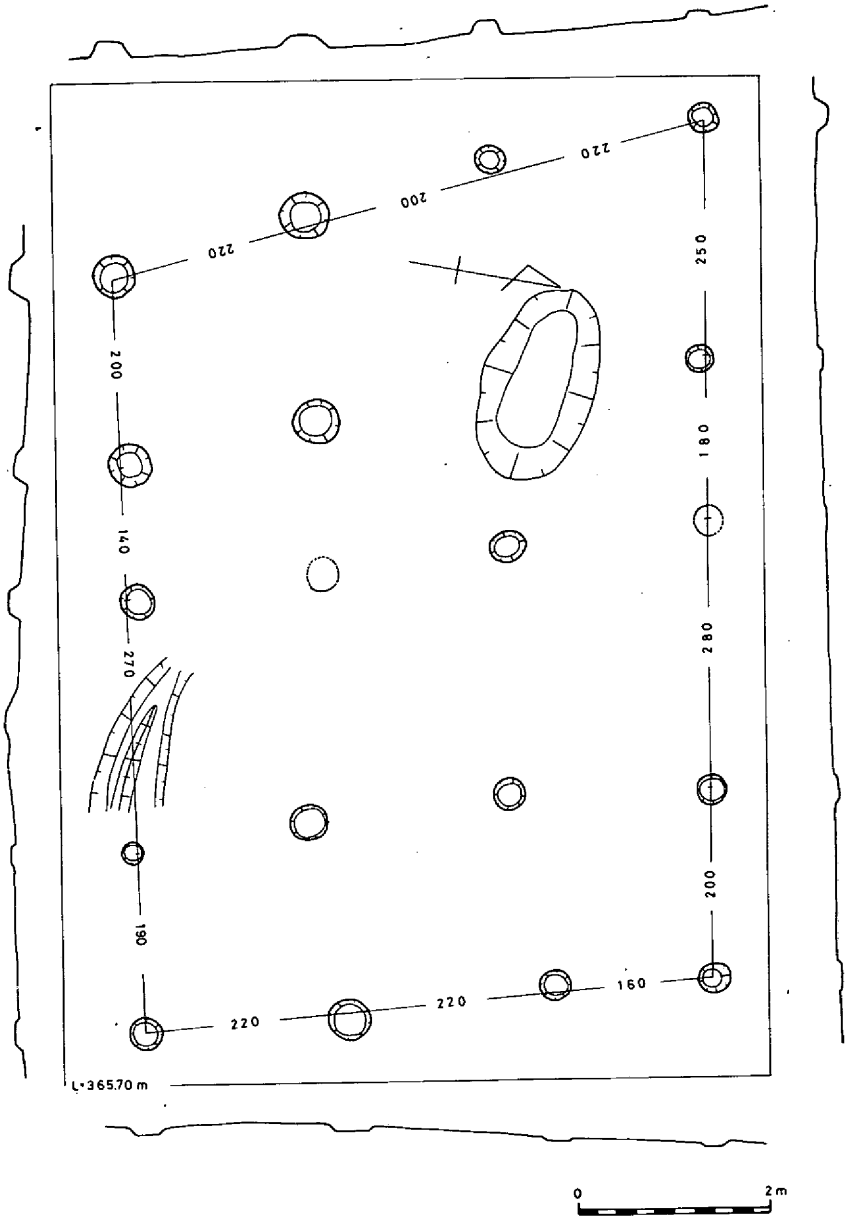
近世――近世墓，小柄・甕片　　以上

No. 9 建物，No.10建物の関係

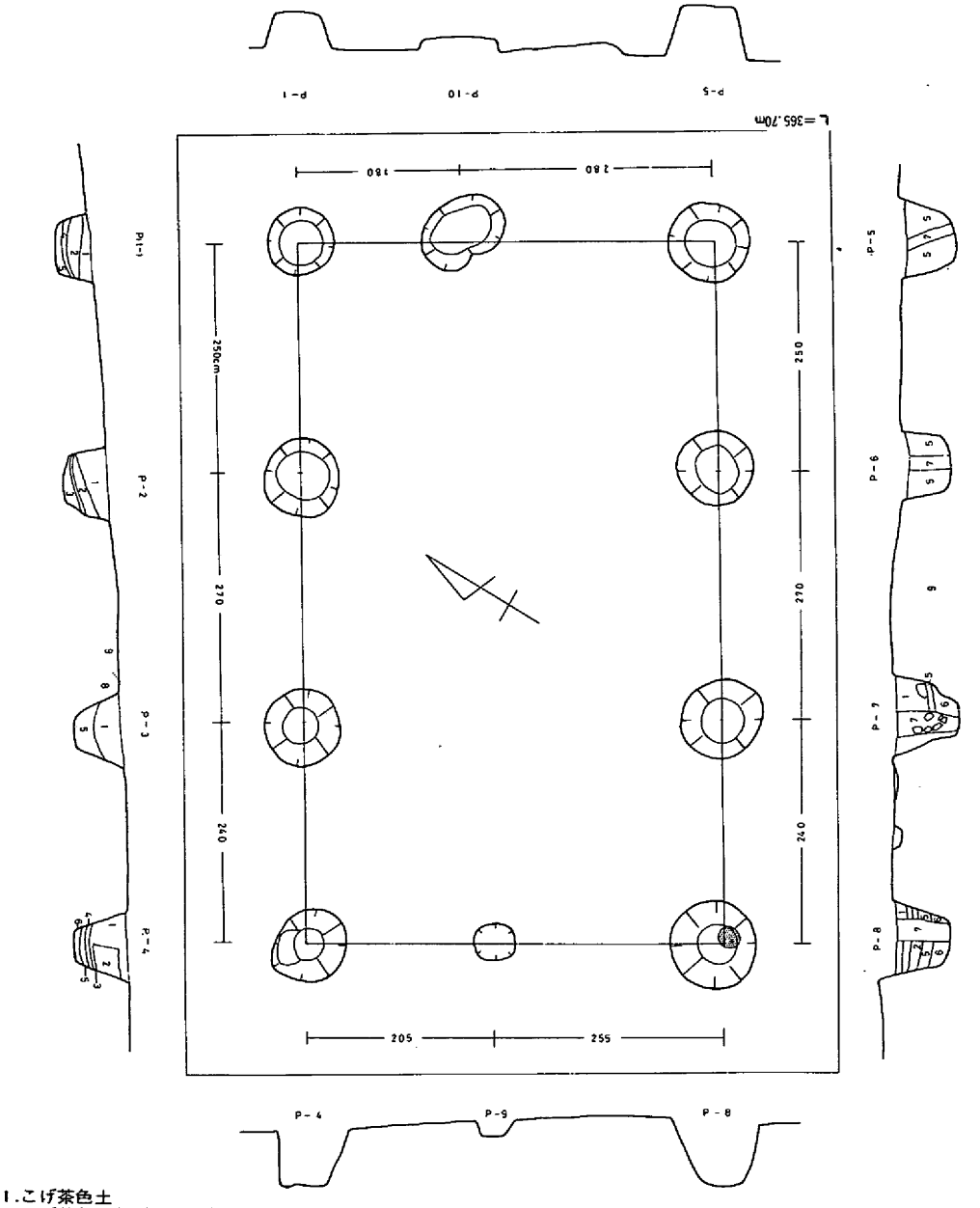
4 B南区は，西側台地より東側の4 C区谷に向うなだらかな斜面を南西側自然地形を残してカットし，南北12m×東西18m（216m²）の平坦面を造り出している。これが第1回目の造成であり，No.10建物を造るためのものであろう。このことはNo. 10 建物の南西部に梁間と平行して走る溝が，「L字



第3図　4区遺構配置図（S＝$\frac{1}{300}$）



第4図　4B南区No.9建物（S＝$\frac{1}{80}$）



1.こげ茶色土
2.こげ茶色土(黄色地山ブロック混入)
3.黒色土
4.淡黄褐色土
5.黒色土
6.粘性黄褐色土
7.淡黒色土
8.黄褐色土(地山)
9.黒ボク

第5図　4B南区No.10建物（S＝$\frac{1}{80}$）

0　2m

形」に建物をとり囲み，桁行にそっても走ること等から推定することができる。

第２回目の造成は，第１回目よりさらに拡張が行なわれ，南北 14m×東西 22m（308㎡）の平坦面を造り出している。やはり，No.10建物と造成パターンが類似しており，No. 9 建物を「L字形」にとり囲む段が存在する。第１・２造成期間の差は不明であるが，２棟とも黒ボク堆積土を切ってつくられている。また，平坦部拡張区跡によりNo.10建物以後にNo. 9 建物がつくられたことがわかる。柱穴内埋土，柱穴形態等からも その新旧をうかがうことができる。No. 20・16・11・８等の建物の柱穴掘方，柱間寸法，埋土状態等とは異なり，それらより新しい要素をもつものと考えておきたい。

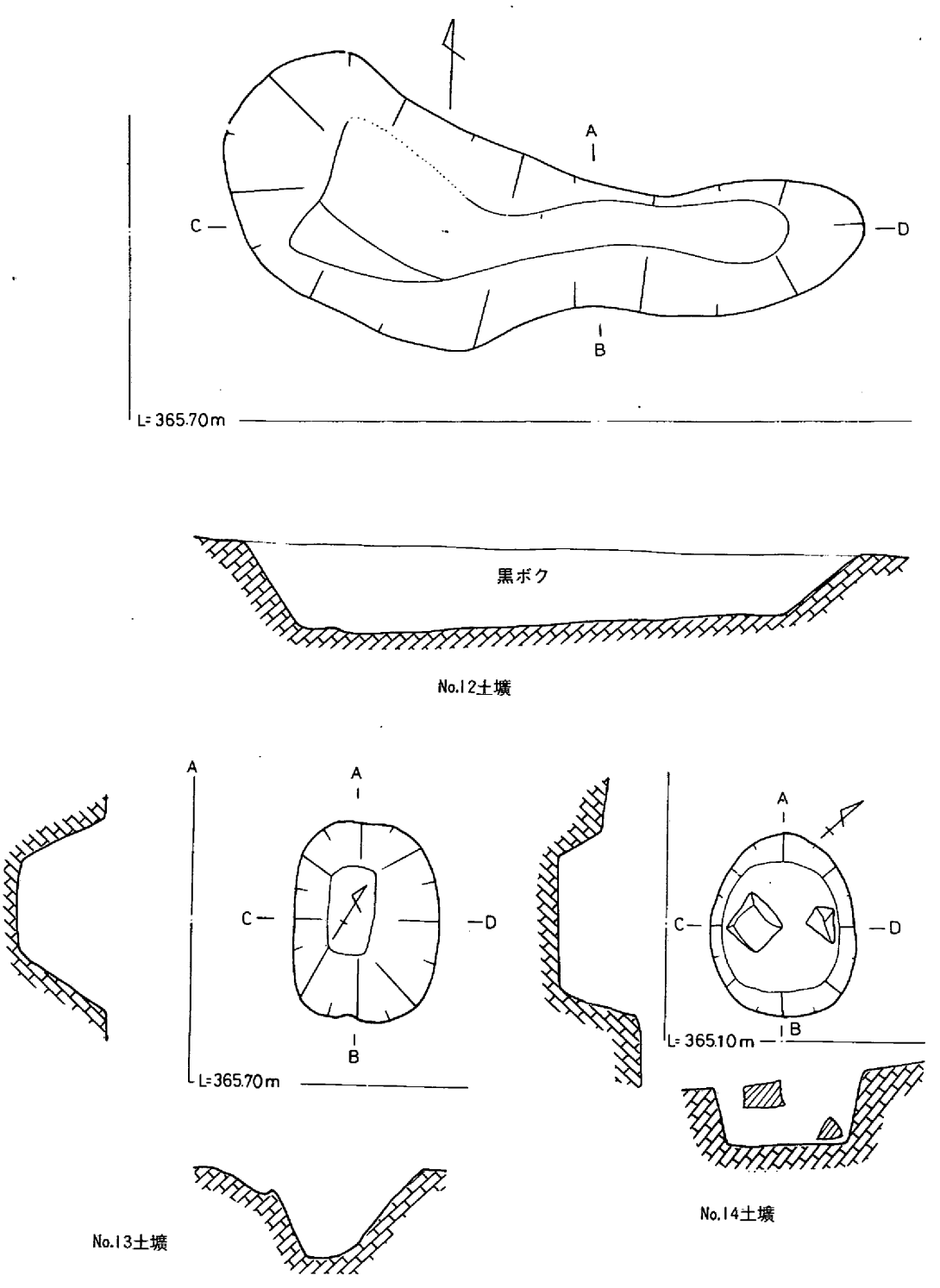
No. 9 建物（第４図，図版４－１）

ほぼ東西に主軸をもつ４間×３間の「べた柱」の建物である。南北の桁行が1.1mも異なり，北東隅にむかって張出した不整形な平面になる。このプランは，第１回目の整地面を踏習して，南に 1.2m・西に６m拡張された２回目の造成整地面プランと一致するものである。桁行 8.0～9.1m・梁間 6.0～6.4mを測り，柱間寸法は 1.5～2.6m とひらきがあり統一したものは計測しえない。柱穴掘り方は円形プランを呈し，非常に浅くて５～10cmのものが多く，深いもので約23cmを測る程度のものである。確認柱穴総数17を数えるが，どの柱穴内よりも遺物は検出されておらず，掘り方の埋土が耕作土に近いものということのみである。柱痕跡を確認できるものは皆無であった。

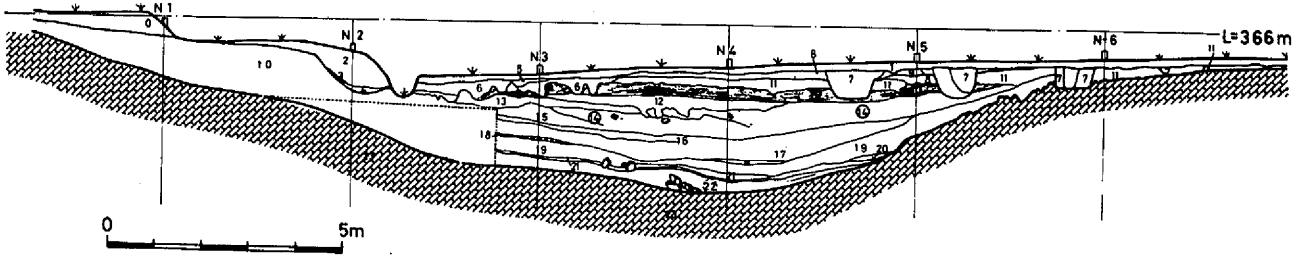
No.10建物（第５図，図版４－２）

４Ｂ南区のほぼ中央に位置し，主軸方位 N－58.5°－E を持つ３間×２間の建物である。長軸・短軸をよくまとめ，整然とした長方形を呈し面積約35㎡を測る。南側柱穴掘り方は黄褐色地山面をベースにしているが，北側の４Ｃ区谷に近い肩口では黒ボク堆積土上面より切り込んでいる。Pit１・２・３等がそれである。両桁行 7.6m，両梁間 4.6m と同数値を示しており，桁方向柱間寸法も北東より 2.5m，2.7m，2.4m と対応させている。梁方向柱間寸法は，東柱両端が若干異る。掘り方は円形プランを呈し，上端径80～85cmと平均しており，下端径は40～55cmと若干ばらつきがみられるが，全体として尻すぼみの傾向を示している。深さは80cmのものが最も深く，柱穴底は東柱を除き海抜約364.4m と同レベルとなっている。柱根は pit５・６・７・８の南側柱穴列に見られ，北側にはみられなかった。掘り方内には淡黒色土が掘り方の底より上面まで柱状に存在し，pit７・８では その中に地山小砂礫がつめられている。pit ８の観察では まず柱を設置し，下位より粘性黄褐色土で 根がためを行い，版築状に５層の埋土で柱を安定させたものと考えられる。埋土各層中には地山の土のブロックを含んでいる。柱根から柱を推定すると，直径25cmのものが最大であり，直径12cmのものが最小である。北側柱穴列の pit１～４等では，柱穴内に「U字状」の埋土土層断面がみられた。基本的には南側柱穴埋土と同様の層序であるが，柱根は確認することができなかった。

（高畑知功）



第6図　4B南区土壙（S＝$\frac{1}{40}$）



0.薄茶色土
1.灰茶褐色土
2.淡茶色土
3.砂
4.砂利(地山)
5.灰黒褐色土
6.灰褐色土
7.淡黄褐色土(柱穴埋土)
8.灰黄茶褐色土
9.黄褐色土
10.黒褐色土
11.黒茶褐色土
12.暗茶褐色土
13.灰黒褐色土
14.灰黒褐色土
15.暗黒褐色土
16.地山土混入土
17.淡黒色土
18.黄褐色土(地山土包含)
19.淡黒色土
20.黒ボク(最も黒い)
21.赤褐色土(砂質)
22.褐色土(砂質)

第7図　4C区谷1土層断面（S＝$\frac{1}{80}$）

4C区谷1（第7図，図版7—3.4）

ＳＴＡ61＋60のセンター杭をトラバース原点にし，そこより4m方眼を4Ａ区，4Ｂ南区，4Ｂ区4Ｃ区に組み，北方に延ばした基準線にそって4㎡グリッドの掘開を行う。地表より約1m下げた層（14層）より人頭大の角礫が検出された。ここまでの土層は比較的平坦な面をもってあらわれたが，下位にゆくにしたがって自然堆積の状態を呈し始め，最も深いところでは2.8mを測る谷底を検出した。谷底各所には人頭大および1×1m位の石が転落した状態で検出した。グリッドNo.4ポイントより東へ約5mが最も深く，そこが土壙状になって水溜めの役目を果したような所がある。

全面発掘調査の結果，3区北側より東に開口する谷の全貌があらわれ，4Ａ区・4Ｃ区（現在の小川東側）を通過し，神代川氾濫原に向って注ぎ込まれていたことが判明した。この谷は，4Ａ区において東流し，4Ａ区・4Ｂ区間において北に流れをかえ，さらに東流してもとの流れになっている。この谷幅の最も広いところで23m・深さ2.7mを測り，少くとも弥生時代前半期には谷底を露出していたものと考える。

＜遺物出土状態＞

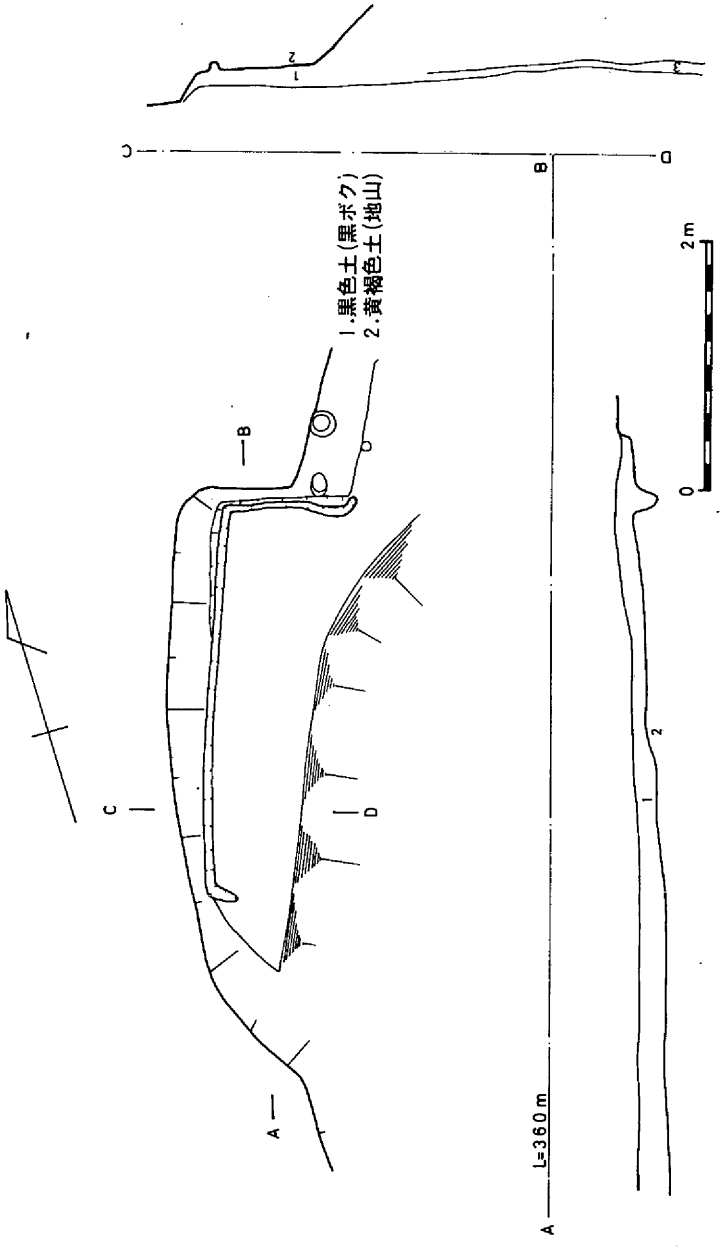
この遺跡での出土遺物の大半が4Ｃ区谷1内で出土したものである。地表より谷底までの堆積土は主として黒ボク土（火山性土壌）を中心とするものであり，石の混入の多い14層から22層の間に弥生時代中期前半の土器片，石器（磨製石庖丁・スクレーパー）等が包含されていた（整理箱6箱）。なかでも，自然堆積状態を呈し始める14・15層に集中しており，下位にゆくしたがい減少の傾向をたどるが，22層まで確実に含まれていた。また先土器時代の石器や弥生時代後期の土器片もこれらに混在して出土したものである。

縄文式土器は，4Ｂ区北側谷肩口より4Ｃ区谷底に傾斜する部分（第3図A）にのみ集中して出土しており，小片を含めて125片を数える。これはいわゆる縄文時代晩期黒土ＢⅡ式（註3）に編年されるものの一括である。この縄文・弥生時代の遺物が層位的に逆転していることについては，充分に検討できないが，地層累積の方則に匹敵するものであろうと考えられる。ほかに黒ボク土上面においては，須恵器・土師器の小片が出土している。

＜遺構検出状態＞

北より南に向ってゆるやかに傾斜する4Ｃ区表土層を，約10～15cm除去した段階でNo.3建物の掘り方上面プランを検出した。この上面プランを検出した層位は黒ボク土を主体にする2層に相当し，前記した14層から上位に約90cm堆積した位置にあたるわけである。

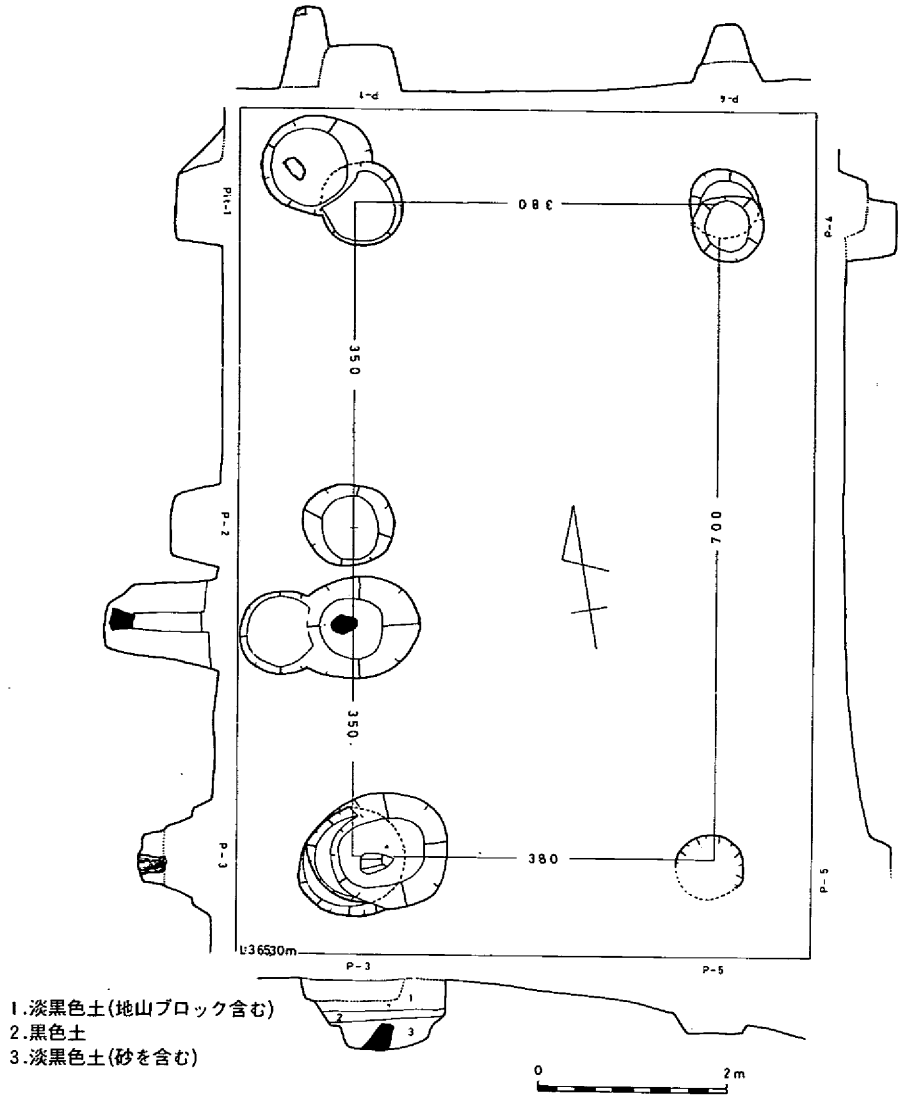
遺構の検出面はこの層のみにみられ，2層より下位においては検出することができなかった。ここでは，谷底より約2.7mの堆積が続いた後にNo.20・16・8建物が黒ボク土を生活面として造られている。すなわち，No.20・16・8建物等の時期に二野遺跡の谷は埋まり，整地されることにより，4Ｂ南区より5Ｂ区北端にいたる広大な平坦面全体が，一時期の生活面として利用されることになる。ほかに黄褐色地山面と黒ボク土面を半々に利用していると考えられるNo.3住居址については，黒ボク土の断面を削り出して精査したにもかかわらず，建物と黒ボク土との相互関係については明らかになしえなかった。（高畑）



第8図　4B区No.3住居址（S＝$\frac{1}{60}$）

No. 3 住居跡（第8図）

黄褐色地山面に掘り込んだ部分のみを残す方形住居址形態をもつものである。西辺約3.2*m* が壁体溝を伴って残存し，南北辺は約1.0*m*延長した部分で谷1の黒ボク堆積土により不明瞭となり，谷1との前後関係がつかめない。残存の床面では柱穴は検出することができなかった。



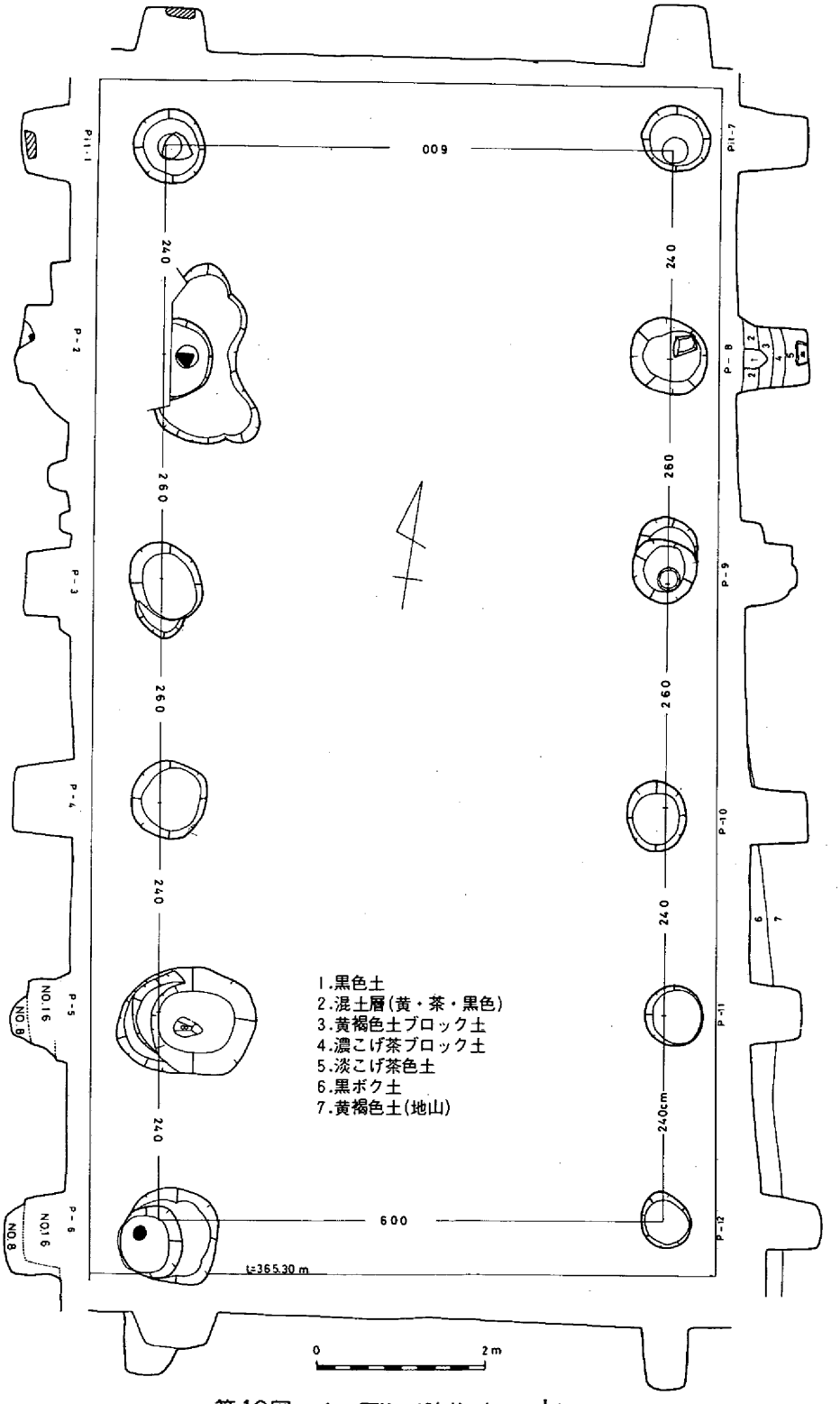
第9図　4B区No.20建物（S＝$\frac{1}{80}$）

No. 20・16・8建物の関係

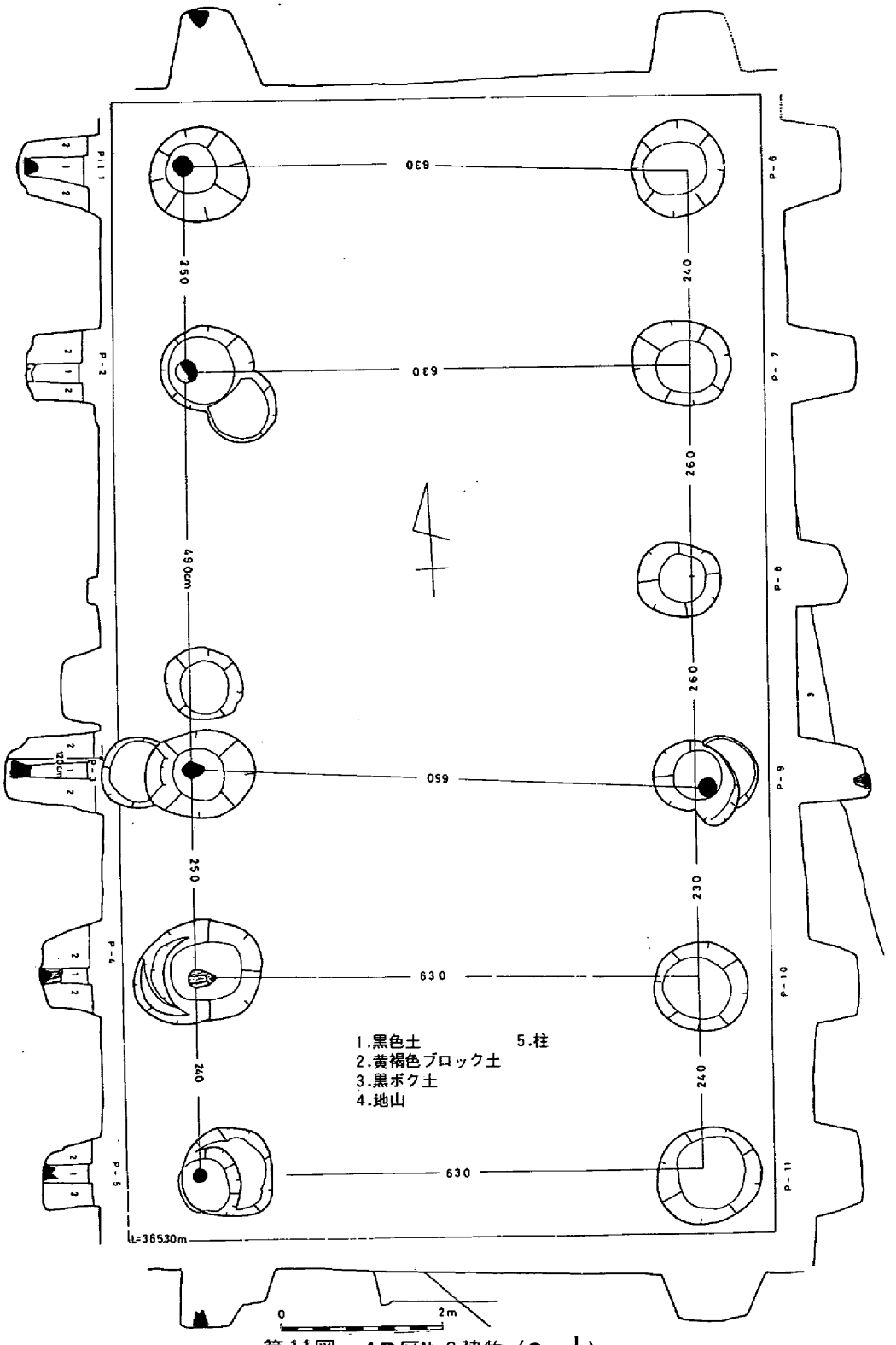
4B区西側平坦スペースを共有するものであり，No. 20，No.16，No. 8と建てかえられていった可能性がうかがえる。表土剝ぎ時点で最初に検出しえたものが，No. 8建物掘り方上面プランであり，No. 8建物 pit 5の3穴からなる重複関係により3棟の建物が存在することを確認した。

No. 20建物（第9図，図版5－2）

3棟のうち最も規模が小さい。主軸方位N－11°60′－Eを持つ2間×1間の建物である。東西桁行



第10図　4B区No.16建物（S＝$\frac{1}{80}$）



第11図　4B区No.8 建物（S＝$\frac{1}{80}$）

7 m・南北梁間3.8mを測り，面積26.6㎡を有する。柱穴掘り方プランは円形を呈し，深さは他の2棟に比較し50cmという平均的な深さをもっている。どの柱穴内にも柱根を確認することはできなかった。なお，No. 6 土壙により切られている pit 2 埋土中より，No. 21横穴式石室出土遺物より若干古いと考えられる須恵器杯身片が1点出土している。時期を決定するにはいたらないが，古墳時代後期以後のものとしての示標になるものである。

No. 16建物（第10図，図版5－2）

No. 8 建物 pit 5 を共通するかのように造られており，主軸方位N－7°50′－Wを持つ5間×1間の建物である。東西桁行12.30m・南北梁間6.0mと均整のとれた長方形プランを呈し，面積73.8㎡を測る。柱間寸法は30cmを基調としている感が強い。柱穴掘り方は円形プランを呈し，直径1m，深さ60～70cmと均一しており，ほぼ垂直に掘り込まれたものが多い。pit 1，pit 8 は柱穴底に柱をのせる平坦面をもつ台石を使用しており，埋土は版築状に叩き締めが行なわれている。pit 2，pit 7 では柱根が残存しており，pit 2 のものが「アラカシ」，pit 7 のものが「アベマキ」という木質鑑定がでている。pit 10，11，12 は黒ボク堆積土上面より掘り込まれたものである。柱穴掘り方内からの遺物は検出されなかった。

No. 8 建物（第11図，図版5－1・6）

本遺跡中最大の規模を有し，主軸方位 N－3°30′－E を持つ5間×1間の建物である。東西桁行12.3m・南北梁間6.3mと均整のとれた長方プランを呈し，面積77.49㎡を有する。柱間寸法は30cmを基調としている。柱穴掘り方は円形プランを呈し，直径1.2m・深さ約1mを測りほぼ垂直に掘り込まれている。pit 2 とpit 3 の間には東桁行 pit 8 に対応する柱穴がなく，pit 3 が他の穴より深く掘りこまれている。No. 16 建物のような台石は存在せず，柱根が直接掘り方底より6本出土しており，柱根底は非常に硬度なものである。木質は，pit 1 の「ネムノキ」，pit 2「アラカシ」を除けば，pit 3・4・5・9は「アベマキ」という鑑定結果が出ている（註4）。

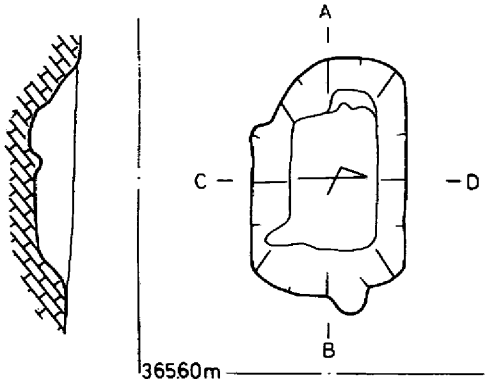
これらの柱根は円形にて，三角形の断面を呈しており，柱の腐食状態を示唆している。基底部直径は6本とも約20cmを測り，同径のものを使用したものと思われる。No. 8 建物は，3棟中にあって時期的の新しいものであり，No. 19 柱穴列と同方向を呈し，同一時期に存在したものと考える。前記した木材は宮尾遺跡では主要建物には使用されておらず，宮尾遺跡A溝区画の柵に使用されているものが二野遺跡では主要建物に使用されている（註5）。（高畑）

4 B南区出土土壙

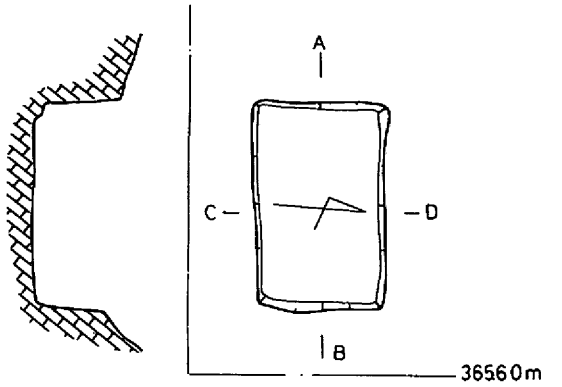
この地区より，No. 12・13・14・22・23・25・26 の計8基の土壙が検出されている。ほとんどの土壙から遺物は検出されておらず，時期・性格について不明な点が多い。

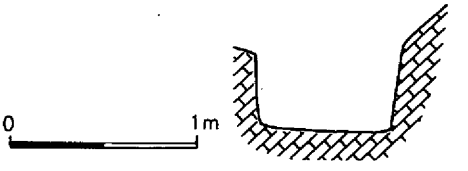
No. 12土壙（第6図）

長軸方向4.0m・短軸方向0.8～1.3m と差があり，深さは0.5～0.6mとほぼ均一したものである。しかし調査後の写真等から，土壙にはかわりがないが，この辺が一巡してドーナツ状の土壙になるものと考えられた。これは，いわゆる風倒木痕跡と今日考えられているもので，環状に黒ボク土がまわ

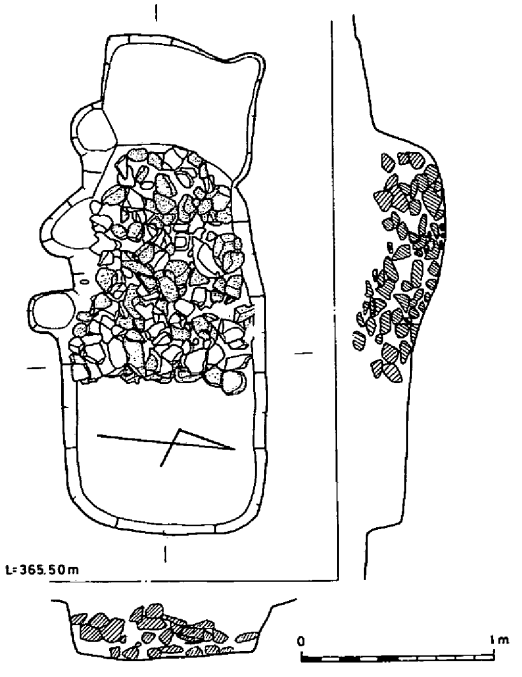


No.4 土壙

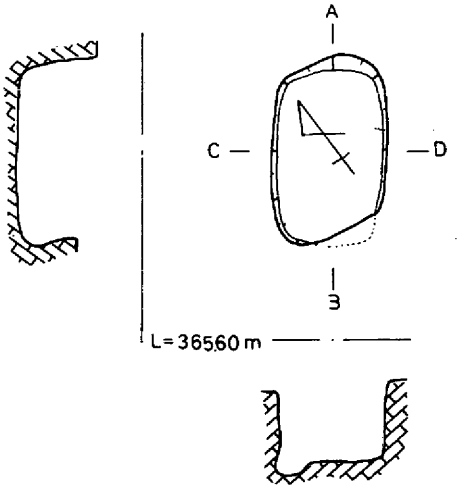




No.5 土壙



No.6 土壙



No.7 土壙

第12図　4B区土壙（S＝$\frac{1}{40}$）

り，その中央部分の黄褐色地山土が若干盛り上がる形状を呈するものである。哲西町内の各遺跡で検出されている。掘開部分の黒ボク堆積土内よりサヌカイト小片が検出されている。

No. 13土壙（第6図）

No.10建物と併設する溝を切って作られている。長軸方向 N—30°—W を持ち長軸 1.2m・短軸 0.9m・深さ 0.5m を測り，隅丸方形を呈する土壙である。土壙内堆積土は淡こげ茶色で耕作土より硬質である。

No. 14土壙（第6図）

No.10建物東側に主軸方位N—47°—Wを持ち，長軸1.1m・短軸0.9m・深さ 0.4m の楕円形を呈する土壙である。土壙内に 0.2×0.15m 程度の角礫が2個浮いた状態で検出している。埋土はカスカスの暗黄褐色土がつまっていた。

No. 22段状遺構

長さ5m・幅1mの法面の一部が検出されている。No. 9 建物に併設された可能性がある。

No. 23土壙

長軸4.5m・短軸3m＋αを測り，若干北側に傾斜する土壙である。耕作土に近い新しい土がつまっていた。

No. 24土壙

完掘を行っていないが，楕円形を呈すると考えられ深さ約1mを測る。埋土内は黄褐色地山ブロック土と黒ボク土が充満した状態であった。

No. 25土壙

直径約1mを測る円形土壙である。形状は，No. 14 土壙に近いものである。

4B区出土土壙

この地区では，No. 4・5・6・7の計4基の土壙が検出されている。No. 4 土壙内には近世陶磁器を多くもっていた。時期的には不明なものが多いが，全般に新しいものが多いようである。

No. 4 土壙（第12図）

長軸1.25m・短軸0.8m・深さ0.25mを測る土壙である。No. 5 土壙に類似している。

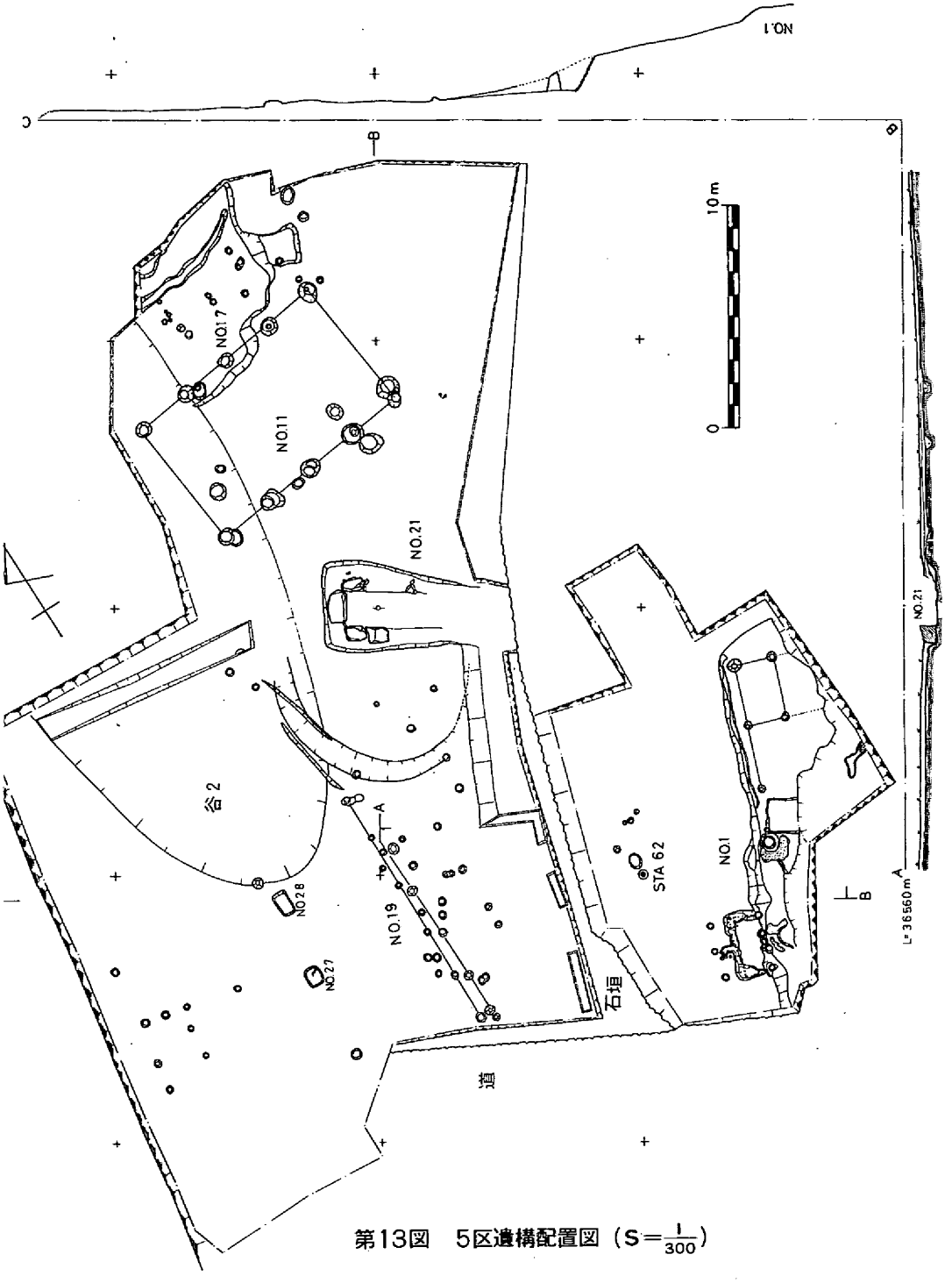
No. 6 土壙（第12図）

長軸 2.0m・短軸 1.1m・深さ 0.35m を測る隅丸長方形を呈する土壙である。土壙中央部に 1.3×0.9mの幅で拳大の河原石や角礫が充満していた。この土壙はNo.20建物を切って作られており，充満した石をとりのぞいた後に柱穴があらわれた。（高畑）

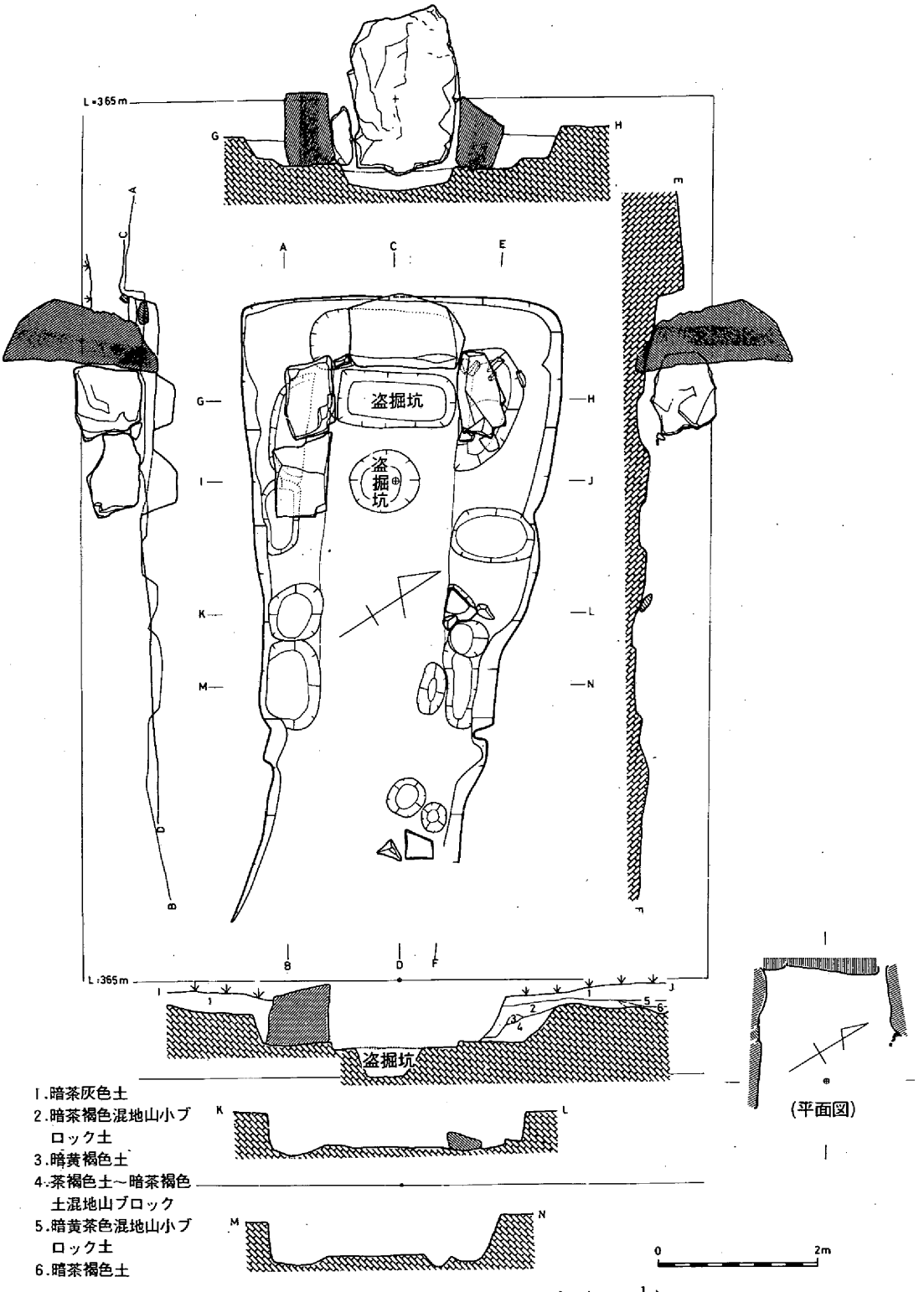
No. 21横穴式石室墳（第14図，図版7・8）

南より北方にのびる丘陵尾根筋に直交し，開口方向N—54°—Wをもつ横穴式石室である。

この古墳は分布調査の際に「半壊の横穴式石室」として調査対象にあげられていたものである。われわれが現地をみた時点では，奥壁1・南側壁2・北側壁1の計4石を残すのみであり，後世に幾度か行なわれた盗掘(破壊)の痕跡をとどめていた。当然大形建物期の破壊を受けたことも考えられる。石室内は凸凹に掘り込まれ，奥壁部分で2ケ所の穴があり，石材も投げこまれていた。また石室外に



第13図　5区遺構配置図（S＝$\frac{1}{300}$）



第14図　5B区No.21横穴式石室（S＝$\frac{1}{80}$）

は，その際に投げ出した土や石材が石室の左右に約60㎝ほど堆積していた。羨道部南下段の５Ｃ区方向にまで石室の巨大な石材が転がり落ちており，破壊の状況は著しいものであった。ゆえにこの古墳の盛土・石材は残存せず，調査は現存部の精査に及んだ。

＜石室＞

根石のみ残存する奥壁１・側壁３石は，石材の広口面を利用して掘り方内に配置されている。石材は河原石を利用しておらず，板状の節理を有する角礫が使われている。平面プランにおいては，奥壁幅1.5ｍ・南側壁長1.75ｍ・北側壁長１ｍを計測できるのみであり，立面では奥壁の高さ2.1ｍ・南側壁の高さ0.95ｍ・北側壁の高さ0.83ｍを測る。奥壁部南側には，奥壁の幅を確保すると考えられる25×73㎝の柱状の長い石を立てて使用している。奥壁部より 2.8ｍ の所に平面三角形を呈する石が原位置を保っており，根石のツメ石として利用され，奥壁の根固めには多くの栗石を使用している。石室の復元計測は不可能に近く，ここでは「掘り方」を通して推定せざるをえない。

＜掘り方＞

いわゆる石室築造に優先するものであり当初の計画性を示すものである。まず無袖の平面プランで地山面を深さ約30㎝・奥壁最大幅4.1ｍ・入口部分幅2.5ｍに掘開を行い，入口に向うにしたがって若干すぼめている。南側の掘り方壁は一応直線的に掘られているが，北側壁は凸凹が著しく根石配置の際に石にあわせて手が加えられた痕跡をとどめる。したがって片袖か無袖の石室になるかは不明瞭な点が多い。さらに掘り方内に根石を設置するための個々の掘り方がみられ，南側においては５～６石の痕跡をとどめており，掘り方壁一杯に密着させて根石を配列したようである。東北側においても６～７石の痕跡をとどめているが，南側と比較すると根石と掘り方壁の間のスペースがやや広いようである。これは石材を積み重ねてゆく作業空間の可能性が考えられる。根石の配列は奥壁より入口方向に奥壁幅の３倍にあたる約4.5ｍまでは推定できるが，それより前方においては配石の可能性が薄い。石室平面プランは,奥壁より入口方向に1.5ｍまでほぼ同じ幅であり，長方形のプランを有するものと考えられる。なお石室前方部の施設については５Ｃ区によりカットされており不明である。

＜周溝＞

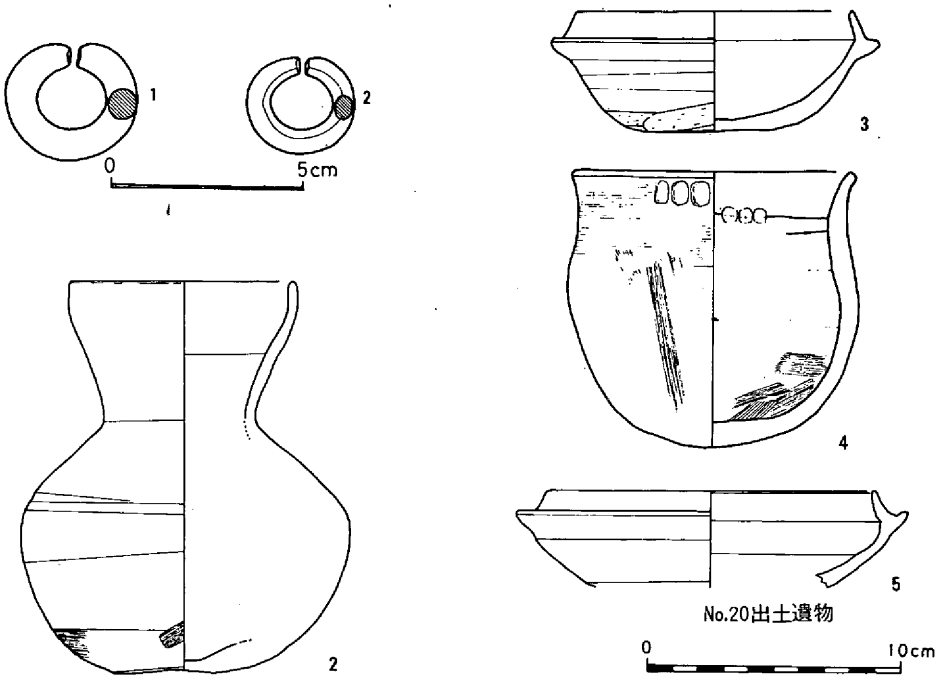
墳丘端を規定する周溝については，従来の撹乱・削平により黄褐色地山面まで影響を受けており，明確に検出することは不可能であった。石室自体が南より北に延びる尾根筋と直交しており，高い部分である石室南側に幅１ｍ・深さ約10㎝を測る溝が残存するのみであり，石室の西・北側には確認できなかった。溝は南側で掘り方より５ｍの距離をもち，西側では 1.8ｍ の距離をもつという正円の形態を呈するものではなく，山側部のみがあるいは，不整形な周溝が存在したものと思われる。

＜遺物出土状態＞

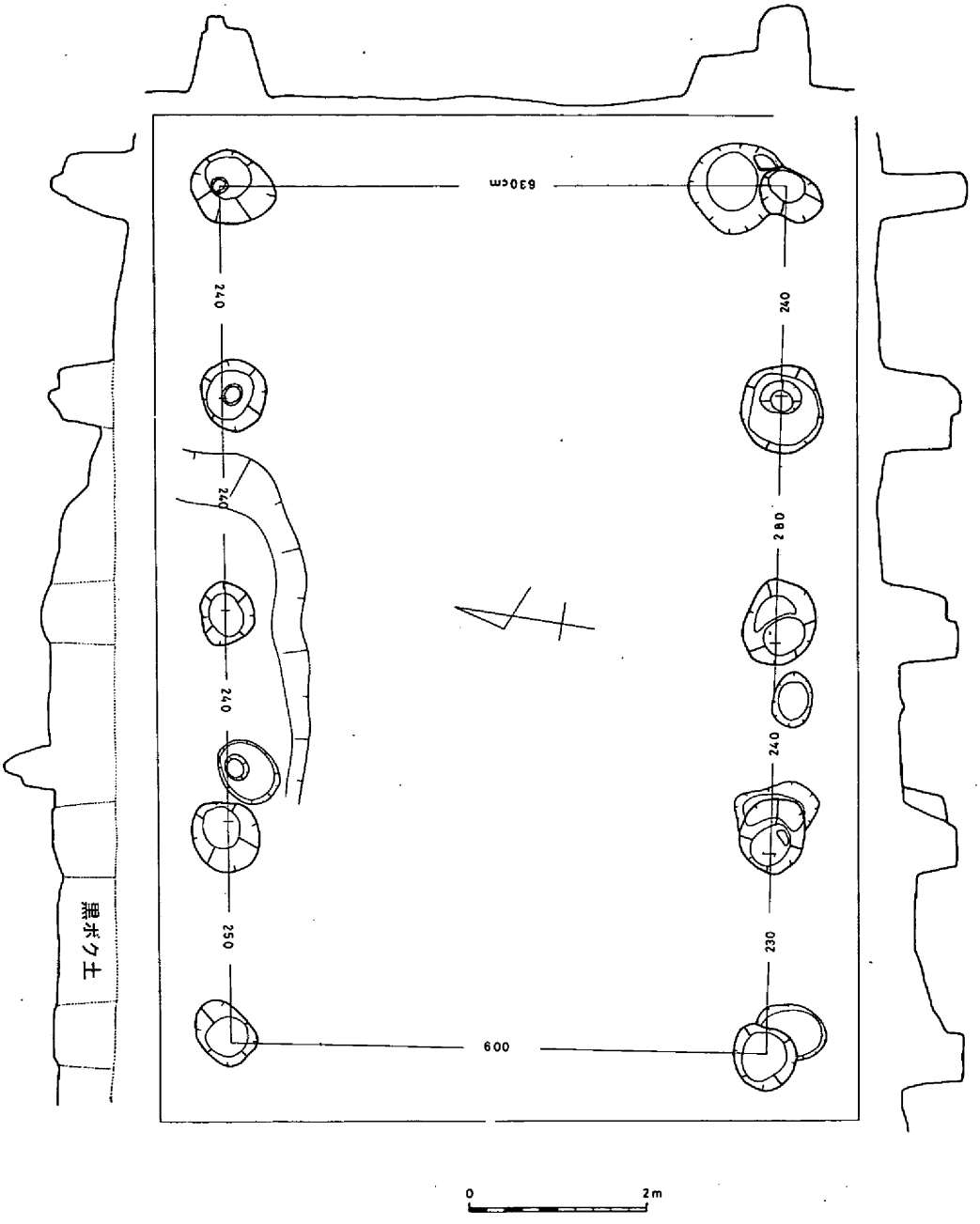
石室内遺物は，直口壺１点，土師器甕１点，金環・銀環各１点が撹乱土中より検出されたのみである。出土遺物は４点ともすべて石室の前方部において出土しており，石室内撹乱時に前の方にかき出されたものと考えられる。坏３は，この土地の旧地権者である酒木氏が石室内より直刀とともに掘り出し，哲西町教育委員会に寄贈されていたものである。

１は，直径3.46㎝・短径3.1㎝・厚さ0.85㎝・重さ26.35ｇを測る銀環である。２は，長径2.78㎝・

短径2.57㎝・厚さ0.61～0.77㎝・重さ17.5ｇを測り，金箔が全体に残る金環である。銀環と金環はセットとして使用可能な形状のものではなく，少くとも２名の被葬者が推定される。２は，口径9.2㎝・胴部最大径13.2㎝・器高15.4㎝を測り，暗灰色を呈する須恵器直口壺である。非常にバランスのとれたものである。３は，口径 11㎝・最大径 13.055㎝・器高 4.75㎝ を測り，暗灰色を呈する須恵器坏身である。釜の形態に類似している。0.5×0.3㎝の白色砂粒を多く含み，焼成は良好である。土器の回転方向は右回りであり内面底にナデが施され，外面底にはヘラ状工具により五角形状にナデが行なわれている。これは２にも類似点がみいだせる。４は，口径11.2㎝・器高10.8㎝を測り，暗赤褐色を呈する土師器甕である。口縁内外面は横ナデがみられ，下位の内外面は刷毛ナデや指頭ナデにより仕上げられている。（高畑）



第15図　5B区No.21横穴式石室出土遺物（１～４）（S＝$\frac{1}{3}$）



第16図　5B区No.11建物（S＝$\frac{1}{80}$）

No. 11建物（第16図，図版９－２）

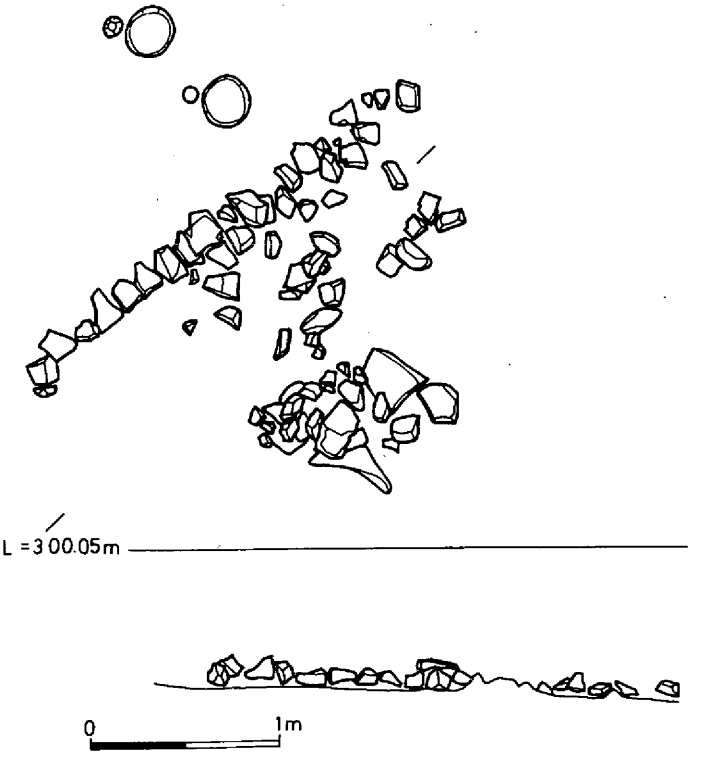
５Ｂ区北端部に主軸方位Ｎ—97°50′—Ｗをもつ４間×１間の建物である。北西の隅はNo.17土壙により削平をうけ，一部破壊されている。南北桁行10.9m・東西梁間6.0～6.3mと均整のとれた長方形プランを呈し面積60.54m^2を測る。柱間寸法は30cmを基調にしており８尺の柱間距離となる。

柱穴掘り方は円形プランを呈し，直径0.8m・深さ0.9～1.0mと均一しており，ほぼ垂直に掘り込まれたものが多い。全柱穴が重複の痕跡をとどめており，長期間使用され建てかえが行なわれたことをものがたっている。この現象は，No. 20・16・８建物等には確認できなかった。また，柱穴底部に一段さがる穴がみられるものがあり，これらの直径が平均して20cm前後のものが多い。これは，No. 16・８建物等に残存した柱根径に近い数値を示すものであり，柱の底部の接地部分であろう。この建物は，４Ｂ区に存在するNo. 16建物と併設されており「Ｌ字区画」を形成するものである。大規模な建設計画により施行されたものと考えられる。

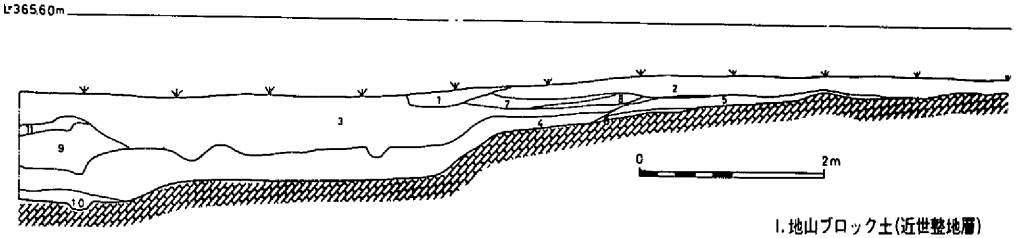
すぐ南に３mの距離をおいて横穴式石室が存在するが，No. 11建物を築造する時点には少くとも墳丘や石室等の排除が行なわれたと思われるが……あるいは，最小の破壊にとどめ何かに使用された可能性も考えることができる。しかし，No.11建物の使用期において，今日残存したところのNo.21横穴式石室の奥壁，側壁等を残す状態は，最小限であれその姿で存在していたことになる。この両者の関係は，この「Ｌ字区画」を施行した古代人の意識にまで遡らなくてはいけない。

No. ２遺構（第17図）

５Ｂ区北部に存在する配石状の遺構である。No. 17土壙の底より約40cm上位の黒ボク堆積土上面（第18図）にほぼ南北方向にのび，長さ2.5m・幅1.0mを測る。配石は西側の石列が2.5mまで，東側は崩れて0.5mまでしか確認できない。西側石列は拳大の角礫約20個からなり，東小口面を合わせて直線になっている。配石の底のレベルはNo.11建物掘り方上面に一致するものである。この遺構に伴う遺物は何ら検出することができなかった。（高畑）

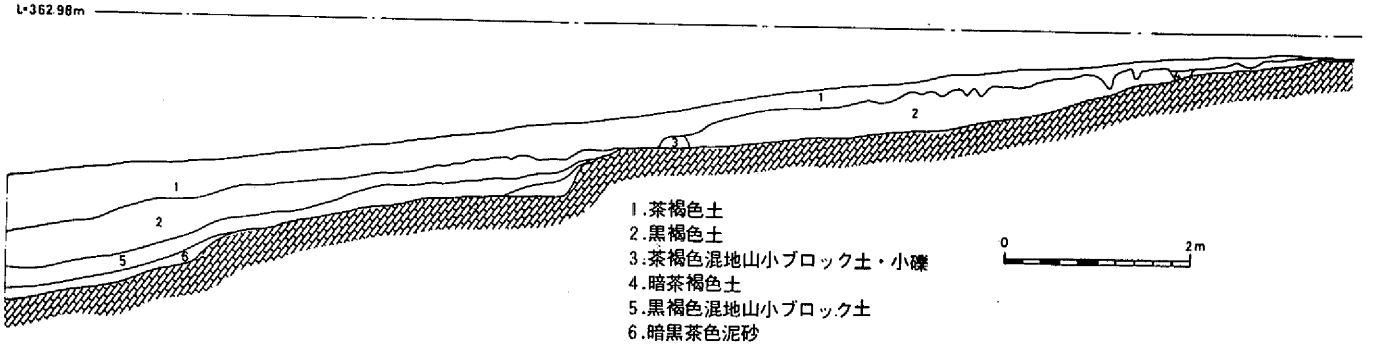


第17図　５Ｂ区No.2遺構（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）



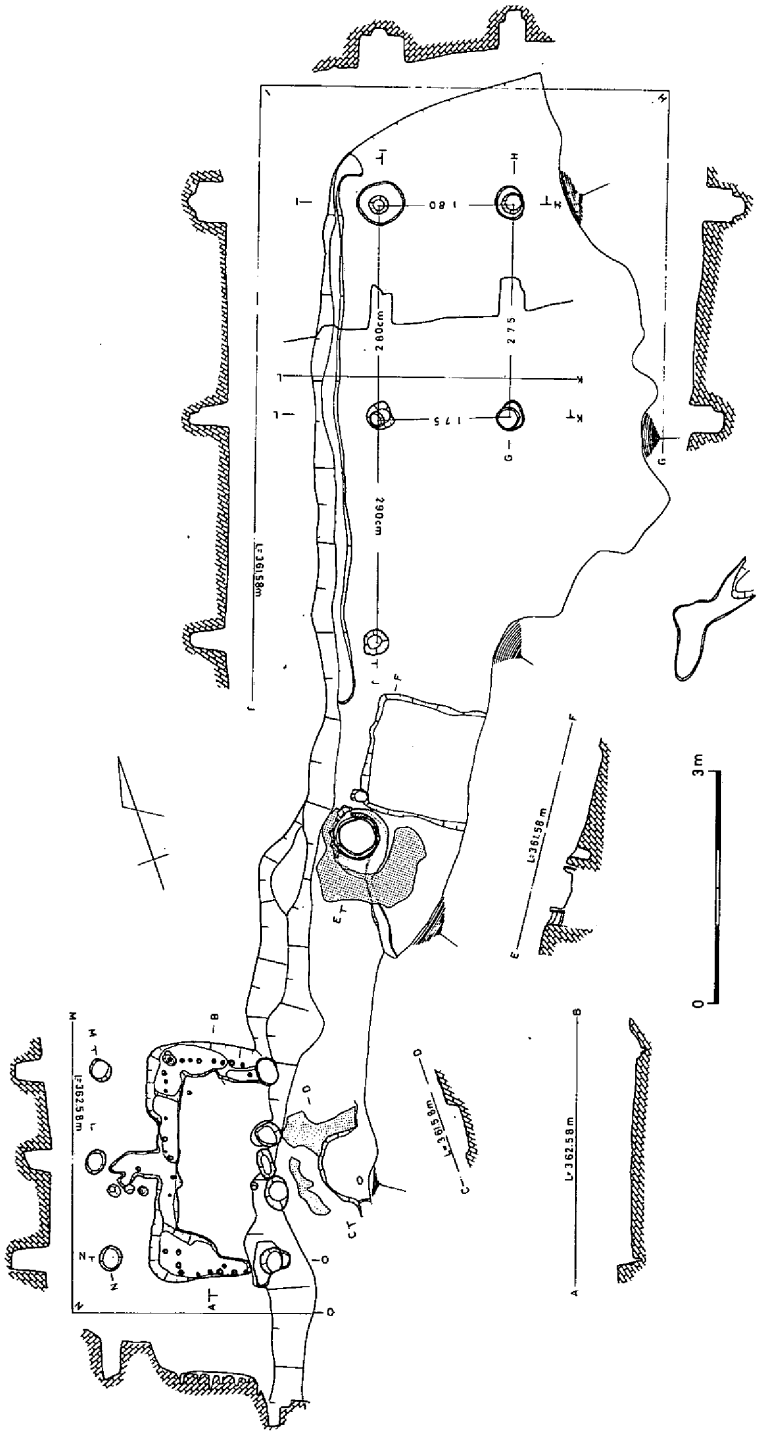
1. 地山ブロック土(近世整地層)
2. 淡茶灰色土(近世整地層～現在の耕作面・ナイロン製品を含む)
3. 茶褐色土
4. 暗茶褐色砂質土(地山小ブロック)
5. 茶褐色土混地山小ブロック土
6. 暗茶灰色土(一部地山小ブロック)
7. 暗茶褐色土
8. 暗茶褐色土層混地山小ブロック土
9. 暗灰褐色土
10. 黒褐色土(弥生中期末～後期を含む)
11. 灰褐色地山小ブロック混入土

第18図　5B区土層断面（S＝$\frac{1}{80}$）

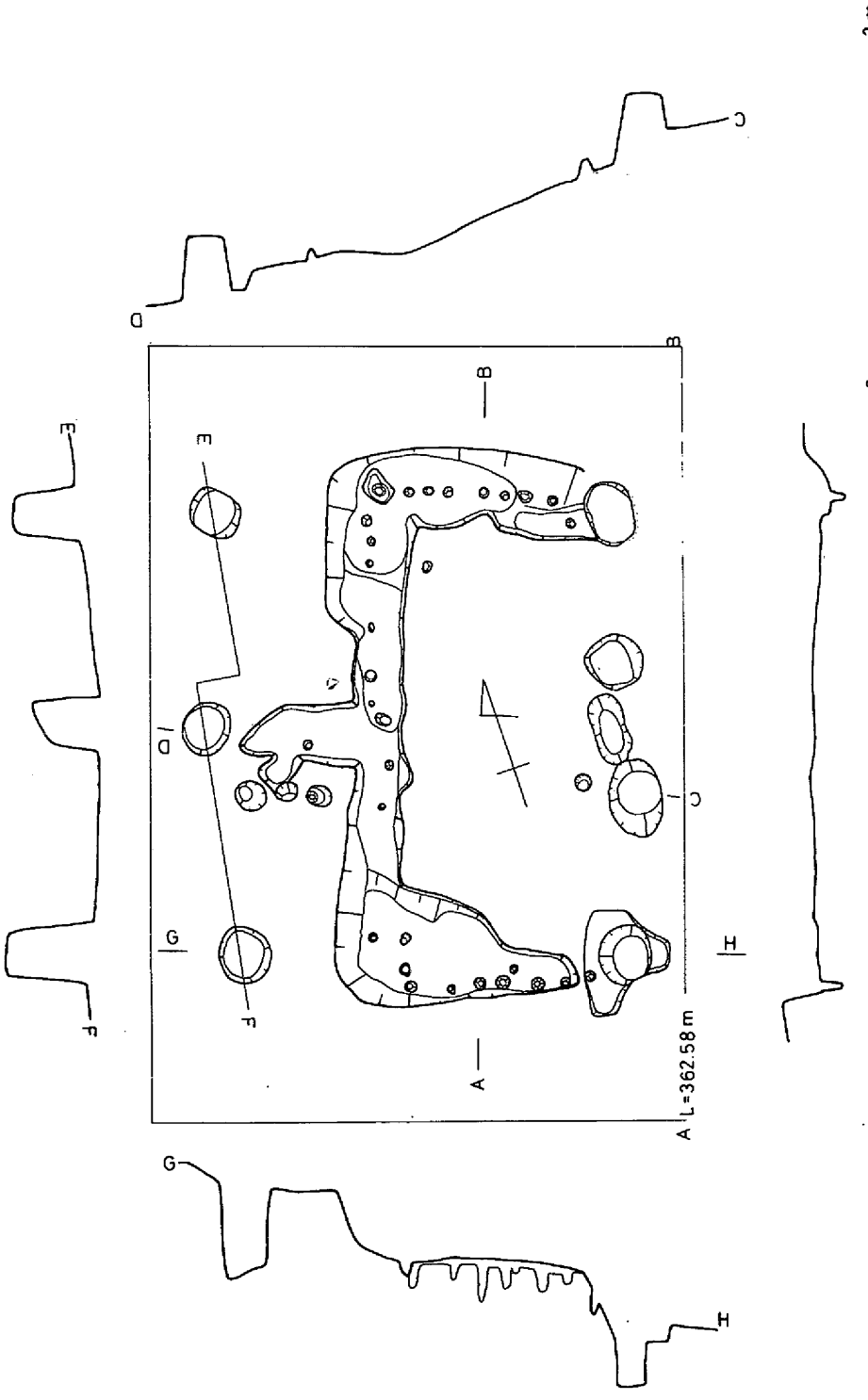


1. 茶褐色土
2. 黒褐色土
3. 茶褐色混地山小ブロック土・小礫
4. 暗茶褐色土
5. 黒褐色混地山小ブロック土
6. 暗黒茶色泥砂

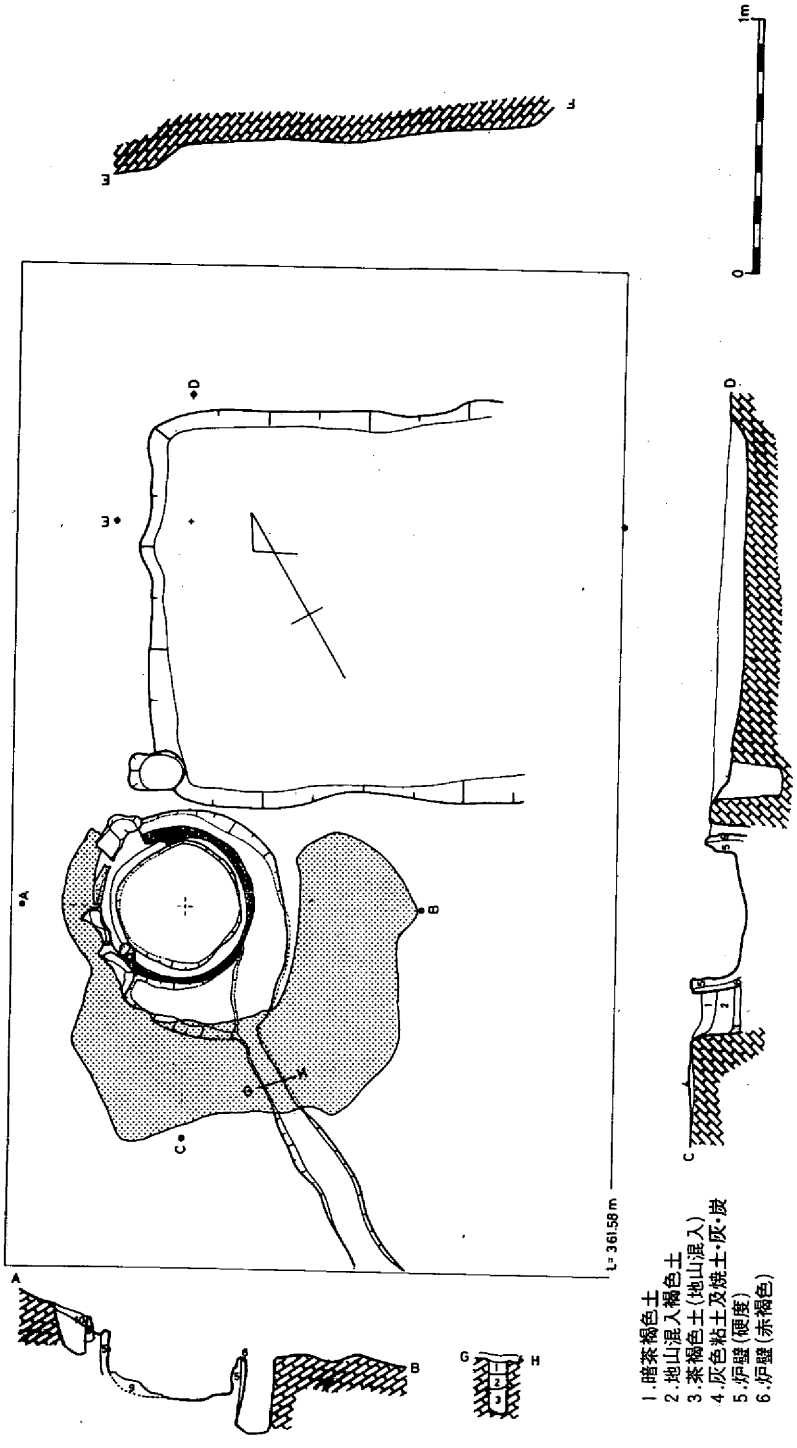
第19図　5C区土層断面（S＝$\frac{1}{80}$）



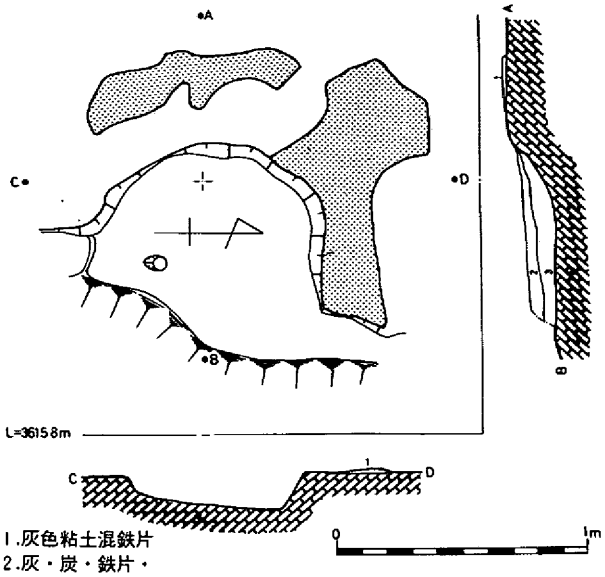
第20図　5C区No.1鍛冶址（S＝$\frac{1}{100}$）



第21図　5C区No.1鍛冶址（S＝$\frac{1}{40}$）



第22図　5C区No.1 第1鍛冶炉（S＝$\frac{1}{30}$）



第23図　5C区No.1 第2鍛冶炉（S＝$\frac{1}{30}$）

No. 1鍛冶址（第20・21・22・23図，図版10）

5C区斜面に等高線と平行する主軸を持ち，段を有する掘立柱建物，住居形態をもつもの，鍛冶炉2とそれに付属する方形土壙の複合した建物である。

建物主軸方位をN—20°—Eにとり，全長16.5m＋α（道により掘開不可能）・短軸方向最大幅4.5mを測り，そこより黒ボク土の堆積した斜面となる。その黒ボク土を整地し，床面としていたものと思われ，所々で硬く焼けた平坦面が確認された。住居形態をもつものは，南側端の鍛冶炉2とセット関係で建物に併設しており，鍛冶炉2より約4mの北地点に鍛冶炉1が方形土壙とセット関係で存在する。これらは小鍛冶の作業場であると考えられる。

＜住居形態をもつもの＞（第21図，図版10）

従来の竪穴式住居址の半壊状態を呈し，西辺3.1m・南北辺1.4mと長方形になり東辺を建物に併設したものである。いわゆる壁体溝は住居のものとは異り，広い所で65cm・狭い所で25cmを測り，溝内は凸凹の土壙状になっている。西辺溝内に11ケ所，北辺溝内に直線的に8ケ所，南辺溝内に10ケ所の杭列痕がみられ，直径6～7cm・深さ10～20cmを測る。南北杭列は左右対称になる部分が多く，東側に向って狭くなっている。その両端に柱間距離2.5mを測る柱穴が存在し，それに対応する柱穴が同じく2.5mの柱間でもって住居掘り方西側に存在する。東西7本の柱でもって棟を上げていたものと考えられる。この形態は，鉄山秘書にみられる高殿の構造に近似するものである（註6）。

＜鍛冶炉1＞（第22図，図版10）

黄褐色地山面を幅0.9×0.85m・深さ0.3m＋α（未掘）の円形土壙を設け，その中に厚さ5～8cmの粘土を利用して直径0.6m・深さ0.2mの炉を作っている。炉は掘り方北側に接するように設置され，南側には排水状の溝が下降している。炉と掘り方の間には版築状に埋土がなされ，北北西部分では石でツメがなされている。北西部炉壁には，直交する6～7cm幅のU字溝が設けられ，鞴（ふいご）の羽口を設置するのに適した状態を呈している。炉壁南側地山面には，約40cm面で厚さ1cmの粘土が炉を囲むようにしかれている。炉壁は内面が赤褐色を呈し硬度に焼けており，ガラス状になっている部分もみられた。炉の内面の中位より上に稜線を有する部分がみられ，炭等を入れ鉄を溶した際のカスをかたづけるたびにかき出した痕跡をとどめるものである。炉のすぐ北に一辺1.55m・深さ9～10cmの方形土壙が付設されている。

＜鍛冶炉2＞（第23図，図版10）

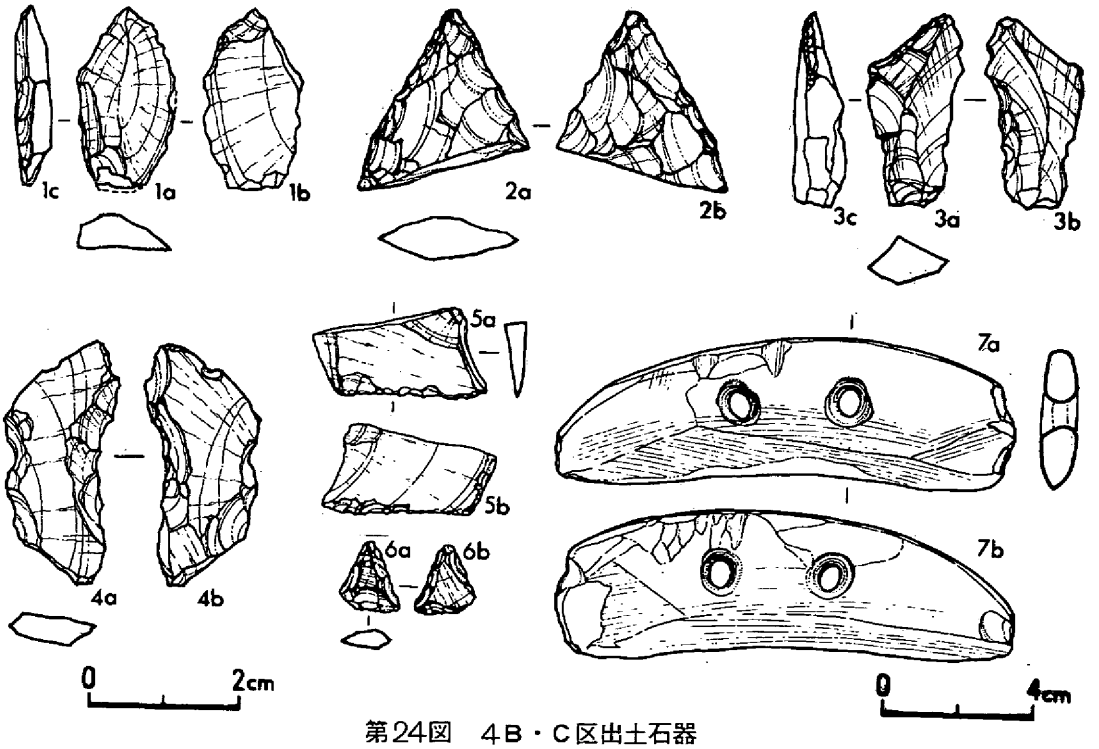
非常に浅いものである。北・西部の上面の粘土中に鉄片・灰・焼土を含む。　（高畑）

石　器　（第24図）

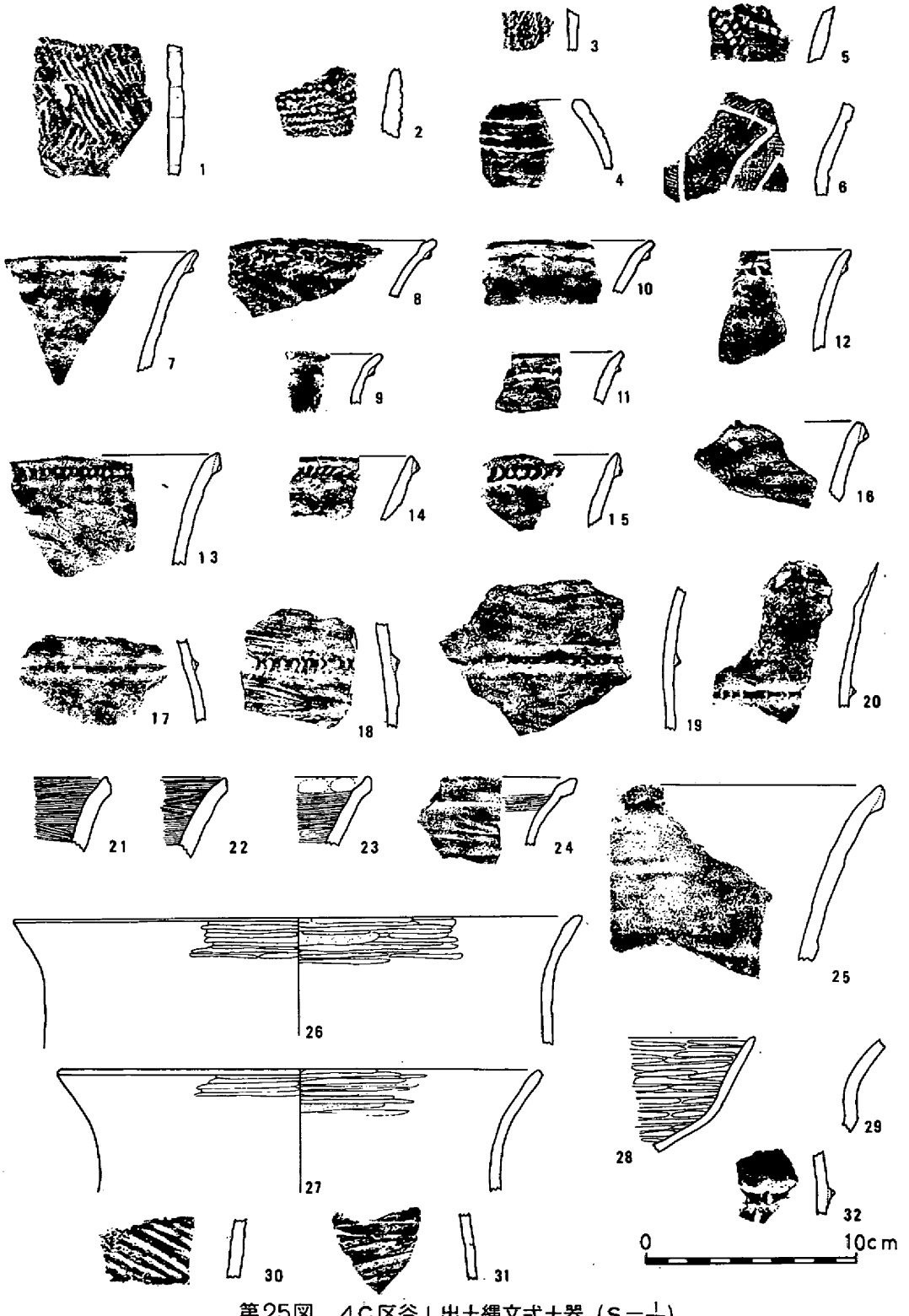
1，2，4～6はサヌカイト製，3は漆黒の黒曜石製であり，7は頁岩製と考えられる。いずれも遺構に伴わず，出土状態から時期を決定するのは困難である。サヌカイト製のものは風化状態からみて二群に大別できる。表面が黄白色のものと，灰黒色を呈するもので，前者は先土器時代に，後者は縄文ないし弥生時代にそれぞれ比定できる。

ナイフ形石器(1)は横長の剥片を素材に用いたもので，大剥離面はa面，b面ともポジティブな剥離面からなる。剥片の一側辺に調整を加えるが，剥片段階の折損面をそのまま残して背部として利用している。素材および調整の両段階を通じて製作技術上の乱れが認められる。2は幅広の木葉形をなす尖頭器で，下半部を欠損している。以上2点は先土器時代に属するが，両者が同時期になるか否かは不明である。3は先端部に片面調整の刃部を持つスクレイパーである。4は形態が3に類似するが，刃部状を呈する先端には調整を加えていない。ともに類例を見ない為，時代等については判明しないが縄文時代に属する可能性が強い。

スクレイパー(5)と石鏃(6)は弥生時代と考えられるもので，7の石庖丁とともに中期中葉の土器に伴うと考えられる。石庖丁の紐通し穴はa面では上部の縁に，b面では向いあった側縁部にそれぞれ磨耗部を持ち，特徴的な使用痕を示す表裏の明確なものである（註7）。　（安川豊史）



第24図　4B・C区出土石器



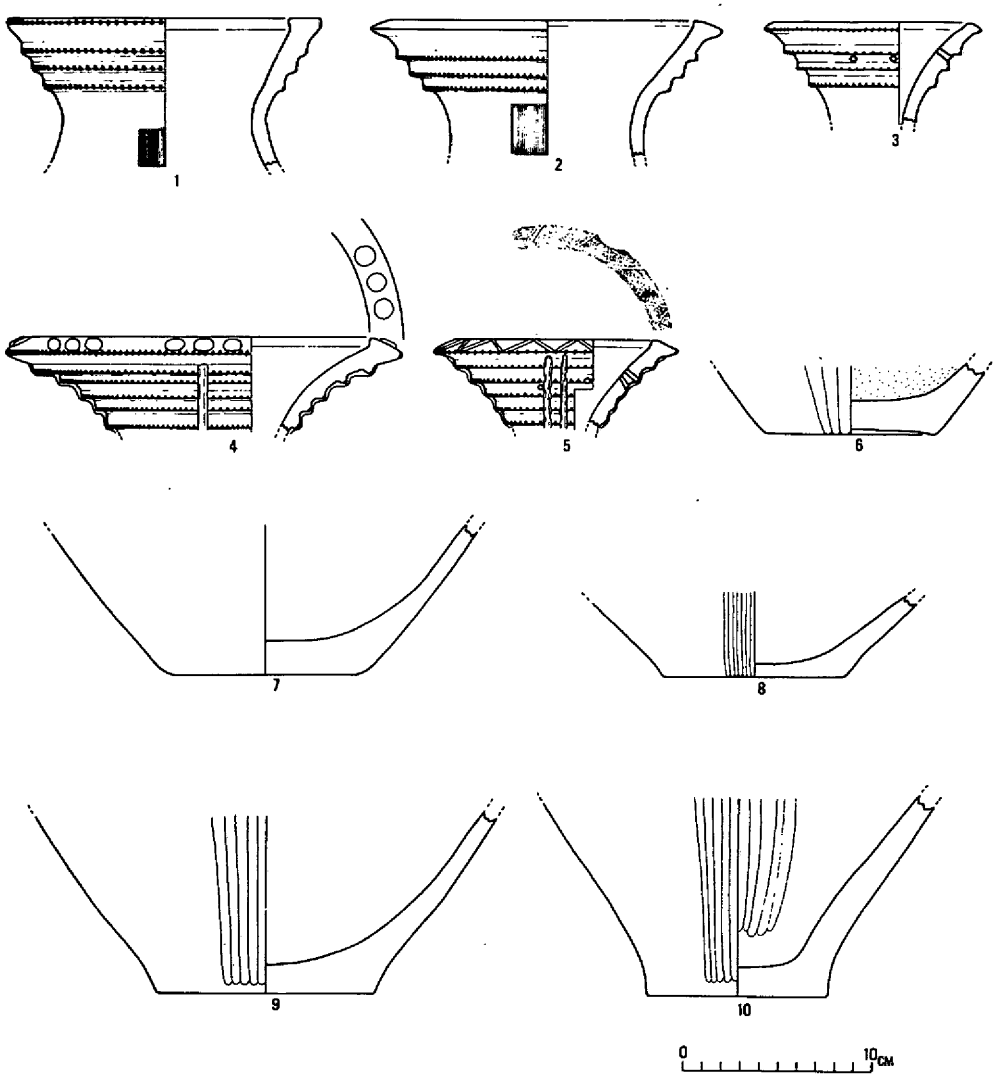
第25図　4C区谷Ⅰ出土縄文式土器（S＝$\frac{1}{3}$）

縄文式土器（第25図，図版11）

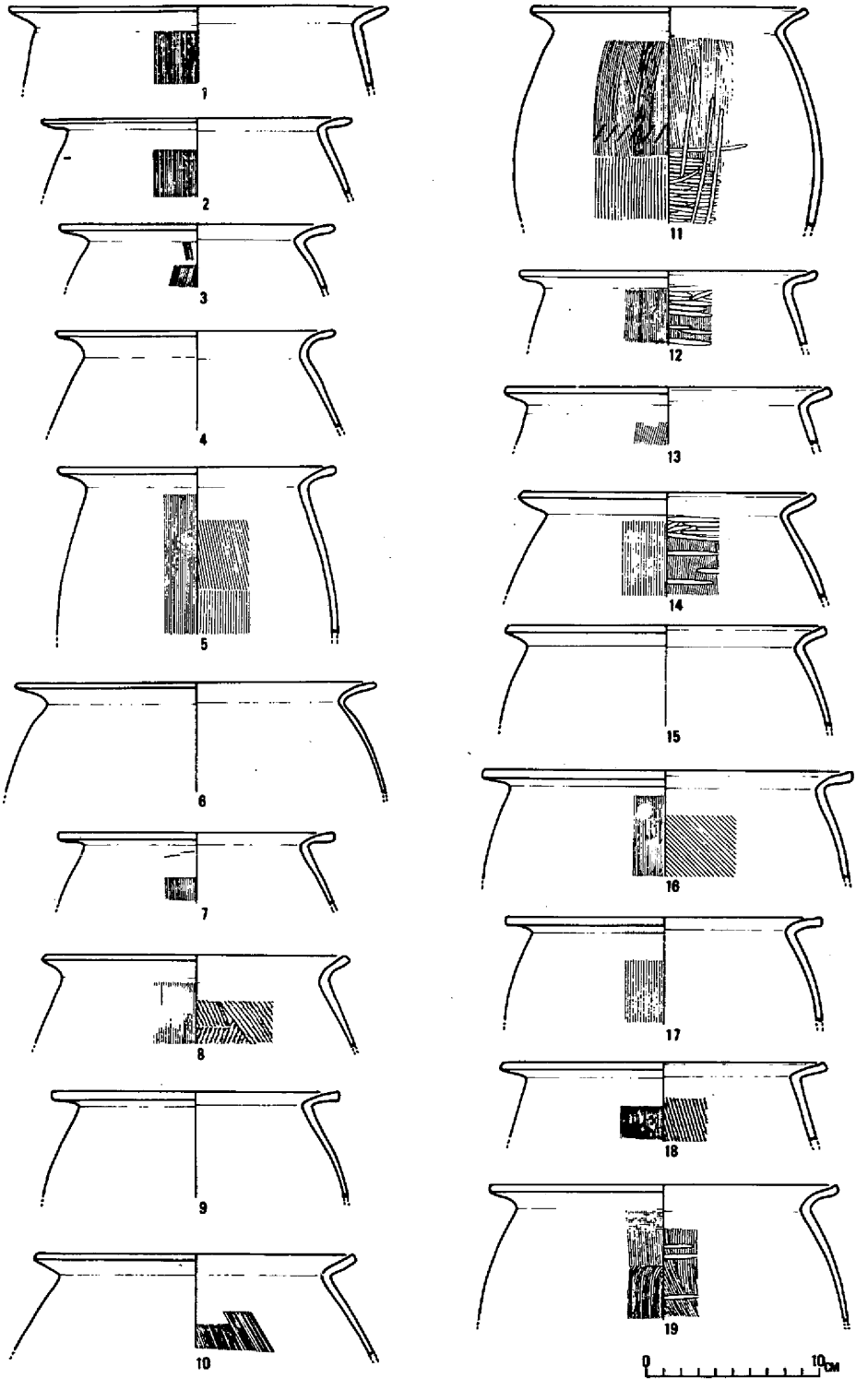
1は，5C区で検出されたものである。器面に右より左下，左より右下へと斜行する幅0.3cmの沈線が施されており，それら文様の間に幅約1.5cmの4本の接合痕がみられる。内面は指頭圧痕状の凸凹面がみられ，その上部を荒いナデにより整形している。胎土中には，石英砂粒・黒雲母が目立ち，横位のナデにそった植物種子の移動痕がみられる繊維土器である。器壁は約0.8cmの均一で，外面は暗黒灰色，内面は暗褐色を呈するススケタものである。色調や胎土の類似するものに2がある。器面に7～8条よりなる横位の撚糸文が施され，その上に直径0.25cmの5～6個からなる円形刺突文が施されている。内面は，若干起伏がみられるが丁寧なナデにより円滑に仕上げられている。口縁部と思われ，下位にて0.8cmの器壁厚を測り上位に向かい細く丸くおさめている。外面の色調を暗黒灰色，内面を暗黄褐色にとどめている。これら2点は前期の土器の可能性が強い（註8）。

3は，No.21横穴式石室内堆積土中より出土したものである。器面に縦位の撚糸文が7～8条施され，内面は丁寧なナデで仕上げられている。胎土中に長石砂粒が多く，前記した2点とは大きく異なり，器壁0.5cmを測る。色調は黄褐色を呈する薄手の土器である。中期の前半に入るものであろうか（註9）。4は，4C区より出土したものである。器面に幅0.2cm・深さ約0.2cmの5条からなる沈線が施されている。上位3条が一周するものと考えられ，下位は継続していない。内面は，凸凹状をとどめているが，それを研磨し円滑に仕上げられている。胎土中に長石を多く含む。器壁0.65cmを測り暗黄褐色を呈する口縁部である。5は，外面に2列を基調とするD状の刺突文が施され，内面は横位の刷毛状工具による丁寧なナデが行なわれている。胎土中に石英砂粒を多く含み，器壁0.65cmを測る暗黄褐色を呈するものである。6は，外面にいわゆる磨消し縄文が施されている。縄文部分を2本の沈線により区画したものであり，無文部に刷毛状の不規則なナデが行なわれている。内面は，下位に横位のヘラ削り状痕，上位に外面同様の不規則なナデが行なわれている。胎土中に石英・長石を多く含み，器壁0.65cmを測る暗黄褐色を呈する土器である。後期前半の所産と考えられる（註10）。

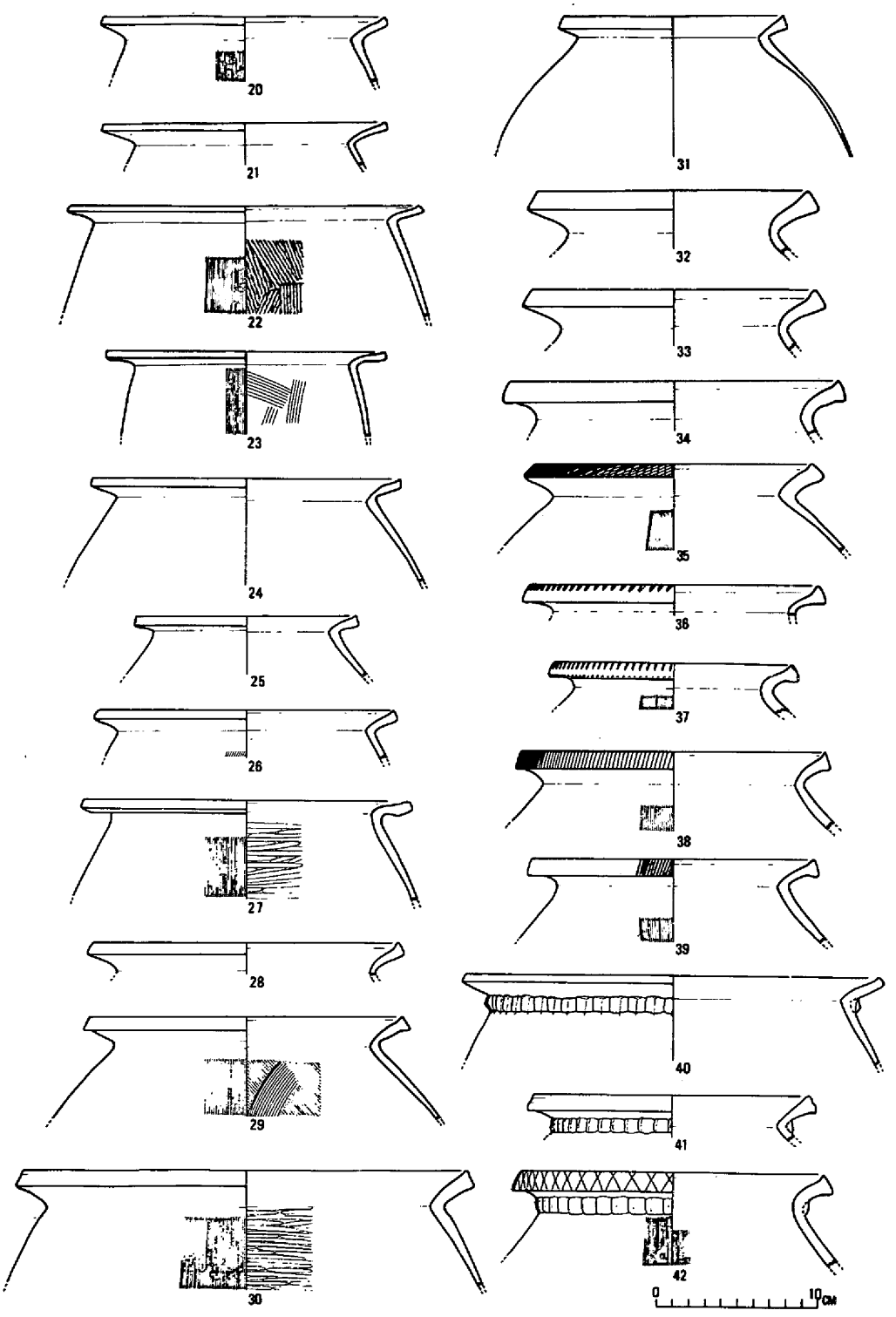
7～31までの土器片は4C区A（第3図）で集中して出土したものである。大半のものが深鉢の形態になるものと考えられ，鉢・浅鉢の小片も存在した。ここでは，深鉢を刻目貼り付け突帯を有するものA（7～20・31・32）・有さないものB（21～27）に大別でき，さらにAの中でも口縁部より少し下がったところに突帯を有するものA_1（7～12）・口縁部直下に有するものA_2（13～16），Bの中では，突帯状の稜線を有するものB_1（21～25）と有さないものB_2（26～27）に分けられる。A_1・A_2・B_2が内外面とも細いナデ，ヘラ削り状のナデ等により丁寧に仕上げられており，色調暗褐色を呈するものが多い。器厚も0.5～0.6cmと均一している。B_2の場合は器内外面ヘラ磨きが行なわれている。それらに比べるとB_1は器内外面にシャープさがなく，全体的に荒く仕上げられており，器壁も厚く粗製の感を受ける。色調は暗黄褐色を呈する。これら全体に共通する点は，口縁端部に刻目を持たない一群だということである。28・29は浅鉢の形態をとるものと考えられる。28は内外面を丁寧にヘラ磨きされており，外面下半にススが付着している。ススの付着は，8・17・19・27の器外面にみられた。30は内外面に叩き目状の痕跡をとどめており，ほかの土器と異なり胎土中に大きい砂粒を多く含む。B_1よりも荒い整形が行なわれている。いわゆる黒土BⅡ式の範中に入るものである。　（高畑）



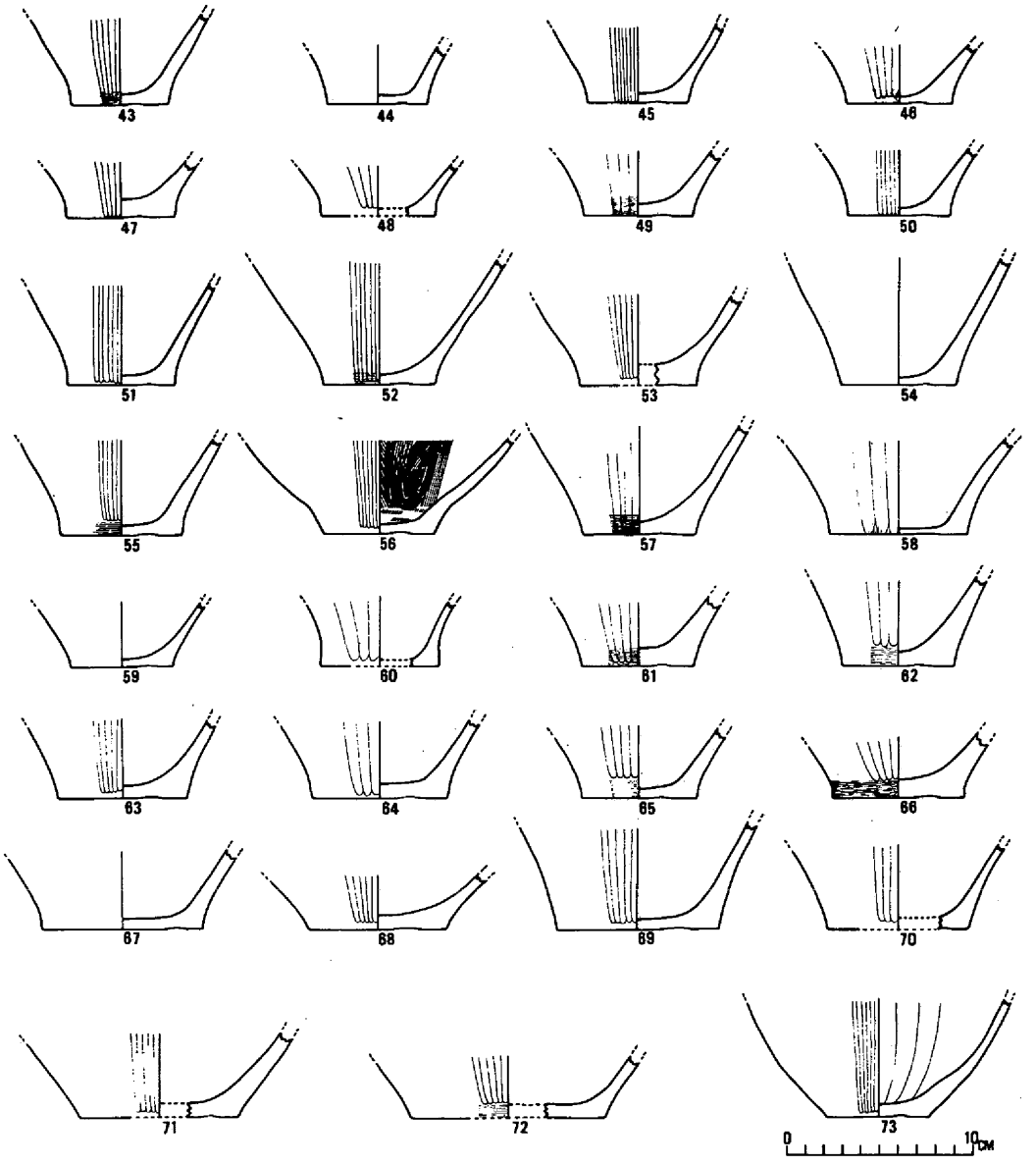
第26図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）



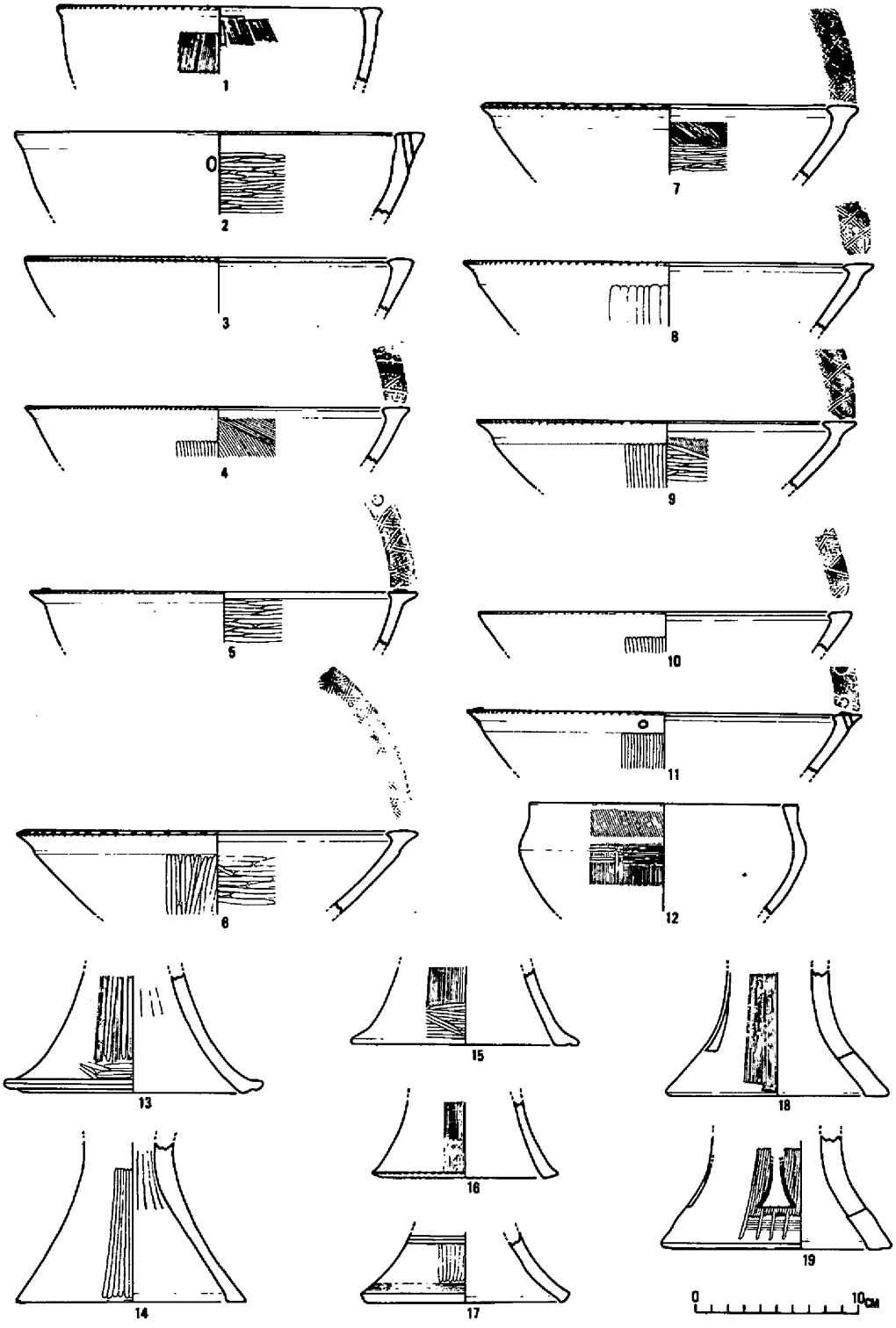
第27図　4C区谷1出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）



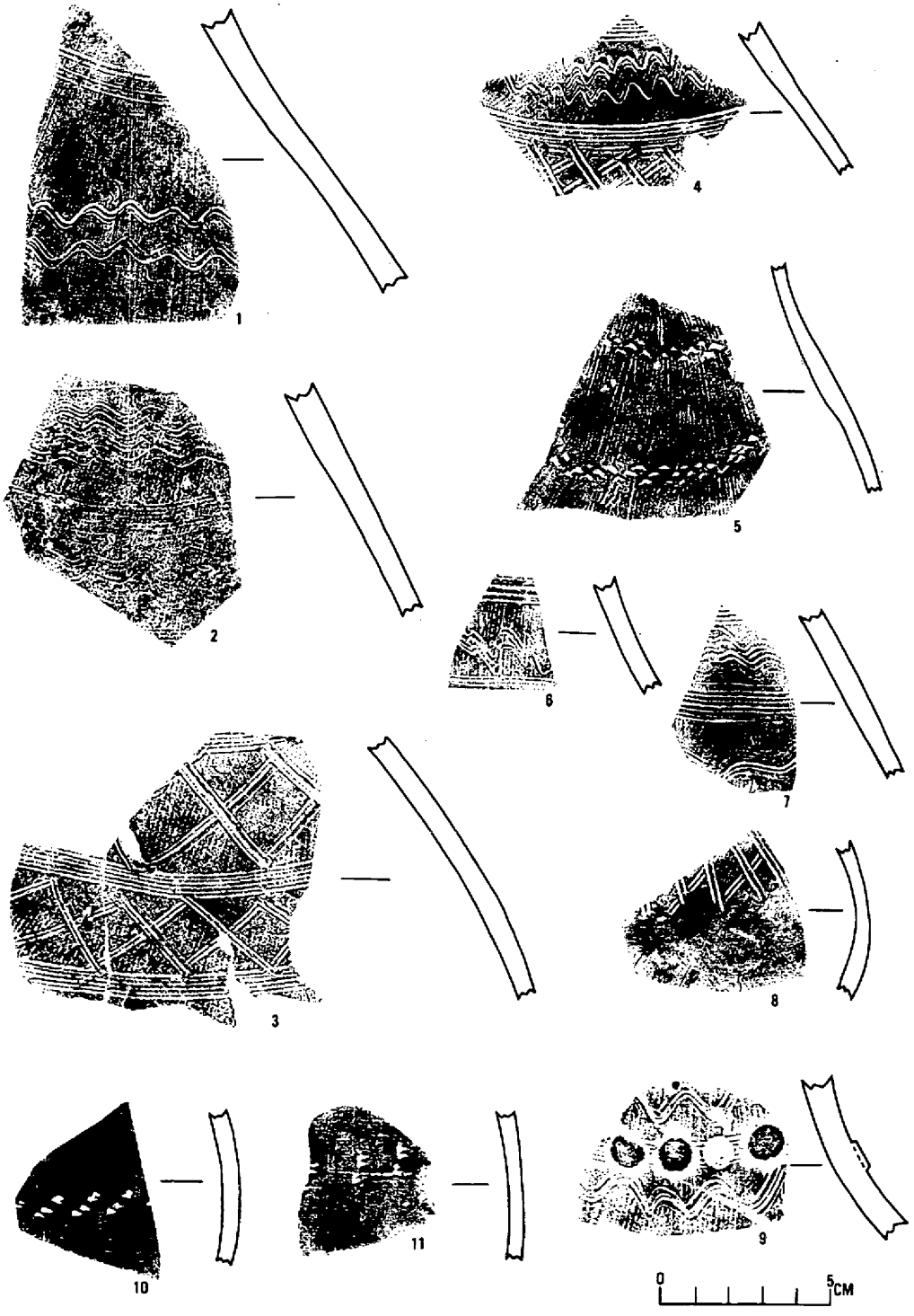
第28図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）



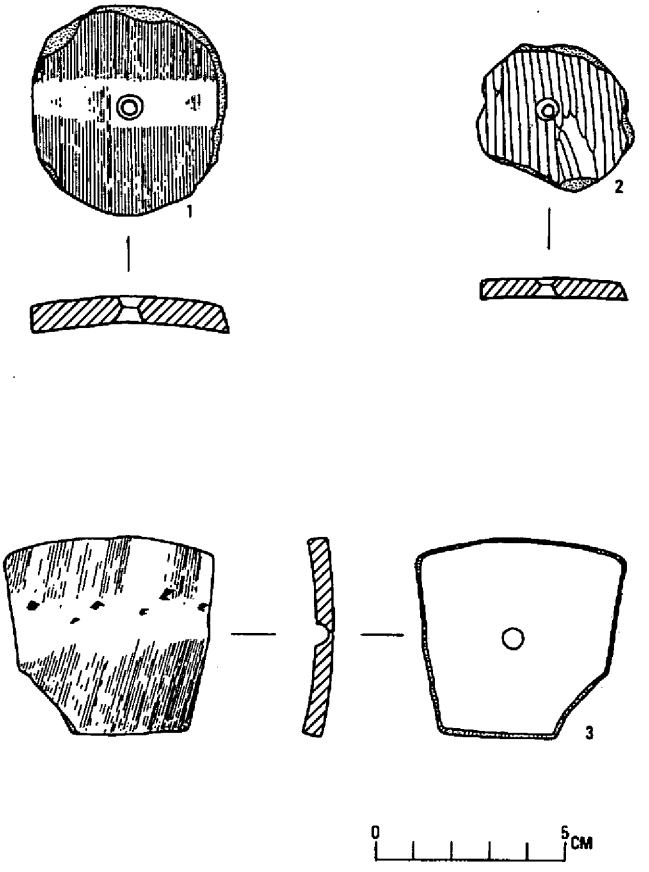
第29図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）



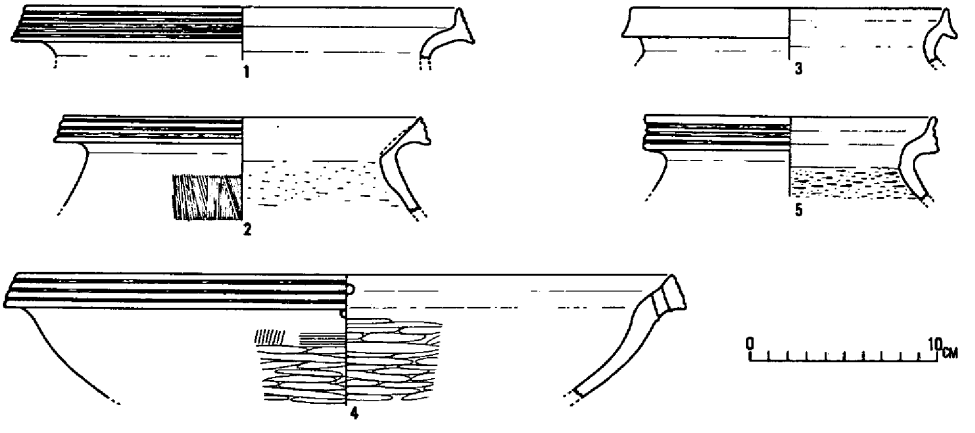
第30図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）



第31図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器拓本（S＝$\frac{1}{2}$）



第32図　4C区谷Ⅰ出土紡錘（S＝$\frac{1}{2}$）



第33図　4C区谷Ⅰ出土弥生式土器（S＝$\frac{1}{4}$）

弥生式土器

壺形土器（第26図，図版12）

図示したのは口縁部と底部である。（1）の口縁はゆるやかに外反し，端部に近くなるにしたがって肥厚する。端部の内面は内側への張り出しがあり，外面はヘラ状工具の先端による刻目をめぐらす。外面には3条の貼り付け凸帯部を有し，上面に口縁端部と同じように刻目をめぐらす。頸部には縦方向の刷毛目を施している。内面は横方向のナデ仕上げをしている。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で褐色を呈する。（2）は口縁（1）とほとんど同じ手法のものであるが，口縁端部の外面をつまみ出し，刻目を有しない。（3）は小型のもので頸部が細くなる。口縁端部の内面は横ナデによる凹みを有する。内面から外面に刺突した円孔は2穴が対になっている。外面には3条の貼り付け凸帯を有し，その上面に口縁端部と同じように二枚貝による刻目をめぐらす。内外面とも横ナデ仕上げを施し，焼成は良好である。胎土中には細かい砂粒を多く含み，黒がかった褐色を呈する。（4）の口縁は肥厚しながらゆるやかに外反するが，前述した口縁よりもやや大きく外反する。口縁端部内側への張り出しがあり，3個が対になった円形浮文を有する。外面には図化できる範囲内で5条の貼り付け凸帯を有し，上面に口縁端部と同じように刻目をめぐらす。凸帯の上には縦方向に棒状浮文を貼り付けている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。（5）はやや小型の口縁である。口縁端部の外面をつまみ出し刻目をめぐらす。端部内面には内側への張出しを有する。またヘラによる2条の連続した三角形を描いている。外面には図化できる範囲内で5条の貼り付け凸帯を有し，上面に口縁端部と同じように刻目をめぐらす。凸帯の上には縦方向に2条の棒状浮文を貼り付けている。内面から外面に刺突した円孔は2穴が対になっているが，段違いの位置である。内外面とも横ナデ仕上げを施し，細かい砂粒を多く含む。焼成は普通で，外面は明るい褐色を呈するが，内面は黒がかった褐色を呈する。

この壺の口縁のうち口縁部に文様を施すもの（4，5）は，外面の凸帯が5条以上になって棒状浮文も有するが，口縁端部に文様を施さないもの（1～3）は，凸帯が3条だけで頸部に縦方向の刷毛目を有する。以上のような相違点は若干の時期差を反映しているのかもしれない。また小型の口縁では，内面から外面に刺突している円孔を有するので，蓋とセットになって使用されていた可能性がある。このことは壺形土器でも大型と小型では，使用目的を異にしているのかもしれない。

底部（6～10）の外面は磨滅の著しいもの（7）を除いて，縦方向のヘラ磨きを施している。内面は軽いヘラ削りを施しているもの（6）と，縦方向のナデを施すもの（8，9）がある。また特殊なものとして，内面に縦方向のヘラ磨きを施しているもの（10）がある。外面に黒斑を有するもの（6，8）と，ススの付着があるもの（10）とがある。これらの底部の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。

甕形土器（第27・28・29図，図版12）

壺形土器や高杯形土器に比較して量が多い。口縁部は「く」字状に外反するが，端部の仕上げは種々の様相を呈する。端部が丸くなっているもの（1～6）は，口縁部と頸部の内外面とも横ナデを施

している。胴部の外面は縦方向の刷毛目を施すもの（1～3，5）と，縦ナデを行っているもの（6）とがある。胴部の内面は刷毛目を施すもの（5）と，縦ナデを行っているもの（1～4，6）とがある。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で褐色を呈する。外面にはススや有機物の付着が認められる。端部が角張るだけのもの（7～10）は，口縁部と頸部の内外面とも横ナデを施している。胴部の外面は縦方向の刷毛目を施すもの（7，8）と，縦ナデを行っているもの（9，10）とがある。胴部の内面は縦ナデを行っているもの（7，9），繊維の痕跡が認められるヘラ磨きを施しているもの（8），斜め方向の刷毛目を施しているもの（10）がある。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で褐色を呈する。外面にはススや有機物の付着が認められる。端部が角張って内面に浅い凹みをめぐらすもの（11～24）は，口縁部と頸部の内外面とも横ナデを施している。（11）の胴部外面は上位に刷毛目を施し，下位は縦方向のヘラ磨きを施している。中位には二枚貝の刻目をめぐらしている。胴部内面の上には縦方向の刷毛目を施し，その上から部分的に縦方向のヘラ磨きを施している。下位には横方向のヘラ磨きを施している。ほかの土器では胴部外面に縦方向の刷毛目を施すもの（12～14，16～20，22，23）と，縦ナデを行っているもの（15，21，24）とがある。胴部内面は刷毛目を施すだけのもの（16，23）や縦ナデを行っているもの（13，15，17，21，24）以外に，刷毛目を施した上から横方向のヘラ磨きをしているもの（12，14，19）や，繊維の痕跡が認められるヘラ磨きを施しているもの（18，22）がある。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈するが，外面にススや有機物の付着を有するものが多い。端部が肥厚して角張り，内面に浅い凹みをめぐらすもの（25～34）は，これまでに説明した土器に比較して相対的に大型のものが多い。口縁部と頸部の内外面とも横ナデを行っている。胴部の外面は縦方向の刷毛目を施すもの（26，27，29，30）と，縦ナデを行っているもの（35，31～34）とがある。胴部の内面は横ナデを行っているもの（25，26，31～34），刷毛目を施すもの（29），横方向のヘラ磨きを施すもの（27，30）がある。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で褐色を呈するが，外面にススや有機物の付着は認められない。端部が肥厚して角張り外面に文様を有するもの（35～39）は，口縁部と頸部の内外面および胴部の内面に横ナデを行ない，胴部の外面は，縦方向の刷毛目を施している。口縁端部に施している文様は種々のものがある。（35）では平行線を×状に交叉させて全体にめぐらしている。（36）ではヘラ先の刻目を口縁上端部だけに施しているが，（37）では口縁上部と下端部の2列に刻目を施している。（38）では縦方向の線刻を全体にめぐらしているが，（39）では二枚貝の刻目を施している。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。外面にはススや有機物の付着は認められない。頸部にヘラで押圧した凸帯を貼り付けているもの（40～42）は大型の土器である。口縁端部は角張って内面に浅い凹みをめぐらすもの（40），肥厚して角張るだけのもの（41），肥厚して角張り×状に線刻するもの（42）がある。口縁は内外面とも横ナデを施しているが，胴部の外面は縦ナデを行っているもの（40，41）と，縦方向の刷毛目を施しているもの（42）がある。

以上に記した甕形土器のうちで，（1～24）は比較的小型で器壁が薄く，外面にススや有機物の付着が認められる。ところが（25～42）は大型のものが多く，器壁が前者よりも厚い。この相違は甕形土器のうちでも使用目的が異なると考える。前者は外面にススや有機物の付着が認められるから「煮

沸用」に使用し，後者は物を入れておく「貯蔵用」に利用したと考える。

次に甕形土器の底部（43～73）について記したい。外面は縦方向のヘラ磨きを施しているもの（43，45～53，55～58，60～66，68～73）と縦ナデを行っているもの（44，54，59，67）がある。内面は縦ナデを行っているが刷毛目を施すもの（56）や，縦方向のヘラ磨きを施すもの（73）もある。底の仕上げは内外面から粘土を貼り付けて形を整えているので，外面に継ぎ目の痕跡が凹んで残っている。外面は形を整えた後に刷毛でナデている。小型の底部の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で黒がかった褐色を呈する。

高坏形土器　椀形土器（第30図，図版13）

高坏形土器の坏部は，口縁端部が肥厚するだけで上端に文様を有しないもの（1～3）と，口縁端部が内外面に張り出して上端に文様を有するもの（4～11）がある。前者の一群には，口縁端部外面に刻目を施すもの（1，3）と施していないもの（2）とがある。外面上位は横ナデを行っているが，下位は縦ナデを行っているもの（2，3）と，縦方面の刷毛目を施すもの（1）とがある。口縁部内面は横ナデを行っているが，下位になると刷毛目を施すもの（1），横方向のヘラ磨きを施すもの（2），横ナデを行っているもの（3）がある。口縁上端から外面に刺突した円孔を有するもの（2）もある。これらの胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。後者の一群はすべてのものに，口縁端部外面に刻目を施している。口縁端部は内外面に張り出し，その上端に2条ないし3条の線を×状に交叉させて描き，全体にめぐらせている。円形浮文を有するもの（5，11）もある。口縁端部の内外面とも横ナデを行っているが，外面下位は縦ナデを行っているもの（5，7）と，縦方向のヘラ磨きを行っているもの（5，6，8～11）がある。内面は横方向のヘラ磨きを施しているもの（5，6），刷毛目を施しているもの（4），上位に斜め方向の刷毛目を施し，下方に横方向のヘラ磨きを行っているもの（7，9），横ナデを行っているもの（8，10，11）がある。口縁上端から外面に刺突した円孔を有するもの（11）もある。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。なお口縁上端から外面に刺突した円孔を有するものは，蓋とセットになって使用されていたと考えられる。

高坏形土器の脚部には，裾部がゆるやかに広がり端部が角張るもの（14，16，17）がある。外面に縦方向のヘラ磨きを施しているもの（14，17）と，縦方向の刷毛目を施しているもの（16）がある。端部外面に刻目を有するもの（16）や，横方向に3条の凹線を施しているもの（17）がある。内面の上位は縦ナデを行っているが，下位は横ナデを行なっている。上位にしぼり痕を有するもの（14）がある。器壁が比較的厚手のもので，三角形の透し穴を有するもの（18，19）がある。外面は縦方向の刷毛目を施すもの（18）と，縦方向のヘラ磨きを施すもの（19）とがある。内面は横ナデを行っている。裾部が大きく広がり，端部が肥厚して外へ張り出すもの（13）がある。外面の上位は縦方向の刷毛目を施しているもの（15）と，刷毛目とヘラ磨きを施しているもの（13）がある。下位は横および斜め方向のヘラ磨きを施している。内面の上位は縦ナデを，下位は横ナデを行っている。上位にしぼり痕を有するものがある。脚部の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。

これらの脚部のうち端部が肥厚して外へ張り出すものは，端部が角張るものよりも時期的に後出の

要素が考えられる。また比較的厚手のもので，三角形の透し穴を有する器形と，薄手で透し穴を有しない器形とが存在する。ところが，高坏形土器の完形品を検出できなかったので，はっきりしたことは不明であるが両者の使用目的が異なると考えたい。

椀形土器（12）は図化できたのが1点のみである。口縁部は湾曲しながら立ち上がり端部は肥厚する。上面には浅い凹線状のものを有して全体にめぐる。外面の上位は斜め方向の刷毛目を施し，中位は縦方向の刷毛目を施した後に，部分的に横方向のヘラ磨きを施している。下位は縦ナデを行っている。内面は不規則なナデを行なっている。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で明るい褐色を呈する。椀形土器はほかの器形に比較して確認したものは少量である。

以上，記した土器片は谷1内の包含層の出土であるけれども，ほぼ同時期に使用されていたものと考えられる。備前地方においては類似の土器の出土例が知られているけれども，備中山間部では特異の存在である。備前地方で先哲が論じられた編年に，距離的時間的および社会状況等の有機的背景を考え合せることなく，比較対比したのが文末の（表5）である（註11）。

拓本の土器片について（第31図，図版13）

壷形土器（1～4，6～9）と甕形土器（5，10，11）の頸部直下から胴部にかけての文様である。すべてが櫛描きによるもので，平行線・波状文・格子目文がある。平行線の上に円形浮文をめぐらしているもの（9）も存在する。猫が爪を立てて掻いたような痕跡を有するもの（10，11）もある。

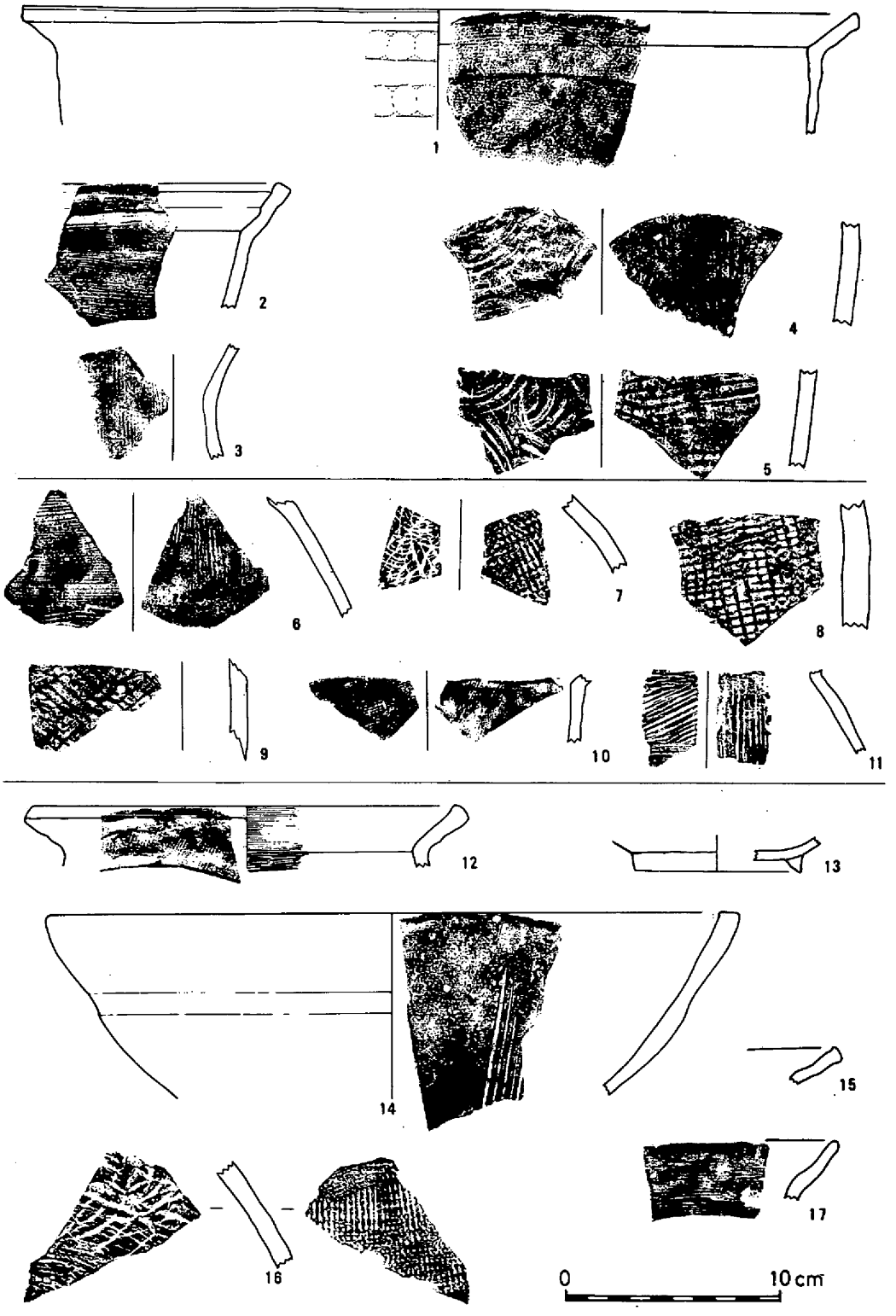
紡錘（第32図，図版12）

完成品2と未製品1が出土した。（1）は壷形土器の胴部の破片を利用したもので，ほぼ楕円形を呈する。5.7×5.0cm・厚さ0.7cm・重さ30gを測る。円孔を施す作業は両面から行っている。（2）は甕形土器の胴部下位の破片を利用したものである。4.0×3.6cm・厚さ0.5cm・重さ9.5gを測る小形のものである。円孔を施す作業は両面から行っている。（3）は未製品である。甕形土器の胴部の破片を利用したもので円板状になっていない。5.3×5.1cm・厚さ0.5cm・重さ18.5gを測る。円孔を施す作業を内側から試みているけれども，貫通していない。紡錘を土器片で製作するには，円孔を施してから円板の形に仕上げるのかもしれない。

後期弥生式土器（第33図，図版13）

図示したのは甕形土器（1～3，5）と鉢形土器（4）である。甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，さらに端部が上に拡張して凹線を施すもの（15）と，端部が上下に拡張して無文のもの（3）とがある。また「く」字状に外反し，端部が肥厚して凹線を施すもの（2）がある。頸部から口縁部にかけては，内外面とも横ナデを行っているが，胴部外面は刷毛目を施すもの（2）と，縦ナデを行っているもの（3，5）がある。内面の頸部直下から胴部にかけては，横方向のヘラ削りを施しているもの（2，5）がある。鉢形土器（4）の口縁部は屈曲しながら外反し，端部は肥厚して3本の凹線を施している。また内面から外面方向に刺突した円孔を有する。口縁部の内外面とも横ナデを施しているが，胴部外面は縦および横方向の刷毛目を施し，その下位は横方向のヘラ磨きを施している。胴部内面は横方向のヘラ磨きを施している。

これらの土器のうち（1～4）は弥生時代後期前半に，（5）は後期後半に属すると考える。（福田）



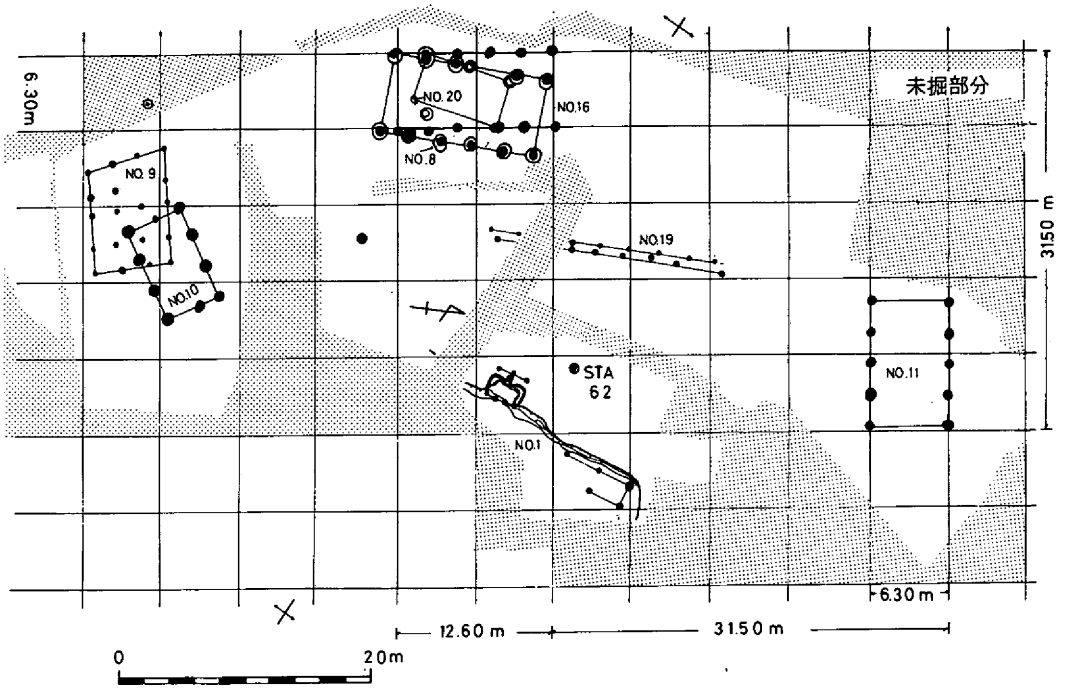
第34図　4・5区出土須恵器・土師器（S＝$\frac{1}{3}$）

4・5区出土の須恵器・土師器（第34図，図版15）

本遺跡において出土した古墳時代以後の土器片実測可能総数である。これは，4B区（2～5）・4C区（6～11）・5C区（1,12～17）の3地区より出土しているが，遺構に確実に伴うものではなく，遺構の年代を推定可能にさせるだけのものである。

1は口径約39.5cmを測り，灰黄白色を呈する土鍋である。外面の口縁端部は鈍い稜線を有し，くびれ部より下位に指頭による圧痕がみられる。内面のくびれ部には鋭い稜線を有しており，内面全体に横位の荒いナデが施されている。精製された胎土で焼成良好のものである。2は灰黄色を呈する鍋であろう。口縁端部に平坦面を有し，くびれ部に向って複合口縁を形づくっている。外面に細い横・斜位の刷毛ナデが施され，内面には櫛状工具による横位（若干斜位）の刷毛ナデが施されている。口縁端の内外面に指頭によるナデが施されている。外面くびれ部下にススが付着している。4・5は須恵器甕破片であろう。器壁が若干異なり，4は厚いが，色調暗灰色，外面格子叩目，内面青海波文は非常に類似するものである。5に多少の歪みがみられる。

6は器面に縦位の櫛状工具によるナデがおこなわれており，そのナデがスス付着部分より磨滅している。使用によるものであろう。内面は外面と同じ工具による横位のナデが全面にみられ，下位にゆくにしたがい太目になっている。器厚はほぼ均一しているが，ほかの土師器にもみられた圧痕による起伏がみられる。7は青灰色を呈する須恵器片である。外面に格子叩目，内面に青海波文がみられるが，4・5等にくらべて細筋の叩目である。焼成・胎土ともに良好のものである。8は暗青灰色を呈する大形器種の須恵器片である。器厚1.2cmを測る。器面に格子叩目が施されており，内面には，斜行する不規則な細いナデが施されている。胎土中に長石粒を多く含む焼成良好なものである。9は暗灰色を呈する瓦質の須恵器片である。全体にくすんだような青灰色を呈し，外面に格子叩目を有し，内面は横・斜位の非常に細かいナデが施されている。器厚は0.8cmと均一したものである。10は暗褐色を呈する土師器片である。鍋形土器のくびれ部にあたるところである。外面に櫛状工具によって，右上から左下にナデが施され，内面は同じ工具による斜位のナデが施されている。やはり，くびれ部の下位に指頭による起伏がみられる。11は暗黄褐色を呈する甕形土器の肩部である。器面に幅0.15cmを測る櫛状工具による縦ナデが施され，その上面にススが付着している。内面は，外面と同じ工具による斜・横位のナデが施されている。12は黄褐色を呈する土師器甕形土器である。外面の口縁部下半から斜行するナデが施され，内面のくびれ部より下位に横位のナデが施されている。外面にススの付着を有する。13は黄褐色を呈する高台付椀形土器である。底部に平坦面をもつ椀に断面三角形の高台をとりつけたものであり，器壁は薄くしっかり作られているが，高台の接合部は粗雑であり，貼り付け痕跡が目立つものである。内面の底は非常に細かい不規則なナデが施されている。14は淡暗灰色を呈する土師器の摺鉢である。口径約32.6cm・残位高8.5mを測る。煮沸用器として利用されており外面にススが付着している。内面は，口縁端より約5.5cm下位のところに磨滅痕が著しく残されている。内面は非常に細かい横位のナデが施され，その後幅0.2cmの5～6条のカキ目がつけられている。17も12と類似するものである。16は7と同様の格子叩目を有しており，内面には若干太筋の青海波文がみられるが，非常に類似している。（高畑）



第35図　建物配置図（S＝$\frac{1}{60}$）

建物について　（第35図）

二野遺跡ではNo.20建物，No.11・No.16建物，No. 8 建物・No.19柵，No. 1・10建物，No. 9 建物のV期にわけることができると考えている。しかし，I・II・III期の建物は主軸方位が若干異なるのみで，同一場所を利用し，柱穴なども三穴重複するように存在することなどから時期的には大きくへだたりのあるものではないと思われる。そのなかで，II期にあたるNo. 11・16建物は主軸方位・規模・柱間距離・柱穴掘り方等の種々の点で類似しており，「L字形」に建物を構成している。No.16建物の梁間北辺よりNo. 11 建物の桁行北辺までの距離は31.5m を測り，No.16建物の桁行西辺よりNo.11建物の梁間東辺まで31.5mを測る。No. 8 ・16建物等を一尺30cm前後で換算すると，柱間距離は8尺平均となり桁行41～42尺，梁間20～21尺となる。これは宮尾遺跡（註5）において大規模建物群の造営の最終時期と考えられている4期のC溝設定期（8世紀後半以後）の建物8とほぼ同数値を示す。柱根径，円形プラン，柱間8尺等間，6m前後の梁間の建物等は宮尾3期以後の傾向と共通する点が多い。II期～III期にかけては，建物の主軸方位が若干東偏し，柱穴掘り方が大きくて深くなる傾向を示している。No. 8 建物には東側約6～7m前方に柵が併設されている。建物の時期は周辺から遺物がほとんど出土していないので，時期決定は無理である。ここでは宮尾遺跡3期以後の傾向を考え，A溝出土の須恵器坏身を基準（註12）にして，二野遺跡「L字区画」の建物の上限を8世紀初頭と考え，二野遺跡より出土した遺物をもとに鎌倉時代初期を下限と考えておきたい（註13）。　（高畑）

小結

二野遺跡においては，先土器時代，縄文時代前・中・後・晩期，弥生時代中期・後期，古墳時代後期，平安時代末～鎌倉時代の遺物が出土しており，遺構は古墳時代後期以後のものが確認されている。

先土器時代ではサヌカイトを素材とするナイフ形石器・尖頭器が出土しており，２点とも瀬戸内の地域において出土しているものと同様のものである（註14）。また阿哲郡神郷町高瀬野原スキー場南側の丘陵の火山灰堆積層中より，黒曜石・水晶・サヌカイト等を素材とするナイフ形石器・彫刻刀・スクレイパー等が出土（註15）していること等から，中国山地における先土器時代の空白を埋めてゆく足がかりとなるものであろう。

縄文時代では，前・中・後・晩期と各期がみられるが，前・中・後期は土器片は数点の出土であり，これらの時期の存在を確認することにとどまった。晩期の土器片は多く出土しており，これらはいわゆる黒土ＢⅡ式の範中に入るものである。全体を観察できるものは存在しないが，口縁部下位に刻目貼り付け突帯文，くびれ部に同突帯文が施される深鉢を主体とするものである。従来の粗製土器といわれているものであるが，大半のものが硬質でシャープさに富むものであり，器厚も 0.4㎝ 内外と薄手の土器が多い。この二野遺跡では，出土した土器の口縁端部に刻目を有さないという土器の特徴をあげることができる（註16）。

弥生時代では，中期前半～中葉と考えられる土器片が黒ボク堆積土中より多量に出土している。従来，知られている矢田家坂竪穴住居址，矢田荒堀善光院裏山，八鳥三角高下遺跡等の出土遺物（註17）よりも古い様相を呈するものであり，遺物のまとまった出土量などからみても県北，なかでも備中北西部においては，この時期に集落形態が比較的まとまったものになっていたのではなかろうかと考えられる（註18）。

古墳時代では，横穴式石室が１基出土している。この石室形態は，横穴式石室のいわゆる盛行期の様相を呈し，大形石材・根石広口面利用等の定形化したものである。奥壁幅 1.5m を測り，根石の掘り方痕跡までが約 4.5m と奥壁幅の３倍の距離で石室の長方形プランが終止しているようである。その石材の終止部分より羨道部が，若干主軸方向と向きを異にして南にふっており，石材抜きとり穴もその傾向を示す。奥壁高，石室長等より約30㎝の単位を基調に設計された可能性を呈する。

平安時代末～鎌倉時代では，遺物は出土しているが，大形建物期の時期を確定するのに充分な出土状態ではない。ここでは，建物の規模・配置・遺物等から「Ｌ字区画」に構成されたⅢ期の建物群は，平安時代末～鎌倉時代にかけての地方官衙跡・郷の倉院跡等の可能性を呈する。位置的には，備中国哲多郡野馳郷に属し，現代の行政区画では，阿哲郡哲西町矢田二夕野前となっている。南側に隣接する小字名に空高下（そらこうげ）がみられる。（高畑）

第4章　光坊寺古墳群（第36図）

第1節　各古墳の外観

1号墳　中国縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査を行った。第4章第2節に報告

2号墳　中国縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査を行った。第4章第3節に報告

3号墳　円墳　直径約5m・高さ約0.80m　盛土

4号墳　円墳　直径約8m・高さ約1m　盛土

5号墳　円墳　直径約9m・高さ約1.20m　盛土

6号墳　円墳　直径約8m・高さ約1m　盛土

7号墳　円墳　直径約12m・高さ約1m

8号墳　円墳　直径約12m・高さ約1m

9号墳　円墳の可能性が強い。尾根の低い方から見ると墳丘が認められるが，高い方から見るとはっきりしない。後述する11号墳のように方形墳になるのかもしれない。径約10m

10号墳　9号墳と同様に円墳の可能性が強いが，方形墳になるのかもしれない。径約10m

11号墳　中国縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査を行った。第4章第4節に報告

なお1号墳では葺石を有したが，ほかの古墳には葺石や埴輪など古墳の外部構造と考えられるものは何も確認できなかった。

以上が光坊寺古墳群を形成する各古墳の外観である。3号墳～6号墳は直径が10m未満であるが明瞭な墳丘を有する。7号墳と8号墳は直径に対して墳丘が低い。9号墳と10号墳（11号墳も含まれるかもしれない）は，円墳の可能性が強いが方形墳の可能性もある。

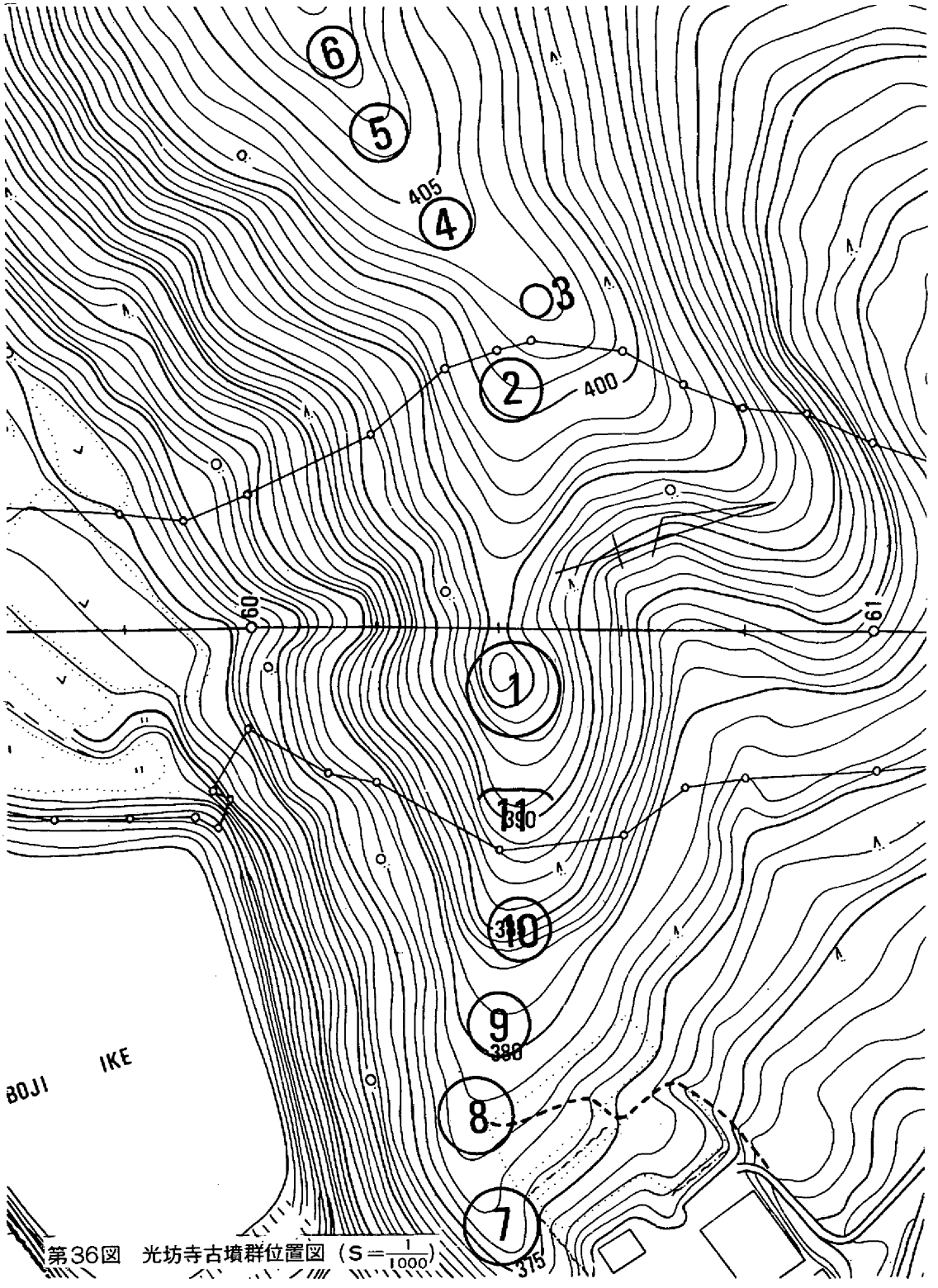
各古墳の内部構造を調査せず外観だけから考えるのは早計かもしれないが，光坊寺古墳群を形成する各古墳には4タイプがある。つまり傑出した1号墳（立地条件から2号墳も含まれるかもしれない），3号墳～6号墳のグループ，7号墳と8号墳，9号墳と10号墳（11号墳も含まれるかもしれない）がそれである。（福田）

第2節　1　号　墳

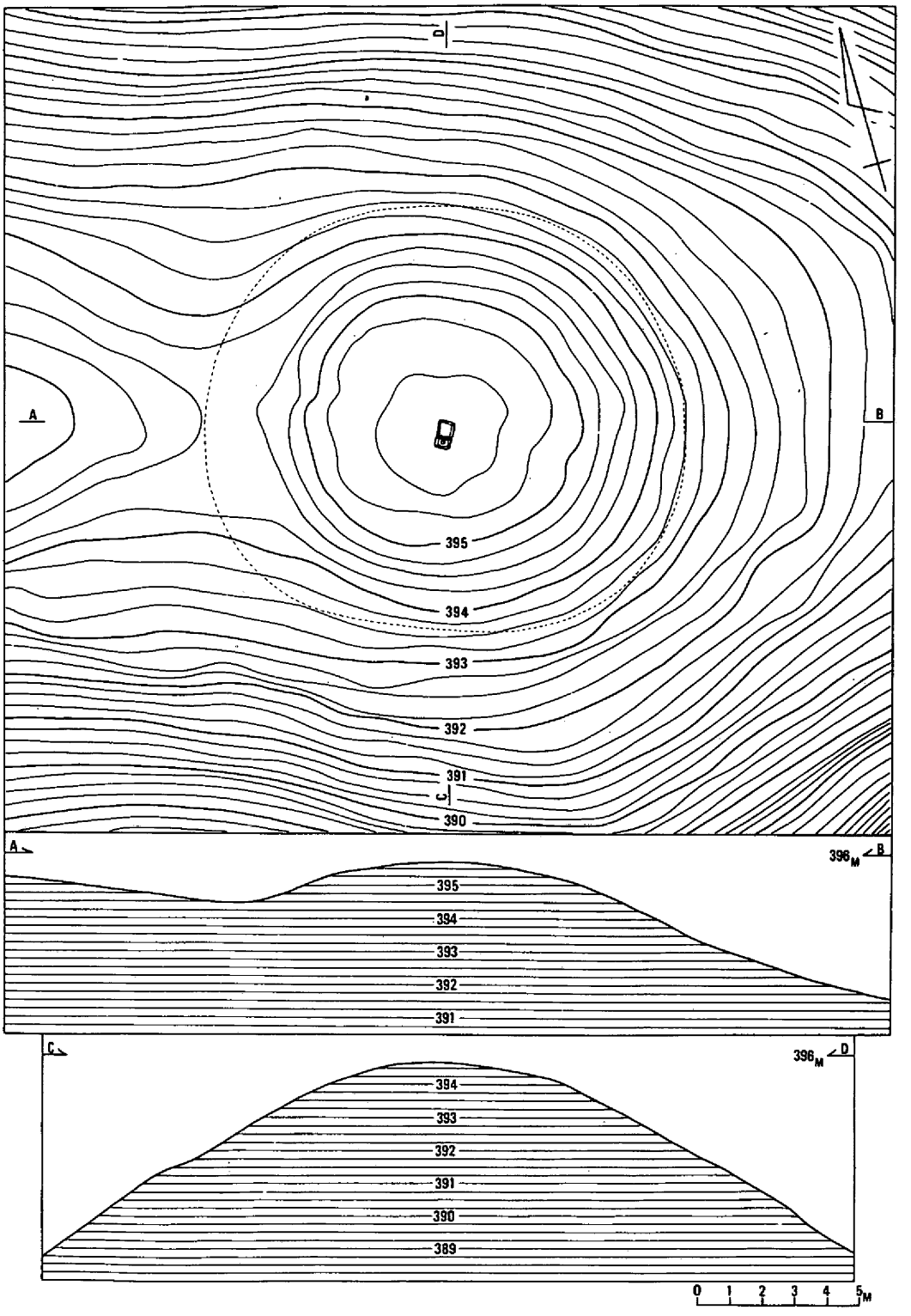
1）調査の進め方

発掘調査に必要な資材を搬入した時に，種々の方向から古墳の調査前全景写真を撮った。現地では，まず下草刈りを全員で行った。

1号墳の西脇にある道路用地のセンター杭（STA60＋40）を起点に，1区の尾根上を縦断する中



第36図　光坊寺古墳群位置図（S＝$\frac{1}{1000}$）



第37図　1号墳調査前地形　(S＝$\frac{1}{200}$)

央基準線を決め，5m×5mのグリッドを設定した。このグリッドは3区の尾根にも延長し，起点からN1，N2，……，S1，S2，……，E1，E2，……，W1，W2，……の番号をつけた。グリッド設定後，海抜高を三角点から求め，100分の1のスケール，25cmのコンターで地形測量を行った。2区については，トレンチ調査によって遺構の存在が確認できればグリッドを延長し，詳細な地形測量を行う予定にしていたが，第2章で記述したように遺構らしきものは何もなかったので，トレンチの位置を記入するにとどめた。

地形測量図作成後，1号墳独自のトレンチを設定し，2号墳と並行して調査を行った。

墳丘上に十字の畦を残して外部構造の検討を行ったところ，上段と下段とからなる2列の葺石を確認した。したがって，葺石の調査に長時間必要と考えたため，2号墳の調査に従事していた人の応援を求めた。そうして現在の葺石の状態を調査するために清掃を入念に行い，写真撮影と図化を行った。その後；石列の構築順序と構築状態を検討した。

内部構造の調査では破壊されていたものも含めて5主体部を検出し，副葬品が出土したので細かい作業が要求された。5主体部のうち第Ⅰ主体部は小石室のため，構築過程を追求しながら解体した。第Ⅳ主体部は一部を盗掘されていたが，長大な土壙内の木棺痕跡追求に努力した。第Ⅴ主体部は木棺痕跡追求後，土壙を掘込んだ工具痕の検討を行った。

また1号墳から尾根の高位方向に調査範囲を拡張し，墳丘の成形を調べるとともに，1号墳に付属する遺構の確認を行った。

なお外部構造も内部構造も調査を終了した段階で，古墳が築造される以前の旧地形を検討すをために，墳丘の盛土を全面除去した。（福田）

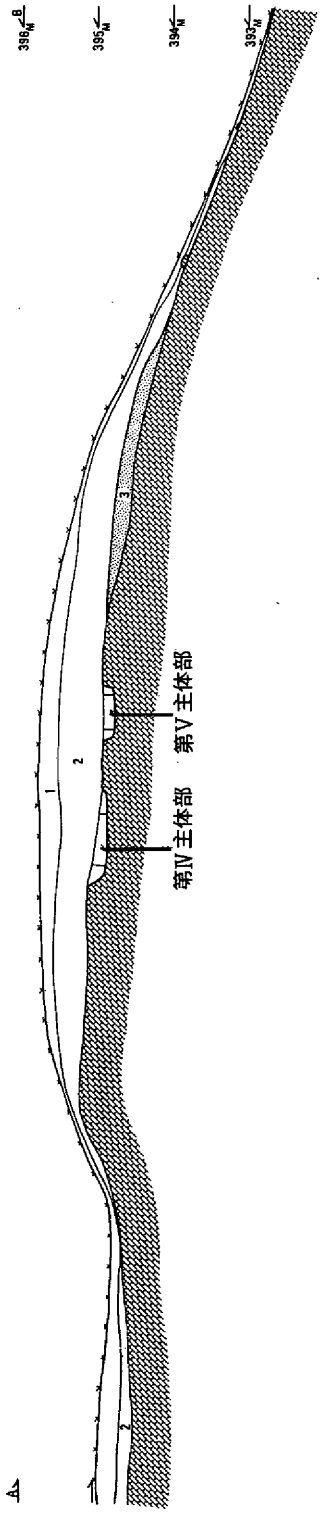
2） 調査前の外観

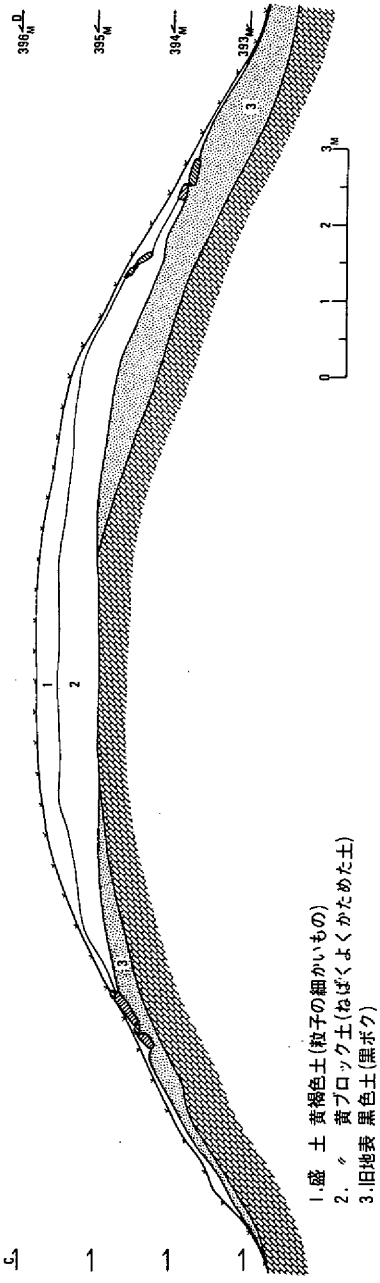
1号墳は中国縦貫自動車道用地のセンターから，やや下った尾根上に存在する。この尾根上には細い山道があり，墳丘を南北に二分している。調査中にも山仕事に出かける古老の姿が見られた。墳丘頂上には五輪塔が置かれていた。その周辺が凹んでフットボール大の割石が散在していたので，主体部は盗掘されていることが予想された。墳丘端部にも人頭大の割石や拳大の礫が散在していたので葺石（註19）が存在する可能性があった。

この1号墳は2号墳の位置する尾根の高い方向から眺めると，墳丘の高さが目立たないが，神代川沿いの平野部から眺めると実際の規模より大きく見える。1号墳から眼下に目をやると，哲西町矢田地区の平野が一望に見渡すことができる。（福田）

3） 墳丘

1号墳は舌状に張出した山稜の尾根上に所在することは前述した。この尾根は両側が急斜面になっていてほとんど平坦面を有しない。遠方からこの尾根を眺めると，1号墳の位置は2号墳の方向からゆるやかに下るスロープが，やや角度を変えてさらに下る変換点になっている。だから古墳の築造する段階では，自然地形に大きく左右されたであろうことは想定できる。2号墳に寄った墳丘西側の尾根の





第38図　1号墳墳丘土層断面（S＝$\frac{1}{100}$）

高い位置においては，表土直下が地山になっていた。この地山面は，現代のコンクリートを思わせるように堅く，堆積土との区別は明瞭であった。しかも古墳築造作業当時の使用道具でできたと考えられる痕跡が随所に残っていた。南西部分では墳丘端部に地山が露出しており，この箇所だけは葺石がない。

墳丘上は後世に五輪塔を置いたこともあって，かなり扁平になっていた。調査前には葺石が埋れていて，調査中に多量の土を除去したことから，築造当時より墳丘の高さが低くなっていると考える。さらにこの古墳は２列の葺石を構築し，上段と下段の葺石の間にはテラスを有するので，墳丘が２段造りを呈していたといえるようである。ところが下段の葺石は尾根の高い位置では存在しない。この部分では上段の葺石のレベルまで地山が上ってしまっているので作業を省略したと考える。したがって尾根の高い位置から眺めると，あたかも１段だけの築成に終っているように見えるのである。

墳丘を山稜の張り出した東西方面に切断して観察すると，尾根の高い位置は地山を削り出して墳形を整えているが，中央から尾根の低い位置は，旧表土をそのままに残して，その旧表土の上に地山を削り出してできた土を乗せている。そして墳端部分は地山を若干削り出して墳形を整えている。

この１号墳は，斜面に面した北と南では立地した地形に左右されて葺石が直線的に並ぶという特徴をもつため，山稜が張り出した東西方向に多少長くなっているが，本来は円墳であると考える。下段の葺石の基底部を墳端と考えると，東西14.40m・南北13.65m・墳高2.0mを測る。　（福田）

4）外部構造

光坊寺古墳群を形成する古墳のうちでも，１号墳が傑出した存在であると考えるのは，外部構造としての２列の葺石を有する古墳であるという点があげられる。墳丘をＡ区からＦ区まで便宜的に分割（第39図）し，葺石について記したい。Ｂ区とＣ区の境は現在の山道によって葺石が途切れている。Ｃ区とＥ区の墳端には転落したと考えられる石が集積していた。また上段下段とも基底部には比較的大きい板状の石を貼り付けるように置いて，円弧になる基線を形成している。その基底部の石の上には，人頭大から拳大の石を不規則に置いていた。

上段の葺石　残りは比較的良好である。

Ａ区は基底部が直線的になっており，大きい石でまとめている。小さい石は不規則に散在して検出されたが，それは墳端が急斜面に位置するため転落したのかもしれない。またこの部分のＦ区側では，地山が露出している箇所があるにもかかわらず，石を地山面に密着させるのではなくて，置土をした上に並べている。Ｂ区側では旧表土面が残っているので，その面を石の大きさだけ掘り凹めて石を並べている。上下に石を置くには，基底部の大きい石の上位に接して板状の石を貼り付けている。このＡ区では，Ｂ区側からＦ区側に向かって葺石を構築していた。

Ｂ区は基底部が不揃いである。原位置にあった基底部の石が転落してなくなっているのかもしれない。ここでは旧表土面上に盛土をしていたので，盛土の上に石を並べている。

上下に石を置くには，貼り付けているものと小さい石を積み重ねているものとがある。

葺石の構築はＡ区側からＣ区側に向って行われており，Ａ区の構築順序とは逆の現象を呈している。

Ｃ区の中央部分からＤ区の手前までは，原位置を維持している石は数量的に少なく，転落または流

第39図　1号横葺石区分図（S＝$\frac{1}{100}$）

失している。このことは墳端に集積している石が多い点からも考えられる。このC区に使用している基底部の石は，ほかの区よりも大きい石が多く見られ，厳選されている。このことは1号墳を平野部から眺めた場合に，正面になるということを意図した結果であろうと考える。基底部の石は盛土中に置き，その上に置く石は貼り付けているものが多い。小さい石を積み上げていた部分は，転落して残っていないのかもしれない。ここではD区側からB区側に向って葺石を構築しており，B区の構築方向とは逆になっている。

D区はほかのどの区よりも残りの良好な地点である。基底部の石は貼り付けたように立てて置き，A区と同じように直線的に並べている。旧表土面の上に石を置いていたにもかかわらず，安定した状態で残っていた。基底部の石の上位に石を置くには，板状の石を貼り付けて置くのと比較的小さい石を積み重ねるという2つの手法を併用している。構築順序はC区側からE区側に向って行っている。ここでも隣りのC区と構築方向が逆になる。

E区のF区寄りの地点では，ほかの区で基底部に使用している大きい石は存在しない。人頭大から拳大の石が，6個まばらに確認できるだけである。この場所は，平野部から眺めた場合に隠れてしまって見えないために，構築当時から大きい石を置いていなかったと考える。D区との境では転落している石があり，基底部の石がなくなっている箇所も見られる。ここでは置土をした上に基底部になる大きい石を置き，その上に小さい石を積み重ねている。構築順序はD区側からF区側に向って行っており，D区の方向と同じである。

墳端に多くの石が集石していることから，F区寄りの位置にもかなりの数にのぼる石が置かれていた可能性が考えられる。ここでは構築された基底部のレベルが高い位置で残っているために，葺石を構築する過程においても，地形に左右された結果であろう。

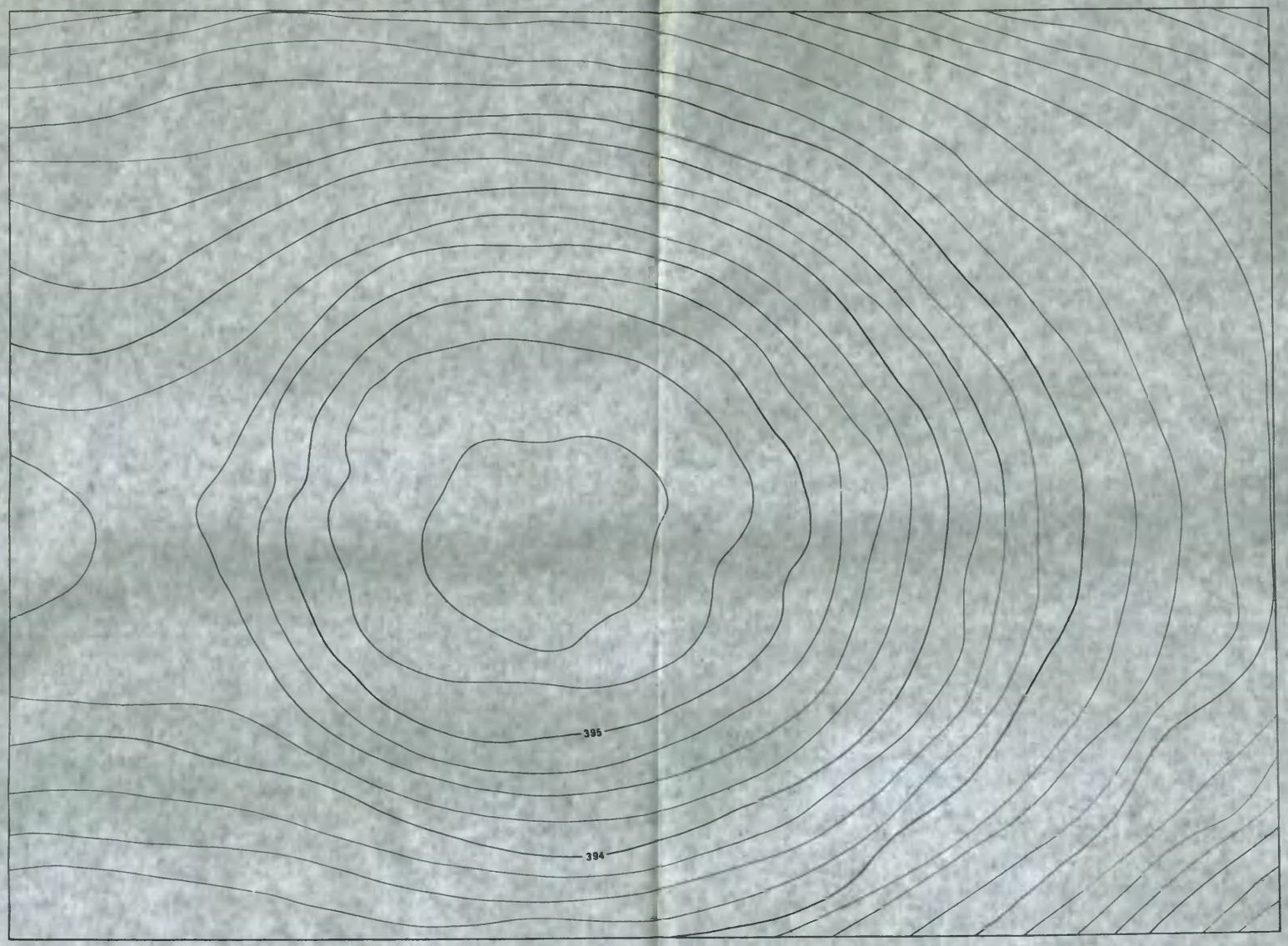
F区は地山面が露出していて葺石は存在しない。もともと葺石を構築しなかったのか築造後に流失してしまったのか不明である。

下段の葺石　上段の葺石に比して残存状態は悪い。

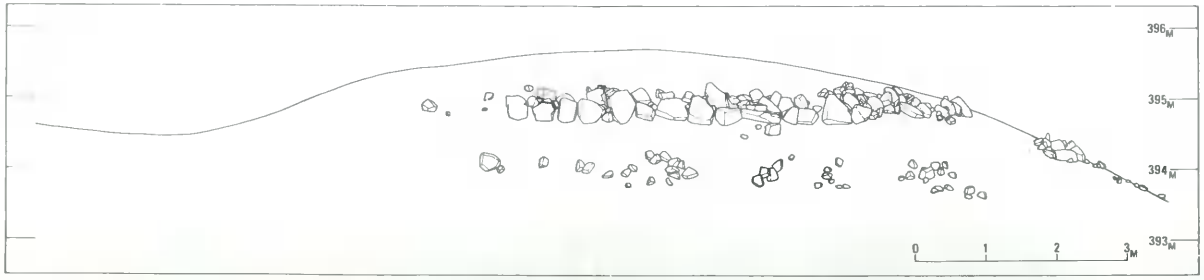
A区ではほとんどの石が流失して確認できた石は少量である。しかも原位置を維持しているものは2石か3石である。地山が露出していたけれども，置土をした上に置いている。

B区はA区寄りの位置に人頭大の石が18石確認できたが，葺石を構築した当時のままで残っているものはなく，上段から転落した石がこの地点に集まっていると考えた。C区寄りの位置には，局地的ではあるが比較的良好な状態で葺石が残っていた。この部分は尾根の頂上部に位置するし，旧地形を若干削り出して墳形を整えているため地山が露出していたが，A区やE区の上段の葺石のように，置土をした上に石を置いている。基底部の大きい石の上にも同じ程度の石を貼り付けて置き，その間は小さい石を積み重ねている。このB区の中間は葺石が残っていないが，本来はC区寄りのような葺石が構築されていたと考える。なぜなら，C区と同じように平野に面した位置であるから，外部構造を構築する時には，この古墳がより目立つように効果を意識していたと考えるからである。作業はA区の方から行われており，上段の構築方向と一致する。

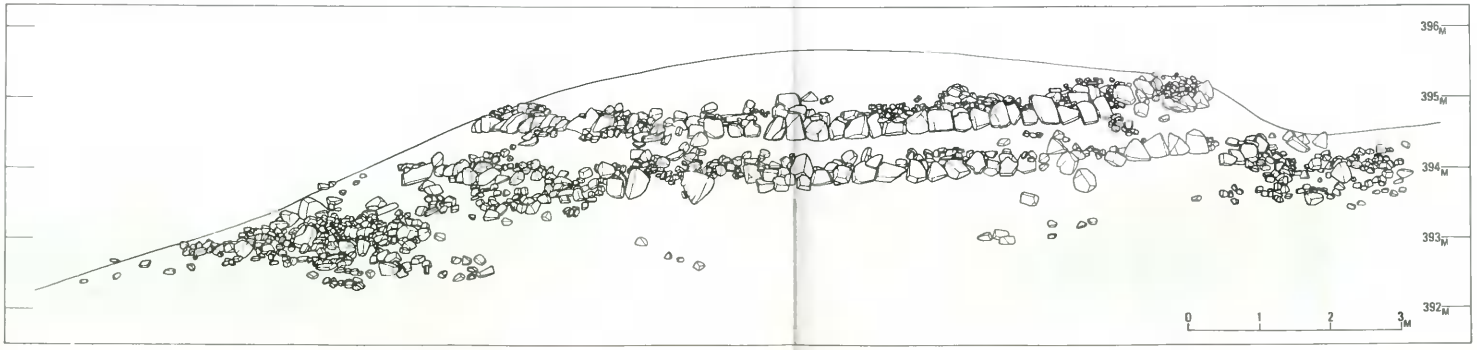
C区では墳端に転落した石が多量に散乱し，原位置に残っている石は少ない。わずかに基底部に置


395
394

第40図　1号墳遺構配置図（S＝$\frac{1}{80}$）



第41図　1号墳墳丘側面図（南から）（S＝$\frac{1}{80}$）



第42図　1号墳墳丘側面図（北から）（S＝$\frac{1}{80}$）

かれていた石が残っているだけである。ここでも地山面に直接石を置くのではなくて，置土をした上に置いている。構築作業は上段と同じように，D区側からB区方面に行っている。

D区は下段の葺石のうちでは最も残りの良好な地点である。墳端が2区の谷部分に面しており，基底部の石は上段の葺石の並び方と同様に直線的な様相を呈している。基底部の石は旧表土面に石がおさまるだけ掘り凹めて貼り付けたように置いている。基底部の石の上位には大小種々の石を不規則に置いている。C区に近い位置では，基底部の石の上位に置いた石が，板状の比較的大きいものを採用しているので貼り付けた状態になっている。中央からE区寄りにかけては小さい石を積み重ねている。作業はC区側から順々にE区側に向って行われていた。このD区の上段の葺石では，板状の石をほぼ垂直に立てて並べた状態になっているが，下段の葺石では墳丘面に沿って貼り付けられている。

E区のD区寄りの部分では，基底部の石はほぼ原位置に存在しているが，墳端に多量の石が集積しているところから，小さい石は転落したものと考えられる。原位置に残っている石は旧表土面に置かれていた。F区寄りの位置では，地山の高さが上段の葺石のレベルに達するため，葺石を構築することが不可能であることから作業を省略したと考えられる。構築作業はD区側から行われており，上段の構築方向と一致する。

F区は墳丘の形を整えるために削り取られた所である。全体に地山面が露出し，葺石は存在しなかった。古墳が築造された時から葺石が存在しなかったのか，後になって転落してしまってなくなっているのかはっきりしない。E区寄りの地点では，地山のレベルが高いために，葺石を構築することが不可能であったと考えられる。

以上のことを表にまとめると次のようになる。構築方向というのは墳端から墳頂を眺めて得られた結果を矢印で示した。

光坊寺1号墳の葺石構築法（表6）

項目／区	列	葺石下部	基底部上位の石	構築方向	残存状態	備考
A	上段	置土　旧表土	貼り付け	←	良	急斜面に位置する
	下段	置　土	不　明	←	流　失	
B	上段	盛　土	貼り付け　積み重ね	→	やや良	
	下段	置　土	貼り付け　積み重ね	→	流　失	局部的に残存する
C	上段	盛　土	貼り付け　積み重ね	←	やや良	墳端に転落した石多数
	下段	置　土	不　明	←	不　良	
D	上段	旧表土	貼り付け　積み重ね	→	良	
	下段	旧表土	貼り付け　積み重ね	→	良	
E	上段	置　土	積み重ね	→	やや良	F区寄りの地点には存在しない
	下段	旧表土	不　明	→	不　良	墳端に転落した石多数
F	上段					葺石がない
	下段					

上段の葺石と下段の葺石の間には 約1.0mの間隔がある。この場所では下段の葺石間より土師器小片が1点検出された。墳端部及び葺石の間においては遺物は存在しなかった。

B・C・D・E区の上段の葺石の上位に，比較的小さい石を置いているところがある。そこに石を環状に置いた地点を確認した（図版25—1）。墳丘上に点々と存在し，ほぼ等間隔の位置にあるため，環状になっている内部を精査したけれども何も検出できなかった。

2号墳の南側は比較的平坦でテラス状になっている。ここには岩盤が露出し，打ち砕かれた大きな岩があちこちに存在していた。この岩は1号墳の葺石に使用していた石と同質のものであった。1号墳の葺石に用いられた石は莫大な数量になるため，すべてのものをまかなうことは無理であったかもしれないが，近接地から持ち運んだであろうということは考えられる。

葺石の基底部のレベルは各区によって若干の相違がある（第41・42図）。A区からB区にかけては394.60mの高さを基準にしているが，B区側がやや下がった位置に構築している。C・D・E区では394.50mを基準にしているけれども，E区に近くなるほど高い位置に構築（E区の端では395mの高さにまで達する）し，基底部の線が水平になっていない。この現象は下段についても同じことである。つまりA区は394mを基準にしていると考えられるが，B区の端では394mよりやや高い位置になり，C区からD区にかけては393.80mまで逆に下っている。さらにD区の中央から序々に高い位置になり，E区の端になると394.40mの高さまで達する。このように基底部の石の端は水平な位置になっていないのである。

次に1号墳から2号墳方向に連なる尾根の現状が，仮に1号墳が前方後円墳であるならば，前方部を想定させる形になっていたので，1号墳の主軸を延長してトレンチを設定し，さらに周囲に拡長して全面発掘を行った。

その結果前方後円墳と考えられる要素は全く確認できず，1号墳は山稜の張り出した方向が14.40mそれに直交する方向が13.65mのやや変形した円墳であることが判明した。それとともに尾根上の地山面に，幅約60cmの凹地が2号墳の方向から連続していることを確認した。この凹地は1号墳の手前で南方向に屈曲し，それより先は精査したにもかかわらずはっきりしなかった。1号墳の墳丘の形を整えるために削り出した地山面に凹地が連続していたので，1号墳の築造当時のものであると考えられた。尾根上に残された溝状の痕跡であることから，1号墳に関連した「道」であろう。（福田）

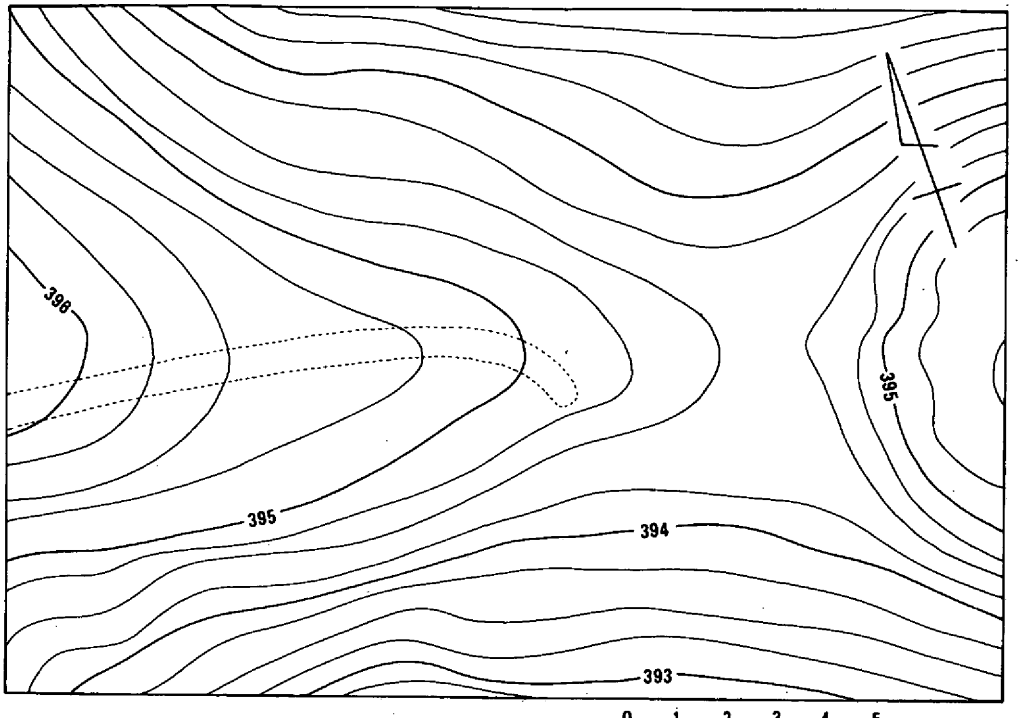
5） 内部構造

外部構造の調査と並行して内部構造の調査を行った。墳丘を横断するように東西・南北の2方向に，墳頂部で直交するトレンチを設定し，地区を便宜的に決めて調査を進めた。

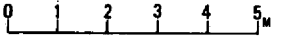
墳頂に五輪塔が置かれて周囲が凹み，人頭大の石が散乱していたので，この古墳は盗掘されていることが予想された。調査結果は5基の主体部を確認した。調査中に確認した順序に従って，第Ⅰ主体部，……，第Ⅴ主体部とした。各主体部について記述したい。

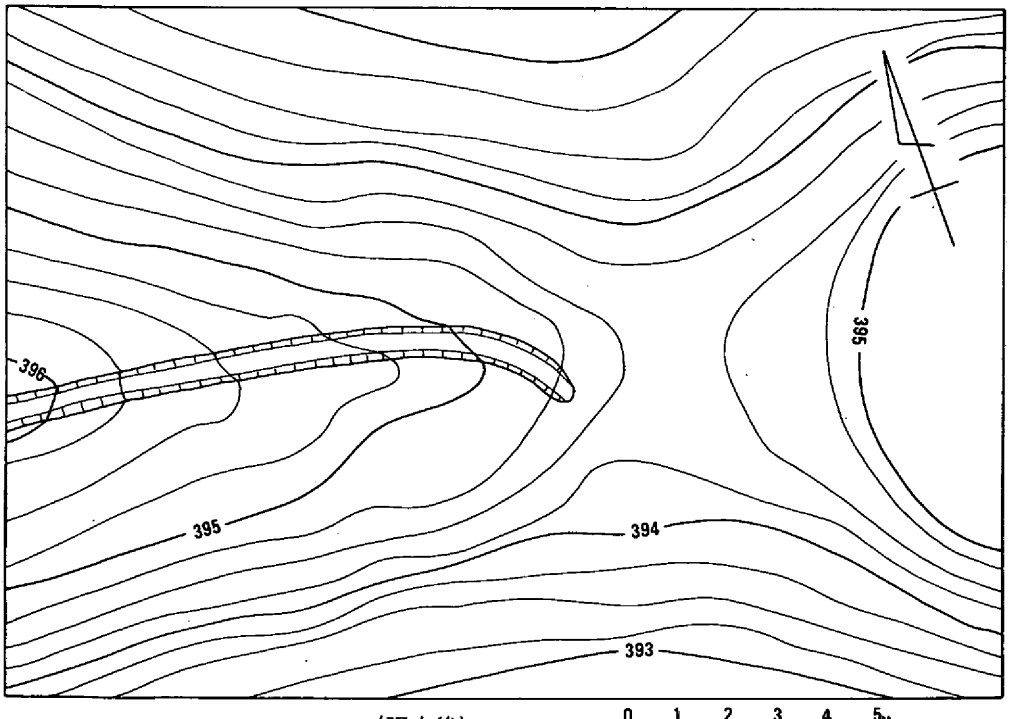
第Ⅰ主体部（第44・45図，図版18・19）

墳丘上の調査を開始した直後に，表土下20cmのレベルで板石を検出した。その位置が墳丘中央から

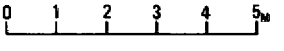


(調査前)





(調査後)



第43図　古道（S＝$\frac{1}{150}$）

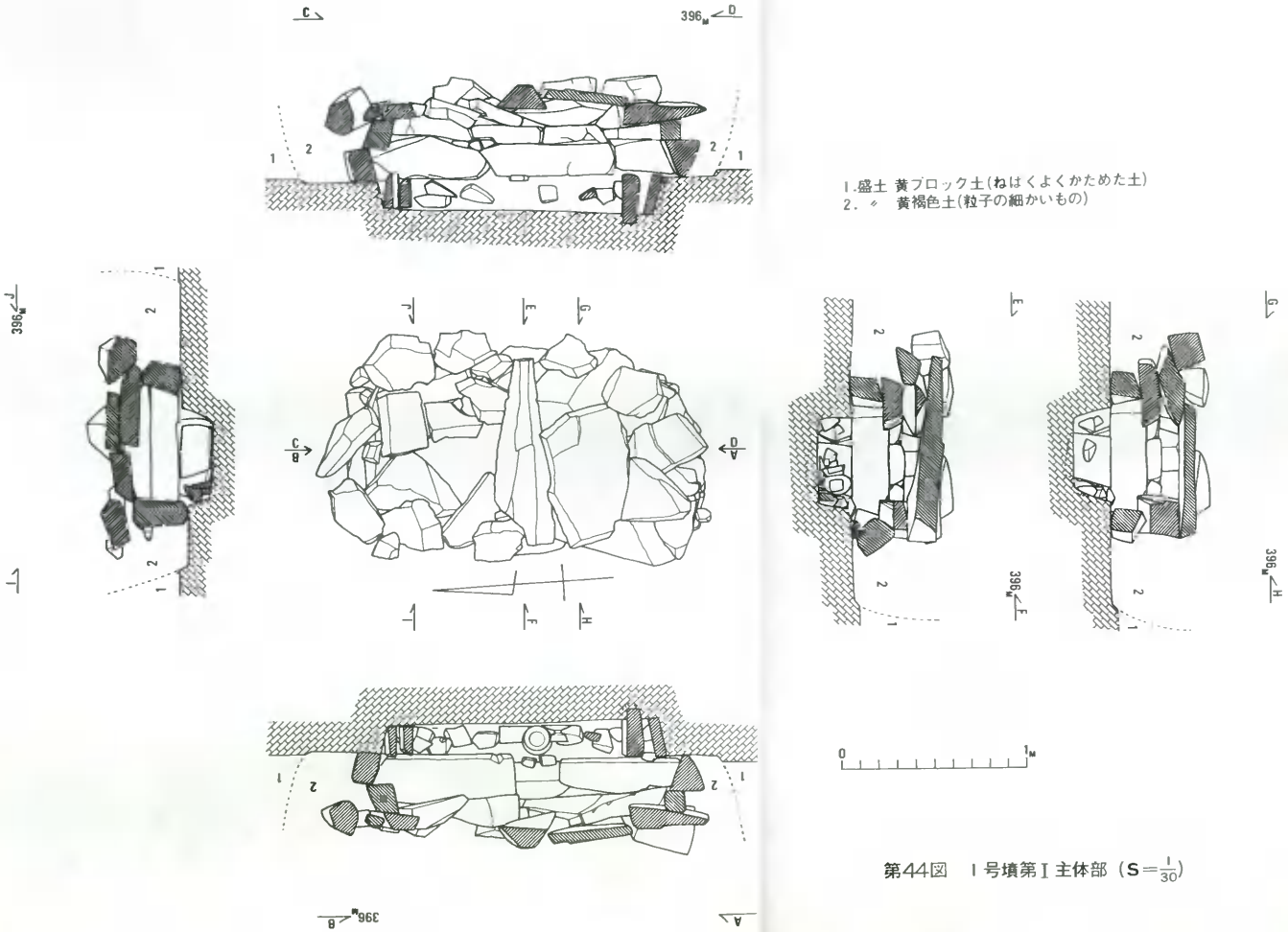
はずれたところであるため，周囲を精査して天井石と断定できる石を確認するまでは，主体部であるとは考えられなかった。墳頂部で直交するように土層観察の畦を残していたので，この第Ⅰ主体部に畦が横断していないため，即時この第Ⅰ主体部用のトレンチを設定した。天井石は残存しているものが２枚である。ほぼ中央に位置する天井石は，長さで1.05ｍもある細長い板石を，南側のものは，長径75cm・短径45cmの板石を使用している。前者を先に後者をその後に重ねるようにして置いている。南側の板石は１人で持ち上げることができたが，細長い中央の石は２人で持ち上げるのがやっとであった。北側には天井石が残っていなかった。細長い石を使用していたと仮定するならば２枚，幅広い板石を用いていたならば１枚の天井石が欠けている。天井石のまわりには人頭大の角張った石を配していたが，粘土の使用は全く認められなかった。

この第Ⅰ主体部で特記すべきことは，地山を掘り込んだ土壙の上に石室を構築しているということである。したがって次に記述する石室の壁は，土壙を取り囲む地山上に築いた石組のことである。地山上に土壙を囲んで置いた最下位の石は，南北両小口とも１石，東西両側壁に各々３石を配している（第45図３）。いずれも細長いコンクリートブロック状の石で，長辺を上にして立てている。西小口の石を置いた後に，東側壁では北から順々に石を並べているが，西側壁では西小口に接する位置に石を置いた後に，中間を埋める形で人頭大の石を横口積みにしている。適当な規格の石が見つからなかったらしく，拳大の石２個を下にかませて安定を保っているが，内側の面が揃っていない。中間には拳大の石を置いているが，透間を埋めるというよりは石の安定を意図したものと考える。これらの石の上面はほぼ水平になっており，上に石を置くことを意識したからであろう。内法は長径1.55～1.60ｍ，短径60～65cmで若干広い。

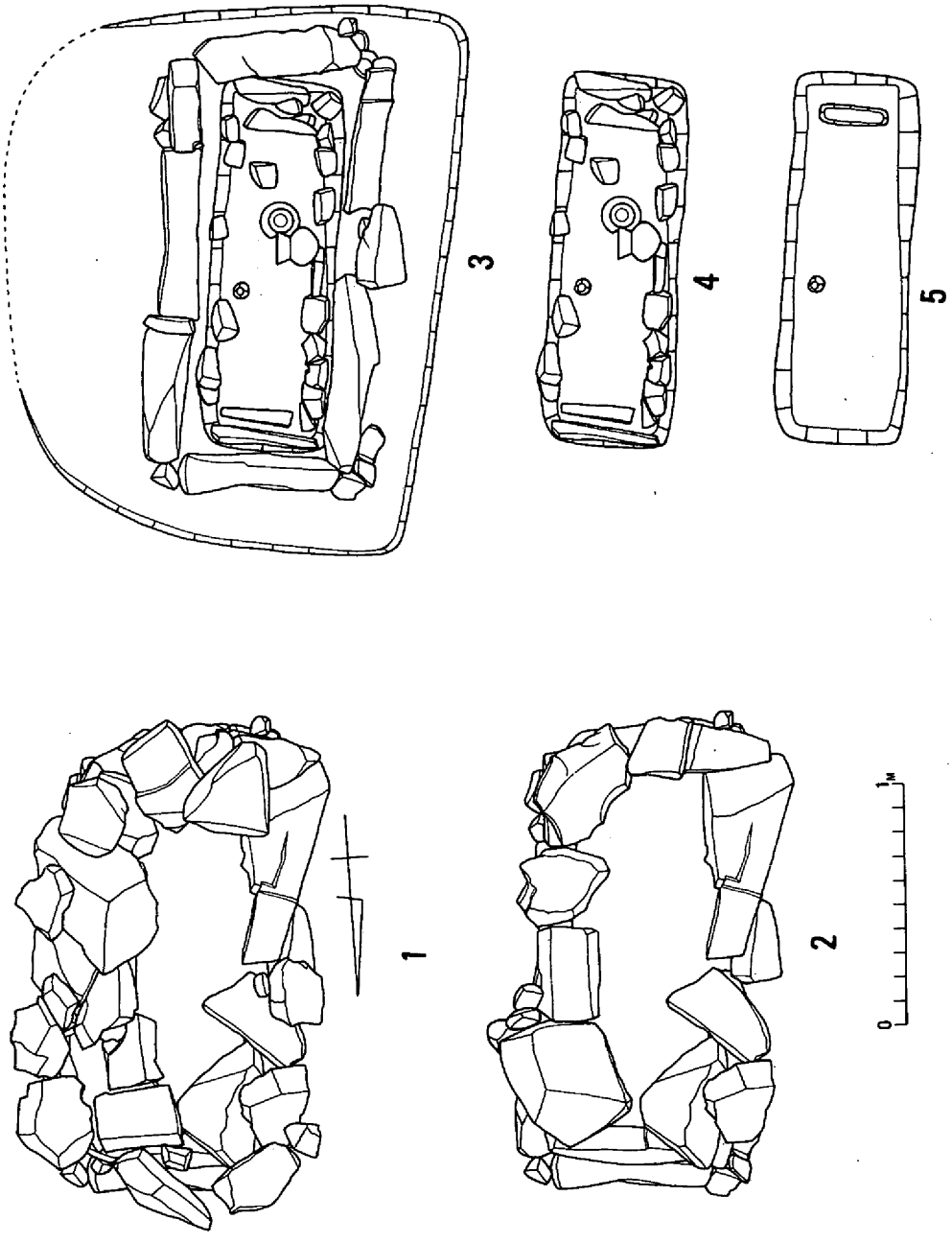
２段目の壁は，前述した最下位の石の置き方と状況を異にする。北小口部分では細長い石を下位の石より内側に置き，その石を土台にして両角を覆うように，比較的大きい扁平な石を内側に張り出して置いている。西角の石は不安定であったらしく，上に控え積み石を乗せている。南小口部分に，北と同じように細長い石を下位の石よりやや内側に置き，東角ではその石を土台として，板状の石を角を覆うように斜め方向にして置いている。西角は安定した大きい石を角の位置で張り出すように置いている。このように２段目の石は両小口から各々の石が内側に張り出すように構築している。

３段目の側壁は東と西で相違している。東は２段目の石の上に更に面的に石を並べている。角張った扁平な石が多く，規模は比較的大きいものから小さいものまで種々多様である。積み方では規則性はなく小口積みとも横口積みとも断定できない。２段目の石より更に内側に張り出し，控え積み石を用いている。これらの石は北小口方面から南に向って置いたと考えられる。上面は天井石が安定した状態で乗せることができるように考慮している。西は２段目の石の間に人頭大の石を部分的に置いているだけである。２段目に使用した石が厚いため，更に石を置くと東の側壁の高さと均衡がとれないので，作業を省略したと考える。西小口の部分は人頭大の石を２段目より内側に置き，天井石を乗せる面積を少なくしている。

以上述べた壁には，朱やベンガラの付着は全く認められず，構築において粘土を使用した痕跡もない。全体にいわゆる「持ち送り」造りにしているが，雑然と石を並べたという感が強い。



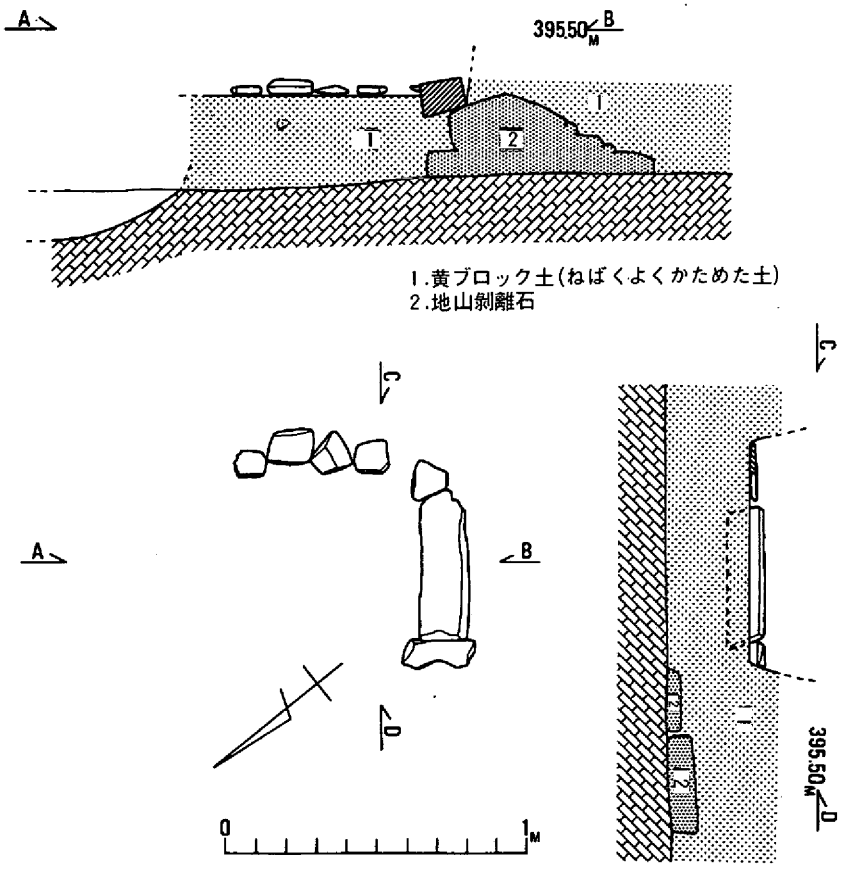
第44図　1号墳第Ⅰ主体部（S＝$\frac{1}{30}$）



第45図　Ⅰ号墳第Ⅰ主体部解体図（S＝$\frac{1}{30}$）

次にこれまでに記した石室内の下位に位置する土壙について説明したい。

平面形はほぼ長方形を呈する。上端で長径 1.54m・北短径 52cm・南短径 50cmを測る。床面で長径 1.44m・北短径 40cm・南短径 38cmを測る。土壙の両小口には掘り方に密着して板石を貼り付けている。その内側には両方とも幅約 4 cmの間を持って板石を立てている。その板石の両小口とも側壁には接していなくて，床面で 3～7 cmの間隔を有する。しかも南側の板石は床面の地山を更に約 5 cm掘り込んだ凹地の中に立っている。両側壁には，拳大の板石が壁にもたれかかる状態で残っていた。南寄りの土壙内には，拳大よりやや大きい石が床面から約 6 cm上面で存在した。床面のレベルは北が南より 4 cm程度高くなっていた。床面の中央部東寄りの位置に，直径 6 cm・深さ 4 cmの小穴を検出したが，性格は不明である。土壙内の木棺痕跡を追求した結果，両側壁にもたれかかっていた石の内側と，両小口部分の内側に立てていた石の内面に，木棺痕跡をかすかに検出した。遺物として**壺形土器** 1 点，**高坏形土器** 1 点が床面から約 2 cmの上面で出土した。この壺形土器は倒れた状態で出土したが，焼成後に底部を穿孔しており，破片の検出につとめたが見つからなかった。そのほかに北寄りの位置で，床面から 2 cm上で**鉄片**が出土した。小破片のため詳細は不明であった。



第46図　1号墳第Ⅱ主体部（S＝$\frac{1}{30}$）

この第Ⅰ主体部については種々の問題があるので，章を改めて考察したい。　（福田）

第Ⅱ主体部（第46図，図版20―1）

第Ⅰ主体部が墳丘中央から掛け離れた地点に位置するため，ほかにまだ主体部が存在することが考えられた。第Ⅰ主体部の調査に並行して，墳丘上に残した十字の畦の断面を観察しながら序々に掘り下げて行った。その結果，第Ⅰ主体部の南側の395.35mのレベルで長方形の板石を検出した。周囲を面的に拡張した結果拳大の石が並んでいた。これらの石の配列から判断して，主体部が破壊されて基礎の石だけが残っているものと考えた。床面に相当する位置では何も確認できなかった。構築された時から何も存在しなかったのか，後に破壊された時に持ち去られたか不明である。小口部分での幅は45㎝を測るが，長径についてははっきりしない。また掘り方は，石のレベルでやっと確認することができたが，それより上位は土砂が撹乱されていたので，はっきり確認することはできなかった。

この第Ⅱ主体部の床面は，地山から約30㎝上の盛土中に位置することから，1号墳が築造されてしばらく時間が経過した後に，この墳丘を利用して主体部だけを構築していたと考える。　（福田）

第Ⅲ主体部（第47図，図版21）

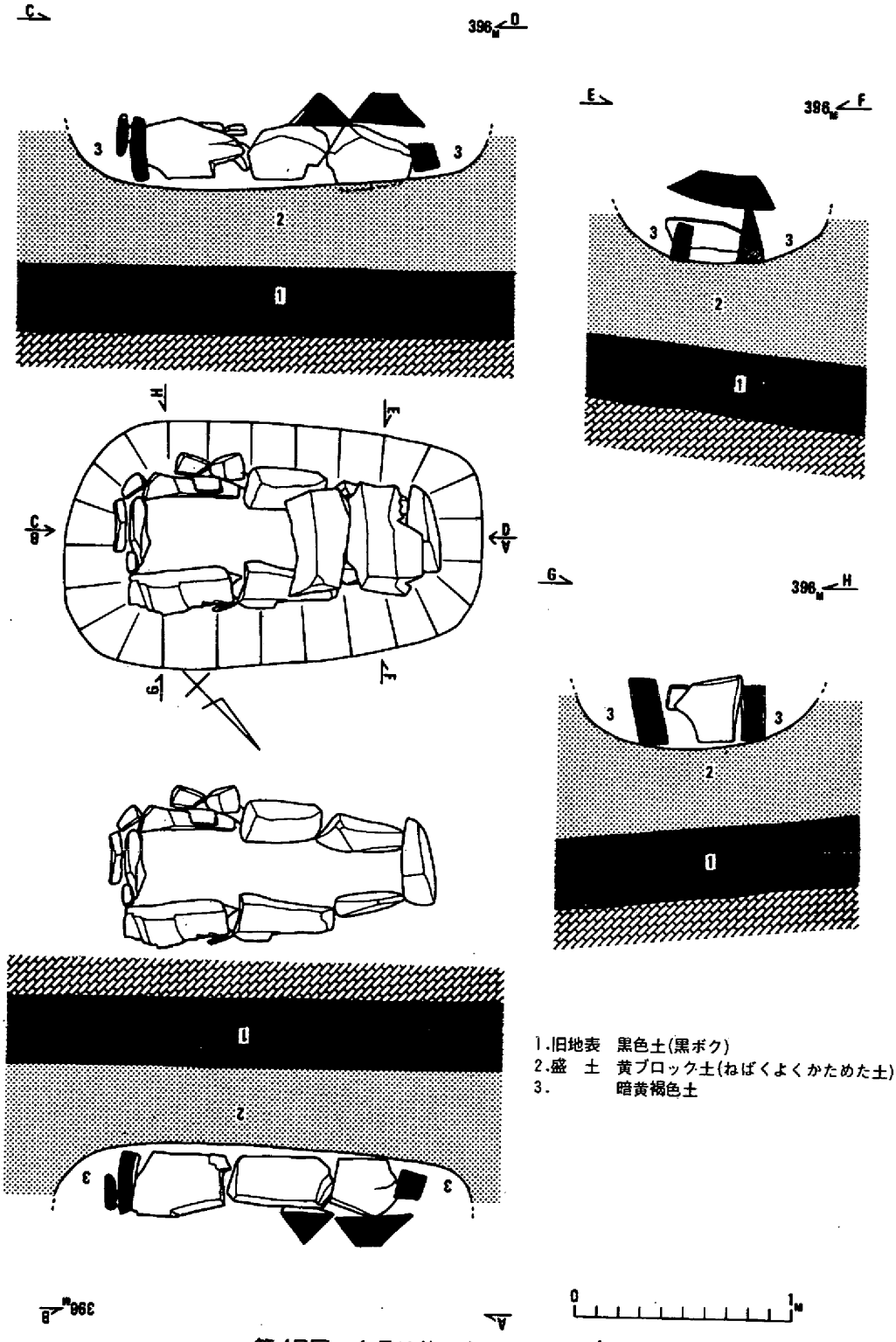
南北トレンチの北側断面に，表土下20㎝の位置で角張った石を検出した。現地表面から浅いところであるため，主体部の石であるかどうか疑問であった。この石の周囲を精査した結果，箱式石棺を確認した。天井石は2枚残存していたが，同規模の石が使用されていたと考えるならば，3枚の石が欠除している。天井石の周辺には，粘土の使用は検出できなかった。この主体部の内法は長径1.20m・短径は北西小口部分20㎝・南東小口部分34㎝・高さ27㎝を測る。したがって頭位は南東に位置していたと考える。両側壁には各々3石を配し，上面がほぼ同一レベルになるように並べている。床面には周囲の土砂を置いているだけで簡素なつくりになっている。内部には遺物は何も存在しなかった。この第Ⅲ主体部は，墳丘の盛土中でも現表土面から浅い位置に存在するため，掘り方の上位ははっきりしない。ただ主体部がおさまるだけの土壙を掘って箱式石棺を構築している。

第Ⅲ主体部は第Ⅱ主体部とほぼ直交する方向に構築されていた。しかも現表土面から浅い位置の墳丘盛土中に位置するところから，第Ⅱ主体部とほぼ同時期に，1号墳が築造されてしばらく時間が経過した後に，この墳丘を利用して主体部を構築したと考える。　（福田）

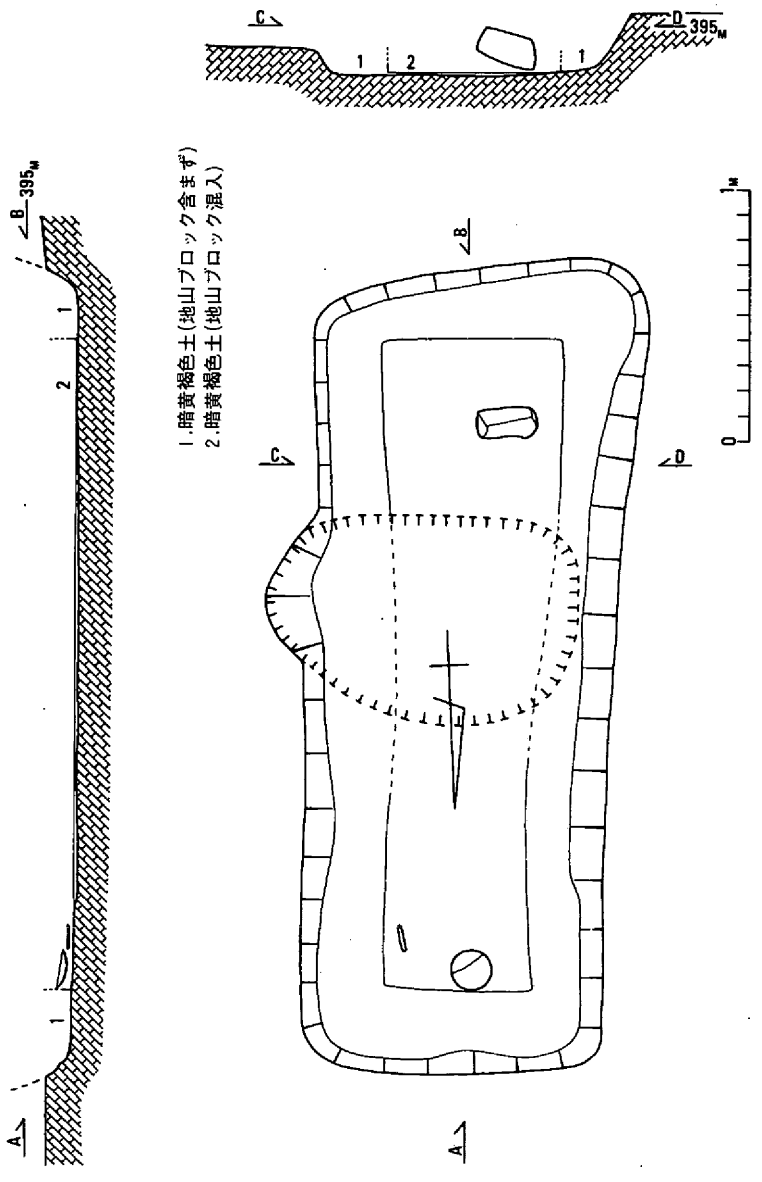
第Ⅳ主体部（第48図，図版22）

第Ⅰ主体部は墳丘中央から離れた位置であり，第Ⅱ・Ⅲ主体部はこの1号墳の本来の主体部でなく，後ほど構築されたものであると考えられるから，墳丘中央部にこの1号墳に伴う当初の主体部がほかに存在しなければ理解できないので，中央部の調査に全力を集中した。

第Ⅰ主体部の東側の位置で，地山面のレベルから第Ⅳ主体部を確認した。平面形はほぼ長方形を呈する土壙である。上端の長径3.20m・床面の長径3.03mを測る大規模なものである。上端の短径は北端で1.25m・中央で1.20m・南端で1.32mを測る。床面の短径は北端で1.00m・中央で1.00m・南端で1.20mを測る。調査以前に墳頂で確認した盗掘坑が，土壙の中央部にまで達している。土壙内には長径2.60m・北短径0.58m・南短径0.71mの木棺痕跡を確認したが，南に広く北に狭い歪んだ痕跡である。このことから頭位は南だと考える。



第47図　1号墳第Ⅲ主体部（S＝$\frac{1}{30}$）



第48図　1号墳第Ⅳ主体部（S＝$\frac{1}{30}$）

南寄りの位置では，床面から浮いた状態で人頭大の石を検出した。北端では**低脚坏**と**鉈**が出土した。

第Ⅴ主体部（第49図，図版22・23・24）　（福田）

＜位置＞

長径14.40m・短径13.65mを測り，ほぼ円形を呈する墳丘内に施けられた埋葬施設の1つである。海抜395m前後の平坦部に長径方向と直交し，ほぼ磁北に3主体部が並列している。第Ⅴ主体部はこれらの東端に位置し，木棺直葬の行なわれたものである。東西墳丘中心が第Ⅳ・Ⅴ主体部のほぼ中間にあり，南北中心もやはり第Ⅳ・Ⅴ主体部掘り方の中間にある。

＜掘り方＞

主体部の地山掘り方上面より表土までに約50～60cmの盛土がみられ，主に黄褐色の小礫を含む地山の土が使用されている。後世の撹乱にあっており盛土途中からの掘り方は確認することができなかった。地山面での掘り方上端は，長軸約2.75m・頭部幅0.82m・脚部幅0.68m，下端は，長軸2.62m・頭部幅0.70m・脚部幅0.58mを測り，南に向って尻すぼみの長方形プランを呈する。掘り方高は，頭部15cm・脚部27cmを測り多少南に傾いている。この傾きは，掘り方底に幅5～10cm・深さ5cmの溝が掘り込まれているのに一致し，溝南端では約30個からなる地山砂質礫が掘り方の高さ付近までピラミット状に積み重ねられていた。またこの部分は脚部上端計測値幅より広くなっており76cmを測る。

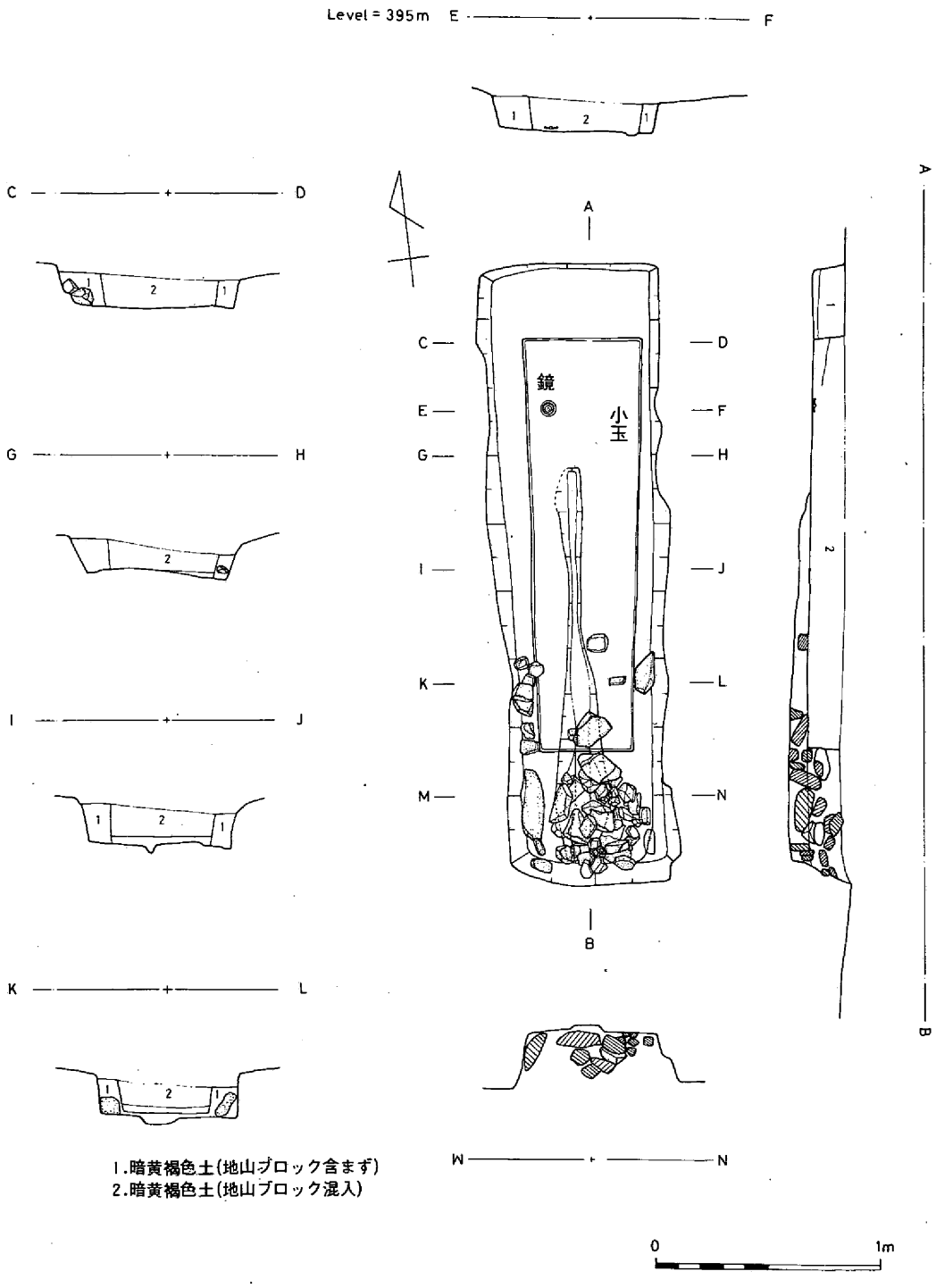
掘り方底には，この土壙を穿つ時点に使用された工具痕が頭部周辺を除く内面にみられる。幅5cm単位の工具が連続して直線上に移動し，それの左右拡大により平坦面を形成している。工具の移動は，脚部より頭部に向って進むものが大半をしめており，北側が終了した後に削り方向を変え，溝を南側にむかって掘り始め，脚部分で広く削平している（第50図）。

＜木棺＞

木質部を残すものではないが，土壙掘り方の北側寄りに掘り方プランと同じように南尻すぼみの木棺痕跡をとどめる。木棺規模は長軸1.83m・頭部幅0.53m・胴部幅0.48m，脚部幅0.43m，高さ0.15mを測るものである。棺底は南に傾斜している掘り方の底部に17×14cmの地山砂質礫をおくことにより，水平に設置されている。棺をおさめた後に，拳大の砂質礫を棺周辺につめて安定をはかり，埋土を行っている。木棺南端部の溝上には30個からなる砂質礫を積み重ねており，棺端を支えると同時に掘り方内にかぎり排水（溜り）の役目を果しているものと考えられる。

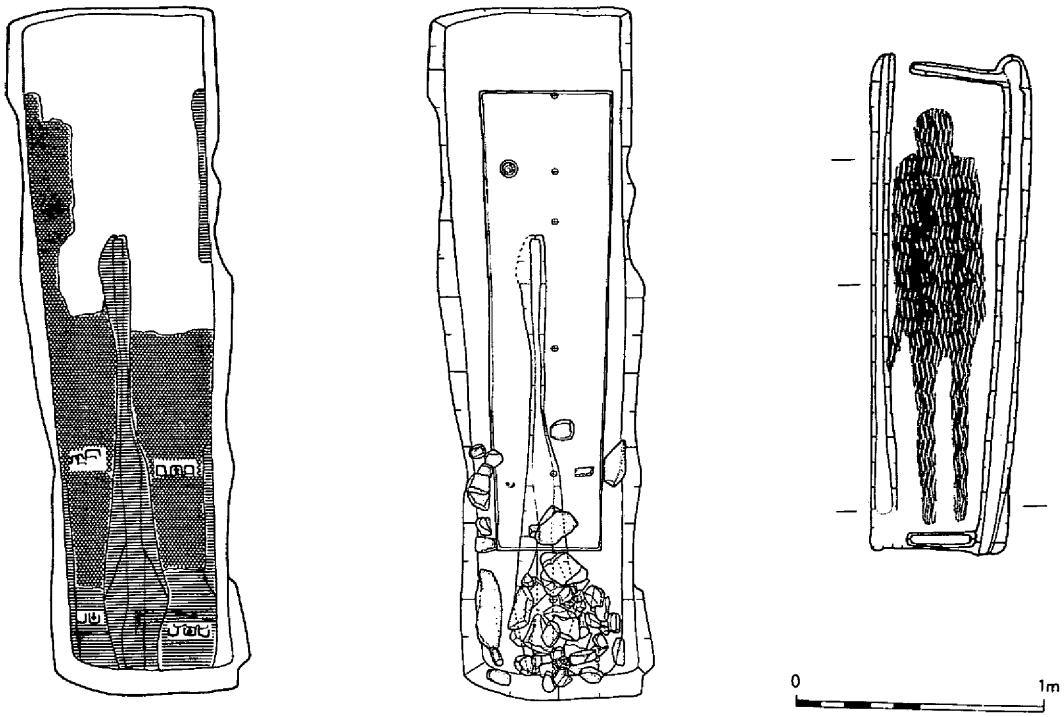
＜遺物出土状態＞

棺外の遺物は出土していない。棺内より**珠文鏡**1面，**ガラス小玉**が4点出土している。これらの遺物は，被葬者の頭部を中心にして副葬されていたものである。その状態は，被葬者が左右にガラス小玉2個を1セットにして耳飾りとしたものであり，鏡は頭部右側，肩のすぐ上に布で梱包されていたことを示していた。ガラス小玉は，頭部左右に2個ずつ出土しており，2・3が右の耳につけたもの，4・5が左耳につけたものである（第61図）。3は床面より約5cmほど上位において出土しており，2・4・5は床面にほぼ接する所で出土している。これは肉体の腐食状況によるものであろう。右耳の小玉2・3は小粒のものを揃え，左耳の小玉4・5は大粒のものを揃えているようである。鏡は，鏡背を上面に向け，鏡面がほぼ床面近く若干の間層をもって出土している。小玉2と同じレベル



1.暗黄褐色土(地山ブロック含まず)
2.暗黄褐色土(地山ブロック混入)

第49図　1号墳第V主体部（S＝$\frac{1}{30}$）



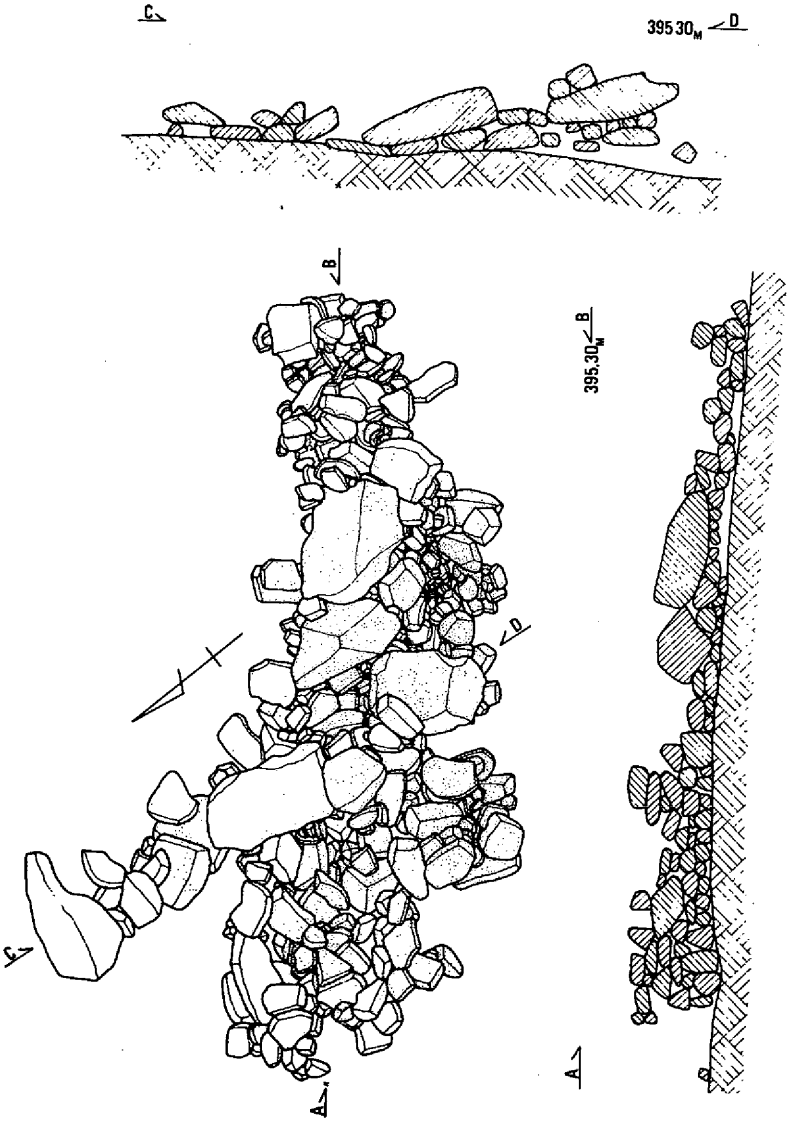
第50図　第Ⅴ主体部工具痕および木棺の比較（S＝$\frac{1}{30}$）

において検出された。これらの遺物が出土した頭部周辺は，棺内のほかの部分より土が暗く変色しており，30×40㎝範囲に朱（丹？）の分布がみられた。鏡面には布の痕跡がみられた。

＜木棺痕跡の比較＞

ここでとりあげる1号墳第Ⅴ主体部・2号墳主体部は木棺痕跡をよくとどめており，とくに2号墳にあっては「人形残影（ひとがたざんえい）」がみられ，ある程度の身体を推定することが可能である。まず2号墳の場合は側板・小口板の痕跡をよくとどめており，木棺内法長軸180㎝・頭部幅45㎝・胴部幅43㎝・脚部幅30〜35㎝・高さ20㎝を測り，脚部に向ってすぼまる長方形を呈する組合せ箱式木棺を考えることができる。この木棺内に約165㎝の身長をもつ被葬者が足を小口板一杯につけ，頭部小口板まで約10㎝の間隔をもち，横幅は短軸内法に接する状態で埋葬されていたことが推定される。

1号墳第Ⅴ主体部の木棺痕跡の内法は，長軸180㎝・頭部幅50㎝・胴部幅46㎝・脚部幅40㎝・高さ18㎝を測り，脚部に向ってすぼまる長方形を呈する箱式木棺を考えることができる。耳飾りに使用されたガラス小玉出土地点より，おおよその身長を推定すると，2号墳主体部同様に165㎝前後と考えられ，幅においてもほぼ同様のことが言える。これは，2号墳の「人形残影」をそのまま第Ⅴ主体部にもってきても比較的スムーズにおさめることができる。両棺とも，規模・形において非常な近似値を示していることに興味がもたれる。（高畑）



第51図　Ⅰ号墳集石遺構（S＝$\frac{1}{30}$）

以上に5基の主体部について記したが，1号墳築造当時での主体部は第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ主体部の3基である。墳丘上が後世に五輪塔を置いたり，盗掘にあったりして撹乱をうけていたため，各主体部の掘り方の検出が困難であったが，短期間の間に第Ⅴ主体部を構築し，その後第Ⅳ主体部を前者に平行して西脇に埋葬し，最後に第Ⅰ主体部を第Ⅳ主体部の西脇に構築していると考えられる。

第Ⅴ主体部の東側は主体部を構築するだけの空間があるけれども，盛土の下に旧表土が全面に残っており，人工が加えられた状況はなく，遺構は何も存在しなかった。

主体部以外の内部構造として，第Ⅰ主体部と第Ⅳ主体部の南側で第Ⅱ主体部の下部から，集石状の遺構（第51図）を確認した。ここに使用されているものは，墳丘の形を整えるために尾根の高い位置を削り取った時にできたもので，地山が板状に削れるためにできる堅い土の固まりである。第Ⅰ主体部と第Ⅳ主体部を取り囲むように構築しており，ここ以外の地点では類似の遺構は存在しなかった。この遺構は何のために構築したのだろうか。1号墳は尾根の高い位置を削り取って墳丘を整えていることは先にも記した。この遺構は地山が露出し，葺石も残存していない地点に近接していることから，墳丘の土砂の流失は古墳築造当時から考えられたため，土留用にこの位置だけに築いたのかもしれない。あるいは墳丘の形を整えて内部に第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ主体部を構築するために，掘り込んだ墓壙の法面が埋葬作業を進める過程で崩れる心配があったため，部分的に補強する目的で築いたものかもしれない。いずれにしても類例に乏しいためはっきりしたことは不明である。（福田）

第3節　2　号　墳

位置

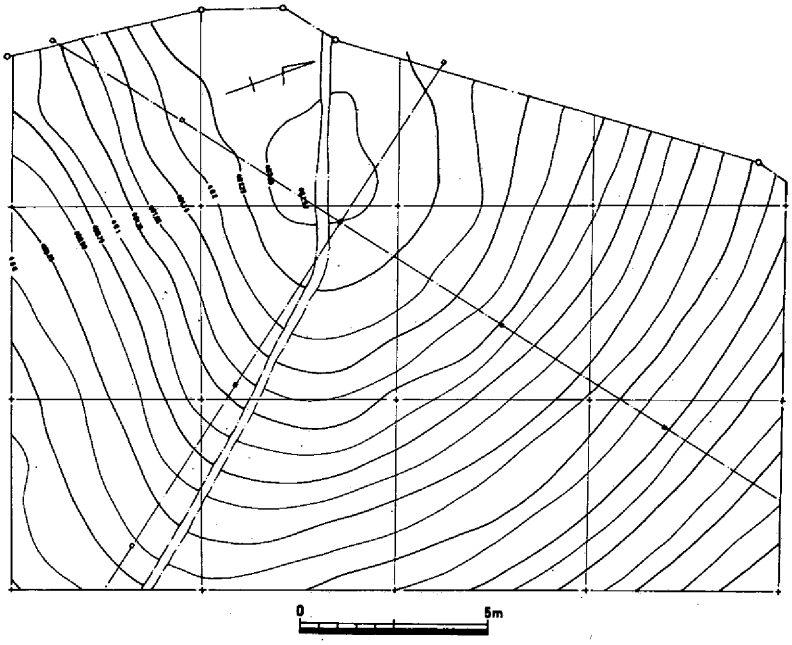
阿哲郡哲西町矢田空高下に所在する。

2号墳は1号墳丘頂より約50mN—64.5°—W方向で比高7.1mの高所に位置する。2号墳は3・4・5・6号墳が同一尾根筋に存在する丘陵突端部分を占地し，海抜402.57mを墳丘頂とする。ここからの視野は大きく開けており，矢田・畑木西部の沖積平野部全域をみおろすことができる。

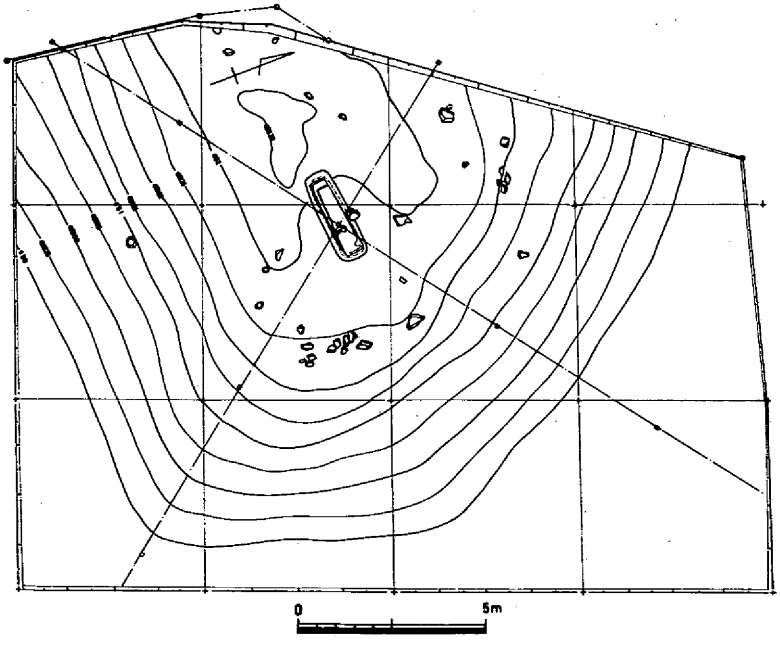
墳丘（第52・53・54図，図版26・27・28）

調査前の外観は小円墳を思わせたが，墳丘西側部分は円としてのまとまりを欠き，尾根に続く自然地形を残している。調査は十字のトレンチ畦を残して表土の除去を行い，海抜401.75～402.00m間に不規則ではあるが散材する角礫を確認した。これらの角礫は不規則ではあるが比較的まとまって存在し，墳丘頂を中心に半径約5mの範囲内にとどまり，墳端を意識するものと考えられる。墳丘頂が現地形で海抜402.57mを測り，そこより海抜401.25mの約1.30mのコンター間に古墳築造時点の整地面との相異が確認できる。

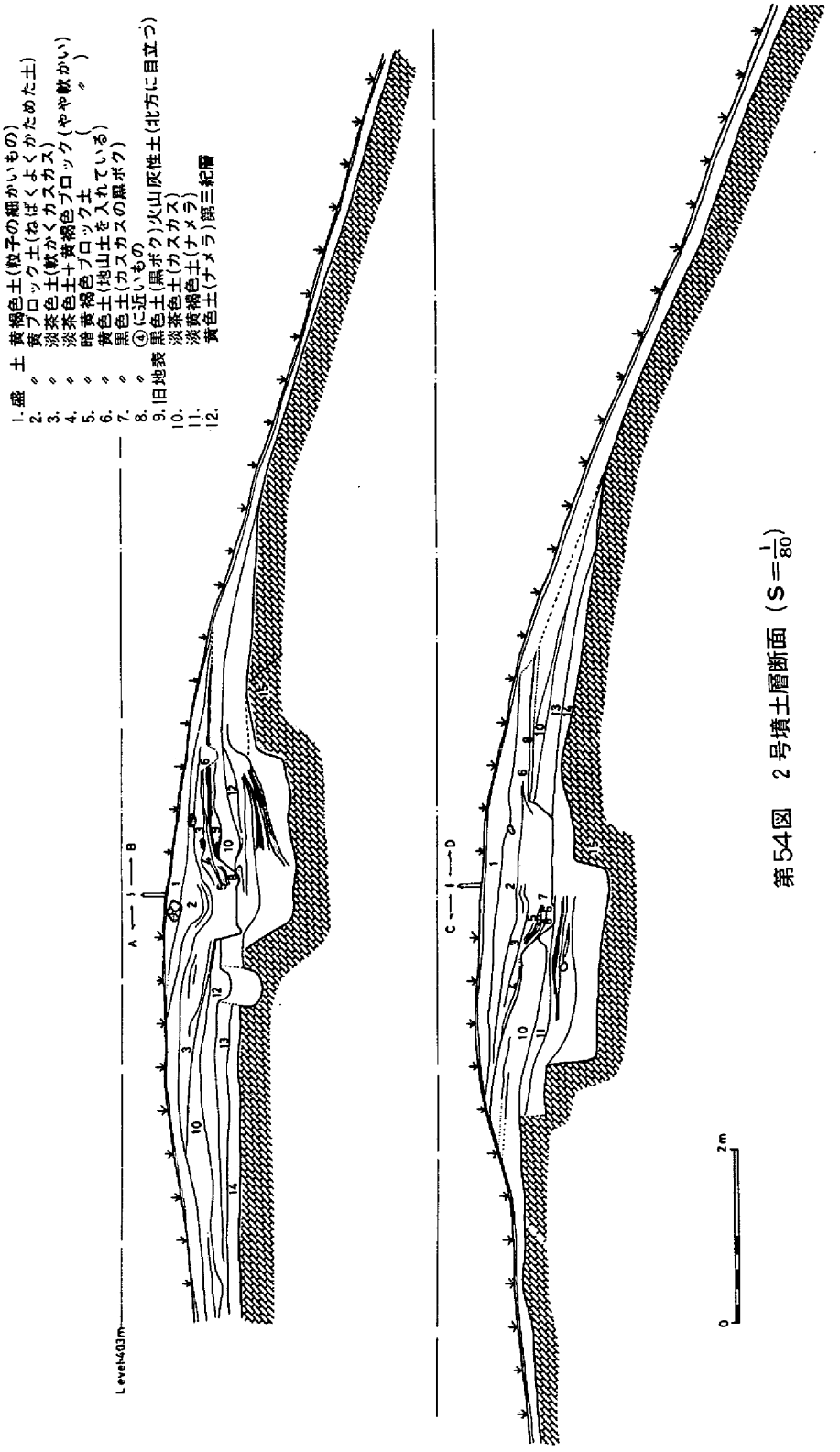
つぎに外観上からではなく，2号墳を構成する盛土から規模をみてみると，旧地形の最高部の地点は利用されておらず，主体部を造る際にもうけられた若干傾斜をもつフラットな面に，AよりBへ・CよりDへと傾きをもち盛土が行なわれている（第54図）。地表より最も深い所で85cm（棺底まで），掘り方上面より表土まで約60cmを測る。その盛土はA・B方向で6.5m，C・D方向で6.0m，約30㎡



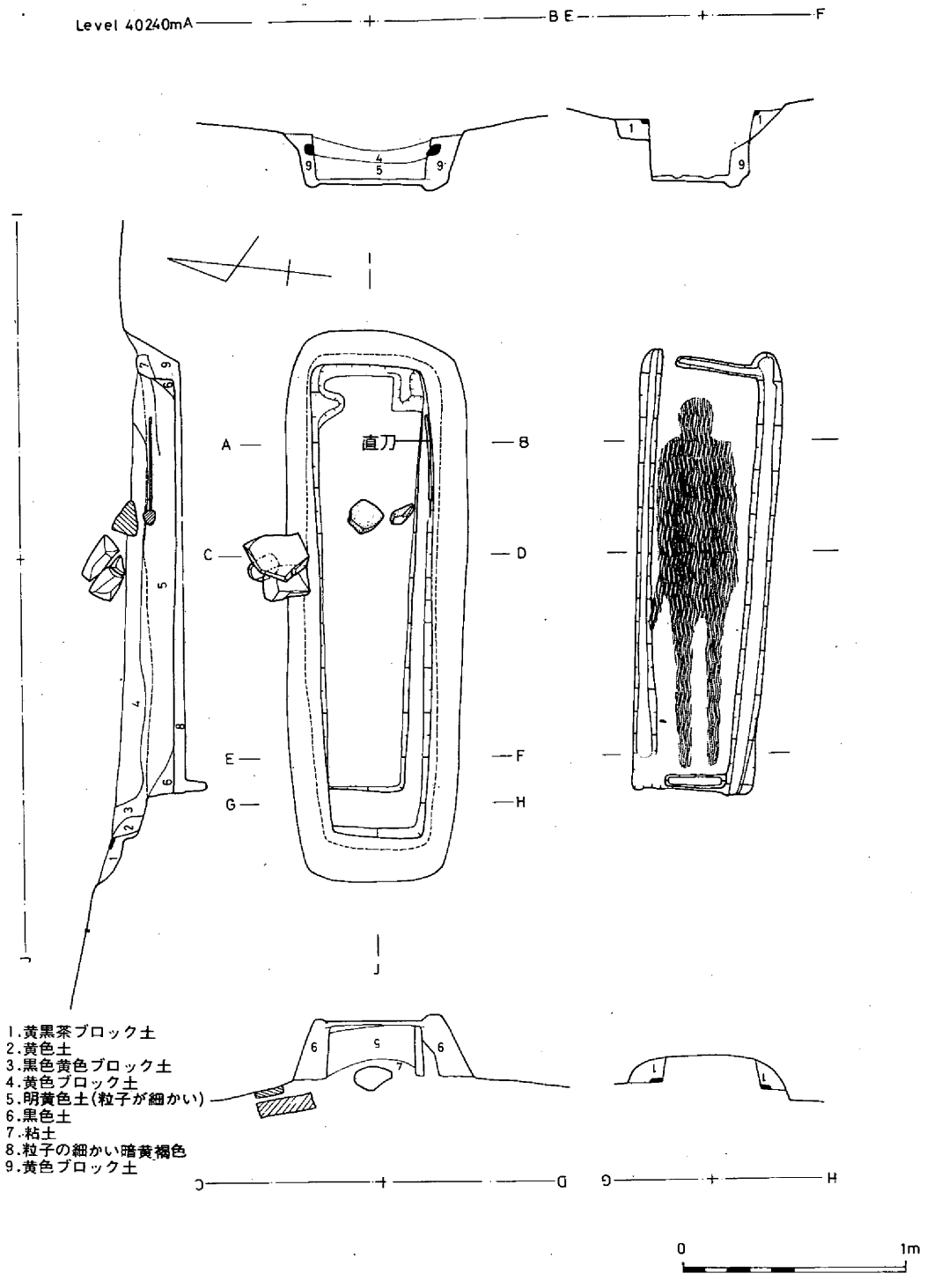
第52図　2号墳調査前地形（S＝$\frac{1}{200}$）



第53図　2号墳調査後地形（S＝$\frac{1}{200}$）



第54図　2号墳土層断面（S＝$\frac{1}{80}$）



第55図　2号墳主体部（S＝$\frac{1}{30}$）

の範囲におこなわれており，外観の規模とは異なる。すなわち2号墳築造の時点で旧地形の高所を中心とせず，そこより東に約3mの位置に埋葬施設の中心を想定し，旧地表面の削平を行い6.0×6.5mの範囲に平坦面の形成をおこなったわけである。そして，棺を設置後に6.0×6.5mの範囲内に基本的に3～4層の盛土を行って円丘を形成したものである。北・東側にみられる角礫は，その盛土の端とほぼ一致がみられるが，南・西側ではそれが認められず，とくに南側急斜面では不明である。

盛土によってつくられた円丘と旧地形の利用を最大に行い，墓自体を大きく見せようとする意識がうかがえる。明確な墳端はつかめないが，角礫部分でおさえると直径約9～8m・墳高約70～80cmを計測することができる。

主体部（第55図・図版29）

2号墳には木棺直葬を主体にする埋葬施設が，N－83°－Eの主軸方位でもって検出された。墳頂より東にずれて掘り方が設けられ，その中に木棺があり，棺の底面より「人形（ひとがた）の残影」が検出されている。棺を設置後に被葬者の胸にあたる部分の上位に，15×15cmの石が置かれた状態を呈しており，掘り方上面まで土をつめた後にも，掘り方南側の肩部に角礫3石が積み重ねられていた。このような配石は，棺の直上約60cmの盛土中にもみられた。主体部の上位の土層は，肉体の腐食・棺材の腐食等によりU字状に落ち込んでいる。

＜掘り方＞

掘り方は旧地形の削平を行い，約30㎡のフラットな面を形成し，ほぼその中央に設けられている。頭部の掘り方は1段となっているが，脚部は3段の掘り方になっており，3段目が頭部の1段に比定できるものである。掘り方上端は長軸約2.45m・頭部幅0.825m・胴部幅0.8m・脚部幅0.75m・下端は長軸1.9m・頭部幅0.65m・胴部幅0.61m・脚部幅0.54mを測り，西に向って尻すぼみとなる隅丸方形を呈する。掘り方高は頭部25cm・脚部40cmを測り，多少西に傾斜している。脚部の端では長さ26cm・幅6cm・深さ10cmの小口板のさしこみ痕跡が存在した。頭部では浅い溝が存在した。これらをはさむ長さ196cmの溝が存在し，木棺痕跡をよくとどめている。頭部においては朱（丹）の散布がみられた。

＜木棺＞

掘り方上面削り出しにおいて，木棺直葬であることが判明する。その時点での長軸2.11m・頭部幅0.52m・胴部幅0.52m・脚部幅0.41mを測った。掘り下げ段階で脚の方向が3段に掘りこまれており，最下段に木棺痕跡をとどめ，木棺設置後に周辺を粘土によって補強している。それらをすべて除去し，検出した掘り方の底に淡黒色を呈する「人形残影（ひとがたさえい）」と木棺の基底痕跡があらわれた。人形残影から身長165cm・頭部幅16.5cm・肩部幅不明・臀部幅36cm・股下65cmの計測値が得られた。木棺痕跡は南北側板が東西小口板をはさみ込み，側板の東西端が若干小口面よりはみだす形状を呈する。南北側板は196cmを測り南側が若干厚さをもつ。西側小口は他の痕跡より深く，床面より10cmほど掘り込まれている。

＜遺物出土状態＞

棺外遺物として直刀が1本出土している。鋒を東に向けて「人形残影」の頭部南側で床面より約13cm上面から出土している。木棺を補強した粘土に接して出土している。あるいは粘土中かもしれない。

古墳築造以前に，主体部直下に縄文時代と考えられる土壙が存在していた。（高畑）

第4節 11 号 墳

11号墳は光坊寺古墳群の所在する山陵の尾根上で，1号墳から下った位置に存在する。この古墳は，分布調査では確認されていなかったものである。

1) 調査前の外観（第56図，図版30）

調査開始直後に光坊寺古墳群の所在する1区の地形測量を行ったが，その時に1号墳の東側の地点で海抜391mのコンター付近に，やや高まりがあることがわかった。この場所は1号墳からゆるやかに下った位置で，周辺から眺めても自然地形と何ら変わった点は見られなかった。したがって若干高まりがあるだけで，古墳のイメージとは掛け離れた状態であった。

2) 墳丘（第57図，図版30）

やや高まりのある地点をねらって，1号墳から尾根を縦断するようにトレンチを設定した。その結果，高まりの見られた中央で主体部と考えられる土壙を検出し，尾根の高い位置には溝を確認した。土壙は現表土下20cmの浅い位置で見つかり，盛土はほとんど行っていない。溝は尾根の高い位置で確認できるだけで，北と南の斜面でははっきりしない。東側では尾根を削り出して墳丘の形を整えていたが，墳端がどの位置になるのか明瞭でない。

この11号墳は尾根の高い位置を削り取って溝を配した，直径約8mの扁平な方形墳であろう。

3) 外部構造（第59図，図版30）

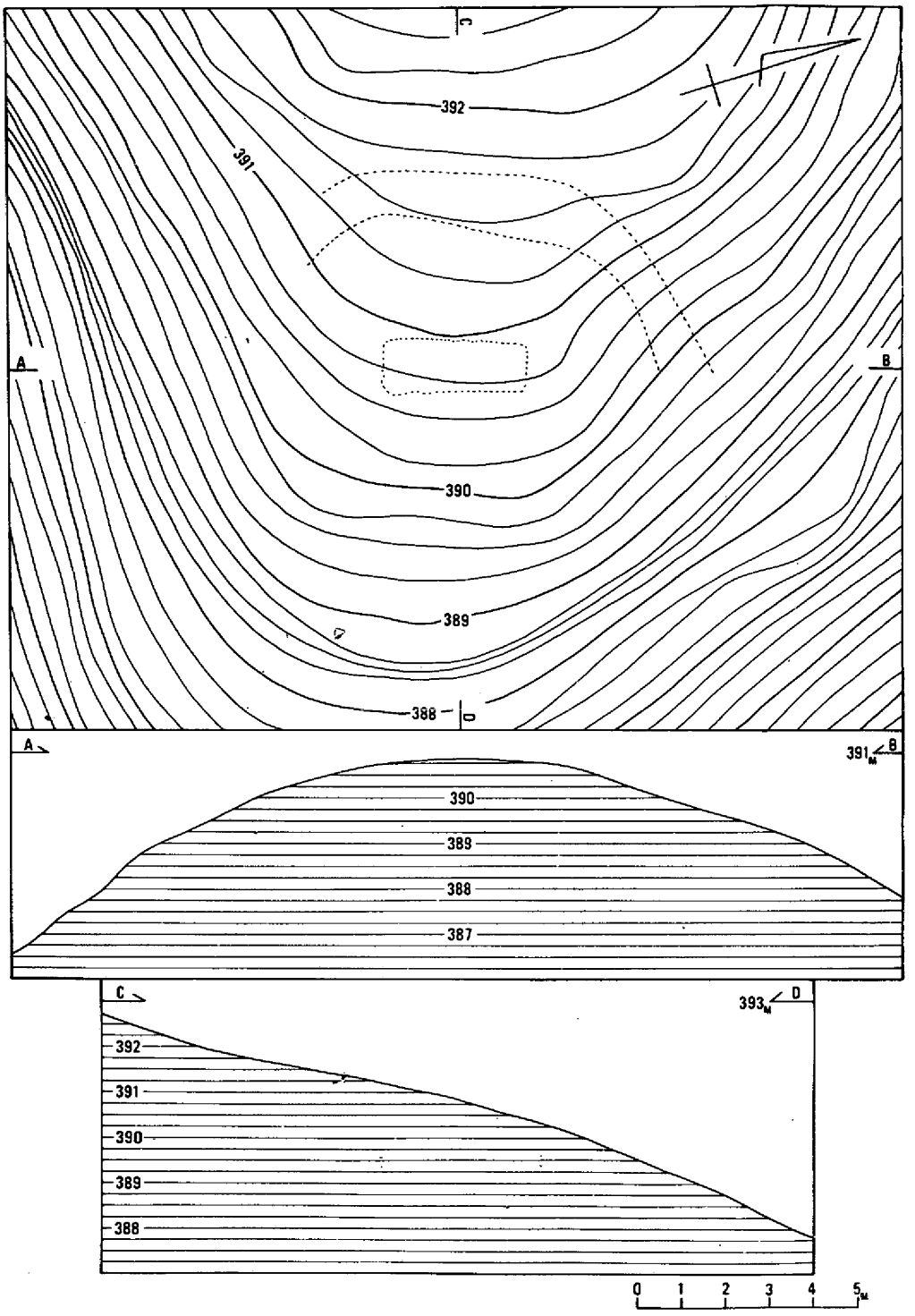
外部構造としては，尾根の高い位置に幅が上端で1.40～0.98m・下端で0.98～0.52m・深さが20～30cmの溝を有するだけである。北側の溝の中から**小形丸底土器**の破片が出土した。

4) 内部構造（第58図，図版30）

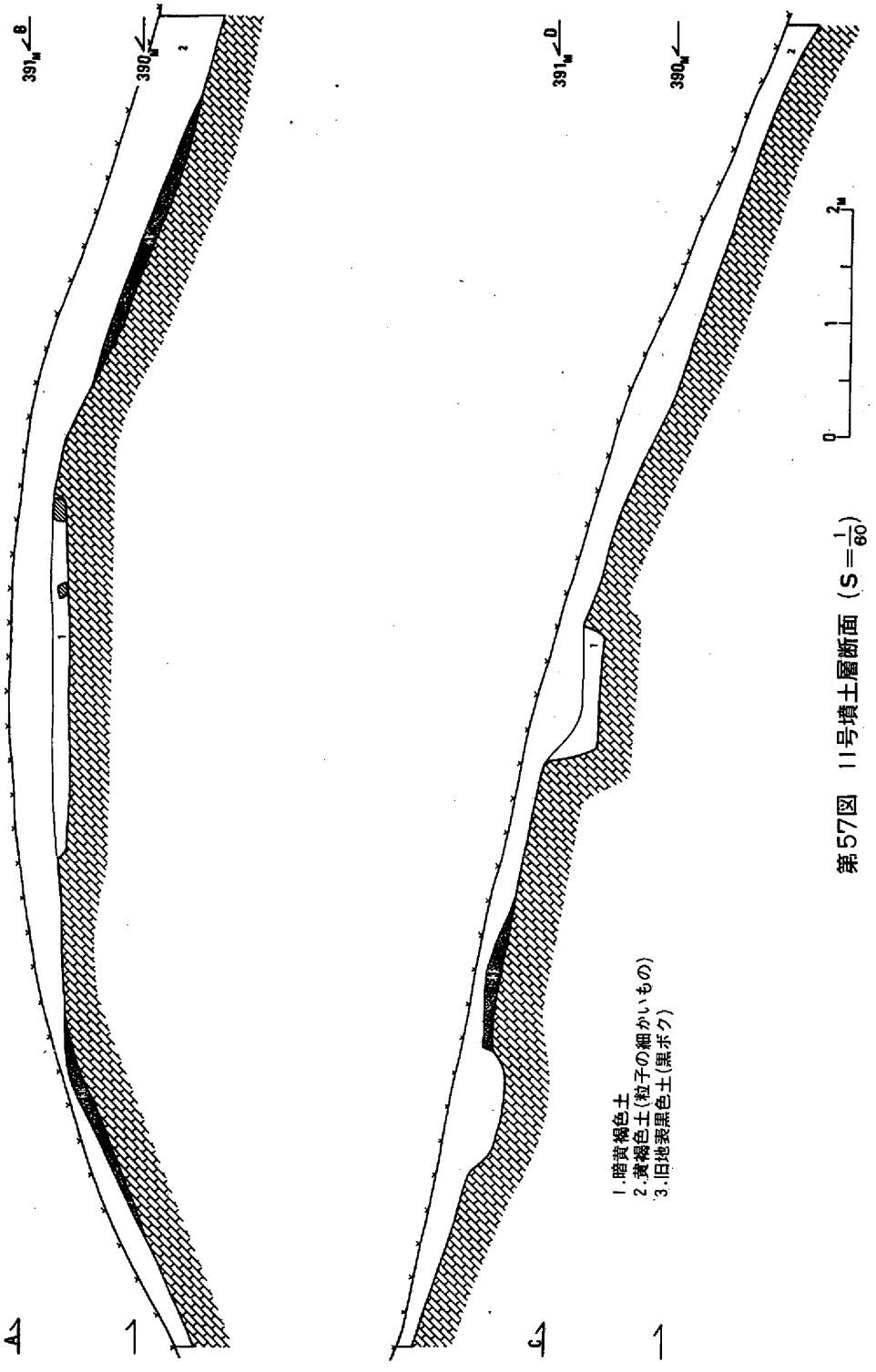
主体部が1基存在する。墳丘のほぼ中央に位置し，等高線に対して平行の方向に構築している。現表土から浅い位置に存在するため，北東の側壁は流失している。

主体部の平面形は長方形を呈する。長径は上端で3.23m・床面で3.07mを測る。短径は上端で1.20m前後を測るが，床面では南西角が抉れた状態になってやや広い数値を示すけれども，0.90mを平均値とする。土壙内の北東に片寄ったところで1対の枕石を確認した。拳大の石を使用し，13cmの間を置いて床面に近接した位置に並べていた。北壁には地山を剝離して生じた堅い人頭大の土の固まりを置いていた。土壙内は識別困難な土であったが，木棺痕跡が残っているものと考え精査したけれども確認できなかった。したがって木棺が入っていたのか，それとも主体部構築当時からなかったのか不明である。枕石が片寄った位置であるため，複数の埋葬が想起されるけれども，はっきりしたことはわからない。なお主体部内から遺物は何も出土しなかった。主体部平面プランは1号墳第Ⅳ主体に近似するものである。

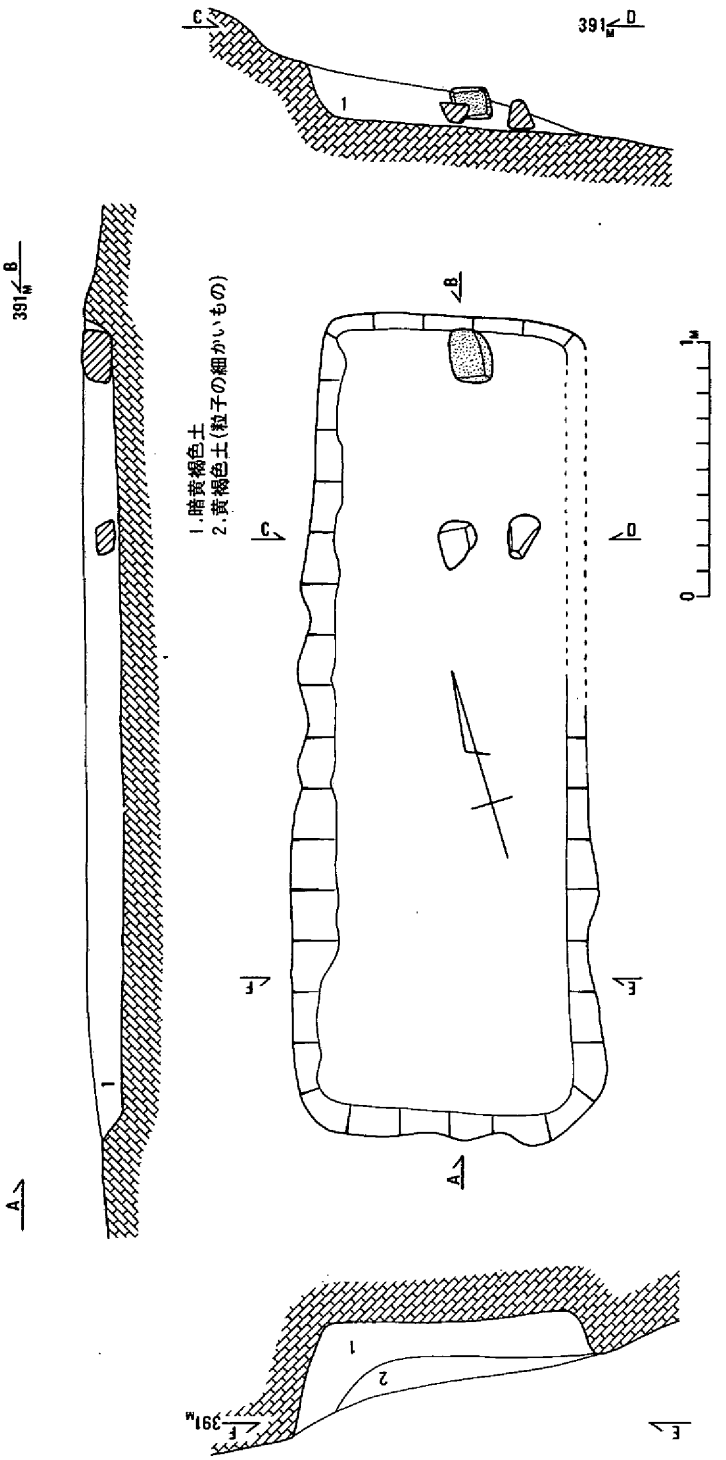
（福田）



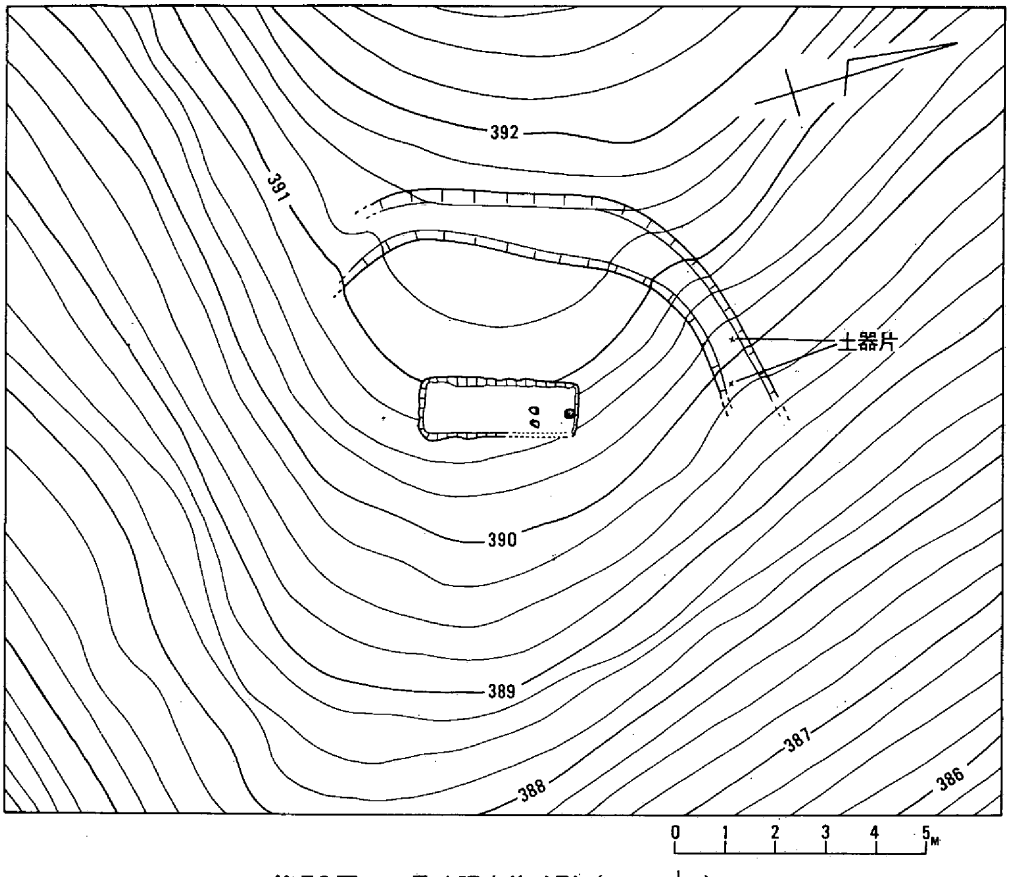
第56図　11号墳調査前地形（S＝$\frac{1}{150}$）



第57図　11号墳土層断面（S＝$\frac{1}{60}$）



第58図　11号墳主体部（S＝$\frac{1}{30}$）



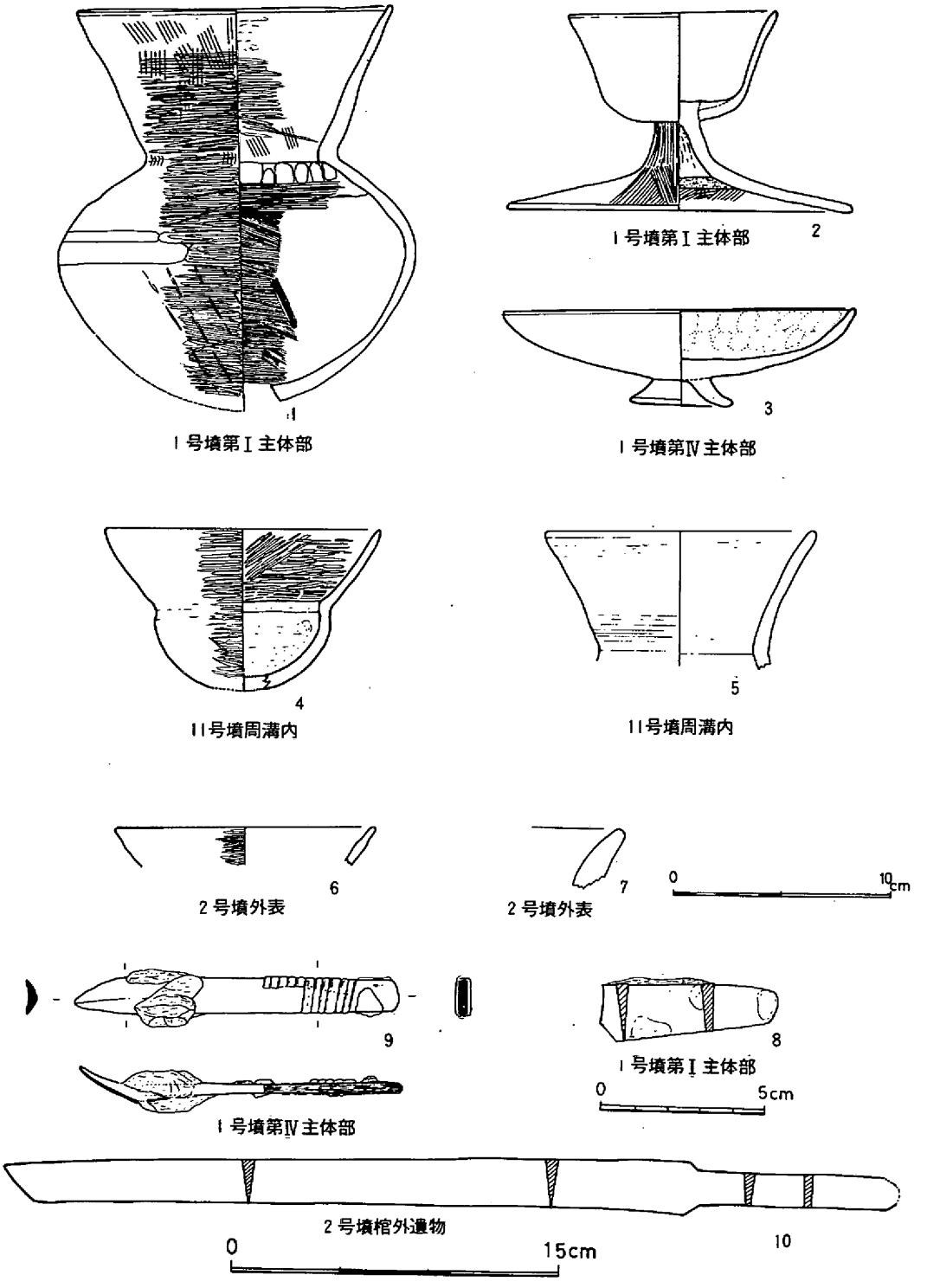
第59図　11号墳調査後地形（S＝$\frac{1}{150}$）

第5節　出　土　遺　物

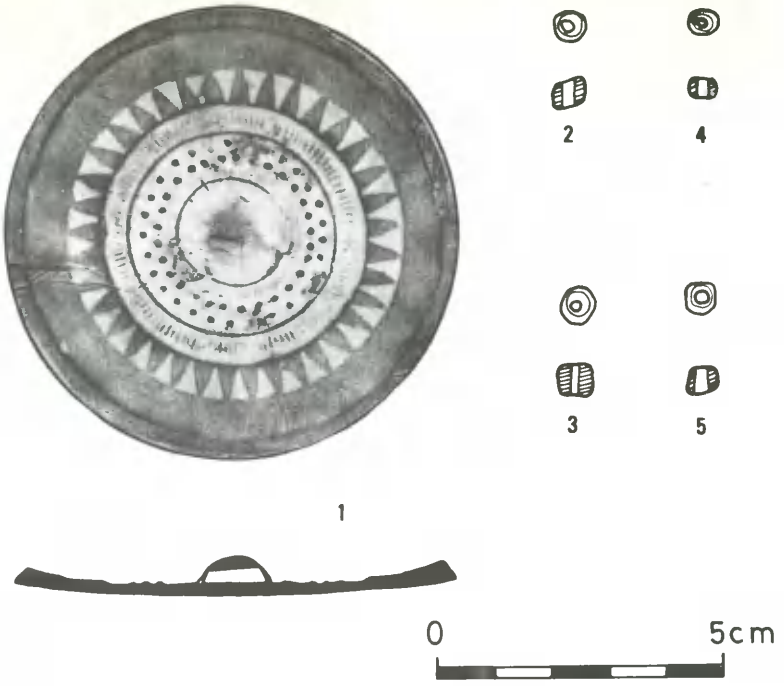
1）　**土器**（第60・61図，図版31・32）

1は，口径14.33～14.57㎝・頸部径8.8㎝・胴部最大径16.4㎝・器高約18.3㎝を測り，赤褐色を呈する壷形土器である。底部に焼成後の穿孔を内面より受けているが，穿孔部分の破片は発見できなかた。口縁部よりくびれ部にむかって0.3～0.9㎝と壁厚をます直口の口縁部をもち，胴部はくびれ部より底部に向って0.47～1.00㎝と器厚をまし，そろばん玉状を呈するものである。口縁部と胴部は別々に作られたものであり，くびれ部内面下位に幅2.75㎝の粘土紐の貼り付けを行い，指頭による接合面がみられ，粘土紐と胴部接合面に筋状の間隙を残している。

口縁部の外面は0.2㎝幅をもつ刷毛状工具による縦位のナデが全面に施され，その後ヘラ状工具の先端を利用して行ったと考えられる横位のヘラ磨きが全面に施されている。口縁部内面も同様の整形が行なわれている。口縁端部の内外面は回転によるナデで仕上げられている。



第60図　Ⅰ区1・2・11号墳出土遺物



第61図　Ⅰ号墳第Ⅴ主体部出土遺物（S＝$\frac{1}{1}$）

鏡　計　測　値　表　（表7）　(cm)

名　称	面　径	縁　厚	鈕　径	鈕　径	重　量	縁の形式
珠文鏡	7.74～7.83	0.5	1.385	0.5	39.35g	平　縁

小　玉　計　測　値　表　(cm)

No.	径	厚	孔　径	色　調
2	0.63	0.515	0.23	にぶ青
3	0.625	0.58	0.12	にぶ青
4	0.55	0.37	0.18	青
5	0.55	0.485	0.22	青

胴部外面は，底部より胴部の最大径を有する付近までをヘラ状工具で器壁の削り取りがおこなわれており，それはりんご等の皮をむく要領に似ており，左回りに行なわれた痕跡をとどめる。最大径を有する部分は，さらにヘラ状工具による幅0.6～1.2cmの面とりが行なわれている。最終的に口縁部と同様に横位のヘラ先研磨が底部までおよんでいるが，口縁部の調整より若干細いものである。

胴部内面はくびれ部の指頭圧痕の下位より，非常に細かい刷毛状工具による横位を中心とするナデが全面に行なわれており，丁寧な仕上がりを見せている。胎土は白色砂粒が目立たず，精製粘土がもちいられて焼成は良好である。外面の口縁端より底にかけてのほぼ半面に黒斑がみられ，底部では丸く径９cmの幅をもつ。胴部の内面を除いて全面に丹塗りが施されている。

２は，口径9.58～9.87cm・脚柱状部2.13cm・脚端径 16.1cm・器高 9.1cmを測り，黄褐色を呈する高坏形土器である。脚端部を欠損しているが，これも１と同様に破片は発見することができなかった。いわゆる短脚の高坏であり，坏部の口縁部に若干ふくらみをもち，下位に向って器厚約0.35cm均一で脚柱状部分までのびる。坏部底直径約２cmの穴に柱状部分をさしこみ，半球状の粘土を補足して接合した痕跡をとどめる。脚部もほぼ均一した壁厚で，中空につくられており，脚端部はしっかりした稜線をもつ面を形成している。

坏部の内外面は器壁の剝落が著しく，内面ではとくに目立つ。外面の調整は不明に近いが，円滑に仕上げた器面を部分的ではあるが残している。脚部は，柱状部分より幅0.15cmの細いナデが端部に向って放射線状に施されている。脚内面は中空部分にヘラ削り状の整形がなされており，屈曲部に幅1.4cmのヘラ削りが一周している。そこより脚端部まで，中空部分を囲むように外面と同様の刷毛ナデが施されている。胎土は，精選された小砂粒が全面にみられ「せんべい」のような感じをうける。外面および，坏部の内面に丹塗りが施されている。

３は，口径16.06～16.3cm・くびれ部内2.8cm・底径 4.79cm・器高 4.4cmを測り，色調は黄褐色を呈する低脚坏である。ほぼ無傷で出土している。杯部は皿状になっており，器高 3.1cmを測るものに器高1.29cmを測る脚部を接合したものである。坏部の内外面は，１とは異なるヘラ磨きが行なわれており，内面には指頭による圧痕がみられる。胎土は，２と若干異なり長石砂粒が目立つものである。脚部の内面をのぞいて全面に丹塗りが行なわれている。

４は，全体の$\frac{1}{3}$位のものの復原実測図である。口径12.2cm，くびれ部幅8.1cm，器高7.4cmを測り，色調赤褐色を呈する坩形土器である。器面は，１の調整に近似し，ヘラ先状の工具による横位の研磨が全体に施されている。内面はくびれ部の上位を横位の刷毛ナデの後に外面と同様に横位の研磨が行なわれている。くびれ部の下位は円滑に仕上げられている。胎土は精製粘土を使用しており，その内外面に丹塗りが施されている。この赤色はほかの土器のものより色彩が鮮やかである。

５は，全体の$\frac{1}{4}$位のものの復原実測図である。口径12.5cm・くびれ部7.8cm・残位高6.0cmを測り，黄褐色を呈する壺形土器である。内外面は回転によるナデがみられ，丁寧に仕上げている。胎土は精選された小砂粒が全面にみられる。2に近い胎土を有している。6は，細片による復原実測図であり，４に近い調整・胎土のものである。７は，細片による復原実測図である。外反する口縁端部であり，器厚1.3cmを測る暗黄褐色を呈する土器である。大きい砂粒を含む。ほかに，１号墳葺石２段目，11号

墳の周溝出土の土器片が出土しているが小片で実測不可能である。内外面に刷毛状工具の痕跡を有する土器が多いようである。

2) 金属器

8は，残存長5.5cmを測る茎(なかご)部分と考えられるが，茎部・刃部を区別する関(まち)部分が判明しない。しかし，断面において刃部と茎部の相異がでており，関の不明確な鉄器の可能性もある。

9は，全長9.85cm・把部幅1.04cm・刃部幅1.15cm・厚さ0.23cmを測る鉋である。スキイの形状を呈し，把部には幅0.27cmの紐状の木質を巻きつけた痕跡をとどめる。刃部は厚さ0.22cmを測り「△状」の断面を有する。

10は，重量140g・全長41.3cm・刃部31.5cm・茎部9.8cm・棟厚0.6cm・最大幅2.55cmを測り，若干，内に反る平造りの直刀である。目釘穴は確認できなかった。

＜遺物について＞

光坊寺古墳群の所在するこの地域は，従来の発掘調査例は少なく，偶然の発見による遺物もあまりしられていない。光坊寺古墳群では，前記の土器が3基の古墳より出土している。

まず1の壺は，県内では類例を見い出すことができず，権現遺跡の3種土器（註20），纒向(まきむく)遺跡の纒向3式（註21）土器中に見い出すことができる。とくに纒向遺跡の壺は丹塗りが施されており，塗布された部分も共通している。光坊寺1号墳のものより，前記の2点がシャープな作りをしている。2の高坏は比較的類例は多いが，短脚・中空で器壁が均一し，坏部と半球上の粘土の挿入で接合が行なわれる特徴は，時期の範囲を限定する。全体に砂っぽく，脚柱状内面のヘラ削り等は，いわゆる酒津式土器より後出的な様相をみるものである（註16）。3は，山陰地方のローカル色の強い土器であろう。松本一号墳（註22），造山三号墳（註23），なかでも小谷第一土壙墓（註24）上面より出土したものに，器形・整形・調整が非常に類似している。岡山県北では，宮の前遺跡の方形周溝墓8（註25）・谷尻遺跡のⅣ期（註16）で出土している。4は，布留式のメルクマール化した小型丸底壺であり，前期古墳の出土品として県北・県南でみる機会の多い土器である（註26）。

これら4点の土器より，3基の古墳のおおまかな築造期を考察すると，壺形土器のもつ特徴は，畿内における布留式に先行する庄内Ⅱ古（纒向3式）に類似する。高杯のもつ特徴は，県南では王泊六層期・県北では谷尻遺跡Ⅴ期に比定できると考えられる。小型丸底壺は，県北では宮の前遺跡方形周溝墓内より3点の出土がみられ，伴出の土器は谷尻遺跡におけるⅤ期の特徴を有するものが多いが，Ⅵ期に入るものもみられる。したがって布留式（註27）の併行期を含めた以前に1号墳が築造され，2号墳あるいは，11号墳が相前後してつくられた可能性がある。

1号墳第Ⅴ主体部出土の珠文鏡については，従来では類似の銅鏡は5世紀前半頃から出現するといわれているけれども，この古墳では前記したように布留式併行期以前の土器を伴うことなどから，検討する心要が出てくるのではなかろうか。（高畑）

第5章　光坊寺古墳群の諸問題

第1節　光坊寺古墳群の立地と形成過程

発掘調査を実施した3基の古墳の結果から，問題点を指摘してまとめにかえたい。

各古墳の外観の項で，光坊寺古墳群を形成する11基の古墳に4タイプがあることを記した。これらの古墳が舌状に張り出した山稜の尾根上に古墳群を形成するのに，すべての古墳が同時に築造されたとは考えられないので，今度の3基の発掘調査結果をたよりに考えてみたい。

現在の哲西町において，古墳の存在をより効果的に誇示することのできる場所は限られている。そのうちでもこの光坊寺古墳群が所在する山稜は，古墳を築造するための諸条件をかねそえた良好な地点である。1号墳は尾根がゆるやかなカーブを描いて下りながらやや下方に角度を増す変換点に立地しており，古墳築造作業は自然地形をそのまま利用できるという利点がある。しかもこの地点からは平野を一望に見渡すことができるという山稜の一等地を選んでいる。2号墳は平野から眺めるとやや奥まった位置であるけれども，山稜を登りきった場所であるとともに2つの山稜が分れる分岐点に位置している。だから古墳築造作業は周囲を削り取るだけで墳丘の形を整えることができる。2号墳は1号墳より高い場所に位置していることを考えると，1号墳の立地する好条件の地点に相当する位置に占居していることになる。2号墳は時期を決定する遺物に乏しいけれども，主体部の木棺痕跡が1号墳の第V主体部の木棺痕跡と共通することから，1号墳とほぼ同時期に築造されたと考える。古墳を築造する段階でどの位置を選ぶかということは，重要な意味をもっていたことが想定される。11基の古墳を築造する場合に時間的前後があると考えられるから，最初に築造される古墳が最もすぐれた立地条件の位置を占居することは可能であり，その後に築造されるものは順次条件が限定されていくことになる。したがって1号墳と2号墳は11基の古墳のうちで最初の頃に築造された古墳と考える。

次に9号墳から11号墳のタイプについて記したい。11号墳は今度の調査によって尾根の高い位置を削り出して方形の溝を掘り，主体部を尾根と直交する方向に構築しているが，盛土はほとんど認められないことがわかった。9号墳と10号墳は，外観からでは円墳になるのか方形墳になるのかはっきりしないが，11号墳と同じようになだらかな尾根上に高い位置を削り出して，墳丘の形を整えているところから，ほぼ11号墳と同じような形態を有していると考えられる。この3基の古墳は光坊寺古墳群の所在する山稜では，1号墳と2号墳が位置する立地条件よりは劣るが，それに続く好条件の地点に占居している。墳丘を形成する作業が比較的簡単であるけれども，1号墳や2号墳より規模が小さくなっている。したがって外観だけから古墳の性格づけをするのは早計かもしれないが，9・10・11号墳はほぼ同時期に築造されたものであり，11号墳の溝内より出土した小形丸底土器が，1号墳に副葬されていた土器より新しい時期の遺物と考えるから，1号墳と2号墳が築造された後にこの山稜に築

造された古墳のグループが9・10・11号墳と考えたい。

7号墳と8号墳は舌状に張り出した山稜の末端に位置する。神代川沿線の平野に近接した地点であるけれども，尾根の低位置になるため，墳丘の位置の視覚性という観点から考えると，前述した各々の古墳に比較して限定される。ところが築造作業に高い山稜を登らなくてもよいという利点がある。この2基の古墳には直径約12m・高さ1mで直径に対して墳丘が低い共通性がある。古墳の築造作業では，1号墳のように尾根の高い位置を削り取ることを省略して，地山が高いレベルで残っているのではなくて，尾根の低い位置の墳端のレベルまで完全に削り取っている。しかも低い墳丘であるにもかかわらず盛土をしている。このような7号墳と8号墳の様相は，9・10・11号墳よりも後出的な要素を呈している。したがって前述した2つのタイプの古墳に続いて築造されたものと考える。

3号墳から6号墳は尾根の最上位に直線的に位置する。この4基の古墳が所在する場所から平野への展望はごく限られ，墳丘の視覚性から考えると前述したどの古墳よりも悪い。これらの古墳は直径に対して墳高が比較的高く，盛土を行っているという共通性がある。しかもほかのタイプの各々の古墳と比較して，古く考えられる要素はないところから，この舌状に張り出した山稜に築造された最終の古墳のグループで，比較的条件の良い位置にはすでに古墳が築造されていたので，尾根の高い位置にやむなく築造しなければならなくなったものと考える。

以上のことから光坊寺古墳群の形成過程をまとめてみたい。光坊寺古墳群の所在する山稜は，現在の哲西町矢田地区の中央部に位置し，古墳を築造するには好条件の地形を有している。この山稜のうちでも墳丘の位置の視覚性が卓越した地点で，なおかつ築造作業条件に適したところに，どの古墳よりも傑出した1号墳と2号墳を最初に築造した。続いて1号墳からやや下った位置に9・10・11号墳の3基を築造した。この位置は1号墳や2号墳が占居している位置に続く好条件を有する地点である。8号墳と9号墳は平野に近接した山稜の末端に築造した。位置が山稜の末端で低い地点になるが，平野に面した近接地であるという効果が考えられる。次に築造された3・4・5・6号墳は山稜の比較的好条件の位置にはすでに古墳が築造されてしまっていたため，尾根の高い位置にやむなく築造しなければならなくなった。光坊寺古墳群を形成した最終の古墳のグループであったと考える。

このように光坊寺古墳群の各古墳は，舌状に張り出した尾根状に連続的に築造している。このことは古墳相互間に血縁的な関係を想定し，系譜的な意味に解釈することもできるのではなかろうか。すなわちすべての点で傑出した1号墳が，神代川沿いの矢田地区に展開した初期の首長グループの古墳で，それに続く古墳は当該首長層の同族者が，順次連なるような形の占地が行われていると考えたい。後期の古墳は同尾根には存在せず，地域的な再編成が行われたのか，あるいは古墳の占地を異にしたものと考えられる（註28）。（福田）

第2節　1　号　墳

1）外部構造について

1号墳の外部構造の項で葺石の残存状態について記したが，地点によって構築法が異なることがわ

かった（表6）。しかも上段の葺石と下段の葺石は均整を保って構築され，作業方向も一致している。古墳を築造する場所をどこにするかということは，墳丘の規模を決定する問題でもある。しかしながら規模が自然地形によって決まるのではなく，あくまで古墳を築造する人が計画決定するものであると考えるから，規模に適合する好条件の地点が選定されたであろう。

葺石の構築法が地点によって異なるということは，あらかじめ区分けして作業が進められたと考えられる。この1号墳ではほぼ6等分した区画に分割して作業を行っているにもかかわらず，均整のとれた葺石を構築しているということは，石を並べて置く以前に墳丘の規模がすでに確立しており，葺石基底部の基線が決められていたと考えられる。斜面に面した南と北方向の葺石の基底部が直線的になっているのは，計画されていた基線に沿って石を並べると崩れてしまうという，自然地形の制約を克服できなかった結果であろう。

また尾根の高い位置には葺石が存在しないのは，墳丘の形を整えるために地山を削り取ったけれども，まだ地山のレベルが高い位置に残り，眼下の平野から眺めても墳丘で隠れて見えない部分になるため，葺石を構築する作業を省略したのであろう。

基底部の石は比較的大きい石を貼り付けるように立てて置いているが，基底部に接して上に石を置く場合には貼り付けと積み重ねがある。しかしながら貼り付けて置くのは，板状になったやや大きい石を使用するときだけで，原則的には拳大の石を積み重ねている。

この1号墳の葺石の構築法について，近接する地域の古墳や墳墓と比較検討したい。ところが光坊寺古墳群周辺の備中山間部では，葺石を有する古墳の調査例がないので，距離的に離れている感はあるが，山陰地方および山陽地方のものと比較検討したい。

山陰地方では，古墳の発生期に独自の形式を呈する「四隅突出型方墳」とよばれる古墳が，出雲東部を中心に10例あまり知られている（註29）。それらの古墳のうちでも最も古い時期に比定されている，安来市仲仙寺9・10号墳（註30）では，墳端の緩斜面に拳大から人頭大のレンガ状の石を使用して，2段になる階段状のものを構築している。さらに墳丘面には比較的大きい板状の石を2段ないし3段に貼り付けている。この構築法は，次の時期のものと考えられている安来市宮山4号墳（註29）でも共通した手法である。この四隅突出型方墳の共通した構築法は光坊寺1号墳の葺石の方法とは異なっている。次に江津市波来浜遺跡（註31）と対比したい。この遺跡は砂丘上に所在するという特殊条件にある。石見地方の土器に出雲地方の編年をあてはめるのは適当ではないかもしれないが，九重式土器（註32）から的場式土器（註33）に相当する土器が出土した墳墓群で，割石を貼り付けるように並べている場合が多い。砂丘上に所在するという特殊な立地をしているので，崩壊するのを防ぐために特別の配慮が行われたと考えられる。この砂を盛って高くした方形の墓域の周囲に割石を不規則に貼り付けている状態は，光坊寺1号墳の葺石の構築法と相違する点が多いけれども，1列だけを並べているものは光坊寺1号墳の基底部の石の並べ方と類似している。しかし波来浜遺跡は光坊寺1号墳に比較して小規模な墳墓群であるばかりでなく，先行する時期の遺跡であるから，葺石の初源的な様相を呈しているかもしれない。4世紀中葉に比定されている安来市造山3号墳（註23）は部分的に3段の葺石（註34）を有する方墳である。南側墳丘斜面の葺石は3段になっており，20〜30cmの割石

を多く使用して積み重ねている。この部分の構築は，光坊寺1号墳とは全く相違する方法である。ところが東側では，墳丘の形を整えるために削り取った位置に直線的な葺石を構築している。この状態は光坊寺1号墳の葺石の構築法とほとんど一致している。

山陽地方では古式の大型古墳の調査例が乏しいため，外部構造の葺石についても不明な点が多い。岡山市都月2号墓（註35）では，比較的大きい割石を2～4段に積み上げており，光坊寺1号墳の葺石とは違った構築になっている。4世紀前半に比定されている岡山市備前車塚古墳（註36）は前方後方墳である。葺石の基底部には比較的大きい割石を使用し，広い面をそろえて並べている。基底部の上位には，墳丘斜面に沿って割石または板石を貼り付けている。この全体の様相は光坊寺1号墳の葺石とは異なるけれども，基底部の石の並べ方は光坊寺1号墳の基底部と共通した方法が見られる。岡山県赤磐郡山陽町用木1号墳（註37）は截頭円錐形の円墳で，分岐する尾根支脈面に溝と葺石を構築していた。基底部の石は角形に面取りされた40×40cmほどの大形で，しかも規格もほぼ揃った石材を外ふくらみの円弧状に整然と立て並べ，その上にやや小形の石材を積み上げている。この葺石の構築法は光坊寺1号墳と一致している。しかしながら，光坊寺1号墳では尾根の高い部分を削った位置は葺石を省略するか簡素化しているのに，用木1号墳では逆に削り取った尾根支脈面にのみ部分的に葺石を構築するという相違点がある。

以上簡単に光坊寺1号墳の葺石を山陰地方と山陽地方の古墳や墳墓と比較してみたが，山陰地方では造山3号墳の東側葺石に，山陽地方では用木1号墳の葺石に類似していた。なお葺石以外の外部構造および遺物については，上段の葺石部分で還状に石を置いていた地点を確認したけれども遺物は何も検出できなかった。また上段と下段の葺石の間にも遺物は検出できなかった。したがって光坊寺1号墳には，築造当時から外部構造として葺石を2列に構築していただけであったと考えられる。

1号墳から2号墳方向に連なる尾根の位置で検出した「道」について考えてみたい。最近になって考古学における調査も多様化を呈し，古墳時代後期の群集墳で問題が指摘された（註38）。ところが2号墳や11号墳の周辺には道と考えられるものは検出できなかったので，群集墳の「墓道」とは異質のものであると考える。1号墳の葺石に使用した石が，近接地である2号墳の南側から持ち運ばれた可能性を示唆したが，古墳を築造する過程で多数の人間の労働力が必要であることは考えられる。この光坊寺古墳群の所在する山稜の高位置には善光院裏山遺跡があり，古墳築造以前から尾根の高い地点に人間が住みついていたことが知られているので，1号墳の地点へ往来するには，7号墳の所在する山稜の末端方向からだけでなく，山稜の高い方向からのルートも存在したのではなかろうか。したがって1号墳の築造作業のときに，人間が往来するのに利用した道と考えるのが自然であるけれども古墳築造後に人間がこの古墳にやってくるのに通った道とも考えられる。いずれにしても類例がないので，今後の問題点として指摘するにとどめるが，古墳群を調査するには，古墳そのものを調査対象にするだけでなく，調査範囲を拡張して各古墳の周辺地点の検討も行うべきだと考える。

2） 内部構造について

先に5基の主体部について概略を記述したので，ここでは第Ⅰ主体部の問題点について若干の考察

を行いたい。

第Ⅰ主体部の特徴は，地山を掘り込んだ土壙の上に石室を構築しているということである。石室は持ち送りにしているにもかかわらず，雑然と石を置いている。控え積み石も部分的に置いているだけで簡素な構築になっている。土壙内では部分的に木棺痕跡を確認した。また木棺が安定した状態に納まるように板石を使用していた。この第Ⅰ主体部を解体して残った最後の土壙の形態は，弥生時代の土壙墓を想起させるもの（第45図５，図版19）である。

この第Ⅰ主体部の構築順序は，まず地山面を水平に削り，土壙を掘り込んだ後に土壙の両小口部分に板石を貼り付ける。その後被葬者の遺体が入っている「⌶」型の木棺を土壙内に安置する。そうして木棺の両小口部分に接して板石を立てて置き，土壙の両側部分に木棺との間を埋めるように拳大の板石を入れて木棺を固定させる。これで土壙内の作業は完了するわけであるが，葬送儀礼が行われたならばこの段階が最も可能性があると考える。副葬品としての土器（底部穿孔の壷形土器と高坏形土器）や鉄器は，土壙内に木棺を安置した後にその木棺上に置かれたものである。次の作業として石室の構築に移る。まず土壙を囲んで地山面に細長い割石を長辺を上にして立てる。そして下位の石よりやや内側に石が張り出すように石を順々に積み重ね，持ち送りの形態に壁を構築し，最後に天井石を乗せる。これで第Ⅰ主体部の構築作業は完了するわけであるが，構造が簡素な様相を呈するところから，石を置くのと並行して石室の周囲に土を徐々に盛ったのかもしれない。1号墳の築造当時には第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ主体部の３基の主体部を構築しており，そのうちでもこの第Ⅰ主体部が最後に構築した主体部であろう。したがってこの第Ⅰ主体部を構築後に盛土を行って墳丘の形を整えたと考える。

なお土壙内の木棺痕跡の内法は，1.12×0.30mとなる。この木棺内に被葬者の体位を知るものは残存しなかったので，詳細については不明であるが，成人を伸長して埋葬するには木棺が小さい。被葬者が成人であれば，伸展葬以外の埋葬姿勢を考えなければならない。また成人に達しない子供であれば，伸展葬でやっと納まる寸法である。いずれにしても木棺の寸法は小規模のものである。なおこの第Ⅰ主体部のように，地山を掘り込んだ土壙の上に石室を構築している主体部は，近接地で存在していない。

（福田）

第３節　11　号　墳

11号墳は尾根の高い位置を削り取って溝をめぐらした直径約８mの扁平な方形墳である。溝をめぐらしたときの土を利用して墳丘の形を整えているので，盛土はほとんどみられない。この11号墳の形態は現在のところ山陽地方では，弥生時代中期後半から出現していると考えられる方形台状墓(註39)を想起させる。11号墳は溝内より出土している土器から考えて，１号墳より後に築造されたものであるから，弥生時代の方形台状墓の系譜を有する古墳が，大形の古墳が出現した後にも築造されていることがわかる。

主体部内には枕石１対を有する。片寄った位置に存在するため，複数の埋葬も考えられるがはっきりしたことは不明である。この主体部内の木棺痕跡を追求したけれども確認できなかった。（福田）

光坊寺古墳群計測値表（表8）

（ ）は推定値　単位m

古墳番号	外形 形式	外形 墳端長	外形 墳高	外形 外部構造	内部主体 主体番号	内部主体 形式	内部主体 床内法長	内部主体 床内法幅	主体内施設遺物等	備考
1	円墳	14.40×13.65	2.00	2列の葺石	Ⅰ	小石室土壙	1.44	0.40 0.38	木棺，壺形土器1，高坏形土器1，不明鉄器1	尾根の高い位置を削り取って墳丘の形を整えている。
					Ⅱ	小石室		0.45	破壊で不詳	
					Ⅲ	箱式石棺	1.20	0.34 0.20	遺物なし	
					Ⅳ	土壙	3.03	1.20 1.00	木棺，低脚坏1，鉇1	
					Ⅴ	土壙	2.62	0.71 0.58	木棺，鏡（珠文鏡）1，小玉（ガラス）4	
2	円墳	(9.00×8.00)	0.7～0.8	散石	Ⅰ	土壙	1.98	0.65 0.55	木棺，人形（ひとがた）残影　直刀1	墳端がはっきりしない
3	円墳	(5.00)	(0.80)	盛土						未発掘
4	円墳	(8.00)	(1.00)	盛土						未発掘
5	円墳	(9.00)	(1.20)	盛土						未発掘
6	円墳	(8.00)	(1.00)	盛土						末発掘
7	円墳	(12.00)	(1.00)	盛土						末発掘
8	円墳	(12.00)	(1.00)	盛土						末発掘
9	円墳（方形墳）	(10.00)								末発掘
10	円墳（方形墳）	(10.00)								末発掘
11	方形墳	8.00		方形の溝	Ⅰ	土壙	3.07	1.00 0.90	枕石1対　遺物なし	溝内より土器片出土

二野遺跡出土中期弥生式土器比較表（表5）

時代			備中山間部	備前地方
弥生時代	前期	津島		
		門田		a 雄町 1 b 雄町 2 c 船山 2
	中期	南方		a 高田 b 雄町 3
		菰池	二野	a 船山 5 b 菰池 c 雄町 4
		前山Ⅱ		a 前山東 b 雄町 5
		仁伍		雄町 6

参 考 文 献

(註1) 哲西町『哲西史』 1963年
(註2) 岡山県教育委員会「岩倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(15)』 1976年
(註3) 鎌木義昌，江坂進「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学第2号』瀬戸内考古学会 1958年
(註4) 岡山大学農学部教授 畔柳 鎮氏の鑑定結果によるものである
(註5) 岡山県教育委員会「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)』 1973年
(註6) 伊藤延男編「住居（すまい）」『日本の美術No.38』至文堂 1969年
(註7) 横田義章「加茂遺跡3石器」『伊丹市史第4巻』1968年
(註8) 鎌木義昌，木村幹夫「中国地文の縄文文化」『日本考古学講座3縄文文化』 1956年
(註9) 間壁忠彦，間壁葭子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報第7号』 1971年
(註10) 間壁忠彦，潮見浩「縄文時代一山陰・中国地方」『日本の考古学Ⅱ』河出書房 1965年
(註11) 岡山県教育委員会「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 1972年
(註12) 遠江考古学研究会「伊場」第4次調査月報5 1971年
(註13) 山陽町教育委員会「三蔵畑遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6)』 1976年
(註14) 山本慶一「鷲羽山採集の石器と土器」『倉敷考古館研究集報第6号』 1969年
(註15) 朝日新聞1977年1月17日号記事
(註16) 岡山県教育委員会「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(11)』 1975年
(註17) 藤田 等「備中哲西町の弥生式遺跡」古代吉備第4集 1961年
(註18) 美作地方では集落形態をとってくるのが，中期後半のものに多く，それ以前では調査例がみられない
(註19) 墳墓や古墳の調査例には，列石という語句も使用されているが，光坊寺1号墳では葺石に統一した
(註20) 兵庫県社会文化協会「播磨権現遺跡」兵庫県姫路市 1975年
(註21) 橿原考古学研究所編「纒向」奈良県桜井市教育委員会 1976年
(註22) 島根県教育委員会「松本古墳調査報告」 1963年
(註23) 島根県教育委員会「造山第三号墳調査報告」 1967年
(註24) 内田 才，東森市良，近藤 正「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化第36輯』 1965年
(註25) 岡山県教育委員会「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)』 1976年
(註26) 岡山県立博物館「岡山県の原始・古代」 1974年
(註27) 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 1951年
(註28) 大阪府教育委員会「弁天山古墳群の調査」『大阪府文化財調査報告第17輯』 1967年
(註29) 島根県立八雲立つ風土紀の丘資料館『山陰の古墳文化』1976年
(註30) 近藤正編「仲仙寺古墳群」島根県安来市教育委員会 1972年
(註31) 門脇俊彦編「波来浜遺跡発掘調査報告書」島根県江津市 1973年
(註32) 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌第57巻第1号』 1971年
(註33) 近藤 正，前島己基「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌第57巻第4号』 1972年
(註34) 調査担当者は列石で報告している
(註35) 和島誠一編「日本の考古学Ⅲ弥生時代」河出書房 1966年の口絵参照
(註36) 鎌木義昌「岡山の古墳」『岡山文庫』 1964年
(註37) 山陽町教育委員会「用木古墳群」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(1)』 1975年
(註38) 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5近畿』角川書店 1970年
(註39) 山陽町教育委員会「四述土壙墓遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(3)』 1973年

1．西江遺跡安信地区より二野遺跡・光坊寺古墳群を望む（北東より）

2．二野遺跡4区全景（北東より）

図版２

１．４Ａ区No.18溝状遺構（西より）

２．４Ａ区谷底（南東より）

1．4B・C区全景（南西より）

2．二野遺跡全景（北東より）

図版4

1．4B南区No.9建物（南より）

2．4B南区No.10建物（南東より）

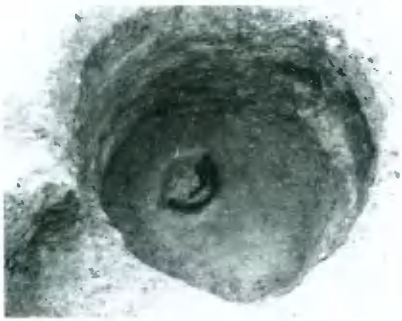
1．4B区No.8建物〈南より〉

2．4B区No.8．16建物〈北より〉

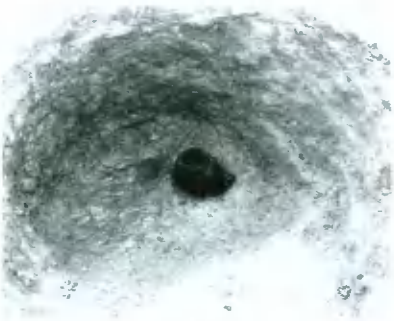
図版6

P－1

P－4



P－2



P－5

P－3

No.16建物P－2

4B区 No.8建物 堀り方 柱根

1．４Ｂ区No.5土壙〈東より〉

2．４Ｂ区No.6石詰土壙〈西より〉

3．４Ｃ区谷底〈南々西より〉

4．４Ｃ区谷底土層断面〈南々西より〉

5．５Ｂ区No.21横穴式石室調査前状況
〈南東より〉

6．５Ｂ区No.21横穴式石室調査後状況
〈南東より〉

図版8

1．奥壁前面（南西より）

2．奥壁後面（北東より）

3．右側壁（北西より）

4．奥壁後込め（北より）

5．左側壁（北東より）

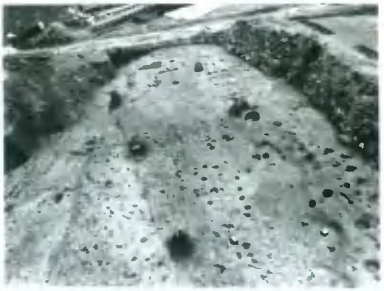
6．掘り方および根石抜き取り断面（北西より）

5B区No.21横穴式石室

１．５Ｂ区No.19柱穴列（西より

２．５Ｂ区No.11建物（東より

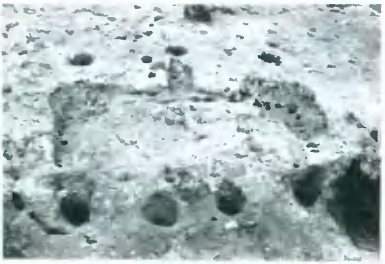
図版10



1．５Ｃ区No.1 鍛冶址周辺（北より）

2．５Ｃ区No.1 鍛冶址（南東より）

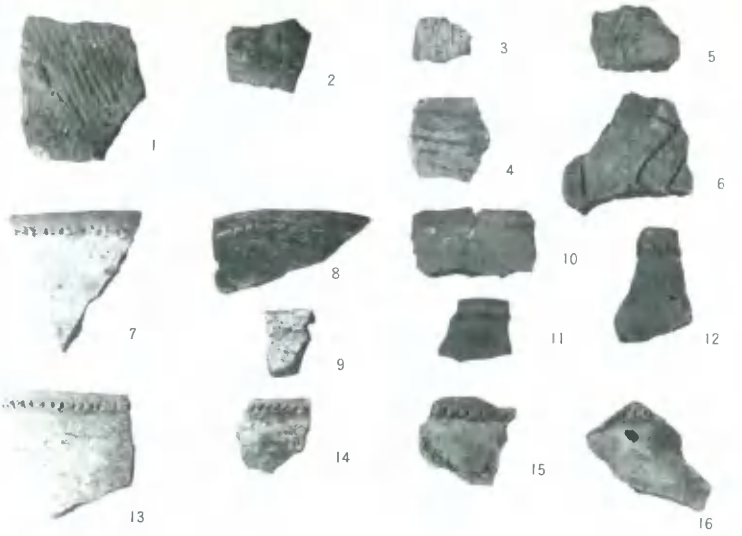
3．５Ｃ区No.1 鍛冶址（北より）



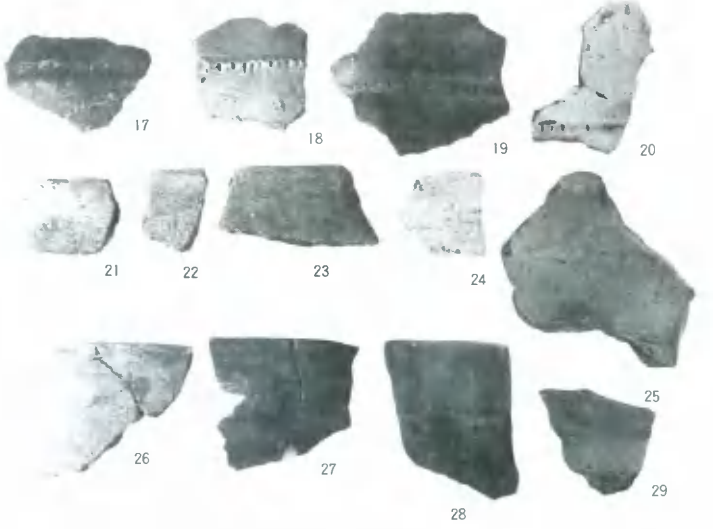
4．５Ｃ区No.1 鍛冶址（南より）

5．５Ｃ区No.1 鍛冶炉（東より）

6．５Ｃ区No.1 鍛冶炉（東より）



1．４Ｃ区谷１出土縄文式土器

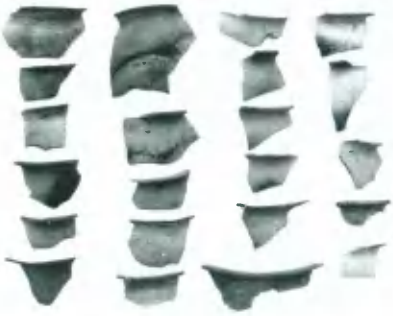


2．４Ｃ区谷１出土縄文式土器

図版12

1．壺形土器外面

2．壺形土器内面



3．甕形土器（1）

4．甕形土器（2）

5．甕形土器底部

6．紡錘

7．紡錘未製品

弥生式土器（1）

1．高坏形土器坏部外面

2．高坏形土器坏部内面

3．高坏形土器脚部

4．文様のある土器片

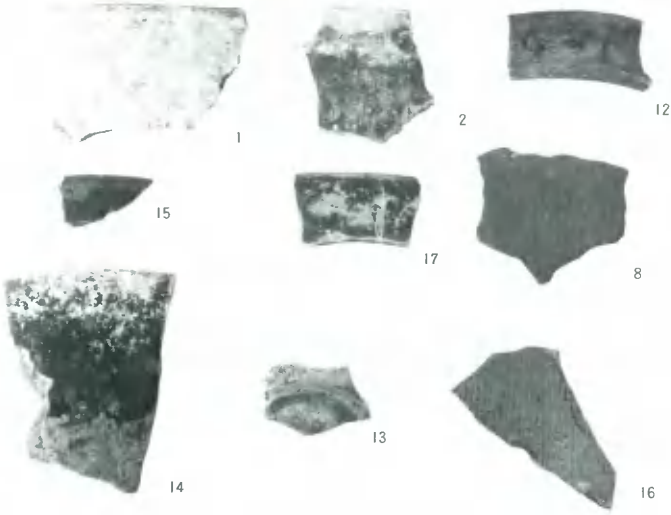
5．後期弥生式土器

弥生式土器（2）

図版14

1．5B区No.21横穴式石室内出土遺物

2．二野遺跡出土鉄滓



1．4・5区出土須恵器・土師器外面

1．4・5区出土須恵器・土師器内面

図版16

1．光坊古墳群遠景（北東より）

2．光坊寺古墳群遠景（南より）

1．1号墳調査前全景〈北西より〉

2．1号墳調査中全景〈西より〉

3．1号墳全景〈北西より〉

4．1号墳遺構配置全景〈西より〉

5．1号墳調査後全景〈北西より〉

6．1号墳葺石近景〈北西より〉

図版18

1号墳第Ⅰ主体部

1．1号墳第Ⅰ主体部遺物出土状況

2．1号墳第Ⅰ主体部調査後（南より）

図版20

1．1号墳第Ⅱ主体部および集石遺構（北より）

2．1号墳主体部配置全景（西より）

1．1号墳第Ⅲ主体部（北東より）

2．1号墳第Ⅲ主体部（南より）

1．1号墳第Ⅳ・Ⅴ主体部〈南より〉

2．1号墳第Ⅳ・Ⅴ主体部〈南より〉

3．1号墳第Ⅳ主体部遺物出土状況〈南より〉

4．1号墳主体部配置近景〈南より〉

1．木棺痕跡

2．木棺痕跡

3．木棺脚部積石

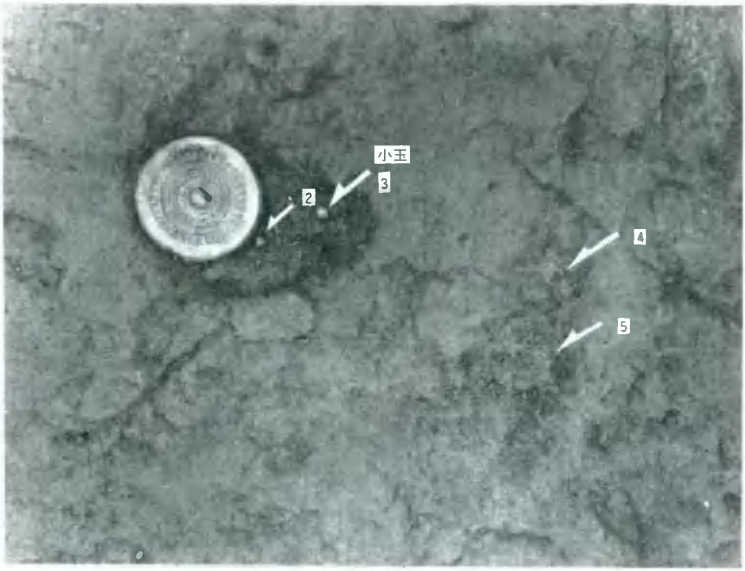
4．掘　り　方

5．土壙内工具痕跡

6．土壙内工具痕跡

1号墳第Ⅴ主体部

図版24



1．1号墳第Ⅴ主体部遺物出土状況（南より）

2．1号墳第Ⅴ主体部出土鏡

1．1号墳環状配石

2．古道　東より

図版26

1．光坊寺2号墳墳丘〈南東より〉

2．光坊寺2号墳掘り下げ〈南東より〉

3．2号墳盛土断面〈東より〉

4．2号墳主体部土層断面〈南西より〉

1．2号墳主体部上面土層（西より）

2．2号墳主体部検出上面（西より）

図版28

1．２号墳木棺内土層断面（西より）

2．２号墳木棺内土層断面（西より）

1．2号墳木棺痕跡・人形(ひとがた)残影〈西より〉

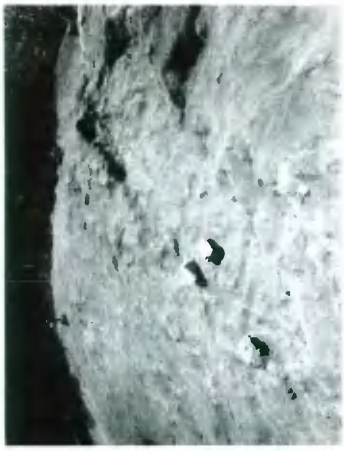
2．2号墳掘り方・粘土の関係〈西より〉

3．2号墳主体部検出〈南東より〉

4．2号墳棺外遺物出土状況〈北より〉

2．11号墳調査中全景〈西より〉

1．11号墳調査前全景〈西より〉



4．11号墳主体部〈北西より〉

3．11号墳墳丘〈北西より〉

1号墳第Ⅰ主体部

1号墳第Ⅰ主体部

1号墳第Ⅳ主体部

11号墳周溝内

光坊寺1．11号墳出土遺物

1号墳第Ⅴ主体部出土遺物

第Ⅰ主体部

第Ⅳ主体部

2号墳棺外遺物 10

光坊寺1・2号墳出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　15

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査　9

昭和52年3月 印 刷
昭和52年3月 発 行

発行　岡山県教育委員会
印刷　岡山県出納局用度課

文　化　課

土壙一覧＝墳丘上埋葬＝（表１）

(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方　位	礫	遺物	小口溝	有段	備　考
2－2	2.85×0.66	2.75×0.48	22	N－E106°					
3－1	3.37×1.25	2.0(+a)×0.54	18	N－E6°	○				3－2と重複
2	2.70×0.365		28	N－E52.5°	○	○			3－1，10，11と重複
3	2.68×0.83	1.87×0.37	40	N－E43°	○				
4	1.90×1.12	1.14×0.44	19	N－E21.5	○				
10									3－2と重複
11									3－2と重複
4－2	2.38×0.84	1.77×0.38	26	N－E72°					
3	2.08×0.83	1.60×0.31	4	N－W15.5°	○				
4	2.06×0.77	1.47×0.43	20	N－E81.5°					
5	2.15×0.87	1.79×0.43	18	N－E86°					
7	？×0.87	？×0.52	17	N－W5.5°	○				
5－1	？×1.18	？×0.58	30	N－E10°					5－2，4と重複
2	？×0.71		12	N－E47°					5－1，3，4と重複
6－1	4.42×1.82	3.44×0.59	34	N－E85°	○				
2	2.80×0.95	1.70×0.42	13	N－E13°					
S－12	3.00×1.35	2.49×0.515	53	N－W22°	○				
8－1	2.81×1.12	2.04×0.50	64	N－W67.5°				○	
2	2.51×0.85		44	N－W72°					8－5，6と重複
3	1.47×0.65	1.01×0.40	38	N－W71°					8－4と重複
4	3.01×1.22	？×0.44	15	N－W65°					8－5と重複
9－1	3.78×0.66		53	N－E38°	○				8－3と重複
2	2.22×0.76		62	N－E61.5°	○				
10－2	1.45×0.69	1.06×0.34	52	N－W70°		○			10－9と重複
3	2.11×0.99	1.50×0.41	48	N－W55°	○				10－9と重複
11－1	3.32×1.09	2.895×0.60	32	N－W93°		○			
3	2.455×1.14	1.70×0.515	42	N－E21°	○	○			

土壙表＝墳丘下埋葬＝（表２）

(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方　位	礫	小口溝	遺物	有段	備　考
2－3	2.18×0.68		47	N－W25.5°					
4	1.00×0.61		30	N－W43°					
5	2.23×？		40	〃				○	
6	1.03×0.43		20	N－W79.5°		○			
7	2.10×0.70	1.58×0.38	40	N－W77.5°	○				
8	1.19×0.48		45	N－W73.5°					
4－8	2.29×0.98	1.71×0.56	70	N－W120°		○			
5－6	2.325×0.52		25	N－E21°					
7	1.02×？	0.81×0.26	47	N－E12°					5－8と重複
8	1.78×0.97	1.29×0.58	43	〃					5－7と重複
9	2.26×0.78	1.33×0.51	29	N－E18.5°					
10	1.88×0.76	1.36×0.40	38	N－E35°					
11	1.99×0.68	1.59×0.45	30	N－E39.5°					
12	1.40×0.51	1.10×0.35	25	N－E32.5°	○	○			
13	2.04×0.71		21	N－E0.5°					
14	2.00×0.71	1.59×0.39	63	N－E2.5	○				
6－9	1.91×0.87	1.31×0.37	40	N－W52.5°					
10	2.10×0.815	1.78×0.40	32	N－W14°		○			
11-1	2.50×0.49		51	N－E19°					
11-2	？×0.38		53	〃					
12	2.33×0.82	1.68×0.40	80	N－E31.5°					
13	2.16×0.90	1.73×0.38	38	N－E19°					
14	1.80×0.70	1.26×0.34	33	N－W40°					
15	？×0.69	？×0.30	23	N－W80°					
16	？×0.73	？×0.43	74	N－E 6°					
17	1.39×？		50	N－E21°					
18	1.59×1.65		59	N－W72°					
19	2.45×？	1.74×0.42	61	N－W82.5°		○			
20	？×？		42	N－E 7°					
7－5	2.82×？	1.69×0.33	56	N－E28°	○			○	
6	2.65×？	1.61×0.43	92	N－E23.5°			○		
7	2.24×0.60		36	N－E33.5°					

横見墳墓群

(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方位	礫	小口溝	遺物	有段	備考
9—11	2.32×0.88	1.67×0.41	35	N—W66°					
10—7	?×0.56		41	N—E12.5°					
8	2.32×1.02	1.65×0.44	41	N—E38.5°					
9				N—E54°					10—2，3と重複
10	2.25×0.86	1.75×0.39	27	N—E14°					
11	1.94×0.84		27	N—E0.5°					
12	1.42×0.60		32	N—E 9°					
13	2.20×0.99	1.37×0.45	64	N—E28°					
12—2	2.18×0.57		32	N—W55.5°					
3	?×0.90		55	N—E42°					
4	2.23×0.78	1.64×0.37	57	N—E50°	○				
W—1	1.90×0.67	1.36×0.355	43	N—W 7°					
2	2.40×?	1.32×0.34	23	〃	○				
3	2.09×0.57	1.45×0.32	34	N—W14°	○				
4	2.70×0.82	2.20×0.35	47	N—W19°	○				
5	2.68×0.745	1.47×0.21	41	N—W15°	○				
6	2.475×0.745	1.90×0.42	45	〃	○				
7	2.03×0.64	1.685×0.395	29	N—W17°	○		○		
8	1.70×0.685	1.265×0.38	37	N—W 7°	○				
9	2.19×0.70	1.47×0.42	26	N—W13°	○				
10	1.08×0.66	0.70×0.29	12	N—W17°	○				
11	1.04×0.47		26	N—W11°	○				W—33と重複
12	3.13×0.505	2.33×0.31	34	〃	○				
13	2.235×0.68	1.72×0.41	39	N—W16°	○				
14	3.04×0.64	2.54×0.40	45	N—W19.5°	○				
16	0.63×0.60		34						
17	1.90×0.62	1.59×0.32	40	N—W21.5°	○		○		
18	2.37×0.54	1.77×0.36		N—W17°	○				W—22と重複
19	2.265×0.78	1.585×0.42	48	N—W20°	○				
20	2.375×0.72	1.95×0.425	14	N—W17.5°					
21	1.32×?	0.80×?	34	N—W20.5°			○		
22	2.15×0.71	1.60×0.405	33	N—W22°	○				W—18と重複
23	2.12×?	1.75×?	38	N—W23°	○				W—24と重複

横見墳墓群

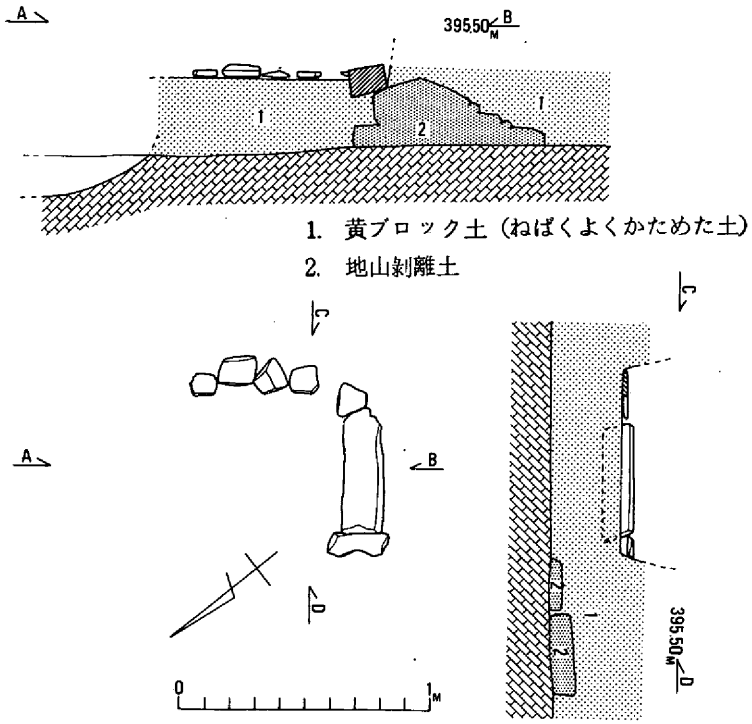
(m)

主体番号	土壙規模	木棺規模	深さ	方位	礫	小口溝	遺物	有段	備考
W—24	2.08×0.66		20	N—W24°	○				W—23と重複
25	2.52×0.77	2.05×0.36	26	N—E26°	○				
26	2.00×0.75	1.485×0.38	36	N—E19°	○				
27	1.55×?	0.98×0.40	24	N—E16°	○				
28	2.17×0.75	1.87×0.45	23	N—E18°	○				
29	2.115×0.78	1.62×0.38	30	N—E9.5°	○				
30	1.995×0.705	1.27×0.37	42	N—E21.5°	○				
31	2.02×0.585	1.58×0.305	34	N—E23°	○				
32	1.99×0.77	1.48×0.39	35	N—E25.5°	○				
33	2.01×0.72	1.58×0.35	32	N—E16°	○				W—10と重複
S—1	2.53×0.93	1.88×0.45	58	N—W10°	○				
2	1.58×0.765	1.08×0.38	45	N—W32.5°	○				
3	0.60×0.55		34						
4	甕棺								
5	2.27×0.91		71	N—W24°	○	○	○		
6	1.29×0.63		50	N—W41.5°					
7	1.86×0.81	1.53×0.42	30	N—W38°		○	○		
8	2.60×1.08	2.13×0.54	54	N—W 5°	○				
9	2.32×0.72	1.98×0.44	45	N—W6.5°					
10	2.06×1.31	1.51×0.53	90	N—W7.5	○		○		重複か
11	2.23×0.78	1.41×0.43	29	N—W6.5°	○				

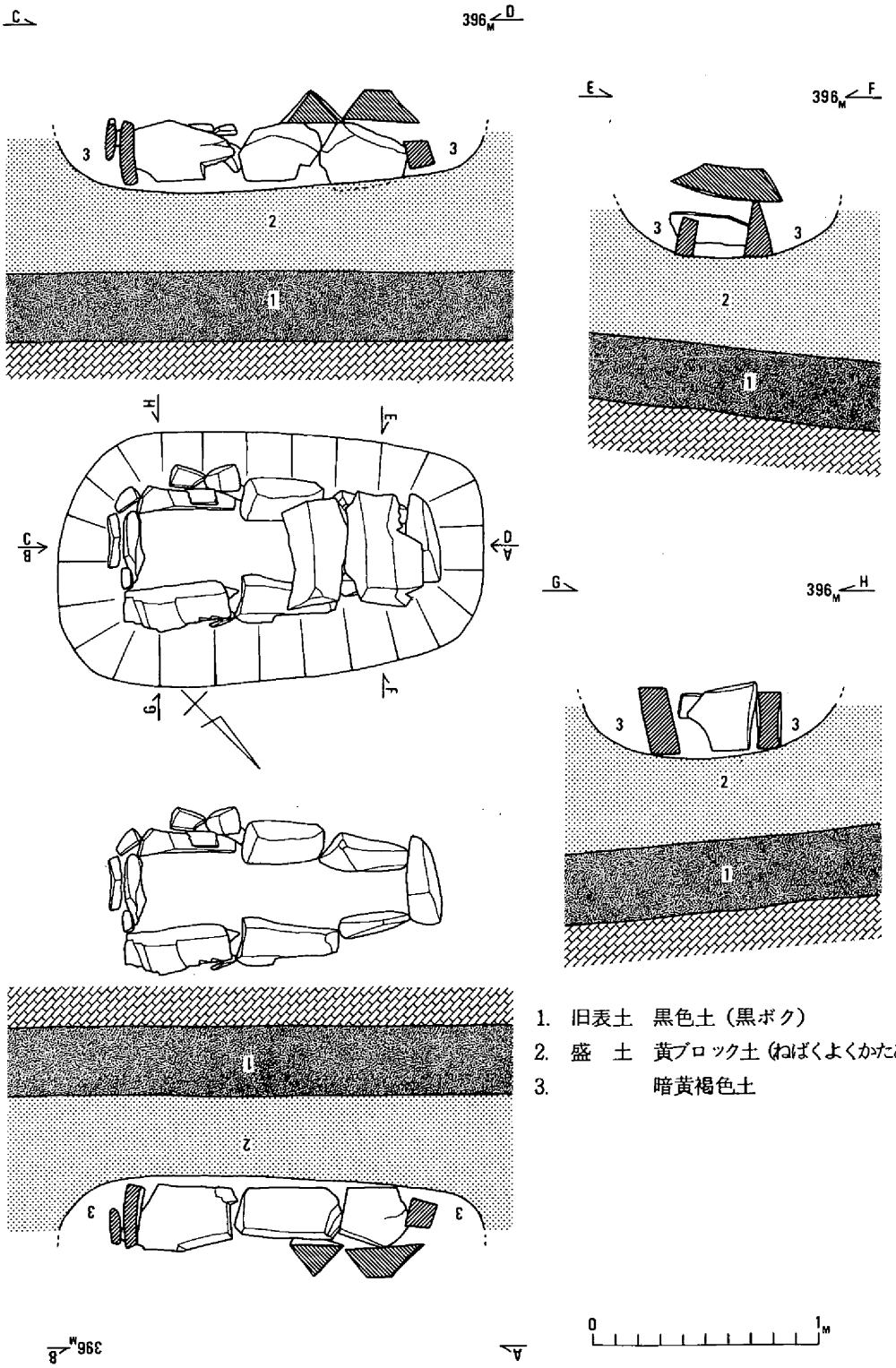
二野遺跡・光坊寺古墳群発掘調査要員一覧表（表２）

○は本遺跡（報）報告書作成

	高　畑	福　田	中　野	二　宮	田　中	行　田
50年７月	○	○	上東遺跡	西江遺跡	○	
８月	○	○	〃	〃	○	○
９月	○	○	〃	〃	○	
10月	土井遺跡	土井遺跡	〃	〃		
11月	〃	〃	〃	〃		
12月	野田畝遺跡	野田畝遺跡	〃	〃		
１月	〃	〃	〃	(報)宮の前遺跡		
２月	(報)谷尻遺跡	〃	〃	野田畝遺跡 塚の峯遺跡		
３月	野田畝遺跡 塚の峯遺跡	〃 塚の峯遺跡	〃	(報)宮の前遺跡		
４月	津山市二宮遺跡 (179号バイパス)	〃	塚の峯遺跡	津山市二宮遺跡 (179号バイパス)		
５月	〃	〃	〃	〃		
６月	〃	〃	〃	〃		
７月	〃	〃	〃	〃		
８月	〃	忠田山遺跡	忠田山遺跡	〃		
９月	〃	〃	〃	〃		
10月	〃	横田遺跡	横田遺跡	〃		
11月	〃	(報)野田畝遺跡	(報) 川入遺跡	〃		
12月	〃	〃	〃	〃		
１月	〃	報 ○	〃	〃		
２月	〃	○	〃	〃		
３月	〃	○	〃	〃		



第46図　1号墳第Ⅱ主体部（S ＝$\frac{1}{30}$）



1. 旧表土　黒色土（黒ボク）
2. 盛　土　黄ブロック土（ねばくよくかためた土）
3.　　暗黄褐色土

第47図　1号墳第Ⅲ主体部（S $=\frac{1}{30}$）